THE CENTRAL REVIEW

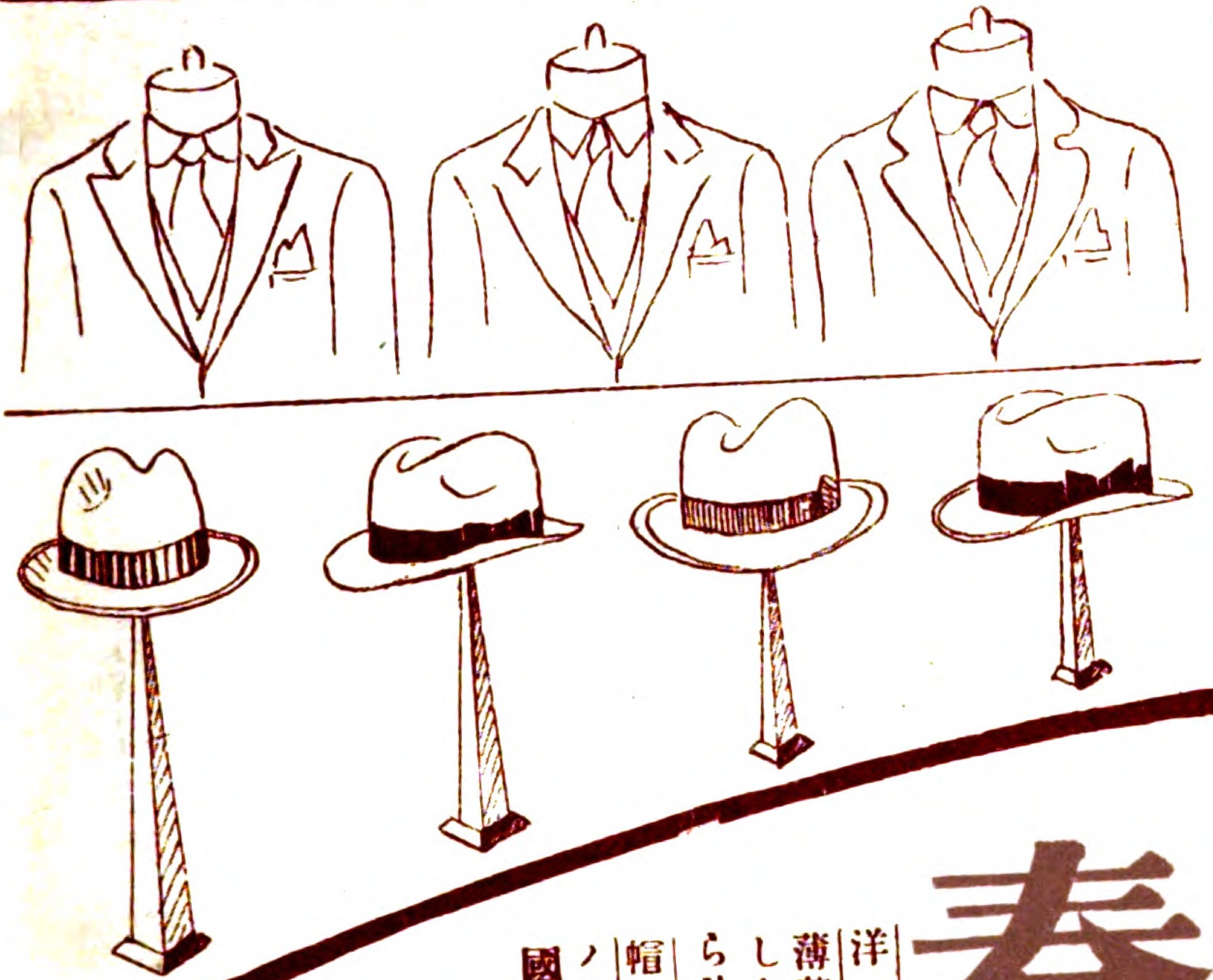
中央公論

『現代世相の斷面』號

三月特輯

第四十四年 第三號 第四百九十

昭和四年三月一日發行（毎月一回一日發行）
昭和四年二月十八日印刷納本




Agfa
寫眞材料界の權威
アクッフアをお薦めします……
ロール・フイルム
フイルム・パック

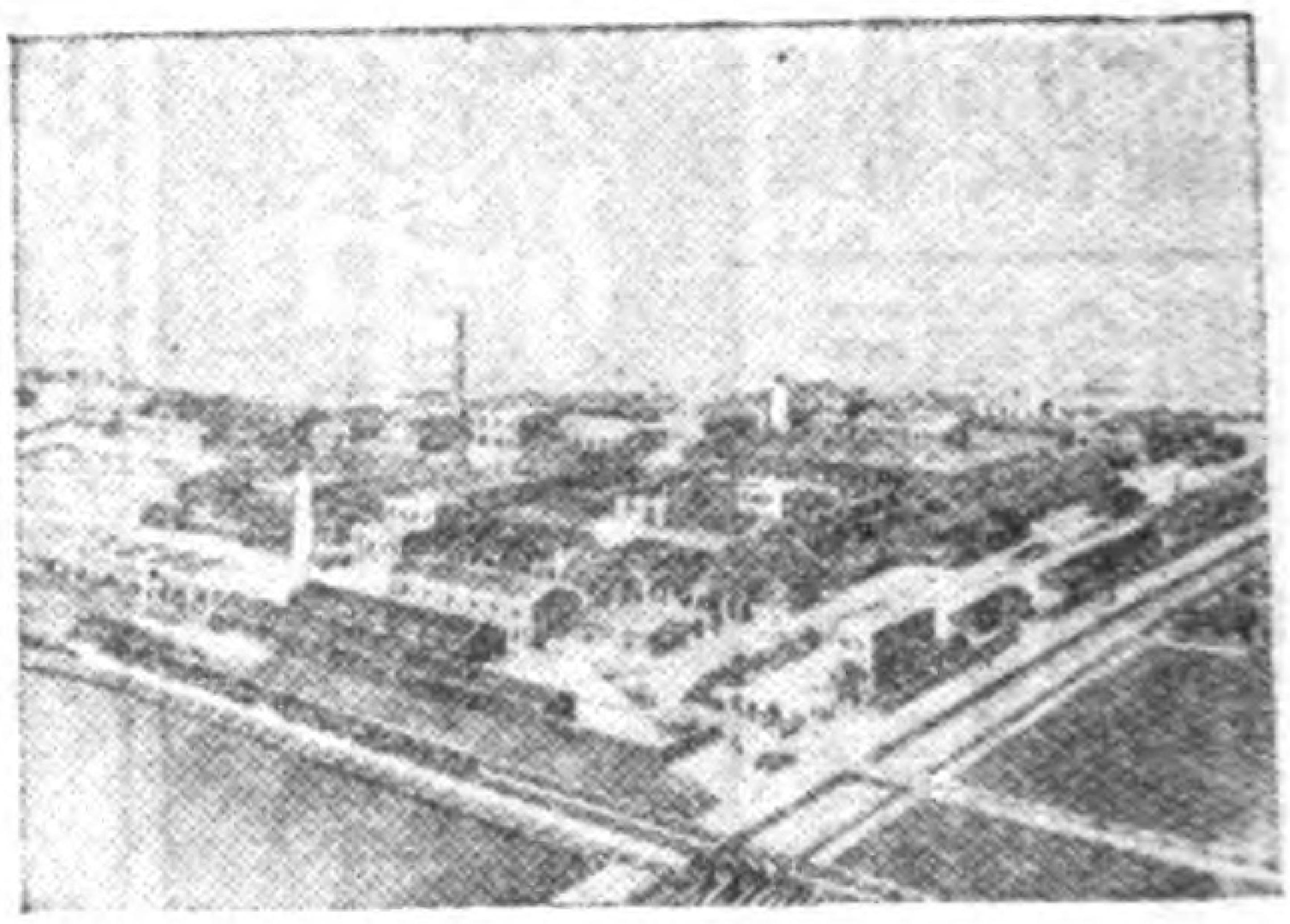


春宵

小林古徑筆

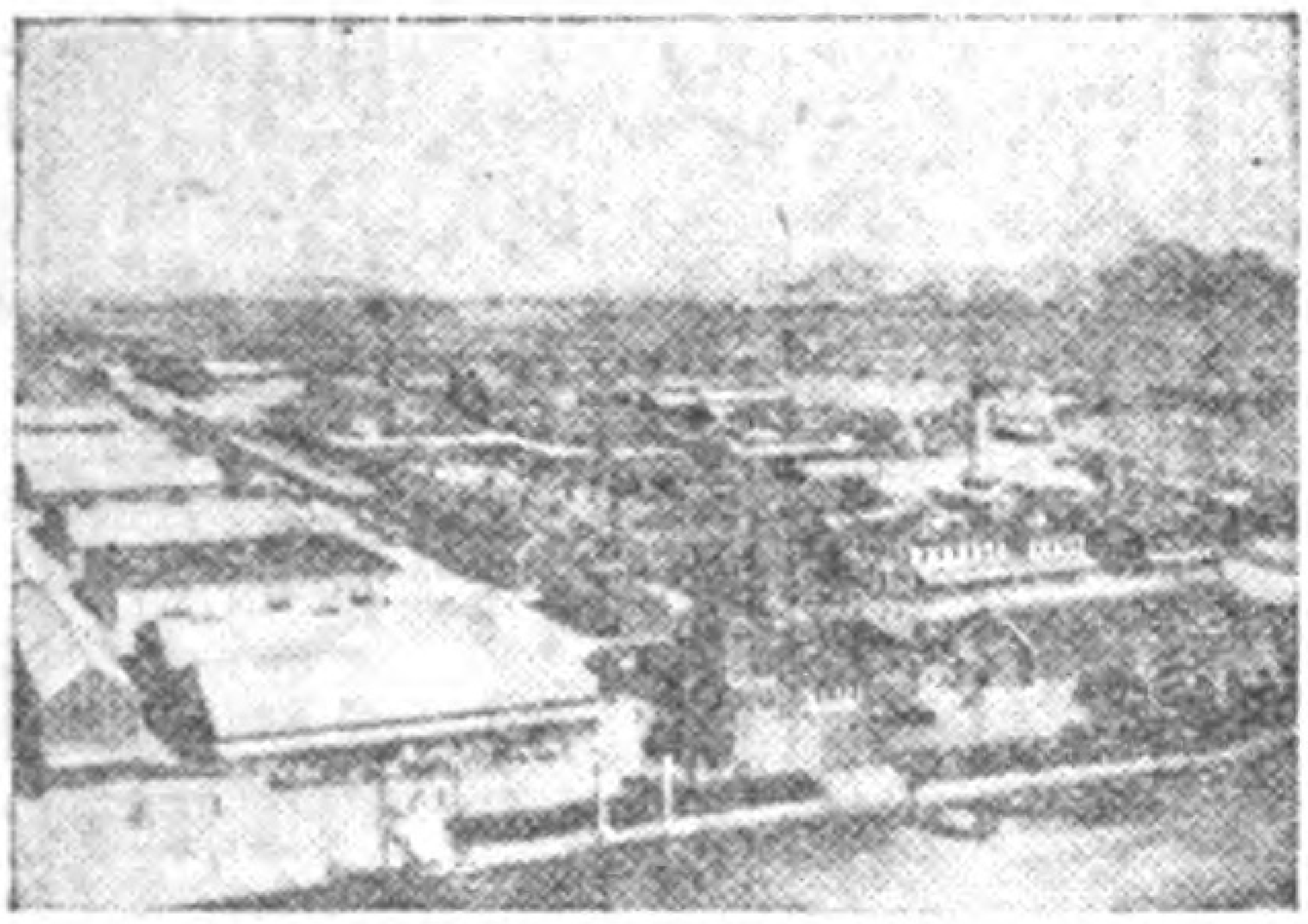
三菱製紙株式會社

東京市麹町區八重洲町一ノ一



中川工場

東京府南葛飾郡新宿町



高砂工場

兵庫縣加古郡高砂町

關東一手販賣店

柏原洋紙店

東京市京橋區南傳馬町一丁目

關西一手販賣店

三菱商會

大阪市東區南久太郎町一丁目

三菱商會京都出張所

京都市不明門通七條上ル

三菱商會神戸出張所

神戸市仲町三五・十五銀行ビルヂング五階

大同館發行圖書目錄

大阪朝日記者 山名正太郎著
● 政談演說仕方と聽き方
開いた頁が直ぐ役立つ眞面目な手引
（五版） 金壹圓五拾錢 送料金六錢

日高瓊々彥著
● 國家に及ぼす宗教の害毒
全宗教を否定せる一讀すべき論文也
（三版） 金壹圓八拾錢 送料十八錢

佐藤種治氏著
● 受驗參考 模範西洋歷史精說
西洋史研究者必讀の理想的名著なり
（新刊） 金參圓八拾錢 送料十八錢

兒玉尊臣氏著
● 趣味生活 和歌の作法
趣味のうちに作歌の眞髓を會得せしめ樣とす
（新刊） 正價金貳圓 送料十二錢

吉澤義則監修 奧里將建新著
● 最新國文學史辭典
斬新な年表と系譜とは國史學徒渴望の好指針
（好評） 金參圓參拾錢 送料十八錢

上田文學博士 山田武司氏著
● 參考 近世名家國文新釋
夙に要求ありて得られざりし名著出現す
（新刊） 金五圓八拾錢 送料廿七錢

文學士 中島悅次氏著
● 參考 宇治拾遺物語新釋
初めて出來た評釋書眞に有益なもの好評
（新刊） 金四圓五拾錢 送料廿七錢

大阪朝日記者 山名正太郎著
● 思潮文獻 日本自殺情死紀
珍らしく興味ある本と大好評を博し增刷出來
（三版） 正價金貳圓 送料十八錢

小林榮子校訂
● 近松時氏淨瑠璃集成
近松の傑作二十篇を集む趣味の讀物
（再版） 金五圓八拾錢 送料十八錢

吉村重德校註

最新刊

義太夫名作 淨瑠璃註釋

四六判最上製本 全壹册三百餘頁
正價金二圓 送料十八錢

第壹卷
● 假名手本忠臣藏
● 義經千本櫻
● 菅原傳授手習鑑
三篇合册

本書は忠臣藏千本櫻菅原の三名作淨瑠璃を集めて懇切丁寧に詳解を施したものである。本書を繙けば現今行はるゝ之れらの芝居淨瑠璃の全部を知り得る外難解の語句も忽ち氷解し其味も一層深くなること〻思ふ。古來義太夫院本は只讀む丈でさへも淚を催すと云れしもの。現代人にも此名文章の味讀を御薦したい。文學研究者義太夫愛好者好劇家諸君の座右に缺くべからざる眞に趣味ある好讀物なり。

東京市神田區西小川町二ノ三 大同館發行 振替貯金口座東京八七貳番

暴露戰術是非

――(卷頭言)――

現政府が前代未聞の不評判內閣なるにも拘らず、民政黨あたりから代議士の政友會へ鞍替するもの今以て盡きない。民政黨の勢の衰退するは如何でもいゝとして、今日此際政友會の膨脹するは國民の立場から決して看逃し得べき現象ではない。孰れにしても斯の如きは『政權を握ることに依て黨勢を擴張する』と云ふ極めて不健全なる政情を暴露するもの、從て在野黨が政府の倒壞に手段を擇ばざらんとするも強ち無理とはいへないと思ふ。議政壇上に於ける既成政黨間の政權爭奪の爲めにする醜鬪を見て徒らに憤慨するが如きは、稍ゝ末節に拘泥するの嫌なきを得ぬ。

這の政權爭奪戰の一手段に所謂暴露戰術なるものがある、滿洲に於ける某重大事件の眞相を摘發して田中內閣に致命傷を與へんとするのがそれだ。既成政黨間の掛引としてはまた其立場から種々の議論もあらうが、局外の一般國民の立場として、這の暴露戰術の論を如何に取扱ふべきかは是亦愼重に攻究すべき問題だと思ふ。

暴露戰術を國家の不利とする議論は、夫の外交を政爭の外に置けと云ふ議論と同じく、次の事情を前提としてのみ成立ち得る。(一)外國に對する交涉に於てはどんな無理をしても自國の言分を押し通すこと、(二)國權の海外發展の爲には全然手段を擇ばないこと。即ち極端なる侵略外交を恣にせる場合而して之を外交の正道と心得た時代に在ては、所謂暴露政策の國害たるは云ふ迄もない。その反對に、我國の今日支那に對する場合の如く、共存共榮を經とし公明正大を緯とすと稱する關係に於ては、一體暴露されて困ると云ふ事のあるべき道理がないではないか。若し何等か其處に重大な過失があつたとすれば、そんなものは出來るだけ早く暴露してしまつた方が却て得策であることが多い筈である。

公明正大を看板にする外交に於ても時に重大な過失なしと限らぬ。對外の關係は事頗る微妙に屬するを以て常に必ず之を暴露するを可とすとも限らない。若し姑く之を秘すべくんば、豫め當局者に於て十分之が善後の處置を講じなくてはならぬ。例へば今度の事件に於ても、若し田中首相が(一)速に事件の調査を完了し、而して(二)その責任者を處罰するに極めて嚴峻であり、且つ(三)將來再び類似の出來事なからしむる爲十二分の措置を取り、後始めて誠意を披いて各方面に諒解を求めたならば、思ふに何人も好んで此上暴露戰術に突進するものはなかつたらう。事こゝに出でず、圖太い刑事被告人の如く、知りません存じませんで押し通さうとするのは、却て局外の人をして本件に對する政府當局の評價の基準其ものを疑はしむるにとゞまるのではないか。

我々國民は平素對滿政策に就ては、日本帝國を代表する者の間に(一)今日猶ほ舊式の侵略的國權擴張を夢想するものなきかを恐れ、(二)表面敢然として之を斷言するの勇氣と自信となく而も裏面に在て此種の陰謀を企つるものなきかを恐れて居るものである。この疑念を一掃する爲に實は暴露戰術も今日の場合已むを得ないのかとも考へた。若し夫れ民間傳へらるるが如き某重大事件を徹底的に非認するの良心なく、濫りに事端を釀すものの淺薄なる愛國心を曲庇せんとするの謬妄より、輕々に暴露戰術の國害を說く者あるに接しては、單に之等徒輩の妄を啓く爲めにも、或はこの戰術を必要とすこのではないかとさへも考へるのである。

責任者の處罰乃至將來再び斯種の暴擧を繰り返さぬ明白なる保障。これなしには未だ暴露戰術を有效に封ずるの口實はない。田中首相の過去の經歷と政友會の最近の言動とは、特に吾人をして這般の必要を痛感せしめる。

中央公論



第四十四年第三號
三月號
四百九十四號

經濟と權力

河上肇

近頃九州帝國大學教授高田保馬氏は『經濟學』と題する著書を公けにされた。

それは第一章『根本概念』第二章『貨幣』第三章『企業』第四章『價格の理論』第五章『分配の理論』の五章から成り立つてゐるが、そのうち最後の章の最後の節『利子および企業利潤』のみが、これらのものとの關係において資本を取扱つてゐるだけで、その外には、資本——現代社會において支配的の勢力を有するこの資本——のために献げられた章も節

も、全巻を通じて一つもないといふことは、この書の奇怪なる一特徴である。しかし私は今そのことを問題としようとするのではない。私が茲に問題としようとするのは、著者自身がこの書の一特徴だとされてゐるところの、謂はゆる勢力説なるものである。それについて、著者は序文のうちに、次の如く言はれてゐる。

『此書は……もとより小さな書物ではあるが、私は眞劍の努力を注いだ。この後に、經濟學原論に關する著書を公けにするにしても、根本の考方はこれから餘り離れないであらう。

序述の順序などはなるべく平凡のものにした。たゞ、全體を貫く一の特色を出したいと力めてゐる。それは價格の勢力説である。從來、經濟學上の勢力説は、私から見れば、すべて微温的である、私は過去の何人よりも最も徹底的に之を展開したと信じてゐる。……或ひは何人も捉へざる眞理にぶつかつてゐるかも知れぬ、然らば何物かを作り上げえたる喜びにほゝえまう。菲才、自ら判斷するに苦しむ、切に識者の高教をまつ。』

著者は、この序文を結ぶに、形式上謙遜な言葉をもつてしてゐるに拘らず、他方においては、そこで十分な自負を示してゐられる。價格の勢力説といふのが本書の『全體を貫く一の特色』であつて、その點をば著者は『過去の何人よりも最も徹底的に展開した』のであり、その點において『或ひは何人も捉へざる眞理にぶつかつてゐるかも知れぬ』といふのである。

しからば著者の謂はゆる價格の勢力説とは如何なるものであるか？　著者は『價格を決定する勢力』なるものを、『經濟的勢力』と『經濟外的勢力』との二つとなし、後者をもつて『決定作用』を有するものとしてゐる。（第四章第六節）。こゝに『非經濟的勢力または經濟外的勢力といふは、――著者自身の説明によれば――普通廣義において權力と稱せられるものである』が（一四五頁）、かゝる權力をもつて經濟的勢力をも決定するものであるとなす點――『單純なる經濟的勢力を決定するものは、一に經濟外的勢力であると云ひうる』となす點（一四九頁）――これが著者の謂はゆる全體を貫く一の

特色なのである。

だが著者は、たゞかゝることを斷定せるのみで、その論證のためには殆ど一言をも費してゐない。吾々はたゞ次の如きことを聞きうるに止まる。

『……何ものが終局的生産財(例、勞働、土地の用役)の提供に伴ふ單純の經濟的勢力を決定するのであるか。勿論、此の勢力によりて主張しうる極限が生産物の價格をこえざることは云ふまでもない。併しながら、此限界内のどこまでをかの勢力が主張しうるか。之を決定するものはたゞ一より考へがたい。それは即ち非經濟的勢力である。即ちかの單純の經濟的勢力が(「は」の誤植か?)、恐らくゼロから、生産物價格の全部までの間の、何れかの大さを主張するものでありうる。然るにその中の一定額だけを要求するのは、之を決定するところの經濟外的勢力あるが故である。

（傍點は原文のまゝ）

經濟外的勢力の價格の上に及ぼす作用は二の方向に存する。一は價格に關する强制の作用である。それは一定の價格を强制的に一定し(例へば法定最低勞銀)、又は賣買そのことを强制する(土地の收用の如き。)二は單純の經濟的勢力を決定する。前者については今論及をさける。後者について考ふるに、終局的生産財の提供に伴ふ勢力の大さを決定するものは此の外に何等考へ得べくもない。事實において此の種の生産財の提供者、例へば勞働者は、その供給する勞働の對價として種々なる程度の勞銀を要求しうるわけである。そのあまたの可能的大さのうち、現にどれだけを要求するかは、單純なる財の所有または供給そのことから決定せられる。もしそれによりて決定せらるゝならば、かかる數多の可能はない筈である。而して、現に勞働者自體が社會的關係において優勢の地位を占むるときは其の要求は大となり、反對の事情においてそれが小となるのを見る。これによりて考ふれば、この經濟外的勢力こそは、かの單純なる經濟的勢力の大さを決定するものであると思ふ。……生産物の供給に伴ふ單純の經濟的勢力は、一に生産財

の價格によつて決定せられ、而してこれはまた、經濟外的勢力によりて決定せられる。かくて終局的生產財たると生產物たるとを問はず、その供給に伴ふ單純の經濟的勢力を決定するものは、一に經濟外的勢力であると云ひうるわけである。』（一四七——一四九頁。傍點は引用者の加へたもの。）

以上私は著者の說明をそのまゝに引用したのであるが、讀者の見られる通り、そこにはたゞ斷定があるのみで、論證と看做しうべきものは殆どない。

著者はいふ、『例へば勞働者は、その供給する勞働の對價として種々なる程度の勞銀を要求しうるわけである』と。——これが第一の獨斷である。次にいふ、『そのあまたの可能的大さのうち、現にどれだけを要求するかは、』單純なる經濟的勢力によつては決定されえないと。——これが第二の獨斷である。そしていふ、『これにより考ふれば、經濟外的勢力こそは、かの單純なる經濟的勢力の大さを決定するものである』と。——これは第一第二の獨斷を前提としておいて、それから形式論理的に引き出された結論にすぎない。

しかもこの簡單なる三段論法に盛られた內容には、一の矛盾を含む。何故といふに、例へば勞銀は、一方において著者のいふところによれば、單純なる經濟的勢力で決定されるものではない。しかるに、他方において同じ著者のいふところによれば、經濟外的勢力は單純なる經濟的勢力を決定し、そして斯く決定されたる經濟的勢力が勞銀を決定する。すなはち勞銀は、經濟外的勢力によつて決定されるところの單純なる經濟的勢力によつて決定されるものである。

なほ假にかゝる說明をすべて是認するも、吾々の問題は少しも解決されてゐない。何故なれば、もし經濟的勢力が經濟外的勢力によつて決定されるのであるならば、吾々の疑問は當然に、しからばその經濟外的勢力は何によつて決定されるかといふことに向ふ。しかるにそれについては、著者は固く說明を拒んでゐる。このことは、つまり著者が、經濟的原因によつて彼れの說明しえざる課題を、他の原因から說明される外はないとして、放棄してしまつたことを意味する。それ

は問題を説明したのではなく、問題を説明しえざることを説明したにすぎない。

聰明なる著者は何故にかゝる他愛なきことを今の時代に唱道し始めたか？　著者の意識・意圖は如何やうにあらうとも、客觀的には、彼れは經濟學の領域において、一個の有力なる反動的役割を演じ出さんとしつゝあるのである。

著者の主張の反動的意義はどこに存するか？

著者自身の説明によれば、經濟外的勢力とは『普通廣義において權力と稱せられるものである』が、かゝる權力をもつて經濟的勢力を決定するものであるとなす點、こゝに著者の謂はゆる全體を貫く一の特色があるのであり、且つ正にこゝに著者の主張の反動的意義が横たはるのである。この主張は、理論的には、經濟的勢力をもつて結局のところ社會的・政治的・精神的諸勢力一般を決定するものとなすマルクス主義の對蹠物であり、實踐的には、經濟的勢力の發展に伴うて必然化される社會の變革をば、權力——暴力——をもつて阻止し抑壓することにより、歴史の不可避的なる進展の要求に逆行せんとしつゝある、かの反動的武力政治の學問的辯護に役立つものである。

生產諸力（人間が有用物を造り出す力）は絶えず發展する。だから、嘗ては生產諸力と統一を保ち、その發展に役立つた生產諸關係（その總和は社會の經濟的構造をなす）も、一定の階段に達するときは、必然的に、生產諸力の發展形態からその桎梏に轉化する。それは恰も小供の成長につれて着物が小さくなるが如きものである。その着物は嘗ては確に小供の發育のために有用なものであつたが、今は小供がすでに大きくなり過ぎたために、從前の着物を無理やりに着せて置かうとすることは、その發育を阻止することである。かゝる階段に到達したときに、舊き着物を脱ぎ棄てゝ新たなる着物を纏はんとする要求が起る。かくて社會××の時代が到來する。吾々の住む今の時代は、正にかゝる時代に屬するのである。この場合に、時代に逆行するものは、人間のからだがその着物の大きさを決定するのではなく、着物の大きさが人間のから

だの大きさを決定するのだとする。そして無理やりに舊き着物のなかへ成長しゆく人間を押し込めて、その發育を抑壓しようとするのである。被壓迫階級の解放運動とは、生産階級が舊き生産諸關係の桎梏を打破し、その束縛から自分を解放せんとする運動であり、そしてこの運動を政治的××によつて扼殺せんとすることが、例へば××反動内閣によつて代表されてゐる彈壓政治の目標である。吾々はかゝる反動的政治權力が結局において經濟的勢力——『例外なく且つ殘酷に自己の血路を開いて進みつゝある經濟的勢力』——のために轉覆されることを信ずるものであるが、高田氏の權力説は、その本質において、正に吾々の斯かる見解に對立するところのものである。それは、一見したところでは、價格論といふ『純粹』理論の領域における一學説たるに過ぎぬが如くであつて、實は——著者の意識すると否とに拘らず——深くその根柢を支配階級の階級的利益のうちにおろしてゐる。レーニンは言つてゐる、『特殊的な事實研究の領域においては極めて價値ある業績を提供しうる經濟學の教授たちの誰れ一人をも、彼れが一たび經濟學の一般理論に論及するや、たゞの一語だも信じてはならぬ。けだし經濟學もまた、近代社會の内部にあつては、認識論に劣らず黨派的な一科學であるから。大體において、經濟學の教授連は資本家階級の學識ある番頭以外の何物でもない。』(レーニン選集第一册『辯證法的唯物論について』七七頁)。然り、問題が一たび一般理論に係はるならば、ブルヂョア經濟學者のいふところは、たゞの一語だも信じてはならぬ。

そして諸君は、今、高田氏においてその一例を見出すことができよう。

高田氏はその序文において自分の見解を何等か新たなるものの如くに吹聽してゐられる。だが、かゝる見解を唱道することによつて、『或ひは何人も捉へざる眞理にぶつかつてゐるかも知れぬ』といつたやうな幸運を僥倖しうる餘地が、果して著者に殘されてゐるであらうか？　私は更にそれについて一言しよう。

マルクス主義の文獻に通じてゐられる諸君は、この點に關し、直ちにエンゲルスの『反デューリング論』を思ひ出されるであらう。

エンゲルスはデューリングの著書から、次のやうな言葉を引用してゐる。（河野・林兩氏譯本、二五三頁以下）

『經濟的權利の形成に對する一般政治の關係は、余の理論體系においては、極めて決定的な、同時にまた極めて特有な、意義を有する云々……政治關係の形勢は歴史的に基本的なるものであつて、經濟的隷屬は常に第二次の事實たるにすぎない。……始源はこれを直接的なる政治的權力に求むべきであつて、たゞちに間接的なる經濟的權力に求むべきではない』

すなはちエンゲルスが批判の對象としたデューリングもまた、非經濟的勢力説の主張者であつたのである。なほ吾々が、以上の外エンゲルスの引用してゐるデューリングの種々なる文章を見るならば、吾々は、かの高田氏よりも――『私は過去の何人よりも最も徹底的に之を展開したと信じてゐる』と言はれてゐる高田氏よりも――むしろこのデューリングの方が、遙に徹底的に、非經濟的勢力説を展開してゐることを、見出すのである。

ところで、エンゲルスは、デューリングについて、先づ次の如く述べてゐる。（同上譯本、二五五頁以下）。

『**第一に注意すべきことは、デューリング氏ほどの自惚屋ででもなければ、**こんな見解を、飛んでもない、かくも「特有」だなどと考へるものはない、といふことである。……この思想は、過去一切の歴史觀を支配せるものであつて、王政復古時代のフランスのブルジョア史家により初めて衝撃を受けたのである、しかるにこれをして「特有」だとは、まことにデューリング氏がこれに對してもまた全く無智なのが「特有」なだけである。』

これは今から五十年前に、それよりなほ三年前に現はれたデューリングの著書を、エンゲルスが批判したものである。しからば高田氏の著書はいつ生産されたのであるか？　私はその著書の卷末に次の文字を見出す。――『一九二七、一

二、九、午前十一時筆をおく。一九二八、五、二一、午後二時、加筆を終る。」

私は今、デューリングの著書が何月何日の午前または午後の何時に筆をおかれたものであるかを知らないが、いづれにしても、高田氏の著書がデューリングのそれに後れること約半世紀以上であることには、疑ひがない。して見れば、それは實際には、約半世紀を隔てゝのデューリング説の再生產に外ならない。しかも不思議に兩著者の態度はよく似てゐる。すでに引用したやうに、デューリングは、その權力説をば『余の理論的體系においては、極めて決定的な・同時にまた極めて特有な・意義を有する云々』と述べてゐるが、高田氏もまた、一方においては、價格の權力説なるものをもつて、『全體を貫く一つの特色』であるとなし、他方においては、『何人も捉へざる眞理にぶつかつてゐるかも知れぬ』とされてゐるのである。もしエンゲルスの言葉を借るならば、吾々は次の如くにも言ひうるであらう。『高田氏ほどの自惚屋でもなければ、こんな見解を、飛んでもない、特有などと考へるものはない。』それは全く本質的にはデューリングの再生產である。たゞそれが擴大再生產でなくて縮小再生產であるに止まるといふまでである。

非經濟的な權力をもつて經濟を説明するといふ企は、マルクスの歷史觀および經濟理論の最大の特徵を覆さんとする試みの一つの型である。――マルクス排擊者の逃げ込む穴はほゞ決まつてゐるが、この權力説といふのは、その穴の一つである。今やそれが新たに日本においても利用されんとしてゐる。私がこの論文の題目とした經濟と權力、この二つのものの關係を、改めて明白にすることは、この場合必ずしも無用であるまい。

吾々は、高田氏と逆に、經濟的勢力をもつて結局においては社會的の・政治的の・および精神的の・勢力一般を決定するものと考へてゐる。だから、もしも經濟と政治とが衝突するならば、經濟が必ず勝つ、と信じてゐるのである。

『一國內部の國家權力がその國の經濟的發展と對立する場合には、その鬪爭は常に政治的權力の轉覆をもつて終つて

ゐる。例外なく且つ殘酷に、經濟的發展は自己の血路を開いて進んできたものである。』（『反デューリング論』、前揭譯本、三〇二頁）。

右のことは、今日絕大の政治的權力を握つてゐるブルヂョアジーそのものの發展史が、吾々に證明してゐるところである。その初めブルヂョアジーは、封建貴族に對して全くの被壓迫階級であつた。一方は殿樣であり、他方は素町人であり、生殺與奪の權は全く前者にあつた。すなはち、ブルヂョアジーの勃興に伴うて次第に日程に上ぼされたところの・封建貴族に對するブルヂョアジーの・全鬪爭に亙つて、既成の政治的權力は、つねに封建貴族の側にあつたのである。この場合、もし非經濟的勢力が經濟的勢力を決定するものであつたならば、今日の如きブルヂョア社會の成立は、——それは同時に封建社會の崩壞を意味するものであるが、——たゞ封建貴族の御機嫌を害せざる範圍内の手段をもつてのみ（すなはち當時の社會における合法的手段をもつてのみ）行はれるの外なかつたであらうが、しかも封建貴族を倒す企てが封建貴族そのものの御機嫌を損せざることは、如何なる場合においても在りえない。しからば、かの素町人どもは、斬捨御免といふ絕大の權力を有する封建貴族たちの最大の逆鱗に觸れるべき事業を、何によつて敢行しえたのであるか？ 如何なる强味が彼等の陣營に存在したのであるか？ その强味は、——この鬪爭におけるブルヂョアジーの結局における決定的武器は、——たゞ彼等が社會全體の經濟的發展を代表する地位にあつたといふことに外ならぬのである。封建貴族がいつまでも權力を維持してゐたならば、今日の資本主義諸國におけるが如き偉大なる經濟的發展ならびに之を土臺とするところの諸般の文化的精神的發展は、全く不可能であつたであらう。封建社會の內部における生產諸力の發展が、一定の段階に達するときは、封建的な社會的諸關係がそれ以上の生產諸力の發展を阻害するための桎梏に轉化する。そしてブルヂョアジーは、かゝる桎梏から生產諸力を解放せんとする立場に立つことにおいて、社會全體の經濟的發展を代表するところの進步的な革命的な役割を演じうるのであり、かゝる社會的な背景と强味とをもつて新たに政治鬪爭の舞臺に登場するも

のであるがゆゑに、よく『貴族との不斷の鬪爭において、步一步と權力地位を攻略し、やがて最も發展せる諸國においては、貴族に代つて支配權を掌握するに至つたのである。』

しかるに今やブルヂョアジーの支配は、再び經濟的發展の防害物となりつゝある。社會の生產諸力は、多數の人々が現在よりも遙により善き生活をなしうる程度にまで、すでに發展してゐるにも拘らず、しかも多數の人々の生活は益々窮乏化し、その生存は益々脅かされつゝある。このことは、ブルヂョアジーがもはや社會の委託に副ふ能はざる段階に到達したことを——彼等の政治的權力がもはや經濟と衝突することなくしては作用しえざる段階に到達したことを——意味する。この時に當り、もしブルヂョアジーが、彼等に代つて社會全體の經濟的發展を代表するものとして政治の舞臺に登場せるプロレタリアートの勢力を、乃至はそれに伴うて必然的に生ずるプロレタリア的思想の勃興を、單なる政治的權力をもつて鎭壓し壓殺しうるものと考へてゐるならば、それは、エンゲルスの言葉によれば、『クルップ砲とモーゼル銃との射擊をもつて、蒸汽機關や、それによつて運轉される近世の諸機械や、世界商業や、また今日の銀行上および信用上の發展やの、經濟的作用をば、この世界から追ひ出しうるものと考へてゐる』に等しい。歷史に逆行するところの斯かる無謀な企てをなすものを、吾々は反動政治家と名づけ、かゝる反動政治を學問的に辯護するものを、吾々は反動學者と名づける。

經濟的勢力が經濟外の勢力によつて決定されるのではなく、逆に經濟外の勢力が經濟的勢力によつて決定されるのである。だからブルヂョアジーは今日如何に絕大なる權力をもつてゐようとも、それが經濟の發展に逆行せんとするものであるかぎり、かゝる權力による新興階級の抑壓は結局において無效であり、それゆゑまた社會の經濟的發展を代表する立場にあるプロレタリア階級は、かゝる權力との鬪爭において、最初のうちは如何に微力に見えようとも、必ずや結局における勝利者たらざるを得ないのである。

だが、如何にして——如何なる過程を經て——それは結局における勝利者となるか？

もちろんそれは、天氣清朗なる一日、例へば議會における多數決の結果として、既成の勢力がブルヂョア階級の手からプロレタリア階級の手へ『平和的』に讓り渡される——"aus einer Hand in die andere zu übertragen"——といふが如き、のんきな仕方においてでは、××××××××。新興階級の新たなる使命の遂行のためには、既成の權力組織は、出來合ひのまゝでは到底役立ちえないであらう。新たなる階級は、彼等自身のための××を、彼等自身の手によつて、組織せねばならぬ。そして斯く組織されたる××は、舊××に對する鬪爭の間に、すなはち××と××との鬪爭過程において、一歩づつそれ自身を强大化し、遂に舊××を zerbrechen するに至るであらう。

今吾々にとつては、かゝる鬪爭の勝敗を結局において決定するところの自然史的法則を、明白に意識に齎らすことが肝要である。レーニンは次の如く言つてゐる。『人類の最高課題は、一般的な根本の筋道における經濟的進化の客觀的論理を把握し、人類の社會的意識とすべての資本主義國の進歩せる諸階級の意識とを、それに對して出來うるかぎり明白に明瞭に批判的に適合せしめるにある』と。（『唯物論と經驗批判論』、ドイツ本、三三一頁）。

一九〇六年ストックホルムで開かれた黨の大會の席上で、ボルシエヴイキが敗北したとき、彼れは力强く言つた『落膽したまふな、同志、吾々は必ず勝つ』と。自己の力に對する信頼、勝利の信念、これがその時レーニンの吾々に與へた言葉である。——スターリンはこのやうに言つてゐるが、この落膽することを知らざる勝利の信念なるものは、先きに引用したレーニンの言葉を用ひれば、『一般的な根本の筋道における經濟的進化の客觀的論理の把握』に、——社會進化の必然的法則の理解に、——その根をおろしてゐるものだと、私は考へる。

ところで、かゝる經濟的進化の客觀的論理を吾々のために闡明してくれたものは、マルクスである。それゆゑに、多年レーニンの妻として彼れと生活を共にしたクループスカヤ女史は、次の如く言つてゐる。

『同志、吾々がレーニン主義とは何ぞやを規定したく思ふとき、吾々は當然、それは現時の實際に適用されたマルクス主義だ、と言はねばならぬ。………それゆゑ、もし諸君が……聽講者をして能ふかぎりより善くレーニン主義を理解するやうにせしめたいと思ふならば、諸君は先づ、その聽講者が、マルクス主義とは何であるか、實際に對するマルクス主義の適用とは如何なるものであるかを、理解するやうにせねばならぬ。マルクスが階級闘爭をどう解釋したか？ どのやうにして彼れはそれを理解したか？ 社會の發展が、如何にして、また何處へ向つて、進みつゝあるか？ 彼れが如何にその理論によつて階級闘爭の發展を助けたか？ 歴史的に勞働階級の前に提起された問題の意識を彼れはどのやうにして助けたか？ を示さねばならぬ。だから、マルクス主義の研究、その基礎の研究に對して、極めて眞面目なる注意を拂はねばならぬ。』（風生氏譯『人間レーニン』二九、三〇頁。）

私は重複を厭はず、同じくレーニンの回想記のなかから、ルナチャルスキーの言葉を引用しよう。『すべての事を見てとつてそれを正確なる理論となし、それに科學的基礎を與へたマルクス、何處へ、そして如何にして、行かねばならないかといふ實例を、幾千も指示したマルクスは、吾々にとつて、世界史上の最も偉大な人間であつたのである。』（同上、一五三頁）。

クループスカヤ女史の言葉のなかにも、ルナチャルスキーの言葉のなかにも、社會は何處へ・如何にして・進みつゝあるかといふことが、指摘されてゐる。現代の社會は必然的に何處へ進むか？ またそこへ進むためには必然的に如何なる過程を必要とするか？ 如何にして吾々はこの過程を能ふかぎり短くすることができるか？ これらの諸問題を、基本的には、マルクスがすべて吾々のために解決してゐるのである。

マルクスが最も多くの時間と勞力とを費した『資本論』は、根本的には、かゝる問題の解決のために獻げられてゐる、

以下私は、専らこの『資本論』を問題とするであらう。經濟と經濟外の權力との關係は、そこで如何に取扱はれてゐるか？その一端を明かにすることが、以下の私の仕事である。

エンゲルスは、唯物史觀と剩餘價値による資本家的生産の秘密の曝露とを、マルクスの二つの偉大なる發見としてゐる。この二つの偉大なる發見のうち、私は後のものを茲に問題とするのである。

剩餘價値が如何にして成立するかといふことの説明は、資本家的生産が如何にして成立するかといふことの説明であり、それは畢竟、資本家階級が如何にして成立し、發展し、やがてまた必然的に沒落するに至るか、といふことの説明のための、根本的な前提である。

今かゝる問題の説明のため、マルクスが純經濟的勢力以外の一切のものを無視してゐるといふことは、極めて特徴的な點である。この點につき、エンゲルスは次の如く言つてゐる。

『マルクスは「資本論」において、商品生産は一定の發展段階においておのづから資本家的生産に轉形すること……を、火を見る如く明かに證明してゐる。言ひ換へれば、たとひ吾々がすべての掠奪・すべての暴力行爲・およびすべての詐僞・の可能性を排除する場合にでも……吾々が生産と交換との進展につれて必然的に辿りつくところは、現在の資本家的な生産の仕方であり、少數なる一階級の掌中における生産手段および生活資料の獨占であり、尨大なる多數を形成する他の階級の、無産的なプロレタリアへの墜落……である。全經過の始終は、たゞの一度なりとも掠奪や權力や國家や乃至何等かの政治的干渉を必要とすることなくして、純經濟的原因から説明されてゐる。』(河野、林兩氏譯本、二六三、二六四頁參照)。

資本家階級の成立發展を説明するために、たゞの一度たりとも掠奪や詐僞や暴力やに訴へることなく、全經過の始終を純經濟的原因から説明してゐるといふこと、これが吾々にとつて最も注意すべき點の一つである。

レーニンもまた『人民の友とは何ぞや』において、同じ點を吾々に向つて注意してゐる。

『マルクスは問題を說明しようとして、これら生產諸關係の外に立つところの或るモメントに一度も訴へることなく、社會的經濟の商品的組織は如何にして發達するか？　それは（すでに生產諸關係の領域內において）ブルヂョアジーおよびプロレタリアートの對立的階級を創造しつゝ、如何にして資本家的組織に轉形するか？　またそれは如何にして社會的勞働の生產力を發展せしめ、且つ如何にしてそのこと自身によつて此の資本家的組織そのものの基礎に對し和解しがたき矛盾となるところの諸要素を齎らすか？　等々を知るの可能性を與へる。』（川內氏譯本、一七、一八頁）。

マルクスは、剩餘價値が如何にして成立するかを說明するために、等しい價値の物が互に交換されるといふことを、絕對的の前提としてゐる。

そこで、例へば、第一には、『何等かの特權によつて販賣者が商品を價値以上に賣る場合』を除外し（河上・宮川共譯本、二七六頁）、第二には、『商品をその價値以下に買ふ購買者の特權が存在する』場合を除外し（同上、二七七頁）、第三には、『賣ることなくして買ふだけの階級』が存在する場合を除外し（同上、二七九頁）、第四には、個々の商品所有者の間において詐僞暴力等の行はれる場合を除外し（二八〇——二八一頁）、——〔この論文は『マルクス主義講座』刊行完成記念のために催された講演會の席上で朗讀したものであるが、朗讀しつゝこの個所に來つた刹那、臨監の警官より『辯士注意』と叫ばれたのには、聊か面喰つた。〕——第五には、商業資本を除外し（二八五頁）、第六には、更に高利貸資本を除外してゐる（二八四頁）。

要するに、AとBとが互に全く相等しい價値の物を交換し合ふ場合にでも、如何にしてその交換の結果、例へばAの手に一定の剩餘價値が獲得され、かくてAの手に次第に餘分の價値が蓄積されるに至るかといふこと、これがマルクスの提出した問題である。かゝる問題の提出の仕方が、すでに、非常な意義をもつてゐる。商品の交換に際しては、實際には、しば〳〵詐僞、暴力等が伴はれてゐる。少くとも、價値の相等しからざるものが交換されるといふことは、常にある。け

れどもマルクスは、商品の交換それ自體のなかに含まれてゐる事柄以外のものは、極めて注意深く一々排除してゐる。そして商品の交換なるものを、その純粹の姿で觀察してゐる。Aは穀物をもつてをり、Bは鐵をもつてをるといふ場合に、これらのAとBとが互にその所有物を交換したならば、Aの手には穀物の代りに鐵が、Bの手には鐵の代りに穀物が、存在することになる。このことが商品の交換に含まれてゐる唯一の本質的な事柄である。かゝる交換が行はれる場合に、例へばAが、これによつて、彼れの手離した穀物よりもより多くの價値を有する鐵を手に入れ、かくて彼れは、たゞに彼れの不用とする穀物を彼れの入用とする鐵に換へたばかりでなく、彼れが以前穀物の形でもつてゐた價値よりもより多くの價値をもつことになり、從つて一定の剩餘價値を獲得するといふことは、商品交換といふ立場から見れば、全く偶然的の附隨の出來事であつて、商品交換それ自身のうちに含まれてゐる事柄ではない。マルクスは、剩餘價値の成立をば、商品交換以外の如何なるモメントにも訴へることなく、純粹に商品交換それ自身の法則によつて說明せんがために、商品交換を不純ならしめるあらゆるモメントを捨象し、AとBとは互に全く相等しい價値の物を交換し合ふ場合であつても、なほ如何にして、かゝる交換の行はれた結果、例へばAの手に一定の剩餘價値が獲得されるに至るかといふことを、問題として提出し、Hic Rbodus hic Salta! ——ローヅス島は玆にある、玆で踊れ——といつて、その問題の解決を迫まつてゐるのである。

そしてこの問題は、今日では廣く知られてゐるやうに、人間の勞働力が商品として賣買される場合を分析することによつて、言ひ換へれば、勞働者がその勞働力を商品として資本家に賣り渡した結果を觀察することによつて、はじめて解決されるのであり、そこにエンゲルスのいふところの・マルクスの二大發見の一つが横たはるのであるが、私は今そのことを立ち入つて述べようと思ふのではない。私がこゝに諸君の注意を請はんとするところは、かゝる解決の前提となつてゐるところの・問題の提出の仕方についてである。

剩餘價値の成立を・從つて資本家的生産の成立を・從つてまた資本家階級の成立を・純經濟的原因からのみ說明せよといふのが、マルクスの彼れ自身に課した問題であるが、——そしてエンゲルスもレーニンも、マルクスがこの問題を純經濟的原因からのみ說明してゐることを、特に注意してゐるのであるが、——かゝる問題の提出の仕方またはその解決の仕方には、果して如何なる意義が存するのであるか？

一

マルクスの見地からすれば、經濟的諸關係が『社會の歷史の決定的土臺』であつて、法律的および政治的の上層建築や觀念的な上層建築は、この土臺から派生したものである。根本的な第一次的なものは、經濟的諸關係であつて、その他のものは、すべて派生的な第二次的なものである。だから、法律や政治や乃至人間の意識から經濟的諸關係を說明することは、第二次的第三次的なものをもつて第一次的なものを說明することであり、從つてそれは事物を根本的に說明する仕方とはなりえない。

先づこれを意識について見るならば、例へば先づ地球が存在し、しかる後それが人間の頭腦で反映されて、地球といふ意識を生ずるのであり、それと逆に、人間の頭腦のなかに先づ地球といふ意識が生じ、その意識によつて地球が生じてくるのではないが、丁度それと同じやうに、吾々が意識的に社會的諸關係の統制を行つてゐない限りにおいては、吾々の意識せぬうちに、すなはち知らず識らずのうちに、吾々の間に一定の社會的諸關係が結ばれてくるのであり、しかる後それらの社會的諸關係が吾々の頭腦に反映して、多くの場合は極めておぼろげにではあるが、ともかく吾々は斯く〳〵の社會のもとに住んでゐるといふことを、意識するやうになるのである。だから社會的意識は派生的のものであり第二次的のものである。それらの社會的意識は一定の社會的諸關係に依存してゐるが、それと逆に、吾々の社會的關係は吾々の意識・意欲・意圖・から獨立してゐるのである。だからまた、一定の社會的意識の成立は社會的諸關係から說明さるべきものであつ

て、逆に社會的諸關係が社會的意識によつて說明さるべきものではないのである。
政治の經濟に對する關係もまたこれと同じである。すべて階級社會にあつては、──すなはち社會が搾取する階級と搾取される階級とに分裂してゐる社會にあつては──搾取階級は被搾取階級を抑壓するために、一定の Gewalt を必要とするものであるが、かゝる Gewalt のための裝置は、眼に見えるものとしては、人および物から成り立つてゐる。例へば、人としては、×××、×××、×××、および××を形成してゐる・××以下××に至るまでの・尨大な人の塊り、物としては、×××、×××、××、××、××、その他の××、かゝる人的ならびに物的な諸裝置の總和が、一國の政治的構造を形成してゐるのである。今これらのものが主として如何なる階級により如何なる目的のために使用されるかを考へたならば、吾々は、かゝる政治的構造の形態と機能とが、すべて社會の階級關係によつて規定されてゐることを理解しうるのであり、そしてまた、階級社會の經濟的構造を形成する基本的な原型的な生產關係は、畢竟かゝる階級關係に外ならぬのであるから、結局のところ、社會の政治的構造はその經濟的構造によつて規定されてゐるといふことが分かる。すなはち政治は派生的のものであり第二次的のものであり、經濟こそが一定の政治形態を生み出すところの基本的なものであり第一次的なものである。だから一定の經濟關係の成立を說明するに當り、非經濟的な權力の作用をもつてするといふことは、派生的なものをもつて基本的なものを說明するといふことである。理論的には、そこに謂はゆる權力說なるものの根本欠陷が存する。それは關係の顚倒であつて、譬へば、何故親子が似てゐるかといふことを說明するために、子から親を說明せんとするが如きものである。だから、假に一定の經濟的關係が非經濟的な權力で說明されえたとしても、すぐそれに續いて、しからば何故に左樣な權力が成立したかといふことが疑問になる。しかもデューリングはこの後の問題を說明してゐないのである。かゝる仕方をもつてしては、事物は決して根本的に把握されうるはずはない。
だからマルクスは、資本家的社會の成立・發展・および沒落の過程を一の自然史的過程として把握することにより、これ

を全く人間の意識・意欲・意圖から獨立せるものとして取扱つてゐるのみでなく、更に政治的權力の影響をも捨象し、これを純粹な經濟過程として觀察してゐるのである。しかるかぎりにおいて、そこにはたゞ商品の自己運動があるばかりである。マルクスが『資本論』の冒頭で分析してゐるやうに、商品には矛盾が含まれてゐる。そして矛盾は一切の運動の泉源であるがゆゑに、かゝる矛盾を內藏せる商品もまた、その矛盾のために、すなはちそれ自身のうちに內在してゐる力の作用によつて、更に言ひ換へれば、純粹なる商品交換それ自身のなかに含まれてゐるモメント以外のものには曾て一たびも訴へることゝなくして、それ自身に運動するのである。そして斯かる運動の過程において、商品は貨幣に轉形し、貨幣は資本に轉形し、そしてまた資本は、同じくそれ自身のうちに含む矛盾のために、際限なき自己運動をなすものとなる。此の如くにして、資本家的社會の成立・發展・および沒落の過程は、必然的な自然法則によつて支配されてゐるものとして、はじめて根本的に把握されるのであり、そこに唯物史觀に立てるマルクスの經濟理論の根本的な特徵が橫たはつてゐるのである。

吾々は、かゝる理解の仕方によつてのみ、始めて『落膽したまふな、同志、吾々は必ず勝つ』と言ひうる。何故なれば、吾々はこれによつて、吾々こそが必然的法則の側に立ちつゝあることを確信しうるのだから。一定の社會形態の成立乃至變革は、人間の意圖に基づくものでもなく、もちろん神の意志に基づくものでもなく、また政治的權力に基づくものでもない。社會を動かす根本的な動力は、社會の經濟的構造それ自身のうちに含まれてゐる矛盾である。それはそれ自身のうちに內包する斯かる矛盾のために動く。かくて社會形態の推移は、例へば幼蟲がサナギに變態し、サナギが蝶に變態するが如くである。如何なる權力をもつてするも、かゝる變態系列の順位を顚倒することはできぬ。一時に何百人といふ人間を牢獄に投じうる權力も、茄子の種子を蒔いて胡瓜を生産することはなしえないであらう。吾々人間のなしうるところは、たゞ自然史的なる必然の推移を溫室的に速進しうるに止まる。互に鬪爭せる勢力の何れかが斯かる社會進化を速進す

る進歩的な側に立つてゐるか？　これを見極めることによつて、結局における其の闘爭の勝敗を豫知することができる。

マルクスが經濟關係の說明を先づ經濟的原因からのみなさるべきであるとしてゐる理由は、以上によつてほゞ明かになつたと思ふ。

だが、このことは、社會進化の根本的な筋道を理論的に把握するための・一の科學的な取扱の仕方にすぎない。詳しくいへば、吾々が、資本家と勞働者との間に行はれるところの・勞働力の賣買といふ交換關係を觀察するに際し、そこから一切の暴力を捨象するのは、たゞ斯かる關係を純經濟的に觀察せんがための、研究上の手段としてである。現實の階級社會においては、もちろん、純粹な經濟的關係なるものが存在する筈はなく、すべての經濟的關係は政治的影響に染色されて政治經濟的關係としてのみ存在する。そこでは、經濟關係の上に政治的權力が常に巨大な役割を演じ、政治的上層建築は絕えず經濟的の土臺に反作用を及ぼし、それによつて支配階級による被支配階級の搾取を永續化せんとしてゐる。例へばストライキは勞働者が彼等の商品たる勞働力に關して行ふ一の不賣同盟である。だが吾々が最近に野田・別子等々のストライキに際して見たる如く、勞働者大衆の反抗が、裏切幹部の協調政策を乘り越えて燃え上がらうとするときは、いつでも直ちに大衆的××が行はれ、遂には××の××さへも行はれることになる。また吾々は記憶してゐる、一九二七年の恐慌に面して、川崎造船所職工の多くのものが解雇された當時には、同造船所附近はもちろん、全神戸市が××をもつて固められ、事實上の××がしかれたことを。Gewalt が經濟關係の上に有力な働きをなしつゝあることは、かゝる場合、現象形態の上に露出する。

なほそれのみではない。Gewalt は歷史の進行の上に、すなはち一の社會形態から他の社會形態への推移が行はれようといふクリティカルな時機に際して、特に重大なる一の決定的役割を演じる。このことがまた『資本論』において明かに

説明されてゐる。そして、これに對し更に讀者の注意を促すことは極めて肝要である。何故なれば、このことの看過のうちに、『自然成長性による目的意識性の潰滅』が萠芽するであらうから。

『反デューリング論』において××論のために多くの頁を費したエンゲルスは、その最後において次の如く述べてゐる。

『この力はしかし、歴史上いま一つの役割、一の××的役割を演じるといふこと、それはマルクスの言葉に倣へば、新たなる社會を孕める古き社會の助産婦であるといふこと、それは社會の運行を押進め且つ凝固し死滅せる政治諸形態を破壞すべき道具であるといふこと、——凡そこれらのことについては、デューリング氏は一語をも語らない。云々』(河野・林兩氏譯本、三〇二頁)

また『反デューリング論』の原稿を見ると、エンゲルスは次の如きことをも書いてゐる

『マルクスによつて叙述されてゐるイギリス第十六世紀の變革を見ると、××はまたその××的な側面をもつてゐた、それは封建的土地所有のブルヂョア的土地所有への轉化の・およびブルヂョアジーの發展の・一根本條件であつた。』(Marx-Engels Archiv, II Bd., S. 409.)

吾々は先きに、經濟が基礎的なものであつて、權力は派生的なものであること、そしてそれゆゑにマルクスは、資本家的社會の成立を一毫だも權力に訴へることなくして説明してゐること、を述べた。しかるに今やこの權力が、新たなる社會を孕める古き社會のための助産婦であるとされ、また古き社會形態から新たなる社會形態への推移のための一根本條件とされてゐる。このことは、一見すれば、前後矛盾してゐるかに見えるが、果して如何に理解すべきであるか?

疑ひもなく、社會の經濟的構造はその土臺であり、政治的構造はこの土臺の上に生ゐ立つた上層建築であるに過ぎない。しかしながら、政治權力は此の如く經濟的土臺から派生したものであるにも拘らず、それはまた逆に、自分の生まれ

出た土壌の上に反作用を及ぼし、且つ社會××の時期に際しては、その土壌を根柢から搖り動かすほどの力をもつものなのである。譬へば、子は親から生まれたものに相違ないが、しかし子はまた親に向つて著しき影響を及ぼすものであり、現に子は三界の首かせといふほどに、親の自由なる行動を束縛するものなのである。經濟的生活、政治的生活、精神的生活、等々の社會現象は、互に密接なる相互關係の連絡のうちに卷き込まれてゐる。だから、たとひ吾々は、社會の動きの根本的な筋道を握るために、先づ最初には、純粹な經濟過程を抽象して來て、純經濟的な見地からのみ之を觀察するのであり、せねばならぬのだとしても、しかし斯かる抽象的なものをもつて現實の歴史と同一視してはならぬ。それゆゑに吾々は、一方において純經濟的の觀察をなすと同時に、また他方においては現實の歴史をも顧みねばならぬ。これマルクスがその資本家的社會に關する研究を特に政治經濟學批判と名づけ、經濟に直接の關係をもつかぎりにおいては、政治をもまた其の研究對象となしてゐるゆゑんである。

資本家的生産の成立に關するマルクスの説明は、この點に關し極めて特徴的である。すでに述べたる如く、『資本論』第一卷第二篇の冒頭においては、彼れは一毫だも權力に訴へることなくして此の問題を説明してゐる。しかるに彼れは同じ第一卷の最後の篇においては、この資本家的生産の成立に際して行はれた様々な權力の血と火との歴史を詳細に敍述してゐる。けだし政治的權力が社會進化の上に特に著しき働きをなすのは、舊社會の沒落・新社會の誕生・といふクリティカルな時期においてである。封建社會が倒れて資本家的社會が生まれようとしたときも、かゝる政治的權力が實に非常なる××的役割を演じた。『資本論』第一卷の最後の篇は、このことに關する豐富極まる史實で埋められてゐる。そこでは勞働者を土地から切り離すといふこと――それは舊生産關係の破壞を意味する――が、かくて生産手段の所有から隔離されたる・從つて自己の勞働力を賣るのほか生活資料を得るの手段をもたざる・プロレタリアを作り出すといふこと――それは資本家的生産の成立のための根本前提である――が、一言にしていへば農業革命が、主要の問題とされてゐるのである

が、『こゝでは吾々は農業革命の純經濟的動力を無視する、吾々はその强力的槓杆を問題とする』と言はれてゐるやうに、(カウツキー版、六五四頁)、取扱はれる問題の側面は前と全く一變してゐるのである。先きには純經濟的動力のみを問題とし、一切の强力を無視することにより、資本家的生産の成立が說明されたのであるが、こゝでは純經濟的動力は總てこれを無視し、たゞ强力的槓杆のみが敍述されてゐるのである。かくて光景は一變してゐる。先きには何等の詐僞・何等の暴力も行はれざるところの、等價と等價との交換といふ極めて平和的な取引が前提とされてゐたが、ここでは一切の××が荒れ狂ふ。

私はこゝにはたゞその一例を引用するに止める。

『ホランダは第十七世紀の資本家的模範國民であつたが、その殖民地經營の歷史は、「欺瞞、賄賂、××、卑劣に關する此の上もなき光景を呈してゐる」。ジャワで使用する奴隷を得んために、セレベス島で行つた彼等の人間××の制度ほど特徵的なものは、とてもない。(私は講演の際、ここまで朗讀して來たときに、臨監の警官から重ねて『注意』を促された。それで當時は以下の朗讀を省略することを餘儀なくされたが、これは廣く流布してゐる高畠氏の譯本にもそのまま載つてゐるものであるから、文章として公けにするには、もちろん差支なきことだと考へる。——河上)人間××がこの目的のために養成された。人間××と、通譯と、人間××者とが、この商賣における主なる關係者であり、——人間××者の主なるものは、土着の王族である。さらはれた少年は、やがて奴隷船で送り出せるやうに成長するまで、セレベス島の秘密監獄に隱まはれた。官廳報告書の一つにいふ、——「例へばこのマカッサーの一市は、×××で充されてゐる。そのうち他に優つて、、、ものの一つには、××と××との犧牲たる不幸な人々が、鎖で繫がれ、彼等の家族から無理に引き裂かれながら、一杯つめこまれてゐる」。ホランダ人はマラッカを手に入れんがため、ポルテユガルの總督を買收した。一六四一年總督は、彼等がこのマラッカ市に入ることを許した。彼等は直ちに

總督邸に馳けつけ、二萬二千八百七十五ポンドの賄賂の支拂を「節約する」ために、總督を××した。彼等が足をおろしたところは、荒廢と住民絶滅とが相次いで起つた。ジャヴの一つの州たるバンジユワンギでは、一七五〇年に住民八萬以上を算してゐたが、一八一一年にはやつと八千に足るか足らぬかになつた。』(カウツキー版、六八〇、六八一頁)。

吾々がすでによく知つてゐるやうに、資本家の獲得する剩餘價値は、資本家によつて搾取される賃勞働者の剩餘勞働から成り立つものである。だから、資本家的生産が成り立つためには、賃勞働者が存在してゐねばならぬ。しかしながら斯かる賃勞働者は、最初のうちは、決して十分に存在してはゐなかつた。だから、勞働者を彼等の××××から無理やりに引き離してそれらの勞働者を强制的に賃勞働者たらしめる必要があつた。そのために、今述べたやうな××が使用されたのである。

日本においては、そんなことは曾て一度も行れたことはあるまいと、誰もが言ふであらうが、しかし現在にでも『監獄部屋』なるものがまだ存在してゐるのである。私は『有島武郎全集』(第六卷、一四三頁以下)から、『或る土木工夫の直話』をこゝに引用しておかう。

『大體日本には今四十五萬人の土木工夫がゐます。そしてそのうち七萬人は、自分の勞働力ばかりでなく、自分の身を賣ることを餘儀なくされて、生き恥をかゝされてゐます。

七萬人の九分通りは、人夫仲間からいふと、赤の素人で、學校生活を途中でやめた者とか、不首尾で投出されたお店者とか、田舍から一攫千金を夢みて都會に出て來た百姓とか、怠惰のために喰ひつめた世間知らずとか、さういふ人人から成り立つてゐます。それらの人の多數は、なすこともないまゝに、都會の場末とか公園とかをうろついてゐる間に、惡募集屋の手先きに難なく乘ぜられるのです。……

謂はゆる人夫募集屋は、東京、大阪、神戸、名古屋、仙臺等に、仕掛の大きな根據を備へて盛んに商賣をやつてゐ

ますが、……甘々と口車にひつかゝつた者がそれらの募集屋の暖簾をくゞると、帳場には口の上手な男がゐて、歩合のいゝ契約を取り結びます。……證書に捺印をすることになると、すぐ二階の溜りに追ひ上げられます。追ひ上げられたらもう最後です。便所一つ行くにも一見物凄い風體をした男の監視を受けなければならないのです。……そこで二十人なり三十人なりの頭が揃ふと、土木の現場の方に送り出されるのですが、かうした人身賣買の行はれる地方は、東京以北では、福島、仙臺あたりから始まつて、北海道から北は樺太まで及んでゐます。……

……募集屋の二階で全く自由を束縛された人達は、とても逃げることの出來ないほどな多數の護送人に附添はれて汽車に乘り込むのですが、乘り込むと護送人の數は減つて、二人か三人になります。その二三人といふ男は、殊に腕つこきな物凄い男で、客車の入口の所にがんばつてゐて、辨當から便所への立ち居にまで氣を配つて、一寸の隙も見せません。この役目をする男は、一日三圓の日當と酒代とを貰つてゐます。汽車が目的地につくと、停車場には、十人について四五人といふ割合に、得物を持つた荒くれ男が迎えに出てゐるので、大抵の應募者は度膽をぬかれて觀念の眼を閉ぢる外はありません。

さてこれから本當の人身賣買が始まるのですが、東北地方では大抵直接土工組に賣り込みますし、北海道では函館眞砂町に引受所があつて、一旦その手に渡つてそれ〲需要のある所に送り込まれることになつてゐます。福島地方は差別なしに一人三十圓、北海道は七十圓、樺太は百二十圓といふやうな相場になつてゐます。募集屋はその金を受け取ると、さつさと引き上げてしまふのですから、それからの處置は全く土木組の勝手です。募集屋と取り交はした契約はよし一圓二十錢だらうが二圓だらうが、それは反古同然です。……土木組ではそんなことに頓着なく賃銀を定めるのです。……現場ではどれ位の賃銀かといふと、先づ最上五十錢、北海道で一圓二十錢といふ位の相場です。…これだけ聞くと、とにかく少くとも賃銀はくれるやうに見えませう。しかしその底を割つてお話すると、賃銀は一切

現金ではくれないで、各組にて發行してゐる切符で支拂はれるのです。それはもちろん現場以外では通用しない紙きれです。……

現場はといふと、停車場から一里も二里も離れた山の中で、そこに厩舎のやうな細長い掘建ての荒小屋ができてゐます。それが監獄部屋と呼びならされてゐる合宿所です。眞中が通路で、その兩側に一本の丸太がねかしてある、それが枕です。日がな一日働いてきた人夫たちは、眞暗なところで干鮭と腐れ澤庵とで飯を喰はされて、ずらつと列んでその丸太を枕にして寢るのです。入口は二ケ所だけよりなく、その二ケ所には嚴重な警戒がしてあります。勞働は朝の六時半から掛かつて夕方の六時まで。晝飯時半時間の休憩を除けば、あとは引つきりなしです。八時間勞働だ何んだと言つてゐるお人達がをかしくなる位のものです。………

病人は隨分出來ます。その筈です。ところが足腰の立つ間は打ちたゝいてもこき使つて、使ひ切れなくなると二度分の辨當と五十錢とをあてがつて、お拂箱にするのです。そんな人は停車場のある所まで辿り着くのもやう／＼といふくらゐ弱つてしまつてゐるのです。………

………實況を世間に漏らすことのできる手紙は書けない仕掛けになつてゐます。手紙を書いたら開封のまゝで帳場に出さなければならないのです。帳場ではよし／＼といつて皆んな受取りますが、さしさはりのある手紙は、一つ殘らず紙屑籠に抛り込んでしまふんですから。………

………苦しまぎれに逃走を企てる者がないではありません。しかし先方でもそれには相當の用意ができてゐます。第一現場に通ずる道路の三叉四辻には、きつと一人の屈竟な男が叢に隱れて見張りをしてゐます。近所の二つ三つの停車場には氣の利いた小頭が山から下りて監視してゐます。逃げは逃げても逃げおほせないと觀念した氣の弱い男などは自殺するのがあります。………考へのあるのになると、道に出ずに草深い所にくゞんで二日か三日ぢつとしてゐ

ます。それ逃げたといふんで搜索にかゝりますが、三日も知れないと手がゆるみます。その頃になつて、そつと藪を出るのですが、何しろ饑じいから腹をふくらすために、その近所の百姓家にでも飛び込んで、仕事を手傳はして貰ふ外ありません。ところが百姓もこの頃は暮しがせち辛くなつたためか、氣のいゝ人は先づありません。それは氣の毒なといふやうなことを口先きでは言ひながら、濁酒でもあてがつておいて、裏から早速帳場に內通します。帳場では時を移さず人をやつてその男を取りかへして、內通した百姓には大概三圓の手當に食事その他の實費を支拂ふのです。連れ歸つたが最後、一同への見せしめだといふので、皆の見てゐる前で、小頭どもが寄つてたかつて息の根がとまるやうな目に遇はせるのです。………

……こんな忌々しい習慣に對する地方××の態度はどうかといふと、實に生ぬるいものです。第一×××は大抵買收された土工組の味方です。かういふ大土工の經營者は大抵地方々々の有力な資產家ですから、××の方もさはらぬ神に崇りなしといつたやうな態度を持つてゐて、私なんかが話に行つても、うろんな奴だといふやう色眼鏡で見られる外はありません。………』

の如きは、嘗てホランダ人の行つた『人間××の制度』と、、、、、、はゐない。たゞホランダ人はマラツカを手に入れるために、ボルテユガルの總督を××したが、相手が總督であつただけに、賄賂は二十萬圓以上——十七世紀の當時では巨額——であつた。それゆゑ彼等は、かゝる賄賂を儉約するために、總督を××してしまつたのだが、村の×××の××は、僅かな賄賂で買收されうるお蔭で、總督の運命を免れてゐるのである。

『資本家的生產の根本條件』たる、勞働者の生產手段からの隔離は、マルクスが諸國の歷史的事實——極めて豐富なる歷史的材料——の研究によつて要約したところによれば、實に『人間の歷史のなかへ×と×との消えざる文字をもつて書き込まれてゐる。』その『現實の歷史においては、××、××、××。簡單にいへば××が、明かに大なる役割を演じてゐ

る』のである。

資本家は此の如くにして、たゞに自分の搾取すべき賃勞働者を××によつて作り出したばかりでなく、他方においては、彼等の新たに組織せる『社會の集中的組織的強力』たる××××を利用して、急速に資本の蓄積を行つたものである。明治十四年農商務省の豫算表を見ると、××會社の助成金に屬するものが二十六萬九千餘圓であり、それを差引いた農商務省そのものゝ費用は、それよりも遥に少く、僅に十八萬餘圓にすぎない。此の如くにして、國家××により××として徴收されたものが、年々右から左へと、××會社へ流れ込んだのである。マルクスは、『ヨーロッパ諸國における本來の工業的資本は、一部分は直接に、××から流れ込んだものである』と言つてゐるが、それは、こゝに示すが如く、必ずしもヨーロッパに限られたわけでもなかつた。諸君は小學校の讀本において、またブルヂョア經濟學者の著書においても、今日の××××なるものが、最初は全く勤儉貯蓄によつて產を成したものであるかに說明されてゐることを、發見されるであらう。だが、現在では一日に一萬圓以上の純所得を生みつゝある××の財產が、此の如くにして蓄積されたといふことは、全くのお伽話にすぎぬのである。

以上指摘したところは、ほんの一例にすぎないが、マルクスはかゝる事例を無數に引用した後、資本家的生產の成立史を要約して、次の如く言つてゐる。

『本源的蓄積の種々なる諸契機は、大體時間的順序に從つて、特にスペイン、ポルテュガル、ホランダ、フランスおよびイギリスに散在する。イギリスでは、これらは、第十七世紀の末葉、系統的に綜合されて、殖民制度、國債制度、近代的租稅制度および保護制度を包括するに至つた。これらの方法は、一部分は、例へば殖民制度の如く、殘虐極まる暴力によつた。しかし〔程度の差はあれ〕それらの總ては、封建的な生產樣式の・資本家的な生產樣式への・轉化を溫室的に速進せしめ、その過渡を短縮するために、國家權力を・社會の集中的組織的權力を・利用したのであ

る。Gewalt は、新たなる社會を孕んでゐる・あらゆる舊社會の助產婦である。それはそれ自身一の經濟力である。」（カウツキー版、六八〇頁）。

經濟外の力は、新たなる社會を孕んでゐる舊社會のための助產婦である。それは助產婦であるから、それ自身が子を產むのではない。新たなる社會は、舊社會のもとにおける經濟的發達によつて、舊社會のうちに孕まれてゐる。たゞその舊社會から新たなる社會が生まれ出ようとするとき、そこに謂はゆる產みの苦しみがある。經濟外の力は、――從來の社會狀態を維持保全するための舊權力ではなく、その舊權力を××するために新たに組織されたる××階級の××的權力は――此の如き產みの苦しみの××を短縮し速進するために役立つのである。マルクスの言葉によれば、それは舊社會から新社會への轉化を溫室的に××せしめ、その過程を××するために、大なる役割を果すものである。こゝに溫室的といふ言葉は、もとより比喩的に用ひられてある。だがそれは正確なる比喩である。茄子でも胡瓜でも、それはそれ自身の生物學的法則に從つて成長する。吾々はそれをどうすることもできない。しかし吾々はまた、溫室の設備によつて、それらのものゝ成長を××することができる。經濟外の力は經濟に對して斯かる作用をもちうるのであり、しかる限りにおいて、それはそれ自身一の經濟力であり、一の生產力である。

『資本論』では、封建社會の沒落に伴ふ資本家的社會の成立に際する Gewalt の革命的役割が、說明されてあるに止まる。加ふるに、かゝる Gewalt の組織そのものは、そこでは少しも論じられてゐない。何故なれば、『資本論』は資本家的社會の經濟的構造を研究對象となせるものであり、從つて政治的權力は、それが社會の經濟的構造に影響を及ぼす限りにおいてのみ、問題とされてゐるのであり、權力組織そのものは、おのづから問題外におかれざるをえないのであるから。

よつて私は最後に、將來における××××××に際しての Gewalt の役割ならびにその際における Gewalt の組織

について、一言を補足しておかうと思ふ。

資本家的社會の成立のために如何に××が××的な役割を演じたかについては、吾々のすでに見たところであるが、かかる××はブルヂョアジーの支配の樹立につれて益々强大化し、今日の資本家的諸國におけるが如く、尨大なる××および××の組織を確立するに至つた。しかしそれと同時に、かく組織化されたる××は、今や往年の××的意義を失ひ、むしろその反對物に轉化し、現在では完全に、歴史の進行を阻止するための保守反動の役割を果しつゝある。それは、專らブルヂョアジーの支配を永久化することを目標とせるものであるから、如何にも强大なる一の××組織には相違ないが、しかし、それはもはや『新たなる社會を孕んでゐる舊社會の助産婦』ではありえない。

だから、封建社會の沒落に伴ふ資本家的社會の成立に際して××が有力なる××××を演じたと同じやうに、××的社會の××に伴ふ×社會の誕生に際しても、やはり××が同じやうな××的役割を演じるに相違ないが、しかしその×××は、すでにブルヂョアジーによつて集中化され組織化されたる既成の××ではありえない。むしろそれは——すでに前にも一言したやうに、かゝる既成の××を××するために、新たなる××によつて新たなる目標に役立ち新たなる機能を果すべく新たなる方法によつて集中化され組織化されたる××でなければならぬ。社會の經濟的構造の變動を承認し且つ主張しながら、他方において斯かる土臺の上に立てる政治的上層建築のみはこれを××的なものと觀念し、かゝる××的なる政治的構造——權力組織——が、例へば議會における多數決の結果として、出來合ひのまゝ一の階級の手から他の階級の手に讓り渡され、それによつて社會××が××××と云ふが如くに豫期することは、歴史的知識の欠除に立脚せる一の空想に外ならぬ。國家社會主義はかゝる空想の產物である。

『一の生產構造が他のものによつて更代される過渡期には、その助產婦は××的な××である。かゝる××的な××は、社會發展の××××××なければならぬ、すなはち一方においては、一の反革命的要素となつた古き諸形態の

「集中的權力を」・舊××を・舊型の生產諸關係を・××せねばならぬ。他方において、かかる××的な××は、經濟的變革の槓杆として働き社會の經濟的構造を變更するところの、一の新たなる形態の「集中的權力」を・新たなる××の××を・造り出すことにより、新たなる生產諸關係の成立を促進せねばならぬ。』（ブハーリン）。（佐野・西雅氏譯『轉形期の經濟學』二三七頁。ドイツ本、一七一頁）

エンゲルスは『ブルユメール十八日』第三版の序文において、右の事實をフランスの歷史について次の如く述べてゐる。（『マルクス・エンゲルス全集』、第五卷、一二五頁、山川均氏譯文による）。

『フランスは、歷史的な階級鬪爭が、その他のいづれの國よりも、いつでも決定的に鬪はれた國であり、階級鬪爭がそのうちに行はれ・またその結果が要約されるところの・變轉してゆく政治形態が、最も鮮明な輪廓で刻印されてゐる國である。中世にあつては、封建制度の中心であり、ルネエサンス以後にあつては、統一的身分制君主政體の典型だつたフランスは、大革命によつて封建制度を粉碎し、ヨーロッパのいづれの國においても見られぬやうな古典的な形において、純粹なブルヂョアジーの支配を打ちたてた。支配するブルヂョアジーに對する・擡頭しようとするプロレタリアートの鬪爭も、フランスにおいては、他國において見られぬ尖銳な形で現はれてゐる。』

右のうち最後の意見は、レーニンが注意してゐるやうに、『一八七一年以來フランスのプロレタリアートの革命的鬪爭に中斷が行はれるやうになつた限りにおいて、』殊にロシアにおいてプロレタリア革命が行はれた今日においては、もはや事實に適合しなくなつてゐるけれども、それは、こゝで問題ではない。こゝではたゞ、×××××××××は、いつでも新たに組織化されるものでなければならぬことを、注意すれば足る。

『吾々は、××的××のために國家の必要を認めることによつて、無政府主義者とは異なる。しかし吾々には、民主主義的ブルヂョア共和國に存在してゐるやうな「既成の」××××が××なのではなく、××し××されたる×××の

××××××××なのだ、と主張することによつて、吾々は日和見主義者やカウツキー派と異なつてゐる。かゝるものこそ吾々の必要とする××である。（レーニン）（全集第二十卷、ドイツ本、八三頁）

かゝる注意のもとに、吾々は今、この論文を次の如くに結びうる。

今日の社會が成り立つたとき、すなはちブルヂョアジーが勢力を得た當初には、『××、××、××、簡單にいへば××が、明かに大なる役割を演じた』のであり、それらのことは『人間の歴史のなかへ×と×との消えざる文字をもつて書き込まれてある』のであるが、將來××××社會が××××ためにも、多かれ少かれ、またこれと××なことが×××××××であらう。『それのみではない』――とマルクスは『哲學の貧困』（淺野晃氏の譯文による）の結語に言つてゐる――『階級の對立を基礎とする一の社會が、××の解決として、××な矛盾に・内體と内體との×××・導かれるといふことが、果して××××ことであらうか？　社會運動は政治運動を排斥すると云ふこと勿れ。それが同時に社會運動にあらざるが如き政治運動なるものは、斷じて存在しない。もはや階級も階級對立も存在せざるが如き狀態のもとにおいてのみ、始めて社會進化は政治革命たることをやめるに至るであらう。【講演の際、私は、臨監の警官から、こゝで『中止』を命ぜられた。しかし廣く流布してゐる『哲學の貧困』の譯文をそのまゝ引用することが、靜に讀まれる文章のなかで差支あるべき筈はない。だから私は、ついでに最後まで引用して、この一文を結ぶ。――河上】。その時に至るまで、社會の如何なる總體的××の前後においても、社會科學の最終の言葉は、つねに次の如くであるであらう。

××か然らずば死か。

×××の鬪ひか然らずば無か。

問題は不可避的に右の如くに課せられてゐる。

――ジョルジユ・サンド――』

對支問題概觀

幣原喜重郎

國際關係の圓滑を妨ぐる原因　近頃我國に於て、國民の外交問題に關する知識並に興味の進んで來たのは著しい事實であるが、之と同時に外交問題そのものも亦益々複雜を加ふるに至つた。支那の時局問題についても單に同國內部一般の情勢のみならず、廣く世界の全局に眼を放ち、之と關聯して判斷しなければ正鵠を得らるるものではない。然るに何れの國に於ても、多數の民衆は其日常生活に於て親しく外國の事物と接觸するの機會に乏しく、國際關係の各方面に亘つて十分に之を研究するには材料も暇も得られないのが常である。加之世界各國を通じて一般民衆は自國と外國との間に發生する紛議については何となく相手國の主張が常に不正不當なるが如き一種の先天的偏見を抱くの傾向を免れない、冷靜なる態度を以て双方に公平なる意見を公表する者は動もすれば其愛國心を疑はれ、悲憤慷慨の口調を以て對手國に對する反感を煽動する者は却て聽衆の喝采を受ける、此人心の傾向は屢々國際關係の圓滑を妨ぐる所の一大原因である。從つて政府は外交問題に關しても國家の利益に反せざる限り、事實の眞相を發表し國民の理智的判斷に訴ふる事に意を用ひねばならぬ。現に政府の局に立つ者が外交問題に付いて、國內政爭上の目的より以前の政府當路者を攻擊せんがために、公の記錄をも調査せずして誤れる事實を宣傳するが如きは、歐米諸國に於ては多く其例を見ない所である。是こそ外交を政爭の具に供するものであつて、其國民を迷はし國家を毒するの大なるものと云はねばならぬ。

南京事件　例へば一昨年の南京事件について見るに、或は之を以て從來日本其他列國の支那に對する軟弱外交の產物であると云ひ、甚だしきは當時の日本政府が支那に於て一切無抵抗主

義を執りたる結果であると云ふが如き、全く見當違ひの臆說が今尙流布されて居る。而も現政府當局者自ら斯かる臆說を公然宣傳するに至つては驚かざるを得ない。固より外交政策は冷靜なる利害の判斷に基いて決定せらるべきであつて、一國の外交が妄りに軟弱と云ひ强硬と云ふが如き空漠なる感情論に支配されては國家の前途を誤る所以である。況んや其所謂從來の軟弱外交とは如何なる事實を指すのであるか、是に代るべき如何なる具體的名案があるのであるか、此等の疑問に對する的確なる解答は未だ何人よりもきいた事がない、一體南京事件は日本其他列國の對支政策の硬軟如何とは全然關係なき事情によつて生じたものである、然らばその事情とは如何。

一昨々年の夏、國民革命軍が着々北伐計畫を遂行して漢口に進出せる以來、其總司令たる蔣介石氏其他國民黨の領袖數名は漸く共產黨排斥の旗幟を鮮明にする至つた。玆に於て共產黨員としては自己の運命に直接の危險を感じた、その危險を除かんがためには蔣介石氏等の國際的及國內的地位が鞏固を加ふるに先だつて速かに之を倒さなければならぬ、之を倒すには國民革命軍の手に歸したる地方に於て重大なる國際事件を勃發せしめ、列國をして支那軍隊の總司令たる蔣介石氏の罪を問ふに至らしむる事が最も捷徑である。事玆に至らば蔣氏が忍んで列國の强壓に屈從するにしても、敢然たつて列國に反抗するにしても倒壞の運命は免れない。かゝる結果を豫想して共產黨員は南京事件を畫策した、從つて其本來の性質は排外運動でもなく、固より排日運動ではない。本邦人其他外國人に危害を加ふる事は共產黨員が他の目的を達せんとする一手段であつて目的そのものではない。敵は本能寺にあつた。事實又英米人中には數名の死傷者を出だしたけれども日本居留民中には幸に一名の死傷者もなく、支那軍隊の指揮官が現場に着すると、直ちに日本領事を訪問して部下兵員の暴行を陳謝し、自働車を供給して本邦人を南京城外の下關に護送し、下關前面に碇泊せる帝國軍艦內に避難せしむるの便宜を圖つたのである。然るに過般の濟南事件は之と大に趣を異にし、內外新聞紙の報道によれば、濟南に於ては支那兵暴行の標的は主として日本人であつた。一般外國人には一名の死傷者もなく、而も支那側よりは日本人に好意を表し、其避難の便宜を圖つたやうな事實は全然認められない。何故に南京事件と濟南事件との間には支那側の日本人に對する態度に於て斯る大なる差異があつたのであるか。注意すべき現象である。

軟弱外交も無抵抗主義もない　南京事件は以上の事情に依つて發生せるものなるが故に、列國の對支政策が假りに軟弱であつたにしても、之が爲めに本件を誘發せるものとは考へられな

い、却て其の政策が軟弱であればあるだけ、共產黨が重大なる國際事件を惹き起さんとせる目的は判斷する道理である。列國より本件解決の爲め蔣介石氏に對し强力の壓迫を加へてこそ事件は愈々重大となり、共產黨員の蔣氏排斥の計畫は成功し得らるべき筋合である。又列國の對支政策が如何に强硬であつたにしても本件の發生を豫防し得らるる理由はない。元來共產黨員は國際關係の表面に現はれざる影武者であるから、列國の强硬政策に依つて何等の脅威を感ずるものではない、却て其政策が强硬であればあるだけ之を打倒帝國主義なる叫びの好辭柄として益々人心を煽動するの具に供するに止まつたであらう。

次に日本政府が支那に於て無抵抗主義をとつたと云ふが如き妄說は何人の捏造に出でたものであるか奇怪至極である。現に南京事件の直後數日を出でずして發生せる漢口事件に於ては、支那暴民の集團が日本居留地に亂入すると、我海軍陸戰隊は機關銃を以て之を驅逐して居る。南京事件に於て當時日本領事館內にあつた我海軍の小部隊が支那軍隊の暴行に對して抵抗を試みなかつたのは、政府の訓令に基いた次第ではなく、全く同地に於ける本邦居留民一同の意向を尊重せるがためであつた。即ち居留民は其現場の實況に徵し、若し兩國武力の衝突を來たすならば遂に尼港事件の覆轍を履み、居留民全部鏖殺に遭ふの危險ありと見て、切に隱忍せられん事を我海軍將校に陳情したのである。政府より我在支文武官憲に對し、無抵抗主義を指示したと云ふが如きは途方もない臆測に過ぎない。果して無抵抗主義なるものありしならば、當時政府は何を苦しんで楊子江方面に空前の大警備艦隊を配置したであらうか。

支那の不平等條約問題　國際關係の大勢を通觀するに世界何れの方面に於ても領土の隣接せる二國の間には不幸にも感情の融和しないものが多い。「遠交近攻」の策は支那外交のみの特有性ではないのである。然し接壤二國相爭はば結局双方共倒れとなるが落である。兩者孰れの爲めにも其永遠眞正なる利益は相互の友好的協力に依つて初めて保障し得らるるのを記憶せねばならない。

我國民は最近支那の時局が和平統一に著しく一步を進めた狀あるを見て深く之を悅び、支那國民が不平等條約の羈絆を脫せんとする要望についても終始理解ある態度を執り來つたのであるが、之れ全く日支兩國の友好的協力に重きを置く所の我國民の自覺に外ならぬ。唯不平等條約撤廢の目的を達せんが爲めに今日支那側の執らんとする方法順序は、我國が嘗て自ら同一問題に直面して進み來りたる筋途とは大いに異なる所あるを注意せねばならぬ。我國は甞に具さに不平等條約の辛酸を嘗め其

廢を圖るに當つては列國を責むるよりも先づ己れを責めた、當時帝國主義の空氣世界到る處に濃厚なりしに拘はらず打倒帝國主義などと叫ばずして先づ靜かに國內庶政の革新に全力を擧げた。斯くて庶政革新の業一度成ると、列國は遂に其努力の結果を認め、快く對等條約の締結に同意したのである。今や支那は其不平等條約の撤廢を期する國民的要望に對しては、列國一致の同情を受け、我國が同一問題に苦しんだ當時に比して遙かに有利なる國際間の形勢に惠まれつつあるに拘らず、同國要路の人々は多く列國を責むるに急にして自ら責むる所甚だ寬である。支那の進步しないのは一に不平等條約の鐵鎖あるが爲めであるなどと唱へ國內施政の改善其緒に就くを待たずして直ちに現行條約の改廢を迫る現狀である。不平等條約の存在が支那に於いて重大なる苦痛なるは我々の能く理解する所であるけれども之を以て其國運の進步を阻礙する百弊の源なりとは信じ得ない。我國は外國人が治外法權を享有した時代に於ても列國の帝國主義を呪ふことなくして國運は駸々と進み、片務的關稅協定の束縛を受けた時代に於ても條約違反の課稅を行ふことなくして財政の基礎は漸次鞏固を加へたではないか。我々は支那に期待するに我國の先例を其儘踏襲せんことを以てするのではないが、支那が速かに列國の間に伍して正當なる地位を占むるに至らんことを望む情切なる故に、此際特に同國官民の自重を求めざるを得ない。

最近國民政府が日支通商條約問題に關して執れる措置に就ては甚だ遺憾の念を禁じ得ない點がある、本件に關する國民政府の公文を見るに、現行日支通商條約を以て既に滿期に依り失効せるものと看做し、此の法理上の主張を前提として、新條約締結の交涉を提議したのである。然るにかかる法理上の主張は條約の解釋論としても國際法の理論としても、全然不條理なものと認められたる故に、大正二年十月帝國政府の北京外交部に送りたる覺書の中にも之を明に指摘してある。從て國民政府は新條約の締結を求むる前提として現行條約の失効論を主張し固執するならば必然我と正面衝突を避け得られないことを豫期しなければならぬ筈である。之に反し若し國民政府に於てかかる法律上の主張にふるることなく全く日支兩國民間の情誼に訴えて現行條約の改訂談判を提議したならば我國論は滿腔の好意を以て之を迎へたであらう。

東三省に關する問題　上述の如く我々は日支兩國間に友好的協力の關係を增進することを以て我對支外交の根本義とするものであるが、さりとて我正當且重大なる權利々益が脅威せられ侵害せらるることを忍ぶべき謂はれはない。支那內政不干涉の

方針と我權益擁護の方針とは相反撥する性質のものではなく、兩々並び行はるべきものであつて、又之を並び行ふ事が我外交の主眼でなければならぬ。

殊に東三省方面に於ける我權利々益に至つては歷史上の深き因緣に基づき、又主として條約の保障の下に我國民の多大な犧牲と努力とに依つて築き上げられ、我國家的生存とも密接な關係を有するものである。斯かる權利々益は東三省の政治組織に如何なる變更があつても厳然として侵すべからざる基礎を持つて居る。

過般政府は東三省に於ける我權利々益を擁護せんが爲め、張學良氏に忠告して國民政府との妥協を三ケ月間延期せしめたと傳へられたが、それが何故に我權益の擁護となるか又事實上之が爲め我權益が、一層確實なる保障を得たか、一向その形跡は認められない。南北妥協の延期忠告に付いては其當時新聞紙に現はれたる政府の辯明を見るに、恰も國民政府が一方的意志を以て日支通商條約を破棄したる不信義の行動に刺戟されたるものなるが如く說いて居るが、然し國民政府の日支通商條約失効を主張せる公文が南京の帝國領事に交附されたのが七月十九日の午後であり、張學良氏への忠告がその前日の十八日であつたのを思へば、右の辯明は事實に反するものと謂はなければならぬ、今回貴族院に於て其事實を指摘せる質疑に對し、政府は本件忠告の當時には國民政府より現行日支通商條約の失效を主張せる公文を入手してゐたのではないけれども、追て斯かる公文を送り來るであらうと豫想せられたのであると答辯し、當初新聞紙に報道せられたる辯明を變更して居る。果して其答辯の如く、國民政府の行動に關する一片の豫想に基き、張學良氏に本件忠告を與へたるものならば、爾來其豫想的中して、國民政府より愈々現行日支通商條約の失效を主張するの公文を送り來り、之と共に南北妥協の着々進捗するに至れる今日に於ては政府は一層徹底的に斯かる妥協の成立に反對すべき筋合なるに、不然として此情勢を傍觀しつゝあるは前後矛盾の態度である。政府は之に對し、國民政府の現行日支條約失效に關する主張は未だ公然撤回せられてゐないが、漸次に改まるものと考へらるゝやに說明して居る。何れにするも、本件張學良氏に對する忠告は素より國民政府をして現行日支通商條約の效力問題に關する主張を撤回せしむが爲めではなく、全く東三省に於ける我權利利益を擁護するの目的に出でたるものと解するの外なきが故に、政府として右忠告の措置を辯明せむとするならば、第一に昨年七月頃には國民政府が斷然一方的意思を以て東三省に於ける我權益を破棄するの方針たりしこと、第二に爾來國民政府に於て明

に此方針を改めたること、此二點を立證しなければならぬ。之を立證し得ざる以上、政府の措置は輕率にして且不徹底なるものと評せざるを得ない。

政府は又滿洲を『内外人安住の地たらしむることを切望するものなるが故に、此地の靜謐を亂し、若くは我重大なる權益を害するが如き事態の發生に對しては之を排除するの覺悟を有する』ことを二月二十二日貴衆兩院に於て公然聲明した、果して然らば政府は支那の領土内に於て、其支那の人民又は諸外國人を安住せしめむが爲め、苟も同地方の靜謐を亂す事態が發生するならば、假令我權益が脅威を受くる程度に達せずとも、斯かる事態を我國の力に依り排除するの覺悟を有するものなりや、若し其覺悟ありとせば、如何なる名義を以て、如何なる措置を執り得べきやとの質疑に對し、政府は毫も的確なる答辯を與へず、結局僅に滿洲の靜謐自體が即ち我權益であると一言するに止まつた。滿洲の靜謐自體が必ずしも當然我權益に影響するとは、固より概言し得らるべきものではない。又廣漠なる滿洲の一地方に於て、靜謐の亂だるゝ事態の發生する毎に、我國自ら之を排除せむとするが如きは、實行し得らるべきものでもない、此等の點は質疑の中に詳細指摘されたのであるが、政府は之に答へなかつた。滿洲の靜謐自體が我權益なりと大言壯語して實行之に伴はざれば、帝國の威信を如何にせむ。徒に他國の領土主權を輕んずるの誤解を招き、延ひて、我對外關係の大局に累を及ぼすが如き言動は、爲政者として深く戒むべきことである。

内爭不干渉の方針　支那の内爭に干渉しない方針に就ては、或者は之を以て政府當局の無爲無策を掩はんとする一の口實なるが如く考へ斯かる方針は我權益の擁護を完うし得ないと見る者もある。斯くの如きは、内爭不干渉の方針と權益擁護の方針とを正に相反撥する性質のものと誤解し、其の兩方針の孰れか一を貫徹せんとすれば、他の一を或程度まで放棄せねばならぬものと速斷する迷想の結果である。此の兩方針が並び行はるべきものなる事は前にのべた通りである。

將又内爭不干渉の方針は之を我權益擁護の方針と切り離して考ふるも、それ自體に於て果して無爲無策を示すものなるか、内爭不干渉とは、支那の政界に於て相對峙する諸黨派中の一方に對し何等偏頗なる援助を與へ、他の一方の黨派を排斥するが如き態度行動を一切避ける意味である。かくの如く支那國民の各方面に向つて偏頗なく表裏なく公明正大な精神を現實に表明する所の方針は何故に無爲無策を以て目すべきや。現に我々が曩に此方針を聲明すると共に幾多の障礙を排して誠實嚴格に言行

の一致を圖りたる以來、日支の關係は之が爲めに著しく面目を一新したではないか。內爭不干涉の方針は兩國民の親善關係が組立てらるる所の一の重要なる礎石である、其目的と結果とに徵すれば決して消極的退嬰的の政策ではない。之を以て一日の安を偸む姑息の計なるが如く評する論者は全く事態に理解なきものである。支那の一黨一派を支持し其黨派の影に隱れて我權益を擁護せんとする如き政策を執るものこそ眞に偸安姑息である、不見識にして且危險千萬な方針であると云はねばならぬ。我權益は決して支那の一黨派より恩惠的に賜與されたものではない、又其一片の好意に依賴して保護を求むべきものでもない。何人が支那の政權を掌握しても我國としては何ら偏頗なる精神を以て之を援助したり排斥したりする必要がどこにあるか。

經濟的國際關係に對する外交の任務　凡そ外交は單に國家と國家との間に於ける政治的關係を處理するに止まらず、其經濟的關係の發達を圖る事も亦等しく重要な任務である。殊に我國の現狀に於ては國際關係の經濟的方面に最も重きを置かねばならぬのであつて、外國貿易の振興と本邦人の海外に於ける投資企業とによつて國際貸借關係の改善を期する事は刻下の急務である。我外交の狙ひ處も亦主として玆に存しなければならぬ。加藤內閣成立匆々日露國交回復に着眼して北京條約を締結したのも、大正十五年南洋貿易の振興に關する官民合同の會議を東京に催したのも、支那關稅特別會議に當つて我委員が常に主動的地位に立つて斡旋盡力し、差等稅率並に互惠協定稅率問題の基礎を定むるに至つたのも、皆同じく我對外經濟關係の保護增進を期するの趣旨に外ならなかつたのである。

然るに近來支那時局の推移に際し、政府が專ら政治的軍事的見地より之が對策を按ずるに汲々として經濟的方面に注意を欠くの形跡あるは、不安なきを得ない所である。例へば一昨年に於ても昨年に於ても國民革命軍が北伐の途次濟南地方に近づくに及んでは、政府は他に何等の施設努力をも試みず、又善後策に關する一定の成案もなくして突如出兵を決定し所謂『居留民現地保護』の方針を執つた。其事實上の結果は如何、之が爲めに國庫に巨額の負擔を加へ、將卒に數百名の死傷者を生じ、而も我居留民にして支那兵の爲めに財貨を掠奪せられたるもの百數十件を下らず、虐殺凌辱に遭ひたるものさへ尠からざる慘狀を呈するに至つたのである。之にても尙ほ居留民現地保護の目的は完うせられたものと認め得らるゝであらうか。從來支那官憲が外國人を保護すべき根本的國際義務を盡くさゞりし實例の隨所に續出せる以上、本件出兵の措置は國際問題として支那より之に抗議し得べき正當の理由あるものとは思はれないけれども、

政府が我居留民保護の目的を完うしたるや否やは國內問題として我國民に於て之を檢討し、政府の責を問ふべき十分の理由あるものと謂はねばならぬ。

政府は本件出兵の措置を辯護し、若し軍隊の保護がなかつたならば、更に悲慘なる本邦人の被害を見たであらうと論じて居る、然しながら政府に於ては、出兵の爲め又は出兵に拘らず生じたるが如き莫大なる犧牲を供することなくして他に一層有効に居留民を保護するの方法がなかつたのであらうか。之が爲めには二ケの方法を想像し得らるゝのである。第一の方法は政府に於て最後の手段たる出兵の措置を決定するに先ち豫め國民政府の北伐軍と協議を遂げ、當時北伐軍に對抗せる張宗昌氏の山東軍が一旦濟南を撤退するに至らば、北伐軍をして、多數本邦人の居住する濟南商埠地內並に同地附近の若干距離以內に進入することを避けしめ、以て事實上部下兵員が我居留民に暴行を加ふるの機會なからしむるやう、適當の了解を付け置くことである。第二の方法は政府に於て北伐軍の濟南に入るに先ち、同地の居留民を一時青島又は其他附近の安全地點に避難せしむることである。此第二の方法は豫て支那側の提議せる所であつて、我國が之に同意するならば、支那側としては有らゆる鐵道輸送の便宜は勿論、必要なる經費の負擔をも提供してゐたのである、今回貴族院に於て以上二ケの方法を指摘せる質疑に對し、政府は第一の方法に付いては一言の答辯もなく、唯第二の方法に付いては若し一たび居留民の引揚げを行つたならば、本邦人が、同地方に於て多年の苦心努力に依り培養し來りたる經濟的地盤は之が爲めに破壞せられ、一旦引揚げたる居留民は容易に原地に歸還し得らるゝものとは思はぬとの答辯を繰返して居る。（一）果して本邦人の經濟的地盤なるものが、僅かの期間居留民を安全地點に避難せしむることに依つて破壞せらるゝの虞ありや否や、（二）若し其虞あるが如き薄弱なる地盤ならば巨額の國費と多數の人命とを犧牲に供して迄も維持することを要する程の價値ありと認め得らるべきや、（三）又濟南の居留民が一旦青島に引揚げたる上は容易に原地に歸還し得らるゝものではないと云ふは何故であるか、（四）且政府は濟南地方に於ける我經濟的地盤が能く確保せられつゝあるものと考ふるものゝ如きも、同地方に於て支那人を取引先とする本邦人の經濟的活動は我出兵と共に俄然頓挫して我軍隊の警備地域を通過する日支貿易は今尚ほ著しく萎微不振の狀を呈するは如何、此等の諸點に至つては政府は一も答辯を與へてゐない、唯意見の差異であると云ふに過ぎない、政府は又大局論として、出兵の爲めに我國威を支那國民に示したるものとなし、之を無形の一大效果なるが如く考へてゐるやうである、我國威を發揚したるか、失墜したるか、追つて**濟南問題**の解決條件に徵し更に批判したいと思ふ。

日支國交の現勢　今や日支關係の大勢果して如何、現に不快陰鬱なる空氣は重苦しく兩國の國交を壓して居る、一般に相互の國民的感情は絕へず緊張し、一方に於ては腕を扼して强硬政策又は積極政策を叫ぶ者あり、他の一方に於ては排日に狂奔して之を愛國運動などと囃し立てゝ居る、重要なる交渉要件は久しく未解決の儘に放任せられて當局者の机上に堆く停滯して居る、英國の新聞紙中にはこの際日支の孰れにも親交ある第三國より、兩國の紛議を調停するの方法を講ずべしと云ふが如き意見さへ發表して居るものがある、其實行の可能性如何は暫く擱き斯かる意見が外國方面に唱へらるゝ迄に立ち至りたる今日の事態は帝國の國際的地位と責任とに顧み、少くとも不體裁とは感ぜられないのであらうか、漸く本年に入つて帝國議會の政戰切迫すると共に、日支關係好轉の報道は頻々として傳へらるゝに至つた、其期待の實現せらるゝに於ては寔に兩國の慶事であるけれども、形勢は未だ遽に樂觀を許さゞるものあるのみならず、最近又々逆轉の狀さへ見える、唯關稅問題に付ては一月の末に迫つて漸く協定の成立を見るに至つたが、之とても先年支那關稅特別會議の際、我委員が支那と列國の間に立つて斡旋努力せる結果、基礎の定まりたる原案に準據したるに外ならぬ、其中協率表は當時の原案を其儘踏襲せるものであるが、關稅増收の使途問題に至つては我政府に於て原案よりも遙に讓歩せる點があるやうに聞こえる、且外國中既に同樣の關稅協定を取結びたるもの十數ヶ國に及びたる後に至つて、漸く日支間に本協定の成立したるが故に、恰も我國が大勢に壓せられて已むを得ず列國の跡を逐ひたるものゝ如き觀を免れないのは、如何にも遺憾千萬である。

何れにするも兩國の關係が今日に至る迄久しきに亘つて紛糾に紛糾を重ねたるが爲め、既に双方の受けたる有形的並に無形的の損失は決して輕いものではない、何故に斯くの如き現狀を來たしたのであるか、之を一概に我政府のみの責任に歸するのは公平なる觀察ではなからう、局外者の眼より見れば、兩國政府當局者共に、相互の外交問題を處理するに當つて、餘りに强く對內關係の繫累に捉はれて居るのではないかと憂慮せざるを得ない、固より何づれの國に於ても全然內政上の見地を度外視して、外交政策を決定實行することは事實上至難であらうけれども、內政上の見地が總てに打勝ち、外交の全部を左右するに至らば、世界の平和の爲めに、恐るべき禍根は玆に伏在するものである、目下の情勢を以て進むならば、日支兩國孰れも區々たる小局の利害に拘泥して鷸蚌の爭を事とし双方の永遠且眞正なる利益が何處に在るかを忘るゝに至るやも測り難い、斯くの如きは實に兩國の最大不幸であると謂はねばならぬ、局面を廣く見るか、狹く見るか、是れ即ち百般政策の岐かるゝ所である、政策岐かれて國運の將來は玆に決せらるゝのである、此寒心すべき趨向に付いては切に兩國政府當局の猛省を望まざるを得ない。

現代世相の展望

土方成美

一　下情上達せざる今の世

陰鬱な現代世相の裏に我國の天然資源の貧弱、人口の過剩等があるには相違ないが、此問題殊に前者は、急に聲を大にして見てもどうすることも出來ない。

言葉は適當でないかも知れないが、今の世は餘りにも「下情上達せざる」狀態である。即ち一方には議會政治を否認し、無産者獨裁を實現せずんば止まず、如何なる社會政策的施設も議會政治を通じて行ふ限り、單なる欺瞞に過ぎないといふ思想が、相當多數青年の頭腦を支配してゐる。然るに一方には之と正反對に、勞働組合を正式に認めることさへも産業立國の趣旨に背馳するものとして、極端なる現狀維持を固執する人々が對立してゐる。前者の所謂極端思想を抱く人々が幾何なる程度まで深酷に現代世相を呪つてゐるか、その厚薄は人によつて異ることは勿論である。しかし現代經濟組織の下に不滿を抱く人々が漸次極端思想に傾きつゝある勢は蔽ふべからざる現實である。現實生活を知らざる彼等青二才何するものぞ、それはやがて廢れる一時の流行であるとの考へ方には私は與しない。現狀打破の思想に對して、理論の正當は直接の問題ではない。我國の明治維新に於て攘夷開國の何れが正しいかは直接の問題ではなかつたのである。それは恰も今日の經濟學に於て勞働價値說が正しいか、限界效用說が正しいかが直接の問題ではないやうなものである。所謂多數

の所謂過激思想の青年にして自己の意識に於て正義觀に支配せられ、其目的の實現に向つて眞摯なるもののあることも否定出來ない。多數はもとより、附和雷同、破壞的情熱に驅られるものであるが、それにしても之等の者が現代社會組織の弊害を指摘して現代人の心理に訴ふる所必ずしも輕視すべからざるものがある。

之に對立する現狀墨守の思想は、現代社會に於て其機構の根幹を動かす、實力ある人々の間に旺盛である。此の事情が上述の下情上達せざる現時の世相を造り上げて、社會の空氣を陰慘ならしめてゐると見るのは、必ずしも誤れる見解ではなからう。私の如き日常多數の青年學生諸氏と接觸する機會の比較的多い者には、やゝもすれば、思想の對立を過大に見る虞はないとはいはれないが、それにしても眞相を誤り觀察してゐるとは思へない。此の不安を除く道は出來得る限り現在の社會制度の欠陷を是正して世人をして過激思想の必ずしも正當ならざるを悟らしめることとである。然るに今日の社會に於て支配的地位を有する人々の多數は、失業救濟の社會政策的施設すらも、漫世的失業者の養成として之を斥ける極端なる現狀維持論者か、然らずんば、マンチエスター學派の自由放任論を保持する人々である。其主張は善意ではあらうが、財政緊縮、租稅輕減、官業拂下の自由主義傳統を多く出でざる狀態である。但しその「負擔輕減」の主張は、國産奬勵のための保護關稅に就ては除外例を認め、「財政緊縮論」も産業に對する補助金の支出に就てのみは例外を許す底の極めて御都合主義の自由放任論であることも稀ではない。

抑々かくの如き相互理解を缺く極端思想の對立を見るに到つたのは何に因るのであらうか。其原因は多々あることゝ思ふが、一つは明治維新以來の急激なる社會狀態の變化である。明治維新以來の我國に於て其變化が急激であつたことは更めて說く迄もないが、經濟狀態の變化のみに就て見るも、明治以後急激に資本主義經濟組織を採用し、明治二十年代の初期漸く資本主義が確立して、歐洲大戰まで比較的多數人の不滿反抗少く國力を發展せしめた。歐洲大戰後漸くにして、無産階級の自覺が始まり、而かも一方經濟界の不況に會して、社會問題が漸く喧しく、資本主義組織確立以來三十年に滿たずして既に資本主義經濟組織に對する不滿反抗の聲が盛なる有樣である。政治的に見ても、議會政治は明治二十三年に始められたが、眞の政黨政治は行はれず、長く藩閥政治の下にあり、大正に到つて漸く眞の政黨政治が始まらんとして玆に

十數年、而かも其政黨政治に對して多數が既に懷疑の眼を以て見、絕望的の叫びさへ聞える狀態である。此日まぐるしき變化の社會狀態に於て、自ら青年子弟の思想と、社會の指導的地位を有する人々の思想との間に著しい懸絕を生ずるのは當然とも見られる。祖父はチヨン髷に大小を差して駕籠で東海道を往來した封建武士であり、父は資本主義社會に於ける銀行員であり、其子は資本主義を排擊するマルクス青年であるといふ例も稀ではなからう。現時社會の有力者、殊に實業界に於ける有力者は概ね五十歲殊に六十歲以上の人々である。之等の人々は我國に於ける資本主義の發展期に於て人となり、苟くも自覺あつて相當の努力さへ惜しまなければ自己の進路を開拓する事の必ずしも難事でない世に育つたのである。從つて之等の人々が現時の資本主義經濟組織に對して疑を抱くことの出來ないのも一應は當然とも見られる。一方二十才代の多數の青年の多くは日露戰爭後に生れ、すでに我國資本主義の發展が其進展の步調を弛めて、社會問題の喧しくなつた後に青年となつた。之等兩者の中間に介在する現時三十五歲乃至五十歲位の年齡階級の人々は如何であるか。其思想に於ても以上兩者の中間に位し、双方に對して多少の理解を有すべき地位にある。然るに、我國の現狀に於て之等の人々は未だ多く社會の各方面、殊に實業界に於て自己の意思に從つて行動し、社會を動かしうるやうな支配的地位には達してゐない、換言すれば社會的に比較的無力である。寔に我國の現狀は年齡より見れば老年者支配の時代である。老年者支配の時代であるといつても、別に私が之にとつて代らうといふのでもなければ又其能力もない。又私は一概に老年者の支配がわるいといふのではない。しかし、急激なる社會狀態變化の過程を辿つた我國に於て老年者の支配があまり甚しくなると、現時の如き社會思想の兩極端が對立し、上下不通の狀態を導くのも寔に止むを得ざる狀勢であると思ふ。

二　虛學跋扈の弊

老年者が社會の實勢力を支配して、壯年者が社會を動かすことに於て比較的に無力なのは何に原因するか。私は主たる原因を敎育の結果に歸さうと思ふ。もとより明治以降大正の始めに亘つて我國は只管資本主義の發展に鋭意し、社會の秩序は漸次確立し、著しい社會的變革がなかつた。從つて中年者が實力的地位に進むことを困難ならしめ、彼等が實行力を

發揮すべき地位を與へられなかつたといふ事もあらう。

しかし一方から見れば、彼等が實力的地位を獲得し得なかつたのは、彼等（私なども其一人であるが）自らの素質に基くところも多く、即ち實際的感覺を失つてゐることに因るともいへる。試みに小學校中學校に於て、私共の受けた教育を回顧して見られよ。其教育殊に中學校以上の教育に於て現實性を著しく缺いてゐるのではなからうか。生理衞生學を學んで、筋骨の構造其名稱等を學ぶけれども、一旦自分乃至子供が負傷した際に於て繃帶を卷くこと、消毒法等に就て何等の知識を持たないのが普通である。子供等が發熱したる場合に於て先づ取るべき處置手當等に就ても同樣である。物理學を學んだといふが如何に簡單な電鈴の裝置であつても、專門技術家を煩はさなければならない始末である。近來の如く强盜が横行して、隣家と電鈴を以て相通ずるのが良策であると敎へられ强盜は恐ろしくとも自分自身で之を裝置する術を知らぬといふのが多數である、從つて之も中々容易に實行されない。動物學を學んで進化論は聞くが、農作物の害蟲驅除の心得は習得しない、植物の分類や名稱は暗記するが、直ちに忘れてしまひ、木材の用途や植林の知識は乏しい、こんな例を云へば限りないことであるが、三角を學んで別に測量が出來るやうになるのでもない。その結果として學校生活は人々をして實際的感覺を失はしめるやうに出來てゐるといつても過言ではなからう。聞くところによると、今日の義務教育年限延長に對しては農業者や實際家の間に反對論があるとのことである。其一つの理由は、義務年限の延長によつて優良なる工匠の養成が不可能になるといふにあるらしい。之等も今日の教育の欠陷を遺憾なく現はしてゐるものではなからうか。學校に通ふ間に漸次實用と遠ざかつて行くことは蔽ふべからざることである。料理を學んでも、大宴會か大料理店のコツクとし、始めて役立つやうなことを教はり、而かも之は實行の機會がないから忘れてしまひ、お惣菜を造る術は知らない。裁縫も丸帶や袴の仕立て方を習得して、普斷着を縫ふことを輕蔑する傾向を養成される。

中學以上の高等專門教育に於ても、自然科學の方面は知らないが、文化科學の方面に於ては、やゝもすれば、學問的なことを高調し過ぎる結果實用性あることを輕視する。一例を取れば今の學校教育はやゝもすると、實際政策上の結論を導くことを俗學的卑俗的として輕蔑する傾向がある。或制度に就ても、其長所を一、二、三乃至イロハニホヘトと個條書

して列記し、又其缺點を同じく羅列對立せしめ、學生は之等の長所缺點を暗誦することを學ぶが、事に當つて實際上の判斷の該切なるものは持ち合せない。學校で學ぶことは實際生活の體驗によつて結論を導く一つの手懸りに過ぎないことを忘れてゐる所謂學說理論のみから何等かの政策的結論が導き出されるかの如く思ひ誤る結果は、事に望んで結論が下せない。或は其極端の正反對に走つて、書籍より得た机上の空論を單なる感情から獨斷的に信奉するやうな弊に陷るのである。具體的なるものは抽象的なるものの發展であり、最も具體的なる刻々の體驗こそ生命の眞骨頂であることが忘れられてゐる。

一言にして言へば今日の學問に對する多くの人々の態度は餘りに藝術觀賞的傍觀的である。其認識の興味は現實生活に對して、之に積極的に働きかけんとしての現實的興味ではなくして、藝術家が美術品に對する觀賞的興味である。物語中の海底の神秘のロマンスを聞く氣持ちである。地中海に沈んだ八阪丸の金塊を引き上げんとする現實的の興味からのみ海底を研究するのも極端であらうが、今日では此態度があまりに少な過ぎる。かくいへば、恐らく今日我國に於ける學徒の多數は、私を以て現實的卑俗的非學問的なることを高調する者として排斥せられるであらう。私もとより人類の藝術的興味を蔑視害惡視するものではない。否一面から見れば人類の現實生活は、藝術的創作の生活であらう。又一篇の藝術的作品の與へる實際生活的効果が、かへつて現實的興味に導かれた、社會の教訓や制度よりも偉大なる場合が多々あることを否定するものではない。近松のかな手本忠臣藏の人心に與へた影響の方が、學校に於ける修身教育の與へた影響よりも大なるものがあらう。しかし、社會現象に關する興味があまりに觀賞的傍觀的となることは人々をして、實際社會に對する適應性を喪失せしめ、惹いて就職難生活難を結果することも無視すべからざるところである。此弊は今日の教育に於て相當著しきものがある。例へば經濟學上に於ける一つの學說に就て見るに、之を誤り傳へざるがために、正確に解釋することに努力するのは結構であるが、之に對する批判に於て、たま〳〵現實現象との矛盾衝突を指摘すれば、一部の人はかくの如きは無意味である。或學說を批評するとは、其人の前提に立ち、之を矛盾なく解釋することであるといふ、或人の學說を矛盾なく解釋する、之が學問的なことであるといへば、恐らく總ての學說は其矛盾を是正して正しいものとする

ことが出來るであらう。しかも現實現象の説明に當つて、之との矛盾撞着を棄てゝかへり見ざる、其の所謂學問的學説は、單なる藝術的作品として以外何の價値があるか。人若し、此單なる藝術的作品も人類の感情に訴へて社會を動かす力は偉大であるといはゞ又何をかいはんやである。鰯の頭も信心からである。唯之を以て社會現象に關する學問的となすはあまりに僭越であると思はざるを得ない。

人或は以上の言より、私を以て學問の無用を説くかの如く思はれるかも知れない。即ち若し社會現象に關する學問は、現實生活に對する積極的、行動的興味によつて導かるべきものであり、現實生活の體驗のみが、正確なる實際政策上の結論を與へるものであるといへば、始めより學問を拋棄して實際職業に從事するのが最善の策ではないかといはれるかも知れない。しかし、實際生活を體驗するとつても唯漫然として實際生活が有效に體驗出來るものではない。心茲にあらざれば見れども見えず、聞けども聞えずである。瀬戸内海沿岸が製鹽地方であるといふことを知るものにして、汽車の窓から鹽田を注意することが出來るのである。往來を漫然歩行しても、何處に散髪屋があるか、下宿屋があるかを知るものではない、散髪屋を探す、下宿屋を探す氣持を持つて始めて、散髪屋下宿屋が目に止まるのである。社會科學の任務の主たるものは、此現實の認識に對する興味を喚起し、其體驗を有効ならしめることに盡きる、即ち「心を茲にあらしめる」のである。社會現象の因果關係を説くと稱するのも、畢竟多くの場合四つ辻には便所がある、公園には普通茶店がある、停車場には赤帽が居る、といつたやうな普通にある關聯を示して、實生活に於ける體驗を有効にするやうなものであらう。此意味より學問的研究は極めて有用なるものに相違ない、哲學の如きも亦人類が哲學の欲求を持つ限り、其哲學的思想を有效に行はしめ、人類の認識を正確ならしめるよすがとして尊重すべきものたるに相違ない。同じ夕映に對しても、「夕やけ小やけ、あした天氣になれ」と歌ふ氣持ちと、夕映を見て明日の晴天を思ひ、鎌を利ぐ氣持ちと二つの氣持ちがある。例は適切ではないが社會科學に於ては此後の氣持ちが大切である。

又觀賞的興味のみによつてたつ學問の存在も一概に否定し去ることは不可能ではあるが、少くとも社會現象に關する學問が觀賞的傍觀的興味に於て終始することは、最も誡むべきことではなからうか。現實生活に於ける職業を求めて入學

るものが多數である學校教育が、現實的感覺を失つた、觀賞的傍觀的態度にのみ人々を導いて、實際社會よりは學校卒業生に對する不滿の叫が放たれ、就職難の人は、門戶を閉鎖する社會に對して不平怨嗟の憤怒に燃ゆるところに現代虛學即ち傍觀的觀賞的學問、過度の病弊が横はると思はれる。

誤解のないためにいふ。學問的研究は益々旺盛でなければならない。知識の普及向上は益々發展しなければならない。たゞ學校のみを知識の唯一の供給所の如く考へ、書物上の概念的知識に對して、觀賞的態度を持することのみが學問的なりと考へる弊風は一掃しなければならぬ。

三　社會に對する適合性を失つた知識階級

現代の教育が其內容に於て卒業生をして現實社會に對する適合性を失はしめてゐるのみではなく、其他種々なる原因が卒業生をして社會に對する適合性を失はしめつゝある。

一つは教育年限の過度に長いことである。專門學校以上の學生が世に出るのは二十三四、遲いのは二十六、七である。最も活動の旺盛なるべき三十歲代迄に實社會に出でゝ、實際生活の經驗を積むには餘りに年月が短きに過ぎる。勢實際上重要なる地位を與へられる迄には相當の年齡に達する。大學の卒業生が內務省に入つて數年にして地方事務官となり、大藏省に入つた人が數年にして稅務署長になる。その地位を得るまでの實際生活の經驗は極めて短い。忌憚なくいへば、かくの如く少許の經驗を以て之等の地位に就くのは不適當であると思ふ。而かも、一方年齡の上から見れば最早相當重要なる地位を與へられて然るべき人々である。之等に思ひ到つて見ても、今少し、學校の就業年限を短くして三十歲に至るまでに實社會の經驗を多く積む機會を與へるやうにすれば、知識階級に實行性を賦與し得るものではなからうか。

長い修學年限の結果は、卒業生は社會に出でた際に於て既に社會に對する適合性を相當に失つてゐる。いふ迄もなく人は其年齡の若い程感受性が強く適應性が多い。海外に遊ぶ若い人が外國禮讃者になり、壯年以上にして海外を見る人が排外國粹論者になる場合の多いのも之によるのであらう。從つて相當の年齡に達し、既に一定の定型を得んとしてゐる卒業生

が一朝就職の困難に會すると、選擇すべき職業の範圍が限定せられてゐるだけに、一層困難を感ずるのである。今日の一專門學校卒業生は其學門的教養によつて相當に氣位を高くし、ヘーゲル哲學を知らざる、米屋の主人を愚人視する傾向があり、其點からも職業撰擇の範圍が限定せられるが、又如何に氣位を低くして如何なる種類の職業たるを問はないといふ心境になつても、悲しいかな體力がない。長い學校生活は學生をして勤勞に離れしめて、肉體的耐久力を喪失せしめてゐる。之は殊に專門學校以上の教育を受けるものにとつて然りである。勿論學校に體操科はある。此體操は筋骨の均齊的發達を計るには大に效果があらう。又軍事教練は、規律、秩序の習慣を養成するに或は貢獻するであらう。又近時旺盛なるスポーツも體育上に資する所は多いであらう。しかし、之等のすべては、肉體上の耐久力を養成するといふ點から見れば、あまり大なる效果があるとも思はれない。かくして肉體上の耐久力を失つた多數の卒業生は到底筋肉勞働に從事することが出來ない。又今日の教育制度の下に於て、專門學校以上の卒業生に筋肉勞働を要求するのは恐らく無理であらうし、國家としても不經濟極まることである。

かくして社會適合性を失つた知識階級が就職難に際會して赴くところは何處であらうか。それは社會に對する反抗不滿の兒となることである。學校卒業生は若き情熱に燃ゆる人々である。長い教育年限を卒業後に期待をかけて勉學し來つた人々、而かも中には其家族が田畑を賣り、家運の全體を賭して學生の教育に全力を集中してゐるといつたのがある。就職難が自暴自棄的不平者を作るのは當然である。若い人々の情熱的なるのは喜ばしいが、不平者流の情熱は破壞的情熱であつて建設的ではない。其結果は如何なる職業の人としても、建設的現實性を缺く一個の反逆兒である。現代に於ては、もとより知識なくして社會の指導者たり得ない。それと同時に現實的感覺を缺いた今の青年知識階級には、今日の老年者を或程度まで排して自ら指導者たる實力も缺けてゐる。社會施設は停滯的であり、世相は暗いといふのは其結果である。繰返していへば、明治以後の我國の社會狀態の變革は目まぐるしき迄に甚しかつた。此急激なる變轉に際して新舊思想の懸

隔が甚しくなるのは當然である。敢て今日に限らず明治初年に於ても封建思想と、資本主義思想とが爭つた、しかし社會が幸に犠牲多き急激なる變化を迎らずして今日迄推移したのは、比較的年少の人々が、有力なる地位を握つて時として民間の知識階級より進歩した施設をなしたからであらう。しかし今日の知識階級の如く現實的感覺を缺いて、社會の指導者たることは望み難いであらう。かくいふ私自らは明治以後の教育制度の産物であり、此實際的感覺を缺く知識階級の一人、否其典型的なるものであるかも知れないが、今の知識階級は餘りにも理屈倒れであつて、現實性を缺いてゐると思ふ。

四　英雄主義教育の破綻

今の知識階級が理論倒れになつて實行性を缺く他の一原因は英雄主義の教育である。小學校の讀本を見ても木下藤吉郎秀吉が隨所に活躍して、偉くなれといふ事を子供の時から教へられる。此「偉くなれ」にも何が偉いかは子供には明瞭にわからない。唯世間で偉いといつてる人のやうになれといふ結果になる。そこで多くの子供は陸軍大將、内閣總理大臣、何々總裁といつた、人を統御する人々を夢みる。社會に統御者も必要であらうが、多數は統御される人である。否統御し統御される人々が多數である。否統御する統御されるといふよりも、相互が社會に於て與へられた職務を忠實に分擔するのが全體社會にとつて最も望ましいことに相違ない。徒らなる英雄主義は非現實的であり、人をして一政黨に入つては總裁たることのみが有意義と思はしめ、會社に入つては社長たるを唯一の望みとするを多くし、社會の隨所に爭をたゝすして、伸びんとする力を芽生に於て枯らす例が少くはない。もとより人に擢んでんとする心持、衆に秀れたる人たらんとする意思は何人も之を持つてゐるであらう。しかし此當然人間が或程度まで持つ英雄主義を高調することは、其不成功より社會人の不滿反抗心を强める結果を招いてゐる。何が英雄であるかも隨分問題であるが、何れにしても英雄は天才である

か、運命の所産であらう。教育によつて英雄が造れるものではない。

英雄たる天分を持たざる一般人に英雄主義を說く結果は、自らにして、所謂英雄を模倣せんとする、模倣英雄たらんとする人々を輩出する。生れながらにして英雄たり得る素質を持たないものの努力は、模倣に向ふより外に道はない。玆に於てか英雄主義非現實主義の教育と模倣主義とは不可分の關係に立ち、各自が與へられたる職業に於て、創意を働かしめて、創造をなすといふよりは、只管模倣を事とする弊害を生ずるのである。外國の制度を一概に貶するのはもとより頑迷固陋に相違ないが、異國の制度を一も二もなく禮讃して、一の制度の改革に於ても外國の立法例を參照するより外に能なしといふのは、あまりにも、外國を英雄として崇拜する英雄主義であり、模倣主義的である。或學說が急に禮讃せられ、又衰へて行くなどは遺憾なく此英雄主義を表はしてゐるものである。冷靜に各學說を見れば、何れも長所短所を有し、要は程度上の差に過ぎないのを、一學說のみを一圖に謳歌禮讃するなども英雄主義に外ならない。之がどれだけ、人々の視野を狹くして、非現實的ならしめつゝあるか計り知るべからざるものがあらう。

要するに現代世相はあまりにも暗い。之を動かして潑剌たる明るい世の中にするには何といつても、青年知識階級の力に俟たなければならないであらう。之をなすべく現時の青年知識階級は、あまりにも非現實的、乃至觀賞的である。之を改めんがためには今日の教育に對する世人の見解を根本的に一新すると同時に、教育制度に對して一大刷新を加へることが急務である。先づ小學校教育の內容を實際化し、出來得べくんば、學校に小工場農園等を附屬せしめて實際的勤務を習得せしめ、教師の人選に於ても、事柄の性質によつて實際生活に於て職業に從事する人をして教師たらしめる、例へば醫師をして生理衞生の教師たらしめるが如きことが必要である。簡單なる机の修繕、運動場の修築等は上級學生をして自ら行はしめる等勤勞を重んじ技術と離れざる教育を施すべきであらう。此事は必ずしも實行不可能の論ではなく、要は社會

多數の人々の氣持の問題であり佛蘭西巴里市に於て或程度まで實行してゐるとの事である。中學專門學校以上に就ても同樣の趣旨によつて學校教育と實際生活とを緊密ならしめる方策を考究しなければならない。教育制度改善の具體的方策については、廣く社會の實生活に於ける各種の職業に從事する人々の意見を參酌して之を決すべきであつて、所謂教育專門家にのみ之を委ねることは最も危險であると思ふ。

佛人エリオー氏は教育制度は社會事情の推移に應じて定期的に變更すべきを主張してゐる。我國は明治維新以來、新に資本主義文明を採用したのであるから、明治時代に於て、此新制度の法制的知識を普及し、法律運用のエキスパートを養成し、行政官たるに適する教育を施すに鋭意したのは、當時としては該切なる試みであつたらう。殊に治外法權の撤廢を急務とした時世に於て法律萬能も必ずしも咎むべき事ではなかつたかも知れない。今や時世の推移に應じ、我國は世界の經濟場裡に處し、人口食糧問題の解決のために、技術の發達經營能力の增進を企圖しなければならない。單に此點のみから見ても教育制度の刷新は何を措いても行はなければならないところである。

もとより今日の世相は單に教育制度の刷新のみによつて改善し得べきものではなく、失業勞働者の救濟、小作人耕作權の確立、團體契約の容認等幾多の社會施設を急務とするが、之が實現のためにも教育制度刷新を要望するものである。

強盗は説教する

長谷川如是閑

Y　説教強盗についてのあなたの感想は？　最も痛切に感じてゐる點は？

Z　最も痛切に感じてゐる點は、此近所へは入つて貰ひたくない、といふことです、とかく近所に事勿れですからね。

Y　然し社會に於けるあゝいふものゝ存在に對しては？

Z　大分話が大きいが、一言以てこれをいへば『困つたものですね。』

Y　あんまり簡單ですな。説教をする強盗なんて西洋にもあつたでせうか？

Z　西洋に？　説教をする強盗もないことはあるまいが、説教を聽く強盗は確かにありましたね。

Y　説教をきく強盗？　何處にありました？

Z　ロンドンにです。昔のことですが、一八八二年の十二月一日にダルストンといふ町でコールといふ巡査を射殺したオーロックといふ強盗です。こいつはその町の教會のバイブル・クラッスに規則正しく出席してゐたもので、その教會に殘した帽子と鑿とから足がついて二年後に捉まりましたが、ロンドンの巡査がピストルと呼笛を持たせられるやうになつたのは、此男の所刑された年からだ相です。

Y　商賣道具をもつて教會に出入するのはひどい奴ですな。

Z　その自分の教會に盗みに入つたのです。さうして巡査をピストルで打つて自分の帽子と鑿を殘して逃げたのです。

Y　そいつは問題にならない。もう少し悧巧な奴は？

Z　最も悧巧なのは、リツトンが小説の主人公にした有名なユージン・エーラムでせう。エーラムは他人と共謀して金持の靴屋を殺して大金を奪つたのですが、これは非常な言語學者

ギリシヤ、ラテンを始め、フランス語、アラビヤ語、ケルト語等に通じ、比較言語學字典を作ることを企てゝゐた位で、ケルト語と他のインド・ヨーロッパ語との比較研究で業蹟を殘してゐるといふことです。リツトンの『エーラム』は菅原抱一庵が氣の狂ふ少し前に、翻譯しかけて少しばかり朝日新聞だつたかに連載してゐました。

Y　エーラムはあんまり素ら過ぎますな。

Z　學者ではないが、組織的の能力をもつてゐたのはフィールデインクのミスター・ジョナサン・ワイルドの主人公でせうな。此奴は大盜賊團を組織してゐたが、本來は有名な贓品買ひで、一七一七年のイギリス議會で出來た、贓品買ひを十四年の懲役に處するといふ法律は、此男を目標として出來たものだ相です。然しこいつは、强盜の贓品を被害者に買ひ戻させてその金を仲間で分配したので、强盜を犯人としない方法をとつたから、一七二五年までは何うしてもその法律に引つかゝらなかつた相です。此男は裁判の時に陪審官に、自分の手下の名簿を出したが、それに擧げた人數だけでも强盜三十五人、竊盜二十二人、前科者十人といふ數でした。こいつは自分が盜賊の親分の癖に――といふよりは、親分だつたので、盜賊を捉へるのが名人で、監獄にゐても盛に盜賊捕縛法を研究してゐた相です。

Y　盜賊行政のあらゆる意味の專門家ですな。

Z　エチ・ビー・アービングが『フランスの犯罪者』の中に書いてゐるラスネールといふのは、有名な殺人詩人ですが、この男は、詐欺、竊盜、强盜、殺人といふ順序を追つて、盜賊教育の正科を踏んで行つたのです。……

Y　然し、どれも說教はしませんな。……强盜が說教をするなんて、變な時節になつたものですな。

Z　然し、强盜の說教は、今初まつたことではありません。

Y　でも貴下のあげた例にはないぢやありませんか？

Z　もつとずつと古い所です。

Y　いつ頃の强盜です？

Z　約三千年前ですな。

Y　大分古いが、その頃既に說教强盜がありました？

Z　さうです、しかも素いものを捉へて、說教する强盜です。

Y　誰れに說教しました。

Z　孔子に說教しました。

Y　孔子に說教する强盜？　何んだ盜跖のことですか？

Z　さうです、あれは世界最初の、さうして世界第一の說教强盜でせう。

Y　盗跖はその兄のいふ所によると『心は涌泉の如く、心は飄風の如く、强は以て敵を拒ぐに足り、辯は以て非を飾るに足り、其心に順へば則ち喜び、その心に逆へば則ち怒る』とあるがこれぢやこの頃の政治家などとちつとも變つた人間ぢやないぢやありませんか？

Z　だから、彼れ自身も、決して人間を外づれた人間だとはいつてゐません。

Y　孔子に應對する時に人間の肝を膾にしたのを喰つてゐたのはひどい。

Z　普通の人間だつて支那人は腹が立つた時には『其肉を喰はずんば已まず』などといふぢやないですか？

Y　腹を立てないでも喰ふ所が盗跖の盗跖たる所以でせうかね。

Z　孔子が盗跖に面會を求めた時に『盗跖之を聞いて大に怒り、目は明星の如く、髪上りて冠を指す』とあるから、大に腹を立てゝゐたのです。『魯の國の大嘘吐きの孔子とは貴樣の事か』と怒鳴つてゐます。『爾ぢ言を作り語を造り、妄りに文武を稱し、枝木の冠を冠り、死牛の皮を帶び、多辭謬説し、耕さずして食ひ、織らずして衣、脣を搖かし舌を鼓して擅に是非を生じ、以て天下の主を迷はし、天下の學士をして其本に反らずして妄りに孝弟を作して封侯富貴を僥倖するは、子の罪、大に極めて重し。』はやく逃げ歸らないと貴樣の肝を膾にして晝飯の菜にするぞと怒鳴つたでせう。

Y　説教にしては少し荒つぽいですね。

Z　盗跖の説教は、國家制度に對する『自然狀態』の主張で、無論人類學の知識の乏しい時代だから極めて漠然たるものではあつたが、比較的に科學的意識を潜在せしめてゐたといへるでせう。國家制度の恒久性といふことについては今では議論もありますが、近代科學の發達する以前には、誰れも決してそれを問題としなかつたものです。然るに盗跖はそれを問題としたのです。孔子が盗跖に、足下は、肉體の美と、天地萬物に對する知識と、軍國的勇氣との、上中下三段の徳を兼備てゐる、そのうちの一徳でも大名の値打は充分あるのだから强盗なんかしてゐるよりも、一城の主たる諸侯となつて天下を治め、兵亂を平定して先祖を祭らばこれ聖人方士の行にして天下も亦それを願つてゐるといふと、盗跖、更めて怒り直して『やい孔丘、もつと前へ出て來い、ちやらんぱらんの空世辭なんか列べるな。俺の立派なのは親共の故で俺の知つたことぢやねへが、手前に賞められなくつたつてちやんと知つてゐら。一城の主になれなんて、飛んでもねへことを吐かしやがる、城の一番大き

いのは天下だらう、その天下をとつた堯舜を見ろ、子孫は何うしてゐる、錐で突いたほどの土地も持ちこらへてゐねへぢやねへか。湯武だつて何うだ、何處に何が殘つてゐる？それといふのも、あんまり大慾を渇いたからだ。』といつてゐます。

Y　强盗の啖呵が中々巧いですね。多少覺えがありさうだね。

Z　冗談いつてはいけない。が盗跖はさういつて軍國々家形態を否定してから、國家以前の『自然狀態』を說いてゐます、『吾れ之を聞けり、古者、禽獸多くして人民少し、是に於て民巣居して之を避け、晝には橡栗を拾ひ暮には木上に棲む、故に之を命じて有巣民といふ、古者、民、衣服を知らず、夏多く薪を積んで、冬は則ち之を煬く、故に之を命じて知生之民といふ。神農の世……民その母を知つて其父を知らず、麋鹿と共に處り、耕して食ひ織て衣る。相害ふの心なし』云々といつてゐるのは、『自然狀態』は平和だつたといふヨーロッパの近代思想と同じです。支那では三千年も前に近代思想が發達してゐます。樹上生活說、母系社會說等は最近の人類學者の說いてゐる所です。

Y　それはヨーロッパが近代思想は航海の發達のために世界各地の野蠻人の狀態を知つたことに因つてゐるのですが、支那では、逆に古代社會狀態が傳說して殘つてゐたのに原因したらでせうな。

Z　つまり古代的の軍國々家が近代的の商業國家に移る過程としてルッソオ式『自然狀態』の社會思想が發生した譯ですが、支那では、軍國々家に對する農民社會の平和的な原始的生活組織の獨立性が比較的に保存されてゐたので、頭の上の國家思想に對して、常にかういふ、國家以前の原始狀態の思想が保存されてゐたのでせう。然しこの思想は、ヨーロッパの近代に於ては、軍國々家の衰退に代る商業國家の發達に伴つて新國家思想にまで發展したが、支那の『自然狀態』の思想は、農民社會が依然として、原始的生活組織以上に發展しなかつたので、此の思想も三千年來の原形のまゝで今日まで少しも進化しないのです。然し今日の支那革命が近代國家革命に固定してしまはうとするのを、共產革命の方向に轉ぜしめやうとする力が常に働いてゐるといふのは、この原始思想の保存が重大な動因をなしてゐるやうです。『自然狀態』の思想は近代國家思想には違ひないが、然し、近代國家も、產業組織の進化が、平和的商業國家を封建的軍國々家に逆轉させたので、最早、この近代初期の思想は、今日の近代國家とは一致しなくなりました。『自然狀態』の觀念はそこで、今の近代國家にとつては危險なものとなりまし

た。だから五十年前に急激に勃興した人類學的社會研究は、今日では極端に壓迫され、どこの大學でも、人類學といへば、古い掘出物の詮索で、考古學に毛の生へたものになつてしまつたのです。

Y　強盗の話が飛んだ所へ脱線してしまひましたな。

Z　所が、盗跖も考へてゐた通り、それが強盗に大關係のある話なのです。

Y　どういふ關係があるのです？

Z　御承知の通り十七八世紀には、地中海、大西洋を始め、その頃の世界的交通路に當る海上は、あのバッカニアーと稱する海賊が盛に横行して、海上の安全などはとても思ひもよらない狀態でした。

Y　それが今日の強盗とどういふ關係があるのです？

Z　まあお待ちなさい。この十七八世紀の海賊は、無論、世界的交通が開けて、西印度、東印度、南洋極東の各方面に盛に商船が往來するのを途中で襲撃するといふ組織で、一攫千金以上の仕事ですが、當時に於ては、此の組織は敢て海賊だけの組織ではありませんでした。

Y　海賊だけでないといふと？

Z　國家そのものの公けの組織でした。

Y　まさか！

Z　お覧なさい。今日の國際法でも、海上に於ては、交戰國はあらゆる海上の船を臨檢してそれが禁制品を積んでゐたらば沒收が出來、それが敵國民に屬する船なら、丸ごと沒收が出來るといふことになつてゐませう。だから十七八世紀には、ヨローパ本國は、所謂三十年戰爭の最中で、歐洲大陸全部が、丁度先達までの支那大陸のやうな混亂狀態でしたが、その各交戰國の船が海上を往來してゐたのです。だから各國政府から見ると、自國船の外は、皆捕獲掠奪の自由があつたのです。ヨローッパ各國は、その國の軍艦をもつて、又商船を武裝して、海上の掠奪を公けに行つたものです。それが非常に甘い商賣であることを見てとつた海上生活者は、この國家的行動を、皆『私立』で行ふに至つたのです。これが所謂バッカニアーの旺盛を極めた所以です。つまり、上の好む所下これより甚しくはなしといふ奴です。

Y　まさか！

Z　又『まさか』ですか。こんなことは歴史の教科書を見てもわかることです。スペインがその頃一番横行したものですが、十八世紀の始めにウトレヒトの平和條約で、歐洲各國が、戰爭をやめることになつたので、海上の掠奪も國家として公けに

は出來なくなつた害だが、それでも未開地に對して海賊的掠奪をやることはちつとも變りはないわけで、その點は私立の海賊のバッカニアーよりも國家の方が遙か評判が悪かつたのです。スペインなどは、ウトレヒト平和條約後には、ヨーロッパ大陸で戰爭がともかくも已まつたので、貴族共が陸上の掠奪が出來なくなつて貧乏してゐるので、そいつらを西印度諸島の植民地に送つて、それ〲そこらの總督にして、これに軍艦を率ゐさせて、密貿易や海賊を取締るといふ口實の下に、スペインの領地を去る十五哩以内の海上に入つて來る船は、悉く沒收して差支なしといふことにしたのです。ところが當時の貿易地であつたジャヌイカに行くには何うしてもそこを通らねばならないので、各國の船は、皆此のスペインの繩張内に入つて總督等の軍艦に掠奪されてしまつたのです。貨物を洗ひさらひ取り上げると、そのまゝ船を追ひ歸すが、抵抗すれば人間諸共燒打です。幸ひ追ひ歸されたものも裸船で何うにもならないから、早速海賊に早變りするのです。で當時の西印度方面は全く海賊の巣になつてしまひました。一體、何方が悪いと思ひます？　海賊が悪いか、國家が悪いか？

Y　然し、それが何か說教强盜の話に關係があるのですか？

Z　解りませんか？　そんなことぢや話すだけ無駄ですから海賊の件はもうやめませう、がこのやうな國家的海賊が何うして近年に至つて全く跡を絕つたのだと思ひます？

Y　各國が改心したのでせう。

Z　なるほど各國は改心しました。オランダの如きは、しまひには、極東へ行く商船に向つて、武力を用ゐてはならないといふ法律を出しました。陸上の話ですが、印度で掠奪的の政治をやつたクライヴやヘスティングはイギリス本國の議會で問責されて慘めな死に方をしました。『私立』遠征をしたが比較的海賊行爲をやらずに、でも結局ボルネオをイギリスのものにしたアダチス・ブルックもその行爲で罰せられました。後悔しなかつたスペインは、海賊掩護艦隊のアルマダを全滅させられました。然しそれは各國が近代の商業組織による方が中世的掠奪によるよりも國家的に有利であるからその方に、即ち近代的貿易組織による國家經濟にその立國の基礎を置くことになつたからですつまり細く長い商賣の方が太く短い商賣よりも結局利得であるといふことからです。けれどもとにかく國家秩序そのものが平和的商業組織の上に立脚するといふことになつたのです。即ち國家秩序の性質が平和的に變ると、社會の秩序破壞も

暴力的のものは壓迫されます。それは、社會的發達の結果で何も國家そのものが改心した譯ではありませんが、つまり平和的商業社會の組織が國家を征服したのです。所が二十世紀に至つてこの商業國家が亦もや無暗と戰爭を初め、つひに世界戰爭といふ最大級の戰爭を始めたのはどういふ譯ですか?

Y　それよりも强盜の方を一つ……

Z　では飛ばしますが……それは結局、商業そのものゝ組織が封建化し、武力化したわけですが、それは近代國家が新しい商業の相手とした新天地と諸强國との關係が始めの平和的交易に代る政治的强制の關係となつたからです。

Y　まだ大分廻りぐどいやうですね。

Z　では一足飛びに……今日の反動國家はその產物ですが、そこで話が海賊時代に戾つて、國家自身が海賊をやつた時代には海上に海賊が橫行し……

Y　もう海賊の話は結構ですから結論を……。

Z　この結論は、私がつけるのではなく、國家がつけるのですが、そこまで行かない手前の所でいへば、國家的統制が中心をなしてゐる社會の構成に於ては、國家的秩序の性質が、一般社會に反映することは驚くべきものです。國家そのものゝ秩序が武力的秩序である社會に於ては、元來、決して武力的でない一般社會の秩序も武力的となります。支那では警察官が軍隊同樣、劍つき鐵砲の行列で市中を巡回してゐなければならないのはその道理です。中世のギルド商人や支那の商務總會が軍隊をもつてゐたのも、頭の上に暴力的軍國々家があたつからです。昔の武士の家では、夫が妻を、父が子を、斬つて棄てるといふやうな方法で家族的秩序——最も平和的であるべき筈の——を維持せねばならぬといふやうなことになつてゐたのは、畢竟その社會が、武力的國家組織の統制によつてゐたからです。

Y　それが說教强盜と何ういふ……?

Z　ですから國家秩序がさういふ風だと、秩序破壞も亦それに伴つて、その破壞方法がそれに似た形になります。ですから、中世紀に於ける盜賊は、その頃の國家を組織してゐた武士の敵國に於ける『切取り』とちつつとも變つた方法ではなく海賊はその頃の國家の遣り方と全く同じでした。そこで强盜は武士に編成され、武士は失職すれば强盜になつたのです。支那の土匪は何時でも正規兵に編成換をされます。バッカニアーも、往々國家の海軍々人に編入されました。日本の中世でも、海賊は『海の侍』といはれてゐました。武士と少しも違つた性質の

ものでなかつたといふことなのです。幕府時代の犯罪團體間の闘爭を描いた『神稻水滸傳』なんてものは、本家の水滸傳以上で、ちつとも封建國家間の歴史と變つた性質のものではありません。

Y　で說教强盜は？

Z　ですから、說教する强盜の出るといふことは、何か國家秩序の方面もそれに似た現象即ち「暴力と說教との結合」といふやうな現象が行はれてゐるのではないかといふことを想はせるのです。無論、これはたゞ過去の歴史による推論だから、今現に確かにそれがあるか何うか知りません。それは全く歴史の論理で　ある社會現象と他の社會現象との間の必然の關係といふことから推論するだけで、現にそれがあるといふ譯では……

Y　さう言ひ譯をしないでも……

Z　いや云ひわけではありません、私は現象間の關係を歴史的に說明してゐるので、現在の社會的現實を說明してゐるのではありません。それは全く推論で、今現にそれが……

Y　もう解りました。でそれはそれとして、この現象に對する社會的對策といふやうなものは？

Z　ですから私のは理論ですから、やはり理論的に考へるのですが、さういふ現象は、それと必然の關係のある現象の變化と相待つべきもので、バツカニアーの無くなるためには、近代初期の海賊國家の無くなることが必要條件であつたやうなものです。つまり秩序破壞のある方法のよつて起る原因を處理せねばなりますまい。

Y　盜跖の思想によるですか？

Z　いや盜跖の思想は、國家の長久を得さる所以は『自然狀態』を壓迫するからで、自然の生活衝動を極端に解放するのが國家的恒久性をもち來す道だといふのですが、これはヨーロッパの十八世式思想で、自由國家の發生當時にはあてはまつてゐるがそれを卒業してしまつた今日の國家には適用は困難です。

Y　そんな根本的の理屈は別にして、……現にあゝいふ强盜のことを新聞などが無暗と書き立てるのは何うでせうか？

Z　あれは全く困つたものです。新聞は社會の反映だから、問題は問題としてなるべく大々的に取扱ふのが當然ですが、あんなに騷ぐのは新聞的要求以外のいろ〳〵の動機が含まれてゐるでせう。第一に警察が自分の働いてゐるといふことを示すためといふやうな動機もありませう、新聞記者自身が功名を競ふ點もありませう。然し新聞としては、もつと落ちついて居る方

がいゝでせう。社會は單純な興味から新聞を求めてゐるのではありませんから。

Y　あゝいふことが犯罪の誘惑になるでせうな？

Z　それはなります。犯罪の研究家は暴力的の犯人は、それが有名になるといふことを非常に重大な動機としてゐるといふことを指摘してゐます。これは『功名』といふことが、昔の武士や今日の一般使用人や個人的英雄主義者やの重な生活動機になつてゐるのと同じです。その上に新聞に出るといふ事實は、犯罪的衝動をもつたものに、方法上のヒントを與へます。新聞の切拔を懷にしてゐたものもあつた相ですが、新聞による暗示に基いた方法をとつた犯罪事實は、專門の研究家が無數に列擧してゐます。

Y　然し一方からいふと支那やアメリカでは珍らしくもないやうな犯罪を大々的に書き立てるといふことは、日本の社會が案外秩序的だといふ證據ではないですか？

Z　さうです、支那や西洋の家屋の城廓式なのとは全く違つて、日本の在來の家屋の構造の解放的なのを見ても日本の社會秩序の性質が甚だ平和的であることを想はせます。だから、さういふ社會で、支那式、西洋式の所謂バンデイツト的の盜賊が出るのは、そこに日本の一般社會に固有の社會秩序とは別な、それに反するやうな統制組織の傾向の存することを思はせるのです。支那の土匪は、支那固有の農村社會の秩序とは別な、支那の國家秩序の故ですが、それと同じ理屈で……

Y　然し日本でも、維新當時のやうに押込强盜の横行したこともあつたぢやないですか？

Z　だからその時は、國家秩序そのものが暴力的になつてゐた時です。秩序破壞の方法は、秩序維持の方法と必然の關係に於て……

Y　其話が『理論』に逆戻りし相だからブレーキをかけますが……青年團が自警團のやうなものを作るといふは何うでせう。

Z　これは、今までゝも、夜廻り火の番の類はあるし方法さへよければちつとも差支へないことでせうが、さういふ方法は組織的には發達させない方がいゝでせう。それはやはり社會統制と暴力とを結びつける一つの連鎖になります。都市町村の秩序を維持する警察といふ組織も、出來るだけ武力的でないことが本來で、都市の警官にサーベルを下げさせないのが、一層進歩した遣り方と見られてゐるのは此の理由です。然し今日で

は多少の武力を要する實狀ですから已むを得ないが、秩序維持が國家に任かせられる國では、町村の人々は、さういふ武力的統制からは全く超然として、それは專門家に任かせるとした方がいゝのです。徵兵制度なども、一方で軍國階級が沒落したのに、國家はなほ武力を必要とする矛盾狀態なので、已むを得ず起つた制度ですが、ある意味では、徵兵制度はあの世界戰爭の準行備爲だつたと見られます。戰爭專門の武士が戰ふ時代が過ぎて、平民の戰ふ時が來たといふのであの制度は出來たのです。決して改善ではありません。ネセサリー・イヴィル即ち必要惡です。かういふ惡い必要があるから國家教育などもこのイヴイル・ネセサリーに從つて、武勇、健剛、任俠、濶達の氣象を養成せねばならぬことゝなります。

Y　劍劇の流行も、平民の戰ふ時代の特徵ですかね？

Z　無論ですが、昨年文部省で出した中等教育改善案の根本原理とかいふ『要旨』なるものにも『生徒の身體を强健ならしめると共に精神を鍛錬し、かつ濶達の氣風を養はんことを期す』といふ劍劇のビラにあるやうな文句が歷然と示されてあります。

Y　でもこの頃桃太郎の鬼が島征伐の童話は教科書から削る相ですな。

Z『此頃』では既に遲しです。あれは全くバツカニアーの思想で、アルマダ艦隊以前の國家思想です。私はあれが教科書に出てゐることを日本の國家思想の遲れてゐる理由として、よく話をして來たのですが、では有力な材料が一つ減つて少し困りましたな。

Y　まだほかにも澤山あるからその邊の御心配は無用だが、……どうもいつまで行つても强盜の問題に入りさうもないから此邊で失禮しませう。

Z　では左樣なら。

（終）

利權政治と大衆行動

中澤辨次郎

一、利權政治崩壞過程の一斷層

昭和四年の春未だ淺い一月八日の夜半、突然——主觀的には決して突然ではない——天下の耳目を聳動した大騷擾事件が岐阜縣下の一角に起つた。之れより先き舊臘十二月十四日には宮崎縣に於いて學校移轉問題を中心とする反對運動が激化して消防隊の活動となり、縣廳舍並に其の他關係官舍に對し不時の放水作業を行ひ、文字通りに縣當局の心膽を寒からしめた。近來頻々として起る民衆運動の激化、地方當局の處置に對する糾彈的直接行動、ソレは果して何を意味する？

殊に岐阜の犀川騷擾に於いては六百の警官尙ほ力及ばずとして此の種の民衆運動に對しては曾つて前例のない——大正七年の米騷動以外には——軍隊の出動を要請するに到り、之れが爲め事件は彌が上に過大に傳へられて全國的に異常なるセンセーションを捲き起した。何故に斯かる騷擾事件が立て續けに突發するか。之れに答ふる答へは簡單で宜しい。凄まじい反動政治——利權政治——の嵐の只中に挫がれ切つた民衆が、最後の腰を切つて權力に刃向ひ、利權政治打破の意識を行動に移した迄である。ブルヂョア政黨の利權行動が國家の部分機能を通じて僅かに合法性を獲得して民衆に臨む時、利害相容れない民衆の反對行動と鋭く對立する。コレが宮崎事件となり岐阜の犀川事件となる。——而も斯うした騷擾事件の直後には、合法機關に足場を持たない民衆が何時でも不利の立場に置かれ、不當にも大袈裟なる檢擧沙汰が爲される。社會は之れに對し官權の彈壓政策と人權蹂躪の非難を浴びせるに止まつて、ソレ以上の處置は、同じブル政黨の陣笠が議會に於ける八百長的彈劾演說に終

飲を下げる位が關の山である。——不急なる學校移轉計畫を立てた場合、ソレに合法性を與へる爲に縣會が形式的に利用されて利權政治の原則に基く一定のトリックが進む。其の裏面に仕組まれて居るものは土地關係の利權であり、請負關係の利權であり、選擧地盤關係の利權涵養である。河川改修を表面の立て前として居る土木行政に於いて特に此の弊が強い。岐阜の犀川切り落し事件は利權政治の代表的形態である。河川改修の名の下に地元關係者全體の生活の根據を培ふ計畫であることを一般的に承認せしめて置き、其の虚に乘じて地元關係者二分の一に對し——即ち上流に對する下流關係者——「寢耳に水」の迅速なる具體的計畫を立てゝ終つて、抽象的説明の下に一擧に縣の形式的合法機關を通過させて置き、イザ計畫を行動に移さんとするに到り、初めて具體案を一般化す。之れが利權政治に基く行政の一般的戰術である。一切が形式的にでも合法性を獲得して居る場合、之れに反對する行動は、現在の政治機構に於いては非合法手段であり、官許されない直接行動として取締りを受ける。よし反對行動に社會的合理性の根據があらうとも、現行支配形式はソレを許さない。此の關係の下に於いて犧牲に供せられるものは、既述したやうに合法機關に對し自己の意志を直接反映する機會を持たない一般大衆である。宮崎縣の學校騷擾に於いて、岐阜縣の犀川騷擾に於いて、檢擧されたる數百の民衆は即ちソレである。

利權政治の進行する所、其處には必ず民衆の實在生活がある。民衆の生活の根據と利權政治の進行とは相容れない。だからこそ利權政治と民衆生活とは必然に衝突する。第二の宮崎事件、第三の犀川事件は今後ともブルヂョア政治の展開する限り、其の跡を絶たぬであらう。而して此の衝突が隨所に勃發してブルジョア政治の進行を阻害するとき、利權政治は行詰つて崩壊過程を辿る。宮崎及び岐阜に起つた未組織民衆の一時的ではあるが頑強なる反對行動は、利權政治と民衆生活とが相容れない存在であることを全民衆にアヂテートした事件であつた。斯う見るとき、すさまじい反動政治の嵐の中にある全民衆の將來に對し一條の光明を點じた。險惡なる社會層の一斷面に於ける民衆政治確立への社會現象として見ることが出來る。

二、利權政治と民衆生活の衝突

資本主義的政治社會に於いては利權を中心として一切の行動が決定される。利權獲得の前に民衆生活は問題視されない。政權の授受關係でさへ利權系統に依つて決定され若くは利權の支持關係に依つて一定の方向に動く。たゞ斯うした露骨の利權をカ

ムフラーヂする爲に、政治と民衆生活との關係が既成政治學の中に添物されて居る。「政治は生活そのものである。民衆の生活を除いて政治はない。政治の要諦は民衆生活の安定を期するにある」これが既成政客をソードする骨董理論であり、民衆の激怒を逃避する緊急避難の詭辯である。果して言ふが如く政治の要諦が民衆生活の安定を期するにあるならば、民衆生活の安定を脅威する一切の利權政治は排撃されねばならない。彼の三百萬圓事件、台銀並に鈴木商店救濟事件、震災手形處理事件、降つては彼の有名なる松島事件、板舟權事件、長野事件、宮崎事件、犀川事件等々は各々起らずもがなであつた。だが支配政治＝利權政治の實際は然かし民衆の生活に對し關心を置いて居るものではない。ブルヂョア政治機構内に於ける民衆の存在は、單なる支配關係の對象であり、被搾取關係に置く可き對象であるに過ぎない。其の他に重要存在の意義を認めるとするならば、ソレは亦恐ろしく効利的見解が取られて居る。國民の正しき總意を反映せしむると云ふ形式の下に於いて、巧妙なる選擧關係と買收政策と交々併用する總選擧の下に、乏しい餌食に依つて釣り出し得る投票者としての存在以外の何者でもない。利權政治の下に於いて既成政治家に認定される民衆の存在は此の意味に依いて認められて居ればこそ、民衆の生活よりも利權の獲得が先きになり、民衆本位の政治が考へられるよりも、金權本位の專制政治が專賣特許される。金權政治と利權政治の嵐の吹き捲く所、其處には全民衆に約束付けられて居る生活の貧窮化と階級的對立關係と、團結意識の芽生えと丈けが餘されて居る。金權政治と利權政治と合力するとき、中樞機能の活動は民衆の一般意識を社會政策に依つて睡眠狀態に送り込むから、單に大藏省の預金部や植民地に於ける金權專制が非難の焦點に位置する位いのものである。然し乍ら其の尖端が民衆の社會生活の中に鋒尖きを現はしたときには、明確に民衆の社會生活と對立關係を發生し、忽ちにして險惡なる社會層を現はす。台銀救濟に絡る震災手形處理事件や、宮崎事件並に犀川事件等はその一例である。

三、政權、利權の交互作用と其の取引市場

言ふ迄もなく資本主義的政治形態の下に於いては、政權の獲得が利權の獲得を意味し、同時に利權の獲得は軈て政權の獲得を意味する。言葉を換へて言へば、政權の獲得なしに、利權の獲得はなく、利權の獲得なしに政權の獲得はあり得ない。だからこそ一國の宰相は財閥の支持關係なしに永く政權の維持は困難であり、或は亦反對に所屬陣笠の生活關係にまで經濟的交渉を持つてこそ長く政權の支持關係を濃厚にすることが出來

るのである。現に一國の選良に名を借る多くの商品代議士は政權市場と利權市場に交互に陳列され、其の時々の客觀的政治價格に依つて、簡單に身賣相場が決定されて行く。其處には固有の政友會員もなければ固有の民政黨員もない。問題は利權系統別の無機的連結であり、政權系統別の機械的所屬關係である。一言にして言へば利用價値系統別若くは交換價値系統別に依つてその最小抵抗線に添ひ易々諾々として左右何れにもあれ截然として並列するのである。資本の最高命令は斯くて昨日の民政黨員を今日の政友會員ならしめ、今日の政友會員を明日の第三黨に歸屬せしめる。資本の最高命令の前には何んと他愛もない商品政客ではないか。

最近に於ける民政黨の分裂過程、特に床次一派の離合集散狀態、民政脱黨に依る新黨俱樂部の出現、並に憲政一新會の出現過程等に於ける著しき政相の變化は、何れも政權に伴ふ利權の所在を明かにする變轉であり、利權系統の變遷に依る將來の政權推移の過程を暗示して居る。其の並列狀態の何んと云ふ鮮明さだ。磁石に吸引されて行く鐵片の放射線狀的並列よりも更らに美事な商品代議士の隊列變向を其處に見出し得るではないか。政權と利權の混合磁石が田中内閣である。吸引された鐵片は民政黨分裂過程を通過して來た群小陣笠である。現實的には群小幾多の代議士共が「鑵詰め」「鑵切り」の名に於いて白晝公々然と身賣相場が決定され、政治的取引市場の開策が隨所に展開されて民衆の前にその反證を顯示した。——以上は政權に伴ふ中央利權の政治的社會的表現である。だが此の中央利權の甘ま酒に滲たり得ない有象無象は必然に地方利權に向つて鋭意しなければならない。換言すれば中央利權の分け前に與れなかつた商品代議士は地方利權獲得の强い條件付きで地方進出を企圖する。多くの地方利權に伴ふ問題は此の範疇を出でない。政權獲得下にある政黨の公許の下に於いて地方利權獵りがスタートする。そうして目的貫徹の爲に足下を見ない猪突猛進が行はれる時、宮崎事件が起り犀川事件が起る。言ふ迄もなく黨人の地方利權開發と民衆の社會生活とは相容れない利害關係の下に對立するからである。

四、利權政治に對する自治權

地方利權は中央利權の縮圖である。中央利權に一國の政權が懸かつて居るやうに、地方利權に對しては地方政權が跪坐して居る。だからこそ地方利權の獲得は中央利權の獲得に比し規模こそ大きくはないが、同程度否な時に依りてはソレ以上の眞劍味が加はる。のみならず地方利權は中央利權の間接的なるに比

し民衆の社會生活に對し直接の關係に立つ。從つてその利權政治の進行する所、民衆の生活に大なる利害を關係付ける。簡單に言へば中央利權に基く政治の行はるゝ時、民衆の受くる利害は一般的であり漫性的である。それに反し地方利權に基く政治の進行は民衆の受ける利害が部分的ではあるが、急性的である。故に地方利權の被害を受けねばならぬ部分層はその程度が深刻である。民衆の實際生活の上に襲ひ懸かる脅威はより痛切である。斯う考へて見ることに依つてのみ、宮崎市に於ける學校移轉反對運動の激化事情も解れば、犀川騷擾事件に於いて警官隊と正面衝突した民衆の意圖も理解出來るのである。從つて宮崎事件や岐阜の犀川事件を目するに、中央政權の末梢神經である地方廳の行政の尖端が民衆の反對行動と對立したと簡單に解す可きではない。ソレよりも地方利權と地方行政權との合流權力に對し、地元關係民衆が與へられたる自治權を振り翳し、最大限度の對抗手段に出でたものと見る可きが至當である。更らに運動形態の內部的批判を試みるならば黨同伐異關係にある政民兩派の地方利權獲得闘爭の消極的現れであるとも言ひ得る。

元來既成各黨は、其の首領株は權勢維持の自衛策上何れも中央利權の獲得闘爭に奔命し、他の群小陣笠はその類型を地方的地盤の上に延長して極度に地方利權の獲得獵りを繼續して居る。だからこそ地方政治は地方利權を以つて代表されて居る。其の手段を最も露骨に行動に移すものが政友系議員の一團である。試みに犀川事件に其の例を取つて見ても、地元關係民衆が、官權の彈壓下に屈せず滿腔の悲憤を抱き、死を賭しても墳墓の土地を守らんとする固き決心の下に、頑強なる反對運動を繼續して居るにも拘らず、殆んど之れ等の行動は眼中に措かず、遮二無二犀川切り落しの豫定計畫を進行して居るのである。此の計畫を單なる選擧の地盤固めと見るのは輕卒である。地盤固めの目的の外に、上流三千數百町步の土地改良、——縣費と國費の支辨に依つて——が爲され、其の改良の結果齎される直接の經濟的利益は特定土地所有者の經濟關係に於いて獨占される結果を輕視してはならぬ。斯う解してこそ初めて犀川騷擾事件の發生起因が社會的に亦政治的に重大視され可きである。特定土地所有者の利益に於いて、下流七ケ町村民衆全體の生活の根據に動搖を來すとすれば、之れに對し關係民衆の反對行動が眞劍化する、固より必然の歸趨である。況んや當該地方の民衆は古來から頻々たる水災に見舞はれ、極度に水難の辛き經驗を嘗め盡して居る。「水難地獄」の境涯を如何にして切り拔け可きかゞ彼等の脳裡を不斷に去來して居る願望なのである。彼

等が水防に對する自然防衛的手段は、町村を單位とする地域の四周に地域内住民の協力に依つて數丈乃至十數丈の高き大堤防を築き極めて受動的貝殼式水防工事ではあるがそれを以つて纔かに水難の憂ひを逸脱して居る狀態なのである。之れを名付けて輪中と稱し特定の水防組合即ち輪中組合を組織し、他の地域に對し獨立分離社會を形成して居る。萬一事があれば此の地域團體は生死を共に盟ふ固い協力關係の下に共同一致して他に對抗することを辭さないのである。斯うした輪中意識は長い間の訓練に依つて傳統的不文憲法をなして居る。此の歴史を無視して樹てたのが問題の犀川切り落し計畫なのである。地元民衆が生存權獲得の爲に反對行動を起こすに至つた理由は之れで充分了解されることゝ思ふ。

五、中央利權から地方利權へ

利權政治の發展は其の國の資本主義の發展に依存する。資本主義の發展が一定の段階に到達する時、利權政治の發展も停滯する。その實例を示さう。

――資本主義的産業形態の未發達時代には政權に依つて利權を開發し、援助して行く立て前を執つて居た。近代的産業形態の大部分は政府の援助に依存――特に我が國に於いては――して完成して來た。だが産業形態が近代的經濟機構を完成し切ると、逆に利權を以つて政權の壘を摩するに到る。此の時代までに於ける政黨は援助被援助の交互作用に依つて、主として中央利權のみに依つて其の經濟を切り盛りすることが出來る。が資本の形態が更らに高度に達し、同時に政黨の組織が尨大化すると共に、近代的樣相を完整して來ると、兩者の自衛手段から必然に中央的利權のみの供與關係に依存出來なくなる。解り易く言へば中央利權は獵り盡されて漸次其の合法的形態を沒し――非合法的には台銀問題や鈴木商店、川崎造船問題や滿鐵事件等が中央に於いて、合法化の手段を取つて利用されては居る――地方利權の獵り出しへと進出する。大阪に於ける松島事件、東京に於ける板舟權事件、岐阜に於ける犀川事件、宮崎に於ける學校移轉反對事件等は中央利權の地方利權への轉移を示す代表的形態である。殊に此の内の犀川事件並に板舟權事件の如きは、政黨が中央利權から一齊に地方利權の獵り出しへと轉移した、一聯の地方權利中の尖端である。打ち續く不景氣に險惡化された社會層の一斷面に現はれた利權政治の本形である。

六、地方利權の地方的衝突

中央政權に繋がる一聯の地方政權、中央利權は繋がる一聯の

地方利權、斯うした計畫的政治形態に表面利害衝突の起り得やう筈はない。所が實際に於いては利權系統の相違に依つて、地方利權――中央利權もそうであるが特に地方利權に於いては――には衝突が起こる。端的には政友系の利權計畫と民政系の利權計畫とは地方的に劃然として相衝突しその利害が相容れない。民政系の交通利權は自動車計畫であり、政友系の交通利權は鐵道計畫である。亦河川行政に於いて民政が本流の改修計畫を樹てれば、政友は支派川改修を以つて之れに對抗する。折角一方の計畫に依つて自動車道が完成し、本流の改修着手が爲されたと思ふ頃、別の政黨の手に政權が移動すれば、先きの計畫は弊履の如く打ち捨てられて、自動車道に草を生やし、本流に堆き土砂を置き去りにして、別途に鐵道工事が初められ、支派川改修――犀川の如きは支派川改修中の部分工事計畫である――の工事が着手される。利權系統の相違に依る政黨別の地方政策には斯くの如き利權衝突が全國の随所に起つて居る。利權と利權との衝突に依つて災されるものは關係地方民衆である。此の衝突關係を繼續する限り、既成各黨の地方政策は早晩行き詰らざるを得ない。利權政治に累せられた民衆の離反に逢ふは必然である。問題が具體化して犀川事件の如く騷擾にまで導入した時には、政、民何れを問はずその計畫を立て亦は支持した政黨は民心から離反する。

斯くて既成各黨の利權政治は一様に沒落過程を執る。民衆は既に利權政治の惡弊に目醒めて居る。利權政治の進行する所、其處に民衆の生活の安定はない。民衆の生活安定どころか、民衆の生存權さへ否定される。特異の利權の犧牲になつて已が居住の根據である宅地や生命の糧を生産すべき耕地を川敷きに奪はれんとする場合、反抗運動を起こすに到るは自然の理數である。再び言ふ權利政治の進行する所民衆生活に安定はない。民衆の反對運動は隨所に誘發される。中央利權政治の進行する所、其處には民衆自身の個闘運動が起こる。地方權利の進行する所其處には地方民衆の大衆行動がある。利權と利權と相喰む醜爭に對しては民衆の利權排擊運動が起こる。斯くて既成各黨の利權政治は自然に崩壊過程に入る。宮崎事件並に◇川事件は、利權政治の末路を導く第一形錄である。

七、行政權と自治權の對立、生存權獲得運動の諸相

利權政治に反抗する一切の民衆運動は利害關係が餘りにも直接的であるが故に、常に大衆的であり激化し勝ちである。ソレは未組織民衆の運動なると組織大衆の運動たるとを問はず同様で

ある。而して此の種の運動はソレ自身意識的であることを問はず、直接間接何れも利權政治打破の方策を示して居る。此の運動形態に於いて新軌軸を出したものが岐阜の犀川騷擾である。關係七ヶ町村の役場吏員全部は結束して自治權を自己の手に閉鎖して終つた。―形式的には總辭職であるが―次いで監督官廳が選任した職務管掌をアノ暴戾政黨の只中に於いて完全に拒否し了せた。ソウして民衆の手に選任した臨時町村長代理を官許せしめ、自治權の門内には實質的に一歩も行政權を侵入せしめなかつた。犀川事件を中心として自治權と行政權とは正面衝突し、終に自治權は行政權に對立し得た。否ブルジョア政黨の利權政治の尖端であつた行政權の部分層に對し、民權、自治權、並に民衆ソレ自身の生存權擁護運動の何ものであるかを明確に意識せしめた。

　だが問題は後に殘されて居る。自治權の尊嚴は嚴守し得たが、生存權の確保は未だ爲されて居ない。當局の犀川切り落し計畫は依然として當初の如く進行せんとしつゝある。民衆運動が潮の引いた後の如く靜まり返へるのを待つて、所謂『なる可く地元民衆の意に添ふ』プランが立てられ、再び實行に移らんとしつゝある。此の場合輪中意識に基く民衆の特異なる地域的團結意識を縣當局は如何にして軟化せしめて行くであらう。地元關係民衆の合意なき計畫は恐らくは實行困難である。行政權の手前を憚つて暴戾政黨に立脚すれば再び騷擾は繰り返へされざるを得ない。計畫を打ち切れば縣會の決議不履行に終り臨時議會の助成金協贊の精神を無視せざるを得ない。

　現行制度の下に於いて地方利權が合法性を獲得したが、地元關係民衆の合意を得る能はない場合、當然に起こる地方行政上の執行權の惱みである。民衆の總意と云ふ名の下に行はれる憲法政治も形態的にはやゝ完成の域に達して居るが、實質的には幾多の矛盾が介在する。殊に金權に依つて民衆の總意が蔽はれ、利權に依つて憲法政治が惡用される場合、必然に民衆の總意はこの出口を失ふが爲に、堰を切つて奔流しやうとする。民衆の合意を求めざる利權政治に對し、民衆の生存權獲得運動は激化して居る。此の民衆運動の本流の底に潜む意圖を汲むことが出來ないで行政の任に當る者があるとき、社會層は一段の險惡性を帶ぶ。心すべきだ。

就職難と知識階級の高速度的沒落

大宅壯一

昨年東京市社會局で、本所深川方面で働いてゐる自由勞働者約四千人の身許調査をしたところ、その中で知識階級若くは準知識階級と見做すべきものが、次の如き數字を示してゐたといふ。

大學又は專門學校卒業者	一九人
同半途退學者	六五人
中等學校卒業者	三八人
同半途退學者	三九四人
計	五一六人

割合からいふと、僅かに一三%に過ぎない。だが、從來殆どすべて完全なる無學者の群であつた自由勞働者の間に、これだけの知識階級が最近流れ込んで來たといふことは、輕々しく見逃すことの出來ない事實である。

更に、知識階級といふものゝ持つてゐる一般的特性について考へるとき、この數字は戰慄すべき事實を背後に控へてゐることを發見するであらう。

殆どすべての知識階級は、肉體的勞働に對して、本能的ともいふべき恐怖、確かに實質以上の脅威を感じてゐるものである。それは自分の肉體に對する自信がないせいでもあるが、實際はもつと觀念的な原因から來てゐるのである。

知識階級の大部分は、沒落した中產階級であつて、生れながらの「無產者」ではない。彼及び彼の一家は完全に沒落しても、彼はその周圍に、まだ彼ほどは沒落してゐない中流階級若くは上流階級の親族や友人知己を多く控へてゐる。かうした親族や友人知己の存在は、彼にとつては、一方から見れば精神的苦痛への原因であり、他方から見れば肉體的苦痛からの救助者である。

かうした親族や友人知己があるために、彼は絕えずみえをは

らなければならない。「どんなにおちぶれても、一家一族の面汚しになるやうなことは出來ない。」從つて彼は、實質に於ては完全なる無産者でありながら、觀念的には無産者になりきれず、生れながらの無産者が知らない苦痛を甞めさせられてゐるのである。

それ故に彼は、最後の一錢になるまで賣り食ひをしても「決して身をおとすやうなことはしない。」又彼の親族や友人知己の方でも、或る程度までは、彼を「見すてゝはおかない。」そこで彼は「恥を忍んで」それらに寄生しながら「ぶら〳〵してゐる」のである。

だが、さうした生活にも限度がある。一切をすてゝ、一切から見放されて、遂に現實の前に屈服しなければならないときが來る。それでもやはり彼等は、下級事務員、勸誘員、外交員、集金人等々――つまりまだ洋服を着てゐられる程度のところで踏み留るか、或は八方から資本を掻き集めて小賣店を出す位ゐが落ちであつて、それ以下に落ちて行くものは、目下のところまださう多くはあるまい。

しかしながら、前記の社會局の調査に現れた數字は、長い間失業に惱まされた揚句、あらゆる條件から見放され、文字通りにその日の生活に窮して、遂に自由勞働者の群に身を投じ、最も極端な、最も不安な、最も收入の少い肉體勞働に從事してゐる「どん底」の人達であるが、その外に、この域にまで達することの出來ない知識階級の失業者は、若し全國的に、精密に調査することが出來たならば、今や實に恐るべき數に達するであらう

今日では敎育は、「國家樞要の人物を養成する」ことでもなければ、「自己完成のため」でもなく、大抵の場合、資本家になり損ねた中産階級の最後の投資であり、最後の投機である。そしてその投機の失敗率を示すものが、戰慄すべき數字を示すであらうところの知識階級の失業統計である。

先づ彼等の發生過程について考察して見よう。

今年あたり大學を出る人、即ち二十五六才の人達が、この世へ生れて出たのは、丁度日露戰爭頃で、彼等が中等學校に入學したのは、即ち將來知識階級たるべく運命づけられたのは、偶偶歐洲大戰が勃發し、日本の資本主義が最後の飛躍を遂げた時代である。

戰爭に刺戟されて、各産業部門は著しく活氣を呈して來た。知識階級に對する需要は急激に增大した。商船會社の重役であつた時の文部大臣中橋德五郎は、この形勢を黨勢擴張に利用して、恰も戰時に御用船を急造するやうに、大學や專門學校や高等

學校を増設した。

一方では又、戰爭成金が到るところに續出すると共に、成金になり損ねた中流階級――小企業家や、小地主や、小商人達は、大資本に壓迫されると同時に生活費が急激に嵩んで來て、不安な空氣が家庭に漲つて來た。さうかうするうちに又反動が來て、忽ちにして小さな戰爭成金も追々沒落し始めた。

かうした社會情勢の下にあつて、中流階級の家長の頭に、一様に、しみ〴〵と感じられたことは、従來彼等の唯一の據りどころであつた、彼等の祖先傳來の田畑や、家業や、老舗などは、あまり信頼することの出來ないものであるといふ事實である。それと同時に又、僥倖を夢みて慣れない新職業に手を出すことの危險性が痛感されたことはいふまでもない。

そこで何よりも生活の安定を重んじるこの社會層に、期せずして齊しく浮んだのは、「子供に金をかけるのが一番安全だ」といふ考へである。株や土地は暴落する恐れがあり、家作は燒ける恐れがあり、商賣は得意を失ふ恐れがある。だが、自分の血を分けた子供の頭に一度植ゑつけられた「知識」は、その子供が生きてゐる限り、永久に失はれる恐れがない。そればかりか、彼はその「知識」のお蔭で立身出世して、大臣や重役にまでならないとも限らない。

教育へ、學校へ！――これが資本主義の爛熟と反比例して急激に沒落に向ひつゝあつた中産階級のスローガンであつた。（勿論このスローガンが今日尚彼等の間に生命を失つてゐないことは、今でも「入學難」が叫ばれてゐる事實に徴して明らかである。）だが、「知識」の價も社會情勢に支配されるものであつて、時には株や土地と同様に、或はそれ以上に、暴落する恐れのあるものであるといふ事實を、彼等は今日に到つて初めて悟らせられたのである。

中橋文部大臣によつて上級學校が濫造されるまでは、野心に燃える青少年の最大の希望は、高等學校の入學試驗にパスすることであつた。高等學校に入りさへすれば、最高學府は無條件に門戸を開いてくれ、最高學府を出さへすれば社會のあらゆる分野に於て樂々と「人の上に立つ」ことが出來るのであつた。

――吉田山から出て來るとりは
とりはとりでも天下とり
デカンショ、デカンショ

これは今から約十年ばかり前、私がまた京都にゐた頃、當時の學生達が、醉つぱらつて都大路を練り歩きながら、大聲でうたつた唄である。その頃はまだかうした唄を聞いても、それほ**ど不自然には聞えなかつた。**彼等は、自分達の先輩に大臣級の

人物を多く持つてゐるといふ事實からして、自分達も將來、少くとも知事位にはなれるといふ幻想に陶醉することが出來たのだ。

だが、今や全く事情は一變してゐる。今日の大學生の中で、「卒業後どこかの役所か銀行會社に確實に就職することが出來さへすればいゝ」といふこと以上の大それた望みを持つてゐるものが、果してどれだけ數へ得るであらうか。

それでも卒業までどうにかして學資の續くものは幸ひである。だが、近頃の新聞の「よろづ案內欄」を讀んで誰の眼にもつく著しい現象は、「信用貸金」と「家庭教師」の廣告が目立つて增加したことである。殊に最近は、學資の絕えた學生が激增したと見えて、各大學又は專門學校に「共濟部」といふやうなものが出來て、その名によつて彼等の求職廣告が一纏めにして出されるやうになつた。わけても悲慘なのは、次のやうな卑屈な、傷ましい廣告文が多くなつたことがある。

家庭教師被雇度、當方××大學生
中女學初等程度御勉學御相手忠實
獻身的可致御報次第直參上、云々

これを見ると、小學校以來「秀才」とうたはれた中產階級の子弟が、最後の學資（それは同時に彼の一家が中產階級から完全なる無產階級に沒落する段階の最後の一段である）を使ひ果して、しかも尙、この投資——彼の一家一族の全資力を傾倒して一人の有產者をつくり出さんとするこの冒險極まる投機の最後を完了せんがために、僅な報酬を貰つて、資本家の愚息愚娘に向つて、犬の如く從順に、猫の如き媚を呈して「お相手」してゐる悲慘なる經濟史的現實が、まざ／＼とわれ／＼の眼に浮んで來るのである。

だが、かうして苦學を積んで、幸ひ遂に「光榮ある卒業證書」を握つて世に出たとしても、彼等は果してその先輩の如く「身を立て家を起す」ことが出來るであらうか。

元來知識階級には大體二つの種類がある。一つは、ブルヂョア階級の生產的方面に於ける助手であり、他は同じくブルヂョア階級の支配的方面に於ける助手である。いづれも、資本主義的生產組織の發達の初期には、ブルヂョア階級の協力者として有力な役割を演じ、從つて又相當重んじられて來たのである。

だが、今や前記のやうな過程を經て、知識階級は盲目的に濫造され、恐るべき供給過多を現出し、既に最後の段階に近づきつゝある資本主義社會に文字通りに氾濫しつゝあるのである。

彼等はもはやブルヂョア階級の協力者ではなくなつた。これまで生產の繁榮に積極的に資して來たところの科學者や技術家

の地位は、熟練工の一種となり、その支配權をイデオロギー的に建設し保護して來たところの各種の精神勞働者は、「非生產的」な自由勞働者と化した。

前者は今尙資本家にとつて比較的重要であり、容易に補充し難いが故に、かなり優遇されてゐることは事實である。だが、一度失職すれば、再度の就職範圍が著しく限定されてゐるので、却つて悲慘なものであることも事實である。殊に、到るところで事業緊縮や工場閉鎖が行はれてゐる今日、新しい學校卒業者の就職は決して樂ではない。

しかしながら就中最も悲慘なのは、所謂「知識階級」の大多數、即ち千人の知識階級が千人とも持つてゐるやうな同質同量の知識若くは技術しか持つてゐない知識的自由勞働者である。今日の社會で尨大なる知識的產業豫備軍を形成しつゝあるのは、主として彼等である。

最近私の知つてゐる某出版業者が若干名（實は一二名）の編輯部員を公募したところ、殆ど千通に近い履歷書が殺到して來た。

私の知人が、某會社の「英語の素養ある社員募集」の新聞廣告を見て、早速履歷書を送つたところ、十數日を經てそれが返つて來た。見ると皮肉にも、「No. 863」押してあつた。

東京や關西の大新聞の入社試驗には數百人の志望者が押寄せて、採用されるものは僅かに一％位ゐで、全く富籤のやうなものであることは、普く知られてゐるところである。

更に又、二流以下の新聞社にあつては、編輯部記者の初任給三十圓などといふのが珍らしくない。しかもその三十圓すら、十數人の競爭者の中から選ばれた好運者のみにしか與へられないのである。

最近東京でも相當有力な夕刊新聞に勤めてゐる私の友人が、編輯部記者と印刷部職工の收入を調査して、兩者の各平均額を算出した。その正確な數字は今記憶してゐないが、とにかく職工の收入の方が記者に比して遙かに上であつたことは確かな事實である。

昨年職を求めて上京して來て、暫く私の家に寄寓してゐた私立大學出身の私の友人は、幾度か職業紹介所に無駄足を運んだ揚句、遂に一日一圓で市役所の人夫になつたが、郊外から通ふ電車賃と辨當代を除けば、煙草代も殘らないので、とう／＼諦らめて鄕里へ歸り、僅かばかり殘つてゐたものを賣拂つて、今農民運動をしてゐる。

これもやはり私の親しい友人で、大學を出て一年ばかり東京で中學教師をしてゐた男が、その後失職し、食ひつめて到頭新聞配達になつたところ、前に教へた生徒の家へ新聞の押賣に行つてひどい恥をかき、それつきり新聞配達をやめたさうであるが、その後杳として消息がない。

又、私の親戚に東京で圓タクの運轉手をしてゐるものが一人あるが、去年の末から今年にかけて、その男に紹介して欲しいといふ圓タクの運轉手志願者が五人も訪ねて來たのには、さすがの私も驚かされた。しかもその中の一人はフランスの大學に學んだ男であり、他の四人もすべて知識階級である。圓タクの運轉手は、その社會的地位からいつて、以前の俥夫馬丁に過ぎないのであるが、この廣い東京に、失業知識階級を容れる餘地は、この新職業の外には見當らないさうだ。現にその二人は、今私の家から練習に通つてゐるのであるが、やがて彼等が資格を獲得す

る頃には、今日何比較的收容力のあるこの職業分野にも、「滿員」符が揭げられてゐるであらう。

――以上は、私といふ一個人が直接見聞きした數個の實例に過ぎない。しかしこれによつて見ても、今日「知識階級」が如何に急激に沒落しつゝあるか、現代世相が如何に險惡なる方向に急テンポをもつて動きつゝあるかを、大體具體的に想像することが出來るであらう。

かゝる事實が明確に認識され、それに對する徹底的對策が講じられない限り、反動内閣が「思想善導」のために幾百萬の豫算を可決しても、何の役にも立たないことは明らかである。しかし又、今日の支配階級からその「徹底的對策」を望むことも無意義である。何となれば、ブルヂョア社會は既にその存在資格を失つてしまつてゐるからだ。

最近知識階級が擧つて「左傾」するのは、決して「流行にかぶれる」のではなくて、この階級的分解作用によつて彼等が齊しく陷りつゝある生活條件が、彼等を必然的に、集團に、その方向に導きつゝあるのだ。

確かに「知識階級問題は、ブルヂョア社會にあつては、恐怖の種である。メツーゼの頭（髮の代りに蛇を生じ、その眼を見たものは恐怖のために石に化するといふ）である。」（クララ・ツエトキン）

歌舞伎とプロレタリアート

林　房　雄

あらゆる文化的傳統と遺産はプロレタリアートにとつて貴重である。しかし、プロレタリアートはアメリカから來た觀光客ではないから「日本に於ける唯一の國民演劇」としての歌舞伎を眺める際にも、これをフジヤマやゲイシヤと同じ範疇に入れて、好奇的に神秘化する氣にはなれない。

歌舞伎のもつてゐる世界的意義――その純粹演劇性、それがもつてゐる藝それ自體、形式それ自體の獨立性を認める點に於て吾々は決してやぶさかでない。が、このことは演劇學的もしくは演劇史的に見た抽象された歌舞伎についていへることであつて、吾々が現在入場料をはらはされてゐる歌舞伎、現代の市民的事業機關、興行的營利企業の一つとしてその「世界的意義」以外の雜多な夾雜物を含んでゐる現實の歌舞伎を、それほど高く買ひかぶる氣にはなれないのである。

歌舞伎はすでに三百年の傳統をもつてゐる。それはフジヤマの如く古く、ゲイシヤの如く古い。文化の集積としての傳統は尊い。歌舞伎に、その世界的意義を、純粹演劇性を、附與したのも、この三百年の傳統に他ならない。

しかし、今日のフジヤマは、決して「田子の浦ゆうちいで見れば」時代の不二でなく、富士見西行時代の富嶽でない。麓までなら、すでに四十年前から汽車が通じてゐるし、頂上にはラヂオがうなるし、飛行機で頭の上から寫眞にはとられるし、今に横つぱらにケーブル・カアもかゝるであらう立派な近代的存在である。

同じく歌舞伎が、三百年の傳統といふ骨董品的年齡にも拘らず、まだ博物館にもおさまらず、よく新派の擡頭をおさへて、

新劇を壓倒し、映畫スポーツ流行の逆流に抗して「民衆の支持」を得て、興行主の算盤玉に步調を合せ、現代に光輝ある存在を主張し得てゐる以上、適者生存の原理による現代生活への極度の適應が、こゝでもまた行はれてゐなければならぬ道理である。

だから莊重な演劇史的解釋もさることながら、吾々として先づ興味のあるのは、かゝる意味の近代的存在としての歌舞伎に就いての卒直な觀察であり感想でなければならぬ。

歌舞伎の現代生活への適應といつても、しかし、それは蛤化して雀となる式の適應ではない。もしかゝる種類の適應であつたならば、それは歌舞伎自體の滅亡であり、他の見地からすれば、歌舞伎の傳統をとり入れた新しい國民演劇の發生でなければならぬ。が、人も知る如く、部分的改變を經ながらも、歌舞伎は歌舞伎として殘つてゐる。それは、明治中期に入つて勃興した新派劇、その末期に起つた新劇運動を强力に壓倒して、唯一の國民演劇らしい存在を誇つてゐる。

何故であらうか？「俳優の演劇のすみずみまでが嚴重な傳統によつて規定され、男優が女役を演じ、十七世紀のサムラヒと町人が演じる悲劇を二十世紀の觀客が百度も感嘆しつゝ眺め入つてゐる不可思議なる演劇」と、ある外人を嘆ぜしめた歌舞伎は、如何なる理由で、現代に公然の存在を主張し得てゐるのであらうか？

ある種の人々のこれに對する答へはすこぶる簡單であらう。「それこそ藝術としての歌舞伎の力だ。藝術性は時空を超越する。」

すでにのべた通り、私とても、歌舞伎の演劇史的意味を認める點に於て人後におちない。プロレタリアートの見地は歌舞伎の最正當な評價者である。しかし、それは決して歌舞伎の「不朽性」の原因を、右のやうな神秘な場所に求めることをしない。かの武士階級の藝術としての能が、その優れた藝術性、高度の演劇史的價値にも拘らず、現在では博物館的存在として人人の關心の外にある事實、これをこれらの人々は一體どう說明するか？

歌舞伎の現在に於ける存在は、決して能のそれの如き演劇史的骨董品的存在ではなく、現代人の生きた享樂機關の一つとして、立派な興行價値をさへもつたそれなのである。この事實は決して、「藝それ自體の力」といふやうな神秘的理由によつては說明出來ない。

歌舞伎の「不朽性」の秘密は、もつと他の

普通、歌舞伎は、封建的遺物封建的文化であるかのやうに簡單に考へられてゐる。が、それは誤りだ。歌舞伎は決して、能の如き、猿樂の如き、純粹に封建時代の文化ではない。なるほどそれは、徳川中期に發生した。しかし、それは決して封建的支配階級の文化ではなく、被支配階級としての町人の生み出した文化なのだ。それは、人も知る「河原者」の蔑稱の下で成長した商人社會の文化なのだ。近世資本主義の初發形態としての町人經濟（それは現代の社會にも尚多く夾雜されて殘つてゐる）の上に花咲いた文化の一つ、それが歌舞伎なのである。これは能の如き他の社會形態の文化ではなくて、現代社會の根本組織と直接な血緣關係をもつ社會の文化である。商人の文化としての歌舞伎がその蓄積である資本家の社會に尚影響力をもつてゐるのはむしろ當然でなからうか。——能は偉大なる藝術としての完璧性にも拘らず現代に於ては社會的に滅びた。しかも歌舞伎はまだ「不朽」である。この間の消息を說明し得るものは、右の事情を他にしてない。

專門的研究家は說いてゐる。——歌舞伎の發生は遊廓の發生とともに、日本資本主義の成長と不可離である。それは封建制の內部に於て漸く經濟的勢力を振張し、新しい生活主體、新しい生活慾求の把持者として社會的に登場して來た富裕な町人階級の鬱勃たる遊戲慾と好色趣味の發現である。それが表現する世界は、例へば儒教主義といふが如き支配階級によつて吹きこまれた道德の影響に尚强くひきづられてゐるとはいへ、また明治革命後の新興ブルジョアジイの如き一定の社會理想をもたなかつたとはいへ、武士階級のそれと甚だ異る商業都市の町人の世界である。「義理と人情の世界、浮世の枷」の世界、金と享樂の世界、豐富な財力が生む駘蕩放埒な情痴の世界、「金よりだいじな忠兵衛さん」の世界、洗練された遊蕩兒としての通人の世界、新しく起るものの奔放な空想の世界、國際的規模にまで取材が及んだ「國姓爺合戰」の世界、すでに經濟的勢力でありながら、未だ支配的勢力となり得ないものの消極的反抗の世界、町奴の世界、「白浪五人男」の世界。

それは當時の支配階級の思想的影響の故に保持してゐるといふ點で、半封建的な色彩を尚濃厚に保持してゐるが、尚本質に於ては現代の資本主義社會と血緣的一致をもつ商人世界の表現である。それが、彼等の後裔としての現代のブルジョア的作品に影響を持つのは偶然でない。

岸田劉生氏はかつて、「演劇美論」を草して、歌舞伎の有する美を卑俗美であると論斷した。それが貴族的な美としての典雅、崇高、莊嚴と對蹠點に立つ官能美であり、平俗美であり、頽廢美

であり、エロテークであり、グロテスクであることを證明した。これもまた明かに、歌舞伎が町人文化であること、また歌舞伎がこの種の美感の所有者としての現代の町人的要素の間に生きた魅力と生命を有する所以を雄辯に説明するものであらう。

歌舞伎の「不朽性」の第一の秘密は右の如くである。それは商人社會と共に發生したものであるが故に、商人社會と共に不朽なのだ。そこには何の神秘もない。

かくて歌舞伎は、その發生の當初より町人文化として現代のプロレタリアートと對蹠的な地位にある。

だが、如何に同じ商人社會とはいへ、現代は決して元祿時代ではない。そこには三世紀といふ距離がある。かつての町人階級は、明治革命と世界大戰を經て近代的ブルジョアジイにまで進化してゐる。徳川期の、明治初期の、近松が描き、南北が描き、默阿彌が描いた世界は、現在の近代資本主義の世界と完全には一致しない。

適者生存の法則は、歌舞伎に對して、適應を命じる。命にしたがつて歌舞伎は忠實な自己修正と現代化とを行つた。

試みに最近十年間の演出目錄（レパアトリイ）を眺めよう。そこに見られるものは、舊歌舞伎の急速な消却、過去への返済である。それに代つて新作物が數と役割とを征してゐる。近松・南北・默阿彌に代つて、逍遙・綺堂・鬼太郎から痴雨・清潭・錦花に至るまでの新座附作家の群が出現してゐる。

照明、裝置に於ける近代的技術のとり入れ。——その昔の蠟燭照明と現在の電氣照明、昔の單純な能式、シエークスピア劇式裝置と現在のけんらん複寫な背景とを比較せよ。今の歌舞伎は、近代的技術を本格にとり入れてゐる點で、五幕十二場の裝置を百五十圓の經費であげなければならぬ哀れな新劇團の遠く及ぶところでない。

劇場建築の近代化。帝劇、歌舞伎座等によつて代表される歌舞伎劇場の構造は、懷古主義者を悲嘆させるに充分である。それは椅子席と散歩廊下と、幕があがると暗くなる座席と、廣大な食堂を別室にもつた近代的演劇宮殿である。舊歌舞伎劇場の面影は、僅かに地方小都市の天井の黒くなつた小劇場に見得るのみである。

先代守田勘彌等によつて着手され、松竹の制覇と共に完成した興行組織の近代化。

または、現代の速度（テンポ）を顧慮した興行時間の短縮。レパアトリイの組替へ。俳優の新教養。その他。

だが、忠實な適應のための努力にも拘らず、論者は口を揃へて、歌舞伎の最盛期が　すでに明治末期に終つたことを叫んでゐる。何等かの打開策を講じない限り、それは滅亡に當面しなければならないであらうことが警告されてゐる。それは早期資本主義文化としての限界性を今まさに曝露しようとしてゐるのであらうか？

種々な打開策が提案される。その第一として、國家の特別保護によつて營利組織の外に置くといふ提案。これはしかし、生きた演劇としての歌舞伎の滅亡を意味する。その二として、出しものを、全然新作物にし、歌舞伎の傳統を考慮の外に置いた近代的な新演出法をとること。これもしかし、結果に於て、歌舞伎俳優を用ひた新演劇の誕生であつて、歌舞伎それ自體としては明かな滅亡である。むろん、傳統的歌舞伎は滅亡しても、それが結晶し出した長所を吸收した新演劇が生れて、新しき國民演劇が創造されゝば、これは喜ぶべきことである。歌舞伎が新しく更生し得る道は、この方向を他にしてはない。歌舞伎は歌舞伎でなくなることによつて新生する。歌舞伎に對する近代人の不信任は、それが表現する世界の完全なアウト・オブ・デート性、技術的方面についていへば、速度(テンポ)ののろまさに原因するものであつて、決してその優れた演劇性によるものではない。が、歴史は無慈悲である。歌舞伎を今日まで保持し、ある程度の近代化を行ひ、まがりなりに唯一の國民演劇としての國光と實質を與へて來た近代的ブルジョア階級は、今日に於ては、文化的推進力としての資格を完全に失つてゐる。それは文化的價値の創造者から、その破壞者に變つた。近代ブルジョア階級の手中にある限り、歌舞伎はこれ以上の發展を望めない。退化する一方である。ブルジョアジイは、歌舞伎を發展し洗練する代りに、ますますそれを俗化し、低化し、終にはそれが有する「世界的價値」をさへ無に歸せしめかねないのだ。だから歌舞伎が自らを生かし新しき內容と新しき速度の中にその演劇性を生かして貰い自己脱化を行ふためには、それはブルジョアジイ以外の階級に支持者と擔當者とを求めなければならない。新しき擔當者として、其の候補者として、近代的インテリゲンチヤとプロレタリアートとが登場する。

歌舞伎は、現代のブルジョアジイにとつて四つの役割を演ずる。先づ藝術として、次に音樂機關として、第三に敎化機關として、そして最後に、否おそらく最初に營利手段として。

藝術としての歌舞伎については、ブルジョアジイはさして關心をもたない。また持つ資格もない。それは俳優自身の修業にまかされ、またまかされざるを得ない。が、よき批評家と觀賞者をもたない藝術は發展を停止する。現代ブルジョアジイの手

に移つて以來、歌舞伎の藝術性が江戸期、明治中期のそれに比して如何なる進歩をなしたか？　その道の專門家でない私にはわからないが、おそらく進歩は見られないであらう。

第二の享樂機關としての歌舞伎に於ては現代のブルジョアジイは、その町人性をますます徹底させる。俗惡化に加ふる俗惡化。現代の新作物の救ひ難い愚劣さはその一つの例である。

第三の教化機關としての歌舞伎。現代のブルジョアジイは、反動期のそれであり、從つて教化者としては最惡の型に屬する。彼は、例へば松居松翁をして「兒島高德」を、小山内薰をして「戰艦三笠」を新作せしめることによつて、帝國主義ブルジョアジイが歌舞伎に何物を貢獻したかを明示した。

最後に、營利企業としての歌舞伎。これについてはあまりにいひ古されてゐる。かの新劇運動なるものが、歐洲に於ても、日本に於ても、ブルジョア演劇のこの性質に對する近代的インテリゲンチヤの反逆として出現した事實を思へ。「すべての惡はこゝより發する。」……

利得の前には、資本は生れながらにして盲目である。興行資本もその例外でない。彼は、この最後の目的のためには、時に他の一切の目的、藝術的目的は勿論、教化的目的をさへ犧牲にして顧りみない。むろん、この營利主義は、時に文化の激しい推進力たり得ることがある。しかし、今日の歌舞伎の場合には、事情は全く逆だ。それは歌舞伎の發展を完全に停止せしめ、滅亡に押しやりつゝある。

歌舞伎は明治末期にその最盛期をすぎた。近代的民衆の大部分は、歌舞伎に對して不信任を告白し始めた。この場合、興行資本がもし歌舞伎の眞の味方であつたならば、それは直ちに、歌舞伎に自己脫化を要求し、新しい內容と速度の中へ歌舞伎のよき傳統を生かした新國民演劇の創出のために努力したであらう。が、彼は單なる歌舞伎の搾取者にすぎなかつた。歌舞伎に不信任を表白し始めた民衆は、映畫、その他の興業網のもとに吸收しさへすれば、利潤の統計は損はれずにすむ。否、かへつて增大される。歌舞伎は歌舞伎として姑息な「改良」を加へることによつて放置しておけば、尙ある程度の觀客はつなぐことが出來る。といふ方針を興行資本は立てた。この方針は成功した。相當な觀客がその方針によつてつなぎとめられた。

しかし、興行資本がつなぎとめた觀客はどんな觀客であつたか？――一言にしていへば、それは近代社會の最も消極的な層、早期資本主義の遺物とその友人達である。

先づ、藝者！　三百年前に歌舞伎と共に發生し、歌舞伎と共に若干近代化し、その忠實な同伴者として現在まで存續してゐるこの奇特な社會群は、今日尙、歌舞伎の熱心な支持者であり、有能なマネキン・ガールであることを止めない。彼女の贔

界こそ、おそらく最も濃厚に町人時代の慣習を保存した世界であらう。それは歌舞伎そのものの世界である。歌舞伎音樂と遊廓音樂の完全な共通はその表面的な一例にすぎない。彼女はただに自分が劇場に出かけるだけでなく、彼女の男性の友人達を酒席の間に「歌舞伎化」し、これを歌舞伎の理解者たらしめ支持者たらしめる。彼女等のボイコットが興行主を慄へあがらした最近の事實を見ても、如何に藝者と其友人が歌舞伎の重要な觀客であるかを知ることが出來る。

第二に前者と共に三百年の傳統を持つ下町の江戸ツ子諸氏。彼等は大向ふに陣取つて、「大はりまあ！」または「大統領ッ！」と怒鳴る。かけ出しの演劇記者などはとうてい及びもつかぬ歌舞伎通である。

第三に、前者をも含む藝者の友人の廣大な大衆。これには藝者と遊ぶだけの金とひまと間拔けた好色癖を持合せた男は、あらゆる職業階級を問はず參加し得る。實業家、政治家、軍人、僧侶、株屋、商人、官吏、學生何れを問はない。二十人で三人の藝者を「買つて」、そこで「月も朧に白魚の」をやる風流を解する下級社員と雖も敢て加入を妨げない。

第四に田舍の中學から東京の大學に來た地主の息子。彼等は急速な東京を侮蔑する。そして歌舞伎の緩漫な速度(テンポ)を愛することによつて故郷の山河を思ひ出し抒情的になる。

第五に、日本の女性一般。正しくは、高價極まる入場料の故に、主として上流の奥樣と令孃。彼女等の歌舞伎趣味は、一面極めて同情に値ひする發生原因を持つてゐる。即ち彼女等の社會的地位は、元祿時代の富裕な町人階級と酷似してゐる。金と暇と精力の餘剩はあつても、社會的自由がない。歌舞伎はこの欝ぷんをはらすにはあらゆる意味で適當な場所である。それは彼女等にとつて、かの「慈善」或は「奉祝」舞踏會と同樣な役割を演じる。奇怪な義理人情の論理も、彼女等の特別製の頭には極めてなめらかに受入れられるらしい。

第六に、常連ならざる常連。金持ちの眞似をすることが唯一の生き甲斐ある生活だと考へてゐる馬鹿な貧乏人。彼等は一年に一回乃至六回、日曜祭日を選んで、劇場の入口に長蛇の列を作る。雨にうたれること、三時間待つこと、そんなことは平氣である。

その他。

「世界的意義を有する國民演劇」のためにかゝる優秀な觀客を選擇した興行資本は、果して歌舞伎の眞實の味方であるか。これを進化せしむるものであるか退化せしめるものであるか？——議論の餘地はなからう。

演劇に於て、觀客が演じる役割は大きい。それは演劇の一部であるといつて過言でないほどの直接的關與を持つ。

歌舞伎の座附作家連がそろひも揃つて駄作家である所以の少くとも半ばは、この観客の質が説明する。作者達は半は自己擁護の意味をこめて嘆いてゐる。「いくら何をやらうと思つても、歌舞伎のお客ではね……」

光輝ある歌舞伎をかゝる最惡の觀客のなすがまゝにまかせて、己れはより利潤額の多い映畫その他に夢中になつてゐる興行資本、それを果して歌舞伎の味方といひ得るか。

封建期の町人階級によつて發展せしめられた歌舞伎は、帝國主義期の町人階級の手によつて土に還されようとしてゐる。

歌舞伎の傳統を正當に繼承し、眞に發展せしめ得るものは誰か？

それは營利主義と町人的娯樂主義の打破を旗印に起つた新劇運動か？

否である。近代的インテリゲンチャの演劇運動としての新劇は、日本に於ては特殊な困難な事情の故に結實せず、今やインテリゲンチャ自身の自己分裂の結果、二つの方向に分裂しつつある。一つは營利主義への屈服であり、他は新しき支持者の發見である。多くの新劇團は自滅し、松竹に買はれ、興行主と妥協し、または最近の築地小劇場の如く、長い受難と苦闘の後に、ついに藝者その他の歌舞伎的觀客に媚を賣ることによつて「民衆化」し終らうとしてゐる。

一方かかる道をたどることを欲しない部分は自らプロレタリア劇團と名のることによつて新しい支持をプロレタリアートに求めやうとしてゐる。しかし、現在日本のプロレタリアートの成熟の程度は、この種の劇團を經濟的精神的に支持し得るまでに至つてゐない。

だが、これらの劇團の行かうとしてゐる方向は正しい。營利主義と町人趣味とを眞に克服し得るものはプロレタリアートを他にしてない。歌舞伎の優たれ傳統が新しい演劇の中に生きるのは、プロレタリアートが演劇に充分の經濟的支持と精神的支持とを與へ得るところまで成長した時、人類の全文化を正當に吸收して自らの演劇を創造すべく努め始める時に於てである。

屢々口にさるれる歌舞伎の「世界的意義」その純粹演劇性そのものの主たる發見者と唱導者が、すでにソヴエート・ロシアの劇場人であるといふ事實はこの私のこの主張に對して、極めて暗示的であらう。

プロレタリアートは商人文化としての歌舞伎には何の未練も持ため。しかし、その三百年の傳統、劇場人の立々たる苦心と經驗の結晶としての演劇的長所を正しく評價することに決してやぶさかでない。否、眞に歌舞伎の長所を理解し發展せしめ得るものは階級としてのプロレタリアートのみで[illegible]。

反動日本の一斷面

淺原健三

反動的世相の公式的羅列は今さら必要はない。私は私の耳目に接着する反動日本の斷面を披露するに止めたい。

私は無産階級解放運動の一兵卒である。私の接觸面は反動勢力が無産陣營に衝戰し來る一面である。範圍は狹く、色彩は單調である。が、斷面は總體の一部である。諸斷面の綜合は總體である。現在日本の反動相の一斷面は反動日本の綜合的觀察——その實相と其の原由の究明に役立つであらう。

更に、私の接觸面は限局せられる。最近時の、私自身の實驗、衆議院の新米議員としての私の議場に於ける實驗に限局せられる。反動日本の社會相の綜合への一資材としての價値の有無輕重は讀者諸君の判斷に委せる。

□

私は一月二十四日、初めてブルジョア議會の演壇に立つた。私の演説の目的は田中内閣の施政の反動相を暴露し、田中大將と其の幕僚とに向つて無産階級の抗爭意思をたゝきつけることであつた。ブルジョア政治の暴露とそれへの鬪爭、それが私の人生であり、議員としての使命であり、從つて、此の日の演説の目的であつた。

私は此の目的をいちばんよく達成するための演説の素材として警察權の濫用と治安維持法と對支外交との三つを拾ひ上げた。此の三つが田中内閣の反動性を證する最も顯著な事實だと思つたから。警察行政に就いては言論集會の自由の抑壓、結社權の剝奪、不當拘束、拷問苛責等々の事實を取りあげ、無産階級の解放運動を抑壓する諸法令への抗爭意思の焦點としての治安維持法を捕へ、帝國主義的外交の排除への意圖を明にするためには田中大將の軍事的對支外交政策を標的にした。

私は是等の素材が反動日本の政治の暴露と鬪爭とのために役

當と信じ、これを拾ひ上げて私の演說を構成した。私の演說技術の拙劣のために、その暴露は不徹底、その鬪爭は不充分であつたかもしれぬ。然し、私は私の演說中及び私に對する諸大臣の答辯演說中に、現在政治の反動相が、或は議員諸君によつて、或は大臣によつて、鮮明に暴露せられたことだけでも、私の企圖と努力とが全然無效果であつたことは思はれない。

□

私は演說の冒頭からブルジョア議員の猛烈な妨害を受け、必死の努力を試みたが、つひに後半からはホンの筋書を讀む程度の演說しかできなかつた。その妨害は、單純な黨派意識から生れたものでもなく、年少氣銳の者への輕侮からでもなく、演說の技術に關しての漫罵冷笑でもなくて、ブルジョア議員のブルジョア意識の奥底から湧き上つて來る憤怒と憎惡とに基くものであつた。私はなぜ冒頭から彼等の激怒を買つたか、云ふまでもない。私が劈頭から田中內閣を反動內閣として規定し、之れに對するプロレタリアートの抗爭の意圖を明かにしてかゝつたからである。田中內閣の與黨にして本質的に反動政黨たる政友會は蓬髮脊面の勞働小僧によつて眞向から反動呼はりをされたのでカッとなつた。反動は反動の烙印を捺さんとする者に向つて嚇怒する。白首は白首と云はれて開き直り、淫賣婦は白首と罵られて分相應の啖呵を切る。

□

反動陣營に向つて投げつけた私の礫に對して投げ返され、叩きつけられた私への惡罵怒聲は何であつたか。

言論集會結社の抑壓に關する實例を擧げて論難すると「痛快痛快」と會心の叫びをあげた。此の「痛快」は私の抗議そのものに對する同感の表示でなくて、地方官憲の抑壓振りに對する贊意、無產階級の窮迫狀態を知つての痛快感の表示である。「痛快だ」「痛快にやつつけろ」「もつと勇敢に抑へつけろ」「まだ〱足らぬ」と云ふべきところである。立憲治下に於て當然であるべき言論集會結社の自由を擁護しやうとするやうな自由主義的昂奮は議場の何處にも無い。御大典に際しての總檢束への抗議殊に檢束中の死亡者の死因、撲殺の疑ひに對する難詰に對して、「それで宜しい」「共產黨だからドシ〱やれ」等々、その場合の彌次の言葉は、事實を肯定し且つ當局の處置を無條件に肯定するものであつた。勅令を以て死刑に處するの不當を難詰すると「かまはぬ磔にしろ」「絞刑にしろ」と應酬する。法を自由平靜に檢討するといつた樣な氣分は、少くとも治安維持法の

如き社會立法の場合には、今の議會には全然失はれて居る。臨騷裡に僅かに對支外交論難の個條書を讀み續けてゆく私に對して、「馬鹿野郎」「賣國奴」「中止を命ぜよ」「演壇から叩き下せ」「懲罰懲罰」「貴樣の樣な奴は殺しても飽き足らぬ」と云つたやうな急霰の如き怒號罵聲は田中内閣の反動的對支外交を象徴し、議場の反動調を表現するに充分な言葉であつた。

□

私の論旨そのものに關して私に聲援を與へる者が無産議員の外にある筈はない。民政黨はブルジョアジーの一群として對立する關係上、政友會席が騷ぎ立てる場合に、「やれ〳〵」と云つた樣な聲援を僅かに與へた、政友會と形式上對立してゐるといふ一面の外には私と共通の何ものもあり得ない。新黨クラブ、憲政一新會は勿論である。そのほかには極めて少數の急進自由主義者、新自由主義者がある。私の演説が言葉の上で、形式上自由主義的である場合に、是等の人々は私に聲援を與へ、好意を寄せた。清瀨一郎君、鶴見祐輔君の如きそれであつた。是等の人々はリベラリストなるが故に、その立場から私に聲援したが、その代り、自由主義者たるべき約束の下にをかれてあるブルジョア議員は既に其の本質が反動化してゐるが故に、是等の自由主義者を敵として對立した。清瀨君は私への拍手を送つたために、國賊呼はりされ、賣國奴扱ひされ、政友會の罵聲を浴びなければならなかつた。日本の對支外交方針を自由主義の立場に一應引き直すことが支那をして急速に自由主義的に展開させ、支那の社會革命成就の素地を築く所以であるといふ見解の下に演説する私に、自由主義的外交の主張者として聲援を與へた鶴見君は、明政會その他の人々の糺問を受けなければならなかつた。

□

此の二人に關する視野からも現在の議會の反動調がどれ位のものであるかゞのぞかれ得るではないか。

望月内相は嘗て自由主義者であつた。然しそれは「自由黨の」自由主義者である。自由黨、政友會の自由主義者は今の反動主義者である。

望月さんは「人情大臣」ほどあつて、私への答辯は一面確かに人情的であつた。言論集會を不法に抑壓する者はないと思ふが地方警察官中には、そんな不心得なものがないとも限らぬと云ひ、御大典に際しての檢束中の死者に關しては事實を承認して之れを公表し、宮城縣警察部長の失言問題に就いても再調査

を約束し、殊に私の列擧した拷問苛責の事例に關しては、「……色々御述べになりましたが、何等か、人の氣をいやにさせるやうな質問をされることは甚だ遺憾である」と云ひ、また「お互國家のために忠誠を盡して行かねばならぬお互の間に於て、如何にも事を誇大にならまだしもであるが、甚だ禮を失するかも知れませぬが、何か事を構へて仰せられるやうなふうであることは、甚だ遺憾であります」と云つて、慘酷な、陰慘な無產階級鬪士の受難の狀態に眼を掩ひ耳を塞ぎたいやうな人情味を發揮し、私に對して、如何にも紳士的な、人情にからんだ態度を以て臨むところ、誠に人情大臣の名に恥ぢないと思つた。

が、「人情」とは何だ。「紳士的」とは何だ。××政治家の假面ではないか。鬼面人を脅かす者あり、菩薩面をして夜叉の劍をとぐ者も居る。

□

宮城縣警察部長萬某が十二月十六日同僚の山本宣治君に向つて豪語した言葉。「今、自分の奉職してゐる政府は資本家地主の利益を代表する政府である。君等は勞働者農民の利益の代表者である。兩者は所詮兩立しない。故に君等が一回でも演說會を開き、或は一言でも言葉を公の前に言ふことは既に我々の敗北である。だから演說會を開くことも許さない。」これは、單に一警察部長の無責任な放言とは聞き流せない。田中內閣の勞農大衆の言論集會の取締に對する根本的態度の最も明確な表象であると思つて、私は內相に糺問した。

內相は私に對して事實を否定し、山本君に對しては再調査を約し、翌々日、鈴木君への答辯のついでに斷乎之れを否定した。山本君はウソを云ひ、萬某はウソを云はぬと大臣は認定した。行政官廳の構成員が肯定せられて立法府の構成員は否定せられた。行政官吏の證明が常に正しいとすれば議會は何によつて行政監督の政治的機能を發揮し得るか。さう開き直るには當らないと云ふ人があるかもしれぬが、議會政治が行政監督の機能をどれほどに發揮し得るかは、議會政治の根本に關する重大問題である。

議會無視、議會機能の實質的停止は近頃樣々に評論せられてゐる。それを今例示して立證する必要はない。私は、此の山本對萬の對照の裡に、議會の×××、反動的專制政治の進行し行く足音が、微かなりと雖も明瞭に聞き取られるかのやうに思はれてならぬ。

斷じてウソを云はぬ、決して不法を敢てせぬ官吏の監理の下で、三人が三人共脚氣衝心で死んだ事實。檢束中脚氣衝心で死

ぬやうな健康狀態の者でも、今の日本の官憲からは「社會の公安を害する者」と認定せらるるといふ事實、××現在の社會はヨボ〳〵の脚氣病患者がヨロ〳〵と歩き廻はることによつてさへも、或は、裏長屋の病床に呻吟してゐてさへも、その公安が害せられる虞あるほどに薄弱な安定しか保つてゐないと官憲によつて判斷せられてゐる事實。私は人情大臣から是れを教へられた。その內相は人情にからませて私への答辯をごまかしながら、新黨準備會の解散問題に關しては見違へるほど斷乎たる態度で答辯する大臣であることも知つた。

××大臣の假面が落ちた。

□

人情大臣が落した假面を拾つて被らうともせず、素面のまま、反動政治家として無產大衆に直面したものは原法相であつた。

治安維持法は反動法なるが故にのみ惡法である。緊勅による改正は目的も手段もあまりに反動的なるが故に維持法の惡性を增大した。本法は反動立法の頂點に立つ。

此の反動性の暴露は無產黨議員のみが爲し得る。他の如何なる政黨の議員にも、これを根本から打ち壞はさうとしてかかる力はない。それは對支外交と異ふ。だから私はここに力點を置くべく登壇した。然し議場は私を押し潰すほどに反動的勢力が最後的に旺盛であつた。腫物に觸られた者の激怒は炎と燃えた。殺せ、殺せ、殺せ！彼等は怒り狂つた。私は此の怒り狂ふ者の姿をみることだけで滿足した。何を語る要もない。あの激怒！それが何よりも雄辯に維持法の反動性を物語る。本法の立法當時、更に逆つて所謂過激社會運動取締法案の提出せられた當時、一般社會も議會も自由にそれを批評し得た。が、今は一般社會ではその自由が全然失はれた。議會も亦然り、緊勅の承諾案が如何に取扱はれるか、今から見透しが出來る。それが本法の反動性と議會の反動化を如實に說明してくれるであらう。

□

原法相は滿身の自恃と燃ゆる勇氣とをもつて大臣席から壇上に乘り出して來た。彼が無產議員と維持法を俎上に置いて對立する時、その時こそ原さんが最も勇氣に滿ちた瞬間である。あの時、原さんは全で別人かの如く氣を負ひ、心が勇んでゐるかに見えた。勇氣勃々、「此の野郎！」といはんばかりの意氣込で眞向から切りこんできた。第五十五議會における兒玉、名川の兩君への答辯振りの穩和なりしに引きかへ、今私に對して、

驚くべく闘爭的である。此の原さんの勇敢な態度、これこそ維持法に關するかぎり、今期議會を通じての原さんの態度であらう。民政黨に對して脅迫的態度さへも持つて對抗し得る問題は此の問題のほかにはない。こゝに田中内閣の反動相が鮮かに浮び出る。

原さんが「表面上合法的行動をするやうな假面を被つて居る者があれば……確かに本法は脅威である」と、それまでは眞直に向つて演說してゐた身體を私の議席の方に急轉し、屹となつて一段聲を張りあげたあたり、何といふ勇氣凛烈なる態度であつたらう。「本法を撤廢するの意思は全然にございませぬ」と演說を結んだ原さんの決然たる態度。議會の反動的空氣に釣り込まれて反動法曹の全姿を暴露した光景に、私は口邊に湧く微笑を禁じ得なかつた。

□

煽り立てられた反動の熱風に誰よりも昂奮したかに見えた者は勝田文相であつた。

學生の社會科學研究熱に對する田中内閣の對策が餘りにも反動的で、今や、それが、殆んど拔き差しならぬほどの高潮にまで高速度に發展して來たことを、日本のために、むしろ恐怖を感ずるまでに私は憤慨してゐる。内務省と陸軍省の手先にたて踊り狂つてゐる文相、底なしの沼に落ちてゆきつゝある文部省に、文教の首長としての權威らしいものを探さうとする私の目算は、餘りにお人よしであつた。

十九世紀の末葉にロシアで申分なく失敗した其のまゝの型を今の文部省は社會科學研究熱の抑制に使つてゐる。刑事と憲兵の泥靴の下に大學の權威は蹂躙しつくされて居る。最後に殘さるべき城寨さへもが、今は反動軍の足下に躙み潰された。それを指摘せられて、何の反省もしようとしない勝田さんが、肩をそびやかしながら得々として大臣席に返つて行く後姿を眺めながら、私は暗涙とでもいつたやうなものを胸の中でのみこんだ。

文部大臣は伴食でさへもなくなつた。反動將軍の從卒である。

□

反動屋は反動屋の尻尾を巧妙に摑む場合がある。角力は角力取同志、餅は餅屋につかせろである。

私は田中内閣の對支外交への抗議に際して、當然、私が觸れてゆかなければならぬはずの某重大事件に言及しなかつた。此

の事件こそは、田中内閣の反動性を、現局の對支外交の反動色を最も顯著に立證する一事件である。事件は忽然と偶發したものでなく、過失でもない。田中外交行進の途上に發生すべくして發生したものである。ロシアが臭いか、南京政府の仕事か、田中内閣に責任があるのか、そんな詮議だてはどうでもよい。然し此の事件は、事件そのまゝで我々の帝國主義外交の排除と直ちにつながり合ふべきものである。民政黨や貴族院は、田中首相を政權から叩き放すためには利用するが、これを帝國主義外交と結び付け得るものは無產黨議員のみである。然し、私があの場合このつながりを着けやうとしたとすれば、民政黨も貴族院も出した手を引込めねばならなくなる。ブルジョアをしてブルジョアを暴露させることは、時に、我々がやるよりも、より有力である。

此の事件は餘りにも反動調が濃厚な事件であるがゆゑに、私はこれを民政黨の手の裡に殘して置いた。民政黨は自らの反動性の故に鄭松齡事件の昔を忘れ頻に此の事件を拾ひ上げ、田中を陷るべく全力をあげてゐる。が、餘りに深く掘り下げると、それが、やがて自らを葬る穴であることを知つてゐるはずである。そこで彼が手を拱くとき、無產黨議員は起たねばならぬ。

□

田中内閣の反動政治は内政に於て形式的に勝利の段階を登つてゐる。とは云へ、それは、終局の墜落への段階でもある。田中内閣はあまりに反動的であるがために、世紀末の悩みを悩んで居る。此の難局を押切る力があるか、どうかは疑はれる。ブルジョア政治の全局的破綻は直ぐには來ないが、田中内閣は反動行進の途上で躓づく。

對支外交には破局が來た。日本のブルジョアジーのために一旋回が必要である。ブルジョアジーにそれが判つて來た。帝國主義外交は一回轉して新しい脚地に立たねばならぬ。その役目を民政黨が引受けるであらう。然しそれは帝國主義外交の躍進のためのほかのものではない。

□

議會は反動政治の波を蹴立てゝ進む。第五十六議會は反動政治のパノラマである。

私の切つた斷面が反動相をどの程度に示現し得たか。私は知らぬ。

近代都市政策の一動向

島中雄三

一

國民の政治的關心が近來漸く中央政局の無意義なる政爭より轉じてより實生活的なる地方自治の問題に向ひ來つた傾きあることは事實である。その直接の動機としては、例へば東京市會の疑獄事件といふ如き、不祥なる問題の突發に刺戟されたといふ點もあるであらうが、何にしても政治的生活の意識が、漸次おのづから國民大衆の頭腦を支配し來つた結果であることは事實であつて、政治思想の一進歩として喜ぶべき現象の一つである。

地方自治の問題に關して論議すべき事柄は頗る多い。さりながらそれらの一般問題は暫く措き、こゝでは特に、都市の行政並に財政に關し一小論策を試みたいと思ふ。主として都市政策の一動向としての都市社會主義についてである。

二

近代都市の著しい發展は、一面に於て農村の疲弊を來たし、やゝもすれば都市と農村との階級的對立を思はしむる觀がある。しかしながら事實は、都市と農村との階級的對立ではなくして、都市農村を通じての經濟的分裂に外ならぬことは、農村地主のブルジョア化と都市プロレタリアの激增とによつて直ちに知り得るところである。農村の事は暫く措き、都市の現狀は今や急激なる資本の集積と人口の集中とにより、極めて少數なる一部の特權的富者をして、倍々その富を增大せしむる以外、大多數の市民層を驅りていよ〳〵貧困と窮迫の淵に逐ひ遣りつゝある。勿論此等は、資本主義制度に伴ふ必然の現象であつて、根本的には資本主義制度の存續するかぎり避くべからざる弊害ではあるが、しかし全然此の弊害を除去する方法が無い譯ではない。卽ち社會政策の徹底的實行によつて、ある程度までは、此の制度の下においても、貧富の懸隔を緩和し得ることは明かである。而して、都市に於ける此の社會政策の徹底的實行を求めんとするに當り、そこに一つの理論的根據を與ふるものは、所謂都市社會主義である。

こゝに明かにして置かなければならぬことは、都市社會主義は飽くまで社會政策に於ける一つの原理であつて、名は社會主義といふと雖も、後のマルキシズムの名によつて代置せらるゝ革命的社會主義とは、本質的に區別せらるべき性質のものだといふことである。資本主義制度の害惡を認むる點においては、勿論兩者その軌を一にするとしても、一は此の制度を根本的に變革することによつて、より高度の新らしき制度の出現を期待するものなるに對し、他は此の資本主義制度の範圍內に於て、出來得るかぎりその弊害を除去し、民衆の自主的批判と合意に基いて、私有財產の上に或る程度の制限を施し、社會全般の福利を目的として、漸次制度と組織とに改革を行はうとするものである。即ち兩者の差は、政治的には共產主義と社會民主主義との相異なる所以であつて、一見その目的を同じうするが如くして、實はその道程の上に到底相一致し難き根本理由を見出すのである。

然らば都市社會主義の關するところは何であるか。それは、簡單に要約すれば、都市無產階級の經濟的地位の向上、福利の增進を目的とするところの、都市の行政的施設、並に經濟的諸企業の公有公營であつて、且つ市住民の自治的統制による社會的秩序を意味すると解することが出來る。

今此の理解に基いて、我國都市の現狀に當てはめ、之を都市政策の一道標たらしめんとするに當つて、一應考察の對象となるものは都市そのものゝ本質である。

シドニー・ウエッブは、其の著「大英社會主義國の構成」に於て、市町村自治體を一個の强制的消費者團體とするの見地から、左の如き立言をなしてゐる。

我々は普通市町村を組合としては考へない。しかし町會が共同社會の必要とする學校や敎師を提供する時、または都市の住民がその健康に必要なる下水や衛生掃除や點燈の設備をする時、或は市町村が、家屋や旅館や時には料理屋の如きをさへ設けた時、又、牛乳其他樣々の食料や、石炭や、藥品屋の貨物の分配を組織だてた時、更に市町村が、病人や虛弱者のために病院其他の設備をなし、醫師看護婦の勞務を組織だてた時、而して此等のすべての事業が、營利のためでなく、又特定の資本家を富ましめるためでもなくして、實にその代理者たる住民のために、之に奉仕する目的に外ならぬ場合には、市町村は明に消費者の組合として活動して居るものといふべきである。(尤も、消費者組合たると同時に、市町村は又、中央政府によつて代表せらるゝ共同社會の代理者でもある。)

更にウエッブは、英國の市町村自治體の消費者組合としての活動を述べた後、

斯の如き莫大なる且つ多樣なる市町村企業の生產は、種々なる條件の下に、地方の住民によつて享樂せられてゐる。通常それを消費し使用することは任意であるが、場合により事情によつては、法律を以て强制せらるゝこともある。又往々何等の支拂をも要せざる場合がある。かゝる場合の分配の原則は明に共產主義である。例へば下水や街路や照明や、公園や圖書館や初等學校や、又は傳染病院とか

衛生的勞務とかは、何等の支拂もなく自由に使用することが出來る。上水供給其他或る種の勞務は、各自異なる代價を要求されるが、それとても決して供給せらるゝ實際量に基礎をもつものでなく、實は豐富なる假定量に基くものである。其他の場合、例へば電車とか公設浴場とか洗濯所とか公衆墓地とかの如きに於ても、各の場合に應じて代價の等級はあるが、しかしそれは勞務の實際的費用とは大した關係がない。瓦斯や電燈の供給に於ては、消費量に應じて支拂ふことになつてゐるが、それも都市によつて異なり、低きはたゞ經費を償ふに足るだけで十分としてゐる。……かくして地方自治體の消費組合として供給する貨物及び勞務に於て、多くの場合採用せらるゝ分配の原則は「その必要に應じて各人へ、その能力に應じて各人から」である。

斯の如くウエッブによれば、都市其他の地方自治團體は、一面中央政府によつて代表せらるゝ公同社會の代理者であると同時に、地域的強制による消費者としての團體であり、從つて都市の行政財政は、常に消費者としての市民の立場から、その福利を本位として案配せらるべきものとされる。而して、その缺陷を補ふものは、別に生產者組合の任務たること勿論である。

都市其他の自治團體を以て強制的消費者組合と見做すことの當否は暫く措き、少くとも斯かる見地の上に、都市社會主義の理論的根據が置かれてゐることは爭へない。同時にまた、都市を以て強制的消費組合乃至公民的組合と見做す思想は、少くとも從來、經濟的特權者たる都市ブルジョア及び地主の支配的當體たりし都市をして、市住民の利福を目的とする共同的勞務の一管理體たらしめ、個人的企業による獨占的利得を排除して、市民大衆の消費生活を安定せしむべき諸般の政策に向つての一大轉換を示唆するものでなくてはならぬ。そして此の事が實に、今日都市政策の最も重きを置かるべき焦點である。

三

近代都市が資本主義の發達と共に發達したブルジョアジーの所產であることは、その外形的繁榮の裏面において、多數市民の貧窮化、プロレタリア化と相伴つて飢餓、失業、疾病、自殺、犯罪の數が日に月に增加するによつても知ることが出來る。蓋し大企業の獨占と金融の寡頭化と、飽くなき資本家地主の貪慾とによりて、小資本の營業は悉く萎靡し、破產倒產相踵いで到るの實狀を加へて、勞賃は低下し、物價は昂騰し、多數勤勞者の生活に至つては、實に唯その日の食を得るにのみ汲々たる有樣である。もし夫れ疾病、失業、災害等の場合に於ける悲慘の狀に至つては、到底眼を蔽はずして面を向けることが出來ない。

今、「都市問題」一月號所載「都市貧困生活に關する調査記錄」(愛國婦人會隣保館主事竹中多計氏調査)を見るに、東京市本所區內の二十六ケ町において總世帶數一萬三千百十三の中、辛うじて所得稅を納むるもの僅に八百二十一世帶、之を人口に換算すれば約七萬八千人の中僅に五千人であつて、爾餘の七萬三千人は年收入千二百圓に滿たざる

無產階級の家族であることが分る。今日の都市生活において、年收千二百圓、月收百圓を以て平均家族五人の生活を維持せんとすることの如何に困難であるかは想像するまでもない。而もそれらは最上の部であつて、七萬八千人の中七萬三千人の大多數は、殆と皆それ以下の收入を以てそれ以下の生活を餘儀なくされて居る者なのである。卽ち最上の部に位する者と雖も、辛うじてその家族の肉體を維持するといふに止まり、疾病其他の場合に於ける臨時支出の必要なるに當つては、他の救助を乞ふ以外生活を維持する道なき階級に屬する者であつて、其他に至つては最低限度に於てすら家族の生活を維持する能はざる階級である。同調査記錄によれば、極貧階級七百十一世帶に關する家計狀態の一班は左の如くである。

	世帶數	人員	間數	疊數	收入	家賃
收入皆無	八五	三三九人	一〇一	五一八・〇枚	—	六三七・四五
一世帶平均		四	一	六・〇	—	七・五八
十圓未滿	八	二六	八	四八・〇	五一・五〇	七三・九〇
一世帶平均		三	一	六・〇	六・四四	九・二一
十圓臺	三〇	九七	三三	一三六・五	四四四・三〇	二三二・〇〇
一世帶平均		三	一	四・五	一四・八一	七・七五
二十圓臺	四〇	一六八	五六	[illegible]	一、〇八八・八〇	二七[illegible]・八五
一世帶平均		三	一	五・〇	二七・二二	七・九[illegible]
三十圓臺	七〇	二二九	七三	三四八・五	二、五三二・一〇	五九一・七五
一世帶平均		三	一	五・〇	三六・一七	八・四五
四十圓臺	八九	三三三	一〇〇	四七五・〇	三、八一七・一五	八三四・八五
一世帶平均		四	一	五・〇	四二・八九	九・三八
五十圓臺	一三四	五五五	一六六	八六五・〇	七、〇三四・一〇	一、五九二・九五
一世帶平均		四	一	六・五	五二・四九	一一・八九
六十圓臺	一一九	四六五	一五[illegible]	八三一・〇	七、四三五・三五	一、五三四・〇五
一世帶平均		五	一	七・〇	六五・四六	一三・九一
七十圓臺	六八	三五六	一三三	五二八・五	四、九〇六・七〇	一、〇四三・七〇
一世帶平均		五	二	七・〇	七二・一六	一五・三五
八十圓臺	三三	一六五	四三	二九三・〇	二、五九九・〇〇	四九六・二五
一世帶平均		五	一	九・〇	八一・二三	一五・五[illegible]
九十圓臺	一四	七四	三〇	一四一・五	一、二七六・〇〇	二一九・八五
一世帶平均		五	二	一〇・〇	九一・一四	一五・七[illegible]
百圓臺	一五	七八	二九	一三三・五	一、五九九・〇〇	二一七・七〇
一世帶平均		五	二	八・〇	一〇六・六〇	一四・五[illegible]
合計	七一一	三、九四〇	九一九	四、五四六・〇	三二、五八一・七〇	七、八三六・四〇
		五・[illegible]	一	六・〇	四五・八[illegible]	一一・〇[illegible]

右は固より都市の或る一部に關する調査の一班であるが、以て全豹を推す資料たるには十分である。今此等の調査を外にしても、都市大多數市民の生活が如何に窮乏と悲慘を極むるかは、何人にも直ちに想像せらるゝ事實であつて、近時日々の新聞紙に現はるゝ强窃盜の事犯の如きも、その責必ずしも警察制度の不備にのみある譯ではない。

斯かる都市の現狀に對して、勿論中央政府が負ふところの責任は多大であるが、而も都市自らの立脚地において、之が自衞のために自治團體として當然爲さゞるを得ざる豫防的救濟的事業と施設とは、殆ど枚擧に遑なき有樣である。而してそれの等閑に附せられて居ることも亦今日より甚だしきはない。

四

都市行政の改革に當つて何人も直ちに氣のつくことは、從來の政治がすべて餘りに中央集權的であつたことである。固よりそれには明治初年の國情が、武力富力のすべてを擧げて之を中央に集中し、以て外國のそれに拮抗せざるを得ざる事情に迫られたゝめでもあるが、その結果として、地方自治の振興に關する問題は概ね閑却され、名は市町村自治體といふものゝ、市町村民自ら地方自治に關する何等の教養も訓練もない。且つ東京市の如き、中央政府に接近せる大都市に於ては、經濟力の中央集權的餘威に乘じて頓に外觀の繁榮を示したが、それと同時に、中央政治と地方自治との關係頗る錯雜を極め、その行政事務の如きも大半は中央政治の委任事項たる國税の徵收、軍事軍用徵兵に關する事務、戶籍、警察、國民教育等の事務であつて、都市自らの福祉と安寧とのために當然行はるべき保健・衞生、救貧・防貧、交通・金融、其他の文化的施設に對して費さるゝところは甚だ少い。而も中央政府の地方自治體に對する官僚的干涉は、事毎にその發展を妨げ自由を拘束する傾きあるに於て、到底完全なる都市獨自の地方行政は行はれ得ないのである。此の點より見て、先づ現行市制に根本的改正を加ふるの必要あることは言ふまでもない。

自治體に對する中央政府の干涉は、また多くの市町村をして財政上極度の窮迫に陷らしめてゐる。租税は多く國税として徵收し、自治體それ自身に特殊の財源を與へないことも勿論その一つであるが、假りに地租なり營業收益税なりを移讓するとしても、現行市制第百十六條第二項の規定、並に現行町村制第九十六條第二項の規定は、明かに徵税上自治體の權限に原則的拘束を加ふるものであつて、都市及び町村の經濟的發展を妨ぐること勿論である。即ち同條の規定によれば、市町村の收入は財產收入、手數料、使用料等によるを原則とし、租税の徵收は、此等の收入によつて費用を辨じ得ざる場合の例外的手段とされてゐる。而もその使用料なるものゝ中には、公營造物の使用料は勿論、電車、電燈、水道等の如き公營收入を含むものであるが、然らばそれらの公營事業なるものは、本來營利を目的とし、且つ多額の收入を見越しての上でなければ、經營し得られない結果となる。蓋し都市に於ても町村に於ても、現在及び將來に亘つて、自衞上公益上爲さゞるを得ざる社會的施設は無限にあり、從つて之に要する費用はまた無

限に増大せらるゝに拘らず、それに充つべき收入は原則として財産收入、手數料等の外、主として公營事業の諸收入であるとすれば、それらの事業は餘程の收益あるにあらざれば、その支出を償ふことが出來ないであらう。少くとも、都市其他の公營事業は、純粹に營利を目的とする收益主義の上に經營せらるべしとの解釋が許さるゝにあらざれば、此の規定に從ふことが出來ない譯である。

然るに公營事業の性質は、本來公益のために、即ち市民大衆全體の便益のために行はるべきものであつて、斷じて營利を目的とするものであつてはならない。私人企業の弊はその營利主義にある。その收益の獨占にある。一般市民大衆の利益を無視して、獨り企業家の懐を肥やすにある。殊にその事業の獨占的性質を帶ぶるものに至つては、その弊や殆ど底止する所を知らない。そこで此等の弊害を除去し、或は矯正し、市民大衆の利益を本位として、都市自ら代つてその經營に當るものが、所謂都市の公營である。されば公營事業なるものは、その性質上營利收益を目的とし得ないものである。また原則上、營利收益を目的とすべからざる約束をもつたものである。もしその事業が幸ひにして、或は過つて收益のあつた場合、即ち經營に要する諸經費を差引き、一定の元利を償還し、減損補塡を了した上に、尚且つ相當の餘剩收益があつた場合には、須らく原則として、料金の低下其他の方法により一般市民大衆に還元すべき筈のものである。少くとも之を從業員の待遇改善または事業の擴張費に充つべきであつて、決して一般收入の源泉たらしむべきものではない。寧ろ場合によつては、不足經營に甘んじても、市民大衆の公益のためには之を敢てしなければならないのである。

以上の觀點に立つ時、公營事業の收益を以て都市一般の諸經費に充當するの不可なることは明かである。而して此の點に關する市制及び町村制の規定が、本末を顚倒するの甚しきものなるは言ふを待たない。

五

現今都市に於て經營せらるゝ事業の範圍は、之を諸外國の例に見ても、電氣、電力、水道、瓦斯等、主として獨占的性質を有する公益的事業である。更に住宅長屋、簡易宿泊所、托兒所、病院、學校、浴場、墓地、質屋等、都市行政上、社會政策上、當然行はるべく又行はれつつある事業もある。道路、公園、橋梁、照明等に至つては、元是れ純然たる行政的施設であつて、事業といはるべき性質のものではない。此等の施設乃至事業は、本來自治團體としての責任上、また自衞上、市民大衆の利益のために當然行はるべき事柄であるが、しかし唯だこれのみを以ては、未だ都市が都市としての任務を盡したものとはいひ得ない。都市の任務は、進んで更に市民大衆の意思による新社會秩序の創成にある。公的施設乃至公的企業の完成を期すると同時に、一切の私經濟的營利事業を公經濟に移し、之を統制し管理することによつて、一般消費者としての市民の生活を保障することにある。少くとも之を最後の目標として、現在私利私慾の競爭場裡に放任されつゝある諸般の事業を整理按配し、市民の物質的文化的生活に必要なる食料、

貨物、勞務の配給を出來得る限り組織的統一的ならしむることが過渡的施設として都市の行はざるべからざる重要なる政策である。

思ふに、都市政策の道標は、究極して都市社會主義の外に出でない。之を我國都市の現狀に見るも、資本主義的、營利主義的私人企業の弊害は、既に都市大衆の生活を奪ひ、僅に少數の地主資本家を外にして、大多數は今や窮乏のドン底へと逐ひ詰められてゐる。且つその行政施設に於ても、その經濟的企業に於ても、徒に公益の名を冠して實の甚だ相添はざるにかゝはらず、一方財政の方面に於てはしばしば行詰りの窮狀に陷せんとしてゐる。東京市の如きはその最も顯著なる例である。卽ち之を救ふがためには、先づ都市政策上一定の方針を確立することが必要である。社會進化の法則に依據する一の動向を把握することが必要である。而して一切の私人企業を牽制し、獨占的性質を有する瓦斯、電燈、電力等を初めとして、市民の生活に直接の影響を與ふるあらゆる事業を公經濟に移し、之を統一組織することに向つて、諸般の政策を決定すべきである。かくする時、ブルジョア的虛榮心と利己心とに基いて、現に企てられつゝある一切の都市計畫の如きは、直ちに根柢より覆さるべきものなることは言ふまでもない。

最後に、都市社會主義の實行に關しては、世間多くの異論あること固より我等の覺悟するところである。たゞ市民の大多數を占むる勤勞者、及びそれと共通の利害に置かるゝ都市大衆にとりては、究極してそこに到達するの外、彼等の都市生活を幸福たらしむる道なきことを知るのである。

暴露の正體

中野正剛

（一）

田中外交の是非に就ては、天下の大衆は已に明白にこれを審判してゐる。議會に於ける吾人の質問に對して、當局の答辯は、兒戲に類するものであつた、最後の決定者が頭數に存在する限り、現内閣は滿身の創痍を被りながら、尙議會を突破すること丶、必ずしも、不可能ではないかも知れぬ。云ふ もなく彼等の武器とする處は極端なる良心の缺乏、金權の策動以外に何物もない。勝つものが、正義でなく不正であり、政策でなく無恥と厚顏であることを、斯くも念入に實演する以上その反映する處は恐るべきものがなければならぬ。しかも、議會の駈引の如何を問はず、事實はあくまで嚴存するのである。

對支政策に就て尙田中内閣を、支持する餘地があるか否かといふことは、田中内閣の厚顏の程度によりて決すべきでない。國民は當局の無恥に於て、決濟するには、餘りに過大なる實害を負擔させられて居る。

（二）

日支兩國一年間の險惡な對峙は、最近二箇の事實によりてどうやらその一端の動きを示すに至つた。關稅協定の成立と、濟南問題の諒解とは日支間の千日碁の局面を展開させんとして居る。これ等のことは日支關係の打開を熱望した吾人にとつてはそれ限りに於て固より不快なる報道ではない。併しながらその纔かにこ丶に至るまで、國民の拂ひ來つた犧牲が如何に莫大なるものであつたか、その始終の經路を顧み來る時、吾人は今更長大息を禁ぜざるものがある。率直にいへば、今日に於ける關稅協定の成立と、濟南問題の解決とは、日本國民にとりて、名譽ある收穫ではない。否な不名譽なる收穫あるがため、今回兎も角も辛うじて解決を告げ得たのである。何故である乎。顧つて惟へ、昨年來の日支關係上最も重大なる難件は、通商條約廢棄問題である。昨年七月國民政府が單獨の意思を以て舊條約の無效を宣言し來るや、現内閣は支那が廢棄宣言を正式に取消さざる限り、今後決して一切の交涉に

應じない、支那にして態度を改めぬに於ては、日本は斷乎としての決意ある手段を執ると開き直つた。其後支那側の第二次通牒前後に於ける實際的提議に際しても我政府は從前の主張を固執し、支那が面を洗つて出直さぬ限り斷じて對手にならぬと一蹴した。而して政府は官製の强硬政策を高調して、實業家連中を操縱し、頻りに排日恐るゝに足らずと傲語した。排日恐るべきか、恐るゝに値しない乎は、單なる議論の立てかたではない。其後の形勢を觀れば、全支那に亙る排日運動は國民黨の指導の下に組織化され、北は滿洲より南は廣東、南洋に到るまで、我が居留民は種々の迫害にあひ、我が對支貿易は激減し、關西の實業家先づ悲鳴を擧げ、政府は之に對し何等有効なる手段を講じ得なかつたのが、悲むべき現前の事實であつた。關稅協定成立によりて局面が果して好轉するか否かは、自ら別箇の問題である。外務當局が如何に術語を器用に使ひ分くるにせよ、關稅問題は通商條約中の尤も重大なる實質的部分である。此の通商條約中の重要部分を何故我が當局は遽々然として交渉成立に至らしめたか。田中內閣は先方が面を洗つて出直さゝる限り、斷じて對手にならぬと傲語して居たではないか。然るに先方が面を洗はざるに我より面を洗ひて出直し、其の面の皮をヒンむかれて、成立せしめたるものが先般の關稅協定ではないか、其の關稅協定の內容は已に一九二五年の北京會議に於て、日本がこれを承認し支那が最も我國に感謝した歷史つきのものである。然るに今回の關稅協定は、その當年の日支兩國の友誼の連續としてゞなく、喧嘩相手の當然の權利として、支那は二月一日から關稅自主實施の勢を以て恫喝し、我國は其の恫喝の前に辟易して、無條件に屈伏し辛ふじて當面を彌縫したのが今回の協定成立の內容である。斯くの如きことが日本國家の威信に關らずと謂はゞ、そは國家の威信に對し、何等の感覺なきことを立證するに過ぎぬ。現內閣は鬼面を作りて支那を嚇さんとしたが、支那が之に屈せざるのみならず、英米以下歐米の十一箇國が、支那の主張を是認して、關稅改正を成立せしめたので此の國際雰圍氣の壓迫の前に見苦しくも腰をぬかしたものである。（關稅問題と通商條約問題は別箇のものだといふことが一つの詭辯にすぎないことは、將來通商條約改訂の前に國民政府の條約無効宣言廢棄をあくまで現政府が追及するか否かを考へれば明瞭だ）國民政府の完全なる利己主義を帝國政府の完全なる讓步とによりて、成立したものが、今日の關稅協定であることが明白である限り、これは强硬政策の最少限度の成功をも意味しない。從つて、關稅協定の成立それ自身は日支國交上何等全局面の積極的好轉を豫想せしめるものではない。今日關稅協定によりて支那に利益を與へたのは、決して與へたものとして受取られて居ない。彼は力を以て奪取し得たりと信じ、勝ち誇りたる感じをさへ抱いて居る。曩の放言と傲語とは彼の反感を挑發し、今日の退讓は彼の輕侮を招くのみ、與へて感謝せらるゝ所なく、却て足元を見透かさるゝに於て、强硬政策の末路は餘りに悲慘である。

（三）

濟南問題の解決とは何のことかと言へば、畢竟無條件撤兵のことで

ある。無條件撤兵は卽ち濟南出兵の失敗を一目瞭然たらしむる證據に外ならない。見よ安全保證と共に、撤兵時期の聲明、謝罪の取消し、損害賠償の共同調査（この點に關する限り、日本は更に不利なるべき將來の可能性がある）等々、これが所謂解決の內容である。口頭の安全保證なら出兵以前から南京政府が與へたものではなかつたか。單なる口頭の保證を得たと云ふことは、つまり何にも保證を取らぬと云ふことである。此等の解決條件を、彼の事件勃發直後、福田司令官が提出した蔣介石の謝罪以下五箇條の要求に比較する時、政府は何の言を以て辯解の辭となすのであるか。

問題が體面に關する限り、それはまだしも皮相である。緣日商人的大安賣に於て國軍の名譽を臺無しにして、やつと解決された濟南出兵の後始末、此の經過を顧みて、何人か其犧牲の大なるに驚き、效果の絕無なるに悲まざるを得やうか。田中首相の言明によれば、山東出兵は勿論、居留民の生命財産を現地に於て保護するにあつた。然るに現地保護の爲に濟南に出て行つた軍隊が、濟南の現地に於て居留民を保護する能はず、其の生命の喪はるゝもの十數人、其の家宅の破壞掠奪せらるゝもの百數十戶、此の事實は果して聲明の目的に叶ふものであるかどうか。更に出兵前に二千五百人に達した濟南居留民は排日の壓迫を恐れて續々靑島に引き上げ、派遣軍撤退後殘るものは五百人を出でまいと傳へられてゐる。端的にいへば、一億圓に近き軍費を使ひ、三萬の軍隊を動かし、一年間に二千人の居留民を引き上げしむる爲になされたのが、正確にみたる旣の山東出兵の實證である。而してこの出兵こそ、其後の全國的排日を誘致し乍ら、支那側をして、排日運動を合理化せしめた根本の原因であつた。然るに此の斷乎たる事實を無視し、『山東出兵は成功であつた』と空嘯く政府當局者の厚顏無恥、詢に驚くの外ないのである。

（四）

關稅協定及び濟南問題の解決は、從來の行きがゝりからいへば、日本側の一方的讓步の上にのみ成立したものである。而してそれは遂にそれだけのものであつて、それ故に何等日支關係の全部的打開を推進せしむる結果を生じない。現內閣が膝を屈して國民政府との接近にあせり出した此の數ヶ月、皮肉にも滿洲に於ける日本の立場が加速度的に逼塞し來つた事實は、果して何を語るものであるか。田中外交時代の滿洲政策の二箇の尖端は申すまでもなく、七月二十日の南北妥協中止勸告と、所謂某重大事件とである。

南北妥協中止勸告が如何なる責任に於て、如何なる意圖を以て行はれたにせよ、其の結果瞭然として明白となつた事實は、これによつて支那の反感を挑發し、日本自らを傷け、諸外國の猜疑を招來し、（政府の辯護如何は問題でない、內田伯は英米國で何と申した乎）而してそれが結局に於て全然無効に了つたことである。政府の公式辯明によれば、例の南北妥協中止の勸告は、國民政府の條約廢棄の傾向を豫知した素晴らしき政治的透視の下に行はれたものである。然るに國民政府は依然として條約廢棄の態度を固執し、進展せしめながら、素早く本

天と合流して了つた。則ち十月十日、五院制度成立の機會に、張學良は國民政府の最高委員に任命せられ、十二月二十九日、奉天當局は日本側に無通告の儘、東三省全般に青天白日旗を掲揚せしめた。而して一月七日南北妥協反對論の楊宇霆は無慘にも銃殺されたのである。日本は『常に遲れ過ぎた(オールウエイズツーレート)』とは顯著なる事實である。

其重大事件の政治的意味は二重である。鐵道附屬地に於てエックスクルーシヴな行政權が非常の時に支那側に委讓された際、この事件が突發した。陸軍當局は種々辭を設け警備權を引渡したのでない、支那兵を配置はさせたが、我軍は遠方から眼を以て警備して居たと言ふ珍說を吐いたが、兎に角斯くの如き重大なる事件が事實として發生した以上、我が當局者はこの行政權委讓の責任を回避することは出來ぬ、今一つは直接に某重大事件そのものの內容の問題である。張學良當人が「不倶戴天」と放言し、內外の疑惑日本に蝟集する時、六ケ月を經て、尙調査中と稱し、全然口を緘するは何の爲であるか、田中內閣は自己の責任を免れんが爲に、日本政府の名に於て、日本國民にあらでもなき濡れ衣を被せ、其の疑を晴らすの方法を禁止するものに外ならぬ。田中首相は自から直接警備區域引渡しの相談に與かつて居ないから、自分には全然責任はない、そんなことに責任を負ふやうでは總理大臣は何萬人居ても足りぬと放言した。田中內閣のやうに屢々政略出兵を行ひ、其の政治行動の發展の上に出來た事に對し、內閣自ら責を取らずして、國軍を所罰するやうであつたなら、それこそ國軍は何百萬居つても足らぬ。滿洲に於ける軍隊の行動は、治安維持の聲明と稱する田中內閣の對支政策上の行動であり、宣戰布告なき政略的行動なる以上、責任の歸着點は斷じて田中首相にあらねばならぬ。これは嘗つて尼港事件に對し國務大臣が『臣節を全うし』て責を引いたのと同然である。

此の二つの事實は實に田中式滿蒙政策の尖端に過ぎない。滿洲の現狀は低部に於て更に一層暗澹たるものがある。已に尠少ならざる手附金を賄賂的に張作霖に手授し、且つそれ故に日本の「野心」言ロを宣傳された吉會鐵道すら、今回に於て解決の希望は絕無となつて居る。況んやその他の諸鐵道をや、商租權問題をや。之に就て我國が强硬なる談判を開かうとすれば、支那側は常に省民の反對を云々し、逆に排日を仄めかして我を威嚇せんとする現狀である。加之奉天の外交權は既に確實に國民政府に委讓せられたる今日、如何に騷いでも藻掻いても、全支那と全日本とが根底的に諒解し融和せざる限り、何等の曙光をも見出すことは所詮困難である。

東方會議、鐵道交涉、治安維持聲明から非妥協勸告、政權問題と、觀じ來れば田中外交の辿らんとする途は漸次に細くせまつて來る。國民政府の條約廢棄の形勢に極めて先見であつた現內閣は、滿洲の國民政府化に就ては、恐ろしく鈍感を極めた。田中內閣は嘗て東方會議から治安維持聲明に至るまで、濃厚なる「自主的」政策の色彩を明白にした。それが今日國民政府が東三省に對し、『外交は一切中央に歸屬せしむ』と電命するのに對して、袖手傍觀するに至つたのは何の狀であるか。吾人は此の甚だしき懸隔を飛び降るに至つた現內閣の進み方を

許して、始めには脫兎の如く、終りには窮鼠の如しと言はざるの得ぬ。

(五)

日支關係好轉の飛報一度到るや、上海市場に於ける圓相場は昂まり、日本の註文殺倒の傾向ありと傳へらる。こは、申す迄も無く「排日恐るるに足らず」との論據を正反對に立證するものである。昨年度に於ける排日運動が如何に、商品流通の自然を脅迫してゐたか。從つて排日運動の原因が、今日の段階に於ては、支那に工業化といふ經濟的原因よりも、より多く政治的原因に存して居たことが明瞭となつた譯ではないか。

一九二七年に比し、支那の總輸出入額は、昨年、(一九二八年)度は輸出に於て、六分五厘、輸入に於て實に一割一分以上を增加してゐる。此間日本の對支輸出は南方に於て激減し、僅かに北支那滿洲に於て之を補救し、一昨年に比しやつと三百萬圓位の增額を見るに過ぎないことは、明白に排日の影響を數字的に明示するものである。英米獨の對支輸出は、排日の陰を潛行して、約一億圓以上の商品を占領したのである。

排日運動の度毎に、我國の小資本の商工業者は無慘にも沒落して行く。それ故に日本の一般的對支商權の外廓は、漸次に破壞されて行く。而して排日による日本人の精神的屈辱、特に漢口に於ける執拗なる日支對抗の重大性に就ては、縷說するまでもない。隱微の間に成長し蔓延し、將來恐るべき禍根の萌芽たらんとするものは、實に青年支那の闘士の思想的要素たる「日本帝國主義」の幻影である。此の幻影は田中外交の刺戟の下に、甚だしく誇張され擴大されて、青少年の胸裏に拂ふ可らざる陰翳となりつゝある。深く注意すべきは、今日の二十前後の支那人が、その少年の日に深刻なる排日の印象を先入されてゐることである。今日の支那に於けるあらゆる雜誌、新聞記事は、大の時代の支那人の柔軟なる感情の中に強き刺戟と、毒惡なる憎惡とを以て、排日の刻印を打ちつゝある。かくて支那人の反日本的傾向は、彼等の國家主義と共に、日に日に成長しつゝある。排日の重大性は、數字的よりも寧ろ精神的である。現在よりも寧ろ未來に於てゞある。眞に日支の提携を思ひ、東邦の協力を思ふものにとつて、排日問題は眞に國家多年の大計に係はるものである。吾人は斷じて田中首相の衝動的傲語に陶醉することは出來ぬ。

(六)

議論の遊戯的應酬としてゞなく、眞摯なる客觀的批判として、田中内閣の對支外交は今や全く破滅した。日支關係は、今日に於ては、良とか補修とかの域を脫して、全然新なる基礎の上に、建て直すより外に途はない。申さば一つの前科者をして、この上日本國民の意志を代辯せしむることは、大衆の忍びざる處である。尠からざる犧牲なくしては、日支の國交を事前の白紙狀態に引き戻すことすら至難の業である。

問題の眞髓は、前記の箇々の事實に就て、箇々の政策が失敗したことには存しない。凡ての施設は例外なく失敗に歸した。而してその凡てに通ずる失敗の究極的原因を突きとめれば、畢竟田中內閣の現代支那に對する認識不足である。山東出兵の眞意如何に關らず、それの政治的結果は、北伐統一に對する强力なる妨害として表現された。治安維持聲明、南北妥協勸告、凡て同斷である。それは滿洲に於ける日本の利益擁護の自衞的動機の疑ふべからざるものあるにせよ、その形式手段が、一つの支那統一の本能に對する妨害として働いたところに、支那人の反撥の底力があり、日本自身、徹底して行ふの充溢感を失つた原因がある。

支那の國家的統一運動は、近世に於ける支那人の一般的窮乏、環境の刺戟から生れた所の全體的傾向である。地域の尨大、人口の饒多、民族性の複雜、條約上の諸條件の拘束等は、この運動の進行を外面的に著しく徹溫ならしめたるも、その趨勢なるものは曾て底止したことはなかつた。この大衆的動向を組織化し、理論化した孫文は、その死によりて、更に一層の宗教的熱情を三民主義の使徒達に與へたのである。運動が加速度的に回轉し、兎も角全支那が靑天白日旗に支配された一九二八年は支那歷史に於ける記錄さるべき年である。吾人は國民政府を買ひ被りもせねば又けなしもしない。國民政府の內部的安定の程度を立ち入つて詮索すれば、そこに幾多の不滿はある。然しながらそれ故に國民政府の全體的輪廓を見失ふことあらばそは大なる政府眼の缺乏を意味する。日本が支那と握手すべきものにせよ、或は又握手するを許されざる立場の下にあるにせよ、いづれにしても日本の正面の對手とする所のものは、この政權とその背後の國民より外はない。

（七）

斯の如き新形勢は日本の問題として、如何に有機的に把握せらるべき乎。今日の支那は露國に對する緩衝的意味にも非ず、列强勢力の均衡の槓杆たる意味にも非ず、それ自體の自律的價値を以て、堂々と日本の前に存在を主張しつゝある。この取扱ひ方如何によりては、日支兩國の全體的握手が可能であり、又全面的鬪爭の可能性もなしとは云へぬ。月並みの口頭禪としてゞなく、支那問題が曾てなき重大性を帶びて、日本大衆の興味を打つに至つた所以はこゝに存して居る。

吾人が顧みねばならぬことは、今日斯の如く、日本に反噬の傾向を示す處の國民政府の諸要素は、その實いづれの國にもまして、我日本と過去の因緣に結ばれて居るの事實である。孫文の革命生活は三十年を越ゆるが、此三分の一世紀間に世界の形勢は變轉した。支那の革命運動はこれにつれて、幾度か其內容を轉化せしめた。今回の國民黨政府を往年の同盟會と比較すれば、其指導原理に於ても、構成內容に於ても、尠からず變化して居る。特に聯露容共の一經驗を經た後に於ては、卒然として見れば、全然別箇のものゝ如くすらある。しかもそれは、斷じて別箇のものではない。同盟會の成長したるものが國民政府であり、今日の國民黨は其幼年時代に於て、最も多く日本學の影響の下に其革命精神を培養したものである。

國體の問題に就て敏感なことは日本國民の特長である。しかも吾人の先輩は隣國の革命に際し、形式を超越して核心を把握し、あらゆる同情を傾けて南方の闘士を後援した。頭山翁も犬養老も、日本の志士として支那革命育ての親であつた。今の社民黨の龍介君の乃父宮崎滔天君が江湖に流浪し、浪花節に託して支那革命の精神を鼓舞した、浪蔓的光景は當時の日本青少年に如何なる反響を與へたか。第一時革命の勃發に際し、少數當局者の理智は、英米の袁世凱援助政策に對して、勘からざる氣象を感じながらも、日本國民の大衆は本能の指示する所に從つて、其向ふ處を誤らなかつた。何が日本國民の本能であり聰明であるか。それは、世界政策上に於ける日支協力の要求である。支那が頽廢し、其糞土の牆たることが直ちに日本自身の危險たる事實を直感せることである。實に日本の過去の政策は、支那の弱さに於て自己の利得を擴大せんとする相對的境地を高く飛び越えて、直ちに相互扶助の大境涯に透徹してゐたのである。日本文字の流通範圍が七千萬の吾民族に限られてゐることが、日本の弱點の一つであることを理解するものは、同時に日支「同文」といふことが、尙、今日に於ても潑溂として活きた事實たることを看過してはならぬ。實に、支那に流入する各種の思想は、日本文字を通じて日本の篩にかけられたものである。識者は明末の亡命客の齎らした王覇の辯が、水戸學に於て、明治維新を刺戟し、明治維新の廢藩置縣が、民國十八年の編遣會議の一典型として倣はれてゐる事實を何と見る乎。今日千載一遇の機會に於ても尙日支關係を單なる外交事務と解することの如何に無理想にして低調なるかを思はざるを得ない。

（八）

國家主義の範圍に於ても、今日の日支兩國は、背反衝突するのが部分で、扶助互惠するのが原則である。支那の統一に伴ふ保護關税の傾向、海港地の工業化に伴ふ粗工業の日本品との競爭等は、いふまでもなく皎著なる事實である。但し單に支那品に對抗するといふ視點から許りでなく、日本工業の精工業化といふことは我國の絶對的立場から見ても、必然に進むべき方向である。日本が支那の大勢を大觀しつゝ粗工業を支那に委讓すると言ふことは、退却を意味せず、日本商業を集約的ならしむるために、日本人の覺悟を要する産業政策の重心である。

併も現實の支那は主農國である。その工業化は一朝一夕ではない。支那の統一に伴ふ購買力の增加が一年一人當て一圓としても、年々四億圓の市場は日本の近距離に於て新に開拓せらるゝ計算である。實に支那問題は、日本の不況及びそれに基づく社會不安に對する解決の鍵の一つとして、一箇の內政問題ですらある。支那問題が日本にとりて根本的重大性を藏する所以は是にある。此の意味に於て亞細亞諸國の政治的解放は、日本の國際政策として、其の實行性及び道義性を具備するのである。田中外交が脆くも中途に於て挫折し、崩壞したのは、日本及び隣邦の大衆が、感覺的に本能的に之を嫌忌するからである。現內閣諸公は奇怪にも自ら國粹主義を標榜するに關らず、その實際は機械的帝國主義の輸入品禮拜以外に何等の深刻味を有しない。

　滿洲問題は取扱方如何によりては、謂ふまでもなく一箇の危險なる材料である。北滿の曠野に『亞細亞的協力』の資源であり得ると共に、一歩を誤れば次の世界戰爭の暖床ともなり得るものである。

　滿洲問題の本質が純粹に經濟的である限り、支那は日本の現實的立場を諒解し、其の必然性を洞察せねばならぬ。資源の大小が國力を決定する最後の條件たる意味に於ては、日本こそ支那に比ぶればまさしく無産者である。日本の人口食糧問題に對して一切眼を閉ぢ、その捌け口を封することは、世界の協力を以つてしても不可能である。支那人は自國の革命が帝國主義に對する解放であることを正視するが如く、日本の經濟的封鎖は噴火口に蓋して爆發を馴致するの危險事たるを看取せねばならぬ。彼の三民主義の解釋に於て、臺灣を支那の領土なりと放言する程の外交官を有することは、斷じて支那の幸福ではない。但し滿洲に於ける日本の經濟的擴充を徹底さするために、領土的獲得を必要とするかの如き幻影は、日本人自から未練なく自己の腦裡より一掃すべきである。斯の如き尾骶骨的心理作用こそ、實に日本の滿洲政策の公明さを疑はしむる原因である。滿鐵の配當の一部分を除き、滿洲に於ける日本投資十五億圓の利益の大部分は、支那人を潤ほし、支那の人口を滿洲に吸收しつゝある。然るに支那人はその利益に浴しながら益々排日の氣勢を加重せしむるのは何故である乎。漠然たる領土慾の幻影が彼等を脅威するからである。統一せる全支那の一部として、支那の主體そのものを對手とするに非ざれば、滿蒙問題、引て支那問題の徹底的解決は不可能である。

徳富蘇峰論

馬場恒吾

徳富蘇峰氏は私の先生である。私は大正三年八月から約十年間國民新聞記者として先生の薫陶を受けた。それにも關らず、私が蘇峰論を書く事は僭越至極と見へ、又例令僭越でないにしても、味方身贔負で、先生の良い事許り書くであらうと思はれる。それ故に先づ私が何故蘇峰論を書くかと云ふ事からして辯解してかゝらねばならぬ。

蘇峰氏が國民新聞を去られた時、私は蘇峰論を書かねばならぬと決心した。國民新聞は蘇峰氏が創立して、蘇峰氏が四十年間其心血を注いで來た新聞である。世間では國民新聞と蘇峰氏とを分けて考へる事が出來なかつた。それが時勢の變遷とは云へ、蘇峰氏も國民新聞を去らなければならなくなつた。これは蘇峰氏自身に採つても余り快き事でないのは勿論であらうが、世間一般も亦之を極めて不愉快な出來事だとする。殊にそれは新聞界には深刻な衝動を與へた。個人の愉快、不愉快と云ふ如き感情問題ではなく、言論と資本の關係を規定する所の、一つの社會的な問題として考へなければならなかつた。それ故に私は蘇峰論を書くと決心した。

併し默つて書く事はそれこそ私としては出來ない事であるから、私は蘇峰氏を訪ねて、蘇峰論を書く事の諒解を求めた。それには先生の許可を得た。同時に私は此蘇峰論は私の自分流儀に書く事をも斷はつた。それにも先生の諒解を得た、

尤も私が私の自分流儀と云ふ事には蘇峰氏は馴れてゐられる。私は大正九年頃から、國民新聞の編輯局長をしてゐた。蘇峰氏は一週間に一二度東京に出て來る以外は、大抵は逗子で歴史を書いてゐられた。その間、新聞の編輯方面、殊に言論に關する方面の事は、大抵私と、今東京朝日に居る石川六郎君と

人で相談して遣つた。偶には逗子へ電話を掛けて蘇峰氏の諒解を求めた事もあつたが、急ぐ場合には新聞を出した後に、事後承諾を求めるやうな事もあつた。政治家や陸軍の巨頭を攻撃する時に、一々それが蘇峰氏の親友であるか否かを考へる余裕がなかつた。さうして無遠慮に四方八方に當り散らしてゐた時には、随分蘇峰氏に苦しい思ひをさせたらしい。或時蘇峰氏は、

『新聞を有つてゐると、段々古い友人を失ふ。併しそれも已むを得ない』

と云はれた事がある。私は其當時やつてゐた軍閥攻撃が先生を苦しめてゐると思つた。蘇峰氏はそれを中止せよと云はれなかつた。それ丈け尚更氣の毒に感じた。

吾々の書く事が余程目に余るやうな無茶でない限り、蘇峰氏は默つて視て居られた。それが氏の流儀であつた。また蘇峰氏の目に余るやうな事を書いても、頭から小言などは云はれなかつた。蘇峰氏は默つて、それと趣旨の違つた論文を書いて、新聞の立場が誤解されるのを防ぎ、同時に間接に吾々に教へられた。そのことを、新聞社に居る同僚は、馬場が金屏風に樂書きをしたのを、社長が後から金泥を塗るのだと云つた。それほど蘇峰氏は自分の使つてゐる記者に向つて寛大であつた。

敢て其寛大に馴れたと云ふ譯けではないが、私が蘇峰論を私の自分流儀に書くと云つたとき、私は蘇峰氏に昔の儘の寛大さを求めたのである。蘇峰氏は私の脱線振りは知り過ぎるほど知つて居られる。それにも關らず私が私の自分流儀に蘇峰論を書く事を承諾されたのは、私に相當の自由を與へられたものと諒解した。それ故に、此蘇峰論は必ずしも師弟の關係で束縛されてゐない。

讀者の先づ知らんと欲する所は、蘇峰氏は何故國民新聞を出たかと云ふことであらう。それは私の知つてゐる範圍では、蘇峰氏は居るに居られなくなつたから出たのだと斷定する外はない。何故居るに居られないかと云へは、蘇峰氏の自尊心がそれを許さなかつたと云へる。如何に自尊心が傷けられたかは社内に於ける社長室の件のみでも判る。

震災後國民新聞社が新築されてからこそ、徳富社長は社長室に居るやうになつたが、私等の居つたときには社長室と云ふものはなく編輯室には社長も幹部も、平記者も給仕も雜居してゐた。編輯には縦に三列に机が並んでゐて、中央の列の頭の所に蘇峰氏の机が中央の列を見渡すやうに置いてあつた。其列の机には兩側に記者が並んでゐる。蘇峰氏に最も近く編輯部、それから地方部と云ふ順序に居流れてゐた。蘇峰氏の方から云つて左側の列には外報部、政治部、經濟部が居り、右側の列には社

の元老、其次に社會部が居た。私が十年居る内に、机の振り當ては二三度變更された。或は社會部と編輯部と向ひ合つた事もあり、經濟部と社會部と入れ代つた事もある。併し蘇峰氏が編輯室に雜居してゐられた事は變らなかつた。

蘇峰氏は自分の机で原稿を書かれる事もあつたが、併し其時間は極めて短かつた。歷史とか續き物の論文とか朝早く、家で書かれる。社に來られると原稿を編輯の記者に手渡される。時事短評のやうなものは社で書かれるのであるが、一段位のものは十分か二十分で書き上げるのであるから、蘇峰氏が机に向つて原稿を書かれると云ふのは極めて短かい時間であつた。大抵の時は外國の新聞、偶には書物を讀んでゐられる。さうでない時は、社員の誰れかの机に來て、手の隙いてゐる記者を相手に話しをされる。冬になつてストーヴがある時には、社員がストーヴを圍んで無駄話をしてゐると、蘇峰氏も其中に交つて世間話しをされる。新聞の空氣は毎日さうして作られた。

所で中に油斷の出來ない事もあつた。蘇峰氏は人の知る如く、當代の政治家と極めて親善な交際をしてゐられる。だから政治とか外交とかの種になると大抵の新聞記者の知り得ない機密を知つてゐられる。それを社に來て中々話されない。尤もそれは蘇峰氏が新聞記者として取つた種でないから、話されないのが當然であるが、自分の社の者に對してもそれを話されない。吾々が種が取れなくて色々評定してゐると、蘇峰氏がニコニコして默つて聞いてゐられる事がある。其顏色でこれは社長は知つてゐるなと腹の中で思ふ事もあるが、敎へて下さいと云ふのも强腹であるから、此方は此方で努力して種を取らうと勉める。

併し永年の新聞記者としての經驗は恐ろしいものだと思つた事は度々ある。蘇峰氏が私に向つて、今度はかう云ふ問題を一つ突ついたら面白からうと云はれる。私は腹の中でなあに大いして面白くもあるまいと思ふ。併し社長の云ふ事であるから、少しく突付く。中評的に論文を書く。すると案外に世間の共鳴したり、外の新聞が付いて來る。それに勢を得て、馬力を掛けて行くと、終にはそれが國家の重大問題に發展する。私は多くの新聞記者を知つてゐるが、物になるべき問題を發見する機敏さに於て、蘇峰氏の右に出づるものゝある事を知らない。假りに蘇峰氏が初めから國民新聞を有たず、只の平記者として世間に投出されたとしても、彼れの問題を捉へる手腕丈けで以て、容易に日本一流の新聞記者となり得た事に疑ひはない。幸か、不幸か、彼れは初めから新聞社長であつて、普通の雇はれたる新聞記者としての評價を受ける機會がなかつた。だから、

世間では彼れの文章とか見識とかを稱揚しても、純粹の新聞記者としての彼れの技量を云ふものが少ない。

話しが横道に外れたが、國民新聞の紙面に現はれる所の、新聞種の活躍と云つたやうなものは、蘇峰氏が編輯室を迂路々々して、誰れ彼れの區別なく雜談されてゐる間に生れて來た。吾々は蘇峰氏の話しの間からヒントを得たり、考へ出したりする例が多かつた。其代りに若い連中の突飛な思想や、無遠慮な氣焔も亦、蘇峰氏を新らしき時代に曳ずつて行く効果もあつたと思はれる。兎も角も編輯局全體に家族的で、和氣靄々たる空氣が漂つてゐた。そして一朝何か大事件があると、社内全體が一緒になつて突貫して行く。それが國民新聞の生命であつた。他の資本の豐かな新聞社に對しても、或は社會全體に對しても、一敵國の觀があつたのは此强味があつたからだ。

國民新聞が新築されて後、社長は社長室を與へられた。蘇峰氏は社長室に納まつた。納まつたと云へば體裁がよいが、實は祭り上げられた形になつた。偶々蘇峰氏が編輯室に出て、ストーヴ會議の仲間に入ると、一人去り、二人去り、蘇峰氏は獨り取り殘される。蘇峰氏に話し掛けられる記者は誰かに見られはせぬかとおど／＼した樣子である。それが東京の本社に於てのみさうであるかと思へば、蘇峰氏が支局のある地方都市に旅行して行つても、支局員は誰れも相手にしない。或支局長は、

『先生に余り近しくすると本社から睨まれるから』

と故々斷はつて來る。誰れが斯の如く蘇峰敬遠の空氣を作つたか判らぬが、蘇峰氏として、永くさうした空氣の中に棲息出來ない事は誰れにでも諒解されるであらう。

かうした風に蘇峰氏の勢力が薄れて行つたのも、根津嘉一郎氏の資本を國民新聞社に招き入れた事の必然の結果であつた。根津氏の投資後、蘇峰氏は新聞社長の名儀を有してゐたが、實權は社長になかつた。定款に依つても、重役會を代表して社の經營の任に當るものは社長ではなくして副社長であつた。蘇峰氏は社長であるけれども、金錢の出入に對して發言權がなかつた。從つて社員の任免に對しても發言權がなかつた。蘇峰兒飼の社員、蘇峰氏に接近する社員は片端から退社せしめられた。蘇峰氏は原稿を書くのが速かな代りに、其文字は普通の活字職工には難解であつた。だから、それを工場に出す前に、清書する人があつた。根津氏はそんな人を雇つて置くのは無駄だ。自分が德富に話して、判り易いやうに原稿を書けと云ふと云つたと其言葉が蘇峰氏に傳へられた。文筆に苦勞した事のない根津氏としては、それが當り前の事を當り前に云つたとしか思はないであらうけれども、併し原稿に書く文字にまで干渉せられる

と云ふことは、筆を取る身に採つては耐へ難き屈辱だ。それが蘇峰氏の矜恃の心を傷けるのは勿論、實際に於て原稿を書く能率にも關係する。

蘇峰氏は若い時には肝癪持ちであつた。私は目撃した事はないが、たゞ社員の話しを聞くと、蘇峰氏は怒ると、新聞を綴込む木の棒を以て小僧を打たれた事もあるさうだ。私が社に居る時、私はどうしたものか、頭から怒鳴られた事はないが、外の人が年に一度か二度怒鳴られたのを見た。それも年と共に段々稀れになつた。私の頭に印象されてゐる蘇峰氏の顏は何日もニコ〳〵してゐられる好々爺のそれである。併しそれと同時に蘇峰氏の胸中には理智に鋭い、何物をも燒き盡くすやうな火が燃へてゐる事は、其書かれる文章、平生の雜談の言葉の端にも明かであつた。決して元氣銷磨でない。元氣は旺盛であつた。だから年と共に怒られなくなつたのは、圓滿な人物を志しての忍耐と苦心の結果であつた。過去二年半の蘇峰氏の生涯は忍從其物の形容に外ならなかつた。

蘇峰氏は新聞社の經營に參與せしめられなかつた。併し進んでそれに參與しようともしなかつた。社の事で聞かされゝば聞き、聞かされなければ聞かうともしないと云ふのが彼れの一貫した態度であつた。求めらるれば何處でも出席し、求められなければ社長室に引込んで勉強せられた。其態度は余りに溫和しきが爲めに、根津氏の代表として社に來てゐる副社長、總務局長などは、蘇峰氏と接觸するに從つて、蘇峰氏贔負になつた。現に最後の副社長であつた河西豐太郎氏の如きは衷心より蘇峰氏を尊敬してゐた。それ故に、彼れは根津氏と蘇峰氏の間に板挾みになる苦しみに耐へ兼ねて副社長を辭職した。蘇峰氏も亦折角自分を諒解して呉れる河西氏が罷めるならば、自分も決心せねばならぬと言明された。そして河西氏と同時に退社される事になつたのである。

蘇峰氏は大抵の事は我慢した。其隱忍柔和の態度は蘇峰氏の性狀を知つてゐる吾々には、後から聞いてすら驚異の種である。併し蘇峰氏は如何に忍耐せんと欲しても忍耐出來ない點があつた。それは新聞記者としての彼れの言論文章に干涉さるゝ事であつた。

其干涉の一例としては、昨年秋、蘇峰氏の書く夕刊の評壇が一時中止された事である。國民新聞へ投資した根津氏の希望として、此評壇を熄める事を蘇峰氏へ傳へられた。蘇峰氏は自分の意志にあらずして此評壇を撤する旨を發表されると、それを中止してはいけないと云ふ讀者の投書が編輯局に山積した。その結果評壇が復活される事になつた。

然るに此評壇に關しての根津氏の注文が再び蘇峰氏に傳へられた。根津氏は此評壇に於て書物の批評や、記行文（根津氏はそれを記事文と呼んだ）が載せられるのを不滿として、其代りに時事問題を取扱つて貰い度い意志であつた。根津氏の希望として蘇峰氏に示された書き付けには、かうした時事評論の題目となるべき數ケ條の項目が記されてあつた。

これは蘇峰氏の憤を招いたのも無理はない。私の如き下つ葉の新聞記者ですら、蘇峰氏からかう云ふ問題で書いたらどうかと云はれると、少しく筆が進まなくなる。自分で書かうかと思つてゐる題目である。相手は蘇峰氏である。それですら、指圖されて書くとなると、指圖されないで書く時ほど元氣がない。四十年間日本の言論界の第一人者として立つた蘇峰氏が、實業家の根津氏の指圖に依つて評論を書くと云ふ段になると、私が蘇峰氏の指圖に從つて社説を書くのとは比較にならない。併しこれが爲めに國民新聞を去るに至つた蘇峰氏の心持ちは、苟くも筆を以て世に立つ程のものならば、誰れでも諒解出來るであらう。

蘇峰氏が國民新聞を去つたと云ふ事は、蘇峰氏の公生活の問題としては大した事でない。元より過去四十年間育て上げた國民新聞と別れると云ふ事は情に於ては斷腸の思ひがするであらう。それは個人としての感情である。公人としての蘇峰氏の生命が國民新聞を離れる事に依つて、滅亡して了ふかの如く云ふ人の說には同意出來ない。固より自分の新聞を有することは、自己の意見を發表するに便利であるには相違ない。同時に、其意見は新聞の固定したる讀者以外には讀まれない損失がある。蘇峰氏は國民新聞を有すると有せざるに關らず、日本の指導者である。何事かあるときは國民が其意見を求める。それには必ず發表機關が提供される。今迄は國民新聞の蘇峰氏と云ふ感じがしたのが、今後は天下の蘇峰氏である。國民新聞が滅んでも蘇峰氏は滅びない。國民新聞を離れると、蘇峰氏の影が薄くなるやうに、悲憤慷慨するものもあるが、私はさうした叫びを聞いても片腹痛くなる許りだ。

だから蘇峰氏が國民新聞を去つた事は、言論界の指導者としての蘇峰氏の權威を増しもしなければ滅じもせず、つまり大した問題ではない。併し此事件を言論と資本の關係と云ふ觀點から見ると、其所に社會的に考へさせられる問題が伏在してゐる。それは新聞は大きくなるに從つて、自己を資本の統制に移して行く。そして資本の統制が完成せられるとき、其所には言論の自由も人格の尊重もなく、資本はスチーム・ローラー式に總べてを蹂躙して資本の行くべき道を行くと云ふ事である。

蘇峰氏は資本家でない。若し資本があると云へば一本の萬年筆が資本である。六十七歳の今日、如何にして生活すべきかを考へねばならぬと云はれた。一月十五日、蘇峰氏に對して最後の留任勸告をなすべく、新聞社の重役四名は蘇峰氏の大森宅を訪ねた。其時は蘇峰氏は已に友人間に退社の挨拶をすべく出掛けた後であつた。重役連は德富夫人に面會して、先生と云つても財産家でない。新聞社の五十萬圓の株が重もなる財産と見てよい。先生が社を罷められると、此株もフイになるかもしれぬ。それ故に奥樣からも、先生に社を罷められぬやうにお薦め下さいと云つた。夫人はこれに答へて、主人はあのやうな氣象ですから、一度云ひ出したら中々聞きますまいと云つた。蘇峰氏は國民新聞を捨てる決心をする前に、先づ夫人の贊成を求められた。そして夫人は生活苦の迫る事などは考へずに、蘇峰氏の決心に贊成した。それを蘇峰氏は衷心から感謝して居られた。

兎も角も蘇峰氏は資本家でない。併し氏の新聞社長として四十年の經驗は、新聞は大きくなるに從つて資本の統制に自己を移入して行くものである事を示す實例である。そして其移入が完成したとき蘇峰氏は新聞を去つたのである。

蘇峰氏が明治廿三年二月一日に國民新聞を創刊した時は決して資本家と云ふ資格に於てゞはなかつた。新聞を創める爲めに、日吉町にあつた共存同衆の演説會場を五千圓で買つた。共存同衆と云ふのは馬場辰猪、金子太郎などが作つてゐた青年政客の集會所であつた。それが衰へて、其演説會場を持余してゐた所を、蘇峰氏が國民新聞社として買つたのである。五千圓の金はそれ迄二年間發行してゐた國民の友の利益が殘つてゐたものと見えて、國民の友の共同經營者たる湯淺次郎氏の手から出された。湯淺次郎氏は當時已に社會的信用のある實業家であつた。だが國民の友を出すには別に金は要らなつた。蘇峰氏が湯淺氏の宅の玄關で原稿を書き、それを秀英舍で印刷して貰ひ、雜誌の賣上げで印刷代を拂うと云ふ仕組になつてゐたからである。

蘇峰氏が世に出た徑路は極めて簡單なものであつた。明治十八年に彼れの出世作の一つたる『新日本の青年』が田口卯吉の東京經濟誌から三百部出版されたのである。その時は『新日本の青年』と云ふ題でなく、『第十九世紀日本青年及其敎育』と云ふ極めて田舍風の題を付けてあり、著者の名も本名でなく、大江逸と云ふ變名が使つてあつた。其當時二十二歲の蘇峰氏はまだ郷里の熊本に居たのである。所で、此無名の青年の著書が井上毅の愛讀する所となり、井上は有賀長雄をして批評を書かし、會ふ人毎に之を推賞した。其結果が蘇峰氏は聊か郷黨の先輩に

認められる事になつた。

翌年蘇峰氏は今一つの出世作たる『將來の日本』の原稿を懐にして東京に出た。それを田口卯吉の經濟雜誌社へ持つて往つたけれども、田口は其出版の危險を冒すことを欲しなかつた。それで蘇峰氏は自費で印刷し、五十錢の定價を付けて、三十五錢で經濟雜誌社へ卸ろした。此書物が夥しく賣れたので蘇峰氏は漸く息を吐いた。それで翌年は湯淺次郎氏と共同して國民の友を出す事が出來た。

國民新聞社となる家を五千圓で買ふ事は出來た。併し家許りでは新聞は出來ぬので、彼れは千圓を上州原市の牛田平二郎氏から借りた。湯淺氏が保證人になつてゞある。外に五千圓を熊本の藤崎彌一郎と云ふ金貸から借りた。此金貸しとの緣故としては蘇峰氏が金貸しに助言して儲けさした事があつたのである。當時紙幣の相場が下落して、銀一圓に紙幣一圓七十錢が交換されてゐる。蘇峰氏は經濟に關する書物をひねくつてゐたから、紙幣の相場がさう何日迄も下落してゐるものではないと考へて、此金貸しに紙幣を買つて置く利益を說いた。此說を採用して金貸しは相當に儲けた。其御禮心に五千圓を貸すと云つたのである。だが併し貸すには相當信用のある保證人を立てゝ吳れと要求した。蘇峰氏は湯淺氏に保證人たる事を求めたけれども、湯淺氏は已に牛田から借りた千圓の保證人になつてゐるが故に、尙此上に五千圓の保證人たる事を肯じなかつた。殊に湯淺氏は新聞を出す事には余り贊成でなかつた。蘇峰氏が頑張るが故に已むを得す援助してゐると云ふ形であつた。結局此借金の保證人には新島襄氏が立つたのである。

今でこそ相當の新聞を作らんとすれば、如何に少なく見積つても、五百萬圓以下では物になりさうにない。四十年前は流石に僅かの金で新聞が出來た。併し如何に金の高が小さいとは云へ、自分に相當の資本がなくして新聞を經營する事は決して容易な事業ではなかつた。蘇峰氏も金の爲めには屢々苦難の經驗を嘗めた。今になつても時々話題に上るのは早稻田の大隈老人より借りた金の事である。蘇峰氏は明治二十九年より三十年に掛けて一年余りの洋行をした。其旅費が足らないので、一萬圓余りの金を大隈老人の口利きで或銀行から借りた。畢竟するに大隈老人より借りたと同じ事であつた。

洋行から歸つた後も、松隈內閣の存續中は無事であつた。然るに松方と大隈は增稅問題で衝突した。蘇峰氏は遼東還附事件以來、熱心な對外硬の論者であつた。對外硬を貫く爲めには軍備を充實せしめねばならず、軍備を充實する爲めには增稅をも避くべからずとした。それ故に大隈一派が民論に迎合して、此

大趣意を忘れてゐる事に憚らなかつた。蘇峰氏は大隈を追出しても、松方內閣をして此主張を實現せしめんとした。然るに松方は世間から後入齋と云はれるほど、誰れでも後から來て話しをするものゝ說に動かされる。だから蘇峰氏は自分で錐を取つて松方が大隈と手を切ると云ふ聲明書を書き、それを松方に承認させた。それと同時に通信社の越野宗太郎氏を首相官邸に呼んで置いて、松方が承認すると同時に、この手切れ聲明書を發表さして了つた。一時間後に色々の人が來て、松隈內閣の分裂は少しく待つて呉れと云つたが、已に手切れ聲明書が發表された後だから致方がないと云ふ事になつた。

大隈老人と晩年には蘇峰氏と親友になつたが、松隈內閣分裂後十年は絶交の形であつた。其直接の原因は明治三十年の暮れに蘇峰氏が逗子から大隈に出した手紙であつた。蘇峰氏は自分は逗子に門を閉ぢて書を讀む境地に居る。松隈內閣では大隈と意見を異にしたが、自分の本懷はかう〳〵であると、丁寧懇切を極めた手紙を出したのである。大隈はそれに返事すら寄越さなかつた。のみならず、蘇峰氏の此手紙を報知新聞記者に見せたと見えて、報知は此手紙を掲げて、德富のザマを見ろと云ふ記事にした。蘇峰氏は必ずしもそれが大隈が惡意で發表したものとは考へなかつたが、兎も角それ以來十年間は大隈とは口を利かなかつた。

大隈との交情が冷かになると共に、大隈の銀行は蘇峰氏に向つて遠慮會釋なく借金の返濟を求めた。其催促が余りに五月蠅いので蘇峰氏は新聞社の印刷機械の代金を大隈の方に振り向けて、大隈からの借金を返へした。同時に印刷機械の代金として、三井へ納める金が拂へなくなり、今度は其方の催促に苦しまされた。

其時である。蘇峰氏は切迫詰つて、國民新聞の共同經營を三井の益田孝氏に持込んだ。つまり國民新聞の資本の半額を三井に持たしめんとする案である。益田孝氏はよく蘇峰氏を諒解してゐた、然し考へた後に此半額出資の提議をば斷はつた。其理由として益田氏は云つた。自分は金を出しても筆は立たない。イザと云ふ場合に、新聞で書き捲くるのは蘇峰氏だ。だから出資は御免蒙ると云ふのであつた。

後になつて蘇峰氏は益田氏の斷はつて呉れたのを喜んで居られた。もしあのとき、國民新聞に三井の資本が入つて居やうものならば、國民新聞は最早自由な言論機關でなく、三井の御用新聞となつてゐたかもしれぬと話されてゐた。新聞が大きくなるに従つて、其必要とする資本も亦大きくなる。蘇峰氏は資本家から金を借らなければならなかつたけれども、新聞の言論の

自由を賣らない程度に金を借りた。震災前には新聞も自給自足の財政狀態に居つた。蘇峰氏は逗子で歷史を書かれ、東京の若い連中は自由自在に筆を飛ばして、誰れからも苦情を持ち込まれなかつた。時々東京に來られる蘇峰氏はニコ／＼して吾々のなす所を見てゐるられた。

所が震災が來た。國民新聞は全部灰になつた。其復興に少くとも七十萬圓の金は要ると見られた。蘇峰氏は最早逗子に引込んでゐる譯に行かない。自から陣頭に立つて新聞を興すと云ふ決心をされた。夕刊の評壇に蘇峰氏が毎日書かれるやうになつたのも其爲めである。さうして社が四苦八苦の最中に、主婦之友の石川武美氏が、初めは國民新聞復興の爲めに、十萬圓を無條件に提供する事を申込み、後には百萬圓迄出資する契約を結ぶに至つた。そして石川氏を國民新聞の副社長として、其經營に當らしめる事にした。石川六郎君と私は其時退社したのである。

吾々の退社の時を顧みると少しく滑稽な事がある。其當時は清浦圭吾子が貴族院の研究會に擁立せられて、所謂特權内閣なるものを組織してゐた。國民新聞は初めから此内閣に反對してゐた。清浦子が内閣組織の大命を拜受し直後の十三年一月二日の朝、蘇峰氏は大森の清浦邸を訪ねて、清浦子に内閣を組織する事を諫めた。其所で清浦子も大命を拜辭する決心をして、蘇峰氏に賴んで大命拜辭の聲明書を書いて貰つた。それをポケツトに入れて、清浦子は研究會幹部の集つてゐる華族會館へ出掛けたのである、一方蘇峰氏は大森から、新聞社に電話を掛けて、清浦子は大命を拜辭する決心をしたと云つた。新聞社は直ちに號外を出した。清浦子が研究會幹部に大命拜辭の宣告をする前に、その事が已に世間に知られてゐた。清浦子は大命拜辭の積りで參内し、宮中で平田内大臣に說かれて又内閣組織の決心を起し、結局清浦内閣を組織したのである。

かうした事情から吾々は清浦内閣に反對してゐた。新聞記者團が護憲運動の先頭に立つてゐた。二月五日上野精養軒で政友會、憲政會、革新俱樂部の三派の會合があつた時、私は新聞記者團からと云ふので演說した。其中に、清浦子などは特權と云ふ舞台に乘つてい〻氣になつて踊つてをる。舞台が落ちるのを知らずに居るなと云つた。

所で、舞台の落ちるを知らないのは私自身であつたのが滑稽である。翌日石川六郎君と私は、蘇峰氏から石川武美氏に自由手腕を振はす爲めに、編輯幹部の地位を退いて與れと云ふ相談を受けた。それは新聞復興の爲めに已むを得さる處置であるから、私共は些の不平もなく新聞社を退いた。只永く師事してゐ

た蘇峰氏と別れるのは全く心の底から辛らかつた。冷靜なる事氷の如き石川六郎君でさへ涙ぐんでゐた。私も泣き度いやうな氣持ちがして仕樣がなかつた。さうなると、何よりもかよりも、編輯の外の連中に女々敷いと思はれないやうに仕度いと、それのみ一生懸命になつた。そして勉めて平氣を裝つて社を退いたが、其時は全く腸を千切られるやうな思がした。

石川武美氏は腹の底から紳士に出來上つてゐる人である。彼れが國民新聞に出資したのは、平生から蘇峰氏を尊敬してゐる爲めに、新聞復興の爲めに力を添へ度いと云ふ心から出た。併し三ケ月許り新聞社に關係してゐると、彼れの本業たる主婦之友の方がお留守になり、兩方を經營することは人間業では出來ない事に氣が付いた。主婦之友の社員は、主婦之友で儲けた金が、國民新聞へ注ぎ込まれると云ふ事に不平を抱いた。三ケ月許りの經驗で石川氏は新聞經營に自信も付き興味を覺へたけれども、同時に、これ以上深入りすると主婦之友を捨てなければならぬと思つた。彼れが蘇峰氏に向つて退社を申出たとき、蘇峰氏は社長の椅子を提供すると迄云つて引き留めた。併しどう勸告されても石川氏は留まる事が出來なかつた。彼れが國民新聞に投資した三十五萬圓は今でも彼れの持株として殘つてゐる。併し石川氏は云ふ。自分は三十五萬圓にも百萬圓にも代へられぬやうな有益な經驗をした。主婦之友のやうな個人經營の社では、自分が居なくなると社がいけなくなる。これはどうしても株式組織にして、自分が居なくなつても、社は社で行く經營出來るやうにせねばならぬと考へた。それで主婦之友も株式組織にした。その爲めに社員の動搖もあつた。併しそれも通越して堅固な基礎が出來たのは國民新聞に關係した教訓からだと。

國民新聞に對する次ぎの出資者は根津嘉一郎氏であつた。世間では根津氏が悪辣な資本家で、國民新聞を乘取つたのだと云ふ。其證據として、國民新聞社三百萬圓の資本金の內、根津系の持株百六十五萬圓、外に缺損七十八萬圓は大抵根津氏が出してゐるので根津氏は其利子を社から取る。所で根津系の持株は皆三十圓拂込みで、二十圓未拂になつてゐる。未拂株金六十六萬圓、それを拂込めば缺損は大部分埋まる。それを拂込まずして、利子を取り立てる所に、根津氏の新聞乘取りの策があるのだと。

私は根津氏に一面識もなく、又財界の事情にも暗いから、根津氏がどんな資本家であるかを知らぬ。併し苟くも純粋の資本家と云はれる者が、或事業に投資するときは、其投資の條件は自分の有利に決定するのが普通ではあるまいか。殊に根津氏のやうに、國民新聞ばかりではなく、外の各種の事業に投資してゐる身になつて見れば、國民新聞ばかりに寛大な條件を付けては、外の會社が承知しない。國民新聞株は全額拂込み、缺損は片端から注込むやうにしたら、根津財閥の他の方面が默つては居らぬ。根津氏が悪辣な資本家であるか否か別問題として、例

令息嬢でない所の極めて善良なる資本家であつたにした所が、資本は資本の行くべき途を進む●其間に利子の打算はあつても、人情と感激の入るべき余地はない。

これが石川武美氏の場合の如く、蘇峰氏に對する單純なる尊敬から出發する投資ならば違がう。石川氏は三十五萬圓を投資し放して、飄乎として去つた。根津氏の投資は別に蘇峰氏に心酔してゐたからの投資ではない。彼れは一億若しくは八千萬圓と云はれる財力を以て、實業界の巨頭となつてゐる。金が物云ふ實業界では彼れは到る所で王者の如く取扱はれる。

併し彼れは新聞の威力を認めてゐる。資本家として有する大なる威力の上に、今一つ新聞の威力を加へんとした。そして投資すべき新聞を物色してゐる内に、偶々國民新聞に出資を勸められて、それに應じた迄である。特別に蘇峰氏を尊敬し、又は之に同情して投資したと云ふ事實は、私の知つてゐる範圍では發見出來ない。寧ろ初めから蘇峰氏を眼中に置いてゐなかつたのではあるまいかとさへ思はれる。

蘇峰氏は國民新聞を以て、言論文章を以て立つ所の一獨立國とせんとした。そしてそれには少くとも或期間成功した。根津氏は此新聞を以て根津財閥の一屬國となさんとする。そして資本主義の發展はこれを可能ならしめる。玆に兩立すべからざる二つの原則があるが故に、蘇峰氏が根津氏と袂を別つのは國民新聞に根津氏の資本を入れた事の論理的結論であらう。

併し根津氏が初めから蘇峰氏追出しを計劃してゐたと云ふのは當らない●蘇峰氏が退社の決心を發表されると、根津氏は明かに狼狽した。如何な方法を以てしても蘇峰氏を引き止めんとした。其引き止める言葉は余り丁寧懇切を極めたものとは云へない。僕に二百萬圓も損をさせて、そして逃げるとは非道いと叫んだ。蘇峰氏も怒鳴つた。それは痛快に怒鳴つたのだと聞く。併し根津氏が蘇峰氏に對して、如何に丁寧懇切な言葉を以て引き留めても蘇峰氏は止まらなかつたであらう。何となれば蘇峰氏の志は言論の自由を確立する事であり、根津氏の志は、根津財閥の機關紙であるからだ。丁寧懇切に云はれゝば、云はれるほど蘇峰氏は迷惑したであらう。資本に言論の自由などを認める余地はない。

同時に亦資本家專制の新聞は自己崩壞の要素を含んでゐる。新聞に卸した資本は鐵道や土地に卸した資本とは異つた形を採る。新聞に卸した資本は重に讀者の數と云ふ形に依つて現はれる。鐵道や土地は滅多に消滅しないが、讀者は端書一本で斷はつて來る。讀者が減れば廣告も減り、新聞の資本は何處に行つたか判らなくなる。

根津氏に採つては國民新聞は浦島太郎の玉手箱のやうなものだ。干渉せずに、開けて見なければよかつたのである。開けて見たればこそ、蘇峰氏は煙の如く去つた。根津氏が老いなければ幸である。

井原西鶴の江戸居住時代

眞山青果

文辭品格の高卑にもよるだらうが、もの書く人に對する讀者の信用にも、かなり運否があるやうに思はれる。或る人の文章はその片言隻語にも信頼をもつて讀まれてゐるのに、他の一人の作品は、作者がまじめに眞實を吐露してゐるにも拘らず、例の筆拍子とか轉合書とかとられて、一笑に附せられてしまふことがあるらしい。芭蕉と西鶴など、云はゞその好適例であらう。芭蕉の言葉といへば、たとへそれが未熟不詮索なることであつても、讀者は先づ事實を承認すべく勉めて讀むが、それが西鶴の場合には、彼は存外正直に眞實を話してゐても、人は彼のでたらめとして閑捨てゝしまふ時が多いやうに思ふ。彼は漂泊の旅をこのんで、ほとんどその半生を行脚に送つたのが事實であつて、彼自身の口からも明かに、「われ朝な／＼草鞋の新しきを賴み、ゆふべ／＼油單の垢刷るゝをわさにて、奥は外の濱風に身をふれ、胡砂吹く夷が埃にも塗れ、西は親にも告よといひし島守とも身をなし、生の松原、筥崎の並木の數もよし覺ゆるに、或は恐しく、或は可笑しく、或は心にとまる人の咄を、爪短き筆して、旅せぬ人にも如左」（懷硯の序）と云ひ、又、「世間の廣き事、國々を見巡りて、咄の種を求めぬ。熊野の奥には湯の中に鰭振る魚あり。筑前の國には一つをさし荷ひの大蕪あり。豐後の大竹は手桶となり。」（諸國ばなしの序）など云つて、西鶴はみづから當時の旅行家をもつて任じてゐるが、讀者も研究者も、それをその儘には承認しかねるらしい。極端なる人になると、彼は攝陽の熱閙地に逸居して、やうやく近郊數里の地を踏むに過ぎざるのに、只その敏聰なる耳の收穫によつて、よく諸國の世態雜說までも描き得たりと感嘆してゐる人さへあるのは、彼西鶴のためにその言葉の不信用さを惘れますにゐられな

い。現代の西鶴研究家のうちにも、昨夏伊藤長英の見聞雜記が活字に飜刻されたゝめに、一年の半分を旅に送るとあるその記事を證左として、初めて旅行家としての彼に承認を與へるやうな口吻があるのは、西鶴自身その著書の端書には「諸國の見聞を書集める」の旨を、殆んど例外なく書き記してゐるだけに、わたしどもには不思議にも思はれ、西鶴その人を氣の毒のやうにも考へられる。

西鶴と江戸との交渉、これなどもその例證の一つであらう。西鶴研究家の間には、彼の江戸下りが今もつて疑問にせられて、彼は江戸へ來てゐるとか來ないとか、數々問題にされてゐるやうである。けれども西鶴自身は男色大鑑の卷之一の冒頭に、女色を貶し衆道讚美の戲文を書きつらねたその後に、「我生を享けて其時今の知惠のあらば、女の乳は飮まじ、摺粉あまものにて人間育ちたる例數多なり。兎角は男世帶にして、住所を武藏の江府に極めて、淺草の片陰に借地をして、世の慾專、人の治亂をも構はず、不斷に門を鎖ぢて、朝飯まへに若道根元記の口談、見聞覺知の四つの二つの年まで諸國を尋ね、一切衆道のありがたき事のこらず書集め、男女のわかちを沙汰する。」と明記してゐる。彼は旅行者として江戸を觀たばかりではない。或る期間には確かに江戸の居住者として當代を視察してゐることを、彼自身公言してゐるのに、それが何故に今日まで讀書生の認定を得られなかつたのであらう。わたしはそれを疑問とする。

全體、如何にはかない時花草紙の作者なればとて、讀者は見も知らぬ者が相手なりと侮つて、さうまで無責任なる出放題を作品のうちに書き得るものであらうか、假りに一時、世間大衆は欺き得るとしても、作者の周圍には常に少數ながら、同輩もあれば對抗者もあるだらう。それ等の人々の煩さき後言冷笑をも忘るゝまでに良心を麻痺させ、住みもせぬ江戸住居を事實らしく記し、土踏まぬ草鞋を示しつゝ日本國周遊の自慢を世間に吹聽する必要が果して何處にあるだらう。殊に當時の西鶴には、その俳諧の流派の爭ひからも、小說作家としての人氣の上からも、又、剛腹にして征服慾に急であつたらしい彼の性格のため、又彼の破綻的なる實際生活のために、たゞに一隨流一梅翁堂に限らず、彼の周圍にはかなり多くの敵對者嫉視者が、絕えず彼を監視してゐたと推測される。その彼が何を苦しんで敵路に糧を遺すやうな遺種の稚拙を演じ做すの必要があるだらう。世間的常識から考へても、諸方の西鶴愛讀者はもう少し眞摯に

彼自身の言葉に耳を傾け、沈潜して彼の一生の姿を凝視する必要があると思ふ。自分も二十何年來、西鶴愛讀者の一人であるが、徹頭徹尾彼の云ふところに依頼して、阿波の鳴門に龍女の懸硯ありと云へば、疑はずに先づそれを尋ね、白山に閻魔王の巾着があると聞けば正直にそれを索め、極度の信頼を今日まで彼の言葉にはらつてゐるが、いまだ嘗て一度も彼に誑かれたと思ふやうな記憶はない。細かに、氣長く、彼自身の心持になつて彼の言ふところを詮索してゆくと、いつか必ず彼の言はうとした事實の眞相に逢着して、思はずも彼を瞻仰するやうな場合が多い。西鶴の作品を讀んで輕々しくそのでたらめや荒唐無稽に氣がつくのは、まだ讀みかたに、到らないところがあるものと考へてゐる。日本の過去の作者のうち、西鶴ほど眞實を尊重して小説を書いた人はあるまい。言葉を強めて云へば、彼は眞實の以外に何事をも描き得ない人であつた。

わたしは近頃、彼の戯作新吉原常々草を讀み直して、前に揭げた男色大鑑の淺草居住説がます／＼確實に裏書きせらるゝので、それに就いて少しこゝに考へて置きたい。彼の江戸住居の事實の有無は、まことに些細のことのやうに思はれるが、然しそれを辿つてゆくと、彼は何故に得意の好色物から一轉して謂ゆる武家物男色物を書いたか何故に懷硯新可笑記廿不孝のやうな小篇雜話集を書いたか、何故にまた再轉して武家物風の著作から最後の町人物に移り行いたか、又三所世帶や好色盛衰記など云ふ種類の著作は、從來の諸説通り彼の僞書として容易に屏けらるべきものであらうか、又他の著作に後年遽に江戸版の出版せられた理由等、それ等宿年の疑惑を解決するの鍵鑰は、總て繋つてこの貞享三年以來約四五年間の江戸生活の闡明にあるとわたしには信じ得られるので、こゝに愚見をつらねて大方識者の示教を仰ぎたいと思ふ。

曩年水谷不倒氏はその好著「西鶴本」の中に、西鶴の筆跡文字癖挿畫などより研究を進めて、新吉原常々草を西鶴の著作なりと斷定せられたのは、獨自の創見として敬服してゐる。然しその後の研究者のうちには、かなり異論者も多かつたやうに思ふ。實は自分などもその一人であつて、初めからこの戯作書に對してあまり注意をはらはないでゐたが、去秋少しく必要あつて同書を精讀するうちに、西鶴自作たるの確證が次第に顯はれて來て、わたしにはもはや疑はふにも疑ひ得ざるやうな結果となつた。一週間ほどこの書の檢査に沒頭して、カードを作り索引を編み、われながら愚かしい面倒をして穿鑿してみたが、人

名、地名、諺語、彼特有の文法、語氣、彼に長い間の馴染らしく思はるゝ軟軒の揚屋、女郎の噂、その品隲、遊蕩また處世に關する彼の觀察批評等を調査して見たが、西鶴の著作として些かの牴觸をも見出すことが出來なかつた。詳細の報告は今春の大坂朝日新聞に發表したからこゝに省くが、兎に角、新吉原常々草は西鶴の著書と斷定して間然するところないものと自分だけは信じられる。その上この常々草と後年出版の西鶴置土産の間には脈絡の顯然相通ずるものがあつて、同じ事實が双方に書かれてゐる箇所が多い。例へば置土産に、「關東の奥に、今でも米一石につき十八匁する所あり、其所にも朝夕送りかねての乞食あり」とあるのを常々草の方には、「これよりなほ〳〵奥筋の遊女なき國に追やりて、今でも米一石を十七八匁に賣り買ひの所にも、乞食のあるを見せたし。」と書き、常々草に、「深川の八幡に酒の相手ありし時、よねの形は大方なれども、心さしせはしなく、鳥居より内は客ふたり一歩、外は三人一歩とあらましを極め置きしはいやな事のみ。」と書いた事實を、置土産の方には、「又深川八幡の茶屋者は、本所築地より各別見よげに、京の祇園町のしかけ程ありて、鳥居のうちは二人一歩、外は三人一歩と極め置きしも物固し。」とあるやうな、文章にも事實にも同一記事が十數箇所に發見される。若し常々草が置土産の後に版行されたものならば、或はこれを置土産の剽竊とも考へられるべきであるが、置土産は西鶴の遺稿として死後の筐底に秘藏されてゐた事實に徴しても、常々草は西鶴自著として何等の疑ひを挾む餘地がない。この常々草の內容から檢出しても、西鶴は何年ぶりかに江戸に下り、かなり長い滯留の間吉原に出入して、その間の見聞を戯作につゞけて元祿二年の三月に大坂で出版したのがこの書であるから、男色大鑑に貞享三年の頃江戸に下つて淺草邊に寓居したと云ふ事實と少しも齟齬がないと思ふ。然し、更に一層その眞相を精確にするために、彼の著書の京坂書肆と江戸書肆とに於ける初版本の出版年表をこゝに挿入して置きたい。たゞ自分には古版本檢査について何等の鑑識能力がないため、主として水谷氏の「西鶴本」の奥附年月版元の名を根據となし、それに家藏の西鶴本十二三種、近頃刊行の諸翻刻本を集めて、この年表を整理してみたのであるから、多少の遺漏はまぬかれまいと思ふ。なほ掲載書目のうちには、西鶴著書として眞僞未定の本もあるが、少しく思ふところあつて暫くその數に加へて置く。書名の頭に　印を附したのは總て江戸書林關係の出版であつて、○印は上方書肆の出版を意味する。

西鶴著書初版刊行年表

○難波鉦　●紀元二三四〇　出版　延寶八年なりといふ。（種彦、好色本目錄）

○好色一代男（荒砥屋本）●紀元二三四二、一〇。出版「天和二壬戌年陽月中旬」書肆「大坂思案橋荒砥屋、孫兵衛可心板」

◎水谷不倒氏はこの書を初版本となす。諸家の說も同じ。

○好色二代男（池田屋本）●紀元二三四四、四。出版「貞享元甲子年初夏」書肆「大坂呉服町眞齋橋筋角、書林、池田屋三良右衛門板」

◎初版本。京都帝國大學圖書館藏本なり。日本古典全集本、これに據る。

○西鶴諸國ばなし　●紀元二三四五、一。出版「貞享二年丑正月吉日」書肆「大坂伏見呉服町眞齋橋筋角、池田屋三良右衛門開板」

○椀久一世物語　●紀元二三四五、二。出版「貞享二乙丑歲二月二十一日」書肆「北御堂前安土町本屋。庄太郎開板」

○近代艶隱者　●紀元二三四六、一。出版「貞享三丙寅歲。孟春良辰」書肆「攝陽順慶町心齋橋筋角。河內屋善兵衛刊」

○好色三代男　●紀元二三四五、一。出版「貞享三曆。孟陽上澣日」書肆「書林詩詞堂」と太く書き、その次行より「皇都三條通、西村市郎右衛門。同八幡町通、坂上勝兵衛。刊行。」

○好色五人女　●紀元二三四六、二。出版「貞享三龍集丙寅歲仲春上旬日」書肆「攝州。書肆。北御堂前、森田庄太郎板」

○好色一代女　●紀元二三四六、六。出版「貞享三年林鐘中浣日」書肆「大坂眞齋橋筋呉服町角。岡田三郎右衛門版」

■本朝廿不孝　●紀元二三四六、一一。出版「貞享三曆（丙寅）霜月吉辰」書肆「江戸青物町、萬谷清兵衛。大坂呉服町八丁目、岡田三郎右衛門。同平野町三丁目、千種五兵衛板」

○男色大鑑（京坂版本）●紀元二三四七、一。出版「貞享四丁卯年正月吉日」書肆「大坂伏見呉服町淀屋橋筋、深江屋太郎兵衛。京二條通、山崎屋市兵衛。板行」

■男色大鑑（三都版本）　●紀元二三四七、一。　出版「貞享四丁卯正月吉日」　書肆「前揭京坂版本に、「江戸日本橋青物町萬屋淸兵衞」と增刻しありと云ふ。（西鶴本）

◎水谷氏は前記京坂版本を原板となし、この本を後摺となす。私に思ふに、この版却つて初版にして、後に萬屋の名を削りたるにあらずやとも考へらるれど、原書を見ざれば判斷するによしなし。若し京坂版本奧附に大坂伏見町淀屋橋筋とある行に萬屋の名ありとせば、その本原版なるべし。

○懐硯　●紀元二三四七、三。？　出版年月不明。貞享四年花見月初旬の序あり。書肆　未詳。

■武道傳來記　●紀元二三四七、四。　出版「貞享四年卯初夏」　書肆「江戸日本橋青物町、萬屋淸兵衞。大坂呉服町眞齋橋筋角、岡田三郎右衞門」

■好色一代男（江戸、大津屋本）　紀元二三四七、九。　出版「貞享四丁卯年九月中旬」　書肆「日本橋青物町大津屋四郎兵衞板」

◎師宣の挿繪あり。「大和繪師菱川吉兵衞師宣筆」と奧附にある由。

■日本永代藏（三都版本）　●紀元二三四八、一。　出版「貞享五戊辰年正月吉日」　書肆「京、二條通数屋町、金屋長兵衞。江戸、神田新革屋町、西村梅風軒」とあり。年號をへだてゝ「大坂、北御堂前、書肆、森田庄太郎刊板」と大字に書けり。

■武家義理物語　●紀元二三四八、二。　出版「貞享五戊辰年二月」　書肆「京、寺町通五條上ル丁、山岡市兵衞。江戸日本橋萬町角、萬屋淸兵衞」とあり、二月吉祥日の文字をへだてゝ「大坂心齋橋筋淡路町南え入丁、安井加兵衞梓」とあり。（東京圖書館本）

■新可笑記　●紀元二三四八、一一。　出版「元祿元戊辰稔十一月吉日」　書肆「江戸日本橋青物町、萬屋淸兵衞。大坂眞齋橋筋呉服町角、岡田三郎右衞門。板行」

■好色盛衰記　●紀元二三四八、　出版「貞享伍辰年」。月日なし。書肆「武州日本橋南壹丁目、平野淸三郎。攝州大坂折屋町、江戸屋莊右衞門。板」

■本朝櫻陰比事（萬屋版金屋本）　紀元二三四九、一。　出版「元祿二年巳正月吉日」　書肆「江戸日本橋青物町、萬屋淸兵衞。大坂 高麗橋眞齋橋 筋南入、金屋庄左衞

門。板行」

■本朝櫻陰比事（萬屋柏原本）　紀元二三四九、一。　出版「元祿二年巳正月吉日」　書肆「江戸日本橋青物町、萬屋清兵衛。大坂心齋橋筋順慶町、柏原清右衛門」

◎不倒氏は（萬屋柏原本）を初版となすが如きも、よく見れば字體も相違して、柏原の名は後の挿入と思はる。自分所藏の本には前記の奥附ありて、筆跡字配り等も相當して見ゆ。これ初版なるべし。

○一目玉鉾　●紀元二三四九、一。　出版「元祿貳年巳正月吉日」　書肆「大坂高麗橋筋南入町、雁金屋庄左衛門板」

○新吉原つねく草　●紀元二三四九、三。出版「元祿二巳巳年三月吉日」書肆「大坂奥服町深江屋、太郎兵衛板」

○眞實伊勢物語　●紀元二三五〇、六。出版「元祿三年午六月吉日」書肆「吉野屋次郎兵衛」

◎國書刊行會本による

■世間胸算用（初版）紀元二三五二、一？
出版「元祿五（壬申）年初陽吉日」書肆「京二條通堺町、上村平左衛門。江戸青物町、萬屋清兵衛。大坂梶木町、伊丹屋太郎右衛門。板行」

■浮世榮花一代男　紀元二三五三、一。出版「元祿六年酉正月吉日」書肆「江戸日本橋青物町、萬屋清兵衛。大坂心齋橋上人町、雁金屋庄兵衛。油屋宇右衛門。京、松葉屋平左衛門。」

■西鶴置土産　●紀元二三五三、一一？出版「元祿六（癸酉）載冬月吉日」書肆「京洛寺町五條上ル町、田中庄兵衛。武江青物町、萬屋清兵衛。浪花堺筋備後町、八尾甚左衛門」

■西鶴織留　●紀元二三五四、三。出版「元祿七（甲戌）年三月吉日」書肆「江戸、萬屋清兵衛。大坂、雁金屋庄兵衛。京、上村平左衛門。板」

○俗つれぐ　●紀元二三五五、一。出版「元祿八乙亥暦孟春吉日」書肆「京洛、田中庄兵衛。浪花堺筋備後町、八尾甚左衛門」

■萬の文反古　●紀元二三五六、一。出版「元祿九年子正月吉日」書肆「江戸、萬屋清兵衛。大坂、雁金屋庄兵衛。京、上村平左衛門。板」

○小夜嵐　●紀元二三五七出版、「元祿十丁丑刊行なりと云ふ、十冊。

○西鶴名殘の友　●紀元二三五九、四。出版「元祿十二己卯歳首夏吉辰」書肆「浪花、書林開板」（博文館、西鶴文集奥附）

○世間胸算用（後摺本）　●紀元二三五九、八。　出版「元祿十二（己卯）年八月吉旦」　書肆「大坂本町壹丁目萬屋彦太郎板」

○西鶴織留（後摺本）　●紀元二三七二、五。出版「正德二（壬辰）年五月吉日」　書肆「大坂書林。岩岡屋德兵衞。大塚屋權兵衞。油屋與兵衞。」

○新小夜嵐　●紀元二三七五、　出版　正德五の刊行と云ふ。二冊。

（以下出版年月不明）

○好色一代男（秋田屋本）　●不明　出版、年月不明。書肆「大坂安堂寺町五丁目心齋筋南横町。秋田屋市兵衞板行」

◎荒砥屋本と同じく天和二年の奥附あれど、荒砥屋より木版を譲り受けて刊行したるものなれば、刊行年月は知り難し。たゞ大野木本の例によりて考ふれば、初版後さまで久しかるまじ。

○好色一代男（大野木本）　出版、年月不明。書肆「大坂住。大野木市兵衞板」

◎不倒氏は大野木は秋田屋の姓なりと云ふ。三本ある一代男の最後の摺であることは、同書の西吟跋文及び年月を削取つてゐるを見て明なりと云ふ。

■好色一代男（江戸版、萬屋本）　出版、年號を缺き、たゞ「正月吉旦」とありと云ふ。　書肆「日本橋南詰。萬屋清兵衞板行」

◎不倒氏この書を云はず。珍書保存會の一代男畫譜解題による。同解説によれば、この書は江戸版大津屋本の板木より「年號を無理に省いた形跡があり、出版者署名の字體が特に異つて居る點より見ても再刊本に相違あるまいと思ふ。」と云ふ。朝倉氏の小説年表にも出づ。

■好色二代男（池田屋、參河屋本）　出版、年月不明。書肆「江戸本石町拾間店。參河屋久兵衞板」の文字を、池田屋本の奥附年號の下部初夏の二字を削つて彫入れあり。後摺本なること明かなり。

■好色五人女　出版「貞享三龍集丙寅歳仲春上旬日」書肆、上記年月をはさんで、前に、「武州、書林、青物町、清兵衛店」後に、「播州、書肆、北御堂前、森田庄太郎板」と書きたる本あり。

◎日本古典全集奥附。今東京帝國大學圖書館藏本なりと云ふ

○日本永代藏（京坂版）　出版「貞享五戊辰年正月吉日」書肆、三都版本奥附より「江戸」と「神田新革屋町西村梅風軒」との文字が削られあり。

○日本永代藏（森田屋版）　出版「貞享五戊辰年正月吉日」書肆、前掲京坂本より更に京都書林をのぞきて、森田庄太郎一人の名あり。（古典全集本、奥附）

○一目玉鉾　出版「元祿貳年巳正月吉日」書肆、大阪心齋橋南四丁目、定榮堂、吉文字屋市兵衛藏版」

◎珍書刊行會本奥附。

○西鶴置土產　◎「一本に跋文と奥附を削り五の卷の終りに「京五條通升屋、青山爲兵衛版行」とあるものがある」と「西鶴本」にあり。

○好色三所世帶

この書の奥附については某君よりの示教もあつたが、出版年月について多少の疑惑あるために、暫く年月不明の部に分類して置きたい。

なほ日本永代藏の江戸版については、近時少しく異見を抱くやうになつたが、これも當分舊稿のまゝにして置く。

西鶴の江戸下りは、生涯に四五回はあるだらう。そのうちほぼ年代の推測されるのは、寛文の末年頃に一度、延寶四五年の頃に一度、それと男色大鑑にある江戸淺草の寓居時代とで、都合三度ある。以前二回の事實はいづれ他の機會に讓つて、こゝにはたゞ貞享三年度の江戸下りについてのみ考へたい。扨て、前掲の出版年表にして幸に甚しき錯誤がなきものとして視察すると、西鶴の著書が初めて江戸の版元書林から刊行されたのは、貞享三年十一月、日本橋靑物町萬屋清兵衛の署名ある本朝廿不孝を嚆矢とするらしい。（但し販賣は翌年正月であつたらうといふ説がある）。すなはち、彼がその著作をなすためにわざ〳〵江戸移住を企てたやうにさへ見ゆる男色大鑑の出版に先立つこと、僅々二三ケ月に過ぎない。然るに廿不孝以前の作品は全部大坂書肆の出版であつて、模擬作と思はるゝ三代男の外には京都出版者の名義連署さへ見られてゐない。それが突然この歳、地を越えて遠き江戸の町に彼の著書の開板を見出すのは、何事を證明してゐるだらう。そして一度廿不孝の出版が江戸に顯はれるとともに、その以後三四年間にわたる西鶴著作のほとんど全部が、江戸書林の單獨出版でなければ必ず連署出版者とた

て重用なる關係を示してゐるのは何故であらうか。又彼が坂地に於ける舊刊行の好色本の種類が、この頃から續々として奧附に江戸書林の名義を彫り加へて販賣を引受けてゐるやうに思はれることや、殊に彼の處女作一代男のごときは、當時隆盛の菱川師宣の挿繪を加へて新しく江戸版におこされてゐるなど、從來大坂中心としてゐた西鶴の著書が、この年の廿不孝の出版を劃時期として、俄然としてその出版地域を江戸に移し、その後數年間の大坂書店は、纔に販賣書店としての名義をつらねてゐるに過ぎないやうに見えるのは、何う解釋すべき現象であらうか。わたしはこの出版地域の調査だけに據つても、新吉原常々草にて明白に裏書せられ、西鶴自身物語つてゐるところの江戸居住が確然動かしがたき眞實と認定せられて、これまで不明なりし西鶴傳記のうちに「貞享三年の頃江戸淺草の僑居に移住し、爾後三四年間、門を鎖して各種の著作に耽る。」の數行を加へるとともに、また西鶴事實の明晰、その著作内容の精疎、共に相補ふて齟齬せざる點より考へても、新吉原常々草を西鶴の眞作書籍の一つに加へて、もはや何等の疑點はないと考へる。

貞享三四年は彼の生涯に於ける創作欲望の旺盛期らしいが、同時に彼のために過勞の年でもあつたらう。彼の著作としては疑はれるが現に角貞享三年正月には近代艶隱者を出版し、引續いて好色五人女を書いて出版し、更にその六月には好色一代女の傑作を大坂にて出版し、ついで十一月には江戸に來て廿不孝を出版し、その上に男色大鑑を年内に完結してゐる。彼の江戸移住は上記一代女の出版と廿不孝との兩兩出版の間にはさまれてゐるとすれば、先づその年の秋七月から九月頃までの間とするのが穩當であらう。序ながら思ふのに、西鶴は俳諧作吟の迅速に非凡なる技倆を示してゐるが、その小説著作の場合に於ても、驚くべきほど快速なる運筆者であつたらしい。當時の現在事實などを少し細かく調べてその作品内容との比較檢査をしてみると、好色一代女などは僅に一箇月かそれに近い日數の間に書き終つてゐるやうに考へられる。又わたしだけの乏しい材料によつて統計するのに、當時の出版行程すなはち版下の清書から初めて製版印刷等の製産能率なども、今日或る論者などの想像するごとく、さまで緩慢にして多くの時日を要としたものとは思はれない。西鶴著作一部位の分量は、大抵二箇月以内の日數に於て、書下しの原稿よりそれ〴〵の職人工程を經て、淨書彫刻校合印刷製本にいたる迄、相應完全に順序を經過し得たもの丶やうに見える。

江戸居住期の西鶴業績を考へる前に、彼が再び大坂に歸った

のは何年頃か、一般の淺草寓居はいつの頃まで續けられたものか、概略それを考へて置きたい。前の年表を辿つて見ると、元祿元年（貞享五年）の著書は全部江戸書林の關係署名のもとに出版せられてゐるが、翌元祿二年正月出版の一目玉鉾に到りて、初めて久しぶりに大坂書林雁金屋庄左衞門の單獨出版になつてゐるばかりか、二箇月過ぎの三月には、新吉原常々草をやはり大坂書林深江屋太郎兵衞の單獨出版にして發賣してゐる。尤も、同じ正月には江戸の萬屋からも本朝櫻陰比事が出版されてゐるが、年表にても明かなる通り、江戸書林でも西鶴と萬屋は特別緣故が深かつたらしく、その江戸滯在中から歿後の遺稿まで殆んど殘りなく出版してゐる程だから、西鶴は江戸に於ける最後の作品なる櫻陰比事を置土產としてその店に與へたのを、萬屋は發賣の都合上翌年正月の賣出しにしたものと考へれば、西鶴が江戸を引拂つて大坂へ歸つたのは元祿元年の晩秋頃、すなはち新可笑記印刷中の頃と見て適當らしく思はれる。そしてその時歸坂道中の覺書のやうなものに過去の旅行記憶などを書き加へて、匆卒に出版されたのが一目玉鉾であり、又歸坂後吉原見聞のみやげ話が戲作にせられたのが、三月出版の新吉原常々草になつたと考へると一應は辻褄も合ふやうだが、然し、段々讀んでゆくと然うとばかりは云はれない疑點が多く顯はれる。思ふに西鶴は或る事狀のために創作が不可能になつた後も——櫻陰比事の創作後、元祿二、三、四、の三年間、西鶴には一部も彼らしい著作品がない——かなり長く江戸にとゞまつてゐて、一目玉鉾も常々草も稿本を大坂に便送して、舊知の書店から出版させたのではないかと疑はれる。

その疑點の一つ。常々草は歸坂後の編述ではなく、多分江戸に滯在してゐる間の作品と思はるゝのは、甚だ薄弱なる證例であるが、同書上卷七丁の裏に、「上方のきうりきられは先づ丹波越、またはこの江戸を賴みてくだりて、二度身體取なほせし人あまた也。」とあるのも注意せらるゝが、內容總體の語氣口吻より察して、然う思はれる點が二三ヶ所ある。次に——

元來新吉原常々草は何人も云ふごとく、西鶴その人のために決して名譽ある作品ではない。たゞ一部の遊里案內記として見ても、內容に何等の生彩なく、文章もはなはだ溷濁して、疲勞のあとさへ感じられる。然し、それだけを理由としてこの書を西鶴の眞作にあらずと斷定されない一面の觀察としては、この戲作編述の動機と出版の目的とを、先づ考へなければならない。或る人はこの書が江戸に出版されないで、吉原ものに緣の遠い大阪の書肆に刊行された點を訝つてゐるやうだが、わたしは寧ろそこに、同書出版の眞の目的があつたらうと思つてゐ

る。すなはちこの書は最初から江戸人に讀ませるが主意でなく、當時京阪の俗人遊客に向つて、三ケ津隨一の銷金窩たる新吉原の現在を說明し、江戸遊廓の變轉推移を上方の江戸憧憬者に知らしむのが目的であつたらうと考へる。さもなければ吉原往復の地理を說いたり、ならひ風、馬鹿、お町、玄さま、女見、本所河岸のごとき江戸人には普通語同樣の言葉に註釋して、それを一々京阪の遊里語に對照を試みたりするの必要はあるまいと思ふ。又全篇の記述視察にも、當時の吉原の衰微妓品の低下を旨として說き明かし、一代男二代男に於けるやうな三野讃嘆の語調を失つてゐるのは、當面の實狀でもあつたらうが同時に又彼が上方人の讀者に對する顧慮心のあらはれとも見られる。少し餘談に入るやうだが、石川巖氏はこの常々草の五丁裏に甚しき文章の混雜あるを指摘して、「到底西鶴には似もつかぬ惡文である。例へば本文に、「角ておもひ立ちける人の見置きて盛める成り。かく思ひ立ちけるを見置きて、盛めるなり。買手ども云々」と同じ詞を續けさまに繰返してゐる杯、如何に徒然草に倣つたとはいへ、これは又餘りにひど過ぎるではないか。それも寫字生にでも淸書さしたと云ふなら書誤りとも云はれやうが、これは西鶴正銘の板下本であると云ふではないか。」と書き、不倒氏の西鶴本識を暗に否認してゐる評論文のあることを、最近人に教へられて一讀した。いかにも石川氏の說のごとく、これなど西鶴の文章として似合はしからぬ混雜ではあるが、然し他の方面から云へば、かゝる錯記の事例は將來の西鶴研究者のために、かなり重要なる筌蹄ともなるべきものではあるまいか。實はわたしもこの錯記に氣がつくと同時に、この甚しき錯記あるために却つて常々草を西鶴の眞作たるを證明すべき一例證として、持用の本にわざ〳〵圏點を加へて置いた次第なのである。それと云ふのは、この種の顯著なる文章の錯雜は、常々草のみに限つてゐない。やはり西鶴自筆の版下本で、ほとんど同時頃に大阪から刊版された一目玉鉾のうちにも見えてゐる。即ち同書卷の二、沼津の條下に、「此宿舟つきなればはんしやうの所也。むかし名取の遊女も旅人のうきを晴させける。わかさ若松といへり。是兄弟の美女と見し人語り傳へし。」と書いてゐるにも拘らず、丁數四五枚とんで江尻の條を見ると、「此宿舟つきにてよし。むかし爰に若狹若松といへる兄弟の遊女有。」と、同じことを繰返してゐる。江尻の遊女若狹若松のことは東海道名所記にも現在の人として記載せられ、西鶴自身も一代男卷のでき心のうちに文章をきはめてその經歴を書き、且つその俳諧のなかにも再三その名を呼び出してゐるのに、何うしてそれを一目玉鉾のなかでは沼津の宿に書き入れたであら

うか。かなりひどい誤りと思ふ。

話題を前に戻せば、この二書の錯記の例などは、やはりわたしにはさきに述べた疑點の一つとなつて、この二書の刊行當時はまだ西鶴は江戸に滯在してゐて、大坂へ歸つてゐない例證と見られるのではないかと思ふ。これ程の書誤りは板木師にしても氣のつく事だし、書林、校合者にしても放つて置く筈はない。西鶴が既に歸坂してゐれば何んとか訂正をなし得てあらう。それが出來なかつたのは、江戸と大坂との土地遠隔のためではなからうかなどとも考へる。若しこの考へが是認されるものならば、元祿二年の春にも西鶴はまだ坂地へ歸つてゐないことになる。それと最う一つ考へられる重要なことは、この兩例のごとき錯雜は、倉卒運筆のための單純なる書誤りとすべきであらうか。或は又その原因を一層深いところに考察を要するものであらうか。或る醫師の話によればこの種の突飛なる錯記――すなはち前に或る一事を記したゝめに、それに關心して却つて後の筆記を誤ると云ふやうな心理聯關の錯雜は、或種の疾患者に常に見る症狀であると云ふが、前二書とやはり同時頃に版下を書いた櫻陰比事などについて精密なる檢査を遂げたならば、或ひは西鶴晩年の健康狀態なども、幾分か事實を明らめ得るものではなかつたらうか。文字の脫落文章の混雜など、五人女あたりにもかなり見えてゐる。

以上のやうな次第で、わたしは未だ的確に西鶴の歸坂年月を推定すべき資料を所持してゐない。然し密かに臆測して、西鶴の歸坂は常々草の出版（元祿二年三月）以後意外に長びいて、翌元祿三年の春夏の頃までは、江戸滯在を餘儀なくされてゐたのではあるまいかと、考へてゐる。そしてその元祿二三の兩年間に江戸出版の著書が一つも見られないのは、當時西鶴は或る事情のために非常なる失意の窮境に立つか、いや恐らく彼は、元祿二年の正月頃から突發的の病魔におかされて、江戸の寓居に悶悶の日を送つてゐたのではないかとも考へてゐる。その根據は元祿四年開板の團袋の序文及び弟子團水との歌仙など讀んでの薄弱なる想像に過ぎないけれど、何んとなくわたしには然う感じられてならない。こゝに煩瑣を厭はず團袋の序文及び俳諧の一節を記して、自分の管見を述べると共に、他の俳書などによる研究から大方の示教を仰ぎたいと思ふ。

> 風呂敷に心をつゝむもむつかし。手うちふつて、霜夜の月に影法師を友として、山は東に近く、程なく京につきにけり。ふるさと難波にて、ふかうかたりし其ひとり、作所

こゝに極めて都の水はきよく、俳の流れの絶ず。風俗また同じからず。ひと夜はなしまじりに兩吟せしに、中々老の浪によつてもつかぬぞ。句毎にめざめて我又其心にうつして、あとよりおよぎつけども、とかく足のおもたく、やう〱歌仙の中程瀨を越所にして止ぬ。

元祿三むまの冬

大坂　西鵬〔鶴ノ字ヲ改〕序

濁江の足洗ひけり都烏　西鶴
一盃まゐれ氷煮てさう　團水
讀飽(アグム)催書は夜嵐にたゝまれて　同
商人の子よ世の中の月　鶴
こゝろなく行は花野の小荷駄馬　團
大裏屋敷の殘る秋霜　鶴
すてときは不動地藏のうつくしき　團
蘇生して何はなすらん　鶴
燃しきる燈をかきたてよ〱　團

迎へ讀むせゐもあらうが、わたしはこの序文及び兩吟の間から、當時西鶴の實際生活について、かなり複雜なる内容が讀まれ得るやうに思ふ。わたしは從來この濁江の發句を見て、簡單に、浪華の西鶴が久しぶりに京上りして門弟の寓居を訪ひ、今更ながらに都の山水の明媚に目を覺まし、住居人に對する挨拶の心持たけを讀んでゐたのであるが、今あらためて又この發句に接すると、何よりも先づ、都鳥の二字が强烈にわが網膜を射る。足洗ひけりの一語にも西鶴の悲痛なる悔恨の情を見られるやうだが、それをうけて團水が氷煮てさうと云ふ應答のうちには、涙ぐましい程のいたはり心が滲み出てゐて、そこに壁を負ふて對坐する病西鶴の憔悴せる江戸歸りの姿が目に浮かぶやうな氣がしてならない。讀みあくむ書を夜嵐にたゝまれてと云ふのも、單なる文字の表現以外に何か、西鶴著作上に重大なる障跌でもあつたか、それとも又彼の健康狀態がもはや創作の勞苦に耐え得ないのを慰めてゐる言葉のやうにも想像されるし、それに就いて西鶴が卒然として商人の子よと自分を喝破してゐるところにも、徒事ならぬ實情が潜められてゐるやうに考へられもする。卽ち武家の町江戸城下に志を立てかねて、零落の後ふたたび大坂の地に歸り來つた西鶴が、さびしくもわれを嘲る述

優らしくも聞える。その後に西鶴みづから。蘇生（よみがへ）してと云ふ言葉も氣になると共に、燈（ひ）をかきたてよ／＼と勵ましいさめてゐる團水の態度にも、わたしはいろ／＼の沈痛なる憶測を強ひられるやうな氣がしてならない。

前嶋春三氏は團袋の序を讀んで、「これは、十三里川しもの大阪からのぼつたのではなくて、どこか旅の歸りにたち寄つた際にしたゝめたものとしか思はれない。」と云ひ、翌年八月出版の俳書「蓮實」にある西鶴の句、「玉笹や不斷しぐるゝ元箱根」を引いて、この時の京都訪問は江戸旅行の歸り道ではなからふかと疑つてゐられた。（前嶋氏は常々草の註記を西鶴の自作と認めやうとしてゐるやうに見える）その觀察は正しきに近いが、わたしはやはりその文面にある、「霜夜の月を影法師を友にして、山は東に近く云々」の一節を見て、この時の京上りは大阪からの發足であつて、淀川の上り夜舟に一夜をあかしたと解する方が妥當らしく感じられる。すなはち西鶴が、貞享三年以來の江戸の寓居を引き拂つて大阪に歸り、或ひは病氣靜養などのために、相當の日數を故宅に暮した後、仲冬の頃、久しぶりに舊友訪問をかねて上京したのではなからうかと考へる。然しその在坂靜養（？）の日數はさまで長い期間でないことは、同じ序文の署名西鵬に註記して、「鶴ノ字ヲ改」と書いてゐる點からも察しられる。言ふまでもなく西鵬の名は元祿元年の新可笑記の序が初出であるらしく、それは勿論彼の江戸居住の間のことであるから、改名の事實は當時廣く上方の俳人間には認められてゐないので、わざ／＼こゝにその披露をなす必要があつたのであらう。それに因つて思ふのは、在來世間には西鶴の鵬字改名を元祿三年とする說がかなり有力に傳へられてゐて、不倒氏初め諸研究家の多くはその妄を辯じてゐるやうであるが、今考ふるにその說とて、全然謂はれないことゝは云はれない。案ずるに元祿三年の改名說は、團袋署名の註記と同じ意味で、彼は歸坂後京坂の知人舊友の間に初めて鵬字改名の事實を披露せること、或は又、上方人が初めて彼の改名事實をこの歲に知つたといふところに根據を置くものではないだらうか。若し西鶴にして江戸移住時代の數年間がその間にないものならば、既に明かに新可笑記の序文に難波俳林西鵬と自署しながら、三年後の出版なる團袋の署名に、「鶴ノ字ヲ改」の註記を加ふべき必要は、何う考へても認められない。西鶴江戸住居の確實はこの點からも證明されると共に、二三年の後まで改名の事實が故郷に認められなかつたほど、西鶴と大坂との關係は疎々しく過ぐされたのではなからうか。わたしは前述のごとく考へて、西鶴の歸坂

の年月を、元祿三年の夏か春か、ほゞその邊に推定して大した間違はあるまいと思ふ。

如上、くだ〳〵しき管見を書きつらねて來て、わたしは初めて、江戸住居時代の西鶴業績を考察すべき順序となつた。然し徒に話說の氾濫をなすおそれあるが故に、こゝでは單に私見の概略を摘記するにとゞめて、精密なる詳論は他日の研究項目として保留して置きたい。同時に、この小文に對する大方識者の批評教示を俟つて、西鶴研究の歩を進めたいと思ふ。で、先づその梗概を定めたるに、彼の江戸居住時代の作品と信じられる書目を、ここに列記して見やう。

本朝廿不孝（五冊）　（貞享三年出版）
男色大鑑（十冊）　懐硯（五冊）
武道傳來記（八冊）　（以上貞享四年出版）
日本永代藏（六冊）　武家義理物語（六冊）
新可笑記（五冊）　色里三所世帶（三冊）
好色盛衰記（五冊）　以上元祿元年出版。貞享五年改元）
本朝櫻陰比事（五冊）　一目玉鉾（四冊）
新吉原常々草（二冊）　（以上元祿二年出版）

この表示に誤りがあれば仕方がない。然し大體に於いて、これを事實と信ずるわたしは、改めてこの結果表を讀む時、今更ながら一種の驚駭と狼狽とを禁じ得ないやうな氣がする。と云つても、それは決して、意外の衝動のための狼狽ではない。何時か、何處かで、その忍びやかな足音を半意識のうちに聞いて、心ひそかに待ち設けてゐた或る事實が、忽焉としてその全影を顯はし來つたための驚駭にほかならない。わたしはこの表示に據つて先づ第一に、今まで浪華の西鶴とのみ考へて來た人が、もはやわれ等の西鶴と呼んでも差支ないほどの接近を、わが東國に有してゐることを悦ばせられた。即ち彼が小說作者として世に立つた、天和二年より元祿四年にいたる創作時代の十箇年のうち、その半數の五箇年は江戸人と共に市井生活を營んでゐるばかりか、その著作品の過半數は生地大坂をはなれて、却つて江戸に流寓中に書かれた事實を知つた。西鶴歿後の出版著書はその執筆地が不明ゆゑこれを除くとして、好色一代男の處女作以來彼の生前最後の出版たる世間胸算用まで算へて、その小說類書が約二十一部、冊數にして百零二冊あるうちに、江戸寓居時代の著作と思はるるものが、實に十二種五十四冊の計

數を示してゐる。次に、更に驚くべき新事實は、前表にて明瞭なるごとく、江戸時代江戸書林の出版になつた著作品には、分類體裁上の確然たる特徴が見られる。すなはち從來の研究家によつて武家物とか男色物とか呼ばれてゐたもの丶全部及び因果物、雜話隨筆など分類せられてゐたもの丶殆んど全部が、江戸滯在中の製作であつたことである。世說に隨つて西鶴の著作を好色物、武家物、雜筆小話、町人物の四種類に大別して概見すると、地理的には好色物町人物が上方の出版になり、武家物雜筆小話が江戸出版となつて纏はれ、更に年代順に區別すれば江戸移住前の著作は全部好色本の系統に屬し、江戸を去つて歸坂後の出版が大體町人物の種類であつて、その間に判然たる區別が見られてゐる。尤もその例外としては、町人物の出端たる永代藏が江戸に書かれ、好色物の掉尾たる好色盛衰記も江戸滯在中に書かれてゐるが、永代藏は初めから大坂出版の意圖のもとに書かれたものであるし、好色盛衰記や三所世帶（眞僞未定の書ではあるが）などを書くには、そこに西鶴として餘儀ない事情があつたやうに推測される。その私見はいづれその機會に述べる。兎に角、今日まで多くの學者の難題であつた上述四種類の創作系統が、何故に同じ西鶴の作品の上に綯はれ來りしか、又その箇々思想の統一をいづくに求むべきか、その變遷はその推移は、等の諸問題を考定する一理由として、ここに江戸移住といふ地的環境の變化を數へ得ることは、わたし一人にはかなり興味ある問題となつてゐる。

書いてこゝまで來て、編輯締切の期日が切迫してゐることを知つた。然し殘されたる問題は甚だ多く、西鶴晩年の健康について、又世間通說のごとく、西鶴は何故貞享元年の大矢數以後俳諧師としての足跡を暫時絕つたか、彼の江戸移住の目的、又その歸坂の事情、それ等についても少しも推測を進めたいのであるが、元來この小文起稿の目的は西鶴江戸移住の有無を闡明にするのが專要であつたのだから、上文の記述だけでもその目的は多少なり遂げてゐると思ふ。西鶴江戸寓居時代の業績等については、いづれ題目を新にして書き記すことゝする。

ある歡樂境

在サンデアゴ　正宗白鳥

クリスマスも過ぎ、今年も餘すところ二三日となつた。しかし、年末の感じなんか少しもしない。溫いカリホルニアのうちでも、最も南端に位してゐるこの町は、ことに氣候が溫暖で、日中の日光は輕井澤の眞夏のやうな勢をもつてゐる。この邊一帶に四季を通じての寒暑の差がわづかで、年中春のやうであると云はれてゐるが、それは溫度の上だけのことで、我々が春といふ文字から連想するやうな情趣はそこに漂つてゐないのである。カラ〳〵と晴れてゐて明るくて溫いだけのことなのだ。雨のない土地だから山も海べも乾いて禿げてゐる。こんなに禿げてゐて、地味が豐沃で、野菜や果物の產出に於ては世界無比だと聞くと不思議に思はれる。

このサンデアゴの町からメキシコの國境までは僅か十數哩を距てゝゐるばかりで、その國境を越えたところに、チワナといふ町がある。天下晴れての賭博場があるので有名だ。禁酒國の米人も、そこでは、公然酒を飮んで享樂を恣にされるので賑はつてゐる。

サンデアゴから乘合自動車で、賃銀半弗、時間が二三十分。此處まで來てゐて、その町を一瞥しないで歸るのは如何にも殘念に思はれたが、

「しかし、物騷なところですから、様子を知つた日本人に案内してお貰ひになつたらよろしいでせう」とある知人が忠告した。

以前は夜の十二時まで公開されてゐたのだが、近頃、ある白人の女が、ある夜メキシコの警察署長に凌辱された。そして、その女の一家族は、有色人からこんな極度の侮蔑を受けては世間に顏向けがならないと云つて、一家擧つて自殺を遂げた。さういふことが大問題となつて、國境の關所は六時に閉鎖されることになつた。

「名譽を傷つけられたゝめに一家擧つて自殺するといふやうなことは、アメリカでは珍らしいことです。しかし、その白人の女といふのも、泥醉して警官の保護を受けて、ホテルへ連れ込まれたといふんですから、アメリカ式に警官に秋波をおくつて揶揄つたりなんかしたんでせう」と、私は、あとで、ロスアンゼルスのある知人から聞いた。

「ある日本人で、一度五千弗ばかり賭博で儲けたものがありました。あの町には銀行が出張所を出してゐるから、儲けた金は一先づ預けとけばいゝのに、大事を取つて自分の懷中にしつかりしまつて汽車に乘つて、サンデアゴへ歸らうとすると、例のホールドアップがちやんと嗅ぎつけてゐて、汽車の中で、その日本人の膝をぶつて、便所の方へ行けと小聲で云ふんです。一二度頭を振つても、惡漢のピストルが腹の方へ向けられてるんだから拒みきれなかつたんです。それで、惡漢の云ふなりになつて、五千弗そつくり取られた上に、汽車から飛下りて怪我をしたさうです。汽車の中の外の客はそれを見てゐても知らん顏をしてゐる。金を有つてゐる者から捲上げるのは當り前だといつた風で、アメリカではホールドアップを痛快に思ふ傾向があります」

それに似た物騷な話をいくつも聞かされた。ことに、日本人に對して、關所の役人の取調べが峻嚴であると脅やかされたので、私は獨行を躊躇してゐた。しかし、この加州最南端の小都會サンデアゴにての滯在もすでに十日に達してゐて、大晦日には、ロスアンゼルスへ「ニューイヤースイーブ」の馬鹿騷ぎを見るために後戻りすることになつてゐたの

で、年末の二十九日には、一人でゞもそこへ行かうと思立つた。

「ぢや、私が御案内しませう」と、ドクトルKと呼ばれてゐる、見るから好人物らしい禿頭の日本人が、自から進んで云つた。

偶然、畫家M氏夫妻も同行することになつた。M氏は春までこの町に滯在して、氣まゝに制作に耽る目的を立てて、郊外の靜かな所に一家を借りてゐた。二三日前私達ははじめて氏の訪問を受けて、その假寓に招かれて、半日、日本の話や歐米の話をして過した。旅馴れない私達は、異鄕の旅行については經驗に富んでゐるM氏夫妻から敎へられるところが少くなかつた。こちらの借家は、身體さへ持つて行けば快く住めるやうに、設備が整つてゐる。

「歐洲よりも米國の東部よりも、カリフオルニアの貸家の方が、住心地がいゝやうに出來てゐます」と、氏は云つた。

冬の間かういふ家に住んで、四月頃になつて東部へ足を進めた方がいゝのではないかと、會ふ人々に忠告され、私達もさう考へたが、しかし、上陸したばかりで一ケ所に停滯してゐるやうなのが物足りなかつた。

「小山内君が亡くなつたさうですが、あなたはお知合ひぢやないんですか」と、私は、前日一瞥した邦字新聞の記事を知らせた。

「小山内君が亡くなつた？……小山内君とは懇意にしてゐましたよ」

死者に對する追懷談がおもむろにM氏の口から出た。やがて、我々は近くの公園など散歩して、夕方私達はM氏夫妻に見送られて宿の前で別れた。

「停車場へお見送りはいたしませんが、どうぞお大事に。……お氣をおつけなすつて」

私達は離別の語を聞いたのであつたが、ドクトルKは、「一人案内するも二人案内するも同じことだ」といふ譯で、その夜M氏を訪ねてチワナ行を勸めて來た。

翌日、正午近くなつて、私達とM氏夫妻との四人は、ドクトルKの、窓のない古ぼけた自働車に乘せられて出立した。こちらへ來て、十日の間、雲の片影も見なかつたが、この日も、日本では見ることの稀れな完全な「日本晴れ」で、大晦日前の日光は、赫々と耀いてゐた。土曜日ではあるし、チワナ街道には、自働車が幾臺となく疾風の如く駛せてゐた。私達は絶えず後の車に乘越された。K氏がふと自働車を路傍に留めたので、故障でも起つたのかと氣遣ふと、氏は、青い葉の出てゐる一面の畠を指差して、

「みんなセロリ畠ですが、あの青々とした出來のいゝのは、極つて日本人の作つたもので、黄ろい枯れつ葉のあるのは白人の畠です。だから、白人がゼラシーを感じるんです」と說明した。

國境では、米國官憲の取調べを受けなければならなかつた。旅券を見せて、帳簿に署名して、多少の質問にも應じなければならない。米人ならそんな面倒な手續きの必要はないのに、我々異邦人は、ことに日本人たるが故に、餘計な猜疑をもつて見られるのだから、甚だ不愉快である。しかし、メキシコの國境を潜行して米國へ浸入する日本人を防ぐために、この國でも苦勞してゐるのであらう。メキシコ側の役人の檢査をも受けるのだが、この方は自働車の窓から自己證明の紙片を見せるだけなので、甚だ簡單である。

米國とメキシコとの國境には、たゞ針金の柵が引張つてあるばかりである。一步國境を越えると、道路は全く面目を異にしてゐて、文野の標本を示してゐる。砥石のやうな滑かな道路が、メキシコ領へ入ると、日本の道路の思出されるやうに、デコボコの、埃りつぽい道となるのである。路傍の人家も粗末である。茫漠たる原野の一端に、この町は、たゞ賭博場としてのみそこに存在してゐるのである。

ここには、世界に例のない「犬の競爭」があつて、それが賭け事に用ひられてゐるのだが、普通の「競馬」と半年交代で、今は「競馬」時節なのである。入場券は二弗だが、婦人は普通半額で、しかも一週に二日は無料なので、ここでも、

米國の「婦人第一」といふことがよく現はれてゐる。

「兎に角、何處かで簡單に午餐を食べませう」と、M氏が云つて、「ボヘミア」と看板に書かれた、地方色の現はれてゐる小さな食べ物屋へ入つた。老若の色の黒いメキシコ女が薄汚い食卓を取扱つてゐた。言葉は西班牙語らしくて、英語はよく通じないらしかつた。しかし、食物は、パンでもビフテキでも案外にうまかつた。

「此處は西班牙料理だから、アメリカと違つて風味がある」

「男の方へ先きに皿をくばるなんかも變つてる。アメリカでは絶對にないことだ」

非常にボラれると聞いてゐたのに、料理代が案外に安かつたのも、我々を感心させた。

アメリカの市街を見た目にはひどく薄汚く思はれるそこらのごみ〳〵した街上の人家の多くは、賣店や酒場や食べ物店であつたが、醉つて女給と踊つてゐる客もあつた。

「ちよつと酒場へ入つて、女どもを相手にすると、十弗や二十弗の金は直ぐに飛んでしまふ。何人もの女がみんな酒を飲ましてくれと云つて、次ぎから次ぎへとやつて來る。ウイスキーが一杯七十五錢だが、そこには仕掛けがしてあつて、女の飲む酒は、色のついた水なんです。それで、客に拂はせた金は、あとで、女給と主人とが分けて取ることになつてる」

と、このチワナで働いてゐたことがあつて土地の事情に明るい、私の宿の主人が云つてゐた。

賭博場としては徹底してゐて、大抵の店には、自働賭博器が備へつけられてあつた。五錢のニツケルとか、十錢とか、二十五錢銀貨とかを、それ〳〵に入れて、運まかせの賭博が試みられるやうになつてゐる。運がよかつたら、十錢の資本で一弗ぐらいは轉がり出ることになつてゐる。全體機械文明の進んでゐるアメリカでは、自働車が極度に發達してゐるのみならず、いろ〳〵な者が自働的に行はれるやうになつてゐる。小さな貨幣を穴へ入れると、キヤンデーとかチユーイングガムの類ひが出て來る器械があると同樣に、一錢か五錢の貨幣を入れると、覗き目鏡で繪が見られるやうになつてゐ

る。私は、ロスアンゼルスの市やサンデアゴの町で、試みに覗いて見たが、それ等の繪の多くは、さまぐな姿態をした女の裸體であつた。要するに、世の中は金と女の天下である。日本だつてそれに變りはないのだが、日本の方が煮え切らなくつて、アメリカにはそれが直截明瞭に現はれてゐるのであらう。「婦人第一」「ドル第一」、毎日新聞を見てゐても、ドルに關する事件が頻りに目につく。價格の安い日本金の一萬や二萬を後生大事に旅行費として持つてゐても、それくらゐの金は、このアメリカでは鼻つ糞くらゐにしか當らないやうに思はれる。

しかし、それほど豐かなアメリカにだつて、貧乏人もあるに違ひない。それ等の貧しい勞働者なんかゞ、一錢五錢の自働器を覗いて、安價なる享樂を試みてゐるのが、私の目にもついた。

私達の乘つた古自働車は、町を離れて、二三哩走つた。周圍は荒涼たるものである。自然の風物は、人間の歡樂境の背景たるには相應しくない。Kドクトルは「犬の競馬場」の在所だけでも、私達に覗かせようとして道を進めてゐるのであつた。「犬の競馬は可笑しい」と我々は笑つてゐた。

が、豫定の地域へ來ると、そこには、佳麗な建物が、龍宮城のやうに我々の眼前に現出した。「何だらう」と、案内者たるK氏さへ疑つた。あまたの美しい自働車が事ありげに並んでゐた。赤い瓦に白い壁で、このあたりだけは青い草木で色取られてあつた。私などには、色彩の濃い建築は、何でも支那風として見られるのだが、M氏の説明によると西班牙風なのであつた。一つの建築はホテルらしかつた。青いズボンを着けた男が、盛裝した男女を案内してゐた。一つの建物の入口には、黒人やメキシコ人などが、顏に似合はぬ氣取つた服裝で身を固めて番をしてゐた。そこらにゐる客は、いづれも華美な裝ひを倣つてゐた。我々はつけ／＼とそこへ侵入するのが躊躇された。

「賭博場」だらうと我々は想像した。折角此處まで來て、内を見ないで歸るべきものではなかつた。それで、M氏は、番人のメキシコ人に訊いた。

「入つてもいゝか」

「ちよつと待つてくれ」

番人はさう云つて、奥へ入つたが、間もなく出て來て、「よし」と云つた。

我々五人は、不調和な世界に入つて行つた。一室の賭博場には、十臺ばかりの艶のいゝ滑かな賭博臺が配置されて、その一つ〳〵に、いかにもメリケン國の紳士然たる顔をした、中年の男が、地質のよさゝうな黑色の衣服に純白のカラーを胸に浮かせて、座を占めてゐた。ある者はトランプを切り、ある者は賽をころがしてゐた。トランプの勝負にも三種違つた方法が用ひられてゐたやうであつたが、多くの人の興味は、玉ころがしの上に集つてゐるやうであつた。どの臺にも、弗(ドル)の銀貨が、支拂ひ準備の資金であるらしく、幾列にも配置されてあつた。燦然として色を放つて、見る人の目を眩惑させた。そして、この賭博場の中は、案外寂然としてゐて咳(せき)をするのも足音を立てるのも憚られるやうだつた。見窄らしい服裝をしてゐるのは、我々の一行だけであるらしく、あたりの淑女紳士は社交界の登場人物として扮裝してゐた。私などは何處へ行つても「演劇を見る人」であつて、かういふ所へ來てもさして賭博心は刺戟されなかつた。見てゐると、賭博者に勝ち味のないことは一目瞭然としてゐるやうで、勝利を豫期して賽を投げるものは阿呆のやうに思はれた。「玉ころがし」は最も客の興味を惹くものらしかつたが、その臺には、三十六までの數字が記されてあつた。三十六に一つの當りを僥倖するなんか愚の至りであるが、その代りうまく當つたら、何倍にも何十倍にもなつて返つて來るのであらう。しかし、滅多に當るものはなくつて、かの紳士然たる顔した支配者の手にした小さな棒によつて客の銀貨は、つねに手元へ搔寄せられてゐた。傍觀者の目には戯談見たいに事が運んでゐた。客の數は男よりも女の方が多いくらゐであつた。ある妙齢の女は、割合に當選率の多い賽投げをやつてゐたが、四五弗せしめると、ニヤリと笑つて出て行つた。

「モナコよりも勝負が敏活で面白いですよ。それに、モナコでは、こんなに側へ寄つて覗く譯には行かないんで離れて見

てゐなきやならないのです」と、M氏は說明した

「モンテカロ」とか「カシノ」とかいふ言葉を、私は昔聞いた時から、日本などでは見られない特別の場所、人間の異常の歡樂となる遊戲を示す言葉のやうに思つてゐたことがあつたが、自分の身をこの場内に置いて左顧右眄してゐると、享樂の血汐がわが胸に涌いて來るよしもなかつた。「運命の針が動いてゐる」と觀じて、賭博臺を見てゐても、そこには私自身の運命が賭せられてゐるのでないから、何の刺戟にもならなかつた。

「自分でここの空氣に同化しなきや駄目ですなあ」と、Kドクトルも云つてゐた。

賭博も打たず酒にも醉はず、ダンスもしないで、この境内をうろつくのは、隨分間の拔けたことなので、私には次第に、濃厚な色彩の動搖してゐる周圍よりも、自分達一行の、「田舍者の盛り場」見物じみた氣分が氣になりだした。

賭博場は靜かだつたが、壁一重隔てた中央の食堂では、メキシコの樂人の數人が、人の心を浮立たせるやうな音曲を頻りに奏してゐて、そこでは、米國禁制の酒がほしいまゝに飮まれてゐた。その隣りの奧まりたる薄暗い部屋では、ダンスが行はれてゐた。

「ここの名前は何と云ふんでせう」と、私は、外へ出てからK氏に訊ねた。

「さあ。……この邊を溫泉場と云つてゐたんですがね。溫泉が出たんださうですが、白人は溫泉を好まないから物にならなかつたんでせう。」K氏は直ぐ側にある柵の中の空地を指差して、「ここが犬の競爭のあるところです」

賭博心のないK氏などは、近所に住みながら、この佳麗な觀樂境が何時出來たかも知らなかつた。

「これだけ見たら澤山だ。」

皆んな、珍らしい所を見て、一種の滿足を覺えたのであつたが、しかし、その實、紅い雲の一片を見て通つたに過ぎなかつた。こちらへ來てから、殆んど一月を經たのであるが、要するに、紅い雲や黃ろい雲の浮動を見たゞけで、物の心核など

分りつこはないのであつた。

後で聞くと、薄汚い服裝をした者、醜惡な顏付をした者は、かの場内へは足を入れさせないので、我々は辛うじて入場者の資格に及第したのであつた。

「あれが私娼の家です」と、町へ戻つた時に、K氏は、外觀の薄ら淋しい板小屋を指示した。チワナへ行つて女を買つたと云つて、大散財でもしたやうに自慢する正體があれだと思ふと可笑しい。「洋行者の享樂」話について私は考へた。

有名な競馬場へも廻つたが、時間が遲いので、入口を覗いたゞけで引返した。出口では、來た時よりも一層嚴重な取調べを受けた。白人以外の我々は皆んな車を下りて、米國官憲の前に謹愼して、その意に逆はぬやうに、質問に應じなければならなかつた。

「チワナの町へは每日散歩に行つてもいゝ。大して危險なこともなささうだが、罪人同樣に調べられちや、二度と行く氣にやなれませんね」

私がさう云ふと、

「あそこから先きのメキシコの海岸をドライブすると面白いんです。崖道が曲りくねつて變化があつていゝんです」K氏は答へた。

地味の豐沃を以つて誇つてゐるカリホルニアも、以前は、メキシコの領域であつたことは、各所の地名が、スペイン語を示してゐるによつても察せられる。强者の擴大と弱者の衰頽は、我々旅人の目にも明かに映るのである。(十二月末日サンデアゴにて)



蕃族夜話

小泉鐵

船室のベッドで眼を覺ましてはゐたが、未だ夢の續きでも見てゐるやうにうつらうつらしてゐると、ガラ〳〵ガラ〳〵と鎖を動かす音がして何か物言ふ人聲が間近にする。はつきりと意識を回復して氣が付くと、船は靜にとまつてゐる。ああついたのだな、と何となく安心した氣持になる。

私は躍ね起きて急いで身仕度をし、甲板に出る。夜は漸く明けはなれたばかりで、涯しなく續く大洋の彼方がほんのりと紅く光つてゐる。船は一夜の航海を終つて、今花蓮港の沖に錨を投げ入れたところである。

荒れる〳〵と聞かされてゐた航海も案外に樂であつた。何等の掩蔽物もなく太平洋に打連らなる此處の海は僅かの風にも眞面に吹き播くられるのであつた。然かも花蓮港といふのはほんの名ばかりの港で、有名な船着きの惡るい處であつた。折角船が沖まで來ても投錨することも出來ずに其儘引返すこともあれば、又漸く投錨はしても迎へに出る艀舟が動かせないことも珍らしくはなかつた。それ故着くまでは本當に安心は出來ないのであつた。

此の日は好く晴れた靜かな朝であつた。甲板に立つて陸を見ると、花蓮港の街は右手に僅かの家が海岸に近く見える他には何處にあるのやら、初めてのものには解らない。唯波打ち際に眞白い砂濱の長くつゞいてゐるのが見られるばかりである。そし

余り遠くない彼方には霧に隔てられて中央山脈の山々がかすかに仰がれる。左手には砂濱の切れる先きに花蓮渓の落口が見え、其の外側に海岸山脈の尾端が起伏してゐる。

今日は幸に艀舟が迎へに來るらしい。砂濱には人が寄り集つて私達を迎へに來るのであらう艀舟を波間に押し出してゐるのが見られる。然し噂に聞くやうに流石に波のうねりは大きい。初めての物珍らしさに飽かず、眼前の情景に見とれてゐる中に、艀舟は船側に横附けになる。艀舟は大きいうねりをくつて波の行き來にぐらぐらする。恐ろしくつて一寸寄りつけない。噂では此處の海には鱶がゐるといはれてゐる。落ちたら最後助かりつこはないし、死骸の上つたこともない。私は荷物を客引きに頼んで、身一つで其の中にとび乘る艀舟の中で汐水を頭からかぶる位は珍らしくない。然し巧みに操つられて左程の危險もなく艀舟は砂濱に漕ぎ着けられる。

そして私は初めて東部台灣に足を印する。

東部は台灣の僻地である。中央山脈は台灣を略々北から南に縱貫して脊梁を作つてゐる。此の大山脈を横斷して東西の兩部を連絡する道路がないではないが、それは漸くに人が通れるにすぎない。然かもそれは尋常人の足には決して樂ではない。ましで物資の運搬などは思ひもよらないことである。唯今は僅かに蘇澳と花蓮港との間に毎日一回の連絡船があり、又基隆を起點として東部沿岸を廻航する月六回の定期船があつて漸くに東西の交通が行はれてゐるのである。然かもそれすらが、僅かの風にも航行不能で、旬日に亘つて交通を斷たれるやうなことも年に幾回となくあるのである。

これが現在の東部である。寧ろ最近の東部である。それ以前の東部は全く西部との交渉を斷たれてゐたといふのが事實である。中央山脈の峻嶺がそれを妨げてゐたばかりではない。蕃人はこの山脈地帶に蟠居し、全く他人種の入出することを不可能としてゐたからであつた。

それ故西部台灣が近代的とはいはれぬまでも、早くから和蘭、西班牙との交通もあり、又支那からの移住民が入り込み鄭成功以後は全く支那の屬領として支那化されゐるに較べて、東部は其の趣を異にしてゐるのである。西部の蕃地にも古くは蕃人が住んでゐたであらうことは明かなのであるが、今は全く支那化されて仕舞つた所謂熟蕃が本島人部落の間に彼等の部落を有する他には、最早所謂生蕃と稱せられるものは住んではゐないのである。彼等は、今は唯山地に居を構へてゐるにすぎない。

勿論東部にも支那人は入つてゐた。ジャンクは支那海沿岸の民を運んで來た。清國の撫墾使は駐在してゐた。そして大小幾つかの支那人系の部落は作られた。彼等の影響はなくはなかつた。然し支那化するまでには至らなかつた。蕃人の部落は依然として蕃人の部落として存在した。或るものは流に沿ひ、或るものは海を望んで野の中や山の根に今でも彼等の村落が作られてゐるのが見られるのである。

私が台灣に行つて最初に見たかつたのはこの東部であつた。台灣の文化的都會は私には何等の興味をひかぬ處であつた。それにもかかはらず、私は台北で一月余りを無駄にすごさねばならなかつた。然し漸く願ひの達せられる時が來て、今日から兼ねての希望である東部の踏査が出來ると思ふと、私は愉快にならずにはゐられなかつた。だが、又初めての土地での初めての仕事であるだけに不安を抱かずにもゐられなかつた。然しそれは何時も未知未見の物事に打突からうとする時に感ずる漠然としたもので、誰しもが抱く人間の本能的なものにすぎないのだ。それ故希望が動的で決定的であれば、不安は靜的な消極的なものとなつて、それは却て興味をそゝる場合すらもあるものである。私の今の不安は當にそれである。

私の仕事といふのは蕃人の生活を知ることであつた。それまでに書物の中で讀み散らした事柄を自分で探してみたくなつたのだ。私はどんな人間でも、その人達が集つてゐる世界といふものに興味をひかれてゐる。私は自分の周圍にある社會にも少からぬ興味を有つが、私は未だ自分の見たことのない、僅かに他人の書いたもので想像してゐる人達の生活、文明といふ現代の雰圍氣から除外されてゐる所謂蕃人といふ人達の生活が見たかつたのだ。私達の先祖が何時の間にか何處かに置きわすれて來た生活、そして今更に探し求めてゐる生活が其處に殘つてゐるやうに思はれてならなかつたのだ。

人と人とは爭ひもする。然し人は人からはなれて孤立することとは出來ないのだ。必ず人は集團の生活を營むしかないのだ。其處に人間生活のあらゆる機能が發露されるのだ。それが人間の生活を幸福にもすれば、不幸にもすることになるのだ。

私は世の中の進歩といふものは行くところまでゆくものだと思つてゐる。それはどうすることも出來ないものだ。それ故私は文明を呪ひはしない。だが、私は今の世の中を幸福だとは思ふことは出來ない。私は前に進んでもつと〱明るい幸福な世の中を作りたい。それには人間が何處かに置きわすれて來たものをもう一度探して見ることも無駄ではないのだ。

私には或る機會が與へられて、大正十四年の五月台灣に行く

ことが出來た。そして私はその七月一日初めて東部に足を踏み入れたのである。

然し台灣の蕃族は東部にだけゐるのではない。先きにも記したやうに中央山脈一帶には彼等は住んでゐるのである。それ故私は東部に最初に手を着けたいといふだけで、それは全く私の調査の都合からにすぎないのである。

東部とは先きに記すやうに中央山脈に限られた東方の地域をいふのであるが、其の北と南とには海に面して可成り廣い原野があり、北のを蕃萊平原といひ、南のを卑南平野といふのである。そして蕃萊平原は南に花蓮溪を控え、卑南平野は北に卑南大溪を境とし、其等の兩大溪の間に太平洋岸に沿ふて中央山脈に並行して海岸山脈が延びてゐ、此等の兩山脈の中間に狹谷地帶を作つてゐるのである。

是等の平地にはタイヤール族といはれる種族に屬するタロコ蕃が蕃萊平原の北方の一部に進出し、南方卑南平野にはパイワン族と稱せられるものと同系統とせられてゐる卑南蕃が居を占めてゐるが、其の他にはアミ族が蕃萊平原から中央の狹谷地帶及び海岸地方に無慮七十に達する蕃社を作り、其の一部は卑南平野に及び、彼等の生活を營んでゐるのである。

私の蕃人に就いての探査は先づアミ族から始まるのである。

上陸地花蓮港から南に一里足らずの場處に、荳蘭(タウラン)、薄々(ポクポク)、里漏(リロウ)の三蕃社が相接してゐる。海に近く、南方に花蓮溪を控え、蕃萊平原の南東部を占めて地理的にめぐまれた土地である。是等の三社は各々獨立してゐるのであるが、元は同一のものの分派でもあり、又地域の關係もあり、三社は聯合して總頭目を戴いてゐる。

私は花蓮港の街を出て、兩側に水田の開らけてる道を蕃社へと近づいてゆく。水田の盡きるところに竹藪にかこまれて家の棟が見られる。路上に行き交ふ人の多くは蕃人である。彼等のあるものは檳榔樹の實をかんでゐる。又煙草を燻らしてゐるものもある。夏は熱いから男は殆ど裸體に近いが、女はみんな着物を纒つてゐる。然かも女に殊に目立つことは黑い毛糸を束の儘頭に卷きつけてゐることである。頭髮が多いといふことが尊ばれるのであらう。それが彼等の裝飾の一つなのである。此の邊の蕃人は男も女も入墨はしてゐない。それは又種族がちがつてアミではないのである。

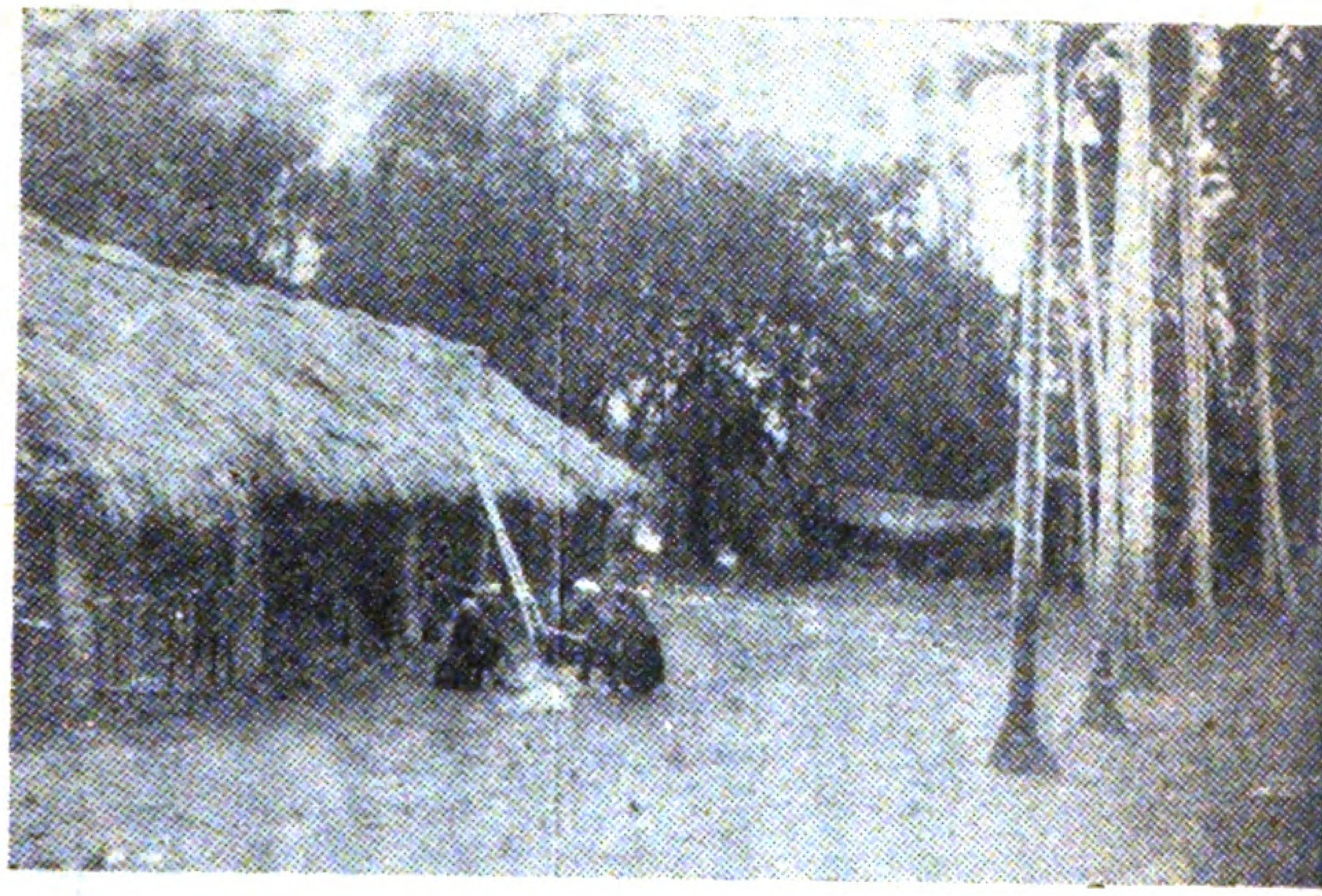
このアミが檳榔樹の實と煙草とをたしなむことは非常なもので、斷えずそれを身邊からはなさない。檳榔樹の實は男女共に嚙むが、それは荖藤の葉と一緒に石灰をつけて口に入れるので

あるが、澁いにがい味がして私には喰べられない。そして噛むと赤い汁が出るのが、齒から唇を染めて恰度生血をすゝつた後のやうに見える。煙草は男は木や竹のパイプにつめてのむか、紙で卷いてのむが、女は決してさうはしない。必ず葉卷きをのむ。然かもそれが年頃によつて區別があるのである。最早孫もあるといふやうな老婆は直徑一寸もあらうかと思はれる太いのを口にしてゐるが、娘や新嫁頃のものは細い漸く人差し指位のを吸つてゐる。そして中年の女房はその間のを用ひてゐるのである。それは厳然とした一つの慣習であるのだ。それで若しも彼女等に煙草を所望することがあるとすると若い娘の卷いてくれるのは何時も細卷きであるが、中年のものは決して細卷きをくれない。

私は蕃社の中に入る。蕃社とは蕃人の村のことである。このアミ族の蕃社は必ず一社毎に集團してゐて、一つの區域内に家がたつてゐるのである。彼方に二軒、此方に三軒といふやうに散り／＼になつてゐるのではない。みんな或る場所にかたまつてゐるのである。そして家の周りには竹藪があり、檳榔樹が生えてゐる。其他いろ／＼の樹木が取りかこんでゐる。畑や田は村の端か若しくは周圍に、又遠いはなれた處にあるのもある。

蕃社に入つてゆくと、先づ其處には集會所といふものがある。それは蕃社の警戒所でもあれば、又會議をするところでもある。昔は一番な大事な場處であつたのである。この集會所は男だけのもので、女は絶對に入れない。祭の時などでも、女はその庭先きで踊りはしても中へは入れなかつたのである。然し今では其の制度は可成り崩れて仕舞つてゐる

さうしたアミ族の社會組織や制度のことは幾度も書いたことがあるので此處には詳しいことを記すのはやめにするが、秩序があり、禮節が行はれてゐたのだ。たとへば、年齢別によつて組織せられてゐる階級があつて其の上下の區別といふものは極めて厳格であり、上級のものの命令は下級のものにとつては殆と絶對であつたのである。そして男は誰でも年頃になると階級に入らなければならないのであつて、最初は皆一樣に一番下の階級に屬するのである。此の一番下の階級といふのは蕃社の公共の仕事には眞先きに働かなければならないので、蕃社の路の草取りをするとか、壞れたところを直すとか、橋をかけるとか、集會所の手入れをするとか、何から彼にまで蕃社の仕事といふ仕事に働くのである。そして何年かたつと（此處の三蕃社では滿七年であるがそれは蕃社によつてちがう）新しい下の階級が出來て少し偉くなるのである。かういふやうに下から順々に幾つか



アミ族の住宅と前庭

の階級を登つてゆくのであるが、それを又二つに分けて下のものを若者（カッパハ）と呼び、上のものを老蕃（マトアサイ）と呼ぶのである。老蕃になると最早さうした荒仕事には手を出さなくなるのだが、それは又それでいろ〳〵の職分を有つてゐるのである。又結婚にしても、階級に入つて若者の一人にならなければ、許されなかつたのである。

かういふ風に縱斷的に階級があつて各々の階級の職分といふものがあるのであるが、之と相待つて役員制度といふものがあり、蕃社の統治といふことが出來てゐたのである。そして其の役員制度は極めてデモクラティックなもので、蕃社會議の決議を經て委任せられるものなのである。この他には金力とか名門とかを代表する階級といふやうなものはないのであつて一切が平等なのである。權力は支配してゐるが、それは職分に附帶せられたものであつて全く制度的なものなのである。直ぐに野蠻人といふと酋長といふやうなものがあつて全く獨斷專制かのやうに考へるならば、それは大きな間違いなのである。（是等に就いて詳しくは臺灣時報昭和二年六、七月號拙稿「アミ族概觀」、國家學會雜誌昭和三年二、三月號拙稿「アミ族の年齢別階級制と統治組織」を見ていたゞきたい。）

それから家であるが、その造りからいふと長方形切妻の平家建で、中は單房であつてそれを二つに分け、一方には床に籐を編んで張り、居間とし、他方は土間であつて炊事場である。入口は側面の兩側に一つ宛ある。窓はないから家の中は薄暗い。

これが彼等の住宅である。然しそれは家族の全體が起居するのではない。アミ族の家族制度は所謂女系制なので、家は女のものなのである。女は何處へも嫁にゆかず、婿を迎へて家を相續するのである。男は女に附隨して始めて家に入るのであつて、結婚前の男は幼年時代をすぎると最早母の家で寢起きすることは出來ないのである。それ故家の中には結婚した男女と娘だけしかゐないのである。そして未婚の男は屋外の小舍にねる

か、さもなくば集會所に行つて泊るのである。一度結婚しても妻に死なれゝば、彼は其の妻の家を去つて實家に歸りはするが、矢張り屋外生活をつゞけねばならないのである。唯妻との間に娘があつて、それが婿を貰つて結婚するか、若しくは其の年頃に達してゐる場合には、妻の死後も其の家に殘ることが出來るのである。それ故男は自分の母の家で食事もすれば、家の仕事もするのであるが、女といふものを有たなければ完全なる家族の一員として、家を有つことは出來ないのである。

それで面白いのは彼等の間では結婚前に愛し合う二人が交際をするのであるが、夜男は女の家に通つて來て、其の家に泊るのである。これをミゴワと稱するが、公然とゆるされた慣習なのである。然しそれは全く精神的な交友であつて性的の關係はないのである。それにしろ男は女を有することによつて初めて家に入れるのである。

從つて家といふものに屬する財産はすべて女のものなのである。鍵は女の持物であつて男には渡さないのである。穀倉の管理は女の權利であつて、作物の出し入れは女がするのである。女が一切の財産の處分權を持つてゐるのである。然し土地に就いてだけはそれがゆるされないのである。

家は女のものである。然し蕃社は男のものなのである。そして土地は蕃社に屬するのである。今でこそ土地私有の權利が認められてゐるが、昔はすべてが共有であつて必要なだけが分配せられてゐたのである。それ故今では土地は家に屬する財産の如くにはなつてゐるけれども、元々それは蕃社に屬するものであり、從つて男の支配に屬するものなのである。それ故土地の賣買讓渡は今でも男である夫の承諾なしには出來ないのである。

尙住宅である母屋の周圍には前庭があり、穀倉、穀搗き小舍、車小舍、豚小舍、鷄舍等がある。

結婚は一夫一婦であつて、多夫多妻のあつたことは今の處認められない。然し離婚は行はれ、再緣三緣も稀れではない。

此の地方では娘



アミ族住宅の屋內

が結婚すれば、順々に新夫婦は新しく家を建てゝ分居するが、同じアミ族の中でも中部以南のものは特別の事情のない限りは分居せずに、一家内に大家族を包容してゐる。そして家に於ける男の地位は可成りみじめである。若しも妻なり姑なりに嫌はれるならば、二三の彼の持物と共に放り出されるのである。

前三蕃社での記事は之だけにとどめて、南へと他の蕃社へ移つてゆかう。だが是等の記事は蕃社によつて多少宛の相違はあるが、大體に於て共通なのである。その中で各蕃社によつて特に目立つ事柄を拾ひ乍ら彼等の生活をうかがうことにする。

花蓮港から汽車で南に下ると約二時間で、壽といふ驛に着く。其處の北西寄りの丘に近く鯉魚尾（リナハム）といふ蕃社がある。

恰度私が其處に行つた或る時、イリシンといふいはゞ蕃社の正月祭があつてその祭を見たことがあつた。昔はイリシンといふのが蕃社の一番大きい盛な祭であつて十日も通して行つたのであるが、今は警察でそれを制限してゐるので數日にすぎない。それは粟の收穫を終つて全部を穀倉に納め、各家では家の修繕をし、蕃社では集會所の修繕とか道路の草取とか修復とか種子蒔きから收穫時までの忙がしい間に手落ちになつてゐたところをすつかり奇麗にして、それからこの祭をするのであつて收穫が終つてから一月目位にするのである。

昔は粟だけを作つてゐたので、それが標準であつたが、今は米も作るので、第一期米の收穫がすんでからにするのである。それ故大概七月の末か八月になる。

私の行つたのは祭の最終の夜であつたが、集會所の前庭に幾ケ所にもどん〳〵とかゞりが焚かれて其の眞中には台が作られ、其の上には一年中のいろ〳〵な御馳走が並べられ、酒が運ばれてゐる。酒は昔は自製の粟酒であつたのであるが、今はそれはなく、米で自分達で作るか、若しくは買つて來た酒を使う。殊に彼等はアルコール分の強いのを好むので米酒（ビーチュウ）（内地の燒酎に似たもので台灣の專賣局で造つてゐる）とか糖蜜酒とかを飲むのである。そして食卓の周圍には蕃社の頭目老蕃といつた人達とお客とが坐するのであつて、私もその中に入る。

かゞりの外側には御馳走の食卓を中心にして遠く大きい圓陣が盛裝した若い男女の群によつて作られる。そして其の圓陣は絕えず踊りながら右に廻り左に廻るのである。それは一人の音頭によつて導かれ、總勢がそれに相和しつゝ踊るのであるが、其の聲はかゞりの明光と共に十數町の遠くまでも響く。かうして最後の晩は夜の明けるまで踊りつゞけるのである。

それで祭は終るのであるが、彼等は祭りの期中は魚は禁忌で

あつて決して觸れもせず、口にもしない。そこで祭が終ると、それがどんな祭であらうと必ず祭の翌日は社中の男は河に出て、魚をとるのである。それをミブテンとかパクランとかいふのであるが、幸に私はそれにも招かれることが出來た。

　此の蕃社の裏を荖溪といふ河が流れてゐるが、それを石を積み重ねて生蕃芋の葉で水をくひとめるのである。若者達は踊が終ると漸く御馳走に有りつけるのであるが、それがすむと直ぐに河に集つてこの仕事をするのである。河床の石磈の上には矢張り頭目や老蕃達が蹲居してそれを眺めてゐる。水がせきとめられて魚がとれると、其の場で直ぐに鍋に鹽湯を作つてその中に魚を入れて煮るのである。そしてそれを肴に又前日の御馳走を運んで酒をのみ乍ら食事



アミ族の正裝せる若者達の舞踏マラリキツド

するのである。

　いはゞ日本の精進落しである。これですつかり祭は終つて、翌日からは又平常の生活に復するのである。

　魚の禁忌は祭の時は絶對的なものであるが、平生でもあるのであつて彼等はそれを決して住宅内では食はなかつたのである。或る蕃社によると魚を煮灼きし、魚を食べる小舍を特別に作つてゐる處さへもあつて食器までがすつかり別にされてゐるのである。さういふ小舍のないところでは屋外でするのである。

　次に蕃社にはチカワサイとかマーガンとかいはれるものがあるのであるが、それは呪法者でもあれば、醫者でもあるのである。病氣

の時には必ずそれにかかるのであるが、チカワサイが若し病人を見て、これは唯の病氣ではない。チカワサイにならなければならない。即ちチカワサイになることをカワスに呼びかけられてゐるのだと診斷すると、其の病人はそれからチカワサイになる修業をすることになり、病氣も癒えて一人前のチカワサイとなるのである。

　これが多くの蕃社での事實であるが、此の鯉魚尾社では特別な行事が行はれるのである。それは九月から十一月頃までにかけて連日ミサクロといふチカワサイの踊が各戸を踊り廻るのであるが、十歳以上の小供のある家では必ずその子を一度は出さなければならないのである。チカワサイは自分達の携へてゐる刀を鎗とを以て、その子供の心臟の處を突差すのである。さうすると子供の中には倒れて氣絶するものがあるのであるが、其の昏睡狀態の中で夢を見、そして當人は少しも知らない歌を夢中で唄ふのである。それはチカワサイのカワスに導かれてゆくのであつて、かうした靈魂のあつたものが選ばれて修養を積み、チカワサイになるのであるといはれる。



アミ族のチカワサイ

　カワスとは死んだ祖先の靈怪である。彼等は死後はすべてカワスになると信じてゐる。病氣はすべてカワスの仕業であると信じてゐる。チカワサイになるものにはチカワサイのカワスが憑くのである。死んだチカワサイのカワスに呼びかけられることによつてチカワサイになるのである。

　そしてチカワサイになるものは男女の別を問はないのであるし、年齡にも制限はないのである。然し修業が積んで一人前になるまでは異性にふれることは出來ず、魚肉は勿論のこと、鷄肉、荳類の野菜を一切食せず、穀類をとらず、酒と生薑だけを口にするのである。

　鯉魚尾社を去つて壽驛から更に汽車に乘る。一時間餘りで馬太鞍驛に達する。其處で下車すると馬太鞍社と太巴塱社とが近くにある。私は今は太巴塱社の記事を作ることにする。

　太巴塱社は驛から眞東に約一里の處にあつて海岸山脈を後に

背負ひに背負ひ、前に北淸水溪を控えてゐる。古くからある有名な大きい蕃社である。無論種族はアミ族ではあるが、前記の諸蕃社とは多少系統を異にしてゐる。然し、根本的の違ではない。

私はこの蕃社を最初に訪ねた時に、初めて首棚といふものを見た。今は取り壞されてなくなつて仕舞つた。それはカケタンの家といふものに行つた時であるが、その前庭に高さ三尺足らず、幅も同じ位の棚があつて、それに四つの頭骸骨が紐で吊されてあつた。

カケタンの家とは蕃社の祭事を司どる家であつて、其の家から出た男がチリシナイといふ職を繼いで祭事を司どるのである。其の家柄だけは蕃社で世襲であつて、其の家に生れた男子でなければ、其の職は嗣げないのである。そして其の家には天上に於けるマラタウ神の生活の模型が刻まれたり、描かれたりしてゐる。先づ入口には左右の柱に裸體の男女が刻まれてある。それがマタラウ夫妻なのである。家の中には柱にも壁にも軒木にもいろ／＼な模樣がある。それはマタラウの家の有樣なのである。マラタウとは彼等の守護神であつて軍神なのである

首を馘ることの動機はいろ／＼であるけれども要するにそれは skull-cult なのである。彼等は先きに記したイリシンの祭を終ると必ず馘首祭を行つて穀物の豐饒、蕃社の繁榮を祈願したものなのである。先きに記すことを忘れたが、彼等の祭事はすべて農業に關するものだけであつて、それは五穀の豐饒、蕃社の繁榮を神に感謝し、且つ祈願するのである。

私は太巴塱社をこれ位で切上げて更に南に下つてゆく。そして瑞穗驛で下車する。其處には眞西の山の稜線に溫泉がある。瑞穗溫泉といはれる。

其處からは東前面にコヨ溪の河床を隔てゝ北から南に續く台地が見られる。今は此の台地には小さな蕃社が三つ程散在してゐるのであるが、何時の頃か解らぬが昔は其處に何かあつたといふことが遺跡によつて考へられる。

其の台地の北方は一段と高くなつて水平面を作り、急傾斜面をなして、更に南にゆるやかに續く台地となるのであるが、其の高い水平な處から南西に當つて石造物の遺物である大きい柱が在り、なほそれより眞西に當つて石棺が發掘せられる場所があるのである。柱は三本の石から組立てられるトリリソンの遺物と考へられる。石棺は六個の石の組合せから成立つてゐる。是等の遺物と現在の蕃人との間に何かの關係があるかどうかは未だ解らない。唯私は嘗つて東部の台灣に巨大石文化を有した

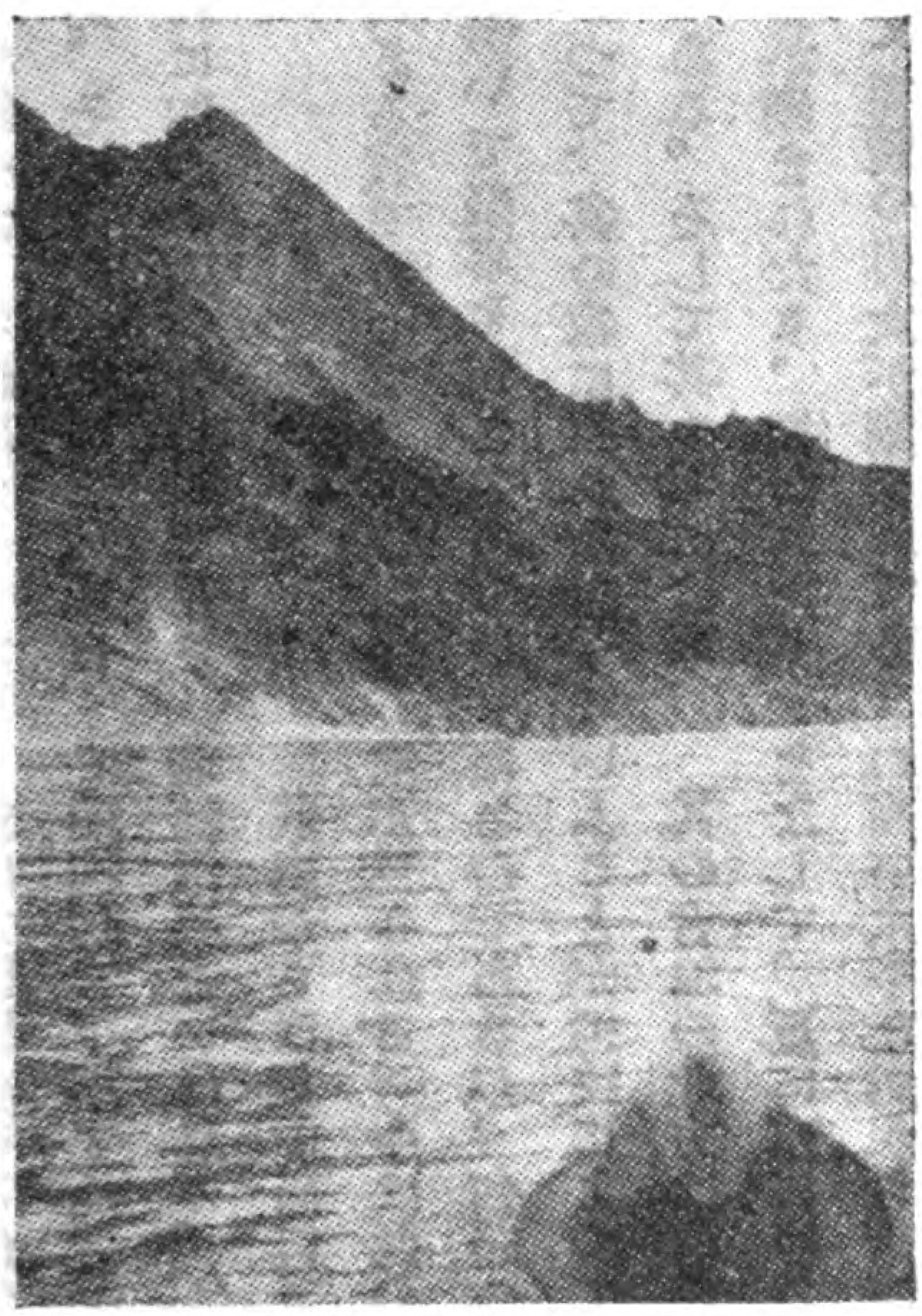
時代があつたといふことを報告するだけにとゞめる。

この台地と海岸山脈との間を秀姑巒溪といふ大きい河が南から北に流れてゐるが、この台地の北でコヨ溪、マシロ溪の二支流と合し、急轉して海岸山脈の胴腹を西から東に横斷して太平洋に注いでゐる。

その横斷する途中の北岸の斷崖の上に奇密社（ギウイツド）といふのがある。私はこの蕃社が大好きなのである。

この蕃社にゆくには、秀姑巒溪を舟で下るのであるが、兩岸には數百尺から千數百尺に達する斷崖が屹立してゐ、流れは幾度か斷崖に突當つては急湍をなして曲り、水勢は矢を射るやうに速い。それを船頭の腕一本に托して客となることは恐ろしくはあるが、實に壯快である。然かも其の景色は美しくもあれば、又雄渾である。三里と稱せられる距離を約四十分にして奇密社の斷崖の下に着くのである。

奇密社はアミ族の蕃社の中で最も古い傳統を傳ひてゐるものだといはれてゐる。然し奇密社のことは他にもかいたことがあるので記さないが、彼等に傳はるアミ族の由來を簡單に記してみよう。


秀姑公溪

先きの瑞穗から見た台地を南に下ると、秀姑巒溪の廣い河床を東にして西に三笠山といふなだらかな山があるが、これを蕃稱ではタウラヤンといふのである。このタウラヤンには太古アミ族の祖先の二柱の神が降臨して住んでゐたのであるが、土着の神との間に爭を生じ、土着の神は海の神に加勢を求めて津波を起させ、皆殺しにしようとした。そこで二柱の神はいつ早く梯子によつて天上に登つたが、子供である男女の二人の兄妹は取殘されてしまつた。然しその二人の兄妹は庭先きにあつた臼に乘つて波のまに〳〵流されてゐたが、その中に、潮もひいてラガサンといふ山の頂に着いた。ラガサンといふのは恰度太巴塱社の後方に見える山である。そこで二人は兄妹ではあるけれども、夫婦の交りを結んで五人の子供を生み、子孫が殖え、現在のアミ族にな

つたといふのである。

こゝで面白いのはタウラヤン時代には雞を飼ひ、豚を養つてゐたけれども、農作物を耕すことは未だ知らなかつたのである。そしてラガサンに來てから、初めて女神の身體の各部からいろいろの五穀の種子を得て、彼等は始めて作物を耕すことを知つたことになつてゐるのである。

奇密社にもカケタンの家がある。そしてそれは二軒である。この二軒が祭事を司どるのである。ここで又面白く感ずることは、アミ族には家々に姓に似たものがあるのであるが、その起原に就いては解らない。或るものは昔住んでゐた土地の名前であるといつてゐるけれども、其の姓には太陽を意味するものがあり、植物を意味し、動物を意味するもののあるのを思ふとトーテムではないかと思はれるけれども、トーテム團としての特質を現在の彼等の間に私は未だ摑むことが出來ないので何ともいふことは出來ない。だが、兎に角すべての家には姓があるのである。ところが、カケタンの家である二軒には姓はないといつてゐる。其の家の一つにタアエといふのがゐるのであるが、彼は私に對して、自分は神の直裔であるから姓はないのだと答へた。そして是等の二軒の家は全く神聖なもとせられてゐるのたのであつた。チリシナイの職につくものは尊厳なるものとして神聖視され、彼等は祭事を見る他、決して他事を顧みかなつたのである。そして祈事は擧げて各二軒から委任される二人のパブルアイといふものに任せられてゐたのである。

私は考證や論議を後に讓つて、今は唯之だけを記して置く。そして私は先きを急ぐことにする。

奇密社から秀姑巒溪を引返して更にその流を遡ると、玉里庄の南對岸にハラワンといふ蕃社がある。私は其處での記事を嘗ての通信から拔き書きする。

「路は秀姑巒溪を渡渉しては河床をゆき、又渡渉しては河床をゆく。カゴなればこそ樂なものの歩いては到底僕のゆけるところではない。

「其の途中の河床に出來立ての新しい小舍が見られる。それはアベハ社のコムリツシ（二期作の植附けを終つた後の祝ひ）の爲めに、ミプテン（河漁）に出てゐるのであつた。その小舍には今日ミプテンしてゐるもの、それはカツパハ（若者）全體であるが、その最上級の級長が一人の小者をつれて其處で絶えずミリシン（神に祈願をする）してゐるのである。それは益々蕃社の裕福ならんこと、この好き天氣の永く續くことを祈願するのである。

「見るとカツパハ達は河の此處彼處に河をせきとめてゐる。彼等は今夜はこの河床で一夜をすごし、明朝河のひあがるのを待つて魚を捕つて蕃社に歸るのである。

　其處には集會所にマトアサイ（老蕃）達が皆集つてゐるが、それらの魚は唯一尾もカツパハの手には殘さずに、全部をマトアサイに捧げるのである。然しカツパハ達はマトアサイから燻漬の肉や餅や酒を貰うのである。

「そしてマトアサイ達は彼等のその階級々々の組毎にその魚を分けて、各階級毎に誰か級中のものの家に集り、酒宴をひらくのである。カツパハ達は集會所で先きに貰つた肉も餅も酒も喰ひつくし、飲みつくして仕舞つて夕方になると、彼等は又各自組をなして、酒宴をひらいてゐるマトアサイの處をめぐつて歩るき、重ねて御馳走になるのである。然し魚だけは遂に彼等の口には入らないのである。

「斯くして彼等の全部は愉快に一日をすごすのであつて、この日が彼等カツパハ達にとつては一年中で最もたのしい日だといはれてゐる。

「私はアベヘの蕃社に立ち寄つてハラワン社に着いたのは午后の七時であつた。最早眞暗に暮れて路も解らなくなつたので、私は寄らずに眞直に玉里に行かうとしたのであつたけれど、强いてとめられたので、乞はれるまゝに此處でカゴを下りた。蕃社では僕の爲めに酒宴をひらく用意をしてゐたのであつた。僕はその好意を拒むことは出來なかつた。

「待つこと一時間ばかりで招じられて夜學會の會場に導かれた。そこには机を合せて食卓がつくられ、腰掛が列べられてある。其處へ蕃社の最上の御馳走である雞肉の水タキが運ばれる。頭目以下蕃社の重なる人達が次ぎ／＼に列ぶ。僕と同行のイナトヨール・カツァウ君もその中に加はる。（此の人はこの蕃社の出身で、玉里で巡査をしてゐる。僕のアミ族調査の恩人である）

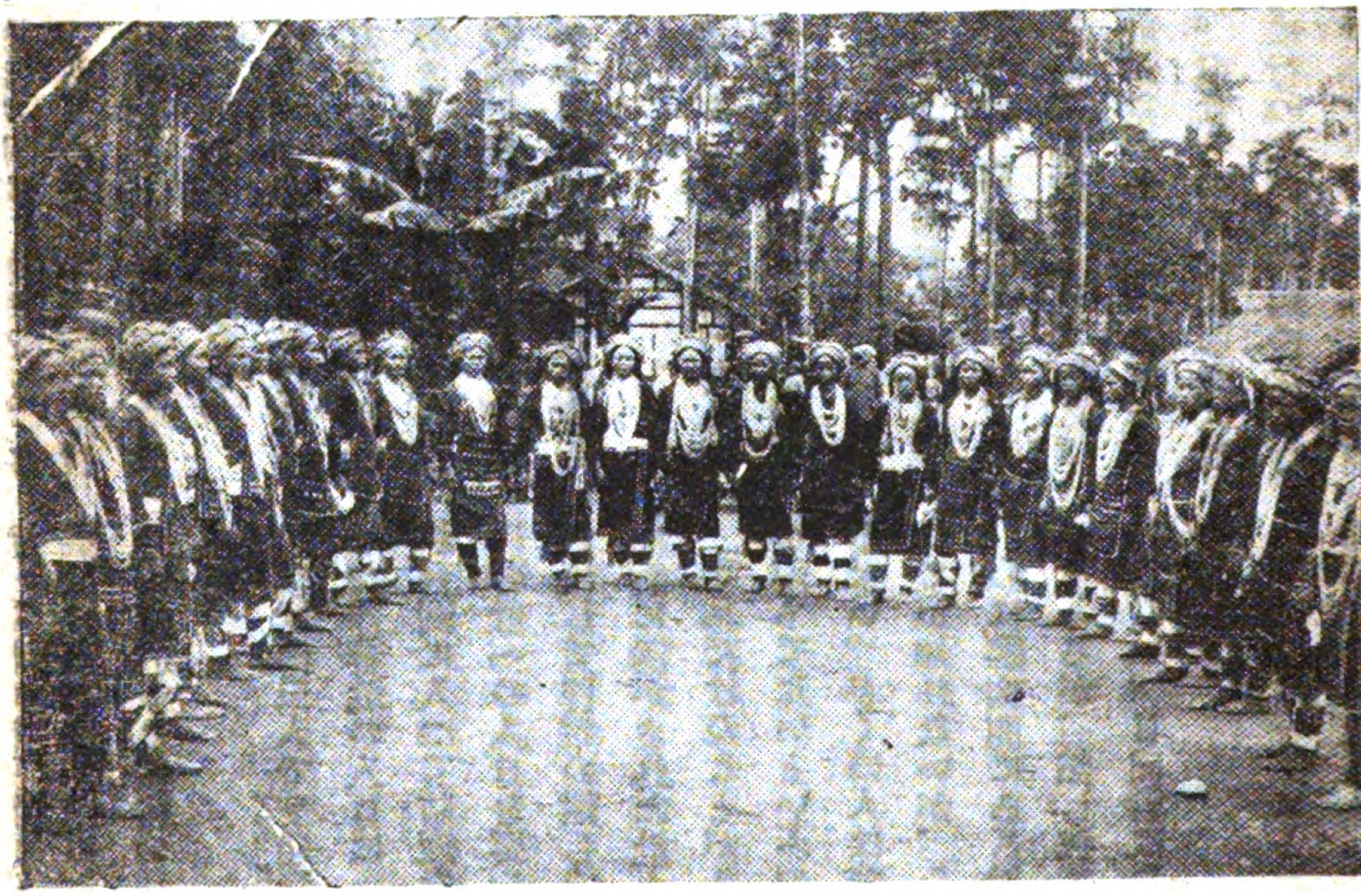
「酒が運ばれると共に、蕃社の若い女達が周圍に圓陣を作つて列らぶ。いゝ加減人數が揃うとミサラキヤウが踊られる。踊られるといふよりは歌はれるといふ方がよいかも知れない。それが客である僕に對する最上の歡迎なのである。又敬意でもあるのである。

「食卓には裸體の男もゐる。酒は波々とつがれる。僕と頭目との間には一人の若い女が腰を下す。彼女は僕等の爲めに酌をする

「歌はたえず歌はれ、圓陣は食卓を中心にあらゆるテンポを採返して左から右に動く。一人の女が音頭をとる。すべての聲がそれに和する。頭目は立つて其の中で吠ゆるやうな聲を發して

演說をする。圓陣は握り合つてゐた手をはなして、皆の女が半身を屈し、頭を垂れて、手を左右に振り乍ら廻る。そして彼女等の一人が即興で僕への歡迎の言葉を歌ふ。酒席のすべては何ともいはれない雰圍氣に包まれる。

「若い女達は野良の仕事から歸つたまゝの汚い破けた裝をし、赤坊を背負つてゐるものもある。その色は黑い、その輪廓ははつきりしてゐない。然し自然のまゝの美しさ、勤勞のみが與ふる力がすべてを壓してゐる。僕は涙ぐまざるを得ない。それと同時に過去も未來も消えてゆく。そして唯現在の陶醉だけが美しく幸福に感じられる。その幸福には慚愧もなければ、悔恨もない。唯美しい今があるといふ幸福だけだ。僕はそのまゝ永久に眼をつぶつて仕舞つて



アミ族の正裝せる女達のミサラキヤウ

も惜しくない氣がしてくる。

「何の目的も、何の企てもない、ありまゝの生のよろこびが感じられる。僕は幾度かかうした場處に招れたが、この感じだけは何處も變らない。

「舞台でのコーラスには見榮がある。競爭がある。個人がある。調律は如何にも一つにうごく。然し皆の心は分れてゐる。然し蕃社のそれには何ものもない。唯一つの聲、唯一つの心があるばかりだ。藝者の歌舞音曲の席にはたえず悔恨がある、寂しさがある。然し此處には唯一つ美しさがある。無心だけがのこる。

「うす暗いランプの光の下での酒宴！　それは恐らく文明人を、都會人をよろこばすことは出來ないかも知れない。彼等には明光と暗

黑としか解らない。然しこのうす暗がりの中に、僕等がとうに置きわすれて來た何かが殘つてゐる。ありのまゝの人間の野性が殘つてゐる。昔人間が有つてゐた社會群としての集團の野性が殘つてゐる。あるものはすべてで一つである。數はない。

「僕はさゝれるまゝにコップの酒をほし、つがれるまゝに飲めない酒をあくまでものんだ。然しこれほどうまく酒をのむ機會は少ない。食卓にある男達の面上は輝き、力にみちた美しさがある。彼等も一人たち二人たち女達の輪に交つて踊り出す。食卓には最後に頭目と副頭目と僕だけがのこる。宴は高調に達して聲はあたりの山々溪々にひゞく

「僕は暇を告げて立つ。眞暗の夜路をログロク（松明）をもやしてカゴで送られる。あつく禮をのべて惜しい別れをする。」

ハラワン社から小山一つ隔て、南にアンツンの蕃社がある。そこにパチタール・ブラオ君（改名して日向武郎といつてゐる）といふのがゐる。それは先覺者として尊敬せられてゐる。

私は日向君と一緒にアンツンの蕃社が見たかつた。それで玉里から同行をたのんだことがあつた。私はその時未だ面識はなかつたのである。私は玉里の停車場に行つたが、其處には隨行してゆく警察の人がゐるだけで、蕃人らしい人は見えなかつた。それで私は其の巡査に日向君のことを尋ねた。ところが巡査は日向君は此處にゐますといふ。見るとアルパカの背廣を着込んだ立派な體格の持主が立つてゐる。それが、日向君であつた。

私達は三人で安通（アンツン）驛で下りて日向君の蕃社なるアンツンに向つた。蕃社の入口に小舍掛けがしてある。其の頃は丁度コレラが台灣に入つて防疫で大騒ぎをしてゐる時であつた。其の小舍は蕃社への入口を要して防疫をする爲めのものであつた。それが決して警察の達しでもなければ、強制的のものでもない、日向君に動かされた社人の自發的の企であつたのだ。

それだけのことがあつて、蕃社に入ると流石に清潔だ。塵一つ落ちてないといふやうに掃き清められ、路傍には草も生えてゐない。多くの人は蕃社などといふと汚いもののやうに考へられるか知れないが、それは誤りである。

私は蕃族間にある信仰の打破といふことに大に議論を有つものであるが、然し彼等が自發的に之を打破して來るのは認めるしかない。日向君は先覺者として迷信打破の實行者でもあるのである。

蕃社にはデワスと稱して酒を盛る祭神器があるのであるが、彼等には偶像といふものはなくつて祭に使う道具そのものが神

聖なのである。殊にデワスはその中でも大事なものなのである。先きに記したやうに蕃人が屋内で魚を煮たきし、食はないといふのは、デワスが必ず屋内には飾られてゐるからなのである。

ところが日向君は先づこの禁を破つてデワスを廢棄する機運を自分の蕃社に作り、ひいて今ではアミ族中のデワスを廢棄する迄に至らしめたのである。私にはこのよしあしに就いては考が別にあるのであるが、兎も角も一個の日向君を生み出したといふ事實を私は感心してゐるのである。

アミ族の蕃社は未だ數多くあるのであるが、私は一足飛びに卑南平野まで南下する。

海岸山脈の外側、太平洋に面してアミ族の蕃社は又多い。然しその類型はすべて同じである。間々異なるものがあつても、それは私の學術的の興味を滿すものではあるが、一般的の興味には遠い。

それ故に私は南方のアミ族の蕃社を代表する卑原平野にある馬蘭社での特殊の記事をかくことにして、この話を終らうと思ふ。

馬蘭社は卑南平野の中にある殆ど唯一のアミ族の蕃社である。周圍はすべて卑南蕃であり、昔は卑南蕃の爲めに屈服を強ひられ、貢税して、漸く其の存在を保つて來たのである。殊にその卑南社とは境を接してゐた爲めに屈服を余儀なくされ、恰もその臣下であるかの如く見られてゐたのである。馬蘭社を農民とすれば、卑南社は士族の如きものであつたのである。然し今はそれらの隷屬關係から解放されて全く自由である。さうなると馬蘭社は勞働階級であつただけに今は立派な蕃社になつてゐるが、卑南社は貴族階級で勞働に就いて關心がなかつただけに劣らざるを得なくなつてゐるのである。

この馬蘭社の中で目立つことは他の蕃社が頭目の推選といふことを蕃社會議の決議に待つ極めてデモクラティックの方法によるか、又は壽郡社のやうにカケタンの家の委任によるかするとは違つて、此處だけは實力を有するものが自ら名乘りを上げて出ることである。然し頭目になつても社事を獨斷專行するといふことはなく、蕃社會議の決議に從つて執行することは同じであるが、一つの例外を見出すことを面白いと思ふのである。

私は蕃人といふもの、此處には單にアミ族だけであるが、兎にも角にもそれを出來るだけ解つて貰ひたいと思つて筆を取つて來たが、充分ではないかも知れない。

台灣といふと直ぐに「生蕃」を聯想する位、台灣と蕃人とは附き物になつてゐる。台灣に就いては既に充分に知られてゐることが澤山にあるが、然し蕃人のことに就いては、一體彼等がどんなものか殆ど知られないといつていい。それは日本の內地に於て知られてないばかりでなく、台灣の中でさへ知られてないのである。

それ故間々日本の內地に蕃人のことが知られるとしても、好い加減のものが割に多いのである。そして其の話の多くといふのは直接自分が見聞きした事柄ではなくつて皆人から人へ語り傳ひられた話が、途中でその人々の興味や好奇心からいろ〳〵に作り改められ、誇張されたものとなつてゐるのである。然かも其の興味の持ち方も誇張の仕方もいゝ方へとは向かないで惡るい方へばかり進んでゆくのだから、蕃人といふと恐ろしい野蠻な人種で、まるで喰人種でもあるかのやうにさへ考へられてゐるのである。かうした想像や臆斷から、蕃地へゆくと人肉の味噌漬を喰はせる相だといふやうな話までが誠としやかに話されるやうになるのである。

然しこれは極端な一例だが、これに類した全く反對の事實が可成り多く傳ひられ、蕃地といふとさも危險な處のやうに考へられてゐ、蕃人といふものは全く厄介な代物で、あんなものが台灣にゐなかつたらどんなに助かるか知れないといふやうに思はれてゐることは確かである。

蕃人なんか調べて何が面白いんですか、と私にきく人がある。それへの答は私には唯笑つてすまされる。何故なら蓼喰ふ虫も好き好きで、一々効能を述べ立てる譯にもゆかない。だが、私には蕃人の惡口がいはれたり、眞相が誤り傳ひられたりしてゐるのを聞いたり、見たりすると腹が立つのである。蕃人だといつてどうせ人間だから完全を求むることは出來ないのは解り切つてゐるが、蕃人位賴み甲斐のある人間はないとさへ思つてゐる。そして彼等は文明人がとうに何處かに置きわすれて仕舞つて今更に戀しがり、欲しがつてゐるものを未だに澤山に有つてゐるのだ。

私はそれを話したいのだ。（三、一二、二七）

吉原今昔（二）

久保田万太郎
小村雪岱畫

一

…………
…………
いつか吾妻へ筑波根の
かのもこのもをみやこどゝ
いざ言問はん恵方さへ
よろづ吉原山谷堀

とは清元の「梅の春」の文句である。

梢まつの葉のおちそめて
夕暮しろき待乳山
時雨しぐれに啼く鴎の
聲もこほるや干潟道
衣紋坂越えて鐘の音
…………
…………

とは長唄の「初しぐれ」の文句である

そんなものを持つて來なくつても、山谷から橋場今戸、待乳山、さうした隅田川沿岸の諸景の嘗て「吉原」と切つても切れない關係にあつたことはだれでも知つてゐる。「吉原」を描くのにそのあたりから出立するのも一つの方法である。……と思つたわたしは――そこも矢つ張子供の時分からの古馴染の、つまりは心やすだてに、いまゝでちよろツかにみ來つた町々をいま改めてはツきりみ直さうとしたわたしは、十二月末のある午後、根岸から出る小さな乗合自働車を言問橋の袂で下りると同時に、おや？　と、おもはずそこに眼をみ張つたものである。

――むかしからその位置にある聖天町の交番、それを眞ん中に山谷のはうへ、今戸橋のはうへ、二タ叉にわかれた道の、後のはうのもの丶信じられないほど野廣くなつたことにわたしは驚いたのである。――といふことは、以前の、「河岸」に沿つた「表通り」と「裏通り」と二タ筋そこにならんでゐた往來の、その境界をなしてゐた家つゞき――榮えないその一ト側のあとなく綺麗に取ッ拂はれた……とばかりぢやアないがさういへば手ッとり早く感じが出る……と一しよにいまゝで「裏通り」の角だつた材木屋の「松盛」が店の向きをかへて「表通り」の角になり、同時にその整然と板材を立てかけたり簡素にがッしりした腰障子を閉てたりしたきはめて古風な建物をかぎりに、あとは「河岸」まで、つゝぬけに、ガランと、はれ〴〵とそこに一めんの空地が擴つてゐるのである。――さうしてそこに、立竝んださびしい冬木のかげに、隅田川の水のまのあたりしらじらと鈍く光りつゝながれてゐるのをわたしはみ出した……

いつかは出來る「隅田公園」の一部である。

『此奴アいゝ。』

おや？　と、おもはずさう眼をみ張つたつぎの瞬間、わたしはすぐ立直つて自分にいつた。なぜならそれはいまゝでの「淺草」に決してみることの出來なかつたあかるい光景だつた。いまゝでの「古い淺草」に決して求めることの出來なかつた快活な風情だつた。――廣重でもなく北齋でもない清親の「味」――さうだ、さういへばいゝ……

おもひ出すのは去年の夏のことである、東京日々の「大東京繁昌記」のためにわたしは『雷門以北』を書くことにした。その必要のため二三人の連れと一しよに、仲見世、馬道、猿若町、さうした場所の近狀をつぶさにみてあるいたあと、わたしは、待乳山の石段を上つた。さうしてすぐ隅田川から向島へかけての馴染のふかい眺めに眼を放つた。たちまちわたしとわたしの連れとはひとしく暗然とした。なぜならそこに遠く横つたのはところッ剝げのした綠の土手である。そのうへを絶えず馳せちがふ自動車である。林立する煙突である。三圍の華表を壓して巍然と聳えるコンクリートの建物である。――六月の曇た空のいろを浮べた隅田川の憫いながれが一層その眺めを荒廢したものにみせてゐた……

『それにしてもあのコンクリートの建物は何だらう？』

わたしは半ば自分にいふやうにいつた。

『訊いて來ませう。』

さういふと一しよに石堂のまへのすこしの石段をむかしの額堂のはうへ下りて行つた連れの一人はすぐまた返つて來ていつ



た。

『小梅小學校ださうです。』

『小梅小學校？』

わたしたちは改めてその建物をみ直した。——さうすることによつて地震後まだ一度も吾妻橋をわたらない自分をはッきりわたしはおもひ返した。

『亂暴なものをこしらへたもんですねえ。』

わたしはさういはざるをえなかつた。

『全く……』

わたしの連れはひとしくまたさういつた。

が、やがてそこを離れ、裏の石段を瓦町のはうへ下りようとしたとき、急にそのとき思ひもよらない「眺め」がわたしたちのまへに展けた。——わたしたちは、すくなくもわたしは、下りかけた石段の中途におもはず凝立したものである。

そこからは隅田川が一ト眼だつた。……といふことは、河岸に、すぐその下の河岸に、わたしの眼を遮るたゞ一けんの移動バラックさへなかつた。雜草の茂るにまかせた廣い空地が擴つてゐた。——といふことは、まだ、そこから小梅小學校を一ト眼だつた……

青い草、そのかげをながれる河の水、その水にのぞんだ灰白

色の建物。――時間にしてその五分まへ「向島」の風情をことごとく否定してゐたその「建物」が、「向島」のいのちを無慘にうばつてゐたその建物が、いかにそこに力強く、美しく、寂しく生きてゐたことだらう！――實に、一味の、近代的憂苦の影をさへその「眺め」はやどしてゐた……

むしろ茫然とわたしはさうした「隅田川」の一部をふみけつたのである。

……その驚きである、そのよろこびである。――その驚き、そのよろこびに再びわたしは出會したのである。

二

「……そこに、まづ、わたしたちは、かつてのあの「額堂」のかげの失はれたのを淋しくみ出すであらう。つぎにわたしたちは、本堂のうしろの、銀杏だの、椎だの、槇だのゝひよわい若木のむれにまじつて、ありし日の大きな木の、劫火に焦げたまゝのあさましいその肌を日にさらし、雨にうたせてゐるのを心細くみ出すであらう。さうしてつぎに……いや、それよりも、さうした貧しい木立の間から山谷堀のはうをみるのがいゝ。――むかしながらのお齒黒のやうに澱んだ古い堀割の水のいろ。――が、これにつゞいた慶養寺の墓地を越して、つゝぬけに、そのまゝ遠く、折からの曇つた空の下に千住の瓦斯タンクのはる〴〵うち霞んでみえるむなしさをわたしたちは何とみたらいゝだらう？――眼を遮るものといつてはたゞ、その慶養寺の境内の不思議に燒け殘つた小さな鐘樓と、もえ立つやうないろの銀杏の梢と、工事をいそいでゐる山谷堀小學校の建築塔（タワー）と……強ひていつてそれだけである。」

『雷門以北』の「待乳山」のくだりについて去年わたしはかうしたことを書いた。

「わたしたちは天狗坂を下りて今戸橋をわたるとしよう。馬鹿廣い幅の、青銅いろの欄干をもつたその橋のうへをさういつてもとき〴〵しか人は通らない。白い服を着た巡査がたゞ退屈さうに立つてゐるだけである。どうみても東海道は戸塚あたりの安氣な驛者の住居位にしかみえない澤村宗十郎君の文化住宅（窓にすだれをかけたのがよけいさう思はせるのである。）を横にみてそのまゝ八幡さまのはうへ入つても、見覺えの古い土藏、忍び返しをもつた黑い塀、鮨屋のかどの柳――さうしたものゝ匂はしい影はどこにもさゝない。――そこには、バラックの蕎麥屋のまへにも氷屋のまへにも、產婆さんのうちのまへに

も、葵だの、コスモスだの孔雀草だのがいまだにまだ震災直後のわびしさをいたづらに美しく咲きみだれてゐる　」

おなじく「今戸橋」及び「今戸」のくだりについてわたしはかう書いた。

……が、わづか一年半ほどの間にさうしてくづをれた光景（けしき）はあとなく掻消（かきけ）された。——といふことはすべて整理され準備された。——その「隅田公園」の一部（たゞしくいへばその敷地の一部）の新鮮さにうたれたあと以前とまるで勝手の違つた環境のなかを待乳山へ上つたわたしは「待乳山聖天堂再建」についての木の香あたらしい寄進札の羅列をまづ境内の兩側にみ出した。（千圓、二千圓、三千圓といふ大口（おほくち）のものは、べつに葭簀つ張の、花壇のやうな小屋がけのなかにことさらいち／＼制札にしるされて並んでゐた。）さうしてその再建せらるべき本堂の縮尺五十分の一の締圖面の、青寫眞に燒かれて堂々とその間に介在するのをわたしはみ出した。——と同時に、バラックの假本堂、そのうしろの「劫火に焦げたまゝのあさましいその肌を日にさらし雨にうたせてゐる」ありし日の大きな木の嘗てのその生々（なま／＼）しさを失つたのをみ出したとともに、銀杏、椎、樸、それらの若木のむれの決してもうそこに嘗ての日のひよわさを感じさせてゐないのをわたしはみ出した。——むしろわたしに伸立つて行くものゝ力強さが感じられた。

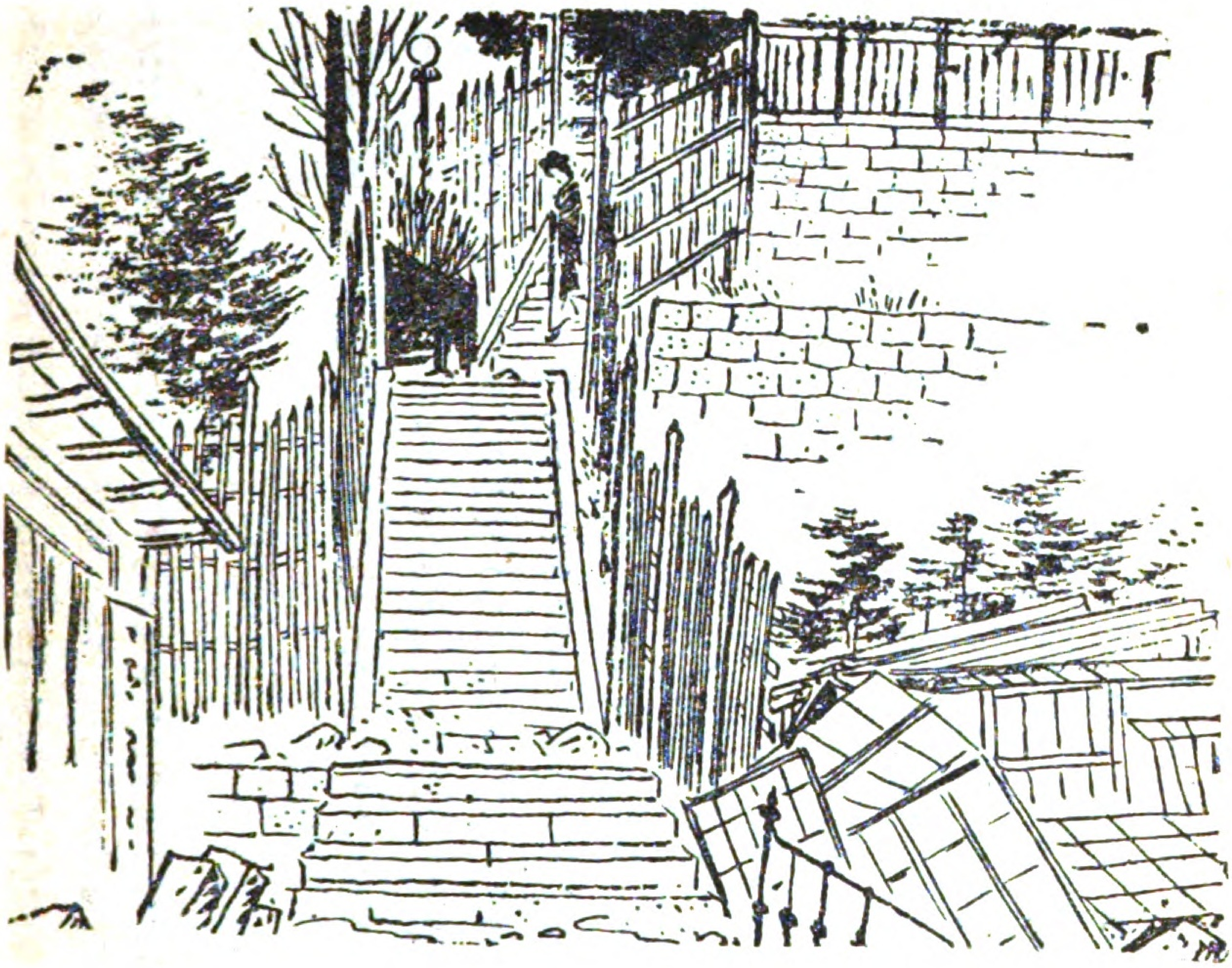
『……恢復してゐる——矢つ張恢復してゐる。』

わたしは自分にさういひつゝ山谷堀のはうをみ下（おろ）した。が、「お歯黒のやうに澱んだ古い堀割の水のいろ」は隙なくいつか立竝んだ崖の下の屋根々々に完全に遮られた。みえるのはただ、對岸、慶養寺の墓地の空高（たか）々と干された竹の皮のむれ。……とのみはいふまい、竣工した山谷堀小學校をみよ、巍然と（實にそれは小梅小學校以上に）あたりを掃つてそゝり立つてゐるではないか。……

わたしは間もなく天狗坂を下りた。——といつても、その裏みち、以前のやうに暗く建込んだ家々の間に落ちこむ、急な、けはしい勾配をもつた細い石段でなくなつた。——さうしてもうそこを下りても、再びわたしは、古い佃煮やの「濱金」を、門に網を干した何とかいつたあの船宿をみるよしがなくなつた……

「……………」

…………………



『有難う。』と鈴むらさんはいつた。『濱金のまへにうまい蕎麥屋があつたね。——雨がふらうが何うしようが、日に一度は必ずそこへ蕎麥を喰ひに來るんで今戸橋をわたる。』

『濱金のまへに、角に、以前船宿が一けんありましたけれど、いまでもまだありますかしら？』とせん枝はいつた。

『いまでも其奴はあるよ。』

『以前よくあの軒に網の干してあつたのを覺えてゐますが……
……』

『いまだに天氣のいゝ日には干してある。——つり舟と書いた行燈もまだ以前のやうに出てゐる。』

『濱金の內儀（かみ）さんも年をとつたでせうねえ。』

『つまらない心配をしてゐるぜ。』

『旦那、色氣ぢやアありませんよ。』

『分つてるよ。』と鈴むらさんはわらつた……。

大正四年四月の「中央公論」に書いたわたしの作『今戸橋』の一節である。盲目の落語家せん枝とその贔屓の客の鈴むらさんにわたしはかうして應酬（とりやり）をさせた。——なぜかうした應酬をさせたかといふことは、いひかへてまたどうしてわたしがせん枝を瓦町に住ませ、どうして鈴むらさんを今戸に住はせたかといふ

ことは、そのあたりのわたしにとつて子供の時分からの好きな場所であつたばかりでない、いまにしてはつきりいへば、永井先生の名作『みすだ川』によつてまた示唆されるところ多大だつたからである……

三

『すみだ川』のはじめて「新小説」に出たのは明治四十二年の十二月だからわたしの二十一のときである。わたしはそれを、朝、慶應義塾へかよふ電車のなかで讀んだ。さうしてこと〴〵くわたしは昂奮した。勿論『あめりか物語』を讀んだ以後、「趣味」で『深川の唄』を、「早稲田文學」で『監獄署の裏』を、「中央公論」で『祝盃』及び『牡丹の客』を讀んで、世にもかうした美しい小説があるものかと窃にさう生甲斐を感じてゐたわたしである。いつも持ちあぐむ雷門から薩摩つ原までの間を、時間にして四十五分……わるくするとだまつて一時間かゝる長い間を、たゞもうわたしは夢みごゝろにすごした。――、その「新小説」に附いてゐた口繪の、飄る納め手拭の下、御手洗の水に白い手をさしのべた若い藝妓の恰好をいまなほわたしは覺えてゐる……

この作のわたしを魅了した所以は一にこの作の主人公長吉の生活のうへにある。――といふ意味は、その弱い、寂しい長吉の性格のうちにゆくりなくわたしのわたし自身をみ出したからである。わたし自身のすがたをみ出したからである。――が、もし、その長吉にしてさうした下町の育ちでなかつたら、同時にお豐にして淺草の片隅に住むしがない常磐津の師匠でなかつたら、松風庵蘿月にして向島の土手下に住む安氣な俳諧の宗匠でなかつたらさうまでしかし無條件に傾倒しなかつたかも知れない。この作にみちた、美しい、すぐれたいろ〳〵の自然描寫。――その描寫の對象は小梅である。柳島である。濱町河岸である、今戸橋である、山谷堀である、公園裏である、觀音さまの境内である、宮戸座の立見場である。――さうして季節は、秋から冬、冬から春。――子供の時分から東京住居をしつづけたものにとつて最も感じの強い、愛着の深い、可懐しい期間である……

實際、わたしにとつて、「たけくらべ」を讀んだとき以來の歡びだつた。

その美しいすぐれたいろ〳〵の描寫のうちでもとりわけ深くわたしのこゝろに喰入つたのは「宮戸座の立見場」と「今戸橋」界隈との部分である。

まへのものについてはしばらく措く。あとのものについて

は、それこそ、そこに描かれた光景こそ、わたしの十四五の時分から震災直前まで殘つてゐたそのあたりの古い光景である。わたしにとつて忘れることの出來ない古い光景である。

「そこ此處に二三軒今戸燒を賣る店にわづかな特徴を見るばかり、何處の場末にもよくあるやうな低い人家つゞきの横町である。人家の軒下や露次口には話しながら涼んでゐる人の浴衣が薄暗い軒燈の光に際立つて白くみえながら、あたりは一體にひつそりして何處かで犬の吠える聲と赤兒のなく聲が聞える。天の川の澄渡つた空に繁つた木立を聳やかしてゐる今戸八幡の前まで來ると、蘿月は間もなく並んだ軒燈の間に常磐津文字豐と書いた妹の家の灯を認めた。家の前の往來には人が二三人も立止つて内なる稽古の淨瑠璃を聞いてゐた。」

いま、わたしは、長吉母子の住居に關するくだりをその作の第一回から拔き出すであらう。その「低い人家つゞき」といふことゝ、「涼んでゐる人の浴衣が薄暗い軒燈の光に際立つて白く」みえることゝ、「天の川の澄渡つた空に繁つた木立」のそびえてゐることゝ、わたしにいはせればそれだけで、それだけの少しの言葉で、その八幡さま附近の、しめやかな　つゝましい景情は殘りなくそこにつくされてゐる。――といふものがそのあたりの家々、どこもいひ合せたやうに二階をもたなかつた。さうしてどの家も、古い普請の、ガタ／＼な格子を閉めたその軒さきが暗かつた。たまにしか俥の音も響かず、いたつて人通りに乏しい狹い往來ながら、そのせゐかみ上げる空の感じにどこかカラリと放たれたものがあつて、そこに八幡さまの境内の大きな銀杏……一ト際目立つその梢が飽くまで高くそゝり立つてゐた。――冬、時雨が來て、その黄に染つた落葉が川捨なく道のうへに散りしくと「それがわづかな特徴」のへといふ意味は、さうした格子づくりのうちばかりの、外に商人やといつたら數へるほどしかない）今戸燒を賣る店々が急にその存在をはツきりさせた。白い障子、灰いろの瓦、うづ高くつまれた土細工のとり／＼にすぐその裏をながれる隅田川のしづかな水の光があかるくさむ／＼と俑上つた。

たゞし今戸橋をわたつてすぐの右側には、土藏をもつたり土塀をめぐらしたりした「寮」といつたかたちのものがしばらくそこに立竝んでゐた。その片側には、慶養寺以下、二三の寺の筋塀だの黑い門だのがつゞいてゐた。――「そのまゝ八幡さまのはうへ入つても、み覺えの古い土藏、忍び返しをもつた黑い塀、髮屋のかどの柳。――さうしたものゝ匂はしい影はどこに

もさゝない」と『雷門以北』に書いた所以である。

「お豊は今戸橋まで歩いて來て時節は今正に爛漫たる春の四月であることを始めて知つた。手一つの女世帶に追はれてゐる身は空が青く晴れて日が窓に射込み、斜向の「宮戸川」といふ鰻屋の門口の柳が綠色の芽をふくのにやつと時候の變遷を知るばかり。いつも兩側の汚れた瓦屋根に四方の眺望を遮られた地面の低い場末の横町から、今突然、橋の上に出て見た四月の隅田川は、一年を二三度と數へるほどしか外出することのない母親お豊の老眼をば信じられぬほどに驚かしたのである。晴れ渡つた空の下に、流れる水の輝き、堤の青草、その上につゞく櫻の花、種々の旗が閃く大學の艇庫、その邊から起る人々の叫び聲、鐵砲の響、渡船から上下りする花見の人の混雜。あたり一面の光景は疲れた母親の眼にはあまりに色彩が强烈すぎる程であつた。お豐は渡場の方へ下りかけたけれど、急に恐るゝ如く踵を返して、金龍山下の日蔭になつた瓦町を急いだ。」

このくだりでわたしの心を惹くのは「汚い瓦屋根」である。「四方の眺望を遮つた兩側の汚い瓦屋根」といふことである。――先生はそれほどの深い用意をもつて書かれたのでたかつたかも知れない。が、前記カラリとした感じの空の下に、濃い、うらゝかな春の日のさしそめたときまづ眼にうつるのは汚い瓦屋根……低い、汚い、兩側のその瓦屋根だつた。――靑い空、立迷ふ陽炎、よか〳〵飴屋の太皷の音、さうした、あかるい色と響きとの間に、せんべやで干す煎餅の白さが汚いその瓦屋根に照り添つて、そのあたりの、東京の……といふよりは「江戸」のといつたはうがいゝ……外れの忙しさをよく物語つた。

「『宮戸川』といふ鰻屋の門口の柳の綠色に芽をふくのに……」とあるのはおそらく「喜多川」といふそこの鰻屋のことをいはれたのだらう。八幡さまのまへ、今戸橋のはうへやゝよつたところにある古い鰻屋だつた。ごくの小さな榮えない店だつたが、門に柳を植ゑたけしきが妙に人目を惹いて「今戸のあの鰻屋……」といへば「あの、あゝ、柳のある……」とそのあたりを知るほどのものたつたら誰でもすぐさういつた。――以前は知らず、わたしが知つてからは川前だけの、上りはしないと聞くうちながら、岡鬼太郎氏の戯曲『女髮術師』の二幕目「今戸河岸鰻屋淸川の場」とあるのをみたときも矢つ張わたしはこのうちを思ひ起した。

一ト言にして古風な人情。――古風な人情をもつた町だつた。――しかくしづかな、哀しい、つゝましい往來だつた……

四

が、それも夢、いまはそこも「隅田公園」の敷地の一部の、河岸を縁取つてゐた家々はすべて取拂はれた。勿論澤村宗十郎君の文化住宅も、救命艇庫も、喜多川も、あとなくそこにすがたを消してみるかぎりの水にのぞんだ廣つ場、植込まれた雜木のかげに一つ二つ一文凧のあがつてゐるのもむしろ長閑な感じだつた。――と一しよに、慶養寺の横を斜に、山谷のはうへと廣い道路が出來、八幡さまの並びの、嘗てその門々に葵だのコスモスだの孔雀草だのを咲かせてゐた小さな家つゞきのあとに、ものものしい構への「寮」といふべくはあまりに近代な邸宅がそれぞれいま工事をいそいでゐる。――わづか一二けんだけ殘つた今戸燒屋がなにがし製陶所と看板をあげ、古い菓子屋の「豐瀨」がおもての硝子戸に「喫茶」としるし、さうして建ち直つた新しい家つゞきの、軒並、小鳥を飼つて啼かしてゐる…

うかうかとわたしはもとの小松の宮さまのまへまであるいた。さうして、さうだ、長昌寺はどうした？さう思つてあとへ引つ返した。みつからなかつた。まさかになくなるわけはないと思つて二三度同じところを行つたり來たりした。――が、肝心の、その大きな門のみ通しにみえた横町をさへわたしはさがすことが出來なかつた。

あきらめてわたしは左へ切れた。そのまゝ橋場へ伸すよりもいゝ加減で山谷へ出たはうがいゝと思つたからである。すなはちもとの喜多村緑郎のうちのまへの狹い横町……だつたのが、いまはそれもまたみ違へるやうに廣くなつた横町、そこに立てられた工事用の制札のおもてによれば「第四一地區補助街第三九號路線」のはうへわたしは出つた。いかにも「出來たて」の感じに一めん荒い砂利を敷きつめた道をあるきにくゝしばらくあるいたとき、わたしは、ふとそこに寺の境内らしい空地の左手にあたつて擴つてゐるのをみつけた。――念のため入つてみた。――長昌寺だつた……

いへば、そこも、整然と片附けられた。有緣無緣の累々とした石塔も、鐘撞堂を失つた釣鐘を埋めてゐた雜草も、トラックの音の響く水の上に睡蓮の花の咲いた古池も、震災のあとのいたましい限りをつくしたそれらの光景は拭はれやうにすべて除かれた。――と同時に、いくら探しても分らなかつたわけである、正面の、本堂眞つ直のむかしの道は完全にふさがれて、べつに横に、その境内にかゝはりのない新しい道路が吉野町のはうへ一圖にあかるく走つてゐた。

『なるほど……』

わたしは感心してそこをもとの「第三九號路線」へ出た。——間もなく「痔の神さま」をみ出して、以前の曲りくねつた道のいかに眞つ直になつたかといふことを悟るとゝもに辛うじてはつきりたしかめえた方角をたよりに（といふ意味は、その横町、そのつもりで曲つて來はしたものゝ、あるいてゐるうちにだんだん勝手が違つて來たのである）そのまゝずつと吉野町の停留場へわたしは出た。

電車通りの景色は以前の通りである。震災まへと同じである。……とはいつても一つだけ違つたことがある。——「八百善」のなくなつたことである。——あの黒い品のいゝ高塀と深いしづかな木立とをもつた「八百善」のあとに、大きな二階づくりの、硝子戸を立て、土間を廣くとつた荷造りにいそがしい何かの問屋の出來てしまつたことである。

が、それをいまわたしは惜まないだらう。なしろわたしはさつさとさうみきりをつけて未練けなくその土地を捨て去つた「八百善」の賢明さを嘆稱するだらう。——いふまでもなくいまはもう「千兩のうちで山谷はくらしてゐ」ないからである。「八百善」はなくなつても「重箱」がまだ殘つてゐる。日本堤警察管内のたつた一けんの料理屋として（といふ意味は、その管内の三四百にあまるもろ〳〵の食物屋、あとのものはみんな飲食店としての鑑札しかもつてゐないのださうである）むかしの山谷の名殘をとゞめてゐる。ことに今度の、區劃整理後出來上つた普請には、黒い塀なら、淺い植込なら、いかにも江戸前の料理屋といつた工合の器用さ手綺麗さをもつてゐるのがいゝ。……とはいふものゝむかしのこのうちの、明治四十四年の吉原大火以前のこのうちの、生野暮な、大まかな、廣さにしてもいまの三四倍の嵩をもつてゐた時分がわたしには可懷しい……

なぜなら子供の時分、いまをさる二十五六年以前、わたしは學校のかへりに屢々このうちへ遊びによつたのである。いまの主人の平ちやんこと大谷平次郎君と同じ學年同じ學級だつたからである。——うちで、今度、裏へ器械體操をこしらへたから來ないか？ うん、行かう、學校のかへりにすぐ行かう。…………さうしたさまに簡單に、おもへば暢氣な話である、廣小路へかへるのより二倍も三倍もの道程をもつてそのうちへ、さそはれるまゝ、平氣でわたしは遊びにまはつたのである。——まへにもいつたやうに學校は馬道にあつた。

勿論、まだ、吉野橋までゝさへ電車の敷けなかつた時分である。いゝえ、その段か、そも〳〵その通りといふものがいまの半分にも足りない狹さだつた。さうしてそのわりに、人通りでも、車の行きかひでもつねに頻繁な往來だつた。だから狹いば

かりでなく陰氣にごみ／＼した感じだつた。――だから山谷といへば、その時分、わたしたちにとつて「千住」へつゞくいそがしい街道といつた感じだつた。――いひかへればそれだけ田舍びてもゐたのである……

が、その狹い通りを一ト足そのうちの門のなかへ入ると、驚くほど廣い庭の、木の繁つた築山があり、水銹の浮いた大きな池があり、その池をめぐつてはう／＼に座敷が出來てゐた。――しかもそればかりでなく、そのうへ裏に、何につかふともない四五十坪の空地があつた。夏はそこに土俵がこしらへられた。――そこへ持つて行つて器械體操をこしらへたものである。

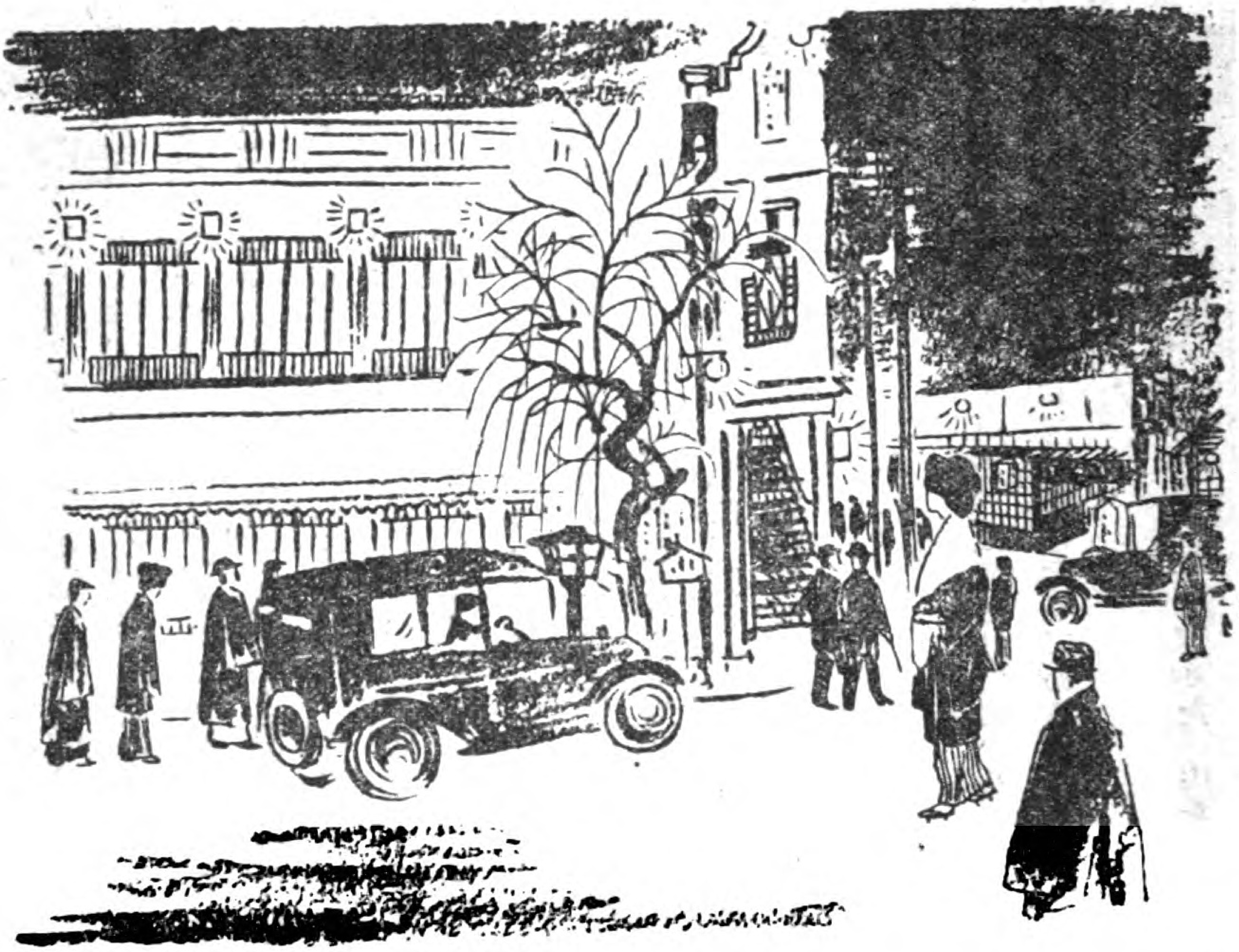
こゝに器械體操といふのは「鐵棒」の謂である。その少しまへ、學校の運動場にはじめてそれがとりつけられ、ものめづらしいのにわたしたちは夢中になつた。それがやりたいばかりに、朝、課業のはじまる一時間もまへからわたしたちは學校へつめかけた。大ぶりだの、中ぶりだの、海老上りだの。……一日も早くさうした離れわざまで行きたいと、毎日、砂だらけになつてわたしたちは勉强した。

その「鐵棒」が友だちのうちに出來たのである。これに如くわたしたちの歡びはない。――うちへ歸るのをわすれて、わたしたちの屢々そこへ平ちやんと一しよに食ツついて行つたわけである。

さそはれるまゝある日もわたしは喰ツついて行つた。十二月のはじめの、日のつまるさかりのしかも曇つてさびしい日だつたが、わたしたちはそんなことに頓着なく、兵隊に行つたことのある洗ひ方を師匠番に、シャツ一つになつて、やう／＼のこと卒業することの出來た肱かけを幾たびとなくやり返した。――疲れてもう腕がいふことをきかなくなつてもなほ強情にわたしたちは止めなかつた。――店のはうから面白がつて、料理場のものだの女中たちだのが代る／＼見物に來るので一層わたしたちは昂奮した。

そのうち日が暮れて來て口惜しがつても見當がつかなくなつた。見物もいつとはなし退散した。――わたしは今度をまた約束して殘念ながら着物を着た。

外へ出て吉野橋まではみんな一しよだつたが、それをわたると一人わかれ、二人わかれ、しまひにとう／＼わたし一人になつた。――わたしのうちの見當へ歸るものは誰もゐなかつたのである。――わたしは猿若町を馬道の通りへ出て、そこの、まさるやといふ古い菓子屋で切山椒を買つた。――その時分、わたしはどんな菓子より切山椒が一番好きだつた。



後生大事にそれをふところに入れて、あかりのいろのすでに濃くなつたみちをひたすらわたしはいそいであるいた。披官稻荷の露次を拔けて、三社さまのわきまで來たとき、ばら／＼と、暗い空から急に冷めたいものがふつて來た。――雨かと思つたらみぞれだつた。

うちへつくと、すぐ、買つて來たその切山椒をむさぼるやうにわたしは食べた。夕飯の仕度の出來るのを待ち切れないほど腹が空いたのである。――立ちどころにわたしはふくろをからにした。

その晩、みぞれは雪にかはつて戸外（そと）にしづかな音を立てた。わたしはその雪の音をやさしく聞きながら櫻井鷗村の『漂流少年』をよみふけつた。

記憶といふ奴は不思議である、いまでもわたしは切山椒をみるとそのときのことをおもひ出す。――山谷の狹い通りをおもひ出し、ふつて來たみぞれをおもひ出し、『漂流少年』をおもひ出す。――が、いまにして思へばそれもまたすべて夢である。――しづかにやさしくさしぐまれる夢である……

五

吉野橋をわたつてわたしはそのまま右へ切れた。すなはちさ

ぱ〳〵と空地になつた「道哲」のあとを横にみてそのまゝ土手……といつてもいまはもう決して土手ぢやアない、區劃整理後さういはれるだけの特別の高さを失つた。兩側の町々とおなじ低さに平均された。つまりは三の輪へつゞく一筋のたいらな廣い往來になつたのである。が、「先刻よりずつと濃くなつた月の影を仰ぎつゝ土手のはうへわたしはあるいた」と先月もわたしは書いた。便宜のためしばらくわたしはさういひつゞけるであらう。……へ入つた。以前は、そこから、だら〳〵と田町へ下りられたからそれだけの風情もあつた、たゞそのまゝの、凡常な、つひとほりの往來のとある曲り角になつたのでは合力稻荷の幟のかげも、霜げた、間のぬけた感じである。――十年まへ『積木枯』を書いたとき、わたしは、狂言廻しの眞葛庵五秋といふ俳諧師にわざ〳〵このあたりをあるかした。――ふとそれをわたしはおもひ出した。

「……どうせこゝまで來たものだ、出たついでに、公園の近所まで伸して、宮戸座のそばに三味線屋をしてゐる甥のところでもたづねようと五秋は考へた。

合力稻荷のところから、田町へ、土手を下りた。店を閉めた上總屋のまへを通り、如燕の看板の出てゐる岩勢亭の前をとほつて、蔦屋のところから右へ切れたところで、五秋は、小梅の宗匠のところへ來る吉原の引手茶屋の主人の紅鹽に逢つた。

『五秋さん、どちらへ。』

『一寸、いま、今戸まで。』帽子をとりながら五秋はいつた。

『今戸は鈴むらさんですか。』

『さうでございます。――ところが、生憎留守で。』五秋はいつた。『どちらのおかへりです。』

『今日は古笠庵の芭蕉忌でしてね。』

『あゝ古笠庵の――』五秋はすつかり忘れてゐたことを思ひ出した。『さうでございましたね。――今日……すつかり忘れてをりました、わたくし。』

五秋、紅鹽、ともにわたしの空想の人物である。手近にみ出すことの出來た二三人の人間をあつめ、それをわたしの空想に浸してそれ〳〵都合よくでツち上げた存在である。――が、この二人、十年まへの、よし店は閉めたとしてもまだそこに、うそにも「上總屋」といふ名まへの殘つてゐた底の、さうした古いすぎ去つた情景のなかにであつたればこそ自由にわたしに動かすことが出來たのであらうか？　かうした會話を忌憚なく勝手にさうとり交させることが出來たのだらうか？――さうした

うたがひがふとわたしの胸を掠めた。

『さうぢやアない。――そんなことはない。』

すぐにわたしは自分にいつた。五秋も紅葉もまだ生きてゐる。震災が來ても、區劃整理が出來ても「八百善」がなくなつても、「道哲」が空地になつても、さうしてその「日本堤」が平坦になつても二人はなほ生きてゐる。――生きてゐる以上どこへでも出て來てい丶わけである。――どこへだつて出て來ていけないといふわけはないはずである

かれらをして　いま、合力稲荷のまへにひさ〴〵に出會せしめよ。――おそらくかれらは十年まへと同じ調子でいふであらう、かうしたことを………

『しばらくお目にかゝりせまんでしたね。――どうなさいました、その後?』

『有難う存じます。――相變らず貧乏暇なしで……』

『いつ、けど、お目にかゝつたきりでせう?――いつでしたらう、あれは、このまへお目にかゝつたのは?』

『たしかあれは一昨年の……』

『一昨年?――と　まだ、こゝに土手のありました時分……』

『さうでございます。』

『大した、それは、古い……』

『いかゞでいらつしやいます、お景氣は?』

『といつていたゞくのも面目ないくらゐのもので。――いえ、實際、全く不思議な世の中になりました。』

『ほんとでございますか、このごろ、横町の人たちがみんな廓外に稼ぎに出ると申すのは?』

『みんな、えゝ、土手の飲食店へ入ります。――さうしない分には立ち行きません。』

『左様でせうかねえ。』

『臺屋だつて、あなた、このごろぢやア廓外の出前でも何でもします。――そのはうが利方です。』

『………』

『それをさうした算用にしないと。――いつまでむかしのやうな料簡でゐると平八のやうなことが出來ます。』

『どうかいたしましたか、あの男?』

『御存じありませんか?』

『存じません。』

『吉原にをりませんよ、もう、あの男。』

『で?』

『滿洲へ行きました。』

『滿洲？』

『いろ〳〵曰くもあつたんでせうけれど。——とにかく土地にゐられなくなつたことだけはたしかです。』

『可哀想に。』

『滿洲へ行くまへしばらく大阪あたりにゐた鹽梅です。——その時分どこからともなくよこした句があります。——後厄（あとやく）のとう〳〵草鞋はいちまひ……』

『後厄のとう〳〵草鞋はいちまひ……』

『暫間もらくは出來なくなりました。』

……震災が來ても、區劃整理が出來上つても、「八百善」がなくなつても、「道哲」が空地になつても、「日本堤」が平坦（なら）になつても、かれらの精神生活は、燒けず、潰（つひ）えない。かれらの感傷はつねにかれらをつゝみ、かれらの人生はつねにかれらをめぐつて身動（みじろ）がない。——といふことは、たとへば、水の底にしづんだ落葉……一トたび水の底にしづんだ落葉はつねにしづかに冷やかだから………

おもはず話が横へ外れた。——が話は横へそれてもわたしの足はそれなかつた。土管、瓶類、煉瓦、石炭、タイル、砂利、砂、セメント、さうした文字のいたるところ、壁だの看板だのに書きちらされてある右手の家つゞきをながめながらわたしは眞つ直ぐにあるいた。さうしてそのあと、左手に、千束町への曲り角に瓦斯會社の煉瓦の建物をみ出したとき、いつかわたしは「吉原」のまへに立つてゐた。——そのあたりの何といふ他愛なさ、心許なさ、寂しさであらう……

「江戸演劇の作者が好んで吉原を舞臺にとつた理由は明白である。當時の吉原は色彩と音樂の中心だつた。花魁の袿にも、客の小袖にも、新流行の奔放な色と模樣とがあつた。唐清搔の賑かさ、河東、薗八のしめやかさ。これは今日の吉原に見る事は出來ぬ。今日の吉原は醜惡なチョオク畫の花魁の肖像と、印袢纏に深ゴムを穿いた角刈とヴイオリンで彈く「カチユシヤの唄」の流しとに墮してゐる。當時の吉原は實際社會の中心であつた。百萬石の大名も江戸で名うての俠客も、武家拵への大賊も、みんなこゝへ集まるのであつた。それ故、劇中の人物に偶然な邂逅をさせるのに、こゝ程便利な場所はなかつたのである。併し今日の吉原をさういふ舞臺に選むのは無理である。大門側のビイアホオルのイルミネエションの下で、計らず出會ふのは奥州訛りの私立角帽と農商務省へ願ひの筋があつて上京中のその伯父さんとである。裸の白壁に圍まれた、ステエション

の待合じみた西洋作りの應接間で、珈琲入角砂糖の溶かした奴を飲まされて　新モスの胴拔に後朝の背中をぶたれるのは、烏打帽のがふひやくか、場末廻りの浪花節語りである。今日の吉原は到底 Romantik の舞臺でない。」

いまは亡き小山内先生、嘗て『世話狂言の研究』の「三人吉三」のくだりでかうしたことをいはれた。いまはその「花魁の肖像」の覗き棚のなかに收められて一層商品化し、「カチユシヤの唄」は「ソング・オブ・アラビイ」にまで幾變遷していよ〳〵近代になつた。——さうした内容をもつ「吉原」の、なにがし酒場と、なにがし牛鳥料理店とによつてまづその入口を支持されるといふことは、あまりにこれ、ことわりせめてあはれである。——しかもそのなにがし酒場のまへ、うつし植ゑられた「見返り柳」のそばに立てられた磨硝子のたそや行燈、老鼠堂機一筆の立札。——その立札のうらにしるされた一句をみよ。

　きぬ〳〵のうしろ髮ひく柳かな

この氣の毒な老宗匠は器用にたゞ十七文字をつらねる職業的訓練以外になんにも持つてゐない。

……風の落ちた冬の日の暮ほどわびしさのつのるものはない。——わたしは、そのまゝなほ、大門を横にみつゝあてもなく三の輪のはうへあるきつゞけた。

六

……………………

……………………

まあおとうさんお久しぶり、そつちは駄目よ、こゝへお坐んなさい

おきんさん、時計下のお會計よ……

そこでね、おぢさん、僕の小隊がその鐵橋を……

おいこら酒はまだか、酒、酒……

米久へ來てそんなに威張つても駄目よ……

まだ、づぶ、わかいの……

ほらあすこへ來てゐるのが何とかいふ社會主義の女、隨分おとなしいのよ……

ところで棟梁、あつしの方の野郎のことも……

それやおれも知つてゐる、おれも知つてゐるがまあ待て……

……

かんばんは何時……
十一時半よ、まあごゆつくりなさい、米久はいそぐところ
　ぢやありません……
きびきびと暑いね、汗びつしより……
あなた何、お愛想、お一人前の玉にビールの、一圓三十五
　錢……
おつと大違ひ、一本こんな處にかくれてゐましたね、一圓
　と八十錢……
まあすみません……はあい、およびはどちら……

八月の夜は今米久にもうもうと煮え立つ。

ぎつしり並べた鍋臺の前を
この世でいちばん居心地のいい自分の巣にして
正直まつとうの食慾とおしやべりとに今歡樂をつくす群集
まるで魂の錢湯のやうに
自分の心を平氣でまる裸にする群集
かくしてゐたへんな隅々の暗さまですつかりさらけ出して
のみ、むさぼり、わめき、笑ひ、そしてたまには怒る群集
人の世の内壁の無限の陰影に花咲かせて　せめて今夜は機嫌
　よく一ぱいきこしめす群集
まつ黒になつてはたらかねばならぬ明日を忘れて
年寄やわかい女房に氣前を見せてどんぶりの財布をはたく
　群集、
アマゾンに叱られて小さくなるしかもくりからもんもんの
　群集、
出來たての洋服を氣にして四角にロオスをつつく群集、
自分のかせいだ金のうまさをぢつと噛みしめる群集、
群集、群集、群集。

八月の夜は今米久にもうもうと煮え立つ。

讀者は、藪から棒に、わたしが何をいひ出したかと不思議におもふか知れない。が、こゝへもつて來たのはいまの時代でわたしの最も敬愛する詩人高村光太郎氏の「米久の晩餐」といふ詩の一部である。――どんなに、わたしは、この詩の載つた書

い『明星』を今日までさがしぬいたことだらう。――今日この文章を書き終らうとしたときゆくりなくわたしはそれを手に入れることが出來た。

わたしは、この詩を、前回書いた「千束町」のくだりの、資本主義的色彩のそれほど濃厚な「草津」に對してのいふところの大衆的な牛肉屋「米久」を說くうへで是非そこに引用したいと思つたのである。――が、それには間に合はなかつた。――それには間に合はなかつたが、けど、わたしはいま、むしろこの詩をもつてこの文章を終ることの機緣をえたことを歡びたい。――それほど、わたしは、この詩の中に、わたしのいふ「新しい淺草」の、强い、放恣な、健康な、新鮮な、生き〳〵した息吹をはつきり聽くことが出來るのである。――さうしてその、强い、放恣な、健康な、新鮮な、生き〳〵した息吹こそこれからの「新しい淺草」を支配するであらうすべてゞある。

むしろ此の世の機動力に斯る盲目の一要素を與へたものの
深い心を感じ
又隨處に目にふれる純眞な人情の一小景に淚ぐみ

とこの詩の作者はそのあとにまたかう歌つてゐる。

「新しい淺草」と「古い淺草」との交錯。――さういつたあとで再びわたしはいふであらう、つぶやくやうに寂しくわたしはいふであらう。

……忘れられた吉原よ！（昭和三年十一月――同四年二月）

財界沒落後の人々

小汀利得

一

徳川時代には、賣家と唐樣で書く三代目と云ふ川柳が行はれた。斷るまでもなく之は資力ある商人も三代目になれば初代、二代と違つて讀み書きを覺え、文字は唐樣で書くことを知ると共に仕事は番頭手代任せとなつて、遂には習ひ覺えた唐樣の文字で以て賣家と貼札を書くやうになると云ふ、當時の世相を諷したものであるが、多くの金持ちに就いて今日尙は此川柳が當嵌まるのみならず、寧ろ三代を待たずして、初代乂は二代目で潰れるもの丶續出することは味はふべき現象である。

明治以來の産業革命の結果として、古い金持ちが影を沒したと同時に、そこには新しい大小幾多の富豪が生れ出でたが、當時天下にその名を謳はれた者で、今日尙ほ續いて居る者が果して幾人あるであらうか？ 榮枯盛衰は世の習ひとは云ひながら、あまりにあはただしい世の變化にわれ等はたゞ驚くばかりである。かくて新しいところでは、昭和二年の金融恐慌、大正十二年九月の關東大震災、同九年の財界反動から、遡つては日露戰爭中及び同戰後の動搖の爲め、數多くの富豪成金輩が還元された今日、之等成金連凋落の跡を辿つて見るのも滿更無意義のことではあるまい。

二

一昨年の金融恐慌で潰れたか、また表面は潰れないまでも實質上潰れたと同一の運命に陷つた銀行は、直接と間接とを併せるとなか〳〵數が多い。三月の十四日に表の大戸を卸して、銀行破綻の先陣を承はつた東京渡邊銀行を初めとして中井、村井、中澤、八十四、左右田、十五、近江等は直接に參つたもので、加島、藤田、若尾、神田等は當時はどうかからか凌いで來たが結局潰れるか、または甚だしい外科的荒療治を受けて、いまでは僅かにその形骸を殘して居るに過ぎない。からして幾つかの銀行が潰れると、その影には數多い財閥、事業閥の死屍が累々として横はる。

いま擧げた丈の銀行でも、東京渡邊の背後にはあかぢや一派なるものがあつて、東京瓦斯、乘合自動車を初め幾つかの會社が飛沫を浴びた。また村井は人も知る如く、その昔煙草王として知られた吉兵衛翁と山茶花の局の一家によつて經營されて居たので、村井關係の全事業を根柢より覆した。十五銀行が松方兄弟の機關銀行であり、近江が關西に本據を有する所謂近江商人の活動資金の供給所であつたことは誰知らぬ者も無い程有名な事實である。

扨てこの眞先きに參つた東京渡邊銀行は、例の渡邊治右衛門兄弟が歐洲大戰中から數へ切れぬ程の泡沫會社に關係し、その數多くの會社へ行つて重役椅子にフン反り返り、實判をベタ〳〵捺すところの原動力を與へて居たもので、長兄の治右衛門はそれ程でもないが、

弟の勝三郎の如きは景氣のいゝ時には五十に餘る會社の社長や專務、常務から監査役にまで擧げられて居て、文字通りの盲判を捺しに廻るのにさへ、秘書が注意深くスケヂユールをつくつて置いて呉れなくては、廻る順を間違へる位だつたと云ふからまことに全盛を極めたものであつた。

併し彼等兄弟をさう云ふ風に方々の會社の重役にして置いて呉れたのは、云ふ迄もなく彼等の能力でも何でもなく、唯單純に東京渡邊銀行を通じて集められた資金の力であつたのだから、一度此の血管が止まつて仕舞ふと渡邊一家はもう再び起つことが出來なくなつた。

思へば儚いもので、彼等兄弟の父親である先代治右衛門の勤儉無比、魚屋が鰯を賣りに來ればそれを買ふ眞似して擂鉢に入れさせあとからうんと値切つてそれで對手が怒れば反つて勿怪の幸とばかりにその鰯を返し、八百屋が通り掛かれば呼び止めて散々値踏みをし呆れて八百屋が逃げ出したあとに殘る菜の葉を拾ひ集めて、それで朝の味噌汁を拵へた。若しこの話に三分の嘘があるにしても先代が如何にけちん坊であつたかは想像に難くないがそれ程の『あかぢ屋』渡邊も僅か二代で跡形もなくなり剩へ刑事々件まで持上つて居るとはあまりにも脆い凋落振りではないか。

子供の時から道樂者で通つた二男の勝三郎が、資本家御殿と呼ばるゝあの工業倶樂部の舞臺に狂言を演じた時には、その素人離れのした藝に拍手は暫し鳴りも止まなかつたが、まさかにその藝が身を助くる程のものでもあるまい。

三

村井吉兵衛が京都は五條大橋の片ほとり、九尺二間の棟割長屋に煙草店を出し、片足でガタ〳〵機械を踏みながら煙草を刻み初めてからまだ半世紀にはならない。ヒーロー、サンライス、ピンヘット、パイレートから、九代目團十郎の勸進帳を大看板にしたオールドはつひ十年前まで、東海道、山陽道の汽車の沿線の田舍町などには、軒端に殘つて居た位なのに、もう村井は日本の富豪番附から永遠に除かれてしまつた。

村井吉兵衛出世の緒は、云ふまでもなくヒーロー以下の紙卷煙草で當てたことに在つて時勢を見るに敏なる彼れ吉兵衛は一箇四錢のヒーローを賣り擴めるのに、一萬百三十圓の舶來の自轉車＝それは今日の自動車よりも珍重がられたものであつた＝を一等當り籤にして彌が上にも國民の射倖心をそゝつて見たり、[illegible]蒼て聳たる姿の東山の土手つ腹へ、デカデカのヒーローの看板を出して、後世の俗惡看板の先驅を爲したりしたが、昔から宣傳は利き目の多いものと見えてトン〳〵拍子に發展して、軈て米國の煙草トラストたるアメリカン・トバコ・カンパニーの認むるところとなり、三百萬圓と云ふ大金の供給を受けて村井兄弟商會をつくり大活動をつゞけた。此時の三百萬圓は日本でもアメリカでも大金であつた。その證據にはアメリカ煙草會社ではこの金を爲替で送る爲め數度重役會を開いた上重役總出でニューヨークの正金支店へ掛合ひに來て當時副支配人だつた、今の興業銀行總裁鈴木島吉がこの三百萬圓の爲替送金を一口に引受けたのでホッと胸撫で下して歸り、あとでは鈴木が正金の本店から餘りに無謀だと云つて叱られたことによつても判る。

少し餘談になるが當時村井の向ふを張つて煙草を製造販賣して居た大手に岩谷天狗と千葉があつた。

岩谷の店はいまの銀座の松屋呉服店の在る所で大天狗、中天狗、小天狗と云つたやうにすべて天狗のマークをつけて一口に岩谷天狗

と稱して居た。この岩谷松平は村井以上に宣傳上手で、いや宣傳上手と云ふよりは、むしろ氣狂ひじみて店も赤く塗り、着て居る着物も、乘つて居る馬車も、いやそれどころぢやない七人の妾の着物までもすべて赤づくめ（それは少々眉唾ものだが）と云ふ變り方で常に『驚く勿れ、税金たつた百萬圓（後には一時二百萬圓ともした）職工たつた一萬人』と方々に廣告をして、いまの政友會内閣そつくりの放漫政策をつゞけて居た。おかげで政府が煙草を專賣にする直前には危く破產しさうになつて、時の大藏大臣曾禰荒助に救濟を仰いだやうな始末になり、晩年は不遇であつた。

千葉は菊世界を初めすべて『世界』名をつけ、煙草の中からは日曜學校で子供に呉れるやうなカードが出て來て（之は村井もやつて居たが）それには美しい娘が衝立の影から顏を出して居るのなんかゞ入つて居た。

この女が千葉の娘だと評判され出したので銀座一丁目の千葉の店の前には一しきり、この美しい娘さんの實物を見やうとする連中が群を成す、と云つても初心な當時の芋書生やそこらの中僧級のことだ、去年慶應が野球で早稻田に勝つた晩に、カフエーへ繰り出した學生の百分の一の人だかりもありはしなかつたが、それにしても當時の話題の中心は、村井以下この三煙草商であつたこと丈は慥かである。

併しこの三軒のうちでは何と云つても村井が一番優勢であつたので、京都に育つて一種の貴族趣味を好んで居た吉兵衞は、いま專賣局の芝工場となつて居る、芝區田町の村井兄弟商會工場へ二頭立の馬車の中にふん反り返つて毎日通つて居たものであつた、恐らく此時が村井の眞の全盛時代であつたであらう。

その煙草事業が明治卅七年政府の專賣となつて、吉兵衞は賠償として數百萬圓の現金を握つた。そこで同年の十二月に初めたのが、當時流行の銀行業であつた。何がさてその昔宣傳に獨特の技術を現はした吉兵衞のことである、しかもお上から何百萬圓の現なまを頂戴に及んで、初めたと云ふので村井銀行の信用は大したもの、京都ではお粥をすゝつて殘した金を競つて村井銀行へ預けたので、流石の吉兵衞もすつかりいゝ氣持ちになり、東京では永田町の山王臺に石垣の御影石一つでも狀らと云ふやうな、途方もない宏莊な殿堂を營み、京都は京都で發祥の地となつて、岡山に長樂館と稱する別莊をつくつて兩市民を驚に捲いて居た、その後世界大戰中にはやれ貿易だ、石油だ、山だと無暗矢鱈に手を擴げたので、すつかり痛手を負ふたのみか、例の山茶花の局と稱する宮中のお古を後妻に迎へる、獨り娘は早世して娘の婿に迎えた故三島彌太郞の弟彌吉は山茶花の局との折合ひが惡く、たつた一人の愛兒をのこして離緣になると云ふ風に、家庭まで重ね〴〵の不幸に、吉兵衞は大正九年以來つくづく浮世の無情を喞つて居たが、幸運なる彼れは村井銀行のあの悲慘なる最後を見ず一世の富豪としてこの世をば去つた。

四

村井に亞いで數奇な運命に惱まされたものは神田鐳藏であらう。神田は名古屋在の生れ豐臣秀吉と同鄕のせいでもあるまいが、せいの高さ四尺七寸、秀吉よりも小男の癖に、その總身に廻る智惠を絞つて、名古屋でも天晴れ一廉の株成金となつたが、後一敗地に塗れて東京へ出て來ると、今度は名古屋に緣のあるところを辿つて、桂太郎に取り入り、桂の四分利公債借替へ等で財界に地盤を築き、段段手を擴げて、遂に村井と同じやうに資本金一千萬圓の神田銀行をつくり、自らその頭取

に納まり、一方に於いては苟くも經濟財政關係の委員會などが政府の手で組織される場合には、必ず委員の選に洩れるやうなことはなかつたのみならず、天性の鋭さから彼れは常に新聞記者以上の早耳を利用して株や公債の相場をやつて居た。

好漢惜むらくは餘りに自己の力にのみ頼り過ぎて、部下に人材を容れる雅量がなかつたことゝ、彼れが好んで投資した満鐵とか東洋拓殖と云ふやうな、特殊會社が申合はしたやうに經營の欠陥を暴露し、爲めに蒙つた損害が少くなかつたので、事志と違つて遂に昨年の春には破綻の運命に逢着した。

しかしながら多策なる彼れのことであるからいつ再起を圖らないとも限らない。

彼れも村井吉兵衛の如く後妻には女子大學出の若い美人を貰つたり、方々に宏莊なる別莊を持つたりして居たが、神田の村井と異るところは、それが單なる虚榮心からでなく主として金儲けの爲めであつた點である、寢ても醒めても金儲け三昧に沒頭して、全く他を顧みなかつたところが神田の神田たる所以で世の中からは甚しく惡德漢の如く云はれながら一部人士に案外愛されて居たのは彼れに金儲け以外全く邪念のない賜物であらう。横濱の左右田と云へば、全國的には餘り知られて居なかつたが、先代金作がその名の示す通り猶太人の如く唯金をつくるに專心して、また他を顧みなかつた點に於いて、少くとも横濱に於いては相當手堅い富豪の一人として認められて居たが、金作の跡を襲いだ喜一郎は學界に於いてその名を知られ、また伯爵令孃を妻として居た點に於いて極度に事大思想なる横濱市民の尊敬を一身に集めて居たかの感があつたが、理財の術に掛けては赤ん坊同樣のところへ、運拙く大正九年の反動で横濱全市が手痛い影響を受け、更に大正十二年には震火の見舞ひを受けて事實上市は全滅の悲運に遭つた。そこで喜一郎は不治の病に惱みながら日本銀行に日參して救ひを求めて居たが、運命の神のいたづらは一昨年の議會に震手處理法案が提出されると、當時神奈川縣から多額納税議員として貴族院に籍を置いて居た彼れをその委員に推さしめたので、彼れは慌てゝ之れを辭するの悲喜劇を演じたが、さう云ふことで左右田銀行の内幕は世間に知られ、同年四月の大取付けには一たまりもなく銀行は潰れ、病身な喜一郎は餘りの心痛に間もなく歸らぬ旅に上つた。

五

長い間日本の財界には頑固なデフレーショニストと、之れに對抗するインフレーショニストの一團があつて互ひに甲論乙駁を重ねて居た。

デフレーショニストは民間の有力銀行家をリーダーとして學者、新聞記者の多くが之れに屬して居ること今も昔に變りないが、之れに對して盛んに反對氣勢を擧げて居た通貨膨脹論者が金融恐慌の大波に捉はれて、武運拙くもそのほとんど全部凋落の憂目を見たことは、何となく財界に一種の淋しさを感ぜしめる。然らばその通貨膨脹論者とは誰々であるか？　曰く金子直吉、曰く松方幸次郎、曰く山成喬六と、この三人がその巨頭で、財界では彼等を特に『神戸派』と呼んで通貨膨脹論者の代表的なるものとして居つた。しかし正確に云へば此外に神田鐳藏と故穴水要七を加へることを忘れてはならない。

穴水要七は凋落どころか、その所有株が有利に處分されて、彼れ亡き後に未亡人は意外な成金となつた位であるから玆には論じないし、神田に就いてはすでに前節にその大略を述べたから、こゝでは主としてこの『神戸派』

に屬する三人物を俎上に上せて見る。

財界に彼等三人がハツキリ神戸派なる一つのスクールを形成したのは、いまの文部大臣勝田主計が淸浦內閣に大藏大臣たりし大正十三年ドイツの眞似をして帝國經濟會議なるものを設けた時に初まる。

松方、金子、山成は或ひは川崎造船社長として、或ひは鈴木商店の專務取締役としてまた東洋製糖の社長としていづれもこの帝國經濟會議の議員に選ばれるや、まづ第一に日本銀行の保證準備發行の限度を少くとも現在の三倍の三億六千萬圓とせよと叫んだ。松方の如きは自分の主張をジヤスチイフアイする爲めに東京神戸間の汽車中では常に同乘客のポケツトを調べ、日本に於いて通貨の空しく死藏される高が非常に多いことを痛論して居た。之れは松方の云ふ通りで最近說敎强盜の記事を見ても此の貧乏國日本の中流家庭が如何に多くの現金を常に手許に置いて居るかゞ知られる。

通貨膨脹論の當否に就いては別に議論があるが、兎に角インフレーシヨニスト達は、我が財界に於ける一種の變り種として千遍一律なる經濟論の中に一種獨特の雰圍氣をつくつて居た點は面白いところであつたが、臺灣銀行に見離されて鈴木まづ沒落し、從つて鈴木の資本と臺灣銀行其他の資金によつて動いて居つた東洋製糖の解體となり、さらに十五銀行の破綻によつて松方の川崎造船所城明け渡しとなつて、あとに續いた神田、黃泉へ急ぐ穴水と共にインフレーシヨニストの聲が全く聞かれなくなつたことは無限の淋しさを感ぜしめる。

尙ほ松方幸次郎と云へば、彼れの兄弟が枕を並べて討死した有樣は身から出た錆とは云へ平家の末路に似てそゞろに物の憐れを感ぜしめる。

乃父正義が財界にのこした功績の餘光によつて巖、幸次郎、五郎、乙彥、正雄、義輔等の兄弟は揃ひも揃つて財界に活動し一時は眞に飛ぶ鳥も落す勢ひであつた松方兄弟も長兄巖が十五破綻の責めを引いて私財を提供し公爵まで辭したのを初めとして幸次郎、正雄、五郎、乙彥も等しく財界に足場を失ひ、特に乙彥に到つては最近高利貸から僅か四萬圓の手形に關して破產の申請をされて居る。

この外さきの金融恐慌で日本の富豪番附から除外されることになつた著しいもの丶中に大阪の藤田傳三郎、廣岡惠三、甲府の若尾謹之助等がある。

藤田の先代傳三郎は兎角の批評は別として兎に角一代の人材であつたが、二代目なる平太郎は骨董いぢりに浮身をやつして居た爲めに傳三郎より受けた鑛業そのものが振はない上に、藤田銀行も整理を餘儀なくされ、昨年五月特別融通の締切りもうあと幾何もない瀨戸際へ來て漸やく支店切り賣りと云ふしやう事なしの離れ業をやつて漸く破綻を免れた、加島も藤田と同一轍、若尾も全然同一の筆法で救はれた。若尾は一代の傑物逸平からやつと三代目でこの浮き目に逢ふとは、先代が養子に璋八如き者を入れたのが元になつたとは云へ亦あまりにあつ氣ない限りではないか。

特別融通によつて救はれて居る藤田、若尾等は、われ〳〵國民に現實にはまだ大なる損失を掛けて居ないにしても、日本銀行に對し國家が補償の責に任じて居る點に於いて全國民八千四百萬人の連帶保證によつて僅かにその體面を保つて居るに過ぎないのであること、恰かもいま國務大臣として時めく久原房之助と同一であると云はねばなるまい。

六

金融恐慌と特別融通に伴ふ成金數の調節だ

けでも詳細に說けばまだ〳〵容易に片付けることは出來ないが、大物についてはほゞ述べたから、この邊で割愛して大正九年四月に起つた戰時景氣の反動に伴ふ凋落振りを述べて見やう。

　此間に見逃がし難いことは大正十四年の二月廿日にボロを出した高田商會であるが、この高田の沒落は實はすでにその端を大正九年に發して居たので、僅かに五年間を彌縫して來たに過ぎないから、時代別に見ると之れは當然大正九年の方に入れるべきものである。

　さてこの高田の沒落もまことに多愛のないもので、先代愼藏沒後僅かに十年でつひにあの大きな屋臺骨が崩れるとは如何にも馬鹿馬鹿しい話だが、元來先代愼藏そのものが時世遲れで經營がなつて居なかつたところへ、幼主を助けるべき發子釜吉は新橋へ入りびたりでいまキネマ界でスターと光る筑波雪子も新橋に左棲を取つて居た頃には一時彼れ釜吉の寵を一身に集めて居たものだ。上の好むところ下之れより甚しきは無しで、ペイ〳〵の社員までがお客の接待と稱して眞晝間から新橋、柳橋、赤坂に入り浸つて居たからあゝなるのは當り前のことであつた。

　大正九年の反動の犧牲を調べて見るとなかなか面白いのがある。あの當時一番僥倖たる目にあつたのは船成金と鐵成金であつた。戰時好況時代に於ける三水と金篤と來たら實に素晴らしいもので、勝田銀次郎が二十萬圓を國民黨へ寄附してそれを犬養毅が獨りで私したと云ふので黨員の高木益太郎から訴訟まで起された事件や、今の海軍政務次官の內田信也の乘つてた汽車が山陽線で轉覆して下敷きになつた時『俺は神戸の內田信也だ、金は幾らでもやるから助けて呉れ』と云つたとか、云はなかつたとか問題となつたのも皆戰時中から戰爭直後に掛けてのことである。この勝田にしても內田にしても、政治方面に金を使つたりしたからこそ全國的に有名になつたがあの程度の成金は當時は神戸大阪にはウヨウヨして居た。一寸記憶を辿つて並べて見ても例の酒屋の辰馬吉左衞門や、大阪の船大工上りの古船屋岸本兼太郎を儲け頭として八馬兼介、中村準策等いま尚ほ立派に殘して行つて居るものゝ外に成瀨正行、河內研太郎、榎本鐵七郎、長谷川銈五郎なんて連中があつて、何でも船と名のつくものでさへあれば、ボロい儲けがあつたので成瀨正行と云ふ、十五銀行の頭取をして居て止めた成瀨正恭の弟なんかは、一時大變儲かつたと云ふので、兄貴に自動車を買つて贈つたり、麻布に廣大なる邸宅を構へたりしたが、船で儲けた金で旭石油の株をどつさり持つたり、生活を無暗に贅澤にした爲めに今ではスッテン〳〵であること內田や勝田と同じである。

　船の景氣の出る前なんてものは、全く馬鹿馬鹿しい程面白いもので、一番滑稽だつたのは今は故人となつたが榎本鐵七郎と長谷川銈五郎が儲けた話だ。時は大正五年の秋のこと鹿兒島沖にハッドン・ホールと稱する一隻の英國船が沈んで居たが榎本は之れを引揚げて修理することを考へ出し仲間の長谷川の類で二三萬圓の小金を借り出して來て、之れを長崎の三菱造船所へ持ち込んだものだ。

　ところが背つてから云ふボロ〳〵の船を取扱つたことの無い、三菱の技師長鹽田泰介はそれを叱り飛ばして修繕してやらなかつた、しかし榎本としては折角鹿兒島くんだりから引つ張つて來た船だ、今更ら長崎沖へ沈める譯にも行かないと云ふので、近所のヘボ造船所へ持ち込んで修理して居ると、その中に鐵の價は奔騰する、從つて船價も天井知らずとなつて、この唯のやうなハッドン・ホール號は、一躍四十萬圓の値打ちを生じて來た。買人はしかも三井系の北海炭礦だ、そこで榎本

等は二つ返事で賣約したが、日一日と船價はあがる一方で、十日ばかり後には五十萬圓の買人がついたので、さきの北炭の契約を破棄しやうとし、北炭でも詮方なく五十萬圓出した。

萬事この調子で儲かるので皆有頂天になつて居たところへ來たのが、大正九年四月の大瓦落、そこで特に逃げ足の早い極めて少數の者を例外として船成金は將棋倒し。船關係の外にほどんと例外なく參つたのが、貿易業者で例の横濱の茂木、増田、安部、神戸の湯淺大阪の鳥定、東京の久原、古河の兩商事等は枕を並べて討死した。蓋し商賣を知つて居る譯でもなく、いゝ得意先があるわけでもなく唯賣りさへすりや儲かるのでやつて居たのだから當然のことである。當時はまた船と一緒に鐵が淺いやうに儲かるので、この方も盛んで、それ丈に反動も激しかつた、嘗つて山本權兵衞のシーメンス事件に引掛つて、海軍少將を棒に振つた藤井光五郎が、富士製鋼會社を初めて大損をし行衞不明になつたり、妾から訴へられるやうな事件も起つた。

七

最後にもう一昔あまり遡つて日露戰後の成金の凋落振りを見ることゝしやう。

當時の成金の模範的なものは鐘紡株を買占めて一擧一千萬圓を得たと云はれる鈴木久五郎であらう。鈴久は當時兄の經營して居た小ぽけな銀行の事務員をして居たが、戰爭がすみポーツマスの講和條約も締結された翌三十九年の三月、日本銀行が利下げをやり更らに二ケ月も經たないのに五月の初めにまた利下げがあつたので、株式市場は漸く活氣が出て來た。そこで久五郎は當時五十圓拂込みの鐘紡に目をつけ、買つて買つて買ひ捲つたので、とう〱翌四十年の初めには二百卅九圓まで持ち上げた。

久五郎の對手は神戸在留の有名な歸化人吳錦堂と云ふ支那人の爺で、それに麥少彭と云ふ男も提灯をつけて居た。鈴久は安田から資金を借り入れて頻りに買ひ捲り、吳の影には三菱銀行の神戸支店がついて居た。鈴木はいい氣なもので鐘紡株を買つては安田へ擔保に入れ、そして某かの現なまを攫つては、市場で大きな眼玉をギヨロつかせながら買ひ手を擬つて居たが、いづくんぞ知らん彼れが安田へ擔保に入れた株は毎日々々市場へ賣り繋がれて居た。そこへ行くと吳の方は正反對で流石の爺さんもあまりに一本調子に鐘紡株があがるので、途中で迷つて買ひに廻らうとしたことが度々あつたが、當時の三菱の支店長は今の三菱總理事木村久壽彌太で支店長代理が銀行常務として利鎌の如く切れる瀬下淸と來て居るので吳の首つ玉を抑へていつかな買はせない。吳もすつかり牛に牽かれた氣になつて鈴久に賣り向つて居たところ、翌四十年一月十八日から崩れ出した相場は、底無しの湖に沈んで行つて凱歌はつひに吳錦堂いや三菱銀行部神戸支店に揚つた。

全盛時代の鈴久は毎夜新橋に柳橋に或ひは赤坂に盛宴を張つて、蠟燭代りに百圓札の卷いたのに火を灯したり、節分の豆撒きを眞似て一升桝から、大小の銀貨をバラ撒き棄つ樣の藝者や半玉に拾はしたりする狂態を演じたが、四十年も春闌となつた頃には成金の夢も醒め果てゝ居た。かくしていまではわれ〱は兜町界隈をうろつきながら乞食相場をやつて居る老いぼれの鈴久を見出すに過ぎない。

海のシヤイロツク

——あるひは、ガジの掠(かすり)り——

浦島光雄

一

ボーレン！

ボーレン、と云つたつて、とても陸(をか)の人には分りつこはあるまい。

だが、陸(をか)の人に分りつこのないこのボーレンの四字が、船乗(ふなのり)の頭にはピーンと響く。蛇目型の味噌汁、臭い鮭の切身、煎餅蒲團に南京蟲の驚くべき包圍攻撃、所在なさに死にさうな退屈、攻め殺されさうな焦燥、そして秧葵をほじくつてバットの代りに吸ふ、——それがボーレンの總てである。

ボーレンとは船員宿泊所のことだ。ガジのために文無しにされた失業船員は、新しい船に職を求むべくこのボーレンへ轉げ込むのである。神戸では東川崎町、西出町方面に、何々海員部だとか、何々海員寄宿所、或は何々倶樂部と云つたやうな看板を揭げてゐるのがこのボーレンなのである。横濱では野毛町邊を中心に一體に散つてゐる。其他小樽、戸畑、名古屋、若松、門司等々の各港はいづれもこのボーレンの所在地であり、神戸だけで三十軒位はあるだらう。

ボーレンの主人(おやぢ)は、古いガジの上りである。ガジと云つたつて陸(をか)の人にはまた分るまいが、ガジとは海上勞働貴族のことであり、即ち水夫長(ボースン)、火夫長(ナンバン)のことである。

そこでガジの語源は——と云へば鹿爪らしいが——字書などいくら引張つたつて見つかりつこはない。これは花札の中にあるヤク札で、天神さんのことなのだ。天神さんと云ふのは雨降

りに小野道風が唐傘を翳して蛙が柳に飛びつくのを見て居る札である。このヤクは恰度トランプのスペートのポイント即ちオールマイティー見たいに全能な札で、何でも彼でも、掠め込んで仕舞ふ奴だ。この札のことを通稱、オニまたはガジと云ふのださうで、このガジは直ちに探つて海上勞働貴族に適用される。

さて、海上勞働貴族の孵化物であるボーレンの主人は、全國の各船舶の海上勞働貴族と連絡をとつて、之れに自分の家に寄宿してゐる船乘を紹介する。そして形式的に海事協同會、或は會社の人事係等の手を經て紹介したガジの下に船乘を賣り込むのである。

かうして乘船したヘイカチのうち、甲板部では舵夫、機關部では油差、ドンキー、それから大工、倉庫番、の役人連中を除いた大多數のシーメン即ち、水夫、火夫、火夫見習、見習、の連中は「おうい、皆よろしう頼むぜ」と云つて大部屋の一人となる。

大部屋とは、之等ヘイカチ野郎の公會堂であり、食堂であり、更に彼等の町であり村落である。それは、船の船首、鎖室に隣したところか、或はまた船尾舵機室の上にある。船首の方は暴風になれば怒濤の中に頭を突込むし、船尾の方は始終舵機が、ガタ〳〵ゴトガツタガチーンと活動するので、村落全體の夢甚だ測かならざるものがある。暴風になれば推進器の猛烈な空轉で飛上つてしまふ。だからどちらかと云へば船首の方が住心地が善い。

ここで更に今一つ、ヘイカチ野郎なるものの意義並に語源について說明を加へておく必要がある。

ヘイカチ野郎とは、士官の連中が、下級船員に命名したもので、ヘイカチは即ち丙下置と書くのださうだ。丙種免狀以下と云ふことであらう。初め口の惡い士官の一人がこのヘイカチを發明して、「おうい、ヘイカチー」と呼ぶと、大部屋連中「おい、英語でお前、普通船員のことをヘイカチーと云ふんだぜ」。

「フンさうか、皆聽いたか、英語で俺達のことをヘイカチーと云ふんだとよ。なんだこのヘイカチ野郎奴」――とう〳〵自らヘイカチになつて始舞つた。現在では一船のおもての連中同志でも「なんだ、このヘイカチ野郎奴」と云ふ、一種の親しみをもつた惡口となつてゐる。

役人以外の普通船員の小さな町大部屋には、彼等の各々の住宅がある。蠶棚のやうに上下二段に鐵壁へ取付られた幅二尺四寸、長六尺、高さは上段のもので安座を掻いて座るに適し、下

段のものでは船によつては安座しても頭が二階へ支へる。彼等はこれを「おいらの部屋だ」と云つて頑張つてゐる。二尺四寸に六尺に三尺足らずの部屋、――そこには年中部屋一ぱいに藁蒲團と毛布がしきつめられてゐる。安ものの風景畫や裸體畫、アンチモニーの置物、化粧鏡、齒磨楊子などが置かれてゐる。陸の人が彼等のその部屋をもし寢床だなどと云はうものなら、彼等は

「これは俺達の部屋だ、なんだ寢床だ？　寢床てえのは之れのことだ、これが寢床てえんだ、このヘイカチ野郎奴」と云つて諸君に彼等の藁蒲團を指し示すであらう。

部屋はどうしても上段の方がよい。廣い上に通風器の口に近いから風通しがよい。從つて上段は部屋の大將連、即ち水火夫の古參が居り、火夫見習、繰上り、便所掃除の役割を始終つとめる見習などは下段に少さくなつて住んでゐる。

大部屋の大將連中、即ち水火夫の古參連中を一名「大部屋の肩振り連中」とも云ふ。「肩振り」とは、自慢、功名談、惚氣、不平不滿等のゴチヤ〳〵を大聲で氣焰を擧げちらすことだ。然し時世が變つて近頃は上段の大將連中が、ともすると下段のドバス連中から反對に肩を振つて振つて振り切られて感心してゐたりする。

彼等が當直休みのあひ間〳〵に部屋の中に安座を掻きながら、肩を振り振り、肩振るところを聽けば、大抵ガジのかすりの非道であり、慘虐暴戻であることに終始する。

前にも書いた通り××のシーメンは、ボーレンの手からガジに賣り込まれる二重被搾取の奴隷なのである。と云ふのは、シーメンは就職乘船するに際し、彼等自身のために必要な消耗品を買ひ入れなければならぬ。齒磨、楊子、次の寄港地までの煙草はまだよいとしても、機關部の勞働に是非共必要なナツパ服、下駄、手拭、手袋、甲板部ではジヤンパー（水夫の着る涎かけが後方に下つた作業服）ドングリパンツ（パンツが胸當兼用で肩から垂り下げられる作業服）が是非とも必要で、これがなければ折角の良い船も取り逃してしまふ。それから次に差し迫つて入用なのはボーレンの宿代一ケ月當三十圓の拂ひである。この宿料は、郵・商船の船員豫備制度と云ふ同社所屬失業船員で屆入優先權を有つてゐるものでも、下船されたりしたが最後、早くて二ケ月は次の乘船までかかるのだから、ボーレンの宿料だけで既に六十圓になつてゐる。だがボーレンの宿料は次の航海までその不足の分を待つて貰ふとしても、ここに五十圓の現金はどうしても必要である。

ここに問題が發生する。

乘船に必要なこの金は、シーメンの乘込むべき船の海上勞働貴族が貸してくれる、と同時にガジは事務長からそのシーメンが受取るべき給料の委任狀並に認印を預る、……實は取り上げる、……そしてこの貸金に對しては月一割五分から四割の利子を付ける！　が、一般に二割を以て標準とするが故に、二割のかすりと稱せられる。

そこで大部屋の連中の給料は平均どの位かと云へば、會社によつて違ふが、社船で四十三圓平均、社外船四十圓位である。いま四十圓の給料とすれば最初の月給でガジから借りた金を返却してもなほ十圓のあしが出る。この元金のあしのうへに、更に二割の利子のあしが出てゐるから、合計二十圓の借金になつてゐる。この二十圓は、次の月給では二十四圓となつてゐるので、四十圓の月給から差引かれれば船員の手元に二十六圓の月給が殘る。これで貸借關係が公式上では打切られた形である。

だがこれは公式のこと、實際では如何に食糧部屋付の船員でも、煙草も吸へば齒磨もいる。寄港地々々々での小遣錢もいるのだ。二ケ月でもつてガジのかすりの圏外へ逸出し去ることは決して出來ない。

況んや海上勞働貴族は、道樂や慈悲で金貸をやるのではない。搾取せんがために貸すのである。强制高利貸として部下全體に對するのだ。前記公式のやうな借つぷりの惡い奴は、この海上勞働貴族によつて直ちに次の航海で下船されるか、さもなければとても船內に止つてはゐられないやうに「向ふを張られる」に至るのである。

二

搾取の存するところ必ず權力が伴ふものとすれば、一ケ月二割ものカスリを取らうとするのには、充分兇惡な權力を振舞はなければならぬ。このためにガジは、その本來の職務である水火夫長の資本家賦與の權力を自已の高利貸權力へ轉用する。借つぷりの惡い奴には、昇給の遲延、容赦なき下船、暴風の夜の生命とりの作業、マスト上り、等々々の威嚇がその鞭であり、サアベルである。

然し一ケ月二割のかすりは、これくらゐの彈壓ではまだ足らぬ。別に彼等は彼等自身の搾取權力を以て先づ船內を固めてしまふ。それは乾分なる暴組の養成である。暴組は、二割貸金掠奪の中から少しばかりの酒と、安淫賣と、くり上りを早くしてやることによつて譯なく海上勞働貴族のために忠實なるブルドツグとなり、スパイとなつて働くものである。

彼等海上勞働貴族は、先づ一萬噸級の客船、郵船でいへば天

洋丸、大洋丸、春洋丸、コレヤ丸、サイベリア丸等々、商船のアリゾナ、アフリカ、アラバマ、マニラ、ハワイ丸等々に乘込むに當つて、郵船では水夫長二千圓、火夫長二千五百圓。商船の甲板部で一千圓、機關部で一千五百圓程度の資金を持て乘船する。そこで、甲板部での彼等の部下が二十名として一名宛五十圓、機關部四十五人として約五十五圓が常に貸しつけられてゐる。乃至はゐなければならぬ。彼等は資金を手一杯にまはしてゐるので、遠航一航海の終り（五ケ月目）には、一千圓を貸付けた水夫長の手には二千四百八十圓、即ち一千四百八十圓の純益があがり、二千五百圓の火夫長のものなら實に六千二百圓——差引純益三千七百圓となる。だから一萬噸級の水夫長の、この高利貸による一ケ月平均の收益は約五百圓となり、同じく火夫長で約七百四十圓となる。

だが、これもから計算通りには行かず、乾分や小ウルサイ奴からの借り倒しを見込んで一ケ月四百圓乃至五百圓と云ふところが、實際の相場である。そしてこれは單に遠航一萬噸級ばかりではない、近航における（たとへば台灣航路）における七千噸級——これらは每月淸算であるが——矢張り遠航一萬噸級と同樣な成績をあげてゐる。但し小さな船ではこれだけの收益は上らない。

が、要するに彼等部下全員の全收入の半分は、海上勞働貴族のポケットに吸ひ込まれることになる。ガジはまた吸ひ込まなくては置かぬ。ガジの名また格好なる哉、だ。

このガジは、その高利の取立には些しの心配もいらぬ。事務長から受取るべき部下の給料からピシ／＼と頭をはねてしまへばよい。だから彼等は如何にして取るべきかより、いかに長く手一杯にまはすべきかに、ガジのガジたる手腕を見せる。

ガジは第一に、昇給遲延、下船、生命取り作業、譴責として、必要であつてもなくても借りねばならぬやうに——陰に陽に——强制する。だがこれだけではまだ充分ではない。そこで第二の積極手段として、「お前は何圓、手前はいくら」と否應なしに貸して廻る。もし「私は金はあるから要らぬ」なんかと拒絕でもしようものなら、「俺の商賣にならねえ、下船で行つて貰はうかい」と出る。

かうして資金の全部を貸付終つたとすれば、今度はこれを、部下が支拂能力あるまで寢かしておくことだ。すると複利の計算で利が利を產む。

その方法に二樣ある。第一は賭博で部下の金を卷き上げる方法である。この道にかけての海上勞働貴族はまたガジとしての驚くべき手腕を有し、到底大部屋連中は彼の敵ではあり得な

い。「赤ン坊の手を捻じ上げるやうなものだが、餘り殺生な眞似を度々は出來ねえ」と、部下の頭が無くなれば、空嘯いて自分の部屋で煙を輪に吹いてゐる。

次には、多くもあらぬ月給の蕩盡法の教授である。賭博による射倖心の奬勵、ついで女郎買ひ、酒呑み、等、等。

船が港に碇泊してゐるとき、上陸もせずに部屋で寢てをれば、必ずやガジは見廻りに來て、野郎の鼻先きで十圓ペーパーをピラ〳〵させ、

「お前寢てゐるのか、若い奴の癖に寢てゐるなんて、サアサ行つて來い行つて來い」

と十圓ペーパーを押しつけてゆく。無論二割の高利付だ。それでも品行方正で寢てでもゐやうものなら、觀面に「向う張り」がやつて來る。

或る海上勞働貴族の一人Nと云ふのは、部下に汽罐掃除を命じた。その苦熱と過勞とのためにヘト〳〵に疲れ切つて歸つて來た大部屋の中央にビール箱を擔ぎ込ませ、自らその箱をあけ、栓を拔き、

「ヤア、一同御苦勞だつたなア、まア遠慮なく一杯やつてくんな」

と差出したので、連中が

「ヤア、火夫長有難う」

「火夫長、どうもすまねえ」

と禮を云つて呑んだビール、そのビールは一本一圓の代價で、其上二割の利子がついて、一同の給料から差引かれてゐた。

これなどは、流石の海上勞働貴族仲間でも秀逸とされ、好評嘖々たる話柄である。

斯うしてまで搾り上げた金も、惡錢身につかずの譬の通り、ガジ公はこれを煙のやうに消費してしまふ。彼等の中の或者は、毎日々々絹のワイシヤツを取換へることにより、或者はまた毎日手袋を新しくすることにより、さらにまた或貴族は玄關一ぱいにその靴を陳列することにより、別のものは、一度手を拭いた高價な麻のハンカチを甲板の上に捨てて大部屋の連中に拾はせることにより、それ〳〵にその貴族振りを表示する。もしそれ、折花攀柳の使途に至つては、時にブルジョアと——よし瞬時的にもせよ——正にその覇を爭ふものがある。

木猴に冠たり——シーメンはこれを「銀流し」と云ふ——は、之等海上勞働貴族にピツタリ當てはまる。帽子は英國製のステツトソン、杖は南洋産の蛇木、碇鎖を思せるほどの金や白金の時計鎖。ウヲールサム、エルチン二十一石入の金時計を最下等として千圓といふ聲のする白金時計、切立の背

廣、——まことに五分の隙間もない。

だがこの銀流しは、二割のかすり、賭博、喧嘩の銀流しだ。ガジの中には、肝心の機關室へ一度も下りたことがない、またその船の機械がどんな器械やら知りもしないといふ奴がゐる。高利貸が本職の彼等は、五十圓や百圓（ガジの月給で百圓を越ゆるものは全國にないと云つても過言ではない）の端金の內職は、それ相應にやつておけばよいのだ。

彼等の巧みな銀流しの一例として最近にはこんなこともある。リウーツとした、五分の隙間もなく流し込んだ銀流しのガジ公が、御丁寧にも鼻眼鏡までかけて汽車の一等に乘り込んだ。すると某驛から陸軍の將校が同車した。間もなく將校の方から

「失禮ですが……」と身分をたづねたので貴族は

「船長です」

と答へてしまつた。ところが相手の將校は、飛行隊關係の者であつたと見へ、航海術を根掘り葉掘り問ひはじめ、飛行機の横舵がどうの、縦舵と船の舵とがかうのと問ひ詰めるので、二割のかすりか盆の上の勝負なら堂に入つたものであつても、航海術などと來てはトンと見當もつかないのだが、さりとても、船長だと云つた手まへ、默つてばかりも居れず、いゝ加減に相槌を打つたのには「全く冷汗が出たよ」と本人が正直にこぼしてゐた。

海上勞働貴族の貸金は決して部下ばかりではない、士官連中や會社の社員にまで及んでゐる。だが、これらガジよりも上級なものへの貸金は、一切利子を取らないで貸してゐる。また逆に、會社の重役、船長、機關長等でガジの手を經て金貸をしてゐるもののあるのは言ふまでもない。かかる場合、ガジが仲介に對して支拂ふ利子は月三分が相場である。善い船、搾り易い船へ乘せて貰ふため、ガジと××の人事監督との間に然るべき取引あることなど云ふだけ野暮といつてよからう。

三

海上勞働貴族は各會社別に團結する。郵船屬員協會、商船互友倶樂部、社外船水火夫長倶樂部は、その表面こそ全員の團體ではあるが、實際に於ては××の貸金監督機關である。これら監督機關と相應じて郵船には月々會と云ふ彼等相互の金融機關を有ち、同じく商船には互助會と云ふ金融組織を有つてゐる。月々會とは月々に××事務の打合せをすることから月々會と名づけたと云ふが、何れにしても彼等は之等において協力一致し、成績不良者（金を借りない者）の下船、轉船者の貸金引

權、踏み倒し脱船下船者のブラックリスト作製を掌る。××海員協會の幹部は全部が貴族(ガジ)であり、××互友倶樂部の連中も同樣にガジである。連中はいづれも××から幹部としての給料を貰ひ、おまけに借金取りに廻る費用、たとへば、モーターボート代、ギャソリン代、事務費等は、強制的に二割のかすりと共に一般船員(シーメン)から取立ててゐる。この經費の殘額積立が、××で既に二十萬圓、××で二萬圓に達し、別に××のガジは、郵船株を買入れて株主になるのだとの勝手なガジ仲間の決議によつておためごかしに部下に積立さした金が三十萬圓に及んでゐる。之等は、いづれも貸倒れの豫防とも、また運輸資金ともなつてゐると云はれてゐる。

海上唯一の勞働組合、日本海員組合と云ふもの、これもガジが拵へたものである。從つてガジの占有物だ。先づ組合長×××××、副組合長×××××、常務部長×××××、其他幹部から全國十一ケ所の支部出張所長並に主任悉くが×××××であり、船内幹事、評議員の殆んど全部がガジであり、最も海員組合を支持する船は最も惡(あく)どいガジの船でありこんな船で組合の惡口でも云はうものなら直ちにガジのために下船(おろ)される。無論組合費は二割の利子をつけて貴族(ガツ)が取まとめて組合へ納めてくれる。

云はば日本海員組合は前記ガジ閥の精粹合體である。

四

そもそもこの船内強制貸金制の濫觴については、異説紛々として何れも俄に信を置き難い。或人は、初期用蒸汽船に船長として我國に雇傭せられた一ノールウェー人が大部屋統御の一策としてこれを移入したものだといひ、或者は、某會社の某重役が自分の小遣(づかひ)錢儲けに金を貴族(ガジ)をして貸しつけさせたのが始まりだとかいふ。が、それは兎に角、この制度は相當舊く根強いもので海上勞働貴族(ガジ)以外の擁護者があることは否まれない。然し××諸團體の親分關係と云へば、舊くから大阪商船系では小林文吉、郵船方面では濱田國太郎系で、濱田は小林の弟分である。殊に濱田系は、海員組合を本營とし、海員協會に×××××として著名な角田猪之介を据ゑて根強く頑張つてゐる。

船内強制高利貸制、——何んと云つても餘り賞めた制度ではない。それにもかかはらず、かやうな變態中間搾取が近世産業機關、然も精巧な汽船の中に不然と巣喰つてゐることは、なんと云つてもチト頭腦(ちえ)のある人ならば小首傾けずにはゐられぬことでなければならぬ。そして之れが議論好きな社會問題人から、よくも今まで取殘されてゐたことを不思議に思ふ人もあらう。

だが、それは、前から書いたことで明かなやうに、この問題

が×××並に海上勞働貴族の二重の鐵扉の中に密閉せられてゐて、シーメンの叫びを陸上にまで運せしむることが出來得なかつたからに過ぎない。海上勞働貴族の搾取は、海上に於て不可侵であり神聖化されてゐたがために如何ともし難いからである。

實に、海上五萬八千の組合員と、二十萬圓の積立金と、全國十一ケ所の支部出張所を有するといふ日本海員組合すらが、このガジのかすりに對して一指をも染め得ない。これを不問に附するのか、と組合頭株に詰問すれば、「借りるものがあるから貸すものができる。大體借りる者が惡いんだ」と事情に通ぜぬ人々を鼻の先であしらふだけである。その機關誌『海員』なども既に號を重ねること七十回に及びながら、ただの一度でも貸金の力の字も書きはしない。況んや海上における其他の言論機關、海員協會會報、海燈（海員救濟會發行）、民潮、海國、海陸互友、東洋海事、等の如きがそんな眞似の出來得る譯はあり得ない。指でもさしたが最後、二ケ月と經ぬ間に奇麗に叩き潰されてしまうであらう。高利貸中間搾取の神聖化、海上勞働貴族の不可侵は、かうして海上の全面を掩ふて治外法權を保つて來た。

だが然し、かかる兇惡な搾取が存在する以上、——賭博と酒と女に突き落され、突き落されしながらも、大部屋の空氣は變化せざるを得なかつた。遠航の船内××事件すらガジの親分の首の動き次第で不問に附せられたと云ふ恐るべき大親分の威力、何人斬つて何人はつたと云ふ古い船乘りであるガジが、その刀痕やピストルの彈痕を示しての武勇傳も、そろ〱と大部屋連中のために馬鹿にされかけて來た。大衆は、ガジは單にガジの背後の勢力、虎の威を借る狐に過ぎないことを看破して來た。殊に海外の事實を見聞して來る彼等は、英米獨佛の船舶に於てかかる不合理な制度が存在しないことを知るに及んで、この中間搾取への鬪爭の火蓋を切らずにはをれなくなつた。

先づ最初は、借り倒し戰術と出かける。貴族が一杯機嫌で大いにメートルを上げてゐるときに、彼れに彼れの武勇傳や惚氣なんかで肩を振るだけ振らしておいて

「さて……」と切り込んでゆく。

「サテ、火夫長、小遣錢を少々ばかり」とやれば、今がいま說き立てた國定忠次と幡隨院の俠氣の手まへ、まさか貸せないとは云ふにもいへぬ。「おい、おめえはもうあしが出てゐるぜ、これを見い、元利共百と二十圓あらア、仕方がねえ、持つて行け、餘り使ふなよ、小遣錢は儉約して使ふもんだ」と投げてくれる。かうして借りて借りて借りめくれば、貴族の方では病氣や下船でもされてはと大心配で頭痛の種になつてゆく。

「ガジの野郎、俺が一寸風邪をひいたと云つたら、大事にしろ

よ、無理をしねえやうにな、當直は誰か代りをやるから休みねえ、と云つて藥と水を持つて來て與れやがつた、ウハハ、、」と大部屋肩振りの材料が出來上る。それに昇給は早いし――！（借金を月給から取り上るべくガジが成績を良く報告してくれる）――轉船はさせないし、況んや下船などはなか／＼もつてさせはしない。さうして二百圓も借り倒してドロンと忍術を使ふ。また事實かうなれば、忍術を使はなければ、借金の重味で到底やりきれたものでもない。ガジが地團太踏んで悔しがることは勿論だが、この戰術は始め可なりの忍耐が必要である。先づ、眞面目で朴訥そのもののやうでなければならぬ、そして「こんな奴に借したら大丈夫倒れつこはない」と云ふ貴族への好感を醸成しなければならぬ。

「どうも近頃の若い奴は口先ばかりペラ棒にうまくなりやがつて、借りた金は返さず、文句はツベコベこきやがるし、借りるときだけ、へへ、、、、火夫長、水夫長なんかんと煽てやがつて始末にいけねえ」とは、ガジ公の述懐である。

大正十五年の天洋丸のストライキの當時に横濱から初めて乘船したガジが、横濱で全員にそれぞれ貸しつけて、翌日神戸で全員に總下船されてしまつた。その上下船に際してめい／＼五圓宛を爭議資金として更にガジから借りて下船て行つたので、あとでそれと知つたガジが郵船の監督に泣きついたことは有名な海上挿話である。

更に一歩前進しては、借りに借りぬいた上で

「どうだい火夫長、俺にはもう一生これでは拂へつこねえから、みんな棒引にしてくんねいか」と持込む。なにぶん月二割の高利のことだから拂へないと云つたら愈々拂へない。ガジの方でも仕樣がないので

「仕樣がねえ、棒引きで全部新だ」と其月から新らたな貸借關係に更變するを餘儀なくされる。

かうした大部屋連中の、貴族に對する個人的鬪爭は、やがて二個より三個と全面的に繰り擴げられてゆく。上段下段の部屋部屋から當直交代の間にも、碇泊中にでも、毛布の中から龜の子見たいに首だけ突き出して貴族の暴虐をも罵りとほす。親の死に目にも、借金の擔保に下船されなかつたこと、今度來たガジは××一派で××重役の金を廻してゐること、硬骨な誰れ彼れが下船されたこと「畜生奴ツ」と頭なしになつた一人が叫べば、「ガジの野郎、ただはおかねえ」とあしが出た他の一人が應じ、「全くひとをチヨロナメてやがる」と、現金を所持しながら、繰り上りが遲くなつたり、下船されたりするのを恐れて貴族から不要の高利を借りた、もう一人のが吐き出す。

ところが、ガジの方でも新手を考へる。その一つは自由主義だ、「オイ、俺は金は別に俺の方から進んで貸さうとは云はね

え。強制高利貸だなんて人ぎゝの悪いことは、俺は云はれたくねえからだ、だが借りたい奴は二割を承知で借ることだ、お前達の自由だ。自由だぜ。」こいつが恐ろしい、名は自由だがおそろしく辛い自由だ。自由だつと云ふのを本氣で眞に受けてゐたら、やがて來るものは「向ふ張り」だから。

お次が人道主義、これは「若え者に金を持たしてゐたのでは、幾らあつても足りねへ、貯金することだ、貯金だ、貯金だ、二宮尊徳だ」と云つて、毎月五圓或は十圓と強制的に貯金させる。して、その貯金によつて不足した大部屋連中のその不足額を、二割の高利金で補塡してやる。勿論貯金の通帳と認印はこれも「若え者に持たしてゐたのでは直ぐ費つてしまふ」と云つて貴族はこれを手元に押へておいて脫船下船等の擔保にするといふ名案。――それから別にガジは彼等の團體たとへば郵船における屬員協會の如きを利用する。ガジ連中が勝手に決議してボーナスの半額を強制積立にさせ、その積立による不足額に對しては大部屋連中に二割の高利の付いた金を與へる。

積立てた金は事實上彼等ガジが管理して、借し倒れの際の差押へ物權とする。

五

近世に物珍らしい月二割の強制高利貸搾取、――この、海上における金城鐵壁をなして尚さへ立ぬ程防衛保護せられてゐる制度も、搾取のあるところ必ず鬪爭があるとすれば、この猛惡な搾取制度全體に對する鬪爭も決して例外であり得る筈はない。果然大正十三年頃から公然と先づ郵船部內に「船內高利貸撲滅運動」の火蓋は切つて放たれた。其後彼等は何等の外部からの應援も無い裡にあつて、孤立無援、しかも日本海員組合、屬員協會、商船互友俱樂部、社外船水火夫長俱樂部等の猛烈な海上勞働貴族集團の包圍を邀擊し、四角八面に斬りなびけ、幾多のエピソードと慘憺たる犧牲とを殘しつつとうとう、郵船甲板部から三分之二を追拂ひ、次いで機關部の三分の一から海上勞働貴族權力を打碎いた。

郵船に上つた船內高利貸驅逐の火の手は、「俺の眼の玉の黑いうちは、一歩も船內へ足踏みさせるものではねえ」と威張つたガジ王國大阪商船所屬遠航へも容赦なしに飛び込んだ。ガジ權力の本營であり牙城である商船、それは、海上勞働貴族、怪、重役を通じての一貫せるガジ專制支配、金を借りないがために即時に下船せしめられるところの商船の船舶においてさも、この大部屋の肩振り連中の肩の振りようは、近頃めつきりその振幅を增大して來たやうである。既にメキシコ丸の甲板部は貴族のおしがきかなくなつたために、貴族の團體商船互友俱樂部は、貴族中の錚々たる人物を乘船せしめて一擧におしをき

かさうとしたが及ばず、遂に大部屋は總下船を以て會社に迫り、結局首謀者と見られるものを甲種豫備（月給付下船）の好待遇にした。

「ガジの貸金制に對して反對せるが故に下船させるのか？」と詰問したら、

「イヤ、會社の都合である」と水火夫監督が苦しい答辯に無事出帆はしたものの、見事に貸金制は撃滅せられてしまつた。

次にハルビン丸の機關部は强制貯金の通帳取戻しに端を發し、同じくガジ權力の倒壞、そのまた次がアラスカ丸、その次がヘーグ丸、アルグン丸、香港丸、バイカル丸と風を望んでガジ諸城相續で陷落する有樣である。

密航、密輸、女郎買、脫船、喧嘩、賭博、無智、低能、無自覺、——ガジ權力下におけるこれらの諸地獄はかうして若きシーメン自(みづか)らの手によつて痛快に處分せられつつある。

だが戰ひは恐らく社外船方面に及ぶまでは、まだ充分の苦鬪と澤山の犧牲とを覺悟しなければならないであらう。さうして諸城の陷落に怯え切つたガジの逆襲への結成、×××船主のガジへの尻押し、日本海員組合の向背等々、問題はこの中間搾取ガジ權力を中心として海上に湧き返るであらう。

港に近い人々は、出港入港の度毎に、呼笛(ホヰツスル)を相圖にウヰンドラスにつくもの、ロープを卷くもの、レッドを打振るもの、ペンを塗るもの、ジャンパー帽のピラ〳〵を潮風に靡かしながら、ジャンパーやドングリパンツの姿も輕快に、獨樂のように敏捷に、軍隊の如く規律正しく働くところの若き水夫(セーラー)の愉快氣な逞しい、そして屈託のないゴム毬のような彈力性ある姿を見受けるであらう。そして航海中彼等の姿が甲板から消え去つたとき、彼等は盛んに大部屋で肩を振つてゐるのである。

また機關部の奈落の底を覗いて見よ。やがてその蒸暑い焦熱地獄の底から、ストーン、ゴットン、と物凄い叫を擧げてゐるウエーヤース、ポンプ、の旋律(リズム)に合せて、カッタ、コットとタラップを上つて來る眞黑い顏の油で汚れた菜ッ葉服を見るであらう。火夫(フェヤマン)、火夫見習(コロッパス)が當直交代(ワッチ)で自分々々の部屋へ、町へと歸つて行くのだ。そこでも頑固物揃ひの火夫(フェヤマン)、火夫見習(コロッパス)は、「水夫(セーラー)の畜生に、チヨロナメされてたまるか」とばかり同じく肩を振るであらう。銀流しでない彼等は無垢のままで、水夫(セーラー)は詩人らしく、火夫(フェヤマン)は水牛のように、肩を振り〳〵、諸共(もろとも)にヘイカチ野郎として、ロンドン、ニューヨルク、ナポリ、ハンブルグ、マルセイユ、アントワープ、サントス等々、世界の隅々までこの肩を振つて〳〵振り續けるのだ。

そして貴族(ガジ)は彼れの部屋で、帳面を睨み、算盤をパチつかせながらシヤイロックとして同じく世界の端まで——。



しっぷ・あほうい！

谷　譲次

1

葡萄牙のリスボンで、僕はリンピイ・リンプと呼ぶびつこの英吉利人と仲よしになつた。

リンピイは海から來た男で、そしてPIMPだつた――あとで解る――それはいゝが、ついうつかりしてるうちに僕も捲き込まれて、その跛足(リンピイ)リンプの助手みたいな仕事をしなければならないことになつた。これも詳しくは「後章參照」だが、早く言へば、毎晩僕が夜の埠頭へ出かけて古いINKの海を眺めてるあひだに、何時からともなくこのリンピイと知り合ひになつたといふだけなのだ。

ほるつがる――種が島と煙草と社交病を日本へ紹介した國。

日本――葡萄牙。

東の果てと西のはづれ。
地理的には遠く、歴史的には近い。
兩國共通の言語でちよつとこんな判じ物みたいな小景(スナップ)が出來るくらゐだ。

彼はRaxa(ラシャ)の「まんと」の「ぼたん」をかけてゐた。

彼女は「石鹼(さぼん)」で洗つたばかりの「かなきん」の襦袢「Jibão」に「びろうど」Veludoの着物をきてゐた。「びようぶ」の前に、ふたりは「さらさ」Caracaの座ぶとんを敷いて、Carta「歌留多」をしながら飮んだり食べたりしてゐた。が、彼はあんまり「ふらすこ」のお酒を「こつぷ」で呑んだし、彼女がPao「ぱん」と「こんぺいとう」をTanto「澤山(たんと)」食べ過ぎるので、お互ひに嫌になつて離婚した。

FINIS

といつたやうに、これだつて君、あの、この頃産業的に需應の多い「朝飯の食卓で燒麵麭(トウスト)・卵子・珈琲と一しよに消化してあとへ殘らない程度の退屈で幸福な近代結婚生活の小說」の作例には、ちやんとなつてるぢやないか。BAH!

で、とにかくリンピイのWho's Whoへかへる。

彼の商賣は三つから成り立つてゐた。

第一にリンピイは、マルガリイダといふ五十近い妻と一しよに、市の山の手に獨特の考案になる魔窟(バイロ・アルト)をひらいてゐた。そして、マルガリイダは、CINTRAの古城のやうに胄張つた、不平で耐らない七面鳥みたいに絶えず何事か呪ひ喚いてる存在で、リンピイの人生全體に騷々しく君臨してゐたと言つていい。そのうへ彼女は恐しくけちだつたし、自分の思ひつき一つで家(ハウス)が流行つたので、しぜん稼業のことはすつかり一人で支配してゐて、リンピイはMore or lessそこの居候みたいに、波止場(カイス)の客引きだけを專門にしてゐた。それも、實際マルガリイダ婆さんに言はせると、リンピイなんか居てもゐなくてもいいんだけれど、商賣の性質上、男のにらみの必要な場合もあつたし、それに、リンピイは跛足のくせに素晴しく喧嘩(ハンディ・アウト・ファイスト)が上手だつたから、お婆さんも重寶がつて、格別追ひ出さうともせずにたゞ顎だけ預けとくがいゝと言つた程度に置いてやつてゐたのだ。この「マルガリイダの家」の呼び物は、テレサといふ白熊のやうな佛蘭西女の一夜の身體を懸賞に博奕をさせるのだつた。だから、何時行つても寄港中の船員がわいわいしてゝ、マルガリイダ婆さんの靴下は紙幣束でふくれてた。が、このリンピイとマルガリイダは、お互ひにどこまでも經濟的獨立を嚴守する夫婦關係——何と近代的な!——だつた。と言ふより、つまりそれは、彼女が彼に充分な儲けを別けて與らなかつたから

だが、そこで當然リンピイは、妻の一使用人として以外に自分だけの内職を持つてゐた。こゝに企業家リンピイ・リンプの非凡な着眼が窺はれる。すなはち、第二に彼は、一種の「船上出張商人」――英語で謂ふ ship-chandler「しつぷ・ちやん」――を開業してゐたのだ。

夜のりすぼん波止場で、僕は一つの不思議を見た――。

AYE! 闇黒がLISBOAの海岸通りを包むとき!

各國船員の行列にあるこほるが參加し、林立するマストに花笛がころがり、眠つてる大倉庫のあひだに一組づつの影がうろうろし、どこからともなく出現するこの深夜の雜音・棧橋の話し聲・水たまりの星・惡臭・嬌笑・SHIP・AHOY!

この腐つたインクの海は、何かしら異常な事件を呑んでるに相違ない。波止場の夜氣は、僕の秘有する荒唐無稽趣味をいつも極度にまで刺激するに充分だ。それが僕の全 being を魅了して、すぐに僕を「夜の岸壁」の自發的捕虜にしてしまつた。もちろんそこには、何とかして變つた話材に Come across したいといふ探訪意識も多分に動いてゐたことも事實だが、とにかくリスボンでは、今日のつぎに明日が來るのと同じ確實さと連續性において、毎夜の波止場が浮浪人としての僕をその近邊に發見してゐた。一晩として僕は夜の波止場を失望させることはなかつた。

が、これには單なる探險心以上に、僕を驅り立てる理由があつたのだ。

それは、かうして毎晩「夜の波止場」に張り込んでた僕へ、僕の熱心な好奇癖を燃焼させるに足る一現象が run in したからだ。

Eh? What?

きまつて眞夜中だつた。暗いなかに人影がざわざわして、その黒い一團がしづかに棧橋を下りていく。棧橋の端には、物語めいた一そうの短艇が、テイジョ河口の三角浪に揉られて忍び笑ひしてゐた。訓練ある沈默と速度のうちに一同がそれに乘り移ると、そのまゝボウテは漕ぎ出して、碇泊中の船影のあひだを縫つて間もなく沖へ消える。そして暫らく歸つてこない。が歸つて來ると、其の一團の人かげが、同じ沈默と速度をもつて小舟から棧橋へ上り、僕の立つてる前を順々に通り過ぎて、今度は町へ消えてしまふ。夜なかに海を訪問する一隊! はゝあ! 奇談のいとぐちには持つて來いだ。しかも、believe me, それがみんな女で、引率してるのはびつこの小男だつた。

これが毎晩である。棧橋と沖を往復する謎の女群。熟練を示すその沈默と速度。At last. 大MYSTERYは僕のまへに投

げられた。何のための毎夜のとりつぶ？　女漁師？　Absurd. 番輪圖？　Maybe. それにしても、何と祝福すべき小說――作者ライダア・ハガアド卿――的効果とシチユエイション！　山（サスペンス）もある。「はてな！（バッツル）」もある。大通り（ボロット）も小みち（カウンタ・プロット）も充分ある。こいつにちよいと「豫期しない捻り（アンエクスペクテド・ダアン）」さへ與へれば、ジヨウンス博士主宰通信教授文士養成協會――名譽と財產への急飛躍！　はじめて萬人に開かれた成功の大秘門！　變名で有名になつて親類知己をあつと言はせ給へ！――の「必ず賣れる小說を作る法」の講義錄にぴつたり當てはまつて、何うだ君、そろそろ面白くなつて來たらう。NO？

まだまだこのあとが大變なんだ。

YES。港だから、そら、毎日船がはいるだらう。船乗りつてやつは、女を要求して――たとへばマルガリイダの家のテレサなんかを眼當てに――矢鱈に上陸をいそぐものだ。が、上陸させちまつちやあ話しにならない。いたづらに老七面鳥マルガリイダをほくほくさせるばかりで、何らわが新事業家リンピイの利得にはならないから、そこで彼らの上陸の前夜か、もしくは過半上陸しても不幸な當番だけ居殘つてるところへ、暗いいんくの海を棧橋から一艘の小舟（ボウテ）がこいで來て橫づけになる。女肉を滿載したボウテ！　すると、訓練ある沈默と速度をもつて、五六人の女隊が、アマゾン流域特產のぽけつと猿みたいにするするすると船腹（サイド）の繩梯子（ジヤコツプ）を這ひ上つて甲板へ現れる。これが眞夜中の船の女客――船上商人（シツプ・チヤン）リンピイがひそかに駆り集めて來た「商品」だ。が、晝間の市民としては女中や場末の賣子をしてる女達――相當若いの・かなり若いの・ほんとに若いの・少女めいたの・肥つたの・瘠せたの・丸顏の・面長なの・金髮の・黑髮の――。

それらが次ぎつぎに船の手すりを股ぎながら、細い、太い、圓い、めいめい色のかはつた聲を發する。

今晩は（ボア・ノイテ）！

今晩は（ボイ・ノイテ）！

今晩は（ボア・ノイテ）！

と思ふとすでに、長い海によごれ切つた水夫と火夫が、この呼吸する商品のまはりにぐるり素早い輪を作つてる。にやにやと殺氣立つ選擇眼。その、天候と粉炭と餘剩精力とで黑い層の出來てる彼らの首根つこへ、女たちの白い腕がいきなり非常な自信をもつて卷きついていく。最初に視線を交換した船員と賣春婦――これほど直截な相互理解は又とあるまい。港の挨拶はこれだけで澤山だ。何といふ簡潔な「戀の過程（プロセス）」！　何て出鱈目な社殺！　そここゝの救命艇のかげ、[illegible]の橫[illegible]船上の[illegible]

らんでゐるだ。そして星くづ・インクの海・町の灯・夜風。五六人の女と時として五六十人もの海の野獣と――かうして、それらの全場面に背中を向けて忍耐ぶかく待つてるあひだに、毎晩リンビイは一たい何本の煙草をじゆつと水へ投げ込むことか？

GOD・KNOWS。

2

畏友リンビイ・リンプの驚嘆に値ひする發明的企業能力は、これだけでも充分以上に合點が往つたらうと思ふ。加ふるに、この出張賣春婦のPIMPをつかさどるかたわら、第三にそして最後に、彼はほんとの「しつぷ・ちやん」をも兼ねてゐた。ほんとのしつぷちやんてのも變だが、實はこれも、一つの準備(プリコウション)行動として彼にとつては必要だつたのだ。と言ふのはつまり、いよいよ生きた商品を持ちこむに先立ち、まづ斥候といつた形で、無害でゆうちらすな海の人々の日用品――それも陸での概念とは大分違ふが――を詰めた鞄(ケイス)と、何食はぬ顔(フェイス)とをぶら提げて、あたらしく入港して來た船へ、檢疫が濟むが早いか最初の敬意を拂ひにゆく。かうして其の船の德規(ヂサイプリン)や乘組員の財布の大きさを白眼んでおいて、いはゆる「岸に無障害(コウスト・イズ・クリア)」と見ると、そこではじめて、夜中に待つて本業のしつぷ・ちやん船を漕ぎ寄せる――とかういふ手順で、何うせこのはうはまあ小手調べのつもりだし、こつちでも幾らかの利を見たいなんてそんなリンビイでもないから、持つてく日用品なんかちつとも賣れなくても困らないんだけれど、それが妙なことには飛ぶやうに賣れて、リンビイは何時も空(から)の鞄と、反比例に充滿したぽけつととを伴れて歸るのがつねだつた。ぢやあ何うしてさうリンビイの商品に限つて捌けが早かつたかといふと、それは何も彼の小賣的商才の致すところではなく、現在あとで僕がこの役目を受持つやうになつてからも、品物だけは何らの澁滯なくどんどん賣れてつた事實に徵しても判るとほりに、商品それ自體に、「これに羽が生えて賣れなければベイブ・ルースは三振してカロル親王殿下がルウマニアの王位に就く」と言つたふうな、リンビイ一流の狙ひ(ヒット)と仕掛(トリック)が潜ませてあつたからだ。では、その手品の種は？――となると、これが本筋の「何か袖の奥に(サムシング・アップ・イン・ゼ・スリイヴ)」の重要な一部なんだから、手法の教へるところに從ひ、僕としてはもうすこし取つておかなければならない。

じつさいリンビイは、ついこないだまで、この兩方の「しつぷ・ちやん」を一人で兼ねて來てゐたんだが、比較的纎細――何と貴族的に！――な彼の體質と健康がその激務を許可しなかつたし、それに、幾分財政的餘裕も出來かけたので、誰か

「鳩の英語」が話せて自分の片腕になるやつがあつたら、はじめの日常品のしつぷ・ちやんだけそいつに任せて船の採りを入れさせることにしてもいゝ——丁度から考へてたリンピイの眼前へ、幸運にも僕といふ「夜の波止場の常習浮浪犯」が現れたのだ。

この、リンピイと僕——ジョウヂ・タニイ——との最初の劇的の面會はあとの頁に入れるつもりだが、一口には、彼が好機——僕にとつて——を呈出して、僕が即座にそれを把握したほど、それほど勇敢で利口だつたといふだけのことだ。ぢや、一たい何だつてそんなことが「好機」かと言ふと、これなしにはこの話しも存在しなかつたらうし、第一、僕としちやあ得がたい冒險を實行したわけで、全くのところ、さんざ步き廻つた末やつと棒にぶつかつたDOGのよろこびが僕の感情だつた。

さきへ進むまへ、忘れるといけないから烏渡こゝで斷はつておきたいのは、リンピイと彼の周圍に、僕が支那人ロン・ウウとして知られてゐたことだ。これは何も、ことさら僕が國籍を誤魔化したわけではなく、全體、はじめて口を利いたときリンピイが頭からお前は支那公だらうと決めてかゝつて來たので、正誤するのも面倒くさかつたし、その要もあるまいと思つて默つてゐたら、リンピイは勝手にさう信じこんで、同時に僕も、いゝ氣になつて出放題な名乘りを上げてしまつたのだ。Long Woo——支那にそんな名があるか何うか。なくたつて僕は困らない。要するにリンピイのそゝつかしいのが悪いのだ。このとほり、支那人なるアイデアは彼が思ひついたことで、僕はたゞ、極力否定するかはりに、無言によつてごく受働的にそれを採用したに過ぎないから——。

だからリスボンの波止場では、全的にさう受け入れられてゐた支那公ロン・ウウの僕だつた。一つの社會を下から見るのに、これはかへつて好都合だつたかも知れない。と同時に、ある集團生活を知るためには、何うしてもいくぶん密偵的なこゝろもちでそこへ這入り込んで、現實に何かの役割を持たなければ駄目だ。この意味で、リンピイ・リンプと彼の仕事は、一つに歡迎すべきLUCKの微笑だつたと言つてよからう。

YES。港だから、毎日船がはいる。その入港船のどれもへ、間もなく支那人のしつぷちやんロン・ウウが、商品鞄と無表情な顔を運び上げるやうになつた。支那人は恐しく無口だつた。ものを言ふ必要がなかつたのだ。何時も默つて鞄を擴げて、眠さうにハッチの端に腰かけてゐさへすれば、あとは品物自身が饒舌して面白いやうに賣れて往つた。ほんとに面白いやうに賣れていつた。海の住民——それは不具的に男だけだが——ま

た、そのために悦ばれる種々の他愛ない日用品――タオル・しやぼん・歯みがき・小刀(ナイフ)・靴下・その他、それぞれにリンピイの細工がほどこしてある――それから、好運のお守りTALISMANの數かず――すべて、いづれ後説――そして、このしつぷ・ちやんの支那人の訪問した船へは、必ずその夜中にリンピイのをんな舟が出張して、これも歸りには、海のむこうのお金で脚が重かつた。

それがつゞいて、何ごともなく日が滑つて行つた。

が、何時まで經つても何事もないんぢや約束が違ふ氣がするから、そこで物語のテンポのために手つ取り早くもう其の「何事」が突發したことにして、こゝへ、このりすぼんの水へ、問題の怪異船ガルシア・モレノ號を入港させる。

Mind you,「がるしあ・もれの」は、一見平凡な「海の通行人」よたよた貨物船(トランプフレイタア)のひとつだつた。

しかし、もしあの時、運命がこの船をリスボンの沖で素通りさせたら？

さうしたら、リンピイはいまだにぼるとがるりすぼん港の滿足せるリンピイだつたらうし、ことによると僕も、今なほ支那公(チンキイ)ロン・ウウの嗜眠病的假人格のまゝでゐたかも知れない。

思へば、十字路的な現出であつた――That ガルシア・モレノ。

なぜつて君、一つも賣れないのだ。

何がつて君、僕の「しつぷ・ちやん」がさ。だつて變ぢやないか。あれだけ「羽が生えて」賣れてた、そしてほかの船では矢張り立派に賣れてる――その賣れるわけはあとでわかるが――同じ品物が、このガルシア・モレノ號でだけはうそのやうにちつとも賣れないのだ。

すこしも賣れない。奇體ぢやないか。船乗りといふ船乗りが狂喜して手を出すことを、僕は經驗によつて知つてる。それだのに君、この船では、誰ひとり手に取つて見やうとする者もない。振り向くものもない。船中てんで相手にしないのだ。こゝをリンピイの好んで使用する表現で往くと、「がるしあ・もれの」でベイブは始めて三振し、カロルはやうやうルウマニアの王様になつた。といふところだが、賣れないのは僕のはうばかりぢやなく、リンピイの「商品」なんか何度押しかけて征服しやうとしても、その度にみんな綺麗に擊退されて完全な失敗におはつた。お金を貰はふとしない船員、女を失望させて歸す水夫や火夫なんて、これはとても信じられないお伽話だ。奇蹟？不可能。道心堅固！　べらぼうな！　では何だ！　At last, 僕とリンピイのまへに投げ出された一大MYSTERY――これ

を滿足にまで解くところに、この物語の使命があるのだ。BAH！

はじめて僕がガルシア・モレノ號を手がけやうとして——一つの暗轉。

SHIP・AHOY！

血だらけな晩(ブラッディ・ノウイト)め！ God damn it！

船尾の綱板梯子(ジャコブス・ラダア)に搖られてる僕の眼は、すぐ鼻つ先の大きな羅馬字を綴つてた。この船にはアマゾンのにほひがする。船名、がるしあ・もれの號。船籍、ブエノス・アイレスと白ぺいんとが赤錆で消えかゝつて、足の下の吃水線には、南あめりかからくつ附いて來た紫の海草が星と一しよに動いてゐた。

火夫の油服に、眞黒なタオルで頭を結んだ僕だ。この、紙に革を張つたすうつけいすは、「しつぷ・ちやん」の商品を滿腹して黒人の頭蓋のやうに重かつた。片手にその鞄——手が切れさうに痛い——をぶら下げて、ほかの手で繩梯子(ジャコップ)を掴んで攀ち登るのだから、ビスケイ灣の貨物船みたいに身體が傾いて、ジヤコツプが足に絡んで、それを蹴ほどいて一歩々々踏み上るのが骨(ハアド)だつた。梯子と僕と鞄が、すつかり仲よく船尾(スタアン)の凹みへへばりついて、ぜんたい斜めに宙乘りしてゐた。陸から漕いで來た僕のはしけ(ボウテ)は梯子(ジャコップ)の下に結び着けてある。それがテイジヨ河口の三角波に揉られて忍び笑ひしてゐた。——God damn!LO！ 國際的瀆神語がまた僕の唇を歪めた。何故つて君、夜の港は一めんのインク——青・黒(ブルウ・ブラック)——だらう。そこにぴちぴち跳ねてるのは鰯の散歩隊だらう。闇黒のなかの雪みたいに大きく群れてるのは戀の鴎たちだらう。むこうにちかちかするのは、羅馬七丘に擬へて七つの高臺に建つてるリスボンの灯だらう。しつぷ・あほうい！ と波止場(カイス)のはうから聲がするのは、きつとまた、急に責任と威嚴を感じ出した何處かの醉つぱらひ船長が女から船へ歸らうとして艀舟(ランシヤ)を呼んでるのだらう。Ship Ahoy！——そして僕はいま、うす汚ない商品鞄をさげてこのガルシア・モレノ號へ這ひあがるべく努力してる最中だ。何て「血だらけ(ブラッディ)」な——O！ でいむ！

さつきから言ふとほり、りすぼん港だつた。葡萄牙の首府LISBON——土地の人は、何かしら異を立てなければ氣の濟まない、土地の人らしい見識をもつてLISBOAと書いて「リスボア」と讀んでる——anyhow、ふるい水に沿つた古い閑港場に、喚く人間と恐るべき言語と、日光と雨と賣春と疾病と夕陽の壁と水夫の唾と海の道徳とがごつちやになつて歷史的市場をひらいてゐた。そこへ、今日の夕方、この The Garcia Moreno が大西洋を撫でて入港して來たのだ。殖民地の男が殖民

地の物産と何十日も同居して——だから、かうして殖民地の船がはいると、港いつぱいに殖民地的臭氣が充滿して、女達は昨夜の顔へまた紅をなすり、家々の窓へさわやかな異國の風が吹き込み、猶太人の兩替屋に不思議な貨幣があふれ、船員の棄てた灰色猫を船員が拾つたり、三年前の、海岸通の赤ボイラの陰に白く蹲踞んで待つてゐたりして、あはあ！ いろいろな笑ひごとに何と古めかしく派出な LISBOA!

この週期的活氣・海と陸との呼應・みなとのざわめきによつて早くからけふガルシア・モレノの入船を感づいた僕は、仲間のリンピイから預つたしつぷ・ちやんの靴をすつかり用意して、それでも、マストの先に靑い星がともるまでぼんやり待つてゐた。それは、かねての契約どほりに、僕がひとりでリンピイの鞄を下げて其の新入港の船へ乘りこみ、甲板に品物を擴げて、當番の乘組員相手に商賣する。リンピイはリンピイで例のほかの種類の商品を積んで、僕が呼ぶと、あとから船へ上つてこやうといふのだ。そこで僕は、リンピイの鞄と暗黒と一しよにがるしあ・もれのの號へ漕ぎ寄せてみると、長い大西洋を濟ました船員達は、上陸番なんか無視して誰もかれも「七つの丘の灯」へ逃げてつたあとゝみえて、船尾の綱梯子が公然の秘密のやうにこんなにぶらぶらしてゐた。ボウテをつないで、僕と鞄がじやこつぷを上り出したのだ。かつでいむ！ このはろう！ せいの高い船だ。昇つても昇つても上へ屆かないから、僕は、出張船商人としての僕の到來を宣言して、now 潮風にひとつ唄つた。誰か聞きつけて出て來るだらう。

Carrry mee
Cheerfulliee
Over de sea!
ゐい——ゐ！

『誰だ地獄——！』

果たしてらんかんから殖民地英語の聲が覗いた。

『船上出張商人！』

『EH？ WHAT？』

『支那公 Long Woo』

『Well, 俺は呪はれた。その支那的ロン・ウウがまた何の用で上船しやうてんだ。HEY？』

『船商人——旦那？』

『いよいよ俺は呪はれた。何を持つて來た一體？』

『AYE！ いろんな物、sir 色んなもの。あなたを悅ばすべき澤山の品。私はたしかにあなたを、たつた六片で冷たく

倒すことも可能でせう。只ちよつと實物さへ御覽になれば――。』
『よし(ライ)。上つて來て、見せろ。』
だから、じやこつぶの中途から救はれて、僕と鞄がガルシア・モレノに甲板(アボウルド)した。

假死したやうな大煙突が夜露の汗をかいて、その下で、船の(シップス)お醫者(ダクタア)――と言ふのはつまり料理番(クック)だ――が、愛玩(ペット)のポケット猿に星を見物させてゐた。洋隱猿(ポケツ・マンキイ)はアマゾン流域に特産する小さな小さな猿だ。手に握ると全身すつかり隱れて苦しいもんだから騷ぐし、胸のぽけつとへ入れてやると、顏だけ出してあちこち眺めてる。夜は、君の脫いだ靴の奧へ潛り込んでぐつすり眠るだらう。そのぽけつと猿が、肥つた料理人(ダクタア)の手の平から星へ向いて小粒な皓齒を剝いてゐた。ほかに、僕を誰何(フウ・ズ・ヘル)した無電技師は、士官(オフイサ)らしく船尾を往つたり來たりしてゐた。こつ・こつ・こつ。Again, こつ・こつ・こつ。鐵板の足跫と自分の重大さに彼は醉つてゐたのだ。しつぷ・ちやあん！ と喜んだ料理番の大聲で、下級員口(ギャングウエイ)が四五人の水夫や火夫を吐き出した。このXマス近い海の夜中に、上半身裸かの彼らが赤白く光つて浮かんだ。やつぱりみんな錨を下ろすが早いか女のところへ上陸したに相違ない。ガルシア・モレノ號は僕の前にたつたこれだけの人數だつた。が、勿論このポケット猿の連中が、總がかりで星を白眼み、怒風雨のなかで左舷(ポウト)・右舷(スタボウド)と叫び交し、釜を焚き、機械を廻して來たのではないと、who could tell? 地球の色んな隅々(コウナアス)から舊大陸の端のはし「ぽるつがる・りすぼん港」へかうして次ぎつぎに觸(タッチ)していく貨物船の大商隊――こゝにはあらゆる華やかさと恥と不可解がごく自然に存在し、事實、それらの堆積が混然と醱酵してLISBOAを作つてるのだ。といふ證據には、この「しつぷ・あほうい！」の物語も、前言のごとく僕じしんの經驗した其の一つに過ぎない。Eh? What?

3

そもそもの葡萄牙入りから出直さう――。

水は、一度低いところへ下りたが最後、何うしても上へあがらないものと決定的に思はれてゐた。羅馬人がさう考へてゐたといふのだ。だから彼らは、不必要にも山から山へぺらぼうに巨大な水道の橋を築いて渡したもので、この、可愛らしい人知幼年時代のあとが、連々たる大石柱の遺蹟として車窓に天を摩してゐる。すると葡萄牙だ。何といふ眞正直なろうま人の努力！――なんかと感心してる僕の視線を、ぽるとがる荒野の石塀とコルクの樹とゆうかりと橄欖と禿山と羊飼ひとその羊のむれが、瞬間に捉へて離した。石塀は崩れかけたまゝ重疊する丘

の地肌を縫ひ、コルクの木は近代工業の一部に參與してゐる重大さを意識して黒く氣取り、ゆうかり樹は肺病を脅退（スケア・アウェイ）するためにお化けのやうに葉と枝を垂らし、かんらんは葡萄牙國民唯一の食品オリヴ油を産すべく白く威張つて並び、禿山は全國を占領し、羊飼ひは定住の家を持たずに年中草と羊と好天候を追つて國境から國境の野原をうろうろしてるもんだからよく殺されて有金と三角帽と毛皮付きいんばねすを奪はれ、その殺したやつがまた直ぐに三角帽をかぶりいんばねすを着て草と好天氣と羊を追つてぶらぶらしてるうちに矢つ張り誰かに殺され、こんどの第三人目はやつと三角帽を戴き毛皮つきいんばねすに手を通さうとしてゐるところで、第四人目に樂しく殺害されて往き、この第四人目は――何うも限（き）りがないが、つまり、その度に飼主が變るんだけれど、羊のむれは羊の群らしくそんなことに關係なく、しぢう汽車に驚いて集（かた）まつてみたり、池に直面して凝議したりなんかばつかりしてる。

SAY！　古く粗雜に幸福な影繪の國ぽるつがる！

お前は「歐羅巴のKOREA」だ。絢爛の色褪せた繪畫織物（タペストリイ）だ。Poogh！

大地のおはるところ（オンデ・テルミナ・ア・テアラ）
大海の初まるところ（オンデ・ア・コミエンサ・ウ・マアル）

――若いころ香水の朝風呂へ這入つて金の櫛で奴隷に髪を梳かせた史上の美女が、いま皺くちやの遊紙に白髪を突つかぶつて僕のまへによろめいてる。Why should I not take my hat off to thee？

さうしたら「大地の終るところ大海の初まるところ（オンデ・テルミナ・ア・テアラ・オンデ・ア・コミエンサ・ウ・マアル）」にこの海港リスボンだつた。

今日は（ボタアル）！

その古趣と不潔と野蠻と俗臭の小首府、神樣と文明に忘れられたLISBOAが、かうおりぶ油くさい嗄れ聲を發して僕の入市に挨拶した。

こんちは（ボタアル）！
こんちは（ボタアル）！

何と感謝すべきこの放浪性！　其の瞬間から僕はリスボンとリスボンの古趣・不潔・無智・野蠻・神秘・俗惡のすべてを呼吸して、雜音と狹い曲りくねつた街路（ワインデング・ストリイツ）の迷宮へ深くふかく分け入つた。そして當分出て來なかつた。だから君、さつきから何度も保證したとほり、これはみんな、そのあひだにおける僕――ジヨウヂ・タニイ――のまんだりん假裝舞踏曲であることが一層うなづけやう。BAH！　年老ひた兩棲動物がリスボンだ。海と陸に股がつて、何時も口いつぱいオゾンを呑吐してゐる。そ

の土と水の境界に、石で疊んだ波止場があつた。「太陽の岸」と呼ばれる海岸線ゆき郊外電車發着所の近くに、入江を抱くやうに手を擴げてる廣場の一方が、ゆるい石段になつてひたひたと水に接してゐた。晝は、空と港が一つに煙つて、へんに甘酸つぱい大氣のなかを黄塗りの電車がことこと揺れて通つた。その警鈴は三分の一ほど東洋的に浮かつた。濡れた赤土の盛られたそばで、下水工事の人夫達が路傍に炭をおこして鰯を燒いてゐた。そのまゝ鹽を振りかけてお辨當に食べるのだ。赤や青の原色の袴をはいた裸足の女たちが、何人も何人も、頭へぶりき張りの戸板を載せて續いてゐた。魚賣りだ。元帥のやうな八字髯を生やした女が多い。見つけた工夫達は默つてゐなかつた。

　　ＯＨＯＹ！
　　苦痛のまりあ！
　その髯を俺に與んろ！

ひげの女らは、思ひきり淫猥な言葉で應酬しながら、男たちの爆笑をうしろにお尻で調子を取つていく。その聲が、片側の郵便局の前から、お爺さんの笑顏を振り向かせた。この老人は、其の妻の、跣足で啞の女と、吹出物だらけの男の子と、ぼろぼろの一個の手提げとを全財産に終日陽あしを探してそこらを移り歩いては、しやがんでるのだ。僕は、彼らと並んで何日も日向ぼつこをしたから、この一家族の生活はよく知つてる。老家長は代書人だつた。きたない手さげのなかに、汚ない紙と封筒と、きたないぺんとインクが驚くべき整頓さをもつて這入つてゐた。書留用の封蠟や押印も揃つてゐた。ＡＨＡ！　綺麗な花文字入りの封印まで！　蠟を垂らして印をするのが金一エクウドだつた。たまに客があると、非常な自尊と不愛想とに口びるを曲げた老人が、ふるへる手でその大變な事業に着手した。何一つするにも恐しく時間がかゝつた。で、ときどき八字髯の女や、霜降りの木綿軍服を着た兵隊が、田舍の戀人に手紙を書いて貰ふくらゐのもので、たいがい老爺と妻と息子と手提げが、四つぽかんとして通行人の膝から下を眺めてることが多かつた。子供は痴呆らしかつた。何故なら、猫を發見すると正確に石を投げる習慣だつた。そして、十か十一のくせに、しよう地べたに寢ころんで母親の乳房とばかり遊んでた。この一家を引率して、老人は一日ぢう陽の當るところを轉々してゐた。が、稼業だけは忘れなかつた。だから彼らは海底のやうな夕方の建物の影が落ちて來ても、郵便局からはあんまり遠くへ離れやうとしなかつた。お晝御飯にはやはり七輪の炭火に直かに鰯と鹽を抛り出して、燒きながら頰張つてゐた。その蒼白い魚臭が冬晴れの日光に波紋して、修繕中の郵便局の屋根へ、鎖で縛

つた瓦の束がするすると捲き上つて行つた。

向う岸はカシイアスの要塞だ。正午はそこにも弱ゞ燒く煙りがあつた。靑ぞらでは、ほるつがる國陸軍爆撃機の生意氣な二列縱隊だつた。その眞下の沖に、鋼鐵色に化粧した木造巡洋艦が欠伸してゐた。これは領海に出沒する隣國すぺいんの海老採り漁船を追つ拂ふための勇敢な海軍である。洗濯物が全艦を飾つて、こゝにも弱をやくけむりが大演習の煙幕のやうにMOMOと罩めわたつてゐた。

4

かういふりすぼんの波止場だ。この表面白つぽく間の拔けた底に、何處か田舍者めいた强情な狡猾さがぷうんと香つて、決してこれだけが全部でないことを暗示(ヒント)してゐた。果して夜！ You know, 闇黑は棧橋を物語化し、そして夜の波止場は紳士を排斥する。晝間の seemingly に平和な自己滿足のかはりに、そこには一變して酒精分の暴動(ライオト)だ。平らな地面に慣れない水夫達の上陸行列だ。海の口笛と、白い女の顏だ。しなりのいゝマニラ帆綱(ロウプ)のさきに、鐵鋲(ナッツ)を結びつけた喧嘩用武器の大見せ場(デスプレイ)だ。放尿する賣春婦(ノウタ)と暗い街燈の眼くばせだ。船員の罵聲と空地の機械屑だ。飛行する酒壜と、人に肩をぶつけて歩く男たちの潮流。問題(トラブル)を求めて血走つてる彼らの眼の色。倉庫うらに並立する四十女の口紅。何時からともなく棄てられたまゝ根が生えてる赤汽罐(ボイラ)のかげに、銀エスクウド一枚で卽座に土に外套を敷く人妻。草に隱れてその張り番をする良人。SO！ あらゆる無恥と邪惡(ヴァイス)と騷擾の灣(ガルフ)——毎晩徹夜して、「黃色い貨物」のやうに忠實に僕はその渦紋の軸に立ちつくしたものだ。

さうすることによつて、僕は完全にLISBON港のお客(ゲスト)になつてたのだ。波止場のお客さんと言へば、いでたちも君、大概きまつてやう。何世紀か前には地色の靑だつた、油で黑い火夫の仕事着に、靴は勿論片ちんばでなければならない。それに、桐油引きの裾長外套——岬町印し(ケイプ・タオン)——しかし君、煙草だけは何うも他のは喫(の)めない。なんて、Perfumes de Salon, 亞弗利加あるじえりあ製の、あれだ。あいつを茶色紙にこぼして、指先で卷いて端を舐めながら、棧橋のでこぼこ石垣に腰かけた僕の視野は、幾晩もつゞいて「古いインクの展開」と其の上の殖民地風(かぜ)だつた。

SHIP・AHOY！

夜も煙りを吹いて船が出はいりして、何本もの航路が縱横に光つてゐた。波止場(カイス)のそばの、テイジョの河口は、靑く塗つた大帆前船(バルコ・デ・ヴェイラ)の灯で賑かだつた。この船は、「大西洋の眞珠(ペルラ・ド・アトランチコ)」アゾ

レスとマデイラの兩島から材木やバナヽを積んでくる。昔この國の人はリスボアから船出して三日も往くと、暗黒(マアル・テネブロウソス)の海とあつて、船が斷崖から闇黑のなかへどかんと落ち込むやうに信じられてゐた。だから、浪漫的な暗黒の海が商業的にすつかり明るくなつて、この、全山花にうづもれた二つの無人島が發見されたのは、海洋史上比較的近代のことに屬する。何と少年的な海の時代さであらう！　りすぼんは其の過去性でいつぱいだ。現にこの、夜の僕の行きつけの波止場カイス・デ・テレレ・ド・パソもバスコダガマが印度航路への探險に出るとき祈つた聖ジエロニモの寺院――いまはそこに彼の遺骸が安置してある――や、何年となく毎日國王が頂上から手をかざして、東洋からの歸船と其の滿載してる筈の珍奇な財寶とを待ちあぐんだといふベレンの古塔に遠くない。じつさい僕が踏んでる波止場の階段も、その黄金治世の印度の石材で出來てるのだ。僕の心の眼(マインズ・アイ)を、光榮ある發見狂時代のリスボンの半熱帶的街景がよぎる。フエニキア人の頃から、何と澤山の黑人と赤人と黄人の異裝徒が、それぞれ何と夥しい金銀・香料・海陸の物產を貢ぎものに捧げて、このテイジョの河口をはいつて來たことだらう！　大理石の廣の各國女奴隷・その賣買所と仲買人の椰子の鞭・宗教裁判と火刑廣場の野次馬・海賊來の銅羅と吊橋の轆轤を捲く大男の筋肉――そして今は、不潔と無智と猥雜と、海犬(シイ・ドッグ)の群と考古學的價値のほか何一つ近代文明への關聯を有たないりすぼあ！

世界の隅つこに、これほど地球の進展から隔離された塵埃溜て場が現存し得やうとは、たしかに何人も想像しない一驚異であらう！　その雜然たる廢頽詩と、その貧窮への無神經と、其の戰慄すべき alien banality と――。

SHIP・AHOY!

かうして改めてあたりを見廻しながら、その晩も僕は波止場附近に張りこんでゐた。何か turn up するのを待つところで。

眞夜中だつた。暗いなかに急に人影がざわざわして、一團の女がしづかに棧橋を下りて行つた。棧橋の端には、物語めいた一艘の短舟(ボウテ)が、テイジョ河口の三角浪に揉られて忍び笑ひしてゐた。訓練ある靜寂と速度のうちに、一同がそれに乘り移ると、そのまゝぼうては漕ぎ出して、碇泊中の船影のあひだを縫つて間もなく海へ消えた。そして暫く歸つてこなかつた。が、歸つて來ると、その女群が同じ沈默と速度をもつてボウテから棧橋へ上り、僕の立つてるまへを順々に通りすぎて町のはうへ消えていつた。いつものびつこの小男が隊長してゐる。今夜も沖を訪問してきた女たち――大きな「？」のなかから、行のあとを見送つてる僕へ、最後に小册をあがつた其の小男が接近し

て來た。

『がた・らい？』

上海英語だ。紳士語では、「燐寸をお持ちでしたらどうぞ」――僕が應じた。

『YA。』

そしてまつち(アロルフオス)を突き出した。

するとび足(リンピイ)リンプ――これはあとから酒場で自己紹介し合つて判つたのだが、男は、Limpy Limp なる呼名に自發的に返事して、つまりびつこ(リンピイ)だつた――は、こゝで一さう、ぴよこんと僕の胸へ飛びつくやうに現れて、それから、もう一度手を伸ばした。

『ガタ・エネ・セガレツ？　HEY？』

今度は煙草だ。はじめはマッチ、つぎにたばこと逆なところに、これも後日追々判然したんだが、愛すべきリンピイの狡才があつた。仕方がないし、それに僕は、すこしでも長くこいつと會話して、出來ることなら其の「夜のをんな舟」の秘密へ一吋でも近づきたかつたから、さつそく「客間の香氣(パフユウム・ドユ・サロン)」のふくろを呈出しながら、

『取れ。但し一本。』

『勿論(コウス)！』

と燐寸を擦つて、そこで彼は、その火の輪のむこうから僕の顔に囁いた。

『HUM！　いよう(ヘロウ)！　お前は毎晩こゝらをうろついてる支那公(チンヤイ)だな！』

『YA。ロン・ウウつて名だ。』いゝことにして僕が答へた。『お前はまた、何時も夜中におほぜい女を連れて海へ出るぢやないか。何しに行くんだ？』

『U-hm！』

リンピイはたゞ頷首いた。が、彼が、いぎりすの「決して歸らない迷兒」のひとりであることは、その語調で直ぐにわかつた。とにかく、ふたりの港の客人ロン・ウウとリンピイ・リンプは、かうしてそこの、波止場(カイス)の夜霧と「客間の香氣」のなかではじめての握手を交したのだ。

ぱふ・ぱふ・ぱふ――暫らく默つてたのち、煙草のあひだからリンピイが訊いた。

『何してる今。』

『ME？』

『YEA。』

『なんにもしてない――煙草をふかしてる。』

ぱふ・ぱふ・ぱふ――and then,

『何處から來た。』
『ME！』
『YEA。』
『支那から。』
『英語は？』
『波止場の英語なら、YEA。』
『GOOD！ どうせお前なんか何處へ行つたつておんなじなんだらう。どうだ、俺んとこへ來て手傳しないか。』
『ME？』
『YEA。』
『何を――？』
『しつぷ・ちやん。船上出張商人だ。知つてるだらう？』
　ぱふ・ぱふ・ぱふ――何と便利に自ら持ち上りかけた大MYSTERYのふた！ 眼の眩む喜望が僕の發聲機能をまごまごさせて、ちよつと口が利けない。リンピイはさつさと承諾にさめて、早速踊るやうに歩き出した。僕はついてく。棧橋の話し聲・深夜の男女の雜沓・眠つてる倉庫の列・水溜りの星・惡臭・嬌笑。Eh？ What？

窒息しさうな濃いけむりのなかに、海の陽やけで茶褐に着色された無數の顏が、吹鳴つて笑つて呪詛してゐた。鋼鐵の指金具とあき壜は星形の傷痕をのこす。頰へ受けた刃は、古くなると苦笑に見えるものだ。マラガ生れの水夫長、パナマ運河コロン市から來た半黑の三等火夫、濠洲ワラルウの石炭夫、ジブロウタの倉番、聖ジヤゴの料理人、ロツテルダムの給仕、各國人種から成る海の無産者と、大きな喧嘩師と敏捷なちびと、留索栓の打撲傷と舵手甲板の長年月と、そしてそれに、荒天の名殘りと遠い港のにほひ、強い顎と蕈のやうな耳、桐油外套に赤縞のはんけち――海岸通りサン・ジユアン街の酒場は、深夜の上陸船員で一ぱいだつた。
　そこへ、リンピイと僕が半扉を押したのだ。
　すると一度にこの異國語の tenor crescendo だ。どこの貨物船の乘組員にも特有のストツクホルム産炭油の香だ。それが837の感情的な水平線と、snappy な、岬ホウンの雲行きを思はせて、この狹い酒場内部の色のついた空氣を滅茶苦茶に掻き亂してゐる。
　呵々大笑するふとつた酒神、習慣的に一刻も早く給料袋をからにしなければ安心出來ない船員たちのむれ！
正面にずらりと瓦斯タンクのやうな大樽が並んでる。その金

具の輪が暗い電燈に光つて、工場地帶行き電車みたいな混み方！ 數人の酒場男(タベルネイロ)と酒場女(タベルネイラ)が、この、戰時そのまゝの騷ぎを引き受けて、酒をつぐ・グラスを拋る・金をひつたくる・お釣りを投げる・冗談を言ひ返す・惡口もかへす・喧嘩の相手もする・自分も呑む。酒はきまつてる。燃える水(アグワルデンテ)。言はゞ、ほるつがる燒酎。一ぱい金2仙——どいす・とすとんえす——也。

壁は、十九世紀末葉の雜誌の口繪で張り詰めてある。何といふうら悲しい明け方の夢の展覽會！ 蜂のやうな腰の馬上貴婦人と頰ひげの馬上紳士。乳を出して笑つてるボンネツト。大帆(バァカ)前船(ソテン)難航の圖。花の代りに美人の顏が咲いてる繪——これは佛蘭西しやぼんの廣告——寢臺の脚と、そばに脫いである男女二足の靴だけを大きく出した寫眞——靴屋の廣告——「ＯＨ！」と題したのは、女が向ひ風に裾を押さへて困却してるところ。豚とダンスしてる坊さん。錨をあしらつた老船長の像。萬國々旗一覽表。隣りはあめりか煙草 三 の廣告畫。

郵便棚も置いてある。この酒場へ賴んで、こゝを郵便の當所(アドレス)にしてる各國の船乘りが大分あるとみえる。寄港のたびに立ちよつて受け取る仕組なんだらう。手紙や葉書がたくさん挾んである。混雜に紛れて、僕は郵便棚へ近づいて二三枚手に取つてみた。古いのばかりだ。手垢とごみで眞黑くよごれてる。が、これは一たい何うしたといふのだ？ 酒場の常連はきまつてゐる筈だ。酒番や主人に顏の知れた船員ばかりで、あす出港といふ晩なんか「おい、これからちよつと地中海まはりだ。今度はひと月位だらう。手紙が來たら賴むぜ。」「承知しました。氣をつけて行つて來なさい。よそであんまり變な酒を呑らねえやうにね。」そして歸港するや否、不格恰な既製服に、新しい安靴に久しぶりの固い土に足を痛めた彼らが、若いのも年寄りも、みんな何んなに期待に燃えて、この酒場(タベルナ)の郵便棚のまへに犇くことであらう！ すると、來てる來てる！ 戀人から妻から娘から老母から！ 眼白押しに立つて、一枚々々熱心に自分への宛名を探す海獸たち——僕もかうしていまその一人を裝つてるんだが——この時は、彼らも完全に良人であり父であり息子であるだらう！ それだのに、みんなに搜し殘されて、こゝにこれだけ溜つてるのは何ういふわけだ？ これらの宛名の主は、船出したきり歸つてこないのか？ 何と、船乘りへ屆かない手紙の不氣味さ！ 暗い海底(マアル・テネブロソ)へは轉送の仕やうもあるまい。

が、港の酒場はすべての不可能を信じてる。じつさい、七年前に笑つて地中海へ出て行つたあの男、一八九三年のＸマスの彼——それらがひよつこり何時あらはれないとは、who could tell?だからからして、そつくり保管して待つてるんだらう

が、封筒も葉書も、それから毎日一應出入りの客の調べを受けて眞つくろだ。

何といろいろな人生を默示する、この、受取人のない酒場の郵便！　陸の聲が、こゝ「大地の果て」でぷつつり切れてるのだ。素早く僕は宛名に眼を通し出したが、急いでるのと、何しろどれもこれも非道い惡筆のうへに、おまけに會體の知れない外國語がおもなので、名前だけでも容易に讀めない。ジョセフ何とかといふ男へ、白耳義アントワアプのＫＣＮ――これだけでは差出人の性別はわからないが、「御存じより」と言つたところだから先づ女とみてよからう――から三通來てゐる。三つとも１９２６年で、これはわりに新しい。ほかに「サルデニア島トルトリ」と投函地名だけ判讀出來たのが一本、他は書體がくしやくしやしてゝ何うにも手に負へない。そのうちに、英吉利Hull港の繪葉書がひとつ出て來た。Mr. Arthur W. Cole へ宛てたもので、差出人の名は書いてないが、なくても解る間柄なんだらう。文言も、男の字で大きく Souvenir と走り書きしてあるだけだつた。

入口の横に、黒板が一枚立てかけてある。下級船員専門の桂庵の募集廣告だ。が、ちつとも希望者がないとみえて、貼り出してあるのは、求人の部ばかりである。水夫・火夫・石炭夫。なになに號・なになに號・なになに號。高給・高給・高給。別待・特遇・履歴不要。なかに一つ「大工をもとむ」と特別大書してある。この黒板面はいつも變らないとみえる。何年にもこのとほりで、消すこともないらしい。あきを埋めて、一めんに船乗りの楽書きだ――。

リンピイの聲が、僕を酒臺へ呼び戻す。

けれ・うま・ぴんぎにあ！

「一ぱい飲まねえか（ケレ・ウマ・ピンギニア）」――一杯てのは「ぴんが」なんだが、そのピンガに愛稱をあたへてぴんぎにあ――みんな仲よくこの燃える水（アグワルデンテ）のピンギニアをあほりつけてる。

お！　いつぺえやりねえな

けれ・うま・ぴんぎにあ！

ありがてえ！

おぶりがど！

おぶりがど！

おぶりがど！

節くれ立つた指に幾つも並べて嵌めた十八金の大指輪――これは伊達ばかりぢやない。めり拳を喰はす時の實用のため――が、あつちこつちに毒々しくちらついて、ぺつと唾をして執てこす

りながら——。

えつ！　腹の蟲を殺してやれ！

誰もかれも、この呪文を合圖に、威勢よく「燃える水」を流しこむのだ。さうだ！　この強いやつで腹の蟲を殺せ！

えつ！　ぱら・またある・う・びつしよ！

えつ！　ぱら・またある・う・びつしよ！

とん、とんと酒臺に鳴るからこつぷの音。

——から明るいところへ出てみると、リンピイ・リンプは若いくせに老人だつた。全く、ちよつと年齢のはつきりしないリンピイだつた。ひどく老けても見えたし、さうかと思ふと可成り若いやうでもあつたが、たぶん卅前後らしかつた。よれよれの茶の背廣を着て、洋襟のかはりに首のまはりに靑い絹を結んで端をだらりと垂らしてるのが、恐しく前世紀的でもあつたし、また觀察によつては、領地巡視中の英吉利貴族といつた場外れの効果がないでもなかつた。じつさい、いさゝか「ゴルフ・乘馬・午後の茶」の筆觸をつけて古風に氣取つてみたいのが、この潮臭い無賴漢びつこ・リンプの趣味らしかつた。しかし、その不幸な歩行機關の支障と、あまぞん特産ポケツト猿みたいた小さな顔と、鼻から口へかけて間歇的にひくひくする筋肉痙攣と、惡疾のため舌の絡む語調とが、可哀さうな彼の努力のすべてを裏切つて、親愛なリンピイ・リンプを、矢つ張り只の「りすぼん埠頭の幽靈」びつこ・リンプ以上の何ものにも買はせてゐなかつた。つまり事實は、彼リンピイは「港の Old Man」に過ぎなかつたのだ。

船でおやぢと言ふと船長のことだ。そして、船から上つて、陸でおやぢさんといへば、それは直ちにわがリンピイのやうな港の賣春宿の御亭主を意味する。だから、リンピイは若いくせに老人だつた。

PIMPといふ一つの職業がある。

リンピイはそれに從事してゐた。

何かと言ふと、これは、不思議に女性の肉だけを食べる肉食人種のことで、妻だの娘だの情婦だのの肉を切賣りして衣食してゐる。もつとも、こんな身邊の女肉だけぢや需要に應じ切れないから、そこで、あらゆる方法で女をあつめるんだが、この專門の賣春婦を養成して一定の契約のもとに各地へ配給する問屋制度に、昔から有名ないはゆる白奴交易路なる秘密工業がある。と言ふと、莫迦に十九世紀的にひゞくが、この事實は、いまも國際的「底の社會」の暗黒を貫いて立派に存在してゐる。現に、國際聯盟の「世界悪」退治運動の重要項目の一つに上げられてゐるくらゐで、パンフレツトを發行したりして防止に

努めてるけれど、いくら國際聯盟あたりが躍氣になつて騒いだつて、それは單に其の實在を公表するにとゞまり、何ら直接剿掃の資にはなるまい。と思はれるほど、歐羅巴中の都會、ことに港町における賣春婦の跳梁はおびたゞしいものだ。が、これも、古今東西を通じて、人間の集まつてるところには厳然たる一つの必要らしいから先づ仕方があるまいとして、個人的動機から落ちるところへ落ちてく女はそれでいゝだらうが、そもそも白奴交易なるものは、PIMPの元締が映畫的に活躍して、夜のピキヤデリなんかを迂路ついてるぽつと出の女や、ボア・ドユ・ブウロニユを散策中の若奥さまや、學校歸りにそこらを歩いてる女學生などを甘言をもつて誘拐し、氣のついた頃は、すでに輸出向き商品として南あめりかあたりへ運送の途にあつたりするんだから、これは何うも社會的におだやかでない。だいぶ赤本めいた話しだけれど、知つてる人は知つてる事實である。だからこの白奴交易網に引つかゝつた女の多くは、新大陸の殖民地で其の賣春婦としての教育を卒業する。それがまた市場(マアケット)へ出て歐羅巴へ逆輸入される頃には、いかに彼女らが海一○○○山一○○○の物凄い莫連になつてるかは想像に難くあるまい。僕はこの間の大暗潮に多少 look into する機會を捉へたことがあるから――リスボンでのぴつこリンプとの交渉もその一つだが――この歴史的潜在白奴交易路に關する多くの[illegible]そうどを所有してゐる。が、それらは本篇「しつぷ・あほうい！」とは些少の接續しかないから略すとして――日本でだつて君、不良の相場といへば「飲む・打つ・買ふ」の三拍子とちやんとちよん髷時代から決定してる。この酒・ばくち・女は、歐羅巴でも同じく社會惡の三頭目だが、この頃ではもう一つDOPEといふのが殖えて來て、四つの脅威をなして文明と道徳を襲撃してゐる。そこで坊さん・社會教育家・職業的慨世家――これは何處にでもゐる――がしぢう何だかんだと喧しく言ふんだけれど、これらの邪惡(イヴルス)のかげには「史的に約束された一つの大きな手」が動いてるので、目下急には何うすることも出來ない形だ。事實、すべての社會的破壊作業は國際的に共同戰線を張つてる。近くはこの白奴交易路(ホワイト・スレイヴ・トラフイク)にしても、これは世界的に組織された well known 賣春圏で、リンピイ・リンプのごとき、彼じしんの自覺と無意識とを問はず、その有機網の末梢神經を構成するほんの一細胞に過ぎなかつた。

それにしても、女肉を常食とする點で、リンピイもPIMPはぴんぷだつた。

で、彼が何んな猛惡な――あるひは罪のない――「ピンプ」だつたかは、その女しつぷ・ちやんの手腕を見ただけでもおよ

そ判斷のつくことだが、そのうへ彼は、妻のマルガリイダ淡さんから振り當てられてる手引人としての仕事も、決して忘れてるわけではなかつた。

が、何うしてリンピイが「客を引」いたのか、僕は知らない。とにかく、僕と彼のあひだに支那公(チンキイ)ロン・ウウのしつぷ・ちやん契約が目出度く成立して、二人が酒場(タベルナ)を出たとき、おどろいたのは、六七人の船員たちが自進的に燃焼水(アケアレデンテ)に別れを告げて僕らといつしよに歩き出したことだ。

だから、リンピイを先に妙に默りこくつた一行がどんどん山の手(バイロ・ノルド)——高い區域——の坂を登つて行つた。マルガリイダの家へ。

あとが大變なんだ。Eh What?

6

「マルガリイダ」の家の red hot stuff がテレサといふ佛蘭西女であることは前にも言つた。テレサは、北極熊みたいな白い大きな身體と、いつもいま水から上つたばかりのやうな、濡れた感じの顔とをもつてゐた。その、安ホテルの二人用寢臺(ダブル・ベット)のやうに大々的に廣漠としたところが荒つぽい船員達の好みに投じたとみえて、ぽいろ・あるとのマルガリイダの家は、何時行つてもまるであの聖ジュアン街の酒場のやうに、そこには、7 seas からの男たちと、その留索栓(ビレイング・ピン)の打撲傷と舵手甲板の長年月と、難航の名殘りと遠い國々のにほひと、怒聲と罵聲と笑聲とがたのしく滿潮してゐた。バイロ・アルトは、りすぼんの街が羅馬の眞似をして七つの丘——いまは八つにふえてるが——の上に建つてる其の一つで、ちようどテイジョ河口の三角浪が大西洋の水と爭ふ港のうづまきを眼下に見下ろしてゐた。夜など、しつぷ・ちやんの僕がすこし沖へ漕ぎ出ると、この山の手(バイロ・アルト)——「山の手」と當て字してみたところで、いはゆる山の手のもつ閑寂な住宅地氣分とは極端に緣が遠いが——にちかちかする devil-may-care の紅燈と、河港をへだてゝ、むこう側の山腹、慈悲(ピエダアレ)の村に明滅する靜かな、家庭的な漁村の灯とが、高臺同士で空の下に一直線にむすびついて、へんに泪ぐましい人生的對照をつくり出してゐた。こんなふうに、棧橋廣場の一ぱうが胸を突く急坂になつて、そこを昇り詰めた一帶がバイロ・アルトの私娼區域——と言つても、定期的に非公式の健康診斷があるんだから、政府の默許を得てる半公娼と稱すべきかも知れないけれど、それがひどく不徹底なものだつたし、その半公娼に伍して倍數以上の私娼が混入してごつちやになつてゐたので、やはり大きな意味では、そこら全體を私娼窟と呼んでよ

つた。じつさい一くちにばいろあるといへば、それは直ちに「坂の上の娼家横町」を語意してゐた――そして、そこの白つ茶けた建物の窓から、朝夕の出船入船の景色が、まるで大型活字の書物一頁を讀むやうに詳細に一眼だつた。つまり、リスボンの出入港は、海事局・水上警察・税關よりも先に、逐一この女魔が丘(バイロ・アルト)の窓に知れてしまつた。釜に火がはいると煙突のけむりが太くなつて、出帆旗は女たちも心得てる。すると、あの男がまた闇黒の海(マアル・テネブロウソ)へ出てくところだといふんで、ばいろ・あるとの一つの窓で、ひとりの女(ブウタ)が、ひよつと浮んだ彼の體臭の追憶にふけつてゐやうといふものだ。船乗りはみんな戀巧者である。一度會つた女に決して忘れさせはしない。だから、黒地に白の出港旗を見つめる女たちの眼には、めいめいの戀人を送るこゝろもちがあつた。が、出帆の時は、これでまだいゝ、新入港の船がテイジョ河口の三角浪を蹴立てゝ滑りこんで、山の手(バイロ・アルト)の家々の窓掛けを爽やかな異國の風がなぶると、週期的活氣・海と陸との呼應・みなとのざわめきが坂の上の町一帶に充滿した。彼女らはゆうべの顔へまた紅をなすり、七面鳥マルガリイダ婆さんは一さうがんがん喚いて家ぢうを駈けめぐり――さあ　お部屋の用意は出來てるかい？　何でもいゝから花を取り替へてお置きつて言ふのに！　お船の人は家庭らしい空氣が好きなものだから。それから掃除！　リンピイ！　おや！　リンプ！　何うしたんだらうまあの人は！――しかし、テレサにだけは急に眼立つて御機嫌を取り出し――テレサや、今夜も强い好い人がわざわざ海を越えてお前んとこへ來るんだよ。テレサや、お前は一たい、帆桁のやうな水夫さんか、手の白いボウイさんか、それとも黑耀石みたいな印度の釜たきさん(ソファイマン)？　何んたのが一番好きでしたつけ？　わたしの可愛いお猫さんのやうに、さ、お湯をつかつて仕度をしませう――といつた調子なので、テレサはテレサですつかりふくれ返つて、その巨大な北極熊みたいな全身へ萬遍なくおしろひを叩きはじめる。この裸體のお化粧は、何もテレサひとりの個人的趣味ばかりではなく、「マルガリイダの家」の一 attraction として大いに事務的必要があつたのだ。

テレサは、僕の知る限りにおいてすこし「二階がお留守(ノウバテイ・アツプステアス)」――頭がからつぽ――だつた。さもなくて、あゝのべつ幕なしに甘いもの――名物こんぺいとう・乾し無花果・水瓜の皮の砂糖煮等等等――を頬ばつてゐられるわけがなかつたし、そのため、今にもぱかんと音がして破けさうに肥つてゐたが、其のうへ、恐しいまでにあらゆる無恥と醜行に慣れ切つてゐて、いかに同情をもつて見ても、この女にはいさゝか病的に缺除してゐるも

のがあつた。それでも、港々の賣春婦はみな彼ら社會の常識だけは心得てゐて、自分ではちやあんと佛蘭西生れと名乘つてゐた。そして、何と素晴しいふらんす語をこのふらんす女テレサが話したことよ！　「めあすい」とジョンテイ・ミニヨンとこむさとー　これでも判るとほり、彼女は生え抜きの――流行雜誌のもでると、一九二七年度の巴里の俗歌以外には佛蘭西なんかその smell も知らない――ほるつがる人で、現に「太陽の岸」サン・ペドロの村はづれで馬の爪へ鐵靴をはかせる稼業をいとなんでる父親が、二週間に一度のわりで小遣ひをせびりに出市してゐた。が、何故か、賣春婦といふ賣春婦が、賣春婦になると同時にふらんす女――ことに巴里から流れてきた――をもつて自任し出すんだらう？　眼の黒い女・碧い女・茶いろの女。髮の毛の黒い女・それほど黑くない女・むしろ赤ちやけた女。要するにすべての女が、すこしでも外國めいた點地があると人工的にそこを强調し、どう探しても無いやつは無理にも作つて――自由な自國語を商賣のときだけ御叮嚀に不自由らしく片ことで話したりなど――どれもこれも、先天的器用さをもつて佛蘭西うまれに化けすましてしまふ。だから、ふらんす以外の土地で、賣春婦といふと、片つぱしから自稱ふらんす女・巴里をんなにきまつてる。近いためしが、このりすぼあのバイロ・アルトだけでも、テレサを筆頭に、何と多くの葡萄牙の女が、チエツコスロヴアキアの女が、波蘭の女が、ぶるがりあの女が、揃ひもそろつて佛蘭西生れ、巴里うまれであつたことよ！　この賣春婦のふらんす歸化の心理には、いくぶんそこに、じぶんの行爲によつて自國の名譽を傷づけたくないといふ少しの愛國的作用も働いてることだらうし、それに、外國の女となると、べつの現象に對するやうに男の好奇心が沸きたつところをも、彼女らは經驗によつて捉へてゐるであらう。第一、遠い國から來てると言へば自然そこに「告白物語・淚の半生」――これでもじぶんも元は「銀の匙を口」に巴里の名家に長女と生れた身の上だつたが、廿才の春に、十も年上のゆだや人が黃金と將來と結婚指輪とをもつてわたしの人生へ侵入してきた。さうしてあの退屈な「爐ばたの生活」が何年かつゞいたのち、ちようど倒の結婚倦怠期に當つて the War broke out。毎日々々隣近處の若者が戰線へ消えて、重い靴の音が、長いながい列を作つて窓の下につゞいてゐた。戰爭とそのあとの、あの誰でもが許めた恐慌。良人の商業は犬へ行つた。紙幣を燒いて暖をとつた。その最中に夫アイザツクの病氣と死！　殘されたわたしは何うして食べたらよかつたらう？　そのうへ、いつも黒はわたしによく似合ふ。洒落た喪服姿が完全にわたしを共のころ巴里をうづ

めつくした「大戰未亡人」のひとりにして、戰後のゆるんだ氣もちのなかで、男たちの同情と誘惑の手が一時にわたしに集まりはしなかつたか？　もちろん當時わたしは、この地球上にあなたのやうな親切な方が自分のために存在しやうとはDREAMにも知らなかつた。And the result? Here I am. Just look at me now!——なんかと言つたやうな、大同小異千遍一律の身の上ばなしも出來るわけで、事實、毎夜々々の寢臺で、そも何人のぷうたが、そも何人の異國の水夫に、めいめいこの「あわたゞしい戰時の巴里」を背景に最後は必ず「親切なあなたにもつと早く會はなかつた」ことを殘念がる打明け話しをうちあけたらう！　この浪漫さ！　こゝは何とあつても佛蘭西女でなければ出ない色あひだし、おまけに、ふらんすの女とさへ言へば、妙に扱ひの上手な經驗家のやうに一般に信じられてゐるので、そこでみんな爭つて勝手に佛蘭西の國籍を主張するんだけれど、おかげで、婦人用手袋と香水と葡萄酒と賣春婦だけを一手專賣に輸出してるやうに思はれてる肝心のふらんすこそ好い面の皮だ——もつとも、ほんとに佛蘭西製のこの種の豪の女が世界ぢうに散ばつてることも滿更うそぢやあないんだが、その多くは、女中つきで倶樂部なんかに出沒するグラン・オペラ的な連中で、このぽるとがる國リスボンのばいろ・あるとあたりで船乘りの相手をしてる「ふらんす女・巴里つ兒」はテレサをはじめ、このとほり十中の十までFAKEである。へんな話しだが、こんなことで國際聯盟あたりが佛蘭西に嫌味を言つたりするんだから、ふらんすにとつては飛んだ迷惑だらう。だいたい佛蘭西の女、ことに巴里女（パリジャンヌ）なんて、そんな原始的に荒つぽい冒險家ぢやないんで、たとへば巴里市内の娼婦だつて、大部分はチエツコスロヴアキア・波蘭の女・ぶるがりあの女・葡萄牙の女なんかなんだが、それらのすべてが、この「自稱ふらんす女」と同一の心理と理由から、巴里では、言ひ合はしたやうにことごとく「西班牙女」と自己廣告することにきめてるから、面白い。つまり巴里の賣春婦で眼の黒い女・碧い女・茶色の女。髮の毛の黒い女・それほど黒くもない女・むしろ赤ちやけた女。要するにすべての女が、すこしでも外國めいた點地（タツチ）があると人工的にそこを强調し、何う捜しても無いやつは仕方がないから無理にも作つて——自由な佛蘭西語を商用としてだけ御叮嚀に不自由らしく片ことで話したりなど——どれもこれも、先天的俳優能力をもつて器用にすぺいん生れに化けすましてしまふ。だから佛蘭西の名譽にとつちやあ、こゝでまあ幾らか帳消しになる勘定かも知れない。BAH!

ところで、問題は「ふらんす女」テンサだが　。

そのテレサが、身體ぜんたいに白粉を塗りこむ。

何のためにそんな莫迦なことをするかといふと、「マルガリイダの家」では、船員を招いて博奕をさせ――これはいつも船乘りらしい簡單な歌留多の勝負にきまつてたが――そして單に賞品として、勝つた男に一晩のテレサをあたへるといふ組織だつたから、言はばテレサは、この場合一個の物品に過ぎない。したがつて、それを目的に金を賭けるくらゐだから、客のはうも前もつて詳しく現物を見ておきたい。なんかと權利を主張するかも知れないし、マルガリイダ婆さんはまた、はじめに調べて貰はないと氣が濟まないなどと體のいゝことを口實に、じつは、たゞテレサの皮膚で一さう男たちの賭博心を焚きつけるための手段にすぎないんだが、その夜の客が詰めかけてるところ、からだ中に化粧をしたテレサを眞つぱだかにして、「これで御座います。HO・HO・HO！」なんかと挨拶に出すのだ。恐しいまでにあらゆる無恥と醜行に慣れ切つてるテレサが、その白熊みたいな莫大な裸形と濡れた微笑とを運び入れて、そこで明光のもとに多勢の船員たちから何んな個人的な下檢査を、平氣で、AYE！　むしろ大得意で受けることか。そして唯々諾として如何なる姿態（ポウズ）をこの半痴呆性の女がとつて見せるか？　つぎにまた、それによつて刺激された船乘りたちが、何と、この女を所有するためなら「血だらけな（ブラッディ）」給料の二三個月分ぐらゐ前借しても構はない旺盛さをもつて、ばくちに熱中し出すか――それは電燈と、偉大な舞臺監督マルガリイダと、and GOD・KNOWS！

「マルガリイダの家」は、ばいろ・あるとの一ばん奥まつたはづれだつた。白つぽい石壁に赤瓦を置いた、そこらに多い建物のひとつで、這入ると、正面の廊下を挾んで左右に幾つも小さな部屋が並んでた。それがみんないはゆる歌留多場だつた。何んなにお客が來ても、夜中の二時まではお酒を賣つて――これがまたマルガリイダの儲けだつたが――釣つておいて、二時かつきりに、例のテレサのお目見得式を擧行する。それが濟むと直ぐ、マルガリイダが「賭け札（チップ）」を賣り出す。これは赤・白・黑の三種に塗られた圓い木片で、赤のが五十エスクウド――約五圓――白は三十エスクウド――さつと三圓――一圓どこの十エスクウドのは黑の札（チップ）だつた。つまり、どこの博奕場とも同じに、直接現金でやり取りするんではなく、一應はじめに金をこの「賭け札（チップ）」に更へて、これで勝負を爭ふのだ。そしてあとで清算してそれぞれまた現金に直すわけだが、こゝでは、いくら馬鹿勝ちしたつて一文にもならない。そのかはりテレサを取る。言はゞ、金を札（チップ）に換へてやつた額だけ、そつくり其のまゝ

家の所得なんだから、誰が勝たうが負けやうが、あとは卓子の上を色付きの木片が動くだけで、マルガリイダ婆さんは最初から取るものはすつかり取つて大安心なのだ。ある者は五十の赤を二枚、または三十の白札で百五十エスクウド分、或ひは黒だけ五枚で五十なんかと、どんなに細かく千切つても大きく纒めても、札は買へる。が、一度札にかへた金はすぐ婆さんのふところへ這入つて、それを資本に勝つてテレサを獲ない以上、この家のそとへ持つて出たつて勿論何處へ行つても金にはかはらないし、お婆さんも、札の買ひ戻しだけは金輪際しなかつた。すると、それにしては、五圓・三圓・一圓なんて安過ぎて大した儲けにもならないやうな氣がするが、何しろこれは下級船員間のはなしだし、また、毎晩なかなか人數が多い――これにはリンピイの客引きもあづかつて力がある――のだから、はじめ二時にどかんと「賭け札」を賣つた金だけでも、往々にして、この社會ではさう莫迦にならない高に上ることも珍しくない。それに、負け出してくると、博奕本來の興味と性質から何時の間にか熱くなつて追つかけはじめる。だから中途で二度も三度も立つて、ぽけつとの底を集めたので新しい札を買ひに來たり、なかには、飛び出してつて波止場附近の酒場に友達の顏をさがしたり、船へ歸つて金を工面してきたりするから、何度でもそれらに、金と交換に賭け札を渡してるうちに、一夜の入金にしたところで一時としたなかなか大きくなる。テレサのことなんか忘れて、ばくちそのものへせつせと注ぎ込む人間がマルガリイダには何よりも有難いのだ。かうして船員の金はお婆さんへ移り、ほかでは價値のない木札だけが男から男へ取引きされてるうちに、單純なかるたげいむだから興亡は轉々として、やがて決勝時に近づく。五時だ。この五時になると、景氣のいゝものも落ち目のやつも一せいに手を停めて、各自持ち札の總計をとらなければならない。赤一枚を五十エスクウドにかぞへ、白が三十、黒が十のこと札面のとほりだ。で、全部の部屋の全部のテエブルを通じて、Aが七百八十二エスクウドで最高位、四百十七のBが次點――なんてことになるんだが、どうせお金で返つてくるんではなし、女もテレサ一人なんだから、そこで、其の夜の勝ち放しAが、テレサの待つてる二階の一室へ上つてくだけで、次點以下はいつも一さい切り捨てだつた。この、負けてゝも勝つてゝも、正五時A・Mをもつて打ちきり、そのときの札數ひとつで最後のTALKをすることには、さすが博奕に苦勞してる連中だけに、案外さつぱりして、出さうなもの言ひもあんまり出なかつた。それどころか、なかには、一番勝ちの札をばらりと床へ撒いて、次點者にテレサを讓つてさつさと出て行つたりする

見上げたSPORTYも現れたりして、この「マルガリイダの家」は大いに色彩的(カラフル)な人生の讃地だつた。もつとも、ときどき五時の決勝になつて捨つたことを言ひ出す解らねえ胡桃(クラムズイ・ナッツ)も飛びだしたけれど、そんなのは大概自治的に客のあひだで押さへつけたし、すこし騒ぎが大きくなると、マルガリイダの眼くばせ一つで、跛足(リンピイ)リンプが大見得を切つて例外なく綺麗に取つちめてゐた。

そして明け方の五時から正午まで――十二時になるとお婆さんが二階の戸を叩打(ノック)して男を追ひ出す――かうして、この空博奕に勝つたやつが、白熊テレサと彼女の over voluptuousness を専有し満喫するのだ。甘い物のげつぷと一しよに、いつもの「ふらんす女・涙の半生」を機械的に繰り返しながら、はなし半ばに怒濤のやうな鼾をかき出す可哀さうなテレサ！　何といふ呪はれた大健康と、悲しいまでの肉體の無關心(インディファレンス)であらう！

垂れたかあてんから光る海風が流れこんで、リスボンは今日も輝かしいお天氣だ。

この坂の上の魔窟町(バイロアルト)へ最初に訪れる「ほるつがるきぬぎぬ情緒」は、早朝から眞下の裏街を流して歩く裸足の女魚賣りの呼び聲である。

　あう！　かしゆうれ！

といふのは小鯛。

　サアーーールデエイニアス！

と聞こえるのが鰯。

　えいる・えいる！
　むしりおうゝん！

は蛤の大きなの。

7

　けえいんてす！
　い・ぽうあす！

これは「HOT・&・GOOD！」で燒き栗屋の賣り聲だが、そこで、朝のりすぼん港の日課的大合唱は――。

　お！　かしうれ！
　さるでえにあす！
　えいる・えいる！
　むしりおゝうん！
　けえゝいんてす！
　い・ぽおうあす！

AHA！　すると、猫・猫・猫！――何とまあ古猫・仔猫・野良猫の多いLISBOA！に其の猫の一匹のやうな灰色にのろ臭

い一日の運轉が開始されて、無自覺によごれた群集が街角に立ち話しゝて通行の邪魔をし出し、無自覺な Rua Aurea で銀物屋が鐵の折戸を繰りはじめ、傾斜を這ふ電車と町なかの大昇降機に無自覺な朝陽が光り、旅行者に乞食と子供が群れて乞食よりも子供のほうがしつこく一文(センテヴォ)をねだり、そこへ富くじ賣り(ロテリア)が札を突きつけ、軒いつぱいに布片地(きれぢ)を垂らした雜紗屋の店が何町もつゞき、市場をさして豚の列が大通りを追はれ、弱さうな兵卒がより弱さうな士官にだらしのない失敬をし、こわれたTAXIが息を切らして黄色い風を捲きおこし、この奇蹟に驚天動地して狭い往來に雜沓が崩れ立ち、それを見物して巡査はたゞにやにやし、その巡査へ現政府反對の八百屋組合からの袖の下が往き屆き、犬は人を嗅ぎ、植物ばほこりを呼吸し、RADIOの鐵聲に通行人の全部が足をとゞめ、業病と貧困の男女から異臭が發散し、青繪の模様陶板(タイル)を張つた無味きわまる住宅建築に教養のない顏が出入し、この、大陸の「東部區(イースト・サイド)」! 地球上のめにるもんたん! そして、ふたゝび猫・猫・猫――何てまあ宿無し猫みたいな人間と、人間のやうな棄て猫とがじつに仲好くうようよしてる無秩序そのものの古沼(スワンプ)LISBOA!

だから、何も山の手(バイロ・アルト)とは限らない。すこしの冒險心をもつて、夜そこらの坂に沿ふ露地を縫つてみたまへ。くわへ込みの木賃宿 hotel para pernoitar の軒燈がなゝめによろめいて、ちようど理髪屋みたいな、土間だけの小店が細い溝(どぶ)をなかに櫛比してゐる。そして、その一つ一つの入口に、今朝はだしで魚を呼び賣りしてたやうな女が、それぞれ木綿レイスの編み物なんかしながら客を待つてるのを見かけるだらう。裸足と言ば、つい先日まで、漁師やその女房子供は、天下御免にはだしで歩道の石を踏んでたものだが、そこへ急にお達しがあつて、以後裸足嚴禁、違反者には罰金として鰯何十匹を科するなんてことになつたので、この連中があわてゝ靴をはき出したまではいいものの、ところが、何しろ生れてはじめて穿く靴なので何うも脱げて仕やうがない。おまけに、考へてもみたまへ! 固い動物の皮で石の上を歩くんだから耐らない。すつかり足を痛くしちまつた。それで、この魚賣りの女たちが、巡査を見かけ次第穿く用意に、手に靴をぶら下げて街上に立つてるところが新聞雜誌の漫畫に出たり、寄席の材料に使はれたり、當分賑やかなリスボアの話題だつたが、こんなやうな型の口髯の女まで、夜はこゝらに出張つて來て、醉ひどれの水兵でも掴まうと希望してるのだ。人が通ると、レイス編みを中止して何か呪文を唱へる。金十エスクウドの相場。戸口からほんの二三歩むこうに敷布みたいな白い幕が引いてある。そのかげに寢臺があるらし

い。客がつくと幕をはぐつて奥へ入れる。燈油に照し出された小さな土間だ。申しわけにちよつと幕を引くばかりで、もとよりおもての戸なんぞ開けたまんまである。かゝいふ家が、蜘蛛の巣のやうな露路うらにぴつしり寄生してゐる。ぱいろ・あるとよりは、また一段下の私設市場だつた。

海岸へも遠くなかつた。夜の波止場ではやはり各國船員の上陸行列に酒精が參加し・林立するマストに汽笛がころがり・眠る倉庫のあひだに一對づつの影がうろうろし・惡罵と喧嘩用具が素早く飛び交し・ふるいＩＮＫの海をしつぷ・ちやんロン・ウウの小舟(ボウテ)が撫でまはり・あらゆる不可能と包藏と神秘の渦——ＹＥＳ、港だから、毎日船がはいる。そのため來る夜もくる夜も、海岸通り聖ジュアンの酒場(タベルナ)と山の手(バイロ・アルト)「マルガリイダの家」にしこたまお金が落ちて、僕はリンピイの鞄と支那人の顔を提げて新入港の船へ通ひ、そこへ、あとから夜中にリンピイのをんな舟が漕ぎ寄せ、僕の受け持ちの商品——それぞれにリンピイの細工が加はつてる日用品・タオル・石鹸・歯磨き・ないふ・靴下の類——は、彼がじぶんでやつてゐた時と同じに、小賣的商才の皆無な僕なんかが口を利く必要もないほど、それ自體に speak して面白いやうに賣れて行つた。ほんとに面白いやうに賣れていつた。この、僕の「しつぷ・ちやん」の本旨は、これに事よせてリンピイの先達をつとめ、斥候としての報告さへすればいゝだけなので、持つてく日常品なんかちつとも賣れなくても困らないんだけれど、それが、妙なことには、値段が高いにも係はらず、何時もどの船へ行つても、翼が生えて飛ぶやうに賣れて、僕は必ずからの鞄と、反比例に充滿した財布とを作れて陸へ歸るのがつねだつた。そして、リンピイの女肉船も、かへりはきまつて海のむこうの見慣れないお金で、毎夜の舟あしが重かつた——。

では、何うして石炭みたいに無口な支那公(サンキイ)の僕でさへ、とより其の僕に關係なく、リンピイのしつぷ・ちやん商品はそんなに賣れたか？　それほど自力で捌けて往つた手品の種は？——何でもない。

1　マルガリイダに內證で何枚寫したものか、リンピイは、品物の一つ一つに、例の白熊テレサの裸體寫眞や、それから、テレサと黒耀石のやうな印度人の火夫との春畫しやしんやなんかを上手にひそめてゐた。タオルには折つたあひだへ、石鹸や歯みがきは包み紙に、小刀(ナイフ)には柄へ飾り、靴下はなかへ落し、その他の小箱類には蓋の內側へ貼りつけたりして。

2　鷄の交尾してる小さな燒物。一種の護符的(タリスマン)置きもの。これは巴里のサクレキュウルのそばでも賣つてるが、じつは日本

出來である。何うやら、どんどん日本から輸出されてるらしい。

3　用便中の婦人の像。小指のさきほどの大きさ。同じく「好運呼び（ポルト・ボンヌウル）」のお守り。ブラセルの産。

4　惡魔の拳（フカ・ド・デアボ）。これは有名な葡萄牙の國産品で、やはり迷信的な厄拂ひのひとつだ。握りこぶしの人さし指と中指のあひだから拇指のあたまを覗かせたもので、形は小さい。女中も賣春婦（プウタ）も奧樣も紳士も、女は首から下げ、男は時計の鎖へつけたりしてしぢう持ちあるいてる。そして雨が降つても風邪を引いても犬が吠えても、何かすこしでも氣に食はないことがあると、早速この象形物を突き出して「ふいが・ど・であぼ！」とおまじなひを叫び、これで確實に災厄を防いで當分の幸福を招いた氣になつてる。

なんかとこんなやうな、女氣のない長い海を越えて來た船員たち、迷信好きの彼らが狂喜して手を出すにきまつてるものばかり精選してあるんだから、この珍奇なTALISMANだけでも、全く、これに羽が生えて賣れなければ「ベイブ・ルウスは三振し・カロル親王がルウマニアの王位に就く」わけで、企業家びつこ（リンピイ）リンプの獨自性はこゝに遺憾なく發揮されてる。

さてこの、たがひに獨立し、それでゐて相關聯してる三つの商賣――テレサを取りまく「マルガリイダの家」と、夜中に碇泊船を訪問するリンピイの女舟と、支那公（チンキイ）ロン・ウウとしての

僕のしつぷ・ちやんと――が靜かにつゞいて、何ごともない毎日がりすぼんに滑つて行つた。

が、さう何時までも何事もないんぢやあ約束が違ふ。そこで、面倒くさいからもう手つ取り早くFINISにしちまふとして、ちようどこゝんとこへ、問題の怪異船がるしあ・もれの號が入港して來たのだ。

もしあの時、風がこの船をリスボンの沖で素通りさせたら？　さうしたら、第一この話しはなかつたにきまつてるし、リンピイはいまだにぼるつがるりすぼあ港の滿足せるリンピイだつたらうし、ことによると僕も、いまもつて支那公（チンキイ）ロン・ウウの嗜眠病的假存在のまゝでゐたかも知れない。

思へば、十字路的な出現であつた――this ガルシア・モレノ！

なぜつて君、一つも賣れないのだ。あれだけ飛行するやうに賣れてた、そしてほかの船では矢張り立派に賣れてる――その賣れる理由はすでにわかつた――同じ品物が、このガルシア・モレノ號でだけはうそのやうにちつとも捌けないのだ。誰ひとり手に取つて見るものもない。毎日通つてるうちに、しまひには船中てんで僕を相手にしないで、振り向く者もなくなつた。この、賣れないのは僕のはうばかりぢやなく、リンピイの「女しつぷ・ちやん」なんか、もつと慘めで、何度押しかけてつても手ぎわよく無視されていつも徒勞に歸した。これは僕とリン

ビイにとつて新しい奇現象である。その原因は果して那邊に存するか？　一つこいつを見きわめないでは！　と言ふんで僕はすこし意地にかゝつて毎夜根氣よく出かけてつたものだが、at last、僕とリンピイのまへに投げ出された一大ＭＹＳＴＥＲＹ——公式上、物語の結末は速力だけを尊重する。だから急ぐ。最後に僕が、何とかしてこのがるしあ・もれの號を征服すべき努力と決意のもとに——もう一つ暗轉。

ＳＨＩＰ・ＡＨＯＹ！

血だらけな眺め！　God damn it!

じやこつぷの中途から救はれてガルシア・モレノに甲板した僕と鞄が、ＬＯ！　からまた國際的濱神語を吐き出してゐた。假死した大煙突が夜露の汗をかいて、船料理人の手のポケツト鑵、こつこつこつと鐵板を踏んでる無電技師——やつぱりみんな、上陸番なんか無視して山の手の灯へ逃げてつたあとゝみえて、例のとほり船中はがらんとしてゐた。と思つたのが、これが大へんな僕のまちがひで、こつこつこつ、いつものやうに船艙の端に腰かけて、擴げた鞄と一しよに化石してる僕へ、靴音と聲が接近して來た。

『ＨＵＭ！　いよう！　お前は毎晩こゝへ來てるしつぷちやんの支那的だな？』

事務長だつた。僕は默つてうなづいた。

『何うだ、どうせお前なんか何處でなにをしやうと同じことだらうが、一つ船へ來て働いてみないか。』出しぬけに彼が言つた。『石炭夫だ。高給。別待。本船か？　これから亞弗利加の西海岸を南下して濠洲廻りだ。ＷＨＡＴ・ＳＡＹ？　ＨＥＹ？』

『ＭＥ？』

『ＹＥＡ。』

そして事務長は、こゝで急に慣れ〲しくにやにやしだして

『おい、たくさん女がゐるんだよ、此の船には。船員の過半は女なんだ。共有さみんな。浮かぶ後宮！　Eh what？　たゞね、今んところひとり男が足らない。明朝早くの出帆だから、いま補缺が見つからなけりやあ今夜ぢうに一人「上海」しなくちやならないんだ。支那公、本船へ來いよ。ま、見せてやらう。』

事務長についてつて覗いた乘組員部屋には、上陸したと思つた船員がすつかり納まつてゝ、その夜のめいめいの女——なるほど船乘りらしく男裝はしてゐたが、見たところ美少年のやうな、確かに異性だつた——を相手に、はなはだ貨物船らしくない空氣のなかで平和に談笑してゐた。ＢＡＨ！

半分以上は女が動かしてるガルシア・モレノ！　これぢやありンピイの商賣は勿論、僕の「しつぷ・ちやん」だつて上つたりなわけで、どんな不思議も、解つちまつたあとでは不思議ぢやない。

たゞ、一刻も早くリンピイにこの發見を傳へたいと思つた僕が、ぢやあ、ちよつと荷物を纏めて直ぐ引つ返して來るか

事務長に約束して、いそいでガルシア・モレノを逃げ出したことは、自然すぎるほど自然で、言ふまでもあるまい。

波止場(カイス)でリンピイにこの話しをして、

『驚いたらう？』

と結ぶと、リンピイは何かぢつと考へてみながら、

『うん――。』

妙にうつとりして答へてた。そして、今夜はガルシア・モレノに「上海」――深夜埠頭の散歩者を暴力で船へ擔ぎ上げて出帆と同時に下級勞役に酷使すること――があるにきまつてるから、あんまり遲くまでこゝらをうろつかないがいゝ――と忠告した僕のことばが、いまから思ふと、絶大な啓示として彼を打つたに相違ない。何故つて君、その晩、聖ジュアンの酒場でしこたま燃える水(アグワルデンテ)をあほつて、すつかり「腹の蟲」と自分の意識を殺しちまつた跛者(リンピイ)リンプは、わざとがるしあ・もれの號の上海隊を待つて、眠る大倉庫の横丁にぶつ倒れてゐたからだ。

リンピイは行つてしまつた。船と女と whim を追つて海から海をわたり歩いてるリンピイ！

急傾斜する水平線をしばらく忘れて、内心どんなにか淋しかつたリンピイ！

何處でなにをしてもどうせ同じことなリンピイ！

そこにはマルガリイダもPIMPもなかつた。強い海の The Call と視界外への慢性的な放浪心とがあるばかりだつた。

海から來た彼は、その誘惑に負けて故郷へ歸つたのだ。自發的に「上海された男」なんて、この古いインクの水にとつてもはじめての實見だつたらう。とにかく神様と文明のほかに、また一つリンピイがりすぼあを見すてた。着のみ着のまゝでリンピイは行つてしまつた。暗黒の海(マアル・テネブロウ)へ！

SHIP・AHOY！

海には海だけに棲む獨立の一種族と、彼ら内部の法律と道德と生活がある。この小別天地を積んだガルシア・モレノ號が、ひよいと過失的にこのLISBOAの岸へ觸れて、その拍子にわがリンピイを掠め去つたのだ。僕には、大きな未知のほんの瞥見だけを殘して――。

いま亞弗利加の西を南下しつゝある The Garcia Moreno のなかで、まるで古葡萄牙の民族詩人ルイス・カモウエンスが其の海洋詩LUCIADUSのなかで好んで描寫したやうな、何と途轍もない女護が島の光景がびつこ(リンピイ)リンプを包んでることか――GOD・KNOWS。

――あとには、マルガリイダとテレサと、夜の短舟(ボウテ)の女達と、山の手(バイロ・アルト)の灯と、もう支那人でなくてもいゝ僕と、古猫のやうないかゝりすぼんと、腐つたINKの海・テイジョ河口の三角・浪棧の私語・この眞夜中の男女の雜沓・眠つてる倉庫の列・水溜りの星・惡見・媚笑。The whim？

政界裏面 白眼老夜話

刀吏公記

◇……どうだい、議會は乃公がこの前話したやうに支那問題が一ばんの難關となつたじやないか。民政黨の連中は、例の張作霖の某重大事件の非常に好い材料を仕込んでゐるのでネ、それをタネに例の暴露政策とやらいふ戰法で大にやり度かつたのださうだが、それをやると國際外交の日本の信用がゼロになつて了ひ、對支外交なども型無しになつて了ふに極つてゐるので、そうなると民政黨は賣國黨だと必ずいはれるに極つてゐるので、江木翼なども「惜しい、惜しい」といひ乍ら、遂々中止の方に贊成したワケよ。そこで警備權をせい〳〵大問題にして、少しは内閣にキヅを負はしたやうだが、あれは重大問題の間接射擊で、どうも敵の靴の上から足を突くやうなもので、民政黨の連中にはもどかしくて仕樣がなかつたやうだが、まあ仕方がないさ。

某重大事件では内府の牧野も早くから聞きこんで心配し、御大典で京都に行つた時、わざわざ田中を呼んでいろ〳〵確めたところ、田中は何んとか適當に處置するつもりだと答へたさうだ。そこで田中は議會が始る間際に濱口と床次に會見を申込んで、あの問題は議會では觸れてくれるなと切り出したところ床次は承諾に近い返事をしたが、濱口は「承り置く」と許りで別れたものだ。とに角今の内閣にはあの問題は餘程痛事と見えて、貴族院の方へも大分手を延し居つた。そのやり方が仲仲旨いもので一寸新聞も世間も氣がつかずに居る。

◇……それはかういふワケだ。議會がはじまる前に德川十六代樣が千駄ケ谷の新邸へ貴族院の各派交涉會の連中を恒例によつて招待した。いつもは議長官舍でやるのだが、今年は新邸が出來たから私邸でやるものと思つて委員の連中行つて見ると、政府側からは田中をはじめ閣僚が殆んど皆んながズラリ來て居るので「オヤ」と思つた者も居たさうだ。さうすると十六代樣は例の如才ない調子で、「今日は閣僚の方々も幸ひお暇があつたさうでお出で下されたし、こゝには官舍と違つてボーイも居らないし全く他人に聞える心配のない席だから、お互ひに隔意なくいろ〳〵お話して貰ひたい」と挨拶したさうだ。その中に十六代樣は又立ち上つたか座つたまゝであつたか知らないが、何氣ない調子で、「田中さん、張作霖のことに就いていろ〳〵の噂がありますが、重大事件といふのは一體どんな事ですか」ときいた。すると、田中は待つて居ましたと許り、事細かにその事を說明し、「右樣の次第ですから國家のため議會の問題にはして下さらぬやう」といふ意味で一座の殿樣委員等に賴みこんだものだ。何んのことはない、德川議長の貴院各派交涉員招待會は政府の某重大事件もみ消し懇談會になつて了つた。この芝居を仕組んだのは田中あたりの智慧じやないネ。何しろこの會は相當政府には有效であつたと見え、貴族院ではあれは民政

黨議員の他には大して問題にせずにゐるじやないか。そこで十六代樣ともあるものが、どうして田中風情の手傳ひをそんなにまでしてやるかといふ事になるんだが……一體あのお爺さんは昔のロンドン・タイムスのやうに萬年御用黨でね、それに長男の家正が外交官でシドニーかどこかの總領事をしてゐるがこれが眼に入れても痛くないほど可愛い。我子のためには水火の中にも飛びこむといふのが人情だから、たまには一寸熱い湯位ゐ涼しい顔して飲むといふワケか……家正はそれから間もなく、今年から新しく開かれるカナダの公使に任命されたのは一寸面白いじやないか。尤も家正は仲々よく出來た男で昔なら立派な十七代將軍だが、どういふものか出淵が次官してゐる時はウケが惡くて、公使などとてもなれさうがなかつたものだが、今度急に浮み上つたものだと外務省の役人してゐる男が話してゐたヨ。

◇……支那問題は、某重大問題といふヤツはかうして何うやら表沙汰にならずに濟んだものゝ出兵問題、關税條約を中心にした南京政府との談判では散々な爲體じやないか。關税條約の方も出來上つて居るのに議會で發表を後らせて居るところを見ると、エライ讓歩をしてゐるに相違ない。それよりも芳澤がわざ〳〵出かけて行つて王正廷と十一時間打つ通しに談判して本極りに極めたといふあの結末は何んだい。濟南事件では責任は日本と支那と双方にあるから棒引きといふことに實際は話を極めて置き乍ら、誤魔化しに日支共同調査會を作つてそれに附すなんて何のことだ。撤兵は直ぐに始めて、その條件といふのは日貨排斥を取締らせるといふだけ。在留邦人の保護は支那の官憲に「責任を持つ」といふ聲明を出させるだけ。日清談判以來、支那とは隨分度々外交談判をやつて來てゐるが、こんな馬鹿げたザマになつたことはないネ。あれではまるで支那が大關で日本が褌擔ぎで土俵の上から投り出されたやうなものだ。何んのために出兵したといふよりも、徹底しない出兵をしたからこそ拔き差しの出來ない破目になつて、こんな國家の大屈辱となつて了つたのだ。民政黨が政府攻擊をホントにやるなら、この正攻法で正面から堂々と押して行けばいゝのに、見渡したところ、ピストルや短刀の使ひ手許りで、大砲撃ちや大刀使ひが居ないから駄目ヨ。

◇……支那問題で幣原が相當にやつたじやないかつて？ さうサ、相當にやつたといふだけだらう。新聞が幣原の質問演説々々と言つてドエライ前景氣をつけるので皆んな期待して居たが、乃公ははじめから大した事はあるまいと思ひ乍ら、あの日一寸覗いて見たが果していけなかつた。點にすればせい〳〵七十點といふところサ。自分の外交の辯明になり過ぎ、細い事にわたり過ぎ、スケールの大きサが一寸もないのだナ。乃公はあの日の演説を聽いてゐる時、ふと後藤新平が寺内内閣の外務大臣をやめた後で述懐した文句を思ひ出したヨ。後藤の下の次官を幣原がやつて居たのだが、後藤が曰くサ、『幣原君が次官をして居てくれたから、吾輩は實に助つた。幣原君は實によく出來る……だが、君、やつぱり次官だネ』と。その頃から見れば幣原もいろ〳〵場數も踏み年輩にもなつてゐるが、まだ外交官と外交家の中途位ゐのところサ。官僚育ちと三菱の婿は爭へないもので、あれを民政黨の黨首の後釜の何んのと騒ぐのは、幣原といふ男を知らない連中のやる事だヨ。『幣原外交』などいふ熟字が出來たのは、あの男にとつては實にもうけ物だと乃公など思つて

ゐるが、常人にはそれが何んでもうけ物か分らないだらう。所詮生きた政治に融通の利く男じやない。

◇……貴族院の幣原の演說に比べるとあの前日にやつた若槻のは上出來で八十五點どころだつたさうだ。民政黨が議會質問戰の作戰は、衆議院では永井柳太郎と齋藤隆夫を先頭隊にして眞先きに氣勢を揚げ、それから順々に鈴木富士彌だ、中野正剛だといふ連中を操り出し、恰度その彈の利き目が見える頃といふ豫定計畫で貴族院の方に若槻と幣原を立たせたものだ。それから最後に頃合ひを計つて濱口が立つて總括的の不信任案を出し松源あたりが介添役といふ段取りだと聞いたが、先頭隊の永井の演說は材料が新聞材料程度で古く、それに美辭麗句で甘過ぎたり、齋藤はいつになく氣力がなくて冗長でいけなかつた。中野は可成にやつたが、あゝいふバラかき演說は痛いには痛いが矢張骨までは通らない。鈴木富士彌や其の他の久原攻擊も皆スースーと拔けられて了つてからきし駄目だつたじやないか。そこへ持つて來て、重大事件發表決議案で票決を取つたところが、あんな風に大きな敗北を見たので、民政の連中も「とてもこの議會は駄目だ」と內々氣を落して了つたやうだ。

◇……あの決議案に床次一黨が參加したのには政府は大分狼狽し居つた。あれは長島隆二の建策でネ、新黨としては何んでもかでも政府に追從すると思はれては安く買はれ過ぎるから、この邊で一寸政府をイヂメておいて、後は又後で……といふいかにも長島らしい策だつたのだが、フタを開けて見ると敗けてゐるのには、今度は床次黨が一番驚いて了つた。といふのは、あの票決は床次黨が第三黨としての力試めしと示威運動であつたのだから それが三十枚束になつて野黨と一緒になつても何んの役にもたゝなかつたとなると新黨のキヤスチング・ヴオートといふやつが三文の値打ちのない事を暴露して了つた次第サ。あれ以來、床次は政府に對する腰が一層弱くなつて來て民政黨が出す野黨の總括的不信認案にも反對だとキツパリ言ひ出してゐる。尤もその言ひ分は、吾黨の對支政策を政府が大部分容れた以上、不信任案を出すワケにはいかないといふのだがネ。吾輩はこないだ床次に會つて、「田中は君の撤兵論がなくても撤兵しなければ引つこみがつかない立場になつてゐるからではないかしら、それを君に恩を被せて撤兵するなどいふのはなつて居ないと思ふが」と言つたら、床次は、「批評はどうにでも出來やうが、田中は最後に僕と會見した時、僕等の意見に從つて撤兵する、陛下へその次第の上奏文を今書いて居るところだから見てくれ玉へといつて其れまで見せた位だから、誠意があるものと見なくてはならない」と言つて居たヨ。床次といふ男は一寸こんな好人物のところもあるので、三十人の陣笠でも集るのだナ。尤も穿つて考へりや、床次としては又野黨と一緒になつたところで前の例で見ると敗ける方が確からしいから、さうなつては新黨を作つた申ワケが立たなくなるといふ心配から、無理にも田中の誠意を買ひこんでゐるのかも知れないテ。どつち道田中と床次の二人は內政問題にからんで撤兵問題を使ひ合つてゐるのサ。

◇……床次が政友會內閣に蹤いて行くやうになつたもう一つの理由は、薩派の貴族院議員の樺山や山內あたりからもいろ／＼忠告されたためらしいヨ。薩派の連中は、芋畑から一人總理大臣を出し度いと思つてゐるが、山本權兵衛はもう問題にならないし、差し當り

床次以外には候補者がなさゝうなので、あれを何んとかして護り立てゝやり度いといふワケだ。そこで床次の新黨樹立振りを見て居ると、床次は自惚ればかり强くて少しも眼先が見えて居ないから、「三十人ではどうも仕樣がないじやないか、政友會內閣へ割りこんで聯立內閣でも造る方向へ進む方が賢明だらう」と進言したものがあり、後入齋といふよりは亂入齋の床次のことだから、それもそうかぐらゐにかんがへ出してゐるらしいといふことだヨ。

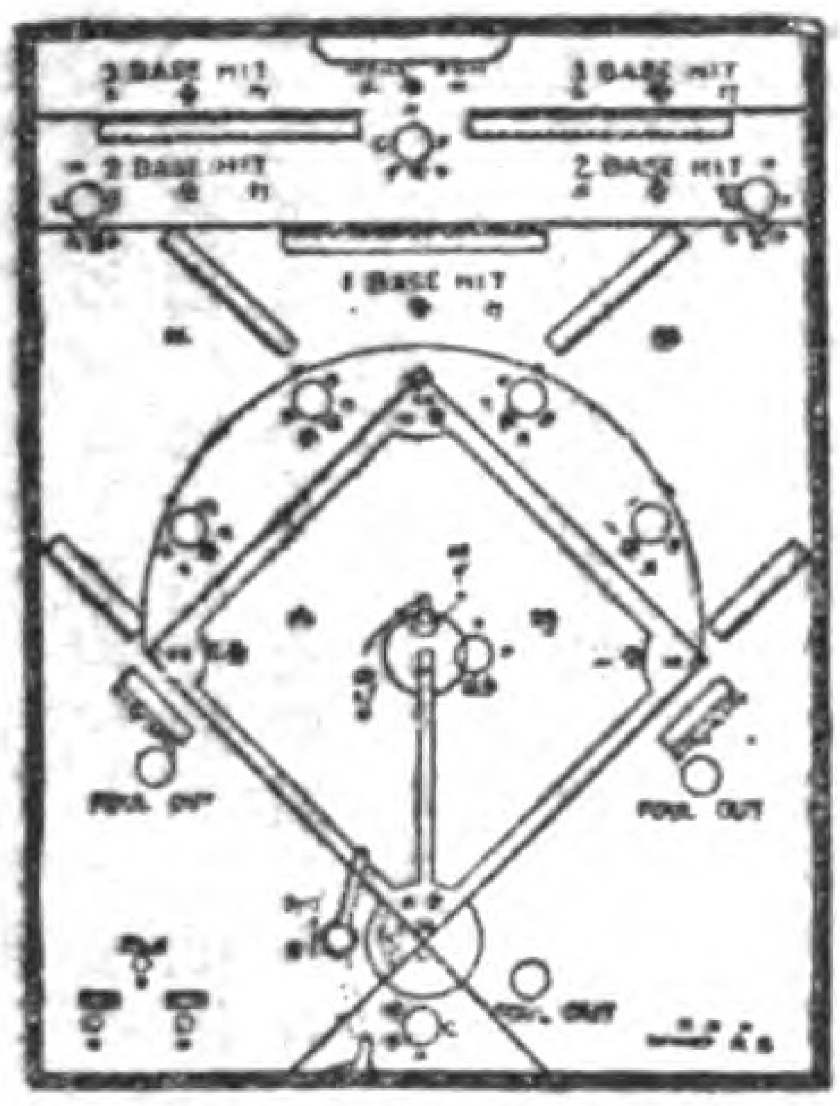
◇……地租移讓問題か。あれは山が見えてゐるサ。床次は主義として贊成だが今は時機でないといふ例の調子でどつちつかずのことを言つてゐるところが、これ又面白いのだヨ。ところで、この問題は貴族院では研究會なども珍らしく力瘤を入れて反對の氣勢が旺んだが、貴族院として困ることは、衆議員を通過して來た重要法案を無暗に否決するワケには行かない。そこで例の靑木信光が密つと田中のところへやつて來て、貴族院の移讓案に對する態度は、衆議院の票決の工合できまる。大多數で通過したものなら、貴族院でも通過させ得るが、少數の差で辛じて通過したとなると、貴族院でも或は否決されるかも知れない……と尤もらしいことを言つて來たものだ。それは、確かにそれに相違ないのだから、田中をはじめ閣僚連は、どうでもこの案を大多數で通過させるために、床次一黨を抱きこまなくてはならないといふ事になつたのだネ。そこで、「床次は主義としては贊成だが時機としては……」といふことになつたものだが、こゝに面黑いのは移讓案で床次の立場をよくする結果になる右の御注進を田中のところへ持つて來た靑木は床次とは切つても切れない好い仲なのだヨ。……今日は少し、細いこと許りしやべつたが、政治屋共の裏のカラクリを覗くと、一時が萬事皆んなこんな調子でね、とてもなつてゐない。乃公などは老人で保守黨の方だが、近頃の議會や旣成政黨の連中のやつてゐるのを見てゐるととても我慢が出來ん。そこへ行くと、今度の議會でも無產黨の代議士が一番しつかりしてゐる。あの連中が築地小劇場の俳優なら、旣成政黨の連中はみんな舊歌舞伎役者だネ。安部などの態度も仲々いゝ。名前賣りの演說をしたがるでなし、敎室の生徒のやうに行儀よく一日議席に座つてゐるさうだ。安部といへば、永田秀次郎にこないだ會つたら、今度の東京の市長には、階級意識さへなければ安部など一番適任だらうと言つてゐたヨ。永田あたりが東京市長に安部を條件つきにせよ適當だと言ふなど面白いじやないか。

中央公論社代理部案内

東京市丸の内ビルヂイング七七六區
中央公論社代理部
振替東京七八四七五番
電話丸の内(23)二〇六番

代理部への御註文はすべて前金に限ります。御送金はなるべく振替を御利用下さい。
御註文の際は郵税をお忘れなく。
宛名は必ず「中央公論社代理部」として下さい。

誰にも快な
野球競技盤



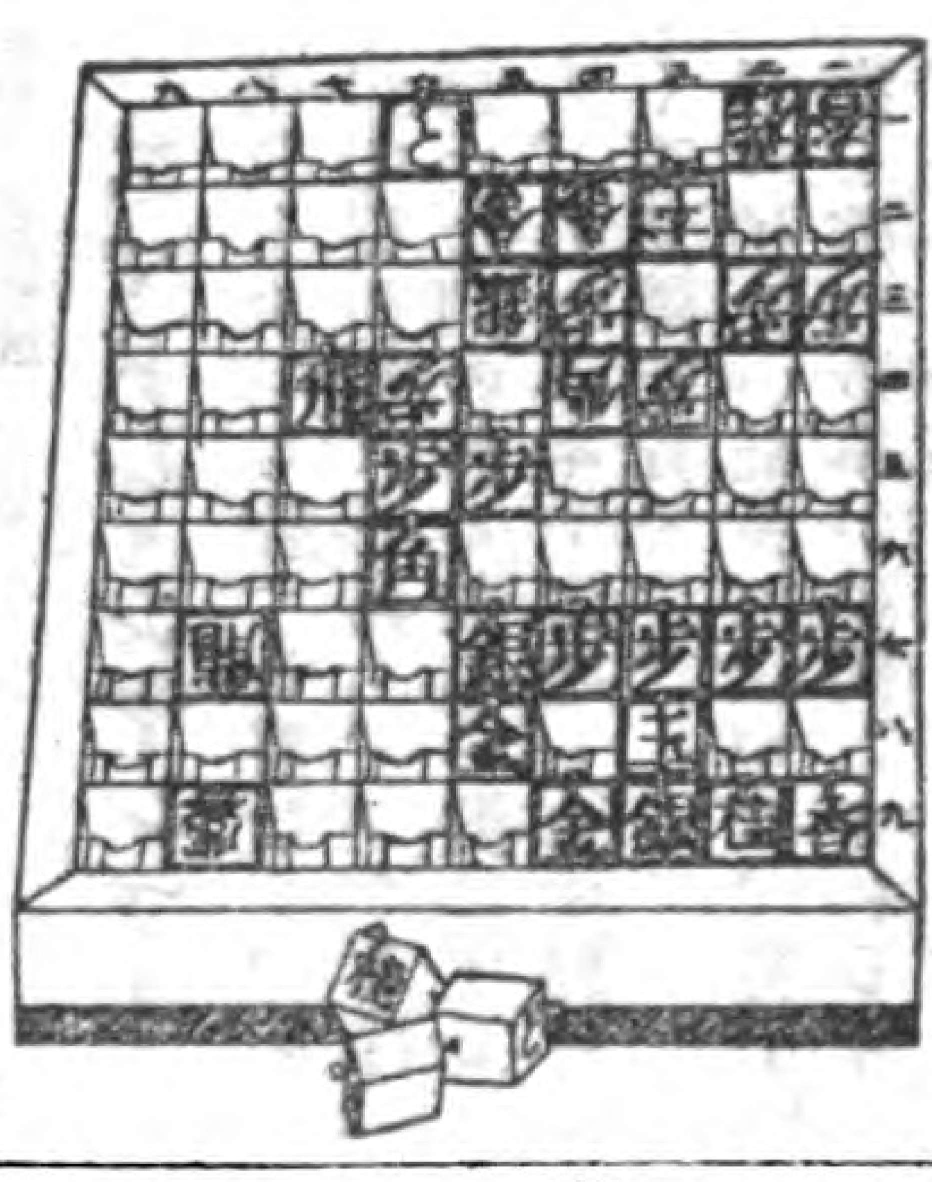
約二平方尺の盤上へ野球の實戰と同じ興味と緊張味を移す事に成功したのがこの高桑式野球競技盤です。

盤面は飛行機から見た野球場さながらで、投手は球にあてた指の力一つで、直球、曲球、軟球、剛球自由自在に、打手も亦選手がボックスに立つた氣分で、バットの振り方で美事本壘打を飛す事も出來れば、油斷をすれば、投手に計られて三振「アウトにされて了ひます。

實戰に臨む人はもとより、高尙な新らしい家庭遊戲として一般の家庭におすゝめ致します。

小型（長一尺四分 巾七寸五分）　一圓三十錢
中型（長一尺六寸 巾一尺二寸）　三圓八十錢
送料東京市内十二錢内地十八錢領土四十五錢

携帶用
輕便將棊盤



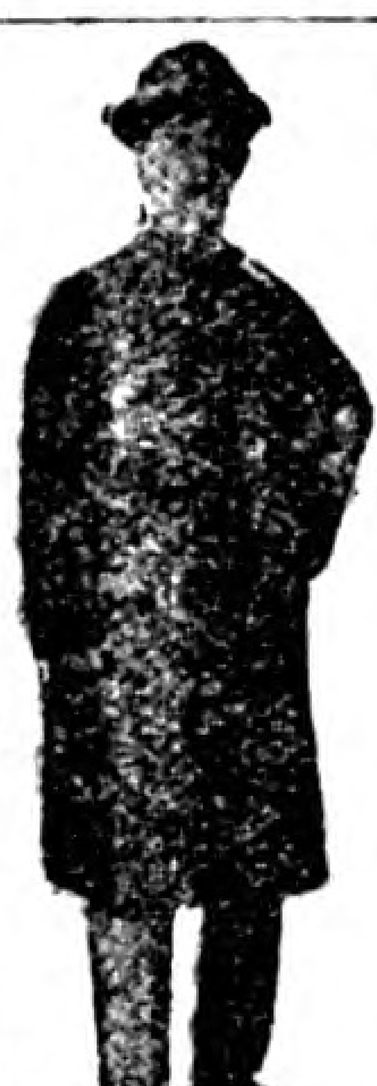
縱三寸七分横三寸二分厚サ五分の輕便將棊盤です。木とアルミニームで造られてありますから、ポケットに入れて少しも重くなく駒には一個一個蟲針が附けてある等婦女子の眼にも可愛らしいものです。

駒は標準文字を用ひ盤には縱横に數字が記されてありますから、新聞を見乍らの研究には一層便利です。其の他繁雜な業務の間に數分の閑を得て、又は忙しい旅の車中に或ひは湯上りの腹ばひのまゝで、或ひは机上に、或ひは病床のつれづれに、仰向けのまゝでも出來る好棊家にとつてこれ程便利なものはありません。

定價（駒全部附）　一圓八十錢
送料東京市内十二錢　内地十八錢　領土四十五錢

スプリングコート兼用
バーバリーレインコート

英國製と同様の生地を用ひた純國產品です。多額の運賃と少からぬ關稅とを仕拂ふ必要がないだけそれ丈、品質も仕立も非常に吟味されたものです。これならばスプリングコートともなり、天候の危ぶまれる日の外出にも安心して着て出られます。



色は紺・テツ・茶系統の常に最も斬新な流行色で、寸法は襟下鯨尺二尺六寸から二寸毎に三尺二寸までそれぞれ取揃へてあります。

各色共一着　十九圓
送料東京市内十二錢　内地二十七錢　領土五十五錢

純良レインコート

純良なイージー印のレインコー

トをお頒ち致します。上等の羽二重に良質のゴムを裏附けしたもので、尙裏面には上品な縞柄が染出してありますから、その製品の良さは從來の舶來品の比ではありません。

色はネヅミ及茶系統の最も斬新な流行色を選んだもので、現在盛んに海外に輸出されつゝあるものです。

寸法は何れも襟下餘尺二尺六寸から三尺二寸まで二寸毎に取揃へてあります。

各色共一着　十三圓

送料東京市内十二錢　内地二十七錢鮮上五十五錢

替ズボン

洋服は三つ揃でなければならなつた時代は過ぎて、上下變つたものにかへつて良き調和を見出す事が喜ばれる樣になつた今日ではズボンだけ新しくして古い上衣をもう一度新しく甦る事が出來、毎日屋内で執務の時間を經濟的な替ズボンですごせば、新調の洋服を何日までも上下同じ新しさに保たせることが出來ます。

或ひは特に二三着の替ズボンを用意して、時々かへて外出する等は、單に氣分上の問題でなく最も實際的經濟的な方法です。

御註文には、次の寸法をお知らせ下さい。

（一）腹廻り（二）股下（三）身長（四）體格（肥滿、普通、ヤセ形）

A紺サージ　四圓五十錢
B立縞スコッチ　四圓八十錢
Cスコッチ（裏州綿付）　六圓五十錢
特上黑サージ　九圓八十錢

夏向物
D黑セルズボン　五圓四十錢
E上黑セルズボン　五圓八十五錢
F絹セルズボン黑組　七圓
Gフラノズボン　六圓

送料東京市内十二錢内地十八錢鮮上四十五錢

香水を兼ねた
スマドレ・ヘヤトニック

このスマドレ・ヘヤトニックは米國で唯一の日本人向の化粧料を出してゐるスマドレ會社の製品でニューヨーク・ロンドン・パリー等の日本人に愛用されてゐるものです。洗髪後或は朝夕に數滴を毛髪の根元に振りかけて、指頭で輕くマッサージしてをけば、フケを除り拔毛を止め、後には氣持ちの良い香りが永くのこり、毛髪は使用するにつれて軟くなり、漆黒の美を增します。

定價（婦人用・男子用）特大瓶　二圓

送料東京市内十二錢内地十八錢鮮上四十五錢

理想的な洗髪液
スマドレ・シャンプー

毛質を少しも害する事なく、簡易に毛髪の汚れを落し、フケを除り爽かな潤のある美しい髪にする一方、ちゞれ毛や癖毛を直す點は全く不思議な程です。

日々忙しい社會に立つて、男子の髪を整へる事が禮儀とされる今日、僅かな時間に之を用ひて、極もさつぱりとした髪で人に接する事が出來ます。

定價　特大瓶　二圓

送料東京市内十二錢内地十八錢鮮上四十五錢

四季の香水

香水は夏のものに思はれたのは昔の事で、此の頃は一年中香水が用意される樣になりましたが、それも毎も同じものでなく、氣候や季節によつて變つたものを用ふるために、中央公論社代理部で創製したのが、この四季の香水です。

春は梅、夏は鈴蘭、秋はヘリオトロープ、冬はシクラメンの四種に別れてをり、贈答品にもふさはしい樣、素敵な體裁の函に納めました。四季何れでもお好みのままにお註文下さい。

定價（春、夏、秋、冬）各　二圓

送料東京市内十二錢内地十八錢鮮上四十五錢

顔剃りの後の化粧液
シェービングローション

顔剃、髭剃りの後につけるとかみそりまけがせず、肌を痛めないので好評を得てゐるこの化粧液は、粗製品と異つて、ぶつぶつができる心配はありません。皮膚の保護劑として毛深い御婦人方にも愛用されてゐます。

定價　一圓五十錢

送料東京市内十二錢内地十八錢鮮上四十五錢

輕便容器入
ユトマ・ポマード

毛髪の榮養を兼ねた純良なポマードを棒狀輕便な容器につめたものです。使用法は蓋をとつて容器から直接に毛髪に塗りつける丈で、少しも手に脂がつかず、使はれた丈の脂は常に表面の網を潜つ

て出て來る裝置の、一抹の無駄もない、至極重寶な、特に外出前や旅行先での使用には一層便利を感じます。
後は何回でもつめ替へがきく單に容器としても價値のあるものです。

定價　金六十錢
送料東京市内十二錢内地十八錢　領土四十九錢

理想的美髪料

スタイルセット

油やアルコールを絶對に含まぬしかもあまりばさばさしない理想的の新美髪料で、フケトリとポマードとを兼ねた合理的新製品であります。使用法はまづ髪を少量の水で濕らしておき、掌に少量のスタイルセットを滴らして、毛髪全體にゆきわたるやうに塗りつけるのです。

定價　六十錢
送料東京市内十二錢内地十八錢　領土四十五錢

高級で低廉な

アテナ萬年筆

使ふに從つて直きに執筆者の手と書風になじみ、使へば使ふ程いよいよ書き好くなるといふ定評を得てゐます。低廉で、シカモ舶來品に勝る高級品であります。

定價三圓五十錢・四圓・四圓五十錢
（回轉式自動吸入型）　三圓五十錢
送料内地十八錢　領土四十五錢
▲型錄は二錢切手封入御申込の事

自働研式

パイレ安全剃刀

パレイ程完全かつ簡便な優秀品は、今はどこにもありません。巧妙な裝置によつて、いかなる素人にも立派に砥げます。從つて一枚の刃が、半年以上も毎日の使用に堪へ、その切れ味は廣光の古銘刀にも匹敵することが證明されてゐます。

C型（革砥、替刃三枚 レザー箱入）　一圓八十錢
同　同　二圓
B型（革砥、替刃一打 ニッケル箱入）　十三圓五十錢
送料東京市内十二錢内地十八錢　領土四十五錢

インターナショナル式

新聞綴器

近來の新聞はみな欄外が狭くなつたゝめに、普通の新聞綴器では折目に近い部分は讀む事が出來ず一々取はづすのは余りに煩瑣極ると云ふ缺點を、完全に一掃した新工夫の新聞綴器です。
本器は、新聞を挾んだまゝ欄外その他の部分も完全に讀む事が出來、廻轉裝置で任意の一枚でも容易に取はづせる點に最も工夫をこらした、凡そ新聞を讀む御家庭には是非備へ度い品です。

定價（表紙裏紙附）　一圓二十錢
送料東京市内十二錢内地二十七錢領土五十五錢

オプチサナ

獨逸製藥品の偉力は世評の認める所ですが、特にこのオプチサナは、せきを止めるのに著しく效果があります。甘くておいしいので百日ぜきの子供にも苦もなく飲ませられるし、一週間服用すればききめがあらはれ、殊にぜんそくのせき止めには喜ばれてゐます。

定價　二圓
送料東京市内十二錢内地十八錢領土四十五錢

佛蘭西化粧界の驚異

除毛劑タキー

顏はもとより手足その他の部分の毛を剃刀を用ひないで、容易にしかも綺麗に除る藥がロージエ化學研究所で發明されました。
これはチューブ入のクリームで、これを手でも足でも腋の下でも、任意のところに塗つて五分か十分おき、水で洗ふと剃刀で剃つたよりも綺麗にすつかり毛がとれてしまひます。これを五六度繰返して使つてゐるうちに次第に毛が薄色の弱いものとなり、遂に全く發生しなくなつてしまふのが「タキー」の特色であります。「タキー」は赤腋臭を除く效果があります。

定價（マス・クリーム附）　二圓二十錢
送料東京市内十二錢内地十八錢領土四十九錢

糖尿病特效藥

プデイン

病狀の進行を停止するばかりでなく、奇妙に根本的に全治さすと云ふのが、他の糖尿病藥と異る點で「プデイン」の特長です。

定價十二圓
送料東京市内十二錢内地十八錢領土四十五錢

確實に效果のある理想的な

産兒調節藥

從來のもののやうに醫師の手をわづらはさず、絶對的信用のある「オクルサトル」は用器と錠劑に分

れてゐて、用器は永久に使用できるもの、錠劑は一錠一週間有效確實といふ、强い殺菌力を持つてゐます。あれこれと使用して效を奏さなかつた人にも、之だけは十分の滿足を得られると實驗者が口を揃へて推奬する「オクルサトル」の效果をお試し下さい。

定價(用器と錠劑十二錠付)六圓
(錠劑だけ十二錠)二圓
送料東市内十二錢内地十八錢鮮上四十五錢

痔の藥

ネオラヂオリン

慢性痔病にも急性痔病にも著しい效果を持つネオラヂオリンは靈驗的なきゝめがあると萩原博士も推奬されてゐます。

定價(大)二圓　(小)一圓
送料東京市内十二錢内地十八錢　鮮上四十五錢

強精劑ルンプリン

一時的の昂奮劑でなく、其の吸收性は極めて敏活で、血肉細胞の新陳代謝を旺んにし、全身神經を强壯にして、特に神經衰弱に偉效を奏する最新强精劑であります。

顆白色の錠子に造られた本劑は極めて佳快な獨自の芳香を放ち、

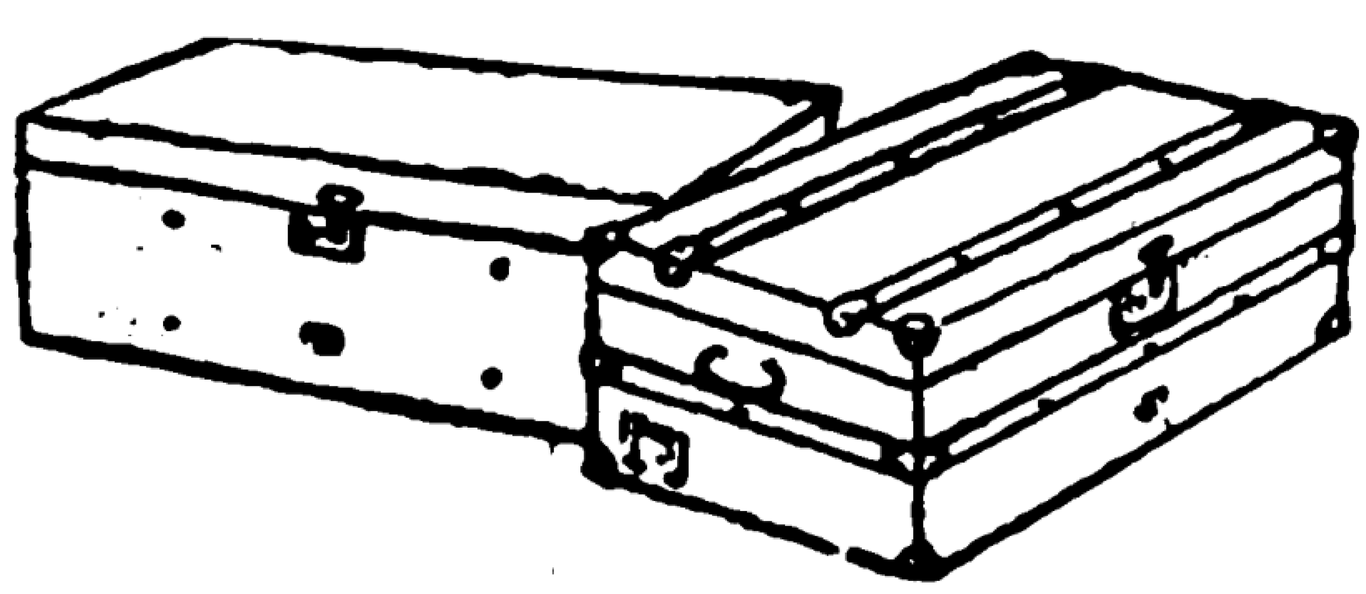
藥劑の服用を懐忌する婦人であつても喜んで用ゆる事が出來ます。

定價(二週間分)　三圓五十錢
送料東京市内十二錢内地十八錢鮮上四十五錢

防濕防蟲毛織物入

昭和文庫

厚い鐵板張り、タテ二尺七寸、幅一尺二寸、高サ八寸五分の堅牢な容器で、内壁の四方を丈夫な木板で圍み、中にナフタリン樟腦の入れものがついてをり、外面には漆の燒附けを施して立派に仕上げ



絶對に外氣の侵入を防ぐやうに出來てゐますから、毛織物その他大切なものをしまつておくのに必須な品です。

特製は、要所に筋金が使つてありますから、トランク代用としてそのまゝ送り出す事が出來、簞笥や支那鞄より遙に便利です。

定價特製九圓八十錢
並製六圓八十錢
送料東京市内二十錢　地方は運賃先拂

最も安全で低廉な

電氣湯たんぽ

電氣アンカや電氣フトンのやうに、發火する恐れは絶對に無く、普通の湯たんぽのやうに數時間毎に湯を取換へる手數も要らず、熱



湯を用ふる危險もなく常に攝氏七十度内外の快い温度を保つ。絶對安全、使用法簡便、堅牢、發老に保育に、ぜひ家庭に備へねばならぬ品です。

定價(二燈用ソケット及びカバーつき)　四圓五十錢
送料東京市内十二錢内地　十五錢鮮上七十七錢

紋染紙製

洋服カバー

防水防濕防蟲の效用を具備し、シカモ布よりも丈夫で洗濯が出來るといふ重寶な品です。この絞紙製品は婦人公論代理部で好評を博してゐますので、本誌でも特に格安にお取次いたします。

定價(大)一圓廿錢　(小)八十錢
送料東京市内十二錢　内地十八錢　鮮上四十五錢

御注意

◇**御送金**は、一番安全な振替東京七八四七五番へお拂込下さい。

◇**振替**は、普通近い所で四日かゝりますから、特にお急ぎには電替で書留に願ひます。

◇**お註文の**お品が、萬一お氣に召さぬ場合、贈答品の御相談、代理部へのお希望、又は何か不都合のありました場合には、御遠慮なく、中央公論社代理部係までお申越を願ひます。

＝古書籍案内・評價・取次＝

▲是非御利用を!!

主として地方在住讀者諸氏の御便宜を計る目的を以て特設いたしました中央公論社、代理部の「古本御購入のお取次並びに賣却御希望書籍の評價お取次」は日淺きにも拘らず非常なる歡迎と信頼を受け、各地よりの申込み日に日に殺到し大繁昌を極めてゐる次第です。之れによつてこれを見るに、弊社代理部の此の企てが決して徒事でなかつたことを裏書きして餘りにあるものと衷心悦びに堪えません。どうぞどし〳〵御用命下さいますやう。購入御希望の書物のお取次はもとより、御藏書中御不用な書籍がありましたら御遠慮なく評價をお問合せ下さい。古文書、和本、錦繪等價格値段の不明な御不用品の評價・賣却お取次にも勿論應じます。お問合せだけで御返事いたしかねるやうな種類のものならば、一應御送附下されば早速市内一流の專門家に囑して正確迅速に評價して御返事を差上げます。

古書籍案内・古書籍評價取次規定

(A)紹介は往復ハガキ又は通信料添付のこと。(B)註文はなるべく振替を御利用下さい、但し送品は着金後一週間以内のこと。(C)評價御希望の古本は、書名、著者名、發行年月日、發行所、書籍汚損の程度等を詳細に御報知ありたし。但し古文書、錦繪等の如きは現品拜見の上でなければ正確に評價できない場合がありますからその旨お含みおき下さい。御送附のものに對しては本代理部で全責任を持ちます。御返送の場合の送料は申受けます。(D)宛名は中央公論社古書案内係と明記のこと。

東京市丸の内ビルデング七七六區

中央公論社代理部

(振替東京七八四七五番)

新着月評

總選擧讀本

藤澤利喜太郎著

清澤洌

第一回の普通總選擧の解剖批判は、どうしても出なければならぬものであつた。それが時效であつても失敗であつても、それは昭和日本の發足點である。後世史家のためにだけでも眞面目なレコードを殘してをく必要がある。

この記錄が政治專門の學者から出ないで、數學の權威である理學博士藤澤利喜太郎氏から出たことは珍とせねばならぬ。同氏は數年以前から既に比例代表その他につき權威ある說を發表してゐたが、これは佛國の元首相パンルヴェエ氏が同じ端緒から政界に入つたのに似てゐて、數學から政治への道程は余り多くの類がない。同氏は政治經濟行くとして可ならざるなく、私は嘗て同氏からカッセルの爲替理論の原文を貰つて翻譯したことを覺えてゐるし、また物價指數などについて詳しい說明を聞いたことも覺えてゐる。

『總選擧讀本』は一口にいへば『數學から觀た總選擧』といつてもいゝものである。その立論は悉く數學の上に礎かれたもので、普通の政治學者や評論家が陷り易い原則や政治原論によるドグマがない。例へば同氏は普通選擧戰の直前に、新聞が筆を揃へて、中立議員を排斥した如きは錯誤なりと指摘し、(三四一ページ)また二大政黨の對立を金科玉條とする如きも同じく妖夢だと論じてゐる(三二六ページ)

同氏の研究の內注意すべきは、第一回の普通選擧において選擧干涉が何等の效果がなかつたことを數字的に證明してゐることである。たゞに今回の選擧において然るのみならず、從來の歷史によるも干涉は世間で思ふ如く效果のあるものにあらず、それは自然に鎭むであらうことを述べてゐる(三二四ページ)たゞわれ等が遺憾と思ふことは干涉を論じながら、投票買收については余り調査も對策も研究されなかつた點である。

博士は政治評論家としても特殊な位置を占めるであらうほど獨創的である。殊に同氏が數字の上から小選擧區還元の妄想を說き、大體『府縣制の選擧區制あたりが最も理想』であることを判斷してゐるのは傾聽に値しよう(三四六ページ)。また選擧の方法としては、從來西洋諸國に行はれてゐる比例代表論を排して、同氏の研究になる『補正式比例代表法』を提案したのは、研究に値すると思ふ(二六六頁)。これが內容については元よりこゝでは紹介することは出來ない。

私はこの著書は近來稀に見る有益な、研究的なものだと信ずる。併したゞ一つ何故選擧の弊害を矯める對策を發表されなかつたかを不思議に思ふ。同氏は日本の議會政治に樂觀的態度を持されて居るが、目前の悲しむべき狀態を看過されてゐるのではあるまい。そして補正式比例代表法だけでこれを根治し得ないのは申すまでもない。如何にして選擧資金を少なくするか。如何にして買收を減じて衆議院の門戶を有望な人に開放するか。それは或程度まで選擧法で矯正し得べきものである。これがわれ等の目前に研究すべき題目である。書中同氏は何回も『次ぎに發表すべき著書』といつてゐられるから、われ等は同氏の次回の主力が、立法技術により現在の選擧法に從つて政界の弊害を如何にして取り去るべきかに向けられることを希望するものである。(定價三・〇〇・神田區南神保町一六・岩波書店)

メーリンク著

世界文學と無產階級

雨宮庸藏

トルストイ八十二年間の一生は、人生を戰場とせる悲壯な白兵戰であり、そこには凡ゆる罪と德とが與つて居たが一つ不眞實と云ふ罪だけは徹頭徹尾與らなかつた、とはロマン・ロオランがトルストイを評せる言葉である。誠に私たちは、彼の此の態度に及び難き畏敬を覺ゆるのであるが、他方又餘りにも離れた距離にある彼に縦焉たらざるをも得ない。それはゲーテやイプセンに對して然るのと同樣であつて、私たちが彼らに向ふて強き淸算を要望せざるを得ない氣持は、專ら、彼らの思想が pre-marx であるにも係はらずなほもその骸骨的部分を現實に舞跳せしめんとする氣配あるによる。私たちは文藝批評の尺度に急角度の旋回を求めて已まぬのだ。かかる時に藝術にかなりすぐれた理解と批判とを持てるドイツ社會主義運動の理論的權威メーリンクの論文集が、主として作家及作品論としてゐそれが、邦文に移植された事は、深い喜びであらねばならぬ。

著者は先づ「藝術とプロレタリアート」に於て、現代の所謂純粹藝術はプロレタリア解放鬪爭の偉大なるを解し得ず隨つてそれが新興生活を描き得ない點に於て却て不眞面目であり黨派的であるとなし、勞働者が之と冷淡に對立するは必然で是を以て彼らが現代藝術に理解なしと見なすを妄斷とし、藝術的要素と階級的要素との渾然せる古典劇が却つて彼らにアッピールするの故なきに非ざるを說いて居る。玆に藝術的要素なる表現形式よりは階級的要素なる內容を比較的重視するメーリンクの立場があらはれて居るが、それは「資本主義と藝術」なる論文中に於ても「沒落しつつある階級の人々を描かねばならぬ」「內面的に空虛でない生き生きとした未來にみてる云云」と云ふて居るのでもほぼ分る。私なども繪畫・彫刻・小說などの更に映畫などの藝術に於ても大體重點を廣い意味に於ける內容におく方が妥當であると思ふ。更に例メーリンクがかかる立場にたつは、藝術を經濟生活にかなり依存すると見る唯物史觀的立場にたつによるものである。そして彼が此の立場からして、資本主義イデオロギーの存する所宗敎畫歷史畫はすたれ風俗畫風景畫は魂の拔けたものとなり彫り精巧な肖像畫のみ殘ると見るは甚だ面白い見解である。その說明は讀者は此の書中に發見せらるるであらう。更に自然主義と新浪漫主義との關係についても此の立場から面白い解說が下されて居る。メーリンクによれば自然主義の正系の娘は新浪漫主義である。蓋し自然主義が資本主義的現實に堪へ得ず又堪へんともせず、而もその限界をこえて斷乎たる一步をもふみ出し得ず又出さんとも思はないとせば、殘された仕事は夢の國への逃避あるにすぎない。かくてネオ・ロマンチシズムは幻想的な自由の感情を與へると共に飽滿せる大衆の凡ゆる神經的嗜好に滿足を與へるものであり、資本主義の萎えた腕に抱かれた藝術乃至文學の無力の休息以外の何ものでもない。隨つてそれは偉大な歷史的世界轉換を反映せる昔の浪漫主義よりははるかに低い地位にあるものである。かくて現代日本の所謂大衆文藝なども一つの國民經濟事實でありかゝるネオ・ロマンチシズムの一あらはれであり得やう。

勿論本書中には體系的な彼の藝術理論の展開はないが、彼の立場は簡單なる右の敍述によつてほぼうかがはれやう。彼の作家及作品論は甚だ興味あるものであるが、然し行論多

く雖淡であり精彩犀利を欠く。レッシングを許してはプロレタリアの精神的祖先として居るが然し眞の偉人は常に新興階級にとつてかかる祖先であり得やう。ゲーテに就ては彼がこの時代の最善を盡した點に於て凡ゆる時代に生きる事、その特權としての藝術は倒れるが本質としての藝術は不朽である事を云ふて居るが、說く所いかにもはがゆく、シルレルに就ても彼が理想とせる世界を描ける藝術の不誠なるをいふのみで平凡であり、病詩人劇作家クライストは單に雜然と傳記的に描かれて居るにすぎない。ハイネ、フライリヒラート、ヘルヴェーヒに至つては、單に彼らが社會主義的抒情詩人である事が云はれて居るのみで、徒らに敍述を敍述して居り、筆者の日記的獨りよがりが窺はれるにすぎぬ。

然し「寫實主義と自然主義」なる章下に於ては有益なる所論をきく事ができる。卽ち惡書家、教育制度、裁判制度を刺すやうな皮肉で而も藝術味豐かに描ける、そして盲者啞者聾者の心を深く感ぜるヂツケンスに正當な位置が與へられて居り、兩性間の大事件を而も常に異常の葛藤裡に描ける劇作家としてのヘッベルが無上の讚辭を捧げられ社會主義への不器用な嘲罵と資本主義への容赦なき批難をなせる社會思想家としてのヘッベルが完膚なき批判を蒙つて居るのも正當な評價であり、詩人であるよりは鬪爭者であり勇敢公正勤勉な時代開拓者であるゾラ而も階級鬪爭の理論を社會解剖の手段に用ひ得なかつた彼の不聰明を惜んで居るもよい、トルストイを許しては我々に多くを與へた力強い詩人、何ものをも與へなかつた宗教的靈人とし、そして彼が歷史的聯關に對する理解を失ふての盲想奇想をば痛烈に剔抉して居るが、叙述の雜駁さを惜む。「ジョン・ガブリエル」に依つてイプセンをブルジョア理想主義者と見なすは當り「モンナ・ヴアンナ」に於て强者、自覺者、賢者をルネッサンスの古きに求むるメーテルリンクの反動さを笑ひ、メーテルリンクやハウプトマンのそれと鋭く對立するゴーリキイのミリウ・ドラマ「夜の宿」を語つては遺憾なく精到であるが、「海狸の毛皮」「沈鐘」に觸れないハインリッヒ」「人力以上」の評は平凡乃至冗漫である。かくしてメーリンクの所論には過渡的混迷さが見られ高い評價を與へ得ないが、然し私たちは彼の思想より示唆さるる點多きを感謝せねばならない。譯文は相當の出來である。

（四六版二三五頁、定價九〇、川口浩譯、神樂坂叢文閣）

尺八の樂理と實際（吉川・前川著）　樂典なき音樂は跛行的音樂であり、將來に向つて彈力的進展を期する事はできない。而も現在尺八に含まれて居る樂理を知らんとする要望は高い。本書は此の二つの理からして大きい意義あるものである。（菊版二三七頁、定價二五〇、東京市小石川區江戸川町一八文關社）

ソヴイエツト憲法（ア・ロシエーテン著、佐田弘雄譯）　勞農ロシア叢書3、（四六判一七四頁、定價・九〇、東京市神田區錦町一ノ一二、上野書店）

プロレタリア國際知識（ア・ベルトニコフ、エフ・スヴエルトフ共著、三好信譯）　本書はブハーリン監修の「政治教程」の第八章から第十一章までの譯である。（四六判二八八頁、定價一・〇〇、東京市神田區錦町一ノ一二、上野書店）

史學概論（野々村戒三著）　史學の本質と目的とに就ては古來幾多の論議と疑義とが存するが、本書は、之を原理論方法論の二部に分ち、ベルンハイム、リッケルト、ブラウン其他によつて是等諸問題を批判解明せる好著。その解說は懇切犀利である。附錄の五章亦讀者を啓蒙する所多大なものがある。（四六判三九三頁、定價二・五〇、東京市牛込區早稻田、早稻田大學出版部）

豐旗雲（佐々木信綱著）　著者が一筋に思ひを寄せる三十一文字の精粹を集む。その洗練された歌詞は世既に定評がある。（三六版一八八頁、定價一・五〇、東京京橋南鍋町一二實業之日本社）

福田一郎著

潜水艇の話

水野廣德

二十世紀は自然征服の時代であるといふが十九世紀は發明と發見の時代であつた。汽車汽船電信電話を始めとし、凡そ現代文明を飾れる有ゆる物質文化の殆んど總ては、第十九世紀に於て或は其原理か發見せられ、或は其形態が發明がせられたるものである。十九世紀こそは恰も永き冬眠の間に培はれたる草木の花が春陽に浴して一時に爛熳の妍を競ふか如く、過去幾萬年乃至幾十萬年の久しき間、連續不斷に蘊育せられ培養せられたる人間知能の花が、文化燦然として一時に咲き開きたるの觀がある。而して是等の發明や發見は人間の生活を利福する文化方面に於けるのみならず、殺戮破壞を目的とせる軍事方面に於ても亦幾多新鋭の武器が案出せられた。其の最新のものが潜水艇と航空機とであつた。

此等兩新兵器の出現は世界の軍事界に一大衝動を與へ、從來地上と海面とに於てのみ行はれたる戰爭は、今や戰場を空中並に水中に迄擴大して平面戰より立體戰に發展するに至り、隨つて作戰用兵の上に戰術的にも戰略的にも根本的變革を招徠した。而して平面戰時代に於ける主要兵器たる大砲と軍艦とは過去幾多の實戰の經驗と多年の學理の研究とに依りて改良に改良を加へ、發達に發達を重ね、今や殆んど絕項の行詰りに達して居る。然るに航空機と潜水艦とは共に近年の產物に屬し何ほ發達の初期にある。之を實戰に便用したるは兩者共に歐洲戰爭を以て嚆矢とする。而かも武器として其威力の猛烈なることは世界の既に公認せるところで、飛行機の如きは其發達の將來を殆んど豫測すること能はす、毒瓦斯の進步と相待つて或は將來の戰爭を不可能ならしむるかも知れぬ程の威力を有つて居る。潜水艦に於ても亦僅に試驗時代を過ぎたるばかりの新兵器なるに拘はらず、歐洲戰爭には能く初陣の偉切を奏し、獨逸潜水艦Uボートの名は當時世界の海運界を戰慄せしめ、海の王者を以て許す大英國すらも爲めに其の國運を危くされんとした程である。世界一を誇りたる優越なる其の大艦隊も海底を潜るUボートに對しては殆んど策の施すべきなく、唯手を空しうして自ら衞るに汲々たるばかりであつた。當時若し絕大なる友國の援助と雄大なる自國の造船力あらさりせば、英國

第百階級（草野心平著）　蛙はでつかい自然の讃嘆者、どぶ臭いプロ、明朗性なアナ、地べたに生きる天國、といふやうな立場から凡て蛙に關聯されて歌はれた特異の詩集。（四六版定價一・四〇、東京市外杉並宗成三四・銅鑼社）

伯爵陸奧宗光遺稿（陸奧廣吉編）　日淸事變の顚末を記せるもの特に價値がある、人性を論ぜる部分も面白い。（菊判七七五頁、定價五・八〇、東京神田南神保町一六岩波書店）

文明の沒落・土に還る（室伏高信著）　曾て洛陽の紙價を高からしめた兩冊に改訂を施して合册にせるもの。（四六版三二四頁、定價一・二〇、東京京橋上槇町一三・批評社）

科學と人間生活　本書の內容は、氣象學民族心理學民族宗教學神話學生物學海洋學地質學などの各部門に涉り、夫々その道の權威者を網羅して、專ら人間生活に關係ある方面の說話を集めたもので、即ち、藤原咲平博士は氣象が我々の生活に及ほす影響を、桑田芳藏博士は文化の研究と民族心理との關係を、大島正滿博士は生物學の人類への重要さを、小倉伸吉博士は海に就て持つべき一般知識を、戶澤當壽學士は科學的に見た人間とその壽命を、宇野圓空學士は民族學から見た宗教の本質を、松村武雄博士は日本古代神話とその新しい解釋を、加藤武夫博士は地球の歷史と變動の現象原因を夫々說かれ頗る興味深い。說述は最新科學の成果に基礎づけられつつ通俗平易である。敢て大方の人士にすすむ　菊版三九七頁、定價三・五〇、東京市外中目黑五八

は恐らく獨逸潜水艦の脅みの下に屈服したであらう。

斯くの如く獨逸潜水艦の爲めに苦汁を飲まされたる英國は餘程潜水艦が苦手なりしと見え、華府會議に於ては人道の敵と云ふ理由により潜水艦全廢説をさへ提議したるも、潜水艦の爲めに幸か不幸か佛國其他の强硬なる反對に依り英國の提案は遂に成立しなかつた。由來潜水艦は弱國の武器と稱へられた程で、劣勢海軍國の沿岸防禦には最も有效有力なる艦種である。左れば苟も戰爭の是認せられる限り潜水艦が廢止せられることはあるまい。

航空機と潜水艦とは歐洲戰爭に於て共に赫々の偉功を奏しながら、航空機の名聲隆々獨り時代の寵兒として持て囃やさるゝに反し、潜水艦の名は杳として顯はれず動もすれば軍縮會議毎に厄介扱せられて居る。これ航空機が常に花々しく大空を飛翔して人の視聽を聳やかすに反し、潜水艇が暗き水中を潜つて人の耳目に觸れざるの理由のみでなく、航空機は軍用兵器として有力なる外、平時に於ける重要なる交通機關として多くの輝やかしき未來を有せるに反し、潜水艇に至りては軍事以外に殆んと其用途を見出し得ざる其の暗き運命に由るものであらう。軍事以外に利用の途なきものゝ陷るべき運命は物も人も同じである。之も時代の勢である。

併しながら潜水艇が今日海軍兵器として極めて重要なる地位を占め居ることは、海軍々縮會議毎に常に論議の焦點となれることに依つても知ることが出來る。されば世界第三位の海軍を誇る我國民として苟くも國防を念慮する者は軍人は勿論、政治家と云はず、學者と云はず、事業家と云はず、潜水艇に關する知識なくして國防の事を論議する資格は無いと云ふても蓋し過言ではあるまい。とは云へ一は夫が新兵器たると、一は軍事秘密に屬すること多きとの爲め、專門家以外の者が之を研究することは、我國に於ては比較的容易ではなかつた。

然る處今回偶海軍少將福田一郎氏の著「潜水艇の話」が刊行された。書中收むるところ潜水艇の概念より潜水艇の性能任務、潜水艇の攻擊法防禦法、潜水艇の發達史、列國潜水艇の配備、歐州大戰中に於ける潜水艇の活動、潜水艇廢止問題等、章を分つこと十四、挿入圖に刷込寫眞大小百六十余種に達して居る。著者福田少將は我海軍に於ける最初の潜水艇長として 實に我が潜水艇 探偵者の 元祖であ

二・章華社）

支那經濟物語（長永義正著）　支那の農業問題關稅問題紡績問題を始めとして華僑をとき日支經濟關係を解明し甚だ有益優秀な著である。行文平易にして地味な内容も懇味に生きて居る。（四六版四二〇頁、定價二・五〇、東京日本橋區吳服橋二の五・大阪屋號書店）

光は日本より（新東邦協會編）　日本再認と日本强調との述作二十五篇を收む。蓋し機宜を得た編著である。（四六版三七〇頁、定價一・七〇、東京牛込區矢來町新潮社）

フィードレル藝術論（金田廉譯）　カントの方法を藝術に應用し造形美術の價値の轉換を企てたフィードレルの藝術論を知るのに最も重要であり且彼の根本思想を傳へたと見なさるる主論文 über die Beurteilung von Werken der bildenden Kunst と Der Ursprung der künstlerischen Thätigkeit との譯を收む。細密な論理を包む複雜な文體を可なり明快に譯されて居る譯者の勞は多とせねばならない。附錄「コンラッド・フィードレルに就いて」は甚だ便利である（菊判三四一頁、定價二・五〇、東京麹町區一番町五・第一書房）

マルサス人口論の研究（伊藤久秋著）　其の名のみ高くして讀まれざるものに、マルクスの「資本論」ありダーウインの「種の起源」ありそしてマルサスの「人口論」がある。著者は乃ち多面的なる「人口論」がその發頭一、二章の縮讀によつて單純に解さるる事實に嘆き、「人口論の成立と其内容」と「人口論の反響」なる二篇に分つて人口論の全貌を窺はしめんと企

る。爾來終始一貫、實地の運用と學理の研究とに從事すること十余年、其の潜水艇に關する知識の博しくて造詣の深きは言ふ迄もない。專門科學に近き問題をは極めて平易に、極めて簡明に、門外の素人にも判り易く書かれたるは大に多とするところて、末次海軍教育局長が其序文に「取材の正確にして豐富なる、叙事の懇切にして周到なる」と言へるは評者の感を同しふするところである。潜水艇に關する知識の淺薄なりし評者の如きも本書の一讀に依つて一かどの潜水艇通になり得たる積りである。

唯本書を讀み行く間に聊か物足らず感じたる點は、書中引用引例せる圖表寫眞の殆んど總てが外國出のものにして我海軍に屬するものが極めて稀なることである。獨り圖表寫眞のみならず潜水艇に關する意見なるものも亦悉く外人の言説である。是れ素より著者の罪にあらずして、秘密萬能病に罹れる我當局と沈默第一主義に捉はれたる我軍人の罪であると信ずる。由來陸軍たると海軍たるとを問はず我國軍事當局者が常に軍事の秘密に神經過敏なることは往々羮を懲す猶の嘲にも似たるものがある。今や國防は軍人の占有物ではない。國民と共に國防の事を謀らんと欲せば軍事當局者は國民の軍事知識啓發に對して今少しく開放的雅量と指導的親切とが無くてはならぬ。國民を無知にして誤魔化さらなど〻は最早や時代が許さぬ。

若し夫れ強ゐて本書に對する望蜀の慾を言ふならば、一般讀者に對しては聊か教科書的に過ぎて通俗味の缺けたる點である。卽ち記述の上に今一般の興味がほしかつた。言換へれば今少しく趣味的であつて欲しかつた。併し斯かる望は此種の專門か〻つた書物に對しては或は無理な註文であるかも知れない。

惟ふに世界平和の母を以て任ぜる國際聯盟に於てさへ自國本位の我利的平和主義が跋扈する今日、世界は依然として軍備の對立を免れない。國家は好むと好まざるとに拘はらず力相應の軍隊も養はねばなるまい。軍艦も造らねばねるまい。從つて國民としても亦軍事に關する一通りの知識を備ふることは決して無益ではあるまい。のみならず現代科學の力が幾何程まで鯨や鱶の世界を征服しつ〻あるかを知ることも興味深き問題であらう。此等の意味に於て本書の刊行は大なる意義を有して居る。菊版四〇〇頁の本書は必ずしも大册と云ふことは出來ぬが、著者其人を得たる點に於て、邦文を以て書かれたる潜水艇に關する書物中の翹楚であり權威であることを疑はない。（定價三・五〇、海軍研究社）

てた。蓋し人口問題の喧しき今日入門參考の書として有意義のものであらねばならぬ。（菊版四〇二頁、定價三・三〇、東京日本橋區通三丁目・丸善株式會社）

教育社會學の思測（田制佐重著）　教育社會學は教育の起源發達本質價値に關する社會學的研究の學であつて、未だ開拓途上の若き科學である。本書は卽ち斯學方面に於ける著者が最近の沈潛の結集であつて、「教育社會學の研究」「社會問題の教育的考察」「學校教育の社會化」の三篇二十四章より成る。日尙淺き斯學にとつての貴極な文献たるを失はない。（菊判五六八頁、定價五・〇〇、東京赤坂區青山六の一〇一・甲子社書房）

昨年本誌上にのつて文壇を騷がせた十一谷義三郎氏の力作「唐人お吉」を今回出版せる萬里閣では、來る三月廿三日（お吉の命日）をトし

「お吉法要、大追悼會」

を、彼女の生地伊豆下田に於て催すこととなり、芝増上寺貫長道重信教師の法臨を乞ひ、小竹萬里閣社長、十一谷義三郎氏及び東朝、東日の兩記者に評判の漫畫家和田邦坊も加はり、なほ、ハリス及お吉關係者多數一行の下田行が決定した。一篇の創作が、斯る異常なるセンセーションを捲き起し、延いて枯骨に花の咲くこととなれるは、近頃に無い珍らしい現象である。

強盗都市の話

清澤洌

何でも世界一でなければ承知しない米國人は云ふであらう。

『強盗かい。それなら本家のこちらを差措いて口幅たいことをいつて貰つては困るネ。聞くと君の方の東京では說教強盗だなど、騷いでゐるさうだが、おらが國ではあんなものは臺所搜しにも這入りはしないよ。君はニューヨークやシカゴで始終裝甲自動車が通つてゐるのを見るだらう。鋼鐵の丸い穴から、鐵砲が見えるからつて、軍隊の演習だなど丶思つたら笑はれるぜ。あれは君、銀行から銀行へ現金を送るための特別自動車なんだ。繁るやうな人通りの大道を、タンクみたいな怪物を横行させるところに強盗都市の現はれがあらうではないか。それに比べると君の方の強盗なんどは、あれは何だい。人一人殺めたことがあるかね。東京は無警察どころか、あれぐらゐ大きな犯罪のない大都市はないぜ……』

世界一ならんがためには、かれは乾度犯罪の兇悪なことまで誇りながら、まづシカゴの話しからでも始めるにちがひない。

少年慘殺強盗事件

どうしたことか、いつもはキチンと歸宅するボビーが、今日は六時になつても七時になつても歸らなかつた。かれは今年十四歲になる少年で、ハーバード學校に通つてゐた。九時がすぎると、流石に兩親のフランクス夫婦も心配し始めて、警察に通知する一方、心當りを搜しまはした。

少年ボビーがその日午後五時頃まで、ベースボールの審判官をして、それから家に歸つた筈だといふだけは分つた。ある一人が何でも學校の近くで自動車——灰色のウイントン—にのせられて行つたやうだといふ者があつたが、突きつめてみればそれも曖昧であつた。

午後十時半に電話のベルが鳴つた。フランクス夫人が聞いてみると、それは強い男の聲であつた。『あなたの子供さんは誘拐されました、が命に別條はありません。明朝詳しいことは知らせませう』

怪しい聲の通りに翌朝一通の速達郵便は配達された。それにはかうある。

Dear sir,

今頃は既に御承知と思ふが、貴下の令息は誘拐されました。かれは今のところ無事です、また貴下がわれ等の命令に服從する限りかれの生命は安全です。併しこれに從はなければその刑罰は死あるのみ。

一、この事を一切警察に通知するな。既に一應通知したならば、この手紙については何もいつてはならぬ。

二、本日午前中に一萬ドルを用意せよ、紙幣は古札で、二十ドル紙幣を二千ドル、五十ドル紙幣を八千ドルとせよ。紙幣は絶對に古札であるを要する。新紙幣乃至はマーク付きのものであれば總べての努力を無效にする。そしてこれを葉卷箱かカードボール箱に入れて、白い包となせ。

三、かく用意して午後一時まで家に居れ、改めて命令するであらう。

以上は單なる商取引と心得られたい。もし貴下が以上の命令を守られないならば、われ等は貴下を誠意なきものとして、適當の方法をとる、守られれば金を受取つてから六時間の內に令息を返します。

『ジョージ・ジョンソン』

少年ボビーの父フランクスは金持の實業家であつた。かれは愛する子供の生命のためにその命令通りを行ふの外はなかつた。

果して正午に近い頃、電話がかゝつて來た。直ぐタツキシが君の門の前に行く事、フランクス君自身が金を持つて六十三街の藥屋に來る事を、冷やかな語調で命令した。その藥屋の名前を聞き直さうとすると、もう電話は切れた。暫らくするとそこへ謎の自動車が來た。フランクスは現金をさげてこれに乘らうとした。

この時である。警察から電話があつて、南の町端れにボビーらしい屍體が發見されたから來て見てくれ、といふのである。「御令息は角縁の眼鏡をかけてゐましたか、その近くに落ちてゐましたが、かけて居らない？それでは御令息ではないかも知れん。まアそれにしても一應是非見て下さい。」警察の懇望によつてかれは現狀に行つた。

死體は強力な××によつて原形を存しないまでに爛れてゐた。併しそれがボビーであることは疑へなかつた。醫者の檢査によつて死後相當な時間を經て居るのは確實であるから、加害者が昨夜電話をかけて來た頃は、最早殺した後であり、その後×××××××××に、裸體にし、それに劇藥をかけて、郊外の沼の中に投じたことが明らかである。何人が何のためにかうした慘酷なことをしたのであるか。

いくら犯罪都市のシカゴでもこれが問題にならないわけはない。况んや當のフランクスは富豪である。ウインストン型の自動車の持主は、一人々々その晩何處に居つたかを調べられた。またその學校の先生の三人の思想と行動が怪しいとあつて、拘引されて嚴しい取調べを受けた。巡査が辭つたといふので人格問題も惹起した。

いろ〳〵取調べたけれども、一向端緒が得られない。そこで搜索の方針を一轉して、眼鏡の所有主を搜すことにした。シカゴにおける眼鏡屋全體を取調べた結果、さうした眼鏡を三つ造つたことが判明した。その內二人はどうにも疑へない人物である。最後の疑ひはシカゴ大學の生徒で、極めて成績の優秀なネーサン・レオポルドといふ十九歲の青年にかゝつた。工業家であり、船舶界の有力者である富豪の息子である。

警官が右の青年に眼鏡のことを說明すべく警察に同行を求めに行くと、そこにリチヤード・ロエブといふ青年がゐた。同家とは遠い

親類に當る仲で。この殺人事件には深い興味を有して新聞記者と一緒になつて、搜査につとめてゐる青年である。『ぼくも一緒に參りませう。』二人は進んで警察に出頭した。

檢事のタローはまづその眼鏡がかれのものであるかどうかを尋ねた。『いや僕の は家にある筈です。』かれは探偵と共に家に歸つて探したが、家にはなかつた。『それなら僕ののに違ひないが、僕は鳥の研究のため何百回となくあの邊に行つたから、その時に落したものでせう。如何にもその頃も行きました』といふ。かれは學校でも知られた鳥類學者であつた。

それではその晩何處に行つた？　かれは友人のロエブと共に午後はリンカーン公園で鳥をとつて酒を呑んだ。それから少し醉つたので家に歸らずに、自動車を乘り廻し、女を搜したがいゝ對手が見つからなかつたので家に歸つたといふのだ。警察に同行したロエブも符節を合したやうな申立てゞ、この點で疑ふ餘地はなかつた。

カタロー檢事は屈しなかつた。かれは二人をホテル招いて御馳走をし、賓客として種々話した。今度の犯罪が手紙の文句などからして『相當教育あるものゝ行爲であらう』ことなども、この青年は述べた。そうしてゐる間探偵は證據を集め歩いた。それにはロエブも手助けした。

不思議なことは眼鏡の外に尚二つあつた。一つは脅迫狀はアンダーウッドのタイプライターを使つてあつたが、レオポルドは嘗てアンダーウッドを使つたことがあることである。第二はかれはその日、自家用の自動車ウイルス・ナイト・カーで一日中乘り廻したといふけれども、抱え運轉手のいふところによればその日は車庫にあつたといふのである。

『も一人の友人といふのはあの一緒に來てゐるロエブだぞ』

檢事の頭は電のやうにひらめいた。そしてロエブの方なら氣も弱いやうだし、早く自白するであらうことを思ひついた。丁度レオポルド家の運轉手が來て證言するのでその部屋へかれを連れて來た。

『水を一杯くれ。』かれは耐らなくなつて水を求めた。それを呑むと『何もかも白狀します』といつて事の次第を自白した。たゞ主犯はレオポルドで、かれはこれを助けたのみだといつた。

二人を對質させると事件は明瞭りした。二人は火のやうになつて罪が對手にあることを怒鳴つて、洗ひ浚ひ云つてぬけた。翌日、かれ等の自白によつて現場を臨檢したが、その頃はもう二人の友情は完全に回復してゐた。二人は盛んに冗談を云ひあつた。レオポルドがフランクスの家に電話をかけた藥屋に行くと、そこの婦人はかれを一目見るなり氣絶したが、二人は平氣でコーヒーやパイやサンドウイツチを食つた。

自白によつて彼等が、かうした犯罪を行つたのは、單に痛快味を味ふための行爲と知れた。そして犯罪を冒しても金持の親父を持つてゐる二人に對し、法律はどうもすることが出來ぬであらうことを信じて、それを明言してゐた。二人は長い間、これを實行しようと考へてゐた。そのため誰にあててもいゝやうに Dear Sir で始まる手紙を書いてをいた。

ロバート・フランクスが犠牲になつたのは、時たま學校歸りに逢つたからで、ロエブは豫ねて少年を知つてゐるので自動車に乘せ、口を押えてをいて、××××××、その上、布を口につめ込んで殺してしまつたのである。

かれ等はさうしておいてその晩平氣で夕飯を食つたり、酒を呑んだりした。そして兩親に對して脅迫を始めた。彼等はかうすることにより痛快味を滿喫した。公判が始まつて、あの有名なクラレンス・ダローの辯護があり、滿場涙に浸つた時に、彼等だけは平氣であつた。二人はそれでも死刑を免れて――それはダローの辯護のおかげである――無期懲役になつた。

刑を宣告されて刑務所に歸つた時に、かれは看守人にいつた。

『オイ君、ビステキのうんと大きなのを二つ持つて來て下さい。』すると仲間の一人が云ひ足した。『アニオンを忘れないでね。それからデザートを澤山…。』

かれ等には最後まで『悔恨』といふやうな文字はないのである。

ヒックマン少女事件

『犯罪の波(クライムウエーヴ)』といふが、犯罪ほど流行をそゝるものはない。以上と殆んど同じやうな事件が行はれたのは、一昨年（昭和二年）も十二月の末のことであつた。

ローサンゼルスの銀行家でパイカーといふ紳士がある。娘のマリアンは十二歲で小學校に通つてゐたが、ある日の午後『お父さんが怪我をしたから、お迎へに參りました』と學校に來た男があつた。この男に連れて行かれた儘(まゝ)娘はいつまでたつても歸宅しなかつた。

警察に通知し、かつ心當りを調べてゐると、そこへ一通の電報が來た。『マリアンは安全、よく判斷せよ、もし私の計畫を邪魔するならば危險なり』とある。

それから續いて翌朝速達が來た。それには書出しに『死(デッス)』と大書して、二十ドル紙幣を七十五枚用意してをく事、警官や探偵に告げてはならぬ事、金を渡す場處は電話で知らせる事等を書いてある。その日の午後、二回目の速達は來た。同じ手蹟で千五百ドルの身の代金を要求した外、それにはマリアンからの手紙が同封してあつた。

『お父さん、お母さん、私は家に歸りたうございます、こんな思ひをしてゐれば長く生きて居られません。私がこんなになつたことは誰にも話さない、お父さん、どうぞ云ふまゝになつて下さい。さもないと私を殺すでせう。

お二人の愛する

マリオン・パーカー

手紙に書いてある通り暫らくして電話はかかつて來て、ウイルトン街と第十街で金と娘を取り代へようといふのだ。父のパーカー君は極秘裡に警察の自動車二臺を從へてその場處に行つたが、その晩は誰も來なくて空しく引きあげた。

翌朝、第三回の速達が來た。それには昨夜自分の命令を無視して黄色の警察の車を付添はしたことを強く責め、終りに五ヶ條の注意事項があり『一人で來る事』金をとると共に自分の自動車は除行し暫らく行つて娘を下ろすから、下し終つてから君の自動車はスタート

する事』などもその中に書いてあつた。

　前回の罠に懲りたパーカー君は今度は一人で行き、指定の場處に待つてゐると果して二人乘りのフォード車が横付になつた。ハンカチーフで半分顏を隱した男はピストルを差向けながら、傍らに眠つてゐる娘を指さし

『君の娘はこゝにゐる、約束の金を出せ』

といつた。パーカーは一千五百ドルを渡したが、その男は手紙にある如くに自動車を徐行して、數間先きの道傍に子供ををき高速力で疾走し去つた。

『お前、隨分苦勞したネ』

　そういひながら父は驅けよつてみると、みよ、娘は殺害されてゐるではないか。しかも手足は別々に切斷されて他の場處にあり、見るも無慘な狀態である。身體は太股のところから切られ、始めの醫師は充分凌辱された疑ひがあるといつたが、二三ヶ月してそれを他の醫師が否定して發表した。

　犯人の乘つた自動車は盜まれたものだつた。その自動車に殘つた指紋により、犯人が嘗て銀行に働いたヒツクマン（十九歲）といふ者であることが知れた。かれはカンサス市の生れで、ローサンゼルスに來る前にはシカゴにゐた。詐僞取財で銀行を出され、その時に警察の厄介になつたので、寫眞も指紋もあつた。それが米國全體の警察に配附された。

　それから丁度一週間ばかり後のことである。太平洋岸の北の方シアトル市の衣服屋に一人の青年が買物に來た。その青年は如何にも疲れてゐる上に、落ちつかない顏をしてゐた。代金に二十ドルの紙幣を出したのを調べてゐると、それはK六八〇一六九七〇とあつて正しく娘の身代金として出した札である。父親のパーカーは札にマークなどはつけなかつたけれども、その番號を控えてをいて、それを警察に報告したのだ。直ちに非常線は張られ活動寫眞にあるやうな自動車追擊戰があつてかれは縛についた。その自動車も無論盜んだものであつた。

　かれの自白によると、かれが娘を殺したのは單に强盜の目的からではない。『子供の時から有してゐた殺人に對する狂的興味が心を支配し、ついに心の平靜を失つた』と自から云つてゐる。かれはその時の光景についてからいつた——

『部屋に歸つて縛りあげられた少女を見た時私の犯罪興味は絕頂に達し、拭布をもつて少女の咽喉を絞めた。僅かに二分間で少女は絕息したので、屍體をバス・タツプ（西洋風呂桶）に運び、ナイフで頸のところに穴をあけ血をタツプに流し込み、兩手を肱のところより切り、更に膝から兩足を切り落しそれ等を新聞紙に一々包んで、それから衣服を脫がせ腰のところより下腹部を抉り二つに體を折斷し、上腹部には流血が甚だしいのでタオルをつめ込んだ。それより頭髮を梳で顏に白粉をつけ、更に目があいてゐるやうにマブタを針で縫ひあげ、衣類を着せてそれをスーツケースに入れ、室內を掃除して午後に下町に活動寫眞に出かけた。』

　いかに犯罪に對し平氣であるかゞ、その自白によつても分るではないか。かれは昨年の十月死刑に處せられた。

　この犯罪は更に同じ形式によるハワイにお

けろ日本人少年の白人少年殺しを生んだ。その後青少年の大犯罪はたえる暇はない。ジョージア州アトランタの大學生二人（十九歳と十八歳）の射殺强盗事件、紐育マンハッタンの娘殺し（加害者ライス十七歳）ニュージャージー州の少女殺し（加害者ノエル十七才）等、事件をあげる丈でも草臥れるほど多い。

シカゴの强盗と殺人

シカゴのゲンナ・プラザースといふと米國では直ぐ『あの殺人組か』とうなづくぐらゐ殺人を事としてゐる。

何しろシカゴには三十ヶ國人も居つて、それが何れも大國家をなしてゐる。イタリー人だけでも三十萬人も居るが、そのイタリー人でもシシリー島出身のものが一番猛悪で、博徒の勢力爭ひから、いつでもピストル戰が絶えない。いつかステート街といふ目ぬきの街路でゲンナ・プラザースの徒黨と反對派と衝突し、機關銃まで持ち出して街上戰をやつたのは、日本にも電報が來た筈だ。

かれ等はこれと目がける者を誘つて自動車にのせる、そして町のはづれに行つて容易に『料理』してしまふのだ。所謂 Ride といふのがこれだ。この手にのらないものは、出遁りを見張つてゐて、透覗ひのきくピストルで打つて逃げてしまふので、警察でもどうにもならぬ。況んやイタリー區域その他外人の投票は握つてゐて政治家はこれが恐いのと、また彼等は金があつて、いゝ辯護士がついてゐるので、到底徹底的な追窮は出來ないのだ。一時はシシリー島人を大擧送還すべしといふことも問題になつて政治化したが、何時の間にかそれも有耶無耶になつた。

最近も客用汽車がシカゴの停車場から、まだ出た計りに、一團の强盗がピストルを下げて郵便列車にやつて來た。そして二萬ドル以上を奪つて悠々去つたが、搜索の結果辯護士で州會議員をやつてゐる男の家に這入つたのを發見し、これを襲ふと丁度山分けの相談中だつたといふ事件もある。

東京の說教强盗に當る評判な强盗はダーキン（Durkin）といふ男だつた。自動車の運轉手を殺したり、嫁の叔父を殺したりしたが、出沒奇拔で中々摑まらない。ところがこの男仲々の好男子、それにかうした大膽不敵な行爲には、一部の女は英雄崇拜的な心理が働くと見え、何處に行つても女にもてる。警察の嚴探最中にローサンゼルスで色女と結婚したと傳へられて、警官を口悔しがらせたこともある。

ある時、シカゴ・リバーの岸からかれの衣類、帽子などが發見された。かれもいよ／＼窮して入水したかと騷がれたが、その後最初の情婦の自白で、かの女が男を救ひだしたさの狂言と知れた。それほど男のために盡した女だつたが、男が何人も他の女を持つので、可愛さ餘つて憎さが百倍し、警察に密告したのでセント・ルイでつかまつてしまつた。併し人間を何人となく殺したに拘らず、對手が皆死んで證人がなく、正當防衞を主張して結局三十年の懲役で事件に落が下りた。米國では三十年の懲役ぐらゐなら、十年そこ／＼で出てしまふであらう。

米國では强盗といへば屹度ピストルに決つてゐる。私が米國に行つたばかりの時に、あ

る人が强盗にホールド・アップといはれ、耳が遠いのでこの命令に從つて手をあげなかつた許りに射殺された事件もあつた。

硝子窓は破らぬ

これほどピストルが幅を利かして撃つことを何とも思はないのに、不思議なことには硝子戸に對しては、彼等がその不可侵權を信じてゐるのではないかと思ふぐらゐ、これを破ることをしないのである。

誰も知るやうに米國人は、夏などはよく寢室の戸を開け放つたまゝ寢るのである。しかもそれに拘らず、こゝから强盗や泥棒が這入つたと思はれるケースは殆んどない。歐洲のイタリーその他では、硝子戸には鎧戸がついてゐるのが多いが、米國ではそんなものはなくて、布製のシエーズだけである。米國に關する限り硝子は强盗不可侵の堅さを持つてゐるといつていゝ。

米國の强盗は横から來ずに、堂々と正面から來る。入口のベルをならす。取次ぎが戸を開くとそこにピストルを持つた兇漢が立つてゐて、無理に押し入り金品を奪ひ去ることはふんだんにある。だからシカゴ邊ではお勝手のドアーなどは大概二重になつてゐる。一つのドアーから牛乳や、氷屋などが這入つて用を足し得るが、家の中に這入るには、も一つのドアーがあるのである。またそのドアーも全部開かない。二寸ばかり戸があくと、上方にガチンと鍵が下りて、顔だけ見せて用を足し得る仕組になつてゐるのだ。犯罪都市シカゴが生んだ特別な發明である。

米國の殺人は如何にも世界一である。これをモスコウと比較してみると、一九二五年度にモスコウの十萬人あたり四・五であつたのに、シカゴは十三・三であり、デトロイトは十八・七であつた。しかもこの殺人に對して死刑は案外澤山ない、恐らく米國全體で一ケ年二百人内外であらうが、これは殺人事件五十件に對し一人にしか當らない比例である。

この殺人は七割六分まで鐵砲による殺人である（一般的統許がなくこれはニユーオレアンスのそれによる）。また米國で泥棒による毎日の損失は恐らくは一日二百五十萬ドルを下らず、シカゴ市だけで一ケ年の窃盗被害は一千二百萬ドルに及んでゐる

ニユー・ヨークでもシカゴでも市民の抗議で警察部長（警視總監）は何人も代つたけれどもどうも効果は少ない。ニユー・ヨーク市長ウオーカー君の代になつてからだけでも、最近までに三回の更迭だ。が、市民は警察には依然として頼れない、その一つの證據を最近のシカゴ・トリビユーン紙の記事から拔いてこの文を閉ぢよう。

「モリス・ベーカーは過去四十二ケ年間シカゴにおける洗濯業界の有力者であるが、過去十ケ年間にかれの營業所は商敵その他のために、爆破され、燒かれ、脅迫され、强盗された。しかも加害者の一人だにつかまらない。そこで同君は今度かのケポー（暗黒ギヤング組の親分）と渡りをつけた。この事が分ると、脅迫もピストルも一切來なくなつた。今やかれは檢事も、警察も、屋主組合も何にもいらなくなつたといひ、かつ曰く「私は現在世界一のいゝ保護がありますよ」と揚言してゐる。

——完——

春！人生の悩みは……

性の衰退と神經衰弱

治療と豫防の實際！

◇

現代人の八十パーセントは性的神經衰弱症であるといふ、性的神經衰弱症とは生殖器の障害に伴ふ神經衰弱であつて、生殖機能の衰退から陰萎（不能症）遺精、夢精、過敏性亢奮無精等の症狀を現はし、更に精神的にも肉體的にも一般神經衰弱の症狀を現はす、所謂現代病をいふのである。

文明が進歩すればする程本症の患者は加速度に殖えて行く傾向がある、特に學生、會社員事業家、軍人、學者、智識階級等、精神勞働者に頗る多く見られる。

◇

本症の患者の症狀はまづ安眠不能、夢を見る頭痛がする、頭内不快、仕事に疲れ易く、不快感、無力感が甚だしく、意志薄弱となり、思考力散漫、感情は苦悶性となり、漸次憂鬱性となる。更に生殖器官に於ては性的行爲が病的となり、微妙を缺き内分泌が缺乏して、稍もすれば無精亦は早發性陰萎をさえ見るのである。勿論、夢精、遺精、精漏等の不快なる現象を伴ふので、患者は益々悲哀を訴へ、衰弱を加ふるのみである。特に

◇

陰萎症は此種患者の最も苦悶とする處のもので○起不全、交○不可能の狀態であつて、絕對的無力を示すので、全然用を成さない、近來この種の患者が壯年季の人に迄見られるのは如何に性的神經衰弱が現代文化を横行してゐるかを物語つて余りがある。

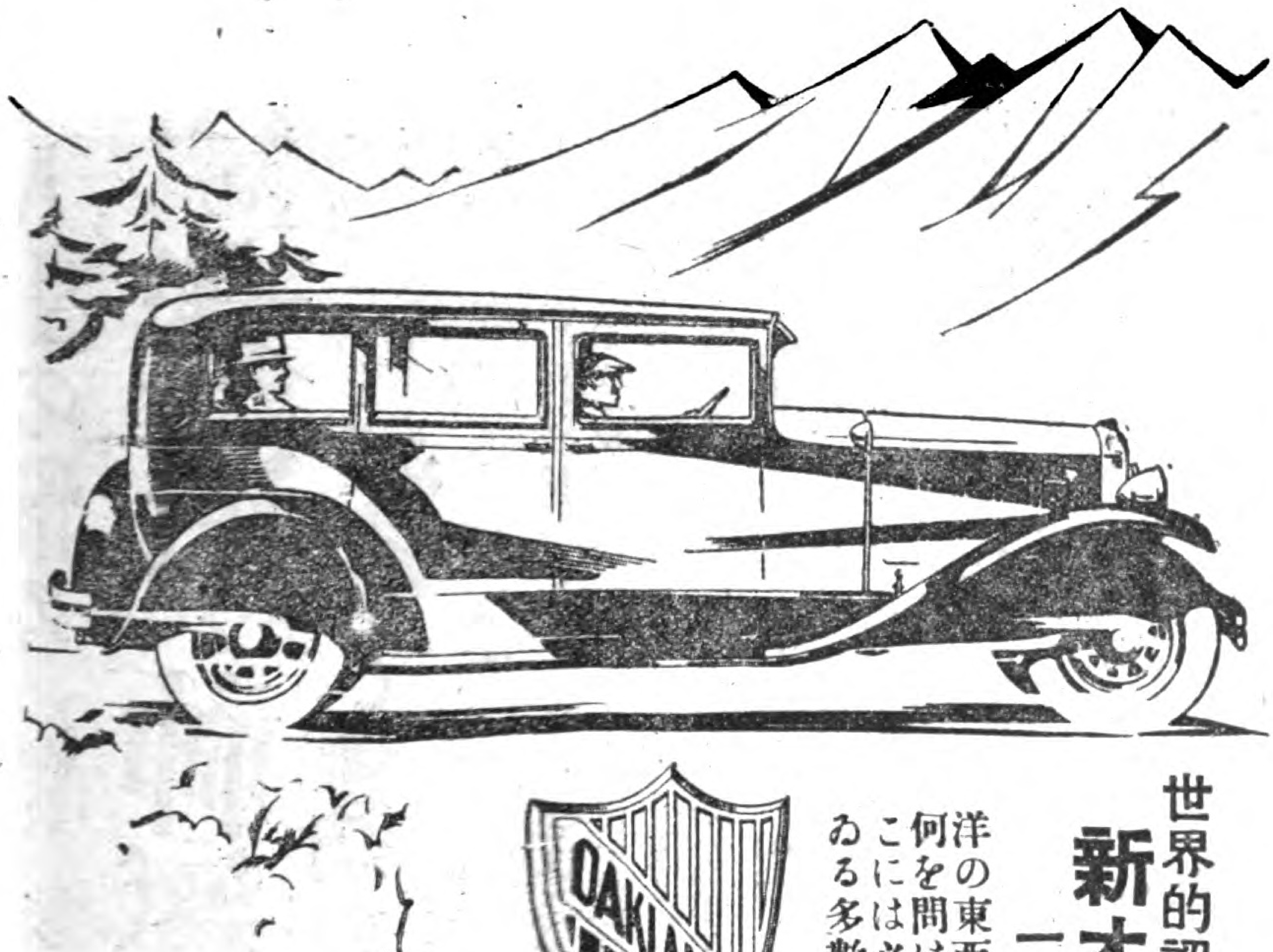
◇

最後に本症に對する治療と豫防の法であるが生殖器障害專門の權威ある醫師に診療を乞ふも一方であるが、本症治療及び豫防の著名藥として名聲ある戸塚博士の**トツカピン**の服用が最も簡單で有効の方法であると信ずる。何となれば**トツカピン**は現代藥化學の精粹を集めてゐるばかりでなく、幾十萬の實驗者に依つて實證された折紙付の高貴藥であるからだ。

◇

單なる神經衰弱位ならば一週間分を試みるがよからう、亦性の障害を伴ふ惡性のものは多少の辛棒は必要であるが、再び明るい人生の光明に浴することが出來る、殊に本劑は根本健康を基調とせる精力腦力の强壯成分を多量に含んでゐるので、陰萎症、老衰者、精力增進を望む人には一種言外の効目がある。亦健康男女が之を服めば性の旺盛は言はすもがな腦は明晰に、體力は增進して、年が年中春風のなかに逍遙ふ如き愉快の泉となる。

トツカピンは三十錠參圓、五十五錠（携帶容器付）五圓、百二十五錠（携帶容器付）十圓、三百十錠（携帶容器付）二十圓、全國海外到る處の藥店にある、本舖は東京銀座新肴町 大阪市西區新町通一ノ二、**丁子堂藥房**



世界的認識を得たる

新オークランド號

一九二九年式新モデルの發賣

洋の東西、氣候の寒暖、道路の善惡、風俗の如何を問はず、苟くも自動車の用ひらるゝ處、そこには必ずオークランド號の品質價値を認めてゐる多數の人々が居ります。

ゼネラル・モータースは單に過去のオークランド號の聲價を以て滿足せず、自ら進んで更に新しき標準に向つて改良に改良を加へ、遂に此の素晴しき新型を製出するに成功しました。

新エンジンの増大せる動力と速力とに加ふるに、圓滑なる走行と永續する壽命と魅惑的なる美觀とを以てせるこの新オークランド號は、從來に増せる優秀自動車「世界的六氣筩車」(コスモポリタン・レックス)であります。

最寄の販賣店で何時でも御試乘を願ひ上げます。

日本ゼネラル・モータース株式會社

新オークランド號はゼネラル・モータースの製品なり

鏡花世界瞥見

（貝殼追放）

水上瀧太郎

鏡花泉鏡太郎先生は明治六年十一月四日加賀の國金澤市新町に生る。父は淸次、政光と名告る金屬の彫工にて、母は鈴、江戸下谷の出生、葛野流の皷の家、中田氏の女、能樂師松本金太郎の小妹なり。

十一才の時母にわかれ、二十二才にして父に死別す。

明治二十三年十一月上京、二十四年十月尾崎紅葉先生の門下たることを許され、二十六年五月「冠彌左衞門」を京都日出新聞に連載す。年僅に二十一。

泉先生の文學上の活動は此の時に始まつて、爾來三十有餘年、今なほ不斷の制作を續けて居る。明治文學はじまつて以來、先生の如く制作期の久しきは無く、藝術作品の質に於てすぐれたると同時に、量に於ても壓倒的に群を拔いてゐるのは、その比を見ない所である。

父方も母方も藝術家の血筋だつた事は、先生の藝術至上主義をはぐくむ上に、決定的の運命であつた。先生の藝道に對

する信仰は、いにしへの名工の如く深く、今日の幾多の文學志望者が、即成出世の方便と考へて居るやうな不心得はもつての外の事である。

「冠彌左衛門」は甚だ不評判だつたさうだ。先生みづからその事を記していふ。

明治二十六年五月、京都日出新聞に「冠彌左衛門」を連載す。うけざる故を以て、新聞當事者より、先生（紅葉先生の事）に對し、其の中止を請求して止ます、狀信二十通に餘る。然れども少年の弟子の出端を折られむをあはれみて、俠氣勵烈、折衝を重ねて、其の（完）を得せしめらる。

尤も此の作は、翌年轉載されて北陸新報に揭げられ、大に喝采を博したといふ。今日これを見れば、此の時代物は作品としては極めて幼稚で、その後間もなく發表された同じく時代物「亂菊物語」「秘妾傳」などと共に、泉先生の作中最も特色の無いものである。

作者の親しく物語るところによれば、北陸新報に連載中、毎日その社の前に佇み、掲示板に貼出される新聞紙上の自作を、心をふるはせて讀んだものださうだ。文學にこゝろざす者にとつて、今日よりももつと、自作の印刷になる事のむづかしかつた時代だから、その喜びと心配の入りまじつた感情は、さこそと推察されるのである。

此の年少の作者は、翌二十七年には、早くも「豫備兵」「義血俠血」の如き、今日もなほ多くの人の記憶に殘る作品を發表して、非凡の才能を認められた。

日清戰爭當時は、國を擧げて外敵にあたる意氣の最もあがつた時代だが、文學は全く顧みられなくなつた。藝術は平和の世でなければ尊重されない。國家的社會的不安の時代には、花より團子がもてはやされる。當時一流の大家も、米鹽の代に窮する事極めて甚しかつたといふ事である。ましてや未だ大に賣出したとはいへない泉先生の如きは、全く衣食の途を見出し得ず、郷里金澤の舊城趾の御堀に身を投げて死なうとおもひ詰めた。

當時成つたものに「鐵壁夜半錄」があるが、これを郷里から紅葉先生に送つたところ、編中の人物を描く筆に鬼氣の迫れるを看て取つて、師は其の愛弟子の命を捨てん事をあやぶみ、書を送つて激勵した。

（略）「鐵壁夜半錄」と題し例の春松堂より借金の責塞に明日可差遣心得にて此二三日に通編刪潤いたし申候卷中「夢島」の感情を看るに常人の心にあらず、一種死を喜ぶ精神病者の如しかゝる人物を點出するは、畢竟作者の感情の然らしむる所ならむと私に考へ居候ひしに果然今日の書狀を見れば作者の不勇氣なる貧寠の爲に攪亂されたる心麻の如く生の困難にして死の愉快なるを知りなどと浪りに百間堀裏の鬼たらむを冀ふ其の膽の小なる芥子の如く其心の弱きこと学殼の如し（略）破壁斷軒の下に生を享けてパンを咬み水を飲む身も天ならずや。其天を樂め、苟も大詩人たるものはその腦金剛石の如く、火に燒けず、水に溺れず刃も入る能はず、槌も擊つべからざるなり、何ぞ況や一飯の飢をや。汝が金剛石の腦未だ光を放つの時到らざるが故に天汝に苦楚の沙と艱難の砥とを與へて、汝を磨き汝を琢くこと數年にして光明千萬丈赫々として不滅を照らさしめむが爲也（略）汝の腦は金剛石なり。金剛石は天下の至寶なり。汝は天下の至寶を藏むるものなり（略）近來は費用つゞきて小生も困難なれど別紙爲替の通り金三圓だけ貸すべし倦ず撓まず勉强して早く一人前になるやう心懸くべし。

此の秘藏の手紙を筐底より取出す時、泉先生は眼底に感涙を湛へ、必ずおし頂いてから披見される。

厚きなさけの籠る師の手紙は、年少の弟子の死を希ふ心を烈しく鞭打つた。金剛石の腦は艱難の砥に磨かれて、光明千萬丈、數年をまたずして赫々の光を放つに至つた。

その頃「新小說」と對峙して第一流の文藝雜誌だつた「文藝倶樂部」に「夜行巡査」と「外科室」の出たのは二十八年の事で、清新にして力ある文體は先づ人の目を奪ひ、主題を把握する事の强く、熱情を以て至純の感情を描いて世人に是非を問ふ挑戰的態度は、感傷的寫實主義時代の文壇に大なる驚異をもたらした。作者は忽ち新進作家中の第一人者に數へ

られ、潑剌たる制作力は潮の如くあふれて來た。

先生みづから二三の作品の名をあげて、

世評皆喧し。褒貶相半ばす。否、寧ろ罵評の包圍なりし。

と書いて居るが、それは一部分眞實で、一部分は謙遜に出る噓である。褒貶相半ばした事は本當であらうが、之を貶す側の評者と雖も、最も注目すべき作家なりとした事は疑ふ餘地がない。

此の新進作家の特異の作風に對して、時の批評家は觀念小說或は深刻小說の名を與へた。尤も、廣津柳浪、川上眉山の如き先輩も此の派の中に數へられた。觀念小說とは、當時の文壇の主流をなす寫實主義に對して、ひとつの理想主義と見る事も出來るし、後年大に流行つたテーマ小說の先驅を爲したものと見ても失當で無い。例を泉先生の出世作にとれば、「夜行巡査」は職務の爲めには人情も、恨も、愛も捨てゝ一身を犧牲にした。その結末の數行を拔けば、觀念小說の何たるかは容易に了解する事が出來るであらう。

あはれ八田は警官として、社會より荷へる負債を消却せむがため、あくまで其死せんことを、寧ろ殺さむことを欲しつつありし惡魔を救はんとし、氷點の冷、水凍る夜半に泳を知らざる身の、生命とゝもに愛を捨てぬ。後日社會は一般に八田巡査を仁なりと稱せり。あゝ果して仁なりや、然も一人の渠が殘忍苛酷にして、恕すべき老車夫を懲罰し、憐むべき母と子を厳責したりし盡瘁を、讚歎するもの無きはいかん。

もうひとつなぞつて「外科室」を例にとると、これは醫科大學の學生が、植物園の內で高家の姬を見る。やがて九年、醫學士は病院の外科々長になつてゐたが、疾患を癒すべく雪の肌に刀をあてた美しき伯爵婦人は、彼が心に忘れぬ植物園內の姬であつた。夫人も醫學士をおもつてゐたので、みづから胸にあてた刀に手を添へて、乳の下深く掻切つた。醫學士もその後を追つたのである。

青山の墓地と谷中の墓地と所こそは變りたれ、同一日に前後して相逝けり。

語を寄す、天下の宗教家、渠等二人は罪惡ありて、天に行くことを得ざるべきか。

今にして見れば、テーマは幼稚だといひ捨てられさうだが、當時に於てはその熱情のはげしさに於て、常識以上遙かなるものであつた。夫ある妻が他人を想ひ、夫ある妻を他人が戀する、その熱烈なる至情を咎むるなと、此の戀愛至上主義の作者は、道學者に對して勇しく叫んだのである。

更に大膽極まるのは「海城發電」で、主題は矢張職務の神聖を說くものゝやうであるが、一篇を構成する事件としては、愛國心と人道主義の對立を取扱つてゐる。時は恰も日淸役直後だ。月琴を彈いても國賊呼ばはりされたり、石つぶてを打たれたりした時代に、作者は敢然としてあやまれる愛國心を非難したのである。

予は目擊せり。

日本軍の中には赤十字の義務を完うして、敵より感謝狀を送られたる國賊あり。然れども、また敵愾心のために淸國の病婦を捉へて、犯し辱めたる愛國の軍夫あり。

小說といへば、支那傳來か、江戶時代から持續きの、架空物語を文章の綾で讀ませるものと思つてゐたところへ、少なくとも自分達の當面の問題となり得る人生の矛盾や葛藤を端的に把握し、力強い表現力で描寫し、熱情を籠めて讀者の贊成を求めたのであるから、今迄考へてゐた小說の概念とは甚だ違ふものが出現したわけだ。當時の知識階級の代表者たる大學生が、就中此の作者を讃美したのは當然であらう。

しかし泉先生の持つて生れた浪漫趣味は、長く此の境地に止まる事を許さなかつた。現實世界に感激の純情をもつて呼びかける態度をとつたのは束の間で、やがて作者の情熱は、他の對象を求めて遠く去つた。それは何であるかといふに、超自然の神秘境に憧憬のおもひを寄せる事であつた。「妙の宮」「蓑谷」「龍潭譚」の如きがそれで、やがて兩者は打つて

ひとつとなり、泉鏡花先生の作風を定めたのである。

現代の文章の普通の體をなす言文一致は、二葉亭四迷と山田美妙齋によつて始められたものだと傳へられるが、明治二十年代には、小說は多く文章體だつた。尾崎紅葉先生は「豆腐と言文一致は大嫌ひだ」と揚言して居たと聞くが、そのお弟子の泉先生も、二十年代には殆どすべて文章體で書いて居た。尤も個性の强い先生の事であるから、同門の他の人々のやうに、紅葉先生張の文章を書く事はせず、森鷗外先生や森田思軒居士の飜譯調をとり入れた自分一流の雅俗折衷體を用ゐた。

夜半渠の如き姿態と氣色とは、最も良く自殺に適せり。予は直ちに「貴女身を投げるのではありませんか。」と問はむとせり。斯く謂はゞ、戯るゝに似たらむ。他に人無き時、諧謔以て生面の婦人に狎むべからず。或は「若し姉さん氣を着けておいでなさいよ。」こはまた要らざる御世話なり。予は若年男子の身、老婆にあらずして奚ぞ這般の深切を說くべき。（鐘聲夜半錄）

見本を示すとこんなものだが、しかし御大將紅葉先生さへ後には言文一致を採用するやうになつた位だから、泉先生も明治三十年前後から文體を一變した。

私の詮索にあやまりが無ければ、三十年四月の「新著月刊」の卷頭を飾つた小說「化鳥」が、泉先生の言文一致體の最初のものであらう。そのかき出しは斯ういふのである。

おもしろいな、おもしろいな、お天氣が惡くつて外へ出て遊べなくつてもいゝや、笠を着て、蓑を着て、雨の降るなかをぴしよぴしよ濡れながら、橋の上を渡つて行くのは猪だ。

續いて翌月の「文藝俱樂部」に出た「堅パン」になると、すつかり手に入つたもので、思ひ切つて力强くたゝみ込み、一ひた押しに押して行く急調子のものとなつた。

「入らつしやい！」

椎の野郎が其聲といつたらない、腸を絞り出して打つつけるやうな音であるから、客を呼ぶやうな容易なことではない、乗車を勸めるといふやうな手輕なものではない。

まるで其九段の上に群つてる人を、坂下の總井戸の處に居て、引摑んで胸倉を取つて、するずると馬車の中へ引摺込まうとする聲だ。恐しい聲だ。

こゝ迄來ると、その後三十年たつた昭和時代の小説の文體と何等の變りがない。

ところが先生は、言文一致體の文章を意の儘になし得ると仝時に、更に飛躍を試みた。文章の音律を第一とする事である。

僕はかの觀音經を讀誦するに、訓讀法を用ゐないで、音讀法を用ゐる。蓋し僕には觀音經の文句――なほ一層適切に云へば文句の調子――其ものが難有いのであつて、その現してある文句が何事を意味しやうとも、そんな事には少しも關係をもたぬのである。（略）僕は唯かの自ら敬虔の情を禁じ能はざるが如き、微妙なる音調を尙しとするものである。そこで文章の死活が又屢々音調の巧拙に支配せらるゝ事の少なからざるを思ふに、文章の生命は慥かに其半以上懸つて音調の上にあることを信ずるのである。

かういふ信條から、先生は文章體と口語體との融合を試み、全く獨特の文體を創設した。

射損じたり、第一矢

淸瀏の女房、柳眉を逆立て、控への二の矢を、

「貴方！」と取つてさし出すを、屹と見て、打頷き、新三郎は取直して、再び丁と番へたのである。

思ひ切つて一歩を進み、更に秋水の瞳を凝し、姫神の御名を胸に、鎧の袖を搖直せば、白氣再び空を射て、放たすし

て疾く貫く的、矢唄可矣、飛禽の翼縫ふ可き也。

曳悶め、きり〳〵とメめ、兵弗と切つて放す、弓は大浪を打つて返した、矢響き高く白羽の神箭、逶に霏々として、颪と相打つ雪一片

さて手應は胸にあつた。新三郎は見る見る中、㓨然として、心ひらけ、鏘然として文字盤あり、腹案成んぬ、立處に。（白羽箭）

これよりさき、泉先生は素晴しい創作力を示して幾多長短の名篇を世に問ひ、浪漫派の大道を打開した。當時第一流の雜誌の創刊號、正月號の卷頭には、爭つて先生の作品を載せ、老舖春陽堂が自慢の年頭初刷には、必ず先生の單行本を市に出した。

森鷗外先生の小説「灰燼」の中には、慶應義塾の學生二人が、互にまだ口をきいた事は無いのだけれど、一人の讀んでゐる小説が、「春陽堂で出した、見覺えのある鏡花の小説」なので、他の一人がいきなり聲をかけるところが書いてある。

（略）そして、すぐに「君は鏡花をどう思つてゐますか」と疊み掛けて問ふのである。節藏は「君も崇拜家の一人ですね」と反問して、自分の意見は云はなかつた。

「さうです。大好きです。」相手は熱心に答へて、「露伴とはどうでせう」と、是非鏡花に對する贊否の聲を聞かなくては氣が濟まないらしい樣子で附け加へた。

節藏は少しもどかしいやうな感じがしたが、窮屈な著物を已むを得ず著た積りで使ふ敬語と同じ心持で、無造作に云つた。

「そんな比較論がどこかの新聞にあつたつけねえ。僕は鏡花も好きだが、露伴も好きだ。どつちが好いの惡いのと云ふことは出來ない。僕はそれの出來ないのが當り前では無いかと思つてゐる。露伴は第一の詩人と云はれた時が過ぎ

てゐる。鏡花は今丁度第一の詩人と云はれる時が來てゐるのだ。これも今に過ぎてしまふのだね。それからいろんな人が代る代る第一の詩人に擬せられるから。（略）」

「そんな物ですかねえ。僕は鏡花の作に限つて面白くて溜まらないものですから。」

此の小説は明治四十五年の「三田文學」に連載されたのであるが、その中に描かれてゐる時代は、泉先生賣出しの頃に相違無いのである。

「君も崇拜家の一人ですね。」とある通り、當時泉先生の崇拜者はその數頗る多く、且その熱度は戀愛か宗敎に等しいものであつた。先生の門に集る者も多く、又澤山の模倣者があらはれ、その頃の新聞雜誌の懸賞小説といふと、必ず鏡花張の作品がいくつとなく集つたものださうだ。けれども、泉先生の藝術は、到底他の模倣を許さない。模倣は誰を模倣しても詰らないのが當前だが、外の人の場合には、やがてその域を脫して並行して行く道が開かれるであらうけれども、泉先生の模倣者には、此の一筋の道の外に別路もうら道も無いのである。先生の門下から遂に一人の作家もあらはれなかつたのは、極めて自然の事であらう。

はなしは些かそれたが、明治三十年代のはじめに於て、泉先生は我國文壇の第一の詩人となつた。しかし「灰燼」作中の人物がいふ通り、此の王座は長く一人の獨占する事を許さない。明治三十六年には尾崎紅葉先生逝去せられ、その頃からさかんになつた自然派の運動は、獨立獨行の浪漫派の詩人を迫害する事極めて手きびしくなつて來た。自然派の運動は我國文學史上最も目覺しく、最も有意義のものであつた。その功績の第一に數ふ可きは、荒唐無稽を本質とするが如く認められてゐた小説に、人生の眞實を取入れた事にある。美辭麗句を文學の第一義と思ひ違へてゐたのに對して、客觀的描寫の方法を示した事にある。勿論その一面に、科學と藝術との誤れる認識と、ゆき詰つた人生觀から、成長飛躍の道をとざした憾はあるが、我國の文學が急速に著しい發達を遂げたのは、自然派の努力に負ふ所多大である。

しかも、此の派の運動は、曾て無い組織だつたものだつた。紅葉露伴時代には、個人の偉さが一派をひきゐてゆく狀となつたが、自然派は、主義を共にする者が、ともにせざる者に對してたゝかひを宣した。文壇に於て、多數者の力の素晴しく發揮される時代が來た。ほんとか嘘か保證の限りでは無いが、或人の話によると、來月は誰某の作品をほめたゝへよといふ傳達が、その派の參謀本部から四方に發せられたといふ事である。既成作家は、自然主義的觀點から、何等の價値なきものゝ如く批判された、曾ては一代の寵兒だつた紅葉先生の如きも、反動的の過酷なる批評を受けねばならなくなつた。泉先生も亦同じく、默殺か、然らざれば古いといふ一語を以ていひ捨てられる運命を免れなかつた。昨日迄の第一の詩人も、その穿物を揃へた若者に迄きびしい言葉を浴せられた。斯ういふ時代だから、文學青年の大半は自然派の亞流であり、既に一家を成した者も、今日の所謂轉換を試みて、命脈をつなぐ事に腐心した。

傳ふる所が眞ならば、或る有力なる雜誌の編輯者は、泉先生に創作を依賴し、その出來上るに及んで俄かに揭載する事を拒絕した。理由は簡單で、自然派にあらざる大家の作品を載せると、自然派の連中にボイコツトを食ふおそれがあると云ふのである。

しかし、泉先生は他人に學ぶ作家では無く、己の信ずる道をまつしぐらに進む方の選手だから、たやすく轉換する事は不可能である。かなり長く續いた此の受難時代に、一層壘を高くして一人鏡花世界に閉籠つてしまつた。

けれども、自然派の天下も何時迄も續くわけが無い。なす可き事は相當にしとげ、數人の代表作家を世に出したが、やがて亞流の徒は本質を離れて、平俗凡庸の作品をもつて安んじ、身邊雜記的小說の單調に陷つてしまつた。その一方に、新しい傾向の文學は、自然主義に對抗して起つて來た。主として「三川文學」「スバル」「白樺」「新思潮」に據る作家が擡頭して來た。曾ては泉先生を崇拜してその門を叩き、後には自然派前線の鬪士の一人として先生を價値なきものゝやうにいひならはした一文人は、時の非なるを知つて遠く郷里へ落ちて行くに際し、先生の前に頭を垂れて、記念の揮毫を求めた

ときく。泉先生の眞價は、更に又新しい時代の認めるところとなつた。

明治以後の文學も幾多の變遷を經て來たが、殆んどその最初から今日迄、泉先生は常に別格の一枚看板で、その作風は全然類を絕してゐる。大體論として、明治以後の文學の特徵は、その以前のものに比して寫實的である。時代々々に從つて、さまざまの傾向は示しながらも、少なくとも其の描寫法は、寫實に即してゐるものが多く、然らざるものは極めて少ない。ところが泉先生は「冠彌左衞門」の昔から、寫實を旨としないのである。多くの作家が希ふ、あるがまゝを描いて眞實感を出す事は、先生にとつては第一義の問題で無く、先生としては、寧ろある可らざる事を描いて迫眞感を出さうとするのである。

先生は見たものを其儘再現させようとはしない。それよりも、自分の欲する世界をつくり上る事に努めるのである。客觀世界の散文的眞實には何等の興味が無く、理想世界の美を讃美する事に忙しいのである。これが先生の一切の心的活動の方向を決定する。好きと嫌ひと、いゝ事と惡い事と、憧憬と反抗と、美と醜と、善玉と惡玉と、讃美と罵倒と、すべて極端なる對立を成して、鏡花世界を形成する。信仰するものは極端に尊く、然らざるものは亂離忽敗である。

先づ先生の信仰讃美の著しいあらはれは、神佛、父母、紅葉先生、江戸つ子、美人、藝術、戀愛に對する熱情である神佛の存在は、極端に臆病で神經質の先生に、大なる安心を與へてゐる。麹町下六番町十一番地の先生の御宅の茶の間、即ち先生と奥さんが長火鉢をさしはさんで、他の家では決して見られない泉家獨特のいろいろの流儀で、日常生活の營まれてゐる神聖にして濃厚なる情愛世界には佛壇があつて、朝夕先生の信仰心を預つてゐる。往來を歩いてゐても、神社佛閣の前を過る時は、一々眼鏡をはづして禮拜する。神も佛も、先生にとつては、大好きなお化と共にあきらかに存在するのであつて、目に見えない存在だから、一層美しくなつかしく、おもふが儘の信仰の對象となるのである。

僕は明に世に二つの大なる超自然力のあることを信ずる。これを强ゐて一纏めに命名すると、一を觀音力、他を鬼神

力とでも呼ばうか、共に人間はこれに對して到底不可抗力のものである。

「おばけずきのいはれ少々と處女作」と題する談話筆記の中にかういふ一節がある。二つの超自然力の前には、人間は全然無力なのであると堅く信じれば、觀念小說時代のやうな對社會的態度を持續し得ないのは當然である。

異常なる神經の所有者泉先生は、常に鬼神力に對して畏れをいだいて居る。鬼神力は宇宙間に彌漫してゐるのだ。雷の鳴る時は前以てお腹が痛み、ひとたび雷鳴が聞えれば、見榮も外聞もなく蚊帳の中へもぐり込む。泉家に於る蚊帳の必要は、蚊の出る時節には限らない。知らない家で會合でもある時は、其處に蚊帳の用意があるか無いかが大きな心配になる。雷の次にこわいものには犬がゐる。散歩好きの先生も、これあるが爲にままにならない。そこで太いステッキを持つて出かけるが、そのステッキを犬が見つけて、かへつてあやしみはしないかといふ心配が起る。即ち向ふから犬が來ると、折角のステッキを袖でかくして逃出さなければならない。犬はよく人の心を讀む、默つて通り過る人には目もくれないが、眞青になつて逃出す人間を見れば、追かけ度なる本能が猛然と起つて來る。先生の恐怖は倍加される。止むを得ず女中を連れて歩く事を考へたが、これは萬一犬が襲つて來た時、身がはりになつて貰はうといふのだから、人道上許せないと反省して、おやめになる。次には奧さんといつしよに散歩することを企てたが、夫婦いつしよに歩く事は野暮とされてゐるので、此の手も稀にしか用ゐられない。屈強な車屋でも雇つて散歩しようかと考へてゐると、しみじみ歎息してゐるのを聞いたが、實行されたかどうか未だ審かにしない。

蠅も恐い。既に「蠅を憎むの記」がある位だから、泉家に於ては、鐵瓶の口、煙管の吸口、その外いろいろのものに、奧さん手製の筒が着せてある。中には千代紙で出來てゐるのもある。みんな蠅よけなのだ。生ものはあたると恐いから一切食べず、御酒はぐらぐら煮立てゝ飲む。海老は溺死人を食ふからいけない、あれもいけない、これもいけないで、食物の種類は極めて少しに限定され、それも奧さんの手にかゝつたもので無ければなかなか信用しない。宿屋に泊つても食

べる物は自分の部屋で煮かへし、汽車の旅で、車中アルコホル洋燈で饂飩を煮て食べるといふはかなさである。殊にコレラとか赤痢でもはやつて來やうものなら、豆腐と煮豆の外にはお菜がなくなつてしまふ有樣だ。

先生の恐がる物を數へて居てはきりが無いが、もう一つ附加へれば、世間もこわいもの丶ひとつであらう。前にも書いた通り、夫婦いつしよに家の外を歩く事を憚かるのも、世間の口を恐れるのではないだらうか。旅行はしたいが、夫婦揃つて留守にしては町内の人に申譯が無いといふやうな言葉は、先生の口から屢々きくところである。

さういふ風にこわい物が多く、それが何れも全身震へ上る程のこわさなのだが、ありがたい事には一方に觀音力があつて、これにお縋りすれば、安心して長火鉢を向ふ前に、番茶の香高く、神聖にして濃厚なる情愛世界に安住してゐられるのである。こわい物がこわければこわい程、觀音力を信仰する力も強い。その點に於て、神も佛も信じない代りに、何事も科學の力で解釋出來ると心得てゐる現代一般人は、先生のやうな情熱をもつて感謝する心を知らないのである。

先生が浪漫派である事は、科學者が自然主義者であると同樣當前の事だ。だから、寫實派の大家尾崎紅葉先生の門下となり、神の如く崇拜しながら、なほ且個性の赴くがまゝに、異なる道を踏んだのである。

超自然力に對する信仰を持つ先生は、神かくしにあふ子供、幻を見る人、深山の夜更には草木も禽獸も人語を解して不思議を物語る場面をこそ描け、自然派以後の日本文學の一特色となつた家常茶飯事、身邊雜事を平面的に描く事は、全く顧みない所である。理想世界を構成する爲めには、ありのまゝの世の姿は往々邪魔になるから、兎角きびしい嘲罵を加へられ勝だ。理想世界の唯美境を讃美する一方に先生の心は常に現在の世の中の醜惡面に對して反撥する。例を初期の作品にとると、うでの修練に對する尊敬から「取舵」が生まれ、義俠心に對する熱情から「義血俠血」が生まれると同時に、衆俗に對する反抗から「豫備兵」が生まれ、威張つた奴を叩きふせる精神から「金時計」「大和心」「鐘聲夜半錄」が生まれた。極端な例は「貧民倶樂部」で、上流貴族に對抗する四谷鮫が橋の貧民窟の一團を描き、作者は後者に味方して前

者の秘事をあばき、僞善を罵り、「遂に彼等を屈服せしめるのである。

先生の觀音力を賴む心は、對人關係に於ても同じ力を以て發表される事がある。父母に對する信賴は、神佛にむかふと等しく、年下の少年が年上の美女を慕ふ心持にも、神佛に縋るやうな絕對信賴が伴ふ。師に對する弟子の信仰は、紅葉先生をモデルにした人物をかりてあらはされる、萬一紅葉先生又は紅葉先生の作品に對して惡しざまにいふ者があるなら、泉先生は生涯その者と盃のやりとりをしないであらう。

だが何といつても、鏡花世界の本舞臺で、「作者の理想を一身に荷つてはなばなしく活躍するのは美女である。先生は頗るつきの女性讃美者だ。但し醜婦は此の限りで無い。明治三十年に發表された「醜婦を呵す」といふ一文は、最も痛快明白に此の事實を宣言したものである。

村夫子は謂。美の女性に貴ぶべきは、其面の美なるにはあらずして、單に其意の美なるにありと。何ぞあやまれるの甚しき。

かういふ書出しで、男子が花鳥風月を樂むのは、畢竟するに未だ美人を得ざるものか、或は戀に失望したるものゝ萬止むを得ずしてなす負惜の好事に過ぎない、宇宙間最も美なるものは女で、女たる以上は美ならざるべからずと喝破した。

薔薇には恐るべき刺あり、然れども吾人は其美を愛し、其香を喜ぶ。婦人もし艶にして美、美にして艶ならむか、薄情なるも、殘忍なるも、殺意あるも亦害なきなり。（略）

希くば、滿天下の妙齡女子、卿等務めて美人たれ、其意の美をいふにあらず、肉と皮との美ならむことを、熱心に、忠實に、汲々として勤めて時のなほ足らざるを憾とせよ。讀書、習字、算術等、一切の科學何かある、唯紅粉粧飾の餘暇に於て學ばむのみ。（略）

あはれ願くば巧言、令色、媚びて吾人に對せよ。貞操淑氣を備へざるも、得てよく吾人を魅せしむ。然る時は吾人其

恩に感じて、是を新しき床の間に置き、三尺すさつて拜せんなり。

かういふやうな美人禮讃は、やがて先生の唯美主義的傾向を示すものであるが、これを以て直ちに女は男の爲めに美しければいゝ、男のおもちやに過ぎないのだといふ意味に解釋するのは間違ひで、女性崇拜の先生は、女——或は美しき女に限る——を男に隷屬するものとは考へない。反對に、女も獨立、自由、我儘、奔放でなければならないのである。之を許さず、手枷足枷を強ゐる道學者は、屢々作品の中に引摺出されて、袋叩きにあはされる。殊に、結婚によつて女の自由の束縛される事に對し、先生は熱烈なる語をつらねてその非を鳴らし、女の肩を持つ。

明治二十八年に發表された「愛と婚姻」といふ論文は、先生の戀愛觀を知るべき合鍵だ。

媒酌人先づいふめでたしと、舅姑またいふめでたしと、親類等皆いふめでたしと、知己朋友皆いふめでたしと、渠等は欣々然として新夫婦の婚姻を祝す、婚姻果してめでたきか。

冒頭にかういふ疑問を提出して、當時二十三才獨身童貞の先生は、婚姻は當事者本人逹にとつて決してめでたい事では無いと喝破した。

一旦結婚したる婦人は（略）吾人は渠を愛すること能はず、否愛すること能はざるにあらず、社會がこれを許さゞるなり。愛することを得ざらしむるなり。要するに社會の婚姻は、愛を束縛して、壓制して、自由を剝奪せむがために造られたる、殘絕、酷絕の刑法なりとす。（略）

妻なく、夫なく、一般の男女は皆たゞ男女なりと假定せよ。愛に對する道德の罪人は那邊にか出で來らむ、女子は情のため其夫を毒殺するの要なきなり。男子は愛のために密通することを要せざるなり。否、たゞに要せざるのみならず、爾く不快なる文字はこれを愛の字典の何ページに求むるも、決して見出すこと能はざるに至るや必せり。

結局戀愛の自由を主張して「婚姻は蓋し愛を拷問して我に從はしめむとする、卑法なる手段のみ」と叫んだ。尤も此の

論文の最後には、結婚はめでたくはないが、社會の爲めに身を犠牲にして行ふものであるから、慇懃に新夫婦に向つて感謝すべきであると說いてゐる。

生れながらの浪漫派なる泉先生の思想には、常に自由を欲し、束縛を嫌ふ心持が強い。從つて血の通は無い道德はいさぎよく踏破る事をよしとする。何を置いても讚美せねばならぬ女性の上に束縛を加へるものは憎む可きで、世上の亭主が女房よりも大きな面をして威張つてゐるのなどは、先生の任俠到底默視してはゐられないのである。鏡花世界に於ては、いかに多くの美しき妻が絕大の讚稱を受る一方に、いかに多くの亭主が極端なる嘲罵をかうむるか。妻の美を高調する爲に、亭主は薄野呂で、やきもちやきで、鼻の下が長い事になる。かういふ幾多の御亭主が、作者の後光を身に浴びて美しい女房に、面罵され、まをとこされ、間拔けよばはりされる運命を背負はされる。通俗小說常套の手段は、佳人に配するに才子を以てするのだが、鏡花世界の夫婦は大概不釣合だ。それは作者が、婚姻によつて結ばれた夫婦を讚美せず、惚れた同志の戀愛ばかりを美しいものとするからである。そこで美しい妻を婚姻によつて得た亭主は、當然手きびしくやられるのである。又此の世界に於ては、亭主は女房に惚れてゐるが、女房は亭主になんか惚れないのが多い。亭主を嫌ふ美しい女房に對して悶々の情遣瀬ない亭主は、度々先生の描くところとなつた。要するに美しい女は藝術品に等しい、一人の人間がわたくしするのを許し難しとし、公憤おのづから叱咤するが如き文字を成すのであらう。

既に、女は美しければよく、學問敎養の如きは全然無用だといふのだが、そのかはり女は、美しきが上に情熱を多分に持合せてゐなければならない。

「湯島詣」の主人公神月梓は、佛蘭西で敎育を受けた夫人を捨てゝ、數寄屋町の妓と共に死んだ。その親友龍田春吉は、二人の女を對比して夫人を罵り、蝶吉をたゝへてゐる。曰く。

先方ちやあ巴里で、麵麭を食つてバイブルを讀んで居た時に、此方ちやあ、雪の朝、顫へてるのを戶外へ突出され

て、横笛の稽古をさせられたのだ。（略）同じ我々同胞の中へ生れて來て、一方は髯を生して馬車に乘つた奴に尊敬される、一方は客とさへいやあ馬の背にまで、其の笛を以て、其の蹄を以て、勤めるんです、此間に處して板挾となつた、神月たるもの、宜しく彼を棄てゝこれを救ふべしぢやないか。（略）

總て女學校の教科書が貴夫人に化けたやうな譯で、まづ情話を聞かされると頭痛がして來るといやあ、生理上然云ふことのあらう筈はない、と云つた調子だから耐つた譯のもんぢやあない。

鰹魚は中落が旨くつて、比良目は緣側に限るといやあ、何ですか、其處に一番滋養分がありますか、と仰有るだらう。衛生盡めだから耐らない。やれ教育だ、それ睡眠時間だ、もう一分で午砲だ、お晝飯だ。お飯だ。亭主が流行感冒一つ引いても、眞先に傳染性なりや否やを醫師に質すやうな婦を、貴婦人だつて、學者だつて、美人だつて、年増だつて、女房にして居らるゝもんか。（略）

然るに蝶さんに至つては、其の今まで爲し來つた總ての、可いかい、平つたくこれをいへば苦勞だ。其の苦勞は殆ど天下に大名を爲したもの丶、堅忍苦耐した位なもんだよ、其の閲歷に對する報酬として、唯、ひたすら、簡單に神月に見捨てられまいといふことを願つて又他意なきを如何よ。其上に一意專念、神月の爲に形造るに到つては、男子須くこれがために名と體とを與ふべしさ、下らない名譽だの、財産だの、德義だのに、毛一筋も拂ふもんか。

敢てそれは蝶吉のみでは無い。思ふ男の爲めには、一切をあげてたて引かなければならない。何時でも命を捨てゝ惜まない覺悟が必要なのだ。

かういふ女性にとつて幸か不幸か、鏡花世界のいろをとこは、現代に生るべく餘りにも無力である。意氣地無く女に庇護され、けしかけられ、勵まされて、あやうく男の面目を保ち得るやうなのも少なくない。恐らく、善玉と惡玉と、强い者と弱い者と、極端と極端を對比させる事を喜ぶ先生としては、理想の女を此上も無く引立たせる爲めに、男を意氣地な

しにする事も必要なのであらう。

女性讃美者である泉先生が、今迄に描いた女は幾百人か知らないが、先生の理想を身ひとつに集める花形は藝者で、つゞいてはおいらん、貴婦人、令孃、おかみさん、むすめであるが、何れも若くて美しい事はいふ迄も無い。年寄は先生の好まないところだから、孫を可愛がり、孫に慕はれるおばあさんが稀にあらはれる位のもので、大概は嫁をいぢめたり、助平だつたり、强慾だつたり、いゝ心がけの奴は居ない。

初期に於ては、屢々年下の少年に慕はれる奥さんやむすめが、先生の思慕の情をほしいまゝに受けてゐたが、特別に興味のあるのは、「照葉狂言」や「髯題目」の如き女藝人を主役に持つものであつた。それが明治三十年代になると、俄かにおいらんが第一の座に直つた。「風流蝶花形」「辰巳巷談」「通夜物語」などが其の方の代表的のもので、案ずるに先生の新しい經驗が、取材の範圍を廣めたのであらう。威張つてゐる奴に反抗し、美しくして弱きものに同情する浪漫派の詩人にとつて、悲慘なる此の社會の女性は、哀切なる詩材を提供した。

おいらんの後を受けて、鏡花世界第一の人氣者となつたのは藝者である。「湯島詣」「起誓文」「舞の袖」にはじまつて「婦系圖」「紫手綱」「白鷺」「日本橋」の如き名篇が生れ、その他藝者がいゝ役廻をつとめる作品は數へ切れない。此の連中も亦先生によつて極端に美化され、いゝ氣持で鏡花世界を、我物顏に振舞つてゐる。

江戸讃美、下町崇拜のあらはれとして、藝者の外に、俠なおかみさんやむすめも描かれる。此の階級の中でも「三枚つゞき」の柳屋のお夏こそ、最も意氣旺んなるものであらう。無邪氣で、おきやんで、我儘で、氣が弱くて、そのくせ捨身になると何をしでかすかわからず、好きな人には甘つたれ、嫌ひな人にはつゝかゝるのが、その特質である。

さういふ江戸下町の女に對して、一方には山の手の上流階級——時には郷里金澤の豪家——の夫人や令孃が、けだかい美しさをもつて描かれる事もある。けれども、奥さん令孃階級は、階級として先生の讃美を受ける事藝者おいらんのやう

には行かない。まかり間違ふと、忽ち嘲罵の的となる運命を免れない。即ち撰ばれたる少數は素晴しくいゝめを見るのだが、然らざる大衆は、野暮と不粋の代表者としてやつつけられる。まして況んや先生の嫌ひな女學生は、人形芝居のおさんどんの如く人間ばなれをした取扱を受けねばならぬ。要するに、粋でたて引を知つてゐる下町に對して、山の手は權高かつたり、僞善だつたり、みじまひが惡かつたりして、作者の神經を苛立たせ、公憤を燃え立たせるのである。何しろ、威張つてゐる奴に對する反抗は頗る強く、華族、金持、軍人、道學者などは、屢々先生の筆端に揶揄翻弄嘲罵冷笑される。それに對して非現代的の英雄が一方にあつて、白熱の意氣をもつて鏡花倫理を說き、さかんなる聲援を受る事、恰も二つの超自然力即ち鬼神力と觀音力の對立に等しい。

さうかと云つて、泉先生は必ずしも權力階級や金持に對し、ひたむきに反抗する心を持つてゐる譯では無く、理論的に攻擊する意志も無い。寧ろその反對で、二重橋の前を通る時は、どんなに醉つてゐても必ず脫帽し、貴族や金持に對しても、不當の尊敬を拂ふやうな危險さへ持合せてゐるやうだ。さうして見ると、し先生の嫌ふのはその連中の中にすつきりない奴や威張る奴が多く、さういふ大面に對して、むらむらと癇癪が起き、默つて許しては置けなくなるものらしい。

先生の心には、年季をかけた專門家に對する職業神聖論が潜んでゐる。女の中で、特に藝者が讚美の的となるのも、そのひとつのあらはれであるが、女の藝者に於るが如く、男性の中で最上級の讚辭を浴るのは藝術家か、何か一藝に秀でた人物である。「鑿の一心」以來名工は神の如きうでを持ち、彫刻師廣常の作つた「さゝ蟹」は、夜な夜な人の枕頭を馳廻る。「取舵」の老船頭の鍛錬、「斧の舞」の老棟領の意氣、その他此の一群に屬する神人は頗る多い。稍近代的色彩を帶びたのには、學士といふ一階級があつて、その卵の官立大學生と共に、あやうく神にまつり上られんとしてゐる。傑作「風流線」の工學士水上規矩夫はその方の代表的人物で脚本「日本橋」四幕目第二場生理學教室は、その神人の道場の見本である。「婦系圖」や「白鷺」に出て來る紅葉先生の如き人物は殆ど尊敬の結晶で、その外めつかちの鐵砲の名人だの、庖丁とつては向ふものなき魚屋だの、剃刀を持たせては無敵の床屋だの、それぞれの道に於る名人達人は目白押に並んでゐる。

鏡花世界に活躍する各種の人物を一々紹介してゐてはきりが無いが、要するに先生の好きな人間と嫌ひな人間の對立

で、一方が善玉ならば、片方は惡玉である。兩花道からあらはれて、紛糾せる境涯にさまざまの葛藤を演じ、一方は聲援喝采をうけ、片方は引込めくたばれと怒鳴られる役廻を引受る。萬一惡玉の力量絶群で、善玉の力及ばず、いつ迄も舞臺中央に踏みはだかつてゐると、作者は自身舞臺にかけ上り、共に脚光を浴びながら、助太刀をして叩き殺してしまふ。登場人物は善玉か惡玉か、どつちかにきまつてゐるのだから、その葛藤は事件としては複雜でも、明治大正昭和へかけて幾多の小說家が苦心し、又得意とする心理解剖を伴はないから、解決には手間を取らないで濟む。彼等は素晴しく派手な衣裳を身につけて、色彩ゆたかなる繪畫美を描き出せば足りるのである

先生は身邊雜記小說を書かないから、他の近代作家のやうに、生きてゐる人間をつかまへてモデルとし、寫生的に描く事はしないが、そんならモデルは全然無いのかといふと、隨分大膽に使つてゐる。たゞ之を描くにあたつては、自分の好むがまゝに善玉にし惡玉にしてしまふのである。自分は人生の從軍記者で、たゞ目擊する事實を世に傳へる事を職分とすると云つた自然派の作家があつたが、泉先生は冷かな觀察者では無く、又事實の記錄者でも無い。先生の態度は野球競技の應援團のやうに熱情的で、活躍する選手を聲援しないではゐられなくなるのだ。しかも先生の英雄崇拜は、一擧手一投足さへ美化しなければ止まないのだから、先生の描く人間は、吾々と共に社會を營む人間のやうに、表裏陰影のある人間ではない。今日の社會狀態には無關心、今日の政治には無關心、時には物を食ふ事さへないのでは無いかと思はれる程、犧を知らない人物が多い。たゞ彼等は、强き感情の表現の爲めに努力する義務を負はされてゐるので、自然性の如きはいさぎよく犧牲にしなければならないのである。

しかし、それだからといつて、その人間が眞實性をもつてゐないかといふと、一概にさうとは斷言出來ない。彼等は精神的に生きる强い力を賦與されてゐる。情熱世界に於るいき方を、吾々の爲めに敎へてくれる。だが、何といつても物足り無いのは、あまりに單純なる善玉と惡玉の對立に過ぎて、人と人との複雜な交渉、心理的の面白さを缺く點にある。殊に惡玉を描く段になると、善玉に對する時のやうな熱情が無いから、作者はいゝ加減にからかひ、甚しく滑稽化して弄ぶ惡癖をあらはす。浪漫派の作者にとつては、熱情を失ふ事が何よりもおそろしいのである。

人間を思ふが儘の型にはめこんでしまう事は、先生の理想主義の結果であるが、既に性格描寫や心理描寫に左程の興味を感じない先生にとつては、それ等の人間を紛糾せる事件の渦中に投じて、その場その場の驚く可き開展と共に活躍させなければならない。先生がヌウベルやコントに大した面白味を感じないで、ロマンに終生努力を識す所以である。從つてその作風は、著しく物語風で、筋の變化を特徴とし、平凡人の日常生活には到底見出し難い驚異的の事件が多い。部分的には先生一流の主觀客觀いりまじつた、自由奔放な印象の強い描寫の筆をふるふが、全體としては物語を主とする。たまたま大がかりな物語りよりも、小品に近い小說もあつて「女客」「祝盃」の如き逸品があるのだが、先生自身はさほどに思つてゐない。それよりも話の筋で讀者を釣つて行つて、最後に得意の悲劇的頂點に引摺込み、作者の感情を思ふ存分移入し、讀者をして鏡花世界の一員たらしむる事が目的なのだ。その點に於て、先生の素晴しい表現力は、いかなる場面をも意のまゝに描出す。東西古今を通じて、泉先生ほど文字を以て自由に繪を描いた人はない。色彩と香氣と音樂と、巧妙に錯雜した描寫は、人間技とは思へない。たゞあまりに達者過る爲め、物語の頂點に辿りつく迄に、道草を食ひ、遊び過る感がある。殆んど無用に等しい名文が、一篇の大部分を占める場合も無いとはいへない

先生が物語の作者であるひとつの證據は、先生程のすぐれたる詩人にして、短詩形の詩の持合せの無い事である。先生の俳句は到底月並の域を出切れない。二三の例をあげると、

撫子やなほその上に紅さいて

ぼんぼりをかざせば花の梢かな

紅閨に簪落ちたり夜半の春

よしありて卯の花垣のおもひもの

誰が此の生れながらの藝術家の息のかゝつたものと思ふ事が出來やう。そこには、もつとも安手な型にはまつたいろどりがあるばかりだ。短い詩形に盛る可き訓練を經てゐないか、或は先天的に、物語の筋をともなふにあらざれば、詩境に達する事が出來ないのであらう。先生は詩人である。しかし小說以外の形式に於て、果して詩作し得られるかどうかは深

はしい。此の事實は先生が頭の天邊から足のさき迄小說家であるといふ强味を示すものと見ても差支へない。

浪漫派の作家にとつて熱情が生命である事は前にも述べた。然し熱情は年齡と共に內部に潛み易くなるのが普通である。泉先生の場合にも作家生活の初期に於る如き一本氣の熱情は夙に力を弱めてゐる。同時に又感受性もその若さを失つた。人生に於る經驗の淺い時代には、見るもの聞くものが珍しく　新しい事物はみんな榮養となつて肉となり、血となるがその消化力もいつ迄も續きはしない。たとへば泉先生の場合、讃美の對象たる女性は、年上の婦人、女藝人、をいらん、藝者と移つて行つたが、時代の推移が新しく生んだ女學生や、更にその次の時代の最も著しい特徵を持つて生れた職業婦人やカフエの女給は、遂に先生とは緣の無い存在である。たまたま作中にとり入れられる事はあつても、先生一流のいたづらをほしいままにさせる端役に過ぎない。

おまけに一方では先生の理想主義が、早くも鏡花世界に立籠る事を要求するので、或時期以後先生の作品の變化は消極的方面にしか開展しなくなつた。空想は無限に延るといはれてゐるが、決して眞實ではなく、その限界には直きにぶつかつてしまふ。寧ろ現實は無限の進展を持つといふ方が眞實である。

それは物語風の小說を作る人にとつて、兎角作ひ安い危險であるが、泉先生の如き藝術至上主義者さへ、あまりに讀者を目安に置いてゐやしないだらうか。先生の談話筆記の中に、昔の自分の作品を讀んだ人が、物凄い、冷い感じに打たれて讀後惡感を覺える事があつても一切御構ひなしだつたが、それはよくないと氣が付いて、なるべく快い心持を殘すやうに努めてゐるといふ意味の事があつた。その爲めであらう、時々とてつもないところに救ひの神樣が御姿を現はして、結末を目出度々々々にしてしまふ事があるが、先生の作品のひとつの特徵は、北國的の陰鬱と、錦繪や草艸紙に見るやうな殘酷美の中に惱ましい詩境があるのであるから、先生本來の愛讀者はとつてつけた幸福大團圓などは望んでゐない筈だ。もつともつと殘酷でも、もつともつと陰慘でも構はないのである。鏡花先生獨特の深刻美こそ、讀者が待設けてゐる所のものなのである。

その他にもう一つ先生の敢てした間違は、本來の神秘主義を象徵主義へ進展させずに、怪談的傾向に延長させてしまつ

た事だ。それにはうでを頼む先生として、深山幽谷に神秘を描くのはわけなしだから、ひとつ白晝日本橋の眞中へお化を出して驚かしてやらうといふ心組があつたのであらう。同時に又此の傾向は、若々しい詩情を湛へた時代の憧憬は、容易に象徴世界に入つて行かれたが、年と共に心の柔軟性を失つて、しかけ物のお化しか出せなくなつたと考へてはいけないだらうか。

人は年をとるに從つて感受性が鈍くなり、一本氣の熱情を失ふが、同時に觀察の廣さと省察の深さを加へ、人生を見る眼が圓熟して來る。人生の味は老を加へて愈々深まさるものらしい。藝術家の中でも、肉體勞働の最も少ない小說家の如きは、年をとつてこそ始めて大きい仕事が出來るのでは無いだらうか。それなのに、泉先生は年をとつたと云はれる事を何よりいやがる。たぶん旅行先の宿屋では、十才位さばをよむであらう。先生はいふ、藝術家は年齡を口にしてはいけない、年をとつたなんていふ感じを讀者に與へてはいけないと。私は此の說に服さないものである。年齡に從つて、若くものに色氣の無くなるのは、如何にも防ぎきれないと思ふ。一方に失ふものゝあるかはりに、他方に深き判斷を得るのであるから、年をとつてもちつとも驚く事は無く、羞しがる事も無い。世の味ひは愈々深きを加へ、豐かに細かなる觀察と、柔味を含む理解同情は、作品に海の如き底力と、いぶし銀の光を與へるであらう。

しかし、色氣を失ふまいとする泉先生は、何處迄も若々しい心持でゐようと努めて居られるのであらう。そこに多少の無理があつて、そのかみの純情の淸さがなく、昔の熱情の本氣が無い。感情のきめのこまかさがなくなり、しかも當然加はつて來可き靜寂の味があらはれない。

尤もそれは小說の話で、感情の激越をめあてとしない隨筆には、近來先生の心境のおちつきが滲み出して來て、此の數年間に珠玉の如き名品が、つぎつぎにあらはれ、新たなる鏡花世界の魅力を發揮してゐる。

私は此の稿を起すにあたつて、泉鏡花先生の作品研究と題し、出來る丈多くの材料を集めたが、それを纏める丈の時日を得る事が出來なかつた。止むを得ず題をあらためてその一部を玆に記したのであるが、稿終つて明治大正昭和にわたる此の巨匠の功績を數ふる事の充分で無かつたのを何よりも殘念に思ふ。(昭和參年十二月二日)

編輯者雜記

×

河上博士の論文は近頃無類の大論文だ。之を或部分伏字にしなければならなかつたのは遺憾千萬だ。博士に對しても又讀者に對しても申譯ない。只當局の手心がわからないので愼重の上にも愼重にしなければならなかつたのだ。もう一度發禁を喰つたのでは遣りきれぬ。不惡御宥恕下さい。平に、平に。

○

本月號の創作欄は異色の作品のみを蒐め得たことを喜ぶ。天外氏の久振の發表、長與氏の作品と共に珍らしいばかりでなく必ず問題となるべき力作たることを信ずる。宇野氏の清新な作風は讀者を喜ばすこと疑ない。前田河氏の作に至つては支那を舞臺とせる最近の力作で今後引續き掲載されるものであるが讀者の愛讀を切望する。

□

該博なる知識と見聞、そして鋭い觀察と皮肉な筆調——これが内田魯庵氏作「銀座繁昌記」の持つ異常な魅力であつた。三月號にも最後の篇を載せる積りで筆者も編輯者も一生懸命になつて努力してゐたのであるが、突然魯庵氏が病床につかれたので如何とも致し方なき仕儀にたち到つたのは誠に殘念である。御寛恕を乞ふ。

長らく本誌に毎號文藝評論の筆を執つてゐられた正宗白鳥氏が、海の彼方メキシコからはる〲「ある歡樂境」一篇を寄せられたことは本誌にとつて何より悦ばしい。これからは次々に氏の作品に接することが出來るであらう。

◇

拍子木の音は冷たい、紺青の空に星は深い、明徹に時代意識をつかみ快朗濶達な歩みもて讀者に迫らんとする若き編輯子の胸にも、堆き原稿の裡に夜晩くまであるときなどには偶々愛戀の熱渦に悶え、哀愁の淋しさに眼瞼の熱くなるのをも覺ゆる。と云へば笑はれるかも知れないが、まあその美しいほゝ笑みの眸もて本誌の素破らしい鋭角度的旋回を見たまへ。そこには驚異すべき第八感が反映されて居るのだ。どこへも筆とられた事のない幣原男は見よ本誌の誇負に應へられて此の快文字を發表された。河上博士の熱論淺原代議士のハムマー的痛論小汀馬場靑澤村松諸氏の好讀物其他一として金玉の文字ならぬはない。本誌の評價は高い。今月も又讀者を滿足せしむるものができたと此上なく喜ぶこの胸を憂鬱ならしむるものは政局だ。政友會の存在それ自體は日本社會の正常な發達を阻害する癌だ、こんな政黨を、ましてやかかる内閣を存在せしむる我國民の愚昧さには呆れはてる。

▽

昨日の途は明日へつゞく、而して今日の我等はその道程に在る。檢討と精算とは明日への拍車である。

本號は爛熟化膿の現代世相の剔抉に重心を置いた。堂々たる諸家の熱と力の籠れる論文集とも云へやう。

就中、河上、土方兩氏の灼熱の大論文は茲に相並んで夫々の見地より現代世相の基因を究明する。又、長與氏の創作は鏤骨琢磨の力作であり、作者も非常な自信を有せられるもの。精讀批判を俟つ。

最後に編輯者の意圖としてツアラツストラから一句借用する。

我は我が路を往く、我は我が標木に志す。
我は遲延し遲滯するものを蹴へて跳ばむ。

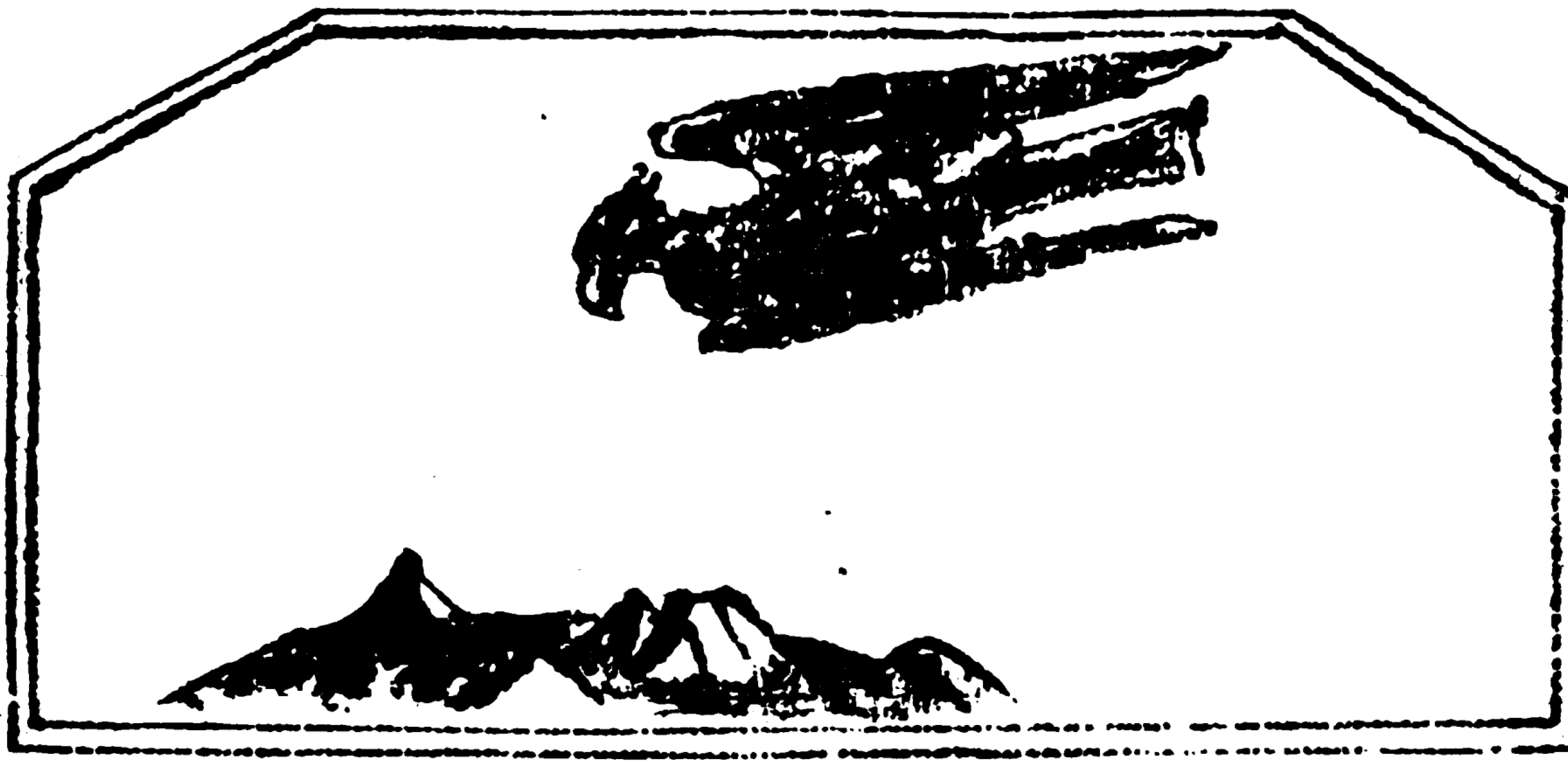
婦人

前號は發賣數日にして賣切れました。今や婦人公論は凡ゆる人々から翹望されてゐます。それは常に新鮮な示唆多き問題を提供する故にです。本號には常に新しき母の愛を扱ひました。

三月特輯 懷しき母の愛

──犬吠岬に悲しき最後の地を選んだ、作家民樹氏の愛弟の情死事件を、細田氏が特に本誌に寄せられた。涙なしには讀返し得ない、愛憐の情、切々たるもの。──

──前東京市助役松本氏との間に設けた愛兒に濺ぐ悲壯な母の涙



筑前守義興

小杉天外

第一幕

第一場　攝州三嶋江の渡頭

農家と小商店とが隣接せる村落の街路の一部なり。舞臺には河も、渡船も、船着場をも現はさず。遥望は、酒樓の屋根に遮らる。

船より上陸したる者、渡船に急ぐ者の間に交りて、半裸の擔夫、跣足の鬻女など、貧しき里民の往來。

舞臺中央に、酒、蓑笠、草鞋などをも鬻ぐ庇低き茶店あり。茶店を離れて上手に、墨色新しく、切支丹禁制の高札立つ。四五の行人、物めづらし氣に高札の下に足を停む。老いたる旅僧、衆人のために高らかに讀む。

老僧　當領内に於て、切支丹宗門かたく禁制仰出ださる、萬一相背くやからは、一家血族は申すに及ばず、緣類知音たりとも、嚴科たる可きもの也。永祿六亥年八月、奉行。皆の衆、わかりましたかな。

油賣の男　やれやれ、これでまア安堵したわい。館様をはじめお城の衆は、あらかた信者に成りやつたと聞いた時は、もうお寺も社も、この世に無くなるものかと思ひましたよ。

土器賣の男　お齡は若いが館様は、御政道にも明るい大將ぢやと申すことでござります。此うした御法度が出たからは、此の邊の邪宗門騷ぎも、最う落着くことでござりませう。

近郷の農夫　わし等村の、若い者から聞きますと、最う世の中は新しく更つた、と申すでござります、木や石で刻んだ佛様なんぞ信じ居つては、今生では時勢おくれ、未來では大事な成佛を取りはづす事になる、此う申すでござります、愚圖愚圖し居つては間に合はんぞ、早う切支丹宗に改宗なされ、此う申すのでござります。デヲス様とやら、出臍様とやら、どんな調法な佛様で、つひ溝を跨ぐ程のやさしさで、あの世の手引をして下さるか知れませぬが、先祖から代々、朝夕手を合はせて賴んでまゐつた如來様に背いて、今更どう改宗が出來ませう。

赤兒を抱へし婆　ほんにのう。禁廷様から民百姓まで、代々歸依して參つた神佛を棄てて、南蠻から渡つたばかりの、不案内な宗門へ入ると云ふのは、どう云ふ心でござりませう、わし共には、今の若い人達の料見かたが、どうも解らないのでござりますよ。

老僧　いや、人並に働く事の嫌ひな癖に、人並より樂が致したいてあひと云ふものは、新しい事には、人先に嚙りつくものでございますよ。

土器賣の男　飯盛にござる大殿様を首め、三好の御一門中は、みな此所の館様の仰有る通りに成ると申すことでござります。この畿内五箇國一統、邪宗門御法度の高札が立ちますのも、最う間近い事でござりませう。

農夫　有難い事でござります。南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。

老僧　正法は地に落ちずとは、茲を申したものでござる。邪まな物の榮えた例は、昔から一つもござらぬよ。

油賣の男　あれは何であらう。おゝ咎人ぢや、咎人ぢや。

土器賣の男　しかも女の咎人ぢや。この船場へ引かれて來るからは、追放の咎人と見える。

油賣の男　咎人にしては珍らしい、繩がついて居ないやうぢや、供の侍は腰の物まで差したまゝぢや。

土器賣の男　芥川のお城下で、切支丹門徒が二十人から首を斬られたといふ談ぢや、その連類かも知れぬ。

赤兒を抱へし婆　あんなに仲間衆が、お供に附いて參ります。

茶屋の亭主　あれは、昨日此所から上がつた、堺の津の人方ではないか。

茶屋の女房　ほんに、どうして咎人になぞ成りやつた事であらう。あの、茜染の被衣を着た腰元衆などは、まだ十六七ばかりの、それは奇麗な娘でござんしたが。

土器賣の男　これ皆さん、口を塞がつしやい、口を塞がつしやい。

茶屋の亭主　それよ。咎人の側で口を利く事は、きつい御法度であつた。

十河家の後室　腰元二人、供侍一人、いづれも囚人笠に顔を隱し、荷物を擔ひたる仲間二人を供に連れ、警固の役人に引かれて登場。但し警固の役人には、下役の足輕二人隨ふ。

警固役人磯上甚六　間のろい女の足に曳摺られて、思ひの外に時刻を過した。もう午の刻ぢや。船場役人には、既に昨夜申し付けてある筈。左源太、堺の津へ下す船の用意が出來てあるか、尋ねて參れ。

足輕左源太　かしこまりました。（退場）

茜色の被衣の腰元　仲間達、そこな包を取つて下され……。

磯上甚六　これ、何故口を利くのぢや、云ひ渡した掟の個條を忘れ居つたか。
茜色の被衣の腰元　お宥し下さりませ。船に乗ります前、頼んで置かねばならぬ大事の用がござります……。
磯上甚六　憎き小女郎、ええッ。
甚六一刀に腰元を斬倒す。供侍は甚六に斬つけんとして刀へ手を掛く、後室はそれを押止むる。
磯上甚六　堺政所家の、朱印の手形を所持する者なればこそ、情を以て繩目をも免して參つた。四人笠の内より物を申してならぬ事は、第一に申聴かしてある。主君筑前守殿の仰せには、掟は親疎を以て差等あるべからず、萬一掟を背くの砌は、余といへども構へて容赦する事なかれとある。元より禁制を侵して、城下に潜んだ邪宗門信徒の一類、成敗を受けて何の云ひ分あるのぢや。
茜色の被衣の腰元　おゝ、デヲス様。
腰元絶命。後室等默禱す。
足輕左源太登場。
左源太　堺の津へ下る船は、お觸の通り、用意が致してあります相でござります。
磯上甚六　咎人共、最早喰ふ暇は許さぬ、早う船へ乗込まれい。
後室の一行、腰元の死骸を抱へて退場。
芥川城の老女千代木、手輿に乗りて登場。
千代木　甚六殿、甚六殿。
磯上甚六　奥女中のやうぢや。何事で有らう。
千代木　甚六殿、お身の警固し參られた十河の後室さまには、最早船へお乗りなされましたか、その船は、追蒐けても間

に合ひませぬか。

千代木手輿より下りる。

磯上甚六　只今船へ乗るところで御座る。したが、堺の津の者には相違なけれど、左樣な方ではござりませぬ。

千代木　いやいや、新參のお身達の知らぬこと、宿の者に頼んで置かれた、これ、妾への此のお文が屆きました、間違はござりませぬ。

磯上甚六　併し、まこと十河の後室さまならば、直ちにお城へ訪ねて參らるゝ筈を、何故民家になど潜んでお居でなされた。

千代木　生憎と殿樣のお留守と聞き、昨夜一夜を、心ならずも民家に隱れてお居でなされたとの事でござります。

磯上甚六　拙者には合點が參らぬ。たとへ殿が他行であらせられても、城内に知つた顏の者が居らぬではなし……。

千代木　それには、お身達の知らぬ仔細が有るのでござります。

磯上甚六　身共の知らぬ仔細とは。

千代木　後室さまには、會うてはならない、疎ましい人が、お城に來て居ると聞かれたからでございます。

磯上甚六　その疎ましい人とは、松永彈正殿でござりまするか。

千代木　誰の事やら存じませぬ。甚六殿、お身も輕はづみな事を云はるゝ人ぢや、窮なんだかよいぞや……。おゝ、あの船に乘りやつたは、正しく十河の後室樣……。

磯上甚六　千代木殿、お待ちなされ……。

千代木　甚六殿、お身は十河の後室さまを、何と思うて居らるゝ、殿樣許嫁の姫君、田鶴姫さまの御生母でござりますぞへ。

磯上甚六　ぢやが、禁制の邪宗門を信ずる咎人でござる、追放の仕置を果たすまでは取締らねばならぬ我等でござります。

千代木　甚六殿、この老女千代木を、お身は何と心得なさんす。

　千代木退場。

磯上甚六　身分にこそ上下はあれ、役目の表に二つはござりませぬ。

　磯上甚六、二人の足輕退場。

　足を停めし行人の群、船着場の方を望みつゝ、次第に上手の一點に寄集ふ。四國一番の美女と云はれた、小少將さまとはあの女人か。阿波館讃岐守樣のお部屋さまから、敵の實休樣の御臺所になられた方ぢや。女子の運を一人で占めたやうな方ぢや。年寄られても、昔の面影が殘つて居やうぞ、などいふ聲が、多數の私語の間に聞える。

　二人の足輕登場。

足輕左源太　これ、其方共は何を立見いたすのぢや。退け、退け。

足輕九郎吉　隣國の民百姓は、矢叫び軍馬の嘶きに脅かされて、夜も安穩には寢られないと云ふ世に、安んじて稼業に從事する其方共は、御領内に住む身の仕合を何と心得居る。

左源太　飼留り奴等。館樣の御恩を疎かに思ふたら、その儘には置かんぞ。

九郎吉　往來を立塞いで、要もない立見などする暇に、何故自分の稼業には精を出さんのぢや。

左源太　館樣には、遊惰と云ふ事がきついお嫌ひであらせらるゝのぢや。

　群集退場。

九郎吉　昨日高札を盜んで、河へ棄へた者の有る村ぢや。あの中に、どんな大膽者がまじつて居るか知れぬ。

左源太　然うぢや。切支丹の奴等とて、隱れて居らぬとは云へぬ。

　老女千代木、十河の後室登場。後室は市女笠を脱ぎ、千代木に勞られつゝも、不安に驅られて斷えず前後を見廻す。

千代木　その腰元も、一旦は暇を遣はしましたなれど、いかに諭しても叱つても、殿様のお言葉も聴入れませぬため、終ひ其のまゝに致して居りますまでゝござります。一つは、父母の名も知らぬ、世にも不幸な身の上ゆゑ、妾をはじめ、不憫に誘はれましたからでもござります。

後室　たしか、權中納言雅綱卿のお娘御と聞きましたが、それは違つて居りましたか。

千代木　はい、それは假の養ひ親、生みの親御が外に在るげにござります。

後室　義興殿ほどの器量の人が、側女の一人ぐらゐ置かれたとて、それを彼此と不足に云ふ妾ではござりませぬ。たゞ、不意な切支丹の禁制のため、早苗が斬捨に遭ふたこと聞きやつたら、モニカの嘆きがどの樣に有らうかと、今からそれが案じられてなりませぬ。

千代木　ほんに、阿姫樣の御懇切から、態々お遣し下された早苗どのに、斯樣な間違のありました事ばかりは、申上げる言葉もない、殘念な事でござります。

後室　早苗が殺されても、誰ぞ外に、其の毒を入れた壺の形を知つた者が居られゝば、怖しいたくみ事などは、どのやうにも防ぎ得らるゝ筈なれど……。

千代木　いゝえいえ、お城の內には、誰もそれを知つた者はござりませぬ。奥を取締ります妾でさへ、今日はじめて知つた程でございます。

池上甚六登場。

磯上甚六　千代木殿、しばしの猶豫と云ひながら、べちやくちやと、何時まで手間どることでござる。

千代木　甚六殿、まァ暫くお待ち下されい。

磯上甚六　いゝや、それは成りませぬ。掟を執行ふ拙者の役目は、取りも直さず領主筑前守の名代でござる。磯上甚六、

個の私と侮つたら。足摩りしても及ばぬ後悔がありませうぞ。者共、咎人を引立てい。

甚六太刀を拔く。後室吃驚して逃げる、千代木その後を追ふ。（森

第二場　三嶋江の村外

蘆荻の茂れる河岸。河岸を背にして欝蒼たる常磐木の森あり、丹塗の鳥居立つ。國境に聳える山嶺の遠望と、溯江する白帆の近景。

森の奥より、笏拍子、和琴、横笛、篳篥の合奏より成る古雅なる神樂微かに聞え來る。

供物を捧ぐる村民、白衣の禰宜など、舞臺を過りて森の中に入る。

三好義興、家臣五人を伴ひ、下卒に乘馬を曳かせ、徒歩にて登場。

義興　道は飯盛への往復りに、幾度となく踏熟れた道ぢやが、どうやら新しく攻取つた國へでも入つた氣持ぢや。山河の眺めも、今までは氣付かずに居つた、美しい氣色に見えるわい。次郎兵衛、余は笑つても踊つても、濕し切れない氣持で胸が一杯ぢや。

家老十塚次郎兵衛　憚りながら其のお悦びは、拙者共とても同じ事でござります。あのやうに、大殿様の御同意が有りました上は、この淀川の流を堰止むる法もあれ、殿の御企を遮る物は、この世に在らう筈はござりませぬ。

義興　父上は、夢にも思はぬ立派な企ぢやと仰せられた、左程に同志の人々までが揃ふたか、祝着至極の儀ぢやと仰せられた、何事も願慮するには及ばぬ、其方の思ふがままに進むがよいと仰せられた……。次郎兵衛、父上のあのお言葉は、十人の城主を味方に附けたよりも、余には遙かに力強いものぢや。

次郎兵衛　常々仰せられる通り、この世の中の勢力が、古い年寄達の手から、新しい若人達の手に移つて参つたのでござ

ります、矢張り。時代の動きでござりませう。

義興　我々壯年者の手に移つたと申すより。まア、長く眠り居つた道理が。誰の胸にも目を覺ましたと云ふ可きぢや。父上も。余が企を尤と思はれいでは。あのやうに同意をなさる筈はないのぢや。父上のあのお言葉を聞いてから、年寄達にも。一概に隱して置く要はないと思はれてならぬ。其方は如何思ふのぢや。

次郎兵衛　至極宜しうございませう。

義興　小さな己の愛情、己の利害に目が眩んで、廣い天下と云ふ事を忘れ居つたのは、これ迄の先輩、年寄達の不覺と云ふものぢや。叔父達でも彈正でも、これだけの道理が。話したら呑込めぬ筈がないのぢや。

次郎兵衛　敵となり味方となつて。領地を奪合ふと云ふも。城を攻落すと云ふも。丁度桶の內の蟹共が。いさかひ合つて共斃れになるやうなものでござりました。いづれも。傑れた方々でござります、呑込めいでどう致しませう。

義興　よい眺めぢや、其方達も寛ぐがよい。

下卒床几を据ゑることなど。

義興　次郎兵衛、先刻父上の館を暇乞の時、母上が其方を呼戾して、何やら密談なさるゝ樣子ぢやつたが、あれは何事ぢや

次郎兵衛　母御前から、仰せられた事でござりまするか。

義興　いや、余の聽く可き筋の談でないなら、聽かうとは申さぬぞ。

次郎兵衛　殿のお耳へも、是非入れねばならぬ儀でござります。

義興　それならば、途途なぜ默つて參つたのぢや。

次郎兵衛　申上げやうにも、船場へ參りまする迄は、御馬上と徒歩とで、お談がいたしにくかつたのでございます。

義興　何事ぢや。

次郎兵衛　母御前には、何時になれば初孫の顔が見られることやらと、それのみ待つてお居でなさるゝのでございます。

義興　はゝゝゝ。何かと思ふたら、左様なたわいも無い事であつたか……。はて、女子の心と云ふものは、幾歳に成られても前へ進まうとはせいで、狹い埒の中ばかりを、ぐるぐる彷徨いて居るものと見える。

次郎兵衛　母御前には、雪野殿に身ごもられた樣子が見えぬか、何時まで其の樣子が見えぬとあらば、誰ぞ外の女子をお勸めいたすがよい、此うも仰せられてござりました。

義興　母上には、雪野の事まで耳にして居られたか……。元より、飽まで隱して置かう氣でも無かつた。だが余の城内は、余の命令のまゝに成るものと信じ居つた。余が秘密に致せと申し付けた事は、誰あつて、飯盛へ申し通する者はあるまいと思うて居つた。

次郎兵衛　如何ほどの嚴命がございました處で、母御前の慈愛の力は、啞者の口からも聽出さずには措きませぬ。また、寵愛の女子の有ると云ふ事が、誰に恥ぢて、隱し置く可き事でございませう。

義興　情慾を制し切れぬ、醜い弱い自分ぢやと思へば、余は闇の中に居つても、面を上げられぬ氣がするのぢや。

次郎兵衛　それは、切支丹の坊主などを近付けなされて、武士には何の益もない、說法などお聽きなされた爲でござります。

義興　然う手短かに云ひ消すものではない。傑れた武士に成らうと心がける身は、邪宗門だらうと魔道だらうと、假りても修養の助けになる事なら、頭を下げて聽く可きものぢや……。

神前へ捧ぐる供物を持つ村民五六人登場。森中の社に入らんとして領主の一行を憚り、路傍に土下坐す。

次郎兵衛　こりや、道を行く者の足を停めるは、館樣の御本意ではないぞ。お咎めはない、通れ通れ。

村民等退場。

義興　祭禮があると見える。なる程、神樂を奏し居る。

馬廻り瀬太夫　館樣へ御恩を報ずるための、祭禮ぢやと申すことでござります。

馬廻り禰平　切支丹宗門御法度のお觸が出ました處から、民百姓共が、俄に思立つた祭禮なげにござります。

馬廻り喜作　今日から三日三夜の間、館樣の御武運を祈り、御領內の平穩を祈るとやら申すことでござります。

馬廻り能太　實入りの秋の近づくと共に、邪宗門の騷ぎも鎭まりましたので、百姓達の喜びが一緒になり、俄かに祭禮を始めたことゝ存じます。

義興　次郎兵衞、其方は何う思はるゝ。

次郎兵衞　領民共が、殿の恩德を感謝のために、俄に催しました祭禮ならば、まことに褒め讃はすべき殊勝な義と存じます。

義興　いやいや、左樣な事ではない……。これ、神主を呼んでまいれ。

馬廻り瀬太夫退場。

次郎兵衞　殿には、舊例の祭日を更へて、百姓共の勝手に催す祭禮なれば、何ぞ、お叱りでも……。

義興　祭禮を差止めるのぢやと思ふたか。

次郎兵衞　では、神主をお召しなされたは。

義興　室町殿を主に戴き、誠實無私の同志と力を合はせて、近國より次第に遠國に押及ぼし、平和一統の新しい世を造ると云ふ事は、申すまでも無く至大至難の企てぢや。あらゆる神々、佛達の加護、冥助を得ざるに於いては、我等人間の弱い力には、中々成就すべきものではないと思ふのぢや……。

次郎兵衞　明日は將軍家のお成り、御企ての手始めの、大事な御評議も有らうと云ふ時も時、丁度申付けましたやうに、

偶然に祭禮の催しのございますのは、云はゞ、神慮の顯れとも申すものでございます、まことに目出度い吉兆かと存じます。

義興　其方も、得物を把つては人に讓らぬ武士ぢやが、物事を輕く速斷する癖が有つてならぬ。

次郎兵衛　併し殿、斯様な偶然と申す事も、神慮に叶はいでは、起らう筈がござりませぬ。

瀨太夫、神主父子を伴ひ登場

老神主　當三島江神社に仕へまする、親子の者でございます。

義興　當社に祭らるゝ神は、御名は何と申すのぢや。

老神主　事代主神と申上げます、また、葛城一言主神とも申上げます。

若神主　大國主神の、御孫に當らせらるゝ方でございます。御父は、屋楯比賣神と申上げらるゝ方でございます。

義興　左様か。我が領内に祀る神の、御名も知らずに居るとは、余の懈怠であつた。

老神主　恐入りましてございます。

義興　いや、神とさへ名の附いたものならば、路傍の石にも額づく可きが、己を知る人間の、生れながらの心と云ふものであらう。

次郎兵衛　今日の祭禮に、不意に催されたことゝ聞くが、左様でござるか。

老神主　御意の通りでございます。當村をはじめ、近郷の氏子共寄合を致し、お上へ御恩報じのため、俄に催したる儀にござります。

若神主　館様御一門の御繁榮を願ひ、館様御武運の長久を祈る諸民の熱誠が、時ならぬ此の祭禮となりました次第でございます。

義興　では、神前に捧げる祝詞をも、定めし余が武運の爲に、加護を垂れ給へと、申し加へる事であらう。

老神主　御意までもござりませぬ。

義興　數ならぬ筑前守へ、左程に好意を寄せらるゝと知つては、余も限りない歡喜を感ずるのぢや。ぢやが、武運を祈ると申す個條一くだりは、如何にも余の心に適はぬ。屹度取除けて呉りやれ。

老神主　は。

義興　其方達の耳には、嘸ぞ驕慢な言葉に聞えるであらう。見らるゝ通り若年の義興ぢや、まことに長き將來を想へば、如何に多くの困難が、余の行手に待つて居るか知れないのぢや。ぢやが、余は武士ぢや、武士の賴みは弓矢ぢや。身を守るにも功名を擧ぐるにも、弓矢の力で足りる筈ぢや。弓矢に掛けての手柄の外に、餘計な好運を願ふ意が有つたら、武士の魂の墮落と申すものぢや。必ず無用にして呉れられい。

老神主　かしこまりまして御坐います。

突然飛箭あり義興主從の左右に雨注す。森の中よりは參詣の村民等、叫喚を揚げて現はれ、舞臺を過ぎて逃げる。二人の神主も遁走す。

義興の戰場熟れたる機敏なる動作。頓て馬廻り瀨太夫と柄平二人は、鎗の鞘を拂ひ、森の奥を目指して突進す。(退場)

同じ馬廻り喜作と熊太は、弓に矢を交へ、主人をかばふ位置に身構へする。十塚次郎兵衛は、小高き堤の樹陰に伸上り

次郎兵衛　木の間に動く影は、確かに七八人でござります、外に、續く者は見えませぬ。

義興　喜作、熊太、其方共は蘆原を驅抜け、うしろから射詰めよ。

喜作、熊太退場。

同時に乗馬の轡を取る下卒、矢にあたり倒れる。乗馬跳上がる。義興下卒の股より矢を抜き取り、素早く馬に乗る。

次郎兵衛　不敵なふるまひ、滿更の野武士でも無さ相ぢや。

義興　おゝ、瀬太夫柄平が、あの勇ましさを見い。

次郎兵衛　ヤア、名も無き雑兵のひよろひよろ矢が、我等に當つて何うなるのぢや。

義興　黒い胴丸を着けた奴が見える、あれが頭らしいぞ。

次郎兵衛　あれ、堤から滑り落ちました。

義興　どうぢや、最早矢種が盡きたと見える。

次郎兵衛　ヤア、逃出しました、殿、逃出しました。馬上の殿の姿が目に入つて、俄に臆病風に誘はれたか、はゝゝゝは、御覧じませ、あの逃足の疾いのを御覧じませ。ははゝゝゝ。

義興　喜作、熊太の矢に不意を打たれたのぢや。

次郎兵衛　蘆原に潜りました、詭い奴等ぢや、はゝゝゝ。

主從は暫らく一方を眺めて立つ。

義興　敵の狙ひの的となつてこそ、譽とも誇る可きぢや。何家の敵の手か知らぬが、たとへ暫しの間であらうと、生き甲斐ある思ひを恵んで呉れたお身達に、筑前守これより禮を申すぞよ。

次郎兵衛　紀州の手の者が、此地まで潜び込まう筈はございませぬ、と云ふて、よもや六角の手の者が……。

義興　誰の手の者でもよいのぢや。この世に敵の種が盡きたなら、退屈の果て場に困ると云ふものぢや。

次郎兵衛　はんに、そんなものでございます。何時にも敵が控へ居ると思ふばかりに、明日の日を迎へる張合も有るやう

なものでござります。

義興　次郎兵衛、あの晴れた、西の空を見い。

次郎兵衛　秋晴れの播磨境の山々、まことに美い眺めでござります。

義興　余のためには、明日も天氣ぢや。

（幕）

第二幕　芥川城の一室

御主殿と稱する城主義興の居室なり。質素なれど廣し。戸は板戸。上手も鎧櫃、刀劍、弓矢などの武器が列ぶ。多くの唐書と書函が棚に積まる。明り窓に添へて螺鈿塗の机卓、卓上には地球儀あり。

開幕と共に、板戸を隔てたる奥より怒號する聲洩れ來たる。勤番衆なる若き武士二人登場。あはたゞしく舞臺を驅けぬけて、板戸の奥に入る。

廊下を踏む數人の足音が荒らかに響き、筑前守義興、數人の手に左右より抱へられ、激怒の態にて登場。

十塚次郎兵衛　殿、何卒お氣を鎭め下さりませ、殿……。

松永右衛門佐久通　御尤でござります、御尤でござります。拙者に免じて……、この久通に免じて御勘辨下さりませ。

三好甚太郎　我等でさへ腹が立つてならん、御身の立腹は皆な尤でござる。したが明日の今日ぢや、これ、義興殿、我等の頼みでござる、何卒勘忍して遣つて下され。

次郎兵衛　何を申すも、大事の場合でござります、明日は室町御所様を迎へ致す、その今日なのでございます。

右衛門佐久通　父の專斷な所業は、無禮とも無法とも、言語同斷でございます、乾度謝罪を致させます、謝罪を致さぬに

於いては、父といへども此の儀に濟ます事ではござりませぬ。殿、何卒御勘辨下さりませ。

三好甚太郎　智謀者と云つた處が、もう五十五歳の老人ぢやござらぬか、新しい時勢と申すことなどは、解らうとも思はず、また解りもしないのぢや、眞面目に取合ふには足らんのぢや、堪忍してお遣りなされ。

次郎兵衞　殿、常々殿の仰せられるお言葉を、よもお忘れではござりますまい。四方に强敵を控へた我等であれば、第一は一族一家の和親を保たねばならぬ、また家來に對しては、仲間小者の末に至るまでも、火急に用立つやう、常々目を掛けて遣はさねばならぬと、仰有つてではござりませぬか……、申すまでも無く彈正殿は、御一家第一の長老、大殿に代つて京都の政道をも司どられ……。

義興　煩い、控へ居れい。腰の物を如何いたした、これ、何故余の腰の物を取上ぐるのぢや。

三好甚太郎　まアまア、私の頼みでござる。

右衞門佐久通　何卒御勘辨を、何卒御勘辨を。

次郎兵衞　お願ひでござります、お氣をお鎭め下さりませ、お願ひでござります。

義興　芥川の城主は此の筑前守義興ぢや、余の意に背いては、庭木の一本と云へども動かしてはならぬのぢや。室の内に牢格子を仕掛け、室町殿を押籠めまゐらせる陰謀を企つるとは何事ぢや。室町殿は余の主君ぢや、彈正は余の家臣ぢや……。

次郎兵衞　彈正殿ぢやとて、殿のお意に背くと知つたら、あの樣な事はなさるまいと存じます、なんぞ之には、思ひ違ひが有る事かと存じます。

義興　御もてなしの用意に萬一粗相あつては相成らぬと存じたればこそ、諸禮諸式にも精しい彈正の力を借りたのぢや。その貴賓のもてなしに、押籠の牢格子を用意すると云ふ事は、誰の言葉を、如何に思ひ違するのぢや……。甚太郎、久

通、お身達も彈正の陰謀に同意をし、室町殿に刃向ふ所存でがなあらう、殊に久通は親子の間柄ぢや、我等の企てを裏切つて、親へ加擔をする氣なのぢや。

三好甚太郎　義興殿、何を云はるる、疑惑も事にこそよれぢや。不肖なれども三好甚太郎、一旦誓言を立てた上は、生命の限り屹度守り申すのぢや。

右衛門佐久通　いか樣、拙者にも落度はござります、あの牢格子を塡め終る迄、つい氣も附かずに居りました段は、まことに申開きの言葉もござりませぬ。なれども、斯る怖しい陰謀ゆゑの工事と知りましたら、否で共のまま差止めずに措きませうや……。

義興　なに、お身達は知らずに居つたとな……。多勢の番兵共が、鋸、鑿を打鳴らして働く態が、お身達の眼には入らなかつたか。

右衛門佐久通　それは元より存じ寄りました。たゞ、室町殿御もてなしのために、何ぞ異つた趣向があつて、俄かに始められた工事ぢやとのみ合點して居りました。

三好甚太郎　我等も左樣に心得居つた。彈正の肚から捻り出す趣向ぢや、堺にも京にも類ない茶室など普請して、室町殿を驚かす手段と見える……、此のやうに獨りぎめにして居つた。

義興　いかに寂とやらが茶道の旨とするところぢやと申して、獄室を眞似る風雅が世にあらうや……。いや、お身達を攻めるは本意でない、憎きは彈正のふるまいぢや、余を在るか無きかに扱ふあの無禮ぢや。切支丹禁制の際も然うぢや、民　百姓の心が、何日までも動搖し居つては、領内疲弊の基ぢやと申すのぢや、諸寺院、佛僧共の怨を買うては、隣國と事有る場合、敵に内通せんも慮られぬと申すのぢや、去れど余は、輕々しく禁制など觸出す可きでないと思ふた、信仰に關はる事は、熟う取調べた上に決すべきものと考へて居るからぢや、而るに彈正の申するには、十河の田鶴姫は、た

とへ切支丹の信徒であつても、禁制をした爲に許嫁の約束を破らるゝ筈はござらぬ、その點は懸念するに當らぬと申すのぢや、余の禁制に同意をせぬのは、田鶴姫に許嫁の約束を破らるゝ悲しさに、躊躇ふものと蔑んで居るのぢや、余は無念でならなかつたのぢや、それ故に、輕はづみにも其の場で法度を出す事に同意をしたのぢや。法度を申觸れて後ぢや、佛僧共から贈られた賄賂を取つた秘密が、初めて余の耳に入つたのぢや……。余は彈正を責めたのぢや、賄賂の金銀は叩き返し、佛僧共の不埒を懲しめのため、切支丹宗門の布教を許さにやならぬと云ひ張つたのぢや、すると、その賄賂の金銀は、はや一錢も殘つては居らぬと申すのぢや、何事に費消したか、飯盛の城の石垣を築き更ふるため、小豆島より斫出した石の費ばかりでも、何程何程の額に上つたと云ふ辯明ぢや……。

三好攝津守冬康登場。

義興　叔父上、叔父上には始終口を噤んでお居でなされた、叔父上、この度の彈正の我意な所業を、叔父上には如何おぼさるゝ、但し義興の立腹が誤りでござるか、それ承はり度うござる。

攝津守冬康　まア落着きなされい、私は冬康ぢや、彈正ではござらぬ。

義興　叔父上、私は無念でなりませぬ。

攝津守冬康　そのお身の胸中は、我等も充分に思遣つて居るのぢや。したが、不意に刀を拔かれたのには、我等も呆れて仕舞ふた。

義興　では、私の振舞が粗暴ぢやと、お咎めでござりますか。

攝津守冬康　まア聽きやれ。彈正の我意を振舞ふ事は、今日が初めてではない。お身のやうに、憤りに任せて斬付けやうものなら我等などは何うであらう、私か彈正か、二人の中の一人は、とうに此世には亡くなつて居るのぢや……。義興殿、お身は、まだ兒輪髷の頃よりして、一人前の武士に成らねばならぬ、人に劣らぬ武士に成らねばならぬ、優れた武

士に成らう爲とあらば、水にも火にも飛込まうと、勵んでまゐられた人ではないか、それが何うぢや、一時の憤怒を制し切れず……。

義興　いゝや叔父上、この義興は、眞の武士を心掛けて居ればこそ、驕慢を懲し、不義を斬らうとも致すのでござる……。

攝津守冬康　これ、左樣に云ひ張らるゝものではない。既にお身も、切支丹宗に耳を傾けやつたのは、路傍で說教をし居る伴天連が、亂暴者に唾を吐きかけられても、微か怒の色をなさず、顏を拭うたばかりで、また說教を續けられた談を聞いてからではないか……。

義興　叔父上、彈正が此度の無禮は、この義興の額に、尿をかけたも同然でござります……。

攝津守冬康　これ、無心ながら茶を一ぷく所望致す。義興殿にも、定めし喉が渴いてお居でゝあらうぞ。

勤番士甲　かしこまりました。（退場）

攝津守冬康　甚太郎、右衞門佐、次郎兵衞、氣の毒ぢやが、お身達は此所を遠慮して呉りやれ。

義興　いや、同席苦しうござりませぬ。孰れも私には腹心の者、あらゆる秘密を打明ける者でございます。

攝津守冬康　お身にだけ、耳に入れ置き度い事が有るのぢや。私は三嶋江から、夜船で歸らにやならぬで喃。

三好甚太郎　父上、私は此所に留まり度うございます。

攝津守冬康　何うとも勝手に致すがよい、其方は義興殿次第ぢや。

三好甚太郎、松永右衞門佐久通、十塚次郎兵衞、及び勤番衆退場。

義興　何事でござります。私からも、是非叔父上にお尋ね致したき儀がござります。

攝津守冬康　私に尋ぬる事とな。

義興　叔父上、若しや叔父上には、彈正の此度の陰謀を、前より承知して居られたではござりませぬか……、若し、前よ

り承知とならば、矢張り叔父上も、彈正と同意ではござりませぬか。

攝津守冬康　私は昨日此地へ立寄つて、昨日初めて聽いたばかりぢや、同意とも不同意とも、私はきめては居らんのぢや、我等に執つても重大な問題ぢや、熟う考へて見にやならん事ぢや。

義興　叔父上、その義輝公の位を退け、阿波御所義榮公を將軍職に据ゑると申す事は、我々三好一族の爲には、如何なる便宜、如何なる利益が有る事でございます。

攝津守冬康　何事も、變轉して極りなき當世ぢや、將來の事までは、誰にも豫言の出來るものではない。だが、近江の六角の力で將軍職にも就かれ、頻りに六角を別懇に思さるゝ義輝公に較べたなら、三好の力で擁立てた義榮公の方が、自然恩にも着られやうし、從つて、當家の便宜にも成らう筈ぢや。

義興　義輝公の六角を賴になされたのは、それは過ぎた昔の事でござりませぬか、去年の教興寺合戰この方は、専ら當家を力と賴んでお居でなさるることではござりませぬか。

攝津守冬康　お身に對しては、左樣に見せてお居でゝはあらう。

義興　いゝえ、近年の義輝公の心は、全く當家ばかりを力にして居られます、私は、確とそれを見究めて居りまする。

攝津守冬康　然うかも知れぬ。現に、やかましい將軍家の舊例を破つて、當城までお成りになると云ふ程ぢや、お身にだけは、心から信賴してお居でなさるゝ事であらう。ぢやが、その義輝公の信賴は、何日まで續くものと思やる……、私が、お身の耳に入れ置き度いと申すは、即ちこゝの事ぢや。

義興　叔父上には、權謀に長けた義輝公ぢや程に、若年の私は、籠絡されて居るのぢやと、お氣遣なさるゝのでござりますか、ははゝゝゝゝ。

茶道宗阿彌と、義興の愛婢雪野登場。

宗阿彌は客の冬康へ、雪野は義興へ、各捧げたる茶碗を置き、戸際に近く控へる。冬康はその茶を喫し了る、義興は手にも觸れず。

義興　其方共に用は無い。さがれ。
雪野　お茶は、召上り遊ばしませぬか。
義興　えゝ。早うさがり居らぬか。
雪野　お宥し下さりませ。

宗阿彌と雪野退場。

攝津守冬康　義興殿、何うしたのぢや。
義興　叔父上、是非有のまゝをお聽かせ下さりませ。いかに我意を振舞ふ彈正でも、斯程の一大事、よも彼一人の思立ちではござりますまい。我等一族の中に、同意加擔の者の在るに相違ござりませぬ。叔父上その加擔者は誰々でございます。
攝津守冬康　されば、誰々であらう。
義興　昨日彈正より談のありました節、その名を云はぬ筈はござりませぬ、また叔父上としても、それをお尋ねなさらぬ筈はござりませぬ。
攝津守冬康　いや、彈正は固く包んで居つた。ただ、いかに說勸めて、お身に同意をさせたものかと、それのみ頻りに思ひ惱む樣子であつた。
義興　叔父上、叔父上はいかに思されます。

義興は聲を潜めて云ふ。

攝津守冬康　何をぢや。

義興　よもや、父上が……。

攝津守冬康　父上が……、彈正の企てに、修理太夫殿が同意し居らぬかと云はるゝか。

義興　義興の身に執つて、生死の分れ目でござります。叔父上、何卒有りのまゝをお洩し下さりませ。

攝津守冬康　今も申す通りぢや、私は、何も包み隱しはいたさぬ。

義興　では、叔父上の御存意を聽かして下さりませ。

攝津守冬康　何の存意ぢや……。昨日一夜を飯盛に過されて、先刻歸られたばかりのお身ではないか、父上が加擔者であるか加擔者でないか、誰よりもお身が知つて居らるゝ筈ではないか。

義興　それが、私に分らなくなつたのでござります。

攝津守冬康　父上には、お身達の今度の計劃を、感嘆して居られたと云ふではないか。

義興　成程言葉では、感嘆もして下され、奬勵もして下さりました、併し……。

攝津守冬康　何ぞ、疑はしい節でもあつたか。

義興　今日は朱雀日に當る、凶日ぢや、今一夜泊つて歸られいと、再三お引留めでござりました。

攝津守冬康　そんな事が、何うして疑念を挿む種になるのぢや。

義興　彈正の手配りを首尾ようさするため、私を押へて置かるゝ手段ではござりますまいか……。それに、私を勸めて、俄かに飯盛へ參らしめました者は、彈正なのでござります……。

雪野登場。

香煎を入れし亂れ宮を捧げて、しとやかに義興に近く寄る。

雪野　何卒そのお召を、これとお着更へ遊ばしませ。

義興　なに、服を着更へよとな。誰が申付けて左樣な物を持參いたした。差出がましい、下れ。

雪野　はい。憚りながら、お召のお袖が、綻びてありますやう存じます。

義興　袖が綻びてある……。たとへ、衣服が綻びてあらうと有るまいと、密談の席を憚りなく、勝手に出入いたすは無禮ぢや、下れ。

雪野　どうぞ、お宥し下さりませ。（退場）

攝津守冬康　義興殿、何故そのやうに、つれなく物を云はるゝのぢや。お身の情一つを生命に仕へる女子でないか。お身にさへ氣の付かぬ綻を氣に懸けて、着更への物を持參いたすやさしい心を、何故汲取つては遣られぬのぢや。

義興　叔父上のお耳にまで、もう聞えて居りましたか……。耻かしい儀でござります。

攝津守冬康　いゝや、私に何も耻づる事はない。

義興　叔父上には、あの女子を如何に思召されます。

攝津守冬康　如何にと申して、廣い都の巾を搜しても、二人とはあるまじき、あでやかな女子ではないか。

義興　左樣な事ではござりませぬ、どこやら面差の、よう似た者が思ひ合はされませぬか。

攝津守冬康　似たとは、誰に。

義興　目鼻形の中に、どこやら、彈正に似た處があるではござりませぬか。

攝津守冬康　はゝゝゝ。

義興　萬一、彈正に棄てられし側女の一人が、あの女子の生みの母ぢやと申す者がありましたら、叔父上は、お採上げはなさりませぬか。

攝津守冬康　蛇を惜む者は、朽繩を見ても驚くとは此の事ぢや。だが義興殿、憤怒に狂へる心に任せて、罪なき者まで叱

りつけるやうな事は、松慮愼まねばなりませぬぞ。

義興 はい。

奥より彈琴の音流れ來る。

攝津守冬康 我々三好の血筋の者には、草の葉末に結ぶ露にも、哀れをさそはるゝ心と共に、憤怒に燃えては、天をも燒かでは措かぬと云ふ、荒らかな心がある。眞の武士を心掛くるお身などには、どちらも忌むべき悪い疾ぢや……。おゝ妙なる琴の音ぢや……。室町殿の御もてなしに、誰ぞ、京より名ある樂師を呼寄せられたのぢやな。

義興 いや、あの琴は、雪野が奏づるのでござります。

攝津守冬康 さては、今の女子の手づさみか、さてさて、これは珍らしい妙手ではある。

義興 叔父上の厚き御諭しもございますれば、今一度、彈正の意中も尋ね、私の企てをも、篤と說明して見やうかと存じます。

二人とも沈默、琴の音に聽入る。

攝津守冬康 左樣か、それを聞いては、私も安堵して歸れると申すのぢや。

義興 一家の者が、互に疑ひ合ひ、罵り合うて居る可き場合ではござりませぬ。

攝津守冬康 云はるる通りぢや。殊にお身達の企てには、多勢の味方を引付けると共に、先づ一家の者の、肚を揃へると云ふ事が急務ぢや。

義興 そこでござります、それ故に私も、耐へ難き心を押へ、最後の試みを致さうと存じます。

攝津守冬康 さすがは義興殿ぢや。

義興 私も、まだまだ心を鍛へねばならぬ身でござります。

攝津守冬康　人間は、生きて居る間が修養の續きなのぢや……。おゝ、もう日が暮れてまゐつた。供の者共は、嘸ぞ待ち疲れて居るであらう。いとまを致さう。

義興　お見送り致します。

攝津守冬康　雁が渡ると見える。

義興　なる程、雁の聲でござります。

攝津守冬康　越路には、はや冬の風が音づれ初しか。

義興　此地も、秋はなかばを過ぎました。

攝津守冬康　聽きやれ、空に屆く琴の音に、雁もいらへを落して過ぎると見える。

義興　歌人と申す者は、武骨な者の思ひも寄らぬ、ゆかしい事を仰せらるゝものでござります。

幕

第三幕

第一場　城内。庭の間を渡せる回廊と、回廊に添へる空室の一部。

舞臺暗し。木立の深き庭を隔てゝ、諸職人等の焚く夜業の篝火見ゆれど、火光は此所の回廊に達するに至らず。暗き空室内を睇視すれば、そこに朦朧として二個の人影の對坐しあるを認むべし。松永彈正久秀が、城主の小姓孫之丞と密談しつゝあるなり。

時番士鹽山宮次郎、茶道宗阿彌登場。宗阿彌手燭を秉りて前に立つ。

宗阿彌　何所へ行かれたので御座いませう。

勤番士宮次郎　ほんに、何所へ行かれたのであらう。

宗阿彌　彈正の少弼とも有らう方が、庭から石垣を飛下りて、脱走なさる筈はございませぬ。

勤番士宮次郎　道化たことを申すものでない。多勢の供廻り者を殘し置いて、夜中に何所へ脱走するのだ。

宗阿彌　だが鹽山樣、夕立の雷樣ならば、一度落ちた後は、大概鳴り仕舞ひと極まつて居りますが、殿樣のお腹立は、もうこれで二度目でございますよ。

勤番士宮次郎　殿のお留守の間に、あの樣な物を拵へた彈正殿の我意も苦々しい沙汰ぢやが、今日に限つて、あのお憤りの烈しいのは、身共も實に不思議に思うて居るよ。

宗阿彌　あれもこれも、みな怨靈のなす業だと申したら、臆病者とお笑ひになりませうが、月日もかはらぬ十年前の今日を知つた者には、まことに氣味の惡い次第でございますよ。

勤番士宮次郎　怨靈の業ぢやと云つて、殿の氣を荒立たせるのが、何うした意であらう。

宗阿彌　さあ、何うした趣向で御座いませう。そこは、怨靈に尋ねて見なければ分りますまい。

勤番士宮次郎　夜番の者の見たと云ふ幽靈は、確か男の姿と聞いて居る、して見れば、怨靈の祟が有るにしても、その孫十郎の老母や小倅では無からうと思ふが、何うぢや。

宗阿彌　いゝや、それは違ひます。夜番の衆達が臆病な眼で、幽靈を見違へたのでございます。手前の見ましたのは、確**に孫の手を曳きました、孫十郎殿の老母の姿でございました。**

勤番士宮次郎　飯盛の大殿には、武勇に優れて居なさると共に、情を知る武士とも唄はれる人ぢやが、何うして左樣なむごい事をなされたものであらう。

宗阿彌　義理の見たる大殿様に叛いて、波多野方へ内通したお咎めでございませうが、併し孫十郎殿の倅と云へば、取りも直さず大殿様には甥御でございます。

勤番士宮次郎　五人の人質は五人共首を斬られたのぢやな。さぞ、不憫な事であつたらう。

宗阿彌　暗くてよくは分りませぬが、あれ、あそこに見えます、あの一番高い樅の樹でございますよ。

勤番士宮次郎　その、死ぬまで大殿を罵しつた、老母を縛り付けた樹ぢやな。どれ、どれ。

宗阿彌　お分りでございますか。

勤番士宮次郎　梢の方が透いて見える、あの樹ぢやな。

宗阿彌　ほんに、あそこだけ星が透いて見えます、もう枯枝が出たものと見えます。

勤番士宮次郎　殿へ悪口を申した者は、その老母ばかりで、外の者は何も云はなかつたのか。

宗阿彌　お仕置に成ると極つたら、皆た意氣地はございませんでした。仕舞ひまで叫んで居たのは、老母一人だけでございましたよ……。十年と立たぬ中、三好の血筋は絶やして遣るぞ……、此う叫ぶのでございます。長慶殿に随ふ其方達も、耳に彫りつけて覺えて置け……。いやもう、その時の婆様の顔と申したら……。

勤番士宮次郎　手燭が消えはせんか。

宗阿彌　燭が有るのに、不思議な事でございます。

勤番士宮次郎　其方の手が顫へるからぢや。

宗阿彌　こゝらで手燭が消えましては、大變でございます。

勤番士宮次郎　まア待て、これ、まア待て、身共と一緒ぢやないか。

宗阿彌と勤番士宮次郎退場。

小姓春之丞　御安心下さりませ、以後彈正樣をお主と賴む私でござります、御奉公の手柄始めに、此一大事、生命に換へても仕遂げて御覽に入れまする。

久秀　よいか、人に怪まれてはならぬぞ。

小姓春之丞　その御懸念無用でござります。同役、賄方の者、一人として私に疑の眼など向ける者はござりませぬ。殊に殿樣には、私の手から差上げます物なれば、闇の中でも安心して召上がられます。

久秀……………。

小姓春之丞　彈正さま、その壺を、何卒私へ御任せ下さりませ。丁度御酒宴も、今がただ中でござります。

久秀　…………。

小姓春之丞　彈正樣、これ程精しく承はりましたからは、萬々手違ひなどはござりませぬ。その壺を、お任せ下さりませ。

久秀　まア待て。

春之丞　何を其のやうに、考へてお居でゝございます。時刻が延びましたら、御酒宴が仕舞ひになるか知れませぬ……。

黑布にて覆面したる雪野登場。その後を追うて、年若き勤番士黑川民部登場。民部は手燭を置き、雪野を捕へんとして背後より組付く、雪野は逃げ得ずして捻伏せらる。

勤番士黑川民部　や、お身は雪野殿。

雪野　何卒お離し下さりませ。

勤番士民部　合點の行かぬことぢや……。

雪野　なんの仔細もござりませぬ、たゞ、彼所の廊下を通り掛り、思はず部屋の内を、覗いて見たまでのことでござりま

す。

勤番士民部　お身を疑ふのではござりませぬ、したが、女中方には用の無いあの部屋へ、面を包んで潜込まれたからには、何ぞ仔細が無くて叶ひませぬ……。

雪野　……。

勤番士民部　雪野殿には、あの部屋に鴆毒の壺の有る事を聞かれて、それを取りに入つたのではござりませぬか。

雪野　左樣な怖しい物のあります事など、少しも存じませぬ。

勤番士民部　おやが、千代木殿の話された事は、お身も聞いて居られたでござりませう。

雪野　はい、それは……。

勤番士民部　雪野殿、その押へて居らるゝお身のふところには、何を隱してお居でゞござります。

雪野　いゝえ、何も隱して居る物はござりませぬ。

勤番士民部　お見せ下され。お身に向ひ無躾ながら、拙者も役目の表でござります。この儘では濟まされませぬ。

雪野　何卒、こればかりは……。

勤番士民部は、荒々しく雪野の懷に手を入れる、銀色の十字架あらはる。

勤番士民部　おゝ、雪野殿にも、何時の間にか……。

雪野　はい。嚴しい御法度を侵して居る者でござります。民部殿、何卒お見遁しは下さりませぬか。

勤番士民部　いや、其のお氣遣は御無用でござります。拙者も同じく、これ。

勤番士民部は、懷より我が十字架を出して示す。

雪野　さては、民部殿にも。

勤番士民部　功名、出世の夢に醉うて、奉公を第一と勵げんでは居りますろが、デウス樣の前へ出ましては、まことに罪多き民部でござります。

雪野　妾こそ、尊き御教を信じながらも、愛慾の闇路をさまよふ、罪深き日を送りますものでござります。

勤番士民部　これも、お引合せでござります。おゝ、デウス樣……。

雪野　おゝ、デウス樣。この身に下さるゝお咎めならば、茨の笞も厭ひませぬ。主とも、夫とも、妾にたゞ一人の大事の殿に、災ひ怪我の有りませぬやう、何卒お慈悲のお眼をかけて下さりませ……。

勤番士民部は、背後の闇室に、人の來る氣勢に驚き、手燭を消す。雪野に注意を耳語き、足音を潜びつゝ左右に分れて退場。

小姓春之丞　雪野殿の今の禱りを聞くにつけ、殺された早苗の無念さが、思ひ遣られてなりませぬ。

久秀　然うであらう。その仇は　彈正乾度取らして遣はすのぢや。

小姓春之丞　何うぞ、御威光を以て、あの磯上甚六の首を、早う見まするやうに……。

久秀　これ、切支丹宗を信ずる者は、決して自害を致さぬと申すことぢやが、それは眞か。

小姓春之丞　眞でござります。悲しみも苦しみも、皆デウス樣の、深いお胸から出た事としてございます。一時の苦しみに得堪へずに、勝手に己が生命を殺すことは、即ちデウス樣の御意に逆ふのぢやとしてござります。

久秀　左樣か……。それで安堵といふものぢや。

小姓春之丞　彈正樣、何時まで時刻を過しましては、今宵の役には立たぬ事になります。

久秀　うん、然うぢや。

小姓春之丞　それでは　私へこれを。

春之丞は彈正の膝元にある、小型な黑色の壺を取り　會釋して回廊へ出る。

久秀　待て、春之丞待て。

　久秀急しく室內より立ち來る。

小姓春之丞　まだ何ぞ、御懸念な事がござりまするか。

久秀　余が改めて合圖を致す、それ迄は決して用ゐる事相成らぬぞ。

小姓春之丞　心得て居ります。お暇乞の杯を頂きまする、その時でござりませう。

久秀　然うぢや。よいか。

小姓春之丞　お、誰やら向ふから……。

　小姓春之丞、庭の闇の中へ駈け込み退場。手燭を持ちたる勤番士、甲乙二人登場。

勤番士甲　彈正殿には、此所にお居でなされましたか。

勤番士乙　殿には先刻より、頻りにお待ちでござります。

久秀　きついお叱りを受けた爲かして、持病の頭痛が起つてならぬぢやて。

幕

第二場　城內の客殿

床の間の有る、檜槇の廣き室なり。燭臺數臺。夜宴の興酣なる態。

上席には細川聰明六郎信良、次に三好熊王丸、三好甚太郎、松永右工門佐久通の順に居列ぶ。聰明六郎の右手には、膳を一ひら程離れて、三好義興着席し、次に十塚次郎兵衛陪坐す。

二人の小姓　瓶子を手にして酒席を斡旋す。

義興は鼓を打ちて、松永右衛門佐久通と謡曲を謡ふ。（謡曲は小袖曾我、隅田川など、孰れにても親子の愛を叙した
る物の一節）

偶ま義興の聲かすみ、涙ぐみて俄に俯向く。鼓は膝から落ちて轉がる。

次郎兵衛　殿、いかゞなされました。

聰明六郎　義興殿には、先刻より何やら打沈んで居らるゝ體に見えたが……。

三好熊王丸　何ぞ、心痛な事でもござりますか。

三好甚太郎　生死も共にと誓つた我々ではござらぬか、義興殿、何故打明けては下さりませぬ。

右衛門佐久通　一定の敵が目に入れば、大象も瞼を閉づると同じく、日々夜々に湧いて參る俗事を、一々心に懸け居りましては、肝腎な大事が疎かに成らうと存じます。些細な事柄は、身共にお任せあれば宜しいのでござります。殿には、心を寛々と持つて居られねばなりませぬ。

義興　成程、そんな物ぢや。久通、宜う心づけて呉れた。

聰明六郎　お身一人を力と頼む我々ぢや、お身が悲みに沈んで居られると、闇路に燈火の細うなる心地ぢや。

義興　そのお言葉、辱ふござります。お身達にも、無用の心遣をさせ申した、みな義興の不束故ぢや、平に宥させられい………。さて、身がをこの業より、大事の酒興に障を入らして仕舞ふた。いで、之より膳部を更へさせ、大盃で飲みなほしを致さう。

三好熊王丸　義興殿、何事にもあれ、お身の勸めらるゝ言葉を、否む我等ではござらぬが、盃を重さぬる儀ばかりは、もう免して下さりませぬか。

聰明六郎　我等も同じ事ぢや、お身の興を醒さんも心苦しく、先程より我慢を通して參つたが、實は苦しうてならんのぢや。

三好甚太郎　お身の口から、弱蟲などゝ笑はれるも殘念ぢやが、室町殿をお迎へ致す、明日の大役を思へば、中々醉潰れては居られぬ今宵でござる。

義興　いか樣、各方の云はるゝ通りぢや……。酒色に荒む先輩達を笑ひながら、その惡い癖を眞似居つては、我々若者に、何の誇が有らう……。

次郎兵衛　殿にも、今宵は常になく過されたやうにござります。大事のお體に、障りが有つてはなりませぬ。

義興　余は、心も體も、酒の爲に煩ひを受けた覺はないのぢや。この春ぢや、豪酒自慢のあの笑岩殿と、夜の白むまで飮明かした際など、叔父上はその場に倒れて、呼んで揺ぶつても正體がないのぢや、ぢやが余は何うぢや、緣から庭へ下りて、あの崖の淸水まで顏を洗ひに參つたのぢや。はゝゝゝ。いや、これは誇にもならぬ事を、手柄のやうに自慢し居つたわい……。六郎殿、拙者にはお構ひなされず、御隨意に退席下さりませ。熊王丸、甚太郎、お身達も、勝手に息んで下され。

聰明六郎　義興殿、さらば明朝お目に掛るでござらう。

三好熊王丸　義興殿、明朝は早うござるぞ。

三好甚太郎　お身も、早うお休みなされい。

義興　お氣に懸けられな、酒はこれで止しに致す……。

　聰明六郎、三好熊王丸、三好甚太郎退場。小姓等は膳部を下げる。義興は再び物思ひに沈む。

次郎兵衛　いづれも、末は城主、領主に成られる若殿原ぢやが、杖とも柱とも、殿ばかりを力と頼んでお居でなされた

す。」

右衛門佐久通　聡明殿には、競馬の稽古を勵げんでお居でなさりますが、近頃は、見違へる程良い體格になられました。」

義興　久通、お身の所存を聴かして呉れぬか

右衛門佐久通　何の所存でござります。

義興　お身の父たる彈正が、飽くまで我々の企てを妨ぐる場合ぢや……。慈愛も、孝道も、武士の功名には思ひ更へて、親にも弓を引かるゝ意か……、何うぢや。

右衛門佐久通　殿、何故其のやうな忌まはしき事を仰られます。左樣な事は、拙者は耳に入れ度うござりませぬ、殿に執つても、益のないお尋ねではござりませぬか

義興　いかに忌まはしい事で有らうと、余もお身も、思はずに濟まされる事ではないのぢや。

右衛門佐久通　室町殿を迎へたてまつる、晴れの明日の喜びで、この胸が一杯でござります、左樣なことなど、思うて居る暇がござりませぬ。萬一の場合、萬一の場合と、先々の天氣まで案じ居つてからが、何うなるものではござりませぬ。所詮は、已が覺悟さへ固うござりますれば、武士の歩む道はたゞ一筋、雨降らば降れ、風吹かば吹けでござります。

義興　其方には、その動かぬ覺悟と云ふものが、確と出來て居ると申さるゝか……。余の心は、何故此うまで弱いのであらう。

次郎兵衛　殿には、飯盛の大殿の心を、色々と疑うてお居でなさる樣に存じまする、だがそれは、根も無いほんの廻り氣でございます。彈正殿のお勸めなさるゝ事は、彈正殿一人の料簡から出ました事でござります。昨日、お游びにも等しい略式ながら、將軍家には、上下百人の供廻りを召されて、芥川へお成りになりますると、殿よりお聴きなされました時、大殿には、逢ひ梅からお膝をすべり出られて、あのやうにお喜びではござりませぬか。次郎兵衛も、傍から大殿の

御様子は、熟う見て居りましてございます。大殿は、何事もまだ、御存知なされずにお居でござります。

義興　余も、父上を疑うては、相濟まぬ儀ぢやと思うて、戒めては居るのぢや……。

　松永久秀登場。

義興　彈正、參られたか。先刻より、如何致したかと案じて居つたぞ。

久秀　仰せ付けられました牢格子は、彼此取毀し終るところでござります。

義興　年寄られたお身に、思はぬ手數を煩はす事になつて氣の毒ぢや。

久秀　自ら蒔いた種を、自ら刈るやうなものでござります。これが當然の儀でござりませう。

義興　彈正、お身に一つ、容赦を乞はねば相成らぬ。先刻、牢格子を毀たぬに於いては、室町殿の代りに、お身を押込め置くと申したが、あれは、一時の怒りに驅られての失言とは云へ、當家第一の長老たるお身に對つて、假りにも放つ可き言葉ではないのぢや、義興の過失ぢや、何うぞ宥して呉れられい。

久秀　改まつたお言葉、彈正反つて恐縮でござります。

義興　今一つある。お身に對つて申しにくい儀ぢやが、室町殿の御内意もあり、我等同志の申合せもあるのじや。氣の毒ながら、今宵の中に、當城を立退いてもらはにやならんのぢや。

久秀　今宵の中でござりますか。

義興　途中警護の供には、二十騎なり三十騎なり、お身の望まるゝ供を添へ遣はす手筈ぢや。

久秀　いや、我等も供の者は召連れて居ります、また、供の人數が寡うては、夜道を怖るゝやうな彈正でもござりませぬ。

義興　然らば、今宵の中に當城を立退く儀は、承引して呉れるのぢやな。

久秀　何事にもあれ、殿の仰せを背く可き我等ではござりませぬ。
義興　早速の承知で滿足ぢや。これは、お身一人に限つた事ではない、飯盛の父上をはじめ、叔父達にも、みな遠慮して貰ふためぢや。矢張り、我等壯年の者ばかりの方が、室町殿にも氣楽と思さるゝ筈ぢや。
久秀　併し、お暇申上げまするに就きまして、篤と、今一言申上げ度き儀がござります。
義興　お身の申さるゝ事ぢや、謹んで聽くと致さう。したが彈正、義輝公を退けて、義榮公を將軍職に据ゑると申す、お身の大望に關はる事ならば、もう二度と口を開かるな、余の心は泰山の如しぢや、如何ほど優れたお身の辯舌でも、それに動かさるゝ余ではないのぢや
久秀　其には、左ばかり義輝公に忠勤を捧げられまして、さて、その恩賞には、如何なる報ひが得られるものと思されまする。
義興　なに、恩賞とな。
久秀　實權も、俸祿も伴はぬ、名ばかりが嚴めしい官職、位階、桐の御紋など、幾つ累ねて賜はりました處で、武士の家門に、何一つ輝きを增すことではござりますまい。
義興　いゝや、余は恩賞など目當にして、室町殿を押戴く者ではないぞ。
久秀　恩賞などには、目も吳れぬと仰せられまするか。
義興　いかにも。
久秀　さらば、殿御自身は兎もあれ、數ある家の子郎等共は、そも何を望みに、殿の馬前に生命を投出して働きまする。
義興　昔は知らず、新しき時代に立たん程の武士は、祿を殖やし、領地を擴げるばかりを目當てに、弓矢の道を勵みはせぬのぢや。

久秀　異な事を伺ひまするな。去らば、新しき時代の武士は、何を目當に致しまするな。

義興　正義と云ふ事ぢや。亂れたる此の世を平和に復し、諸民に安堵を與へる目的のためぢや。私欲、私怨の爲には劍の鞘を拂はず。正義に背く敵を滅すために戰ふのぢや。

久秀　左樣でござりまするか。いや、道理至極のお言葉と存じます。

義興　去らば、お身も同意ぢやと申さるゝか。

久秀　何人といへども、不同意の有る可きことではござりませぬ。なれども、それは後日を期し、緩々評議いたしても、道理が逃げ失せる氣遣ひはござりませぬ。彈正のお勸め致す事は、現在足元に橫はつて居りまする、その一大事の始末でござります。

義興　室町殿の、明日のお成りの事であらう

久秀　殿、そもそも當家今日の隆昌をば、殿には如何思召さるゝ……。曾祖父見性院道悅殿の、京師百萬遍にての御自害、また、祖父南宗院善室殿の、堺の津顯本寺に於いて、無念の最期を遂げさせられし事蹟は、事新しく申上ぐる迄もござりませぬ。僅か十歲の御幼少にして、傷はしくも孤兒にならせられし大殿が、天文の七年、僅かな手兵を提げて、初めて畿內の地に足を踏入れられてより、二十五年が月日の間、大小數十度の軍の場に、具さに嘗めたまへる艱難辛苦を、殿にはいかゞ思召されまする。元より、智略武勇、衆に優れし御生れつきにおはする故、末の勝利を握らるゝは當然ながら、苦戰、難戰の數々、その度毎に討死せられたる、味方幾千の人々の身の上を語らんには、長き秋の夜に夜を繼いでも、中々語り盡くす可きものではござりませぬ……。久通、よう聽け。次郎兵衞も聽きやれ。今こそ、近畿五ケ國は當家に屬し、靡かぬ草木もなしとは云へ、皆これ、三好の一族と、附從ふ家の子郎等が、汗を絞り血を流して、當代の我等に遺し置かれし、尊き賜物であるぞ。細流にも源の有るを忘れ、船を浮べる大河の心易さに馴れて、己が果報

で得た勢力のやうに心得たら、あの世にまします佛達の、冥罰が下るであらうぞ

義興　余は三好の血を受けて生れた身ぢや、今更お身の口から聞かいでも、左樣な事は熟ぅ心得て居るのぢや。御先祖代々をはじめ、父上の御艱難、當家の礎となつて、忠死を遂げられた家臣達を思うてからが、さて、室町殿の明日のお成りに當り、如何致さねばならぬのぢや。

久秀　殿にも、過去のお家の歴史を顧み給はで、忍び難き心を忍び、先づ搖がぬお家の基礎を築く爲に、力を盡されねば相成りますまい。

義興　搖がぬ基礎を築くとは、義輝公を押込め奉つり、義榮公を將軍職に据ゑよと云ふ事か……。

久秀　武門のならひ、更へらるゝ將軍ならば、幾度取更へやうと、當家の力量ではござりませぬか。

義興　いや、左樣な事は相成らぬぞ。士は信を以て立つぢや、己を信ずる者に叛くは不義ぢや、たとへ、管領執權の勢位を得るとも、不義、謀叛の汚名を受けては、三好家十三代の名譽の系圖を、泥に棄てると云ふものぢや。

久秀　一年に、花咲く春は二度と來らず、逸した好運の機會は、呼べども踵をめぐらさず。

義興　明日の機會を逸しては、生涯の運を失はんと云ふのか。惡魔の囁きにも等しき言葉ぢや。

久秀　惡魔の囁きか善神の示現か、それは、室町殿を心のまゝに動かし、三好副將軍とも成られて後、徐ろに判斷なさる可きでござらう。

義興　不肖なれども、元より弓馬の家に生れた義興ぢや、副將軍は愚か大將軍とも、器量次第武運次第で、何時輝く出世の日が廻り來ぬとは限らぬのぢや。されど、操を破り義に背き、主君と戴く義輝公に叛き奉る陰謀には、この生命の有らん限り、誰が勸めても同意はせぬのぢや。

久秀　然らば、殿の上に立たるゝ方が同意なされましても、飽くまで御同意はござりませぬか。

義興　余が上に立つ方とは誰の事ぢや……、それを申せ、その名を申せ……。

久秀は沈默、義興はますます奮激に驅らる。

義興　うん。たとへ三好の一族が、擧つて企つる謀叛であらうと、義興一人は、義輝公へ捧ぐる忠義を變へぬのぢや。忌まはしき推薦ながら、萬一、飯盛の父上を其の謀叛人の中に數ふる事あらうとも、打下ろす太刀に容赦はせぬのぢや、る。

松永久秀の白髮首を揚ぐるは、義興がこの太刀ぢや。

義興太刀を手にして蹶起せんとす。次郎兵衛と久通とは、狼狽して左右より義興を抱止む。久秀動ぜず、沈默を續け

義興　久秀聽け、空には日月の輝き、地上は正義に明るしぢや、最後の勝利は正義に歸するのぢや。

久秀　是非もなき儀でござります……。最早申上ぐ可き言葉もござりませぬ。彈正、永のお暇を願ひまする。

次郎兵衛　彈正殿、永のお暇を願はれますとな……。

右衛門佐久通　父上、して父上には、之れより如何なさる思召でござります。

久秀　主と賴む大事の殿より、斯くまで見限られた不運の我等ぢや、當家の御奉公も今宵が終りぢや。これより飯盛の城にまかり、大殿へ目通り致し、名殘の暇乞を申上げ、頭を圓め法衣をまとひ、國々の佛寺靈場など巡禮して、倒れる野邊の草原に、罪の骸を曝すばかりぢや。

右衛門佐久通　では、出家をなさるゝのでござりますか。

次郎兵衛　彈正殿、それはまた、餘りにきつい御諦めではござりませぬか、

義興　當家第一の老功者を、斯る仕儀より遁世致さするは、余も本意ではなけれど、余とは、到底兩立し難き意見を抱かるお身ぢや、女々しい一時の情に引かれて、後日に悔を遺す可きでない。飯盛の父上は知らず、いかにも余は承知致し

た、勝手に致すがよい。

久秀　早速のお許し、彌正お禮を申上げまする。これぞ今生の、殿のお顏の見納めでござります……。無躾の儀ながら、お暇のお盃が戴き度う存じます。

義興　易い事ぢや。それ、次郎兵衛申し付けい。

十塚次郎兵衛手を鳴らす。小姓甲登場す、次郎兵衛酒を命ずる。小姓甲退場。

主從、親子、各思ひ思ひの意を抱いて沈默す。蟲聲喞々として秋を鳴く。

瓦杯を三方に載せて甲小姓、瓶子を持ちて春之丞登場。甲小姓は、義興の前に三方を据ゑて退場す。春之丞は義興の前に進んで、瓶子の酒を注がんとし、忽ち手顫へ面色を變ず。久秀は驚き、次郎兵衛は怪む。春之丞は酌をし得ず、瓶子を置いたまゝ悄々として退場。

久秀　常ならぬ殿の御氣色に怖ぢたるものと見える。生涯の記念たるべき御杯、いで、お酌を致すでござりませう。

久秀俄かに膝行して酌をなす。義興一氣に呑干す。

義興　彌正、お身が望の暇の杯ぢや。

久秀その瓦盃を押戴き、元の席へ復へる。次郎兵衛は瓶子を把つて酌をす、久秀は口近く寄せながら、

久秀　思へば享祿の二年、我等の當家へ仕へし昔は、大殿には千熊丸と申上げられ、東西も辨へぬ六歳の稚兒におはされました。三好一族の宗家とは名乘られても、細川殿の麾に指圖を受ける被官に過ぎず、所領とても狹く、養はるゝ郞等の數も寡く、一領具足の侍などは、わづかに四百か五百より揃へ得られず、諸大名の中に顏を出されても、見窄らしい田舍大名でござりました。恥かしい思ひ、無念な思ひに、人知れぬ涙を呑み、然あればこそ主從とも生れたれ、あはれ此の殿を扶け上げ、三好の家を興さんずと、臍に銘じ、神明に誓ひ、三十六年を一日の如く、今日まで奉公したる我等

でござるが……。

久秀は感慨に打たれたる態にて、手に持つ瓦盃を落す、瓦盃二つに割れる。同時に先刻より腹痛を耐へ居たる義興は、苦悩の色を揚げて倒れる。

次郎兵衛　やツ、殿……。

右衛門佐久通　殿、殿、如何なされました。

次郎兵衛　何時もの御腹痛でございますか、殿、殿。

久通と次郎兵衛は義興を介抱す、久秀は義興の苦悩の態を凝視し続ける。

右衛門佐久通　いつもの御持病とは、違ふ様子でござりますぞ。

久秀　これ、騒ぐことは無い。持病のお薬が有る筈ぢや、小姓共を呼べ、早う節庵を呼べ。

義興　毒ぢや……、毒ぢや……。

義興身を起して叫び、また倒れる。小姓甲、乙、茶道宗阿彌等慌だしく出入す。義興に藥湯を飲ませんとすれども、身を踠くために飲ますること能はず。

久秀　や、三方に溢れた酒の痕が、墨のやう黒う變つた。

右衛門佐久通　やゝ、そんなら瓶子の中の酒は……。

久秀　一大事ぢや。切支丹宗門の者共が、畠山と内通し、一揆を催すとの密告がある。夜陰に紛れて、何者が潜び込んで居やうも知れぬ……。

次郎兵衛　今日三島江の村はづれで、殿の歸りを襲ふた奴は、筒井の者と白狀し居つたが、矢張り切支丹宗門の一揆でござりましたか。

久秀　次郎兵衛、其方は人數を觸れ集め、城の木戸木戸の固めを致せ。

次郎兵衛　はッ。

久秀　怪しきは、先刻瓶子持參のあの小姓ぢや、久通、其方は彼奴を取り押へ、縛り上げて閉籠め置け。

次郎兵衛、右衛門佐久通退場。

義興　久秀、久秀……、其方であらう……。

久秀　これは、御惱亂のため、囈語を遊ばさるゝと見える。

義興　無念ぢや……、無念ぢや……。

久秀　まことに、憎むべき卑怯な仕業でござります、何者にもあれ此の御無念、彈正屹度お晴し致しまする。

義興　死は覺悟して居る……、死は怖れぬ……、悲みはせんのぢや……。毒殺さるゝが無念ぢや……、久秀……、久……。

久秀　節庵は遲い、これ宗阿彌、急いで呼んで參れ。

宗阿彌　生憎と節庵老は、自宅へ下がつて居ります、道程がございませば、急のお間には合はぬか存じませぬ。

久秀　えゝ、成らば電にも乘り度い場合ぢや。急げ、急げ。

宗阿彌　は、畏まりました。（退場）

久秀　萬一の備へ、其方共に廊下と庭口へ張番いたせ。出入の者は一々吟味して通すのぢや。

小姓甲乙共、畏まつて退場。舞臺には苦惱に身を踠く義興と、久秀のみ殘る。

義興　うーん……、取亂しては死後の耻ぢや……、烏帽子を……、烏帽子を持て……、これ烏帽子……。

義興は苦惱の間より叫び、そのまゝ息絕える。久秀は暫くその面を覗込む。やがて人無き前後を見廻し、衝と立寄つ

て義興の頭に足を載せる。

久秀　そうれ、畫も夢路に心を迦らせ、己が足元を忘れ居る若者には、これぞふさはしい烏帽子でござる。空には日月の※き、地上は正義に明るしぢや、最後の勝利は正義に歸するのぢや……。腕白殿、お身より三倍も長う生きて來つた彈正を、昨日生れたやうに思うて居られたか……。

雪野息せき登場。

雪野　おゝ、わが殿には……。

雪野死骸に取りつき啼く。

千代木登場。

千代木　やゝ、最早こと切れ給へるか。

千代木も死骸に取り縋り啼く。

久秀　まことに、夢の樣なる御往生であつた……。や、餘りの悲みに心を奪はれ、飯盛への使者を忘れ居つた。

久秀室外に出でんとする時、千代木きつと睨む。

千代木　彈正殿、殿へ毒酒を侑めしは、こりや何者でござります。

久秀　されば、何者であらう。小姓、賄方を取調べられた上ならでは、何者の仕業とも云へぬ儀ぢや。

千代木　殿お一人が召上がられ、お身は口もつけられぬとやら、左樣でござりますか。

久秀　いゝや、我等はつひ一口、殿には雫もあまさず召上がられた。

千代木　そのお酒は、あれなる瓶子でござりまするな。

久秀　然うぢや。

千代木は瓶子を、後日の證據に我が手に納めんとする意にて、三方の在る所へ行かんとす。

雪野　そんなら、いとしき殿のお生命を奪りしは、これなる酒でございまするか。

雪野駈け寄り、瓶子を把る。久秀驚愕、身を躍らして雪野の手より奪はんとす。雪野は久秀の手の下を潜りて、瓶子の酒を倒まに口へ注ぐ。

久秀　切支丹宗を信ずる者は、自殺のならぬ掟と聞きしが、其方はそれを忘れ居つたか……。

久秀は悲嘆と狼狽のあまり、思はず雪野の體を抱く。

雪野　たとへ、デヲス様の尊き掟に背き、未來はインヘルの地獄へ落ちましても、殿の居まさぬ此の世に、ながらへ居る妾ではござりませぬ。

久秀抱へし手を離す。雪野は毒の苦痛に襲れ始む。己が部屋へ退りて絶命せんとする愼ましき意より、夢中に廊下を指して歩む。襖に突當る。襖の倒るゝと共に雪野も倒る。

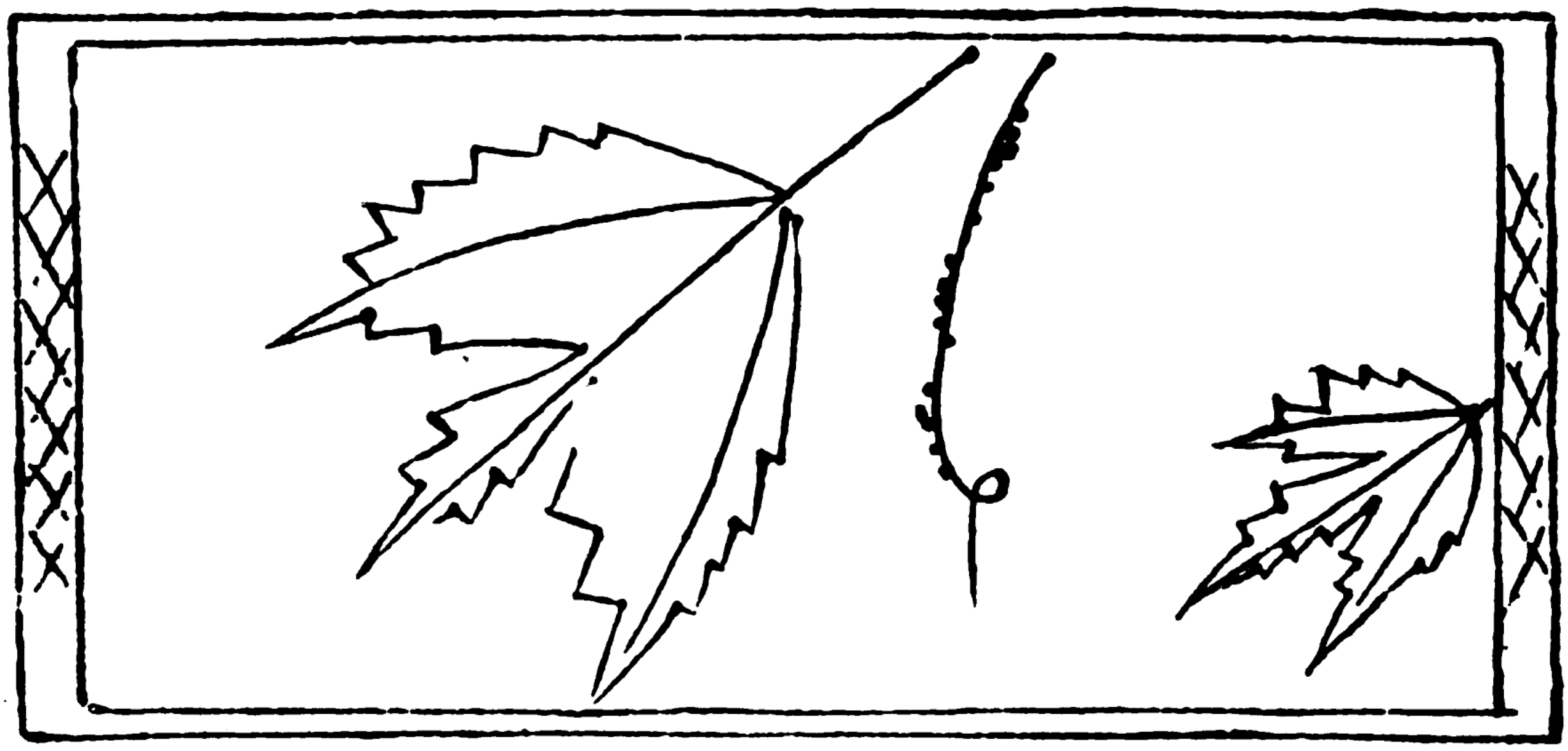
千代木　彈正殿、不憫な娘御のため、せめては親と名告つてお遣りなされませ。

久秀　いゝや、娘でも無い者に、親と名乘るいはれはない。

千代木　今目を落す娘御にも……、お身はまア、お身と云ふ人は……、何う云ふ人であらう……。

久秀　我等を忘れやつたか。松永彈正少弼藤原久秀ぢや。

幕



辰子

長與善郎

「かう云ふ女がゐましたね。妾の一寸知つてゐる女で、或る重役の奥さんなんです。しよつちふ身裝を變へるんで、カメレオンて仇名がついてゐました。一と月位丸髷にばかり結つてるかと思ふと、その次には洋服を着てゐる。もちろんその洋服もいろんな風に變るんですけど、しばらくして逢つて見ると今度は又すつかり粋な銀杏返へしに變つてゐると云ふ風なんです。さうかと思ふと地味な昔風の束髪になつたり、藝妓のやうなひつつめに結つて見たりするんですの。もと〱藝妓だつたんですけどね。それが又いかにも扮りが上手なんで、どんな風をしても似合ふんですの。だからそれを見せびらかしてゐるんだなんて悪口を云はれたもんですわ。でも一體それが何のためだつたか、お分りになつて？」

「へえ、そこに何かわけがあるんですか。」私は云つた。「まさかそれで御亭主の浮は

氣をあやつらうと云ふわけでもないんでせうね。」

「ところが實さいさうなんですからふるつてるぢやありませんか。氣の毒なほどその女は空想家なんですの。そして又まんざらそれが莫迦々々しくばかりもなかつたんです。なぜつて少くとも御亭主さんはそれですつかり奥さんが氣の毒になつてしまつて　浮は氣はしたくないと思つたつて人に云つてゐた相ですから。存外それも惡い考へぢやなかつたのかもしれませんわね。尤も惡い考へでなくつても妾のやうな貧乏人には一寸出來ない眞似ですけれどね。ところがそれから一年たつかたゝない中に突然離縁になつてしまつたんです。」

「え、離縁に？」

「えゝ、妾のお仲間ですわ。」彼女はほゝ笑むだ。「只妾とちがふところはその女に子供がなかつた事と、お實家がお金持ちだつた事ですわ。そして最後の變裝にとうとう斷髪にしてしまひましたの。——いかゞ。小説にはなりません？　尤も少し面白く出來すぎてる位ですわね。」

こんな話をする女であつた

「でも考へて見れば離縁てわりに少いもんですわね。」

私が一人でゐた或る時、彼女は又こんな事を云つた。

「なにも自分が振られて別れたのを自慢にするわけぢやありませんけれど、妾、そんな事を考へて不思議な氣がする事があるんですのよ。どうして世間の女つてあんなに我慢强いんだらうつて

そりやあね。もちろん、別れたつて世間から惡く云はれるのは女の方ですし、別れるのは損ですわ。男にして見れや子供の世話役として女房に出て行かれちや矢つぱり困りますし、女は又食べさして貰つてるんですから、そんな事で否應なしみんた繋がつちやゐるんですけど、でも、否應なしつたつてとゞのつまりになればやつぱり子供よりは自分の方が大事

ですものね。自分を振り捨てた男にたゞ食べさしてもらつて子供のお守りをしていゝ顔をしてるつてわけにもいきませんわ。——尤も今考へるとよくあんな向ふ見ずな勇氣が自分にあつたもんだと不思議に思ひますけどね。せめて、お金でも澤山もらつて別れりやよかつたんですけれど、もう其時は慾も得もなくなつてしまつて。でも齢を取ると人間慾が深くなつて狡るくなりますね。」

自分の事を「古い女」「古い女」と云ひ、又さう思ひ込んでゐるらしい彼女はかう云つて笑ふのだつた。たしかに「ノラ」のやうに女としての眞正面な苦しみ方をする氣持ちを最早「古い」とするならば、彼女も亦決してモダーンな女とは云へないに相違なかつた。五年間一緒に暮した夫と——夫に愛人が出來たために、と云つておかう——彼女は子供をつれて別れた。その時は實際子供を抱いたまゝいつそ身投げでもしてやらうかと迷つた。そしてその次ぎに現れた男——文士であつた——は彼女からその話を聞いた時、お前も古い女だなと云つて苦笑した。

本名を辰子と呼ぶ彼女は七つの時福井の藝妓家の養女にもらはれ、十二の年からお酌に出た。くはしい話は聞き忘れたが、兎に角才氣と、踊りとで一時は全盛をうたはれた。非常に小柄で、色も別に白いと云ふ方ではなく、若い時は美しかつたと云ふ人もあるが、さう美人と云はれるほどではなかつたらうと思ふ。が、一つの特徴として淡い蛾眉の下に、ふつきりの長い、よく笑ふ眼を持つてゐた。時にわざと慳貪な口の利きやうをするので、おや憤つてゐるのかと思つて見ると細い眼が笑つてゐた。——この笑ふ眼が或は彼女を不幸にしたのかも知れなかつた。尤も彼女自身は現在の自分を少しも不仕合せだとは思つてゐない。却つて呑氣でいゝと云つてゐるが、——持ち前の我儘勝氣で喜怒哀樂がはげしく、感情がすぐ色に出るので、よく敵も作つたが、大分齢も取り、（辰子と云ふ名が辰年生れを意味するとすれば彼女は私より只四つ下である）苦勞も積んだ後でつき合ひが出來たせいか、吾々は幸にしてついぞ御氣嫌のわるい處にぶつかつた事はなか

つた。

初めて彼女と會つたのは有樂座の廊下でゞあつた。私の兄が彼女を知つてゐて私達夫婦に紹介した。彼女の名は、私は知らなかつたが、踊りの上手な藝妓として私の妻も雜誌で寫眞を見た事があると云つてゐた。その後私は實に意外な處で彼女から聲をかけられたのであつた。當時鎌倉に住むでゐた私達の家の向ふ隣りに、嘗てある有名な洋畫家の別莊であつた空家があつた。ひよろ／＼した松と石とがあるばかりの庭には草が逐々と生へ、門は朽ちて、近所の子供のいゝ遊び場となつてゐた。三月半ばの或るうららかな午後、矢張りその空庭の占領者の仲間であつた私の子供達が飛んで來て、土筆が一ぱいあると知らせた。恰度仕事に倦んでゐた私はすぐ庭から下駄をつつかけて、なまぬるい潮風に頭を吹かせ乍らその朽ちた門の中に子供らの後から踏み込んだ。なるほど各枯れの白茶の下に新しい綠の見える草むらの中に、點々と咲いてゐる蒲公英や土筆の群は私の心をおどらせた。が、その荒れ果てた家を一巡して裏へ出た私は更にそこの春におどろいた。彈ねつるべの大きな井戸の傍の僅かの畑地には最早菜種が咲き、隣りから垣根越しに此方へ枝をのばしてゐる緋桃の花は既に咲き盡して、紺青の空を背景にしたその紅は早やいく分色褪せてさへゐた。外ではいつの間にかかくも闌になつてゐた春、それをまだ知らずに早春の氣でゐた自分の迂濶にも我れながらおどろいてゐたその時だつた。「先生。」と呼ぶ女の聲を私は聞いた。

先生とはどこの先生の事かとぼんやり見まはすと、緋桃のある隣りの中二階の窓に二人の女が立つてにこ／＼笑つた眼で會釋した。

「御氣嫌よう。どうも先生らしいと思つて見てましたの。覺えてゐらつしやいまして？」

女達は顏を見合せてわらつた。「あたし××辰子ですの。こちらは松野さんて、――あたしの古いお友達ですの。一寸お寄りんなりません？」

「どうぞ、妾達二人きりですの。」背の高い方の丸髷が云つた。「そこを廻はつていらつして下さればぢきですわ。」

私は不意打ちを食つたやうに面喰つた。松野と云ふ表札はよく見るが、家の作りだけを見てもどうせ固い者であらう。靜かな午後などによくぽん／＼と長閑に鼓の音を聞かすのははゝあ此の女だナと私は直感した。が、慣れ／＼しく私の事を「先生」なぞと呼ぶ辰子と云ふ女とも一面識があるだけであつたし、色氣はたつぷりなくせに妙に羞かみやで尊大な私は、殊にこんな風に洒啞々々と無遠慮に呼びかけられたりするともうそれだけで口を利く勇氣もなくなつてしまふのだ。

「あんまりきれいだもんだから子供に引つ張られてこんなとこに這入つて來ちまつたんです。」

何のためか私はだらしない帶をしめ直し乍らこんな頓珍漢の辯解をした。

「ほんとにきれいですことね。あたし達も先刻から眺めてましたの。そこへひよつこり先生が現れてらしつたんでしよ。びつくりしちまひましたわ。」

二人は又笑つて、

「ねえ、先生。あたし今度鎌倉に住みましたの。扇ケ谷の壽福寺のわきに。御散歩のお序でにお寄り下さいましな。あたしもお邪魔させて頂いて構ひません？　あたし會ふ人つたらこの松野さんきりなんですもの。」

「どうぞ。いつでも。」

招かれればどこへでもずる／＼足の向く質の私は、しかしそれも癪だと云ふやうな氣持ちも手傳つて、かう辰子に答へて、其日は引き返へしたのであつた。

豫想通り、辰子はその後私の家へごくたまにではあるが、くるやうになつた。尤もその前にもう一度私達は往來で、恰度私の上の子と同い齢位の娘と、弟子とを連れてゐる彼女に會つた。娘と弟子とはお揃ひの銘仙を着てゐたが、その小さ

い方が彼女の子である事は一見して分つた。母親に似てはゐないが豹のやうな眼をした神経質らしいその娘は顔を赧らめ、仲善さゝうに一方の手を弟子の手と繋いだまゝ私の娘達を凝視してゐた。

「こんなお連れさへなければずゐ分寄せて頂き度いんですけど。では近い中に。是非、一度。」

すぐそこだから一寸寄つては如何と誘つて見たのに對して彼女はかう答へて別れた。

松蟲會と云ふ會が彼女を中心に興されてゐた程彼女は相當の後援者を持ち、舞踊の師匠として悠にとは云へないまでも二人の娘弟子をも――半ば女中代りにではあるが――家において暮しをたてゝ行けた。負けぬ氣の彼女の踊りに對する熱心は子供の頃からであつたが、東京に出て藤間の弟子となる時でもその熱心さは恰も昔の學生がたとへば中江藤樹の門を叩く時とでも云つたやうな勢で、無理に弟子入りを許されたのであつた。それに喜び勇んだ彼女は毎朝五時には師匠の家の前に佇んで、門のあくのを待つてゐたと云ふ。多勢の門弟の中で彼女が逸早く群を抜いたのは云ふ迄もなかつた。かう云ふ藝が後日の獨立に役に立たうとは彼女も豫想しなかつたであらうが、しかしこの土台がなかつたなら、いかに「慾も得も忘れて」とは云つても、子供をつれて夫の家を逃げだすのに彼女の決心がつきにくかつたであらう事は疑へない。

×　×　×　×　×　×　×　×　×　×　×　×

「ねえ、先生。妾一體どんな女に見えます?」

諸々の新緑の中に一とこ、柘榴の嫩葉が又一段と際立つて、燃えるやうな新鮮な緑を見せてゐる頃だつた。

矢張り扇ケ谷に新居を構へた或る友を訪ねて留守を食つた私達が、ふと辰子の存在を思ひ出して、初めてその居へ廻はつて見た時のことである。恰度今稽古が濟んだ後だと云つて派手な紫の羽織姿で庭を掃いてゐた彼女は、思ひがけない私達の來襲に「あら、大變。大變。」と箒を捨てゝ慌しく家に上り座蒲團を持つて來させたり、急に室を片付けなぞしてい

ろ／＼ともてなしたが、やがて一わたり弟子の覺えのわるい苦情やら、汽車が通る度に家が「地震のやうに」搖れると云ふ文句なぞが濟むと、彼女は急須に玉露を入れながら、こんな質問をだしぬけに始めた。

「妾とても呑氣な女に見えるでしよ。がら／＼した。」

口の重い私が口を開く前に彼女はいつでも自分で先きを云ふのだつた。

「だから先生もきつと妾を出しやばりな蓮つ葉――蓮つ葉つて齡でもありませんけれど。いけ好かない奴だとお思ひんなつたらうと思ひますわ。それはちやんと分つてましてよ。ねえ、先生？」

から私を笑はせた彼女はなほもお喋りをつゞけて

「でも實はね、白狀してしまふと、妾、本當は先生にもなんでしたけど、奥樣にへんにお目にかゝり度かつたんですの。いつか有樂座の廊下でお會ひした時から。」

「なあんだ。ぢや僕は體（てい）のいゝダシにつかはれたつてわけですか。」

「どうも失禮。」くる／＼と後ろに束ねた頭を輕くさげて「ですから妾あの時、先生が「いつでも來ていゝ」つていつて下すつた時、それはうれしふござんしたのよ。」

三人は笑ひながら生温い茶を啜つた。しかし、彼女の直覺通り、私の妻と彼女とは妙に氣の合ふところがあつた。兩方田舍育ちだからだらう、と私は妻に云つた事があつたが、そのくせ幸福と云ふものに對して贅澤で、あきらめがわるく、少し馬鹿正直で、お人好しで、しかも自尊心が強く、で、つまりものゝ感じ方が似てゐた。そんな事でだん／＼辰子と云ふものを知るにつけて私の妻は彼女に厚意を持ち、同情を寄せるやうになつた。

「だから辰子さんもきつと存外苦勞性でゐらつしやるだらうと思ひますわ。又するゐ分苦勞なすつたんでせうけれど。」

妻は謙遜に云つた。

「人は見かけによりませんからね。でも自業自得ですわ。何しろひどい我儘なんですから、妾みたいな女を女房に持つたものも百年目ですわ。ですから妾前川（辰子の最初の夫）にも氣の毒だつたと思つて今ぢや同情してますわ。」

「なに、人間は我儘なのが本當でせうよ。我儘だとどうしても自分で苦勞はふへるけれど、我儘さのまるでない人間でものも又腹の立つもんですよ。」私もつい神妙な口調になつてしまつた。「尤もこれなんぞのは（と私は妻を指して）本當の苦勞性で、何しろ男女の關係そのもので頭を惱ましてるんだからえらいもんですよ。尤もそれが結局自分の問題ぢやあるんだけど。」

「女流思想家ですからね。」

ハンケチを口にあてながらかう云つて妻はあは〱笑つた。

「まあお宅なんぞは……」そんな事を云つてゐられる間が花だとでも云ひ度げな口振りで辰子は云つた。「だつてそこの奥さんの本當の明るさを見れば大抵旦那様の身持ちは分りますものね。」

「は。分るもんですか。他所の家庭つてものは、殊に女から見ると大抵圓滿に見えるものですよ。又誰も他人に不幸らしく見せたいものもありませんからね。」

「又あんなテレ隱しを云つて。ずるいのね。」と妻が云つた。

「いゝえ、これが男の方の見榮なんですよ。」辰子が遮切つた。「男の方つてものは、女の反對に、奥さんにのろいとか夫婦仲がいゝとか人に思はれる事をそれや不名譽に思ふもんですからね。どう云ふものか。」

「やつぱり一夫多妻を誇りにした本能が殘つてゐるんですかね。」

少し風向きがわるいので私はこんな事を呟きながら瓦煎餅をつまんだ。

その時庭で獨りで紙風船をついてゐた彼女の娘が風船を屋根に上げてしまつたと云つてさはいだ。先刻から彼女は妙に

興奮してはしやいでゐた。から云ふ味氣ない境遇の子供が珍らしい來客を欣ぶ樣は菓子皿一つ運んでくる處にもあふれてゐて、それをいぢらしく思つてゐた矢先だつた。

「ようし、取つて上げませう。」

と私は云つて庭におり、ステツキを伸ばして掻きおとすと、ふわりと落ちてくるのをぽん〳〵と私はうけて、「そうら。」と一つ高く打ち上げて彼女に渡した。

「春江ちやん。まあいゝことね。お禮仰有い。」

縁側に立つた母親にから云はれて娘は眞赤な顏で風船玉をかゝえたまゝ、射るやうな眼ざしでちらと私を見、「どうもありがと。」と小聲に云つて眼を伏せた。

その凛々しい立派な面ざしは、私に一寸法華寺の十一面觀音を想ひ起こさせた。

庭に下りた序でにそのまゝ私は別れを告げやうと思つたが、その前に、一寸見てくれと云ふので次ぎの間の稽古場をのぞいた。八疊敷であるがそれでもちやんと板の間になつて足を踏むとトンといゝ拍子に音がした。

「一寸拜見したいわね。」

私の妻は頻りにから云ひ、辰子も「いつか先生にも見て頂きますわ。」と云つたが、私はなぜかさう見たい氣がしなかつた。どうも踊りと云ふやうなものを見ると、男なら却つていゝのだが、身ぶりや表情の中に、その女の美しさよりも、或る見度くもない醜くい點が見えて來て、痛々しい氣がし相な危惧を私は抱かずにはゐられなかつた。殊にから近くで見るとなると、相手はそんな下手ではないと思つても、どうもそのガツカリさが懸念された。

「どうも僕には踊りは分らないが、春江さんのでも見せてもらひますかね。でもと云つちや失敬だが。」

お世辭のない私はから所望し、辰子も切りに促したが春江はどうしてもいやだと云つて肯かなかつた。

「顔は父親似なんですけど、我儘な處は妾と似てゐましてね。」辰子はこぼしながらも愛を湛へてわらつて「ぢや此の次ぎにね。」

日の長い頃で、もう五時を廻はつてゐたが、陽はまだ大佛の後ろの山の遙か上にとろんとしてゐた。

×　×　×　×　×　×

それから四五日の後だつた。或る日私が東京へ行つた留守、辰子は私の家を訪ね、夜の九時過ぎまでいろ〱私の妻と語りつゞけた。

「さぞすさまじかつた事だらうな。」

妻を何氣なく取りつくろつてはゐるが、浮かぬ氣持ちでゐる事は一見してすぐ分る妻を見ると、私はついとげのある口調でかう云つた。好い聞き手を得た辰子が單に自分の身の上話しをするだけならいゝが、いくらか例の感想をも交へてべら〱喋つた男性との種々の挿話（エピソード）が、無暗に感じの強い妻の心を暗くしたらしい事は私にはすぐ分つた。無論自分も其場に居合はせてゐればそれは何でもなく、寧ろ厚意をもつて聞ける事に定まつてゐるのだが、突つつかなくとも四十男を夫に持つ妻としての秘めた不安さは十分持つてゐるものをわきから餘計な喋り立てゞわざ〱焚きつけたのだらうと云ふ風に考へると、無神經な奴だと私は不快に感じたのであつた。

「それを又すぐ氣の毒々々々つて一々同情して一緒になつて悲觀するお前もお目出度いよ。」と私は云つた。

「まあ一體何がいけないんでせう。何を辰子さんが云つたか聞いてらつしやりもしないくせに、一人で怒つて。」妻も默つてはゐなかつた。「貴方つて變な方ね。」

「もういゝよ。」「辰子さん」は。聞き度くもない。」今更後へ引つ返へす譯にも行かず、私は「無神經説」を押し通さうとした。「なんだ。あんなおかめの下らない話。」

「おかめの下らない話をさう怒らなくつたつていゝわ。」云ひ乍ら妻は噴き出した。「あの人そんな無神經な事をお喋りするほど馬鹿ぢやなくつてよ。それに自家へ來てならそんな心配はいらないと思つてるんでしよ。」

「ほうれ見ろ、やつぱり云つたんだ。」私は一寸間をおいて「だが馬鹿に信用しちやつたもんだな。」

「えゝ、男つてものをよく知つてる筈なのにね、まだあなたをよく知らないもんだから。」

「そしてお前をもな。」

肚の中ではもう疾ふに氣嫌は直つて、辰子もせめて私の處位ではいくらか氣をゆるしてついこぼし度くなるのも無理はないと思つてゐたのである。

何だか自分が後ろ暗いためにわざと怒つて見せてゐるやうに妻が疑りはしないかと自分も亦一寸疑つたほど散々アタつておき乍ら、そのくせ間もなく床に這入つた私は夕刊を投げ出すと自分の方から一體どんな話をしたのかを訊いた。今書いてゐる仕事に辰子の身の上話が何か參考になりはしないかとふと考へたのだ。

待つてゐたと云ふやうに妻の語り出した處を聞いて、私も辰子の離縁を尤もと思はざるを得なかつた。もちろんそれは辰子の性格と云ふものを前提にしてゞはあるが、彼女の斷言する處によると、最初彼女の身請けが決まつた時、つまり辰子が前川の求婚を承諾した時には既に前川は後悔してゐた。「妾の「はい」」と云ふ返事を聞いた時のあの人の顔には、後から思ひ出して見ると、もうありありと蒼い當惑の色があらはれてゐました。」と彼女は云ふのだ相だ。「まさかかう無造作に妾が應じるものとは思つてなかつたに相違ありません。えゝ、早まつた事をしてしまつた。自分の行く手には妾なんかよりずつと綺麗な女がいくらでも待つてゐたものを。かう自惚れてゐたんです。だからお金まで澤山出したつて事もあの吝ん坊にはどんなに殘念だつたか知れませんわ。そんなわけで結婚の初めの晩からあの人はもうそれ迄とは打つて變つてぷりぷりしてゐました。」

どうして其晩それを氣がつかなかつたか。そして直ぐ逃げ出してしまはなかつたか。辰子ともあらう者が。から云ふ烈しい問に對して「妾はぼんやりだつたんです。妾には一體妙に鋭いやうな處とぼんやりな處とがあるんですの。一方あきらめが悪いくせにすぐ面倒臭くなつて、どうにでもなれと云ふ氣にもなるやうに。ですから「あなたは滿足してゐらつしやらないやうね。」と妾が云つて、「なに、滿足してゐない筈はないぢやないか。だが先刻から實は腹が痛いんだ。まさか今夜食つた蟹のせいぢやないだらうな。」なぞとまことしやかに云はれると本當に心配になつてしまつて、醫者を呼ばうかと大騒ぎをする始末。勿論それはごまかしの作り事だつたんですけど。何しろ根が馬鹿正直で、おまけに自分は邪推深いと始終思つてるでしよ。だから前にあの人が自分に惚れてゐた頃の事を想ひ出したりして強いて自分がわるかつた。矢つ張りこの結婚は、虚僞ぢやないと思はうとし、又思つたんです。」と辰子は答へた。

兎も角彼女は前川の財産を見込んで「無造作に應じた」ものではないらしい。矢つ張り云はゞほだされたのであらう。もし彼女の云ふ處を信用すれば、前川がどの位の資産家であるか彼女は嫁する迄知らなかつた。併し嫁してからも前川は正確な財産を彼女に知らさず、完全に家の財政を一人で處理した。經濟觀念のゼロな彼女が金遣ひの出鱈目に荒いために夫とよく衝突した事は云ふ迄もなかつた。大阪生れの前川は「關西人特有の無知な唯物論者」であるくせに男に共通な道德的虚榮心をまで持つてゐた。

「ですからあなたは嘘がお上手ね。妾怖ろしいわ。」と妾が云ふと「そりやお前より知慧があるから」とか何とか云ひ乍ら、その後で、一日中怒つてゐた事もありましたつけ。

實際嘘にかけては名人でした。何しろ自分ぢやカナリ感じに間違ひのないつもりでゐる妾がまんまと三月以上もだまされて、あの人に別宅の出來た事を知らずにゐたんですものね。どんな近い仲でも秘密つてものはいくらも譯なくつくれるもんだと始めて知りましたわ。ずゐ分人を莫迦にしてるぢやありませんか。前川は後で人にかう云つてた相ですわ。『なに、

あいつ――妾の事――は少し早く疑り過ぎたんだ。あんまり敏感過ぎたんだね。それはしかも俺があのよね次と知つて一歩々々馴染みが深くなりつゝあつた時だつた。併しまだ俺のものになつて了つたわけぢやなかつたから疑られた俺は――病中だつたが――大に怒つて見せた。いや、怒つてしまつた。そしてあいつがくやし涙をこぼして自分の邪推を俺にあやまつてから恰度一と月の後だつた。俺はあの女を圍つたのだよ。」つて。

――まあ妾だつて自分のもと／＼を考へりや――なにも自分で藝妓になつたわけぢやありませんけど――女を圍つた位の事で文句は云へない義理だと人は云ふでせうけれど、しかもそれが恰度妾の入院中の事で、又その妾の病氣つて云ふのが惡性の肺炎で、あの人から傳染(うつ)つたものなんだから御丁寧ぢやありませんか。尤もあの人から病氣がうつつたのはそれが二度目で、一度は丸坊主になつた事もありましたわ。兎も角あの人の重態の時には私は殆んど五晩も不眠で看護したものです。その時には誰よりも妾を重寶して氷嚢一つでも妾が持つて行かなければ氣に入らなかつたのに、さあ今度妾が倒れてしまつて入院したとなると、急がしい／＼で、五日に一度見舞にくるか來ないです。それもハンケチで口を蔽ひ乍らやつて來て、しかも私がいよ／＼大丈夫と定まつた時にはたしかにがつかりして、たつた五分間位でそこ／＼歸つてしまふんです。それもその筈ですわね。その時にはちやんと私の代りが出來てゐたんですもの。」

そしてよく夜を泣き明かすために熱を上げたものだ相だと妾は語つた。

× × × × × × × × × × × ×

下の娘が踊りを習ふ氣があると云ふので、毎日學校の歸りに彼女の家に寄らせる事にした。好い友達がゐると云ふのがどうも一つの理由だつたらしいが、早いもので十日目位にはもう「……ゐながら見する石橋(しやくけう)の浮世を渡る風雅もの……こゝんとこが六ケ敷しいの。」なぞと生意氣な事を云ひながら、セーラー姿で一人座敷で練習

してゐた。

「中々熱心でゐらつしやるからじきお覺えになりますわ。」こんな事を云はれて「今つゞけばよござんすけど。」と母親もよろこんでゐた。

梅雨の晴れた日には停車場前から馬車を傭つて、彼女一家を瑞泉寺と云ふ寺に散歩に誘つた事もあつた。夢想國師の開山で、茶人などがよくほとゝぎすを聽きに行くと云ふ此の寺に丈け私はまだ行つた事がなかつた。

「妾一つ小説を書かうかしら。書き方さへ分ればそりや大したものが書けるんですけれどね。」

大塔の宮の右に沿ふて、二丁程山門の手前で車を降りると、じと〳〵した青草の間を歩きながら彼女はこんな事を云つて一人で笑つた。

「兎も角辰子さんは春ね。」その笑ひ顔を見乍ら私の妻が云ふと

「おや〳〵、しなびたいやな春ですことね。あんまり梅雨が早く來過ぎて雨ばかり降つたもんだから。」

「雨が先きに降つちまつたから之から却つて本當の長閑な春になるでせう。」少し氣が引けながら私が云ふと

「一寸秋のやうな春にね。でも氣持ち丈けは妾ほんとにいつまでも春でゐますわ。――まあ、暑ござんすこと。」

から云つて彼女は紫の羽織をぬぐと眼で笑つて

「派手で、おかしいとお思ひになるでしよ。」

「派手でもお似合ひになるから妙ですわね。」妻は私を顧みて「妾なんかゞ着たら……」

「氣違ひじみてます？　妾人間が少しへんですからこれ位で恰度いゝのかも知れませんわ。」

聞けばそれは昔彼女と仲の善かつた朋輩のかたみだ相である。要するにそんな處は出鱈目なのだが、しかし自分の娘にお弟子とお揃ひの着物を着せたりする處はまんざら出鱈目ではなく、彼女の一つの心づかひであるらしかつた。そんな話

をしてゐる中に吾々は葉櫻の並木道も過ぎて、苔の厚い石段に近づいた頃には最早高い處で子供達が「富士山が見える〳〵」と呼んでゐた。

「先生一寸いらしつて御覽なさいませんか？　まるで何かの繪のやうですわ。」から呼びかけられた處は、達磨が面壁九年でもしてゐさうな自然の岩窟で、身をかゞめて一方を覗いた見事な孟宗の竹林には赫耀と六月の夕陽があたつて、なるほど一寸雪舟でも畫きさうな圖であつた。

歸りに川岸の草叢の中に之は又早い一匹の螢が早くも見附けた子供らに騷がれてふわり〳〵とさ迷ひ出した。はしやいで追ふ娘を私が制すると、「あら、いゝ形をなさいましたわ。」と流石に踊りの先生の云ふ事はちがつてゐた。

暑中には私達は信州の妻の郷里の方に行つてゐたので其後彼女と逢つたのは九月の半ば過ぎであつた。恰度その月末に彼女等の例の松蟲會があるので是非見に來てほしいと云ふ手紙が切符を添へて來てゐた。

當日私は仕事のために妻達より一汽車おくれて上京したので會場に着いた時はもう春江の「藤娘」も濟んだ後であつた。最後の彼女の踊りは「松風」と云ふ能の「松風」から取つた彼女の新作で、舞踊の分らない私などが見る處では、一見平凡のやうで新作らしい意圖が見えず、又強いて題材に捉はれずに素直に出來てゐる處が感心だと思つた。しかし松風の狂亂のあたりは云はゞ彼女の實感が作つてゐるのか、一種人に迫る感じがあつた。それが濟んですぐ樂屋へ行つて見ると能面のやうに厚化粧をした彼女は金襴の帶を弟子に解かせながら

「まあ來て下さいましたのね。どうも恥しくつて仕方がありませんわ。大しくじりで。」と腰をかゞめて、笑ひながら云つた。

「妾何だか妙にあはれな氣がしましたわ。」歸りに妻はかう云つた。

×　×　×　×　×　×

その中には妻が辰子の家で落ち合つたかして、庭向ふの松野と云ふ女も退屈の餘り私の家へくる仲間になつた。長唄をやる私の友がどうかして來合はせたりすると、松野はわざ〳〵自分の家まで三味線を取りに行つて、賑やかに合はせる事もあつた。

「妻のやうな自分の顔の事は棚に上げてそんな事云つちやわるいけど、先生。あゝ云ふ顔お好き？」

或る晩、一杯のベルモットにほんのりいゝ氣嫌になつた辰子は松野の事をから私に訊いた。

「さうだな。少しお品ぶり過ぎてる處は欠點だが、何分男は婦人に對しては趣味の廣いもんでしてな。なんて、生意氣な事を云つて、實は、別に好きでも嫌ひでもないが、顔立ちはいゝ方だらうな。」

そんな話から、少し無難な品評なぞがあつた後で——尤も私達は一人の女の品定めなぞで、存外夫婦仲の癪になるやうな正面衝突をし出かす若夫婦でもなかつたから。——少し自身も微醉加減であつた私は、どうも女は肉體的に、つまりその肉體のために一番愛され度がるものだ、と云ふやうなつまらぬ事を云つた。

「だつてそれが男の一番本當の愛ですものね。」辰子はすかさず答へた。

「從つてそれが女の一番本當の誇りかな。が、そりやまあ精神的に——なんて話は六ケしくなつて來たが、——少くとも精神的にばかり愛され度がる女なんてものは、そりやどこにもないでせう。……」

「そりやだつて嘘ですもの。」

「馬鹿にキツパリしてるな。だがさう云ふのはつまり貴女も愛と云ふものと情慾と云ふものとをゴツチヤにしてるお仲間だからだな。」

「つまり男は嫌ひなものにも情慾を起こす事が出來るつて云ふのが女とちがふ點なんですわね。」この問題には慣れてゐる妻が云つた

「あゝさう云ふ意味ですの。妾頭がわるいから一寸わかりませんでしたわ。」辰子はわらつた。

「君達の云ふ愛つて云ふのは――どうもいやに理屈つぽくなつちやつたが、――實は愛つて云ふより近頃流行る愛慾つて云ふ言葉の方が當てはまるやうだな。」

「えゝ、愛つてどんなものか妾よく知つてますわ。――なんて大さう威張つたけれど子供だつて知つてますわね。その位の事。」

「ようし、一つ點をつけてやらう。笑はないで。定義一。愛とは？」

辰子はほゝ笑み乍ら、澄んだ眼でじつと電燈を見た。

「愛つて、つまり、一生懸命に、純粋に、一人の人なら人の運命を心配すること……ぢやありませんか。」

「一生懸命に、純粋に一人の人なら人の運命を心配する事ぢやありませんか、と。ようし。百點。そんな立派な答が出來るのにそれを一寸した愛慾と一緒にしたりなんかしちやいかんな。」

「えら相にそんな講釋ばかり云つてたつて何にもなりませんわね。電車の中なんかで少し綺麗な人がゐるとすぐ眼尻を下げたりなんかしてゐちや。」

「いえ、そんな事云つたつてそれも無理ですわ。」笑ひ乍ら辰子は遮切つた。「妾だつて男に生れてゐたらそれこそ愛人の二人や三人はこしらへてるかも知れないと思ひますわ。女だからこそずゐ分勝手な男の悪口も云つてやりますけれど、女でゐてさへほんとに惚れ／＼する女の人がいくらでもゐますものね。男が浮氣するのも全く無理はないと思ひますわ。そのわりに惚れぼれする男なんて滅多にゐませんけどね。尤も先生は別。」

「あんな事を云つて、どうも今の啖呵の切りやうぢや愛人の出來ない男なんて駄目だ、とでも云ひ度さうな勢ひだつたね。――賢さいさうかも知れないが。」

「まあ、まさかね。奥さん。」

その時十時が鳴つた。

「又こんなにお喋りをしてしまつて。どうもいつも妾がゐると性問題に花が咲きますわね。」

星が降るやうに空一面の夜であつた。一日の家居に倦むだ私達は散歩傍々途中まで彼女を送つて行く事にして外へ出た。

「あゝいゝ晩。いゝ風だこと。まるで春のやうですわね。」

薄闇の中でわく〳〵と身顫ひし乍らかう云つて私達を覗く彼女の仄白い顔はいつかの厚化粧をした顔に似てゐた。私は兎角一人で先きを歩き勝ちだつたが踏切りの處までくると貨物列車が之から發車するために通行止めになつてゐた。大きな黒い機關車は恰度私達の前にとまつてゐて、焔の見えるカマに火夫が盛んに石炭を放りこんでゐた。

ヴォツホッホッホッホー！

それは二三度凄ごい空の息を天に向つて吐いた。

「この機關車何だか肺病のやうね。空咳をして。」と辰子は云つた。「乾度齢を取つてゐるんですよ。御苦勞様にこれから青森までもこの大變な荷物を曳つ張つて行くんですわね。ガツタン〳〵て。他人事ながらうんざりしてしまひますわね。」

彼女は賢さい溜息を吐いて、この老機關車に同情してゐるやうであつた。

「他人ごとつて車ごとだ。」

私達が笑つてゐる中に、列車は汽笛を鳴らして「ガツタン〳〵」動き出した。どうしても歸つてくれと云ふので私達は

そこで別れた。

× × × × ×

下の娘はどうにかかうにか一通り「越後獅子」を上げた。

その後も彼女とはちよい／＼會ふ機會はあつたが、どう云ふものか、彼女は瀨戸、即ち二度目の夫については、いつも餘り語らなかつた。肺で死んだ此の男が春江をも引き取つた事については、春江が人目を牽く美しい娘であつた事も得な理由をなしてゐるであらうが、兎も角辰子より一つ齡下のこの夫が寛大であつた事に對しては彼女は深く德としてゐるやうであつた。「その事を考へると腹の底から淋しくなり、或は哀しくなり、或は腹の立つてくる何か一つを持つてゐる者は幸だ。」始終こんな事を云つてゐたこの憐れな文士は遂に之と云ふ何事をも爲さずして死んだのである。どうしてもつい彼女の口に上るものは前川であつた。結局愛人に男の子が生れ、（辰子は露骨な言葉で、藝妓に子供を産ませる事の名人、と云つた事があるが）そしてその男の子に自分の後を取らせ度い意志が「寢言にまで」現れたために、積もりつもつてゐた彼女は遂に置手紙を遺して春江と共に飛び出したのであるが、聞けばそんな時にいつも彼女をかくまつて、寶石類を賣つてくれるなぞ世話をやいたのが松野であつた。

「ですから妾本當は冗談にもあの人の顏の事なんか云ふと罰が當るんですの。恩人ですからね。」

尤も松野も亦その悲境にゐた時に彼女に引き立てられた事がある事は辰子は云はなかつた。

仲秋の月の日には彼女はお弟子に重詰のお萩を持たせて寄越し、それに手紙を添へて

「お彼岸ではありませんけれど、先生がお好きだと云ふので一つ作りましたから御笑味下さい。（笑味とはわざと書いたものであらう。）それから今晩はお月見ですから何卒皆樣でお遊びにお出で下さいませんか。夕方から。郷里の一夜じまし

丈けで御飯を差し上げ度ひと思ひますから。月はそちらのお庭も結構でせうけれど私の處は又あの老ひ松の枝にかゝつて何とも云へない風情ですから是非お待ち致します。」

私達はその晩が仲秋の月である事さへ知らない程無風流であつたが、よろこんで行く事を答へた。

「妾中々風流人でせう？」行くと彼女はすぐ云つた。「一つ妾の風流な處をお見せしやうと思つたんですの。」

彼女は酒を出し、私と幾杯も酌を交はした。今夜こそは是非と妻が所望し、私の娘達もやんやとせびり立てたので、まだ月は出てゐなかつたが、

「では今夜は變つた處で、一つ月の下でね。」

から云つて、草履穿きで庭へ降り立つた彼女は「誰か見てやしないかしら。」と生け垣をのぞいたりしたが、「ちや三味線無しでね。人がのぞくから。」と一さし踊りかけたが、「どうも少し氣違ひじみてるわね。止さう。見つともない。」と急に人が止めるのも聞かずばた〳〵家へ上つてしまひ、あは〳〵笑つた。

と、恰度その時、一足遲れに月は大藏山の上にらん〳〵と現れて、松の枝にかゝつた處はなるほどわさ〳〵此處まで見物にくる甲斐があつたと思はれた。彼女は踊りのやうなひやうきんな手つきで柏手を打ち、しきりに自慢した。

「どうもありや女寒山だな。」

霊のやうな光りを浴びて歸る道々私が云ふと

「ほんとね。でも庭を掃いてゐる處は女拾得ね。」と妻が云つた。

ばら〳〵とおかつぱが前に垂れ、顔は面のやうに白く、眼は「へ」の字なりにほゝ笑み、大きな口であは〳〵笑ふ、脊の低い彼女。そは正によく繪に見る寒山拾得を聯想させるものであり、しかもそれが紫の羽織を着て月の下で踊る女である。

女寒山。女拾得。私はいつの間にか一つの美しい繪を頭の中に畫いてゐた。

×　×　×　×　×　×

すうと彼女は私の書齋に這入つて來た。

「おや、失禮。お仕事。」

「いや、構ひません。どうぞ。何にもしてやしないんです。」

「何か面白い本を拜借さして頂き度ひと思つて。」

彼女は小説でなくてもいゝと云つた。「ちやこれはどうです。」と私は立つて一冊の滑稽本を書棚から拔き取つた。それは或るグリーンランド人の書いたもので「妻はいつでも—妻十(プラス)子」と云ふ云はゞ性問題の未來を想像したものであつた。が、その本を借りると私の許可を得た彼女は子供の部屋で又蓄音機をやり出した。聞いてゐるとおきまりの「カルメン」最終幕の序曲を二三度くり返してやつた後で、古いザラ〳〵の「メリ・ウヰドウ」か何かをかけてゐた。彼女はさうして窓に腰をかけて頭をふり〳〵娘のやうにうつとり聞き入つてゐるのだ。「ふむ、なるほど彼女も一種のメリ・ウヰドウだナ」と私は思つた。

娘等の學校の都合のために私達が鎌倉を去る計畫のあつた事は前からであつたが、それがその次ぎの春には早々實現ときまつた時、彼女は「まあつまらないわね。」と頻りに惜しむだが、東京なら芝の伊皿子の邊が一番だ。あの邊をさがしてはどうだ抔と云つた。

いよ〳〵鎌倉を去る日が間近に迫つた或る夕私達は彼女を「お別れ」に招いた。面倒だ。誰でも呼んじまへ抔と大きな事を私は云つて、松野女史をも鼓持參で招く事になつたが、どう云ふものか其晩辰子はそれ迄になく若く見えた。私がその事を云ふと、今日は髪を染めて來たのだと云つた。

偶然又私の友人なども二人程加はる事になつて宴は大に盛會となつたが、辰子は自分でも其晩美しい事を知つてゐるせいか、甚だはしやいで、普段隠してゐる取つときの富本をまで遂々松野の伴奏で聞かせた。日本音樂の耳の無い私は批評は出來なかつたが、長唄をやる私の友は、これは本物だと云つて大にほめ「アンコール〳〵」と云つた。

まめな彼女は一人のお弟子をまで連れて來て、姐さん冠りで、てきぱきと荷造りの手傳ひをした。私達はそこで別れの挨拶を交はした。彼女は停車場には見送りに來ず、壽福寺の踏切りの處でハンケチを振る。「それも一寸浪子式で乙ぢやありませんか。」と最後まで笑はせた。

打ち合はせた汽車に私達がそこ〳〵に間に合はせて、いよ〳〵鎌倉を離れ乍ら壽福寺の踏み切りにさしかゝると彼女達は一家を擧げて出て居り、彼女はハンケチを振り、春江は赤いショールを振つてゐた。「御機嫌よう！」と云ふ向ふの聲はかすかに聞かれたが吾々の聲はどうであつたか分らなかつた。そしてトンネルの遥か手前で汽車が汽笛を鳴らす頃まで私の子供達は窓から胸までも出して「あゝもう見えないわ」と惜しみ〳〵ハンケチを打ち振つてゐた。

東京へ來てから――私達の家は市外であるが――辰子はまだ一度しか私達を訪れず、私の方からは一度も鎌倉の地を踏まない。用でもある時の外は彼女は上京する事もないのであらう。

去年の春、彼女は私達夫婦に宛てゝ左のやうな手紙を寄越した。私はまだ一度も彼女に頼りをせずにゐるのである。

「――去るもの日々に何とかでもう私の事なんかお忘れでせうけれど、私の方ぢや御無沙汰こそしておれそれはよく思ひ出しております。少し割りがわるい位です。

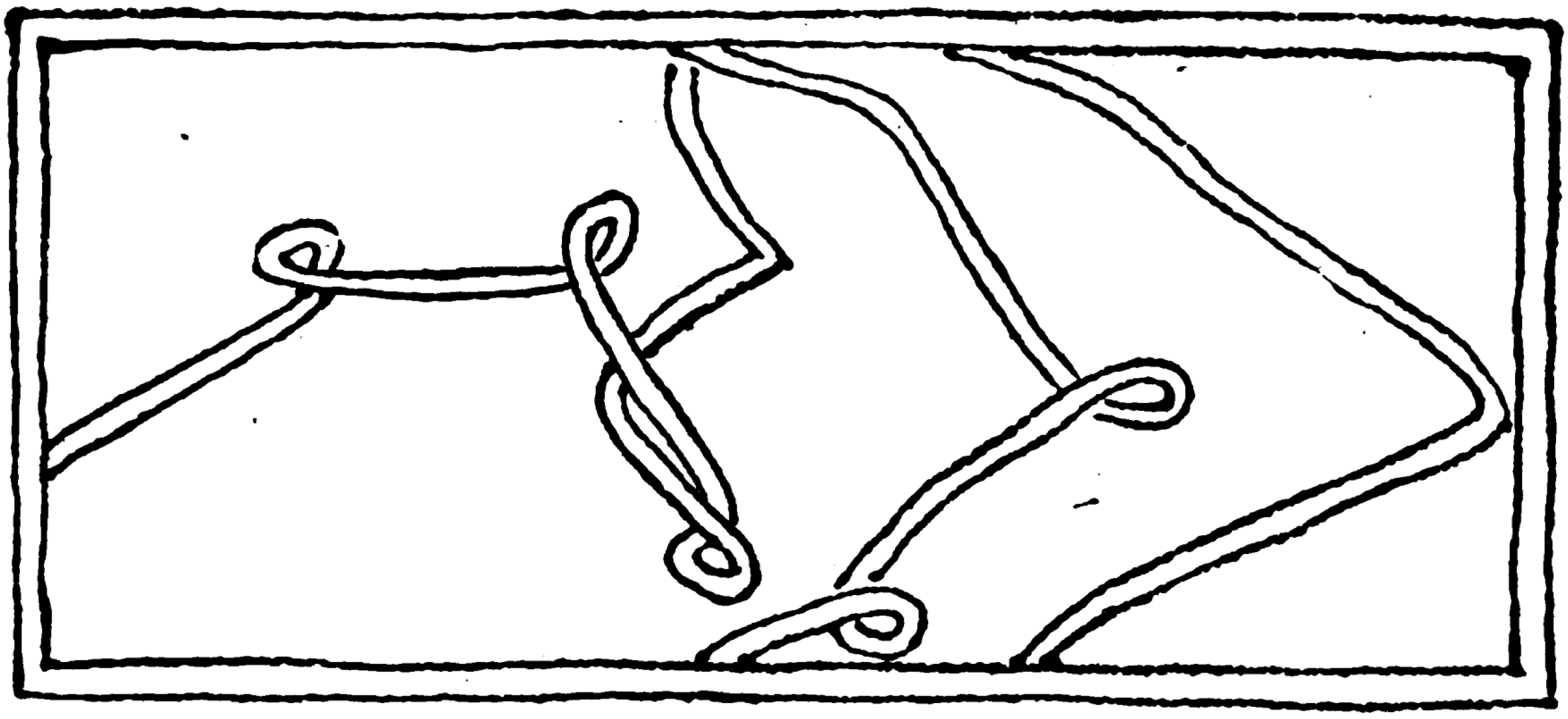
此間は松野さん達と――達と云ふのは松野さんの妹分の人もゐましたから――瑞泉寺へ行き、一年前の事を想ひ出しました。恰度櫻の満開で、春は淋しいほど――と云ふのは皆様がゐらつしやらないからかもしれません――盛りでした。子供達はあの丘の下で蝶々のやうにかけ廻はつて若菜をつみ、私と松野さんとは櫻の花が散る下で皆様方のお噂を致しまし

た。松野さんはその日大そうきれいでした。

あのお寺のだいこくさんとも懇意になりました。あの人のお喋りには流石の私さへ答へやうがありません。昨今は又、お隣りの壽福寺の和尚さんとも知り合ひになりました。一度提唱と云ふものに來て見ろと云はれて行つて見ました。建長寺の管長さんとかゞ、臨濟錄と云ふ本の提唱——つて何だか知りませんけれど——をやるんです。もちろん何のお話やらさつぱり私なんかには分りやうもありませんでしたけれど、それでも分らないなりに私は禪と云ふものが好きになりました。これもつき合ふ人のゐない淋しさのためかもしれません。

管長さんと云ふ人はしかしあんまりえら相な人にも思ひませんでしたけれど、口の達者なのには瑞泉寺のだいこくさんと好一對でおどろきました。壽福寺の和尚さんは善い人で、えら相な事を云ひません。五月にはお寺の筍を呉れると云つてゐました。先生は筍がお好きでしたから、もし呉れましたら持つて上ります。こんな事を書いてゐる今五位鷺が高い處を二聲三聲啼いて過ぎました。今夜もいゝ朧夜です。云々」

最近私は彼女に或る畫家の若き燕が出來たとか云ふ思ひがけぬ噂を耳にした。「それは又きつとあの人が莫迦に氣に入つた青年か何かゞあつて無暗に弟見たいな氣持ちで親切を盡したのがそんな噂を生んだのかもしれませんわ。」辰子贔負の私の妻は暫く默考した後でかう辯護したが、併し私は又もしその事を彼女に云へば「えゝ、それは本當。妾は今久しぶり純粹な戀——だか愛慾だかを感じてゐますの。妾の息子見たいな若い男に。少し氣が變でせう？」かう云つて笑ひ出し相な彼女も考へられるのだ。勿論それは兩方噓かもしれないが、併しそんな事を云つた後の彼女の笑つた眼を私は想ひ出して自分と微笑むで了ふのである。



稻妻

宇野千代

三千代は朝の便で次のやうな手紙を受取つた。

　ダマスクスはだんだんしまひになりかけてゐる。讀むにつれてだんだん、よその人が自分になり奥さんがお前になつて來た。俺たちは當分離れてゐなければならない運命にあると言ふことを思ふのであるが、しかし長く生きて居ればほんたうに結びつくことが出來るであらう。夢を假設しないで、俺たちは現實の上に夢を築くことが出來ると言ふことがよく分つて來た。俺もやつとほんたうに仕事が出來るやうになつて來たのだ。善にも惡にも嘘にもまことにもわれわれは正しき心構へを持たねばならぬ。しかし、まことに驚く如く嘘に驚くことは恥である。お前もうんと惡い女になるべし。俺はどんなことにも平氣になれる積りだ。

三千代はそれを二度繰返して讀んだ。すると恐怖に似たうそ寒い氣持が胸のそこ

を掠めるのを感じた。この男は何も彼も見通してゐる。まことに驚く如く嘘に驚くのは恥である。――この男はそれさへもよく知つてゐる。三千代は長い間この男と一緒に暮してゐた間に、いつでもこの男の失くすることのなかつた冷徹な眞實をその手紙からも感じると、そのやうな眞實を持つことの能力に對して大きな苦い嫉妬を感じた。この眞實に對抗するためには、どのやうに精巧なる嘘をもつてしなければならないだらうか、――三千代は返事を書くことの代りにその下宿へ電話をかけたが、仙吉はいましがた出かけた許りだといふことであつた。

「……若し今夜歸りましたら、もしもし、歸つて來るか如何か分りませんでせうね、」

「ええ、洋服を着てお出ましになりましたから、」

「洋服を？　洋服を着て出ましたのでムいますね、」

三千代の眼には、濃いグリーンの夏服を着て少し前屈みになり乍ら街を歩いてゐる仙吉の姿が見えた。それはその若さにも拘らず、ひどく老つて病氣のやうに見えた。三千代は、何かしらかき寄せたいやうな渇望を感じた。電話室を出ようとするとふいにぼうと眼がしらが熱くなつた。これもやつぱり子守唄だつけ。――仙吉と三千代とはもう別れて了ふ相談をしたのであつた。二人はあんまり長い間一緒に暮しすぎた。愛することの出來る凡ゆる面を愛しつくして了ひ、だからもう、どのやうな優しい愛情の言葉もしぐさも心持も、みんな一つの型の子守唄になつて了つた。そのやうな子守唄は安易な眠りにさへ邪魔になる。二人はさう思つたのだ。二人は荒い海の中へ漕ぎ出なければならぬ。そして或る夜のこと、二人はそれまでの長い間の習慣のやうに一つの寢台の上に列んで横はり乍らそのやうな會話をした。

「センチメンタル厳禁だ。泣くな、結極同じことを繰返すだけじやあないか、」

「もう一ぺんどこかで一緒に暮してよ。あたし、それは好い嫁さんになるわ、そして貴方の儲けたお錢だけで……」

「駄目だよ。遣り直しなんか、一ぺんで澤山だよ。お互ひに前へ進んで行くよりほかないんだからね、」

三千代は仙吉の言葉をしまひまでは聽かなかつた。三千代の頭にはついこの間までゐた田舍の或る溫泉場の自分の部屋が浮んだ。そこで三千代は酒を飮むことを覺えた。仕事もしないで終日寢て暮した。夜になると若い學生などと一緒に唄を唄ひ乍ら螢をとりに行つたりした。――もう一ぺんどこかで一緒に暮してよ。――三千代には自分のさういふ聲の中にどれほどの眞實があるのかを疑つた。それは自分の耳にさへ空虛に消えて行くやうに聽えるではないか。涙が乾き上つた。電燈を消して寢る習慣であつたことは何と言ふ仕合せであらう。三千代は自分の卑しい表情を見られることもなく、また仙吉の冷徹な眼ざしを見せられることもないことを喜ばなければならなかつた。

「さあ、お休み、俺はお前の寢てゐる中に行くかも知れないぞ。」

二人は二本の枯木のやうに固くなつて眠つた。そしてその翌朝、各々の僅かな荷物をのせた二台の俥が、長い間住み古しいつの間にか小さな杜のやうに椎の木の生ひ繁つた庭の間から二つに分れて出て行つた。――考へて見ると電話をかけても仕方のないことだつた。何しろ、人生に甘へ過ぎては駄目だよ。さう言ふ仙吉の口癖を三千代は口の中で繰り返した。だが、胸の底にはまださきがたの恐怖が去らなかつた。さうだ、電話をかけて、――相手はあのいつもの長い間一緒に暮した仙吉だ。何にも怖れることはないではないか、――さう言ふ感じを取り戻したかつたのかも知れなかつた。三千代はさう氣がつくと尙更慘めな氣持になつた。そして玄關まで來ると、そこのうす暗いポーチに立つてゐた一人の若い男が、ふいにぴよこんと頭をさげて曖昧な笑顏を見せた。

「おや、洋服屋さん？」

三千代ははつとして立ち留つた。如何してこの洋服屋は三千代がこのアパートへ來てゐることを知つたのであらうか。――三千代はこの洋服屋にまだ幾らかの借りがあつた。一瞬間三千代の眼に、もう一度仙吉の洋服姿がうかんだ。ひよつとしたらあの洋服も借りになつてゐるのではあるまいか？いまあたし、お錢がないのよ。もう少しで仕事が出來上るんだ

けれど、」

「いえ、あの、」

とその人の好い洋服屋は曖昧な笑顔のままにどぎどぎして、「太田さんの、あのこちらに太田さんもいらつしやいますので、あの方のゴルフパンツを持つて參りましたので、」

「さうを、あたしました、」

と三千代はここで如何言つたものかと言ふやうに一寸言葉を切つてから「あたし今度、こゝへ越したのよ。」

「へえ、この間太田さんから伺ひました、」

太田さんと言ふのは新しい構成派の畫をかいてゐる、このアパートの古くからの止宿人で、三千代はこの太田さんからここを敎へられて來たのであつた。

洋服屋は愛想よく二階の部屋へ上つて行つた。三千代はそのまま、とりつきの自分の部屋へ這入つてからぺつたりと疊の上へ坐つた。安手な亞米利加ピンクの壁紙を貼つたその八疊ほどの部屋には一脚の机と貧しい寢具とのほかには何にもなかつた。机の上には原稿紙が擴げたままになつてゐたが、名前と番號がうつてあるだけでまだ一行も書いてなかつた。

空が曇つて風が出て來た。波の音が高く聽える。どす黑く光つた海が、何にも植えてないステップのやうな荒れた庭の向ふに見えたが、沖には一艘の漁船も見えなかつた。隣りの貸しボート屋のボートは皆岸に繋がれたまま、茄子の浮いてゐるやうな格好をして搖れてゐる。今夜は暴れるかも知れない。三千代はさう思つた。岸壁の突端に造つてあつた四つ手の骨がいつの間にか折れて、庭の方へ網ごとぶつ倒れてゐるのが、いかにも暴れる前の風景を思はせたからであつた。

こつこつと扉を叩く音がした。狼狽てて扉をあけると、そこにはこのアパートを遣つてゐる若いおくさんが白い書附を手に持つて立つてゐた。間代の先拂ひと昨夜の夕食の立替とを取りに來たのであつた。三千代はどぎまぎした。先拂ひの

ことは知つてゐたが、三千代には一錢の金もなかつた。

「あ、それでは宜ござんす。もうじきに月末ですから、來月分と一緒に頂きますから、」

おくさんの出て行つたあと、三千代は殆んど反射的に二階へ上つて行つた。誰とでも話がしたかつたからである。

太田さんはしきりに筆を動かして洋服屋の顏を描いてゐるところであつた。

「如何です、幾らか似てますか、」

太田さんはその色紙を三千代の方へ向けて見せた。洋服屋は仔細らしい眞顏をくづして眼だけでにつと三千代の方へ笑つてから、ふいにいつもの洋服屋らしい揉み手をして、

「銀座では一枚五十錢で描いてゐますが、太田さんに描いて頂くんですから特別に、へえ、」

激しい風が來て、窓懸が帆布のやうにはらんだまま廣い部屋の中ほどまでひるがへつた。空が暗くなつて來た。窓から顏を出すと、その窓の下につながれてゐた大きな犬が突然三千代の方へ向いて吠え立てた。

「ジョン、ジョン、」

太田さんは三千代の方へとりなすやうにさう呼んでから、

「如何した、如何した。こいつはこのごろ氣が立つて困るんです。この間、赤ん坊を生んで、そいつがみんな死んで了つたものですからね、見馴れない人さへ見ると赤ん坊をとられたかと思ふんですよ。その癖片つ端からその死骸を自分でぺろぺろ喰つちまつたんですがね、」

「自分の生んだ仔犬を喰つたんですの？」

「脚だけ殘してみんな喰ひましたよ、」

「犬や貓はたいてい喰べて了ふやうでございますね、[illegible]」

と、洋服屋はその大きな眼をくるくるさせ乍ら言つた。「そのせいか、私どもが往來を歩きましても、どこで死ぬもんだか、犬猫の死骸はまるで目つかりませんようで、へえ、」

「死骸の世話の燒けるのは人間だけかも知れないな、さう言へば鳥だつて雀だつてあんまり死んだ奴は見ませんからね。矢鱈に死骸の浮いてるのは鰯さ、あの四つ手に、よく死んだ奴が懸りますよ。おや、馬鹿に暗くなつたな、白井君惡くすると降るぜ、」

「そいつあ、」

と、洋服屋は狼狽てて立上つた。それから、少し色のやけた折目の正しいズボンをハンカチで丁寧に拂ふと、恐縮し乍ら降りて行つた。

「先刻面白いことがありましたよ、」

と、太田さんは話し出した。「庭でボール投げをしてたんですよ。すると、海へボールが飛びこんだんですよ。ひよいとそいつを取りに行かうと思ふと、ぽつかりと水の上に同じやうなボールが二つ浮いてるじやあありませんか、そつくり同じやうなのが二つね、」

「誰かいたづらをしたんでせうか、」

三千代は無感動に言葉を入れた。

「ところが、そのとき庭にゐたのは僕とこの家の少年と二人きりなんです。恐らくどこからか流れて來たんだらうと思ふんですが、あんな廣い海の片隅で、偶然に同じ品物が同時に同じ場所へ浮いた、ただそれだけのことなんですが、如何です。こんなことをそのまま小說なんかに書く馬鹿はありませんね、誰もほんたうにはしませんからね、ほら、二つともあの庭の煉瓦の上に干してありますよ、」

今度はやつと太田さんの話の内容に興味を持つた三千代は、もう一度窓から顔を出してその方を見ようとした。すると、また、下から犬が吠え立てた。三千代はその神經的な吠え聲に恐怖を感じて本能的に身をひいた。だが、地面と二階の窓とで、けつして犬は上までは上つて來られない。何といふ有難いことだらう。ぼんやりさう氣が附くと自分の恐怖に、ふいにかあつと腹が立つて來た。何とも言へず情けなくなつて來たのであつた。三千代の心を掠めたのは誰も居ない見知らぬ町はづれで犬に吠えられてゐる乞食の姿であつた。

「仕樣のない奴だな、沖が暗くなつたからなほ吠えるんですよ。この間から二度もよその子供を噛んだんですからね、狂犬じやあないさうですが、今夜にも警察から取りに來ることになつてるんです、」

「殺されるんですの、」

「さうでせうね、ほかに仕方がないんでせうね、」

いつの間にか海の上から暮れて來た。どこかの遠い燈台にも、それから堀割の向ふ岸にある洋館の窓にも灯がついた。そこは何某男爵かの別邸ださうであるが、三千代はまだここへ來てから、その建物の中にどのやうな人物をも見ることがなかつた。却つてその隣りの「輕便吹付着色輸出電球」と大きな看板のかかつてゐる工場では、裏口の台所に洗つて伏せてあるお櫃の金箍の光るのまで見える。その工場はまだ退けないと見えて、白粉をつけた若い女工がしきりにインクの噴霧器を吹いてゐるのが見える。その兩手のさきが濃く綠色に染まつてゐるのまで見える。そこにはまだ灯がなかつた。

「如何です。ここで一緒に喰べますか、」

「ええ、」

この五六日の習慣のやうに、二人は向ひ合つて食事をした。これは何と言ふ不思議なことであらう。三千代はいつもこのときに思ひ浮ぶ感じを繰り返し乍ら考へた。三千代はいつかどこかでこのやうな海の見える窓際でこのやうな男と向ひ

合つてゐたことがあつたやうに思ふのであつた。

ときどき、三千代は後の壁にかけてある一枚の油繪を振り返つた。それはひどく迫つた眉と眼の上に黒い毛が垂れ下つてゐる、そしてゴムの管のやうに長い眞直ぐな首を持つてゐる若い男の像であつたが、その架空的な描寫にも拘らず、三千代の前でフオークを動かしてゐる太田さんの顏とよく似てゐた。

「いいえ、あれは自畫像ではありません、然し、誰でも幾らか自分に似た顏しか描けないやうな傾向はありますけれどもね、」

さう言ふ太田さんの鋭い、黒瞳のあつまつたやうな眼が、丁度その油繪の濃い藍で塗りつぶした眼の効果と同じであつた。三千代はその描き方を好まなかつたにも拘らず、一瞬間、その眼をひどく美しいものに感じた。すると、その感情と一緒に三千代の頭を掠めたのは、その朝の仙吉の手紙であつた。それは暗い迷信的な重さをもつたもの悲しい感情をもつて思ひだされたからであつた。

誰か階段を上つて來る音がした。

「お這入りなさい。——この家の主人です、」

四十二三に見える靜かな男であつた。

「私が松原でございます。どうぞ宜しく、」

習慣的な無感動の中にもの優しさをこめてその男は挨拶した。この男のどこまでも浪漫的な、貴族主義的な、そのために決して遂げられることのない野心のために、變轉極りなかつたと言ふ生活について、三千代は太田さんから聞かされたことを思ひ出し、何となく感動と好奇心とをもつてその顏を見返した。それは三千代に、アパートの主人といふよりもどこか休職大學教授のやうな印象を與へたからであつた。

「久野さんは、」

と、主人はその優しい、けれども鋭く光るやうな眼をちらりと三千代の顔の上に走らせ乍ら

「おほぜい、ご兄弟がおありになりますか、」

「ええ、随分、」

「ではあの、信子さんと仰言るお妹ごさん……」

三千代は強く頭を振つた。それから、大きく眼を瞠り片えくぼをつくつて仰山に否定の笑ひを示し乍ら「いいえ、あたしの妹ならよし子といふのが一人きりなのですけれど、」

このやうな動作を、三千代はついほんの半年ばかり前から三千代自身の動作として了つてゐた。それは西洋の活動女優のものに、いくらかはそれらの作る媚態にさへ似てゐた。いつかは仙吉と別れ、三千代自身の力だけで立つてゆかなければならないといふ漠然とした考へと、このやうな動作とが平行した強さをもつて現れて來るやうな、そのやうな微かな自覺を三千代は感じた。だが、そのやうな自覺さへいまは三千代を苦しめない。却つて自棄をふくんだ快活さをもつて同じ動作を續けるのであつた。そのやうな三千代を、主人は不思議さうな眼で瞠めた。

「いえ、あの、ずつと以前、私が麹町の永田町にをりました時分に一寸知つてゐましてね、何しろ、久野さんといふお名前は一寸珍しいものですから、つい、覺えてゐたのをいま思ひ出しましてね、」

「まあ、さうでございますか。その時分、どんなことをなすつておいでになりましたのでせう？」

「私がですか。私は永田町でやはりこのやうなアパートを遣つてをりました、」

「松原さんは、日本で一番最初のアパートの經營者なのですよ、」

「どうも私の遣りますことは、如何も十年くらゐ早過ぎるやうなことになりまして何時もそのための犧牲になつて了はな

ければなりませんでした。そのアパートでも、資金も不充分でしたし、この建物のやうではなく木造だつたものですから、三階建てだつたのですけれど、上と下と、それから隣りの部屋同志と、物音を隔絶することが充分に出來ませんでしてね、やれ、昨晩は二階へ婦人の客を連れ込んだものがあるのなんのと言ふことが出來たりしまして、とんだ罪つくりなことを致しました、」

「それよりも、そのご本人が、大丈夫たれにも分りはしないと思ひ込んでゐられたりしましてね、」

一はは、岡妬き連中の騷ぎがたいへんだつたのですね、」

「それはまた、」

太田さんは聲を上げて笑ひ出した。その笑ひ聲に應じやうとして、三千代ははつとして、主人の顏を見返した。おや、この顏は、――三千代は鈍い記憶の中をさがした。これはどこで見た顏であらう。この西洋風に刈り込んだ濃い髭の下の女のやうに形のよい小さな唇と、優しい、けれどもどこか鋭い光りを隱してゐるやうな眼ざしとは、――ああ！ふいに三千代は心の中で叫んだ。このやうなことがあり得ようか。もしかこの男が、あのホテルの支配人だつた男ではなからうか。三千代の耳もとで、「松原さあん、」といふ甘つたれた女の聲が聽えた。さうだ、あの支配人の名が、如何して「松原」でなかつたことがあらう。（あのやうな甘つたれた聲で、三千代の朋輩であつた、メリーといふ西洋風の呼び名をもつた美しい娘がその支配人を呼んでゐた。）そして、いまこの男の話してゐた「アパート」と言ふのが、如何してそのホテルでないことがあらう。そのホテルは木造であつた。三千代はそこの食堂で給仕女をしてゐたのだ。或る朝、新聞にそのやうな廣告が出てゐたのだ。「志望者には支度金賞與の相談に應ず」――三千代の鈍い記憶が、ふいにまざまざと、それはつい昨日の出來事ででもあつたやうな鮮かさをもつて蘇つた。それは十年、或ひは十二年の昔であつた。三千代は、仙吉ではない、もつともつと他の男と一緒に暮してゐた。その男は、人の好い、けれども長い間の貧乏暮しにどこか卑しく狡猾な印

象を與へるやうなうす笑ひを浮べ乍ら、そして、小倉の角帶を結ぶ手を止めないでその二階を下りて行つた

「行つて來るよ。大丈夫だよ。それくらゐの金はじきに返せるよ。支度金なんだからね、それで體を縛られるやうなことはないからね。」

――けれども、その金が返せなかつた。そのやうな場合には、それは到底返せさうもないものに思はれた。三千代とその男とはどこかもつと暗い露路へ逃げ込まなければならなかつた。それからの長い間、二人は二階の窓をひらくことさへ惧れなければならなかつた。その窓の下を、こつこつと鈍い靴の音がきこえて、ふいに、彼女等を探しに來たお巡りさんが二階を見上げるかも知れなかつたから。

だが、誰も追ひかけては來なかつた。長い間、三千代はその代りにこの支配人の顔を忘れることが出來なかつた。それは少しも追ひかけて來ないで、そして矢張り追ひかけて來る顔であつた。それだのに、それをまるで忘れてゐた。それはどにもこの顔は、十年の年月の間に何となくぼんやりとうすぼやけて、いささかは浮世の波にもまれ疲れたあとのために、どこかに見える鈍い間ぬるさが、まるで面ざしを變へてゐたのだ。だが、いまはその顔が面紗を脱いだ。十年が一度にとんだ。それはまるで、私は洋食屋の出前持をしたことがあると話し始めた人の顔が、ふいに洋食屋の出前持に見え出すのと同じやうな効果をもつて、動かし難い眞實になつて、あのホテルの支配人の顔になつた。では自分は、この男の話の中のあの乏しい資金の幾何かを拐帶した者であらうか。――三千代は激しい動搖の中に、白い自嘲の波のやうなものを感じた。「久野さんにはおほぜい、ご兄弟がおありになりますか……」ああ、――それがご兄弟だつたのか。何をこの男は思ひ違ひをして、信子さんなどと覺えてゐたのであらう。それとも？――三千代自身がそのやうな僞名をでもしてゐたと言ふことか

「おや、光りましたね、」

「思ひ切つて雷でも來るといいんでさ、このごろのやうな長雨じやあ、くさくさして了ひますからね。」

主人は暗い海の方を透かして見た。その横顔を、三千代はもう一度貪るやうに盗み見た。これは、あの廣い海の中に同時に二つのボールが浮かんだほどにも不思議なことではないではないか――三千代は次第に心の靜まるのを感じた。すると、この十年の變轉が或る距離の中にはつきりと見えて來た。それは丁度、物見櫓の螺旋梯子を上るときのやうに、ぐるぐると廻り乍らだんだん上へ上つて行く。ときどき立ち留つて下を見ると、何といま踏んでゐる足の下に、そつくりそのまま同じやうな段段が、螺旋が、續いてゐることよ。だが、途中からその下へは下りられない。上る、上る。ただ上るよりほかはないのだ。――

部屋の中ではその架空的な親睦の上に新しい世間話の花が咲き始めた。三千代は頭の中で自分ひとりの考へを追ひ乍ら、ただ眼と頬とに浮ぶ假面のやうな表情をもつてその仲間に加はつた。もはや、三千代にとつてはそのすぐ側に腰かけてゐる一人の男が、絶對的な重さをもつて昔の「ホテルの支配人」になつて了つたので、三千代はまるで昔通りにその下に使はれてゐる給仕女ででもあるかのやうに、その一顰一笑にそのままの支配をうける。三千代は心の中で眼を伏せる。はい、六號室のお客さまはトーストと林檎しか召上りませんので、はい、それから、あの、ナフキンがまた三枚足りなくなりましたので、あの洗濯屋はいつでも、――恐る恐る過去の三千代が呟き始める。これは何と言ふ運命の奸計だ。三千代はどこかの露路の中へ追ひつめられた哀れなこそ泥ででもあるやうな情けない自分を感じ乍ら、けれどもその考へを追ひのけるために、強く心の中で獨語した。「これは古い迷信だ。過古が現在を支配するなどと、そんなバカなことがあつて堪るものか。強い人間は偶然をたのまないと同時に偶然に支配されもしはしない。どこまでも前の方に新しい現實が待つてゐるからね。どこからでも遣り直せるとも。新しい現實がつくれるとも。ダマスクスなど消えてなくなれ。」

ふいに激しい風が部屋の中までも大粒な雨を運んで來た。狼狽てて窓をしめに立つて行つた太田さんの體に、帆布のや

うにはらみ向つて來た窓かけがぺつたりと纏ひついた。その上を雨が音を立てて叩きつけた。三人は一緒になつて三方の窓を防いだ。その窓の下から、空に向つて激しく映え立ててゐる火の聲が聞えた。ふいにぱつと火が消えた。たゞ一つ豆のやうな燈台の光だけを殘して、海の上も堀割の向ふも陸も一齊に闇になつた。三千代は締め忘れた自分の部屋の窓を締めるために、その眞暗な階段をひとりで轉がるやうに下りて行つた。

「大丈夫ですか、見えますか。」

さう言ひ乍ら微かな蠟燭の灯をかざして、後から太田さんの呼ぶのを聞き捨てて狼狽てて驅け込んで來た素足の裏に、べつたりと濡れてゐる冷い床を感じ乍ら、音を立てて窓をしめた。眞向ひから激しい稻妻が掠めた。窓のそとのポプラの高い梢が、お化のやうに體をうねらせてひゆうひゆうと呻り立てた。三千代は自分をののしられるときのやうな或る言ひ難い爽快さを感じ乍ら、そのまま窓際に立つてゐた。あは、あは、――高い笑聲が二階から響いて來た。三千代は確かにそれを聞いたやうに思つたのであつたが、二度とは聞えて來なかつた。たゞ、ときどき、椅子を動かすかた、かた、といふ音がした。「で本人だけは誰にも分りはしまいと思ひ込んでゐられたりしましてね、」「いや、それはどうも、」と、つい今しがたの問答が、丁度いまそのままに自分のことに就いて話されても宜かつたのであることを、三千代は二階の物音の中に感じた。

軈て、灯がついた時に、三千代は今朝の仙吉の手紙に返事を書くために机に向つた。

――やつとここへ來て落付いたと思つたのに、ここにも私の昔の幽靈が住んでをりました。私はその幽靈とさし向ひに坐つてあけつ放しな氣持になつて、やつぱり貴方でございましたのねえ、隨分古いことだものですから、もう少しで忘れて了ふところでございましたのよ。とても言へませうか。惡いことには私は、昔その男に使はれてをりました。それでいまでもその男の顏を見ると、知らぬ間にもう一ぺんその奴隷になつて了ひさうな、何とも言へない、自分で自分の顏が上

げられないで、ちろちろと鼠のやうに小走りに廊下を走り廻つてその男の眼から逃げ廻つてゐるやうな氣がして、それはさもしい情けない氣持です。まだ三十にもなるやならずでこのやうに昔の生活に支配される自分が、われ乍ら可哀さうでなりません。だからどうぞ、貴方まで、ダマスクスだの、おくさんだの、よその人だの言はないで下さいまし。そんなことを言つた日には、私はまあ、幾度逢つたよその男の「おくさん」にならなければならないことでせう。そして、そのたび毎に新しく昔の生活の幽靈におびやかされなければなりません。どうかしてもうそんな暗い迷信から脱け出して了ひたくてならないのに。

どうぞ私を助けて下さいまし。勇氣を與へて下さいまし。貴方の冷徹な眼がどこまでも私の行方を見てくれますやうに。そして私の嘘を恥じしめて呉れますやうに。私にはまことと嘘との境目が分りません。(ああ、もしこれがほんたうに私の文飾だけであるならば、)私はあんまり嘘を言ひ過ぎて暮して來ました。私の嘘はそれほどに絕對絕命であるやうに思はれました。この嘘だけしか私を守つてくれるものはなかつたのだと思つてゐましたのに、いまはそれが氣味の惡い幽靈を道連れにして還つて來ます。

どこか遠いところへいらつしてもお所だけは知らして下さいまし。この私の一番おしまひのセンチメンタリズムをお笑ひになりませぬやう。——

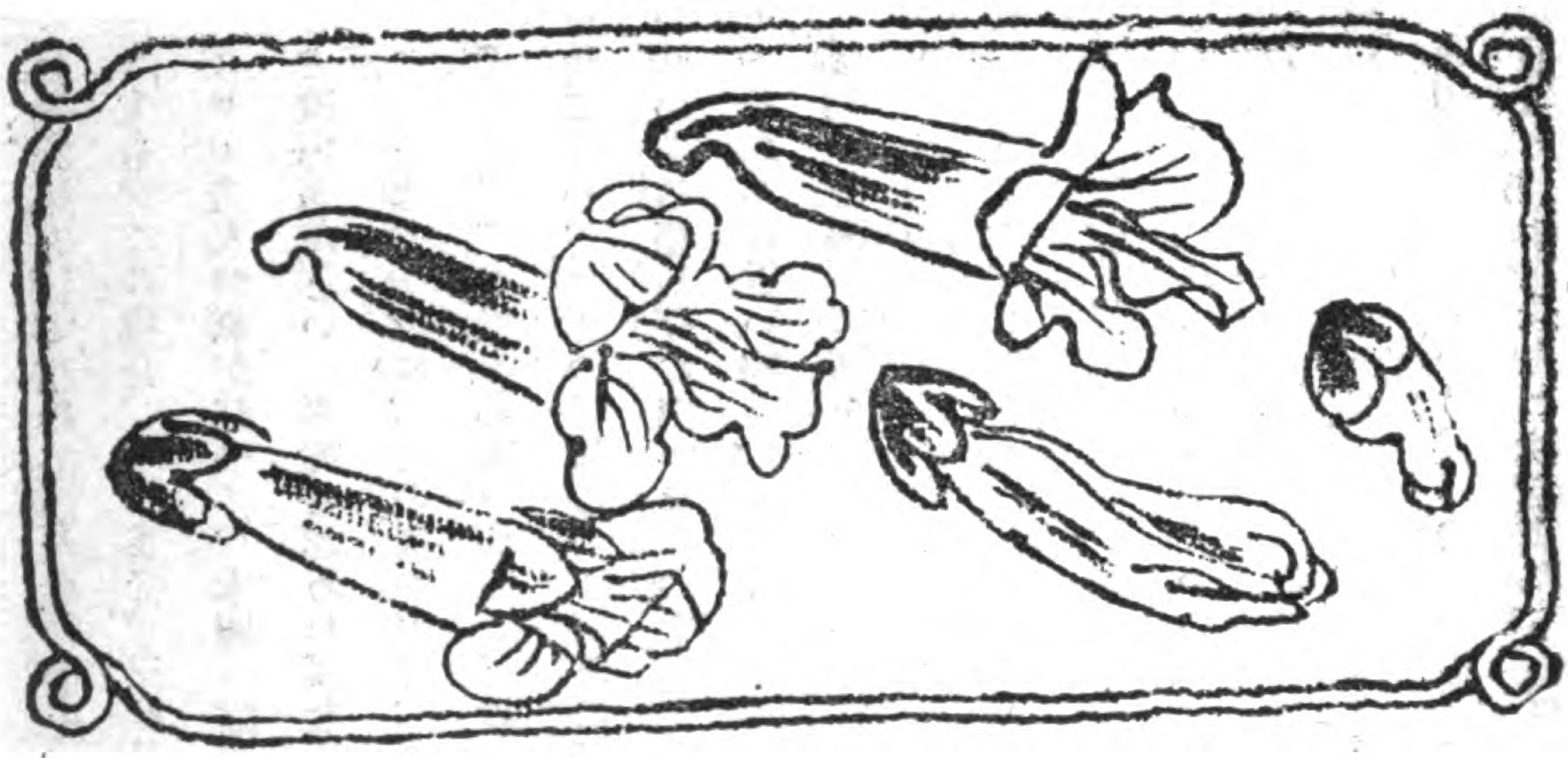
雨は止んだやうであつたが、遠い雷の音と稲妻と風とは止まなかつた。三千代はわれとわが手紙の文句に亢奮して、この激しい風の中へ、ポストを探すために出て行つた。凄しい感情が、この急がない手紙を出しに行かせたのであつた。風が吹けば吹くほど、道が暗ければ暗いほど、三千代はどこまでも歩いて行きたかつた。この土地へ新しく案内をうけたときに、ただそのためだけに越して來たのであると言つても好い、素晴しいアスファルトの二十間道路が、いまは一面にコールタールを流したやうな眞黑さで、生きてゐる者の影も通らず、それはまるで廢墟から掘り出された大昔の道路でもあ

るやうな或ひは大震災のあとの街道ででもあるやうに、兩側の料亭も工場も空地もべたべたに這ひつくばつて闇の中に死んでゐた。まつしぐらにただ一台向ふから走つて來たトラツクの前燈が、そのコールタールを一舐めに滑つたと思ふと、一せいに前へ前へ移つてゆく影のために鉛筆のやうな裸になつたプラタナスの並樹が音を立てて道の上に倒れるやうに見えた。その瞬間、ぱつと一面に電燈が消えて、空も海も道もみんなコールタールの中に呑まれて了つた

三千代は一寸立留つた。それから、その眞暗闇の中を、後から吹きつけて來る風のために危うく足もとをすくはれ乍ら轉がるやうに歩いて行つた。

「ポストはどこだつたつけ、どこにあつたんだつけ、」

と、自分ひとりで話すときの癖のやうに聲高に呟き乍ら、片手を擴げて一散に人道を驅け出した。



支那（長篇小說）

前田河廣一郎

一

コックの李刀達にとつて、この世の中で何が一番樂しみかと云へば、他人を――わけても西洋人を食べ物の上で騙すことを措いては、ほかになかつたのである。實のところ、支那人に騙されまいとして、碧い眼を猜疑心にひからしてゐる西洋人ほど、騙して騙し易すい人種といふものはなかつた。

巧妙な切開手術のやうに、李刀達に騙された唯一の證據は、騙された當の人間が、すこしもそれと氣のつかなかつたことである。從つて、それが途中で發覺した場合には、騙す方が失敗してゐたといふことになつたのである。

さういふわけで、曾て、香港の生絲取引所のバックスター家で、スープやロース

トの調味料として用ゐてゐた蛇の骨を、偶然な機會から、不用意にも犬にさらはれたことは、彼にも似げない不覺であつた。尤も、この場合、それまで、三ケ月あまりも同家の厨房を主宰してゐたところから、彼が解雇されて間もなく、バツクスター夫人が氣が狂つて、本國へ歸つたといふ噂が立つほどまでに、黑蛇や縞蛇の水煮を同家の家族や客人に食はせることは出來たといふ事實も認めねばならない。

このときの失敗は、その後の彼を、ますます巧妙に秘密主義にした。

そして、すべての秘密のうちで、最も安全な秘密は、公開された秘密であるところから、彼れの譎詐術も一段と大膽に勇敢になり、たぎつてゐるスープ鍋に源五郎蟲や沙蠶のやうな昆蟲が這入つてゐようと、濃厚なミンツ・パイの中に多少臭味のある怪しげな肉がまじつてゐようが、グース・リヴア・パイに鼠の肝臟らしい物の混じた疑はあつても、それらを、ややそれらに近い物として食はせるほどの冴えた割烹上の手腕を、彼は會得してゐたのであつた

海狗魚と稱して廣東では珍重がられる山椒魚を、その外見だけから迫害する西洋人に、多少の龜の肉とまじへて、豌豆のスープに浮かべながら、タートル・スープとして勸めるときの李刀達の滿悅した顏の表情は、強ち、値段のひらきから來る小額のコムミツションにだけ滿足しての笑顏ではないのである。それには、嫌な人間には唾を吐きかけた食物を恭々しく持つて行く料理人だけの知つてゐる、深い、內屈した、陰險な幸福感が漲つてゐるのだ。これは、李刀達の現在まで成し得た、一つの人種的復讐であつたのである。かうして、三年前に、船のコックをやめてから、李刀達の非凡な料理に、舌皷を打つて來た西洋人の家庭は、優に一ダース以上はあつた。そして、その十二三軒目に相當するのは、現在の彼れの勤め先である、沙面の英國總領事館詰副領事、ジイ・エム・ハムマーストン氏の家庭であつた。

李刀達の排外思想は、べつに孫中山の三民主義思想の體系といふやうなやかましいものから出發したのではなかつたが、彼と孫中山先生とは偶然にも郷里を同じふしてゐたといふ事がある。孫中山先生の故郷は香山縣の翠亨村であつた

が、李刀達のそれは芙蓉村であつた。この僅かの距離の差は、茫漠とした支那大陸に於ては、實に同じ村も同樣なことであつて、その點、あらゆる偉人が、必ず何かの特長から、時々は、その缺點から、他人を感化する力を持つやうに、孫中山は、李刀達を地理的關係から感化したとも云へる。それが、又、同じ廣東州に生れたと云ふだけでも、無數の後輩の思想を刺戟せずに置かなかつた孫中山のことなのである。

李刀達は、ハムマーストン家の、いつも外國軍艦の鱶のやうな船體の見える窓から、複雜な希望をもつて、珠江を中心とした世界を眺めてゐたのであつた。――

第一に、彼は、世の中の騷がしくなつて行くことに興味を抱いてゐた。いろいろの軍隊が、方々から廣東地方へ崩雪れ込んでは、四五十人づつの死んだ兵隊を、河の中や丘の上へ殘して逃げて行つた。その都度、鼠色の中山服を着て、赤地にちよつと青い線を取つたネクタイをつけた國民軍が、いろいろなことをやりはじめたのである。彼等は、隊伍を組んでは、町へポスターを張つた。突然と黃埔の方から軍用自働車でやつて來て、市内を赤い傳單で埋めてしまつた。それから、軍人とも學生ともつかぬ若い、眼鏡を掛けた男が、をりをり街角へ立つては、はげしく珠江の軍艦の方へ手を揮つて演說をし出した。かうしたことは、雜賭をはやらせたり、阿片ばかり吸つてゐたもとの軍隊のゐたときには、あまりなかつたことである。尋ね人や小泥棒や殺人事件などは、五千人、六千人といふ勞働者のストライキに打消されてしまつて、警察でも、殆と振り向きもしなくなつた。廣東は、碼頭の苦力や黃包夫からはじまつて、軍政府の番兵にいたるまで、いまに何か起るぞ！と、眼と眼を見交してゐる風だつた。

李刀達には、よくその理由がわかつてゐた。尠くとも、わかつてゐたと信ずべき理由を、彼は持つてゐたのである。彼れの知つてゐる範圍では、最近、急に市内の役所にロシア人が殖えはじめて、盛んに男女の學生を集めては、講議をしたり、行列をさせたりしてゐるのである。そして、さういふ不思議な教授をうけた若い者は、どれもどれも同じやうに理窟

つぽくなつた上に、妙な鳥打を頭の横つちよに被つて、一つ籠のもやしみたように皆同じ人間になつてしまふのであつた。これらは一見して、ロシア人の眞似をしてゐることはわかつた。そして、廣東クラブや商業會議所にゐる英國人は、何故かしら、このロシア人をひどく嫌つてゐたのである。況んや、彼れの主人であるハムマーストン氏夫妻は、朝から晩まで、窓から顔を出すごとに、ロシア人を罵り、孫中山先生を攻撃してゐたのであつた。ロシア人は、旣うの昔に共和國を作つてゐた。

　さういふ場合の李刀達は、平素よりももつとにこにこしてゐて、萬事に遺漏のない仕事振りを示しながら、蔭では手鼻をかんだ手でアスパラガスを捞り、シチユウの中へペツと唾を吐いては匙で捏ね廻はして、恭々しく主人夫妻の食卓へ持ち運んだ。

『あのロシアの乞食どもが！　いまに眼に物を見せてやるから――彼奴等は、何も知らない支那人を煽動して、例の陰險な赤化運動を、香港に、廣東に、支那全國へ企らまうと思つてるのだよ！』

　かういふ副領事閣下の、やゝブランデーの利きはじめた舌のもつれた氣焔を默つて聽いて、厨房へ卻いた李刀達は、わざとチエーズの一二片を、ぬるぬるした水の溜つてゐる流し下へ墜して、ろくに拭きもせずに、幸福な笑顔を見せながら、夫人の腕輪と主人の指輪とが、電燈の下で胸し合つてゐるほどの距離へ据えるのであつた。

『へん、これで月給になるんだからな、西洋人といふ奴はお目出たく出來てるものさ。――だからよ、だから、俺は忠告するんだが、決して支那人のコツクなんて傭ふもんぢやないよ！』

　主人夫妻が、食事を濟ましてから、ひとりで上等の肉を厨房で頬張りながら、李刀達はよくこんな獨り言を云つては、誰も對手のないのに、けらけらと笑ひ興じてゐることがあつた。

　もし、その際、誤つてアマの芳春婚でもが食堂からはいつて來て、何をひとりで笑つてるのだよ、この若い者は、とで

も訊ねようものなら、李刀達は、言下に、

『いまに、孫中山先生の遺志が實現するだらうよ。廣東人としてこんな嬉しいことはないぢやないか？——俺はな、から見えても、孫中山先生とは同郷人なんだぜ！』

と、役者のやうに拇指を動かして大聲になるのであつた。

芳春憣は、廣西人で、根が百姓上がりの寡婦なので、主婦のいふことさへ頭を下げて聴いてゐれば勤まるものと思つてゐる婦であつたが、これも爭はれないもので、時代は彼女をして、現に李刀達も委員の一人である『沙面中國人組合』といふ沙面だけの勞働者の組合に加入せしめてゐたのである。

『なんでもいゝ、わたしは戰爭さへなければそれで結構さ。どうせ、戰爭で誰が勝たうが、わたし達には何のこともありあせんのだよ。——』

から云ふのも、いつもの彼女らしい口吻である。

しばらく世の中に、平和がつゞく風だつた。地下室の、衛生といふ西洋思想を意識的に拒否した李刀達の部屋からは、小さなベッドに立つて見ると、額のすぐ上のところに、外國の軍艦の大砲がもの凄い砲孔を見せてゐたし、厨房の一つの窓からは英國旗の下で、贅澤な服を着て金目の掛かりそうな武器を帶びた外國の軍人が、へんな腰付で自分達が闘はないために印度人の兵隊を調練してゐた。李刀達の變態的な譎詐術の犠牲者であるハムマーストン氏夫妻も、べつに惡食や不潔のために下痢を催した風もなく、また、堀一つ越した沙基から黄埔軍官學校へかけての、髯むくぢやらなロシア人も、急に沙面へ押し掛けて來る模様も見えなかつた。ときをり、李刀達の組合仲間では、これも廣東の現在の流行の一つとして、いやに四角張つた議論をするものが出て來て、集會の席上で、支那の列國資本主義の侵略史などといふものを講議する人間が殖えて來たぐらゐが、どうやら沙面の生活の單調を破る出來事の一つであつた。

さういふ新しい敵意を論理的に組立てることを習つた連中の話に耳を傾けてゐることも、大して學問らしい學問をしない彼には、可なりの參考になつた。彼等は云ふ――李刀達の傭はれてゐる英國副領事の官舍のある沙面といふ場所は、同じ廣東の市に屬してゐても、そこだけ、廣東市の主體から一幅の溝で分離されてあるのである。ここは、譬へて云へば、マストのない大きい軍艦のやうなもので、その軍艦に、西洋人の散歩場や避暑、防風林などの目的にやたらに樹木を植え込み、密閉した棺のやうなビルデイングを建てて、永遠に廣東市の鼻先へ繫留したままにしてあるものと思へばまちがいがない。しかし、もうすこし精密に支那の歴史を研究すれば、一八五九年の天津條約で、この廣東市の尖端の、珠江の沖積層である四十四エーカーの地面へ、英國とフランスとが、三十二萬弗の埋立工事を起して、その全面積東西八町南北二町半の五分の四を英國が租界として占領し、五分の一はフランスが取つた――といふ事實が、沙面の至るところに悲慘な史蹟として殘つてゐる。かうした沙面といふ土地は、支那の河の中に浮かんだ、一つの外國である。ここと支那とは、東と西と二つの鐵門を持つた鐵橋で遮斷され、夜間十時過ぎからは、武裝した西洋人や印度人の巡査がゐて絕對に支那人の通過をゆるさない。それから、この動かない軍艦である島の背後には、いつも英國やフランスやポルトガルや日本の動く軍艦が出はいりしてゐて、無數の廣東の水上生活者のジヤンクを巨大な鼻面で搔きわけながら、支那人が指一本沙面に向つて振り上げて、それが一八五八年までは支那のものであつたと主張するのを待つて、廣東城内に大砲を打ち放つ準備をしてゐたのである。――謂はば、この沙面は、香港の小さな模倣みたいな場所である。西洋の出店であるこの小さな香港の模倣が、廣東の支那街といろいろな生活形態を別にしてゐることは爭はれない。第一、ここにはすべて西洋風な建物だけが列んでゐる。それから、そのサイドウオータは、完全な大きい舖石が敷きつめられてある、次には、軍艦で守護された小さな居留地は、下水と水道の設備を有ち、綺麗な花園に贅澤なうす着をした西洋の女や子供達を遊ばせて置く。島の周圍に散らばつてゐる、小さな埠頭や荷物揚場は、夜になるとピストルを持つた西洋人が出て、支那人の篷船

を一つ殘らず追ひ拂ふ。最後に、ここに居住することを許される支那人は、わづかに西洋人の家庭や店で使はれてゐるコックやアマやボーイの二千人だけに限られてゐるのである。……

かういふ話にも、たしかに、堀一つ越した役所のロシア人の影響はあつたのである。

なかには、誰も何も云はないのに、突然立ちあがつて、學生の辻演說の眞似みたいに、『孫中山先生は、聯俄容共を說かれた。然るに、我々は、何を躊躇して、今日もなほアングロ・サクソンの帝國主義支配下に半植民地化された支那を、このままに放置するのであるか。——速かに、ストライキを！』

などと絶叫するものもあつた。

勿論、さういふ手合は、新加盟の平會員に多く、圓熟した排外思想の持主である李刀達のやうな、計畫的な頭腦を持つた人間にはあまりなかつたのである。

彼は、委員の一人として、已むを得ず何か云はねばならないときには、

『まアまア待つとれよ。今に機會が來る。諸君は、人間のもつとも肝要とする胃腑の番人ではないか。——昔から支那に起つた騷動で、胃腑から解決のつかぬのがいくつあつたと思ふか！』

といふやうな、ぼんやりしたことを述べるに過ぎなかつた。

李刀達が、副領事の家庭で、どんな料理をどういふ消極的な反抗思想で提供してゐるかを知らぬ者どもは、ひそかにこの言葉をもつて、一般的な社會主義思想を陳述したに過ぎないとして、嗤つてゐた。

廣東の春は、だんだんに南の方から濕つた蒸氣のやうな風を誘つて、稅關のシグナルに三號や四號の信號が揭げられることが多くなつた。——このまま、洗濯屋の洗ひ場みたやうな熱暑の來る前に、年中行事の消毒や蟲退治を過ごせば、また、例年のやうな夏が來て、沙面一帶がトルコ風呂のやうに息苦らしくなるものと思はれた或る日、二千人の支那人を

驚かした重大事件が突發したのである。

李刀達も、この日は、怪しげな山猫の皮を剝ぎかけた手を留め、總領事館邸の芝生を超えて、沙基馬路から、稅關、大新公司の方の海岸通へかけて、驚きの眼を睜つたのであつた。

二

――それは、支那に於ける概ねの突發事のやうに、やはり、戰爭であつた。

しかも、この日の戰爭は、猛烈な市街戰であつて、あまりポスターの前觸れもなしに行はれた。逃げ去つた軍隊の一部が、もとの城内を通過したらしく、軍官學校から幾臺となくやつて來る黃川自動車は、太平路あたりで右に折れてしまふと、二分間も過ぎた頃の距離で鐵砲の打ち合ひがはじまつた。だが、これは、謂はば對岸の火事みたいなもので、さほど戰爭に慣れきつた誰をも驚かせるほどがものはなかつたが、全く意外だつたのは、沙面の警備軍が何を考へちがへたか、どしどし堀と河にむかつて鐵條網を張りはじめたことであつた。

『おい、こりや、戰爭になるぞ！』

『妙だな、沙面と廣東政府とが戰爭でもするといふのかい？』

『ひよつとしたらするのかも知れないよ。英國の軍人奴、いやに俺達につんけんしてやがるぜ。』

三四人集まつたボーイ達は、こんな噂をした。

『ともかく、對策を一つ講じて置かないといかん。――今夜、委員會を開かうぢやないか？』

張定奎といふ組合の書記が、放心して眺めてゐた李刀達の肩を敲いた。

その晩の會合は、ひそかに、西關の汚い茶館の奥の中二階で催された。緊張した會であつた。既に降り出した雨が、撥

陽銃のやうに、茶館の建物を包圍した。

總領事のヒユース氏の邸に、コツクの下働きをしてゐる伍賴信といふ青年は、正式なスパイといふわけではなかつたが、何くれとなく總領事の言動を監視する役目に廻はつてゐたところから、一座での重要な報告者となつた。

『諸君、僕は今日總領事がエランダで、秘書官に「プラウダ」を飜譯させて聽いてるのを見た。それで、何かしきりに、ブハーリン、ジイノヴイフと云つては、例のとほり口を尖らして怒つてるのを聽いたが、――あれでもつて察すると、政府へ來てゐるロシア人と一戰爭するのぢやなるまいかとも思はれるな。何にせよ、委員諸君も見られるとほり、沙面はすつかり鐵條網で封鎖するつもりらしいから、それには、今日遁走した雲南軍の殘黨や商軍の一隊だけを警戒するのでないことは明かだ。諸君、この前の陳烱明軍の擊退のときでも、俺達は沙面に鐵條網が廻はされたことを知らんではないか！――これは、或るひは、俺達にとつては、想像以上に大きい戰爭への出發ではないかとも思はれる。――大きい次の戰爭とは何か？　支那民族の弱小民族としての資本帝國主義國へ挑む、國民的階級鬪爭でなければならない！』

伍賴信のこの短いスピーチは、二十五人の委員や書記の間に、迅速な態度決定の決議を促進せしむべき十分の力があつた。誰しも、最近ぞくぞくとして黃埔港やその邊の碼頭に、多數のロシア人が來たことを知つてゐるし、更らにより多數の小銃や武器が輸送されてゐることも知つてゐたのである。

『よし、我々の決議はストライキだ！』

誰かがかう叫ぶと、議長は、しづかにその聲を制して、各種の情報を分析した上に、沙面中國人組合の採るべき態度を決定するための三つの條項を掲げた。

『我々は徹底的に孫中山先生の廣東政府を支持すること、孫中山先生の三民主義による帝國主義の排除を斷行すること、その實行のために沙面中國人組合は最初の戰術的な時期に於てストライキを擧行すること。』

これは滿場一致で可決された。そして情報委員として、十二人の委員が擧げられ、他の十二人は調査委員と密接な聯絡を取つて直ちに活動を開始する遊説委員となることとなつた。李刀達は、前者の一人に選ばれた。彼が英語が話せるといふことは、或る意味で、このグループの間に重きをなした所以でもあつた。

彼等は、一人一人沙面の西橋へ歸つた。或る者は、殊にその晩は貧民街の私娼窟へ泊つた。ここまで來て、私達は、すこし李刀達の排外思想の生長について知りたい。

彼がコックとして、殊の外昆蟲や爬蟲類の調理法に興味を持つた半面には、その料理品を提供する當の西洋人に對する嫌惡が潜んでゐたことは勿論の話である。その憎惡がどういふところから來てゐるかについて、私達は、ただ少年時代に彼れが置かれた環境を物語ればいいのである。

彼れの一家は、ごく貧しいデルタ地方の百姓であつたが、李刀達の知らない理由から、彼れの父親は廣東政府に反對の側の軍隊に志願して、どこでどういふ風に殺されたか、煙のやうにこの世の中から消え去つたのであつた。打續く戰爭のために、母親と祖母とは、税金を搾り取られることに堪えきれず、たうとう廣東の珠江に一艘の沙艇を出すことにして、それでどうやら母子三人の水上生活を始めたのであつた。しかし、私達は、この廣東の平時にはのろのろして濁り澱んでゐる河も、秋口の大暴風雨には、どんな船でも、一と堪りもなく呑んでしまふ氣狂ひじみた流れであることを知らねばならない。李一家の、淺い箱船のやうな渡船は、李刀達が十三歳の年に、木つ葉微塵に打碎かれて、祖母と母親とは溺死し、彼れだけが漸く通りすがりの蒸汽船に救はれたのであつた。救つてくれた蒸汽船は、香港通ひの船であつたが、彼れが蘇生すると間もなく、船の老コックは、薯の皮剝きや皿の掃除に使つたのである。かうして、自然と習ひ覺えた料理の方法を、彼れはしばしば船を變更することによつて、應用の範圍を弘めて行つた。香港、粤漢、汕頭、上海は云ふまでもなく、時には歐洲航路の地獄のやうな運送船にも傭はれて、船から船へところついてゐるうちに、いつの間にかコック

としての腕前が出來上がつてゐたと同時に、きれぎれに見た外國の事情や、毎日のやうに眼の前で反覆される西洋人の暴虐によつて、李刀達は、自分の心のうちに愛國思想といふもののあつたのを發見した。

　仕事にあぶれて、香港の支那街にごろごろしてゐた頃、彼は、毎日々々大勢の支那人が、香港の尾上庭園とも云はるべきピークへ、石や木材や鐵やセメントなどを、動物のやうな悲鳴をあげて運んで行くのを目撃した。山は登りがかなりの勾配になつてゐるので、苦力の一人一人は、一つの荷を運ぶにも一日がかりであつた。電車や自動車道があつても、それは、支那人の勞働とは絶對に關係のないものだつた。見てゐると、びりびり皮膚の焦げつくやうな炎天の下に、無數の蟻のやうに、半裸體の苦力や婦の運搬人が、高價な西洋人の家を建てる材料を運ぶのである。さういふ苦力達を、請負の親方が、遠慮なく叱り飛ばしながら、眼が眩まうが、暑さで氣絶しようが、足の爪が剝げようが構はずに追ひこくつた。これらの家が出來上がり、涼しい蔭を作る無數の樹木を植えた公園が設けられると、ピークからは一切の支那人は追ひ落とされて、一人もその邊に住むは愚か、立停まつて居ることさへ許されなかつた。多數の苦力は、谷底の支那街へ來て、狹い小便臭い街の兩側に、石を枕にして、素裸になつて夜は眠つた。しかも、何千となく大道へ寢てゐる勞働者の群れを俯瞰して、女皇ヴイクトリアの像と、細長い軍艦の大砲が、しづかに更けて行く西洋人紳士淑女達の眠りを守護してゐるのである。

　李刀達は、實際憤慨した。もう二度と再び故國の支那へは歸るまい、南洋の華僑にでもなつて、と思つてボルネオ附近まで遁げのびたのが二十歳のときであつたが、一旦萌した愛國心は、どこへ行つても、自分の兄弟達が白皙人種にいぢめ拔かれてゐる事實から眼を蔽はせるものではなかつた。いろいろな同國人と話してゐるうちに、彼は、支那といふ國がどうして阿片といふ毒藥を買はなかつたがため、或るひはそれを買つたがために、西洋人から國土を奪ひ取られたか、支那人の貿易から上がる利益の大部分が、どうしてピストルの筒先を向けられることによつて彼等にせしめられねばならなか

つたか、その西洋人が支那の内政にまで餘計な世話を燒き、治外法權といふものを定めたり、又、ときには支那の獨立を計らうとする軍隊に對して、金で買はれる軍閥といふ盗賊どもを狩り立てて戰爭させたか、支那の政治家が西洋人の賄賂に眼がくれてどんな惡辣な賣國奴となつてゐたか……さういふ數々の聽いても冷汗の出るやうな事柄を知つたのであつた。

再び支那へ歸つた彼れは、眼を開いて見れば見るほど、支那人の貧乏なことがわかつた。白皙人種の棲むどんな國でも、香港や廣東の街で見受けるやうな貧乏人はゐなかつた。しかも、香港や廣東にゐる西洋人は、頭だけ悧巧な惡鬼のやうに、支那人の考へつかぬやうな突飛な方法で、貧乏な支那人から最後の一滴の血までも絞り取らうとして、新聞や、電話や、水道や、自動車や、船や、軍艦や、軍人などを本國から運んで來て、勝手氣儘に振舞つてゐたのである

李刀達の排外思想は、こんな具合に、すこぶる消極的な陰性な、自然發生的なものであつた。それは、あらゆる反抗意識の原始形態のやうに、その意識を間斷なき刺戟をもつて激成させ合理化させるまでは、取り留めもない、漫然とした憎惡の感情的發作に過ぎなかつた。彼れの場合に於て、それを激成させたものは、たしかに沙面といふ場所の奉公から來た體驗であつた。

沙面――こゝに存在する物は、良く刈り込んだ芝生、低い紳士的な境界線を示す壁、恐ろしく遠い通信力を暗示する電柱の列、ところどころの英語の掲示板、ここだけに繁茂した樹木、高い城のやうなビルデング、それらのすべてを通じて、支那の勞働者を壓迫するための大小の道具としか思はれなかつた物だけが揃つてゐた。悉く四角に、けばけばしく、幾何學的に、横の物はいつも横になり、まつ直ぐなものは永久にまつ直ぐな姿勢を維持してゐて、そこに出はいりする人間と雖も、額が高く、鼻が大きく、顔は四角で、肩は墨木のやうに均衡を取り、脚は何かのポストのやうに長かつた。――全然。ここには、赤煉瓦と汚水と騒音と惡臭とのやうな、幾千年となく支那人が慣れて來た貧乏の雰圍氣に共通した何物

も見出し得なかつたのである。手巾や小便や濡れた横丁や穢物の氾濫や病人や銅貨の響きがここになかつたとすれば、その代りに、資産と月給と階級とに依つて築き上げられた、白皙人種の複雑な立體的組織があつたのである。それらの上部建築の土臺石のやうに、歪みひしげた顔をして、手足の大きい、汚い皮膚の支那人が無數に立働いてゐたのである。

李刀達の直接に日夕目撃した沙面は、かういふ侵略された支那の縮圖みたやうなものであつた。——この沙面へ、今、何の相談もなく英佛の官憲は鐵條網を張りめぐらし、彼れの屬する組合はそれに對してストライキを聲明しようとし、そして、彼れ自身が調査委員の一人として活躍することになつたのである。彼れは不思議な昂奮に驅られながら、夜遲くまで山猫のシチュウの鍋の前で、安煙草をくゆらせながら、今後の策戰について考へた。

『——もつと大きく奴等を驚してやるんだ！』

三

情報委員の一人が、政府の農工部へ出頭して聽いて來た事柄は、沙面の支那人を、その日からでも罷工させるに足るほどの屈辱的な慘案であつた。それは、弘く五卅事件として知られる、支那人學生の英國巡査によつての射殺事件であつた。その抑々の出發點は、上海に於ける一日本人紡績會社からであつた。二十四人の委員と書記とは、極度に憤激した。彼等は、それがほかの沙面のボーイ達やアマの群れの耳にはいつた場合を考へて、互に蒼白くなつた顔を無言で眺め合つた。

『しかし、諸君。』情報をもたらした伍賴信は聲をひそめた。『僕は、もつと秘密な命令を廖仲愷氏から受けてゐる。——それは、黨では、この慘案の記念日を、全國的に二十三日に擧行するから、沙面のストライキをやるなら、その前日か、前々日あたりがよからう、といふ彼れの言だ。二十三日と云へば、まだ十日ほども間があるのだが、その間、我々委員だけは極力罷工の準備をしてゐても、ほかの會員達には罷工直前にしか知らせない方が良いと思ふが、どうだらう？』

この提議は一同によつて妥當な方法だと思はれた。もし農工部長の廖仲愷のやうな有力な人が、沙面のストライキを後援するなら、そこに鬪ひはもう半分以上の勝味を示してゐるも同然である。

それから、一同の間に、再びビラや聲明書の起草委員が選ばれ、密々のうちに戰鬪準備をして置く手答が定まつた。

その翌日、こつそり李力達のとこへ訪れて來た張定李は、馬褂のポケットから、一片の便所の落し紙へ書いた傳單を取り出して見せた。

『これは、上海から來た同志が持つて來た傳單のうちの一枚だ。』

その汚い紙片には、赤インキで、

『血心救國。』

と書いてあつて、文字の上には血の浸んだやうな、インキのぼやけた心臟の畫が描いてあつた。

『これはいいな。――傳單なんてものは、あんまり綺麗なものは効果がうすいよ。』

李刀達には、そのうす汚い紙の質から、縱六寸、横四寸ぐらゐの大きさから、何かの動物の血でもあるやうに紙質に浸んだインキの色が殊に氣に入つたのであつた。

『氣に入つたかね？――上海では、資金に困るかして、こんなのを盛んにやつてるやうだ。僕等もかういふ奴を拵へようか？廣東中に便所の紙を散らすのもよからうぜ。どうせ、廣東の紙は便所の紙ぐらゐのところなんだから。』

書記は笑つてから云つた。

『よし、俺が引受けてやる。俺はビラの方の係りぢやないが、こんなのなら暇にまかせて幾らでも作つて見せる。』

約束をした李刀達は、その晩から、早速塵紙と赤インキを買ひ込んで、同じやうなビラの製作にとりかかつた。驚くべき根氣で、彼は三晩のうちに三千枚からの『血心救國』を書き上げた。

この忙しい三晩を通じて、李刀達の心は、ぼそぼそした紙質に吸收されて、見る見る紙面に散らばつて行く赤インキの色に魅せられたやうに、いろいろな奇怪な幻想に曳かれて行くのであつた。

彼れは、人から聽いたロシアの十月革命のことを考へた。次には、大概の生物の血管を流れてゐる血といふものを考へた。その血液を盛る器であるところの、彼れが筆の尖端で塗りこくつてゐる心臟といふ機關を想像した。そして、それからそれへと、廣東の革命のことにまで思ひ耽つてゐて、いつの間にか――どこから廻はつたのか、自分の部屋のドアの中に、主人のハムマーストン氏が立つて見てゐるのにも氣がつかなかつたのであつた。

『おい、お前、何をしてるか？』

李刀達は、聲に驚いて、自分の口へ手をあてて立ちあがつた。

主人はつかつかと歩み寄つて、卓子の上の塵紙の一枚を手に掴み取つた。喫煙用のジヤケツを着て、そのポケットには重さうなピストルらしいもののたるみを見せてゐた。

『ふむ……トム、貴樣、ボルシエヴイキだな？　このビラは何のために使ふんだ？』

ハムマーストン氏は、銀行家が證券をでも取扱ふやうに、大切に塵紙を掌の上へ載せて、それに片方の手をひろげて、がわりと打重ねた。

『――これですか？　これは、沙面から、貴方がた外國人を追放するデモンストレーションに撒く撒きビラですよ。』

李刀達は、最初のショツクから立ち直ると、にやにやしながらから考へた。

『なに――？　俺は、ほんとに聽いたかしら？』ハムマーストン氏は、片手を引くと、別な掌の上に殘つてゐた紙片を、拳を堅めてくしやくしやに握つてぽいと床の上へ投り出した。『もう一度云つて見い。はつきりと云つて見ろ！』

李刀達は、主人の豚の亂毛のやうな毛の生えた手が、重くたるんだ方のポケットに突込まれるのを見て取つた。

『御主人、御急ぎ無用です。――』李刀達は、得意の笑みを滿面に湛へて見せた。『私は、わざと貴方が御出になるかも知れぬと思つて、ドアに錠をおろさないでゐたのです。ドアに錠をおろさずに、秘密な宣傳ビラを拵へるものは馬鹿です。トムは馬鹿ではないのです。――このビラを拵へる任務を帶びるほど、私國民黨の信用が厚いのです。おわかりになりませんか？』

ハムマーストン氏は、金のはりがねを植えつけたやうな眉毛の下に、底知れぬほど碧い瞳をくるくると廻はした。心では嘲けりながらも、かう二人で立ち向つて見ると、西洋人といふものの體格に威壓されないわけには行かなかつたのである。李刀達は、勇氣を鼓して、一歩進み出た。

『貴方、貴方がたの生命財產領土に關係のある、重大な或る決議が某所で成されたことを御聽きになりたくありませんか、あります――？』

『トム、お前は俺の家に何ケ月奉公してゐたつけな？』

ハムマーストン氏の問ひはもつと抽象的であつた。

『アイヤ！ トムは、ハムマーストン閣下にまる七ケ月傭はれてゐます。常にハムマーストン氏と御夫人に忠實なトムでした。』

『七ケ月、よし、善良な下僕だ、いや、なくてはならぬ料理人だ。――では、新しい雇傭關係を造りたいと云ふのか？ 値段を云つて見い。』

ハムマーストンは氏は、重そうにたるんだポケットから、李刀達がピストルだと誤認したパイプと煙草入れを取り出して、室の中のただ一脚の椅子へ大股に跨がつた。

『秘術――高いですよ。しかし、安い。その代り、これはトムしか知らない、トムしか裏切らない。トム、ロシア人大嫌

ひ、ボルシエヴイキ世界の賊です。』
『料理人トム・リー、お前仲々巧者だな。そんなことで、この俺が欺けると思つてるのか？――それで、ビラをそんなに書いて撒くばかりにしてゐる御前が、「赤い手」をして捕まつたのを云ひ遁れるつもりか？　馬鹿奴！』
『御主人、トム馬鹿ではありません！その證據――この沙面にストライキ起こります。國民黨幹部支持します。貴方がた眠つてゐる、その朝、もう支那ボーイ、支那人アマ、コック皆ゐない。――それから、もつとある、もつと重大なことある………』
　パイプにマッチを點してゐたハムマーストン氏は、マッチをうるさそうに振り捨てると、何も云はずに、李刀達の上衣の裾を曳いて、ぐつと手元に小柄な支那人を引寄せると、娘の子が玩弄のキユーピイを捻るよりも易々と片手を伸べて、彼れの頸を力強く締めつけた。
『ほんとのことを云へ！　おとなしく云ふんだ！　云はぬと死んだ支那人が一人出來るぞ！』
　李刀達は、忙しくけつけつと咳を二つ三つして、手巾のやうに揉みくちやになつた顔から、やつとこれだけを云つた。
『――一萬弗…一萬弗！』
『剛情な料理人だな。……よし、そんなに金が欲しいのなら、滿更噓でもあるまい。話によつては、小切手はいつでも書いてやる。さア云つて見ろ！』
　かう云ひ捨てて、彼は、どしんと李刀達を卓子へ突きかへすと、土を弄つたあとのやうに掌を拂つて、パイプを取りなほした。
『ハムマーストン閣下、この李は、一切の事情を御報告します。先づ、この沙面のストライキのあることは知つてゐて下さい。次には、國民黨指導の下に上海慘殺事件の大デモンストレーションが行はれます。――御存知ですか？御存知でな

いでせう。よろしい、一切の報知を、一萬弗でお賣りしませう。そして、私は、やはりストライキに加はりながら、貴方がたに一部始終の仲間の動きを御報告いたしませう。――ロシア人が現在何人この廣東に來てゐるか御存知ないでせう？　武器の數？　どういふ陰謀をもつて、この香港と廣東から英國人である貴方がたを追ひ退けようとしてゐるかも？――李刀達は、七ケ月御奉公してたゐのです。』

李刀達の顏は、眞にもの悲しげであつた。

しばらくハムマーストン氏のパイプを吸ふ音がじわじわと聞えた。李刀達は床を蹴つてドアの方へ歩み寄つた。

『――それでなければ、明日から私がストライキを起こして見せるだけです。』

ハムマーストン氏は、ちよつと眼だけを動かしたが、やはり無言をつづけた。

『御主人、國民黨要人の色彩を御存知ですか？　左傾派と右翼との？――共產派の？』

この最後の言葉は、西洋人の耳元で囁かれた。それは、二人の男の間の會話としては餘りに媚の籠つた、むしろ情人同志の睦言のやうな二人稱を帶びた言葉であつた。ハムマーストン氏は、心からこの憎むべきスパイに嫌惡を感じたらしく、酸つぱい物を口いつぱいに頰張つたときのやうな表情をして立ちあがつた。

『生命が危ないぞ、それでもいいか？』

『生命より金。』

『よし、人名簿だ、それから日取りと、場所と。報酬は、全部が揃つたら――』

李刀達は、瀨戶物の佛さまのやうな微笑をいつまでも泛べてゐた。まるで、荒々しい英國人の言葉にすつかり聽き惚れてでもゐるかのやうに。

『御主人、お休み下さい！』

四

その日、青天のまん中から、すこし南へ寄つて、太陽がまつ白に輝いてゐた。

その太陽の下に、一晩でポスターや傳單で埋まつてしまつた廣東の市街が、まるで新しく開かれた不思議な都會でもあるかのやうに、物音一つ立てずに横はつてゐた。

塀、壁、柱、ウンドオ、電柱、樹木、扉のすべてに、殆どあます空隙のないほどに貼られた大小の紙の上には、いろいろな象形文字が繪畫的な力を見せて、靜かに踊つてゐた。　彼等の人間は、これらの文字の雜列の下に、何かの祟りを惧れるやうに、小さくなつて眼ばかり動かしながら歩いた。足下にも、撒き散らされた傳單が、變色した木の葉のやうに落ちてゐた。

李刀達は、懐をふくらましながら、熱暑で履物の底に溶けた道路が粘りつきそうな大通りから、急いで海岸通り(バンド)へ出ると、ヘルメットの縁越しに稅關の時計を瞻あげた。時はまだあつた。彼れは、はげしい河の表面の照り返しに、眼を細めながら沙面の方へ急いだ。

李刀達の左の腕には、黑いバンドがあつた。彼れと擦れちがふ通行人の大部分も、同じやうな腕章を帶びてゐた。

『援助上海慘殺案!』

ポスターの文字は、いたるところにから讀まれた。廣東全市を擧げて、上海の五卅事件に哀悼の意を表する六月二十三日が、今日なのである。

『よう、君は、警備隊の方ぢやなかつたのか?』

突然横合から、書記の張定奎が、黑い眼鏡を掛けた顔を見せた。

『俺か、俺は――今、胡漢民先生の許可を得て、沙面の狀況を探りに行くところだよ。悪くしたら、今日は一と衝突免れ難いかも知れないぜ。あの沙面の八臺の機關銃がただは遊行隊を通すまい。』

李刀達は、なるべく對手の顏を見ぬやうにして答へた。一群の女學生が、テニスのトーナメントにでも行くやうな姿をして横丁へ揃つて這入つて行つた。

『軍艦を密集してるやうだぜ。その邊の偵察をよろしく賴むぜ。でも、大丈夫かね――沙面の方は？　まちがつて一發やられでもしたら、それこそ大變だよ。』

『そのときは、君、それこそ花々しい最初の救國者となるわけぢやないか！　大丈夫とも、俺の働いてゐた副領事には、俺は國民黨から追放された風に云つてあるんだから。どうせ出鱈目を云つて、見るだけ見たら、さつさと車較場へ引上げるよ。』

二人は別れた。

李刀達は、わくわく躍りあがる心を押へて、急に自分が、この晴れた日の午後に襲來するであらう大きいドラマの筋書の作者になつたやうな氣持を考へて見た。

事がここまで運んで來ては、もうどうにも退くわけには行かなかつた。彼れは、これから國民黨と英佛軍人との間に自分が生きた材料を使つて、世の中の新しい組み立てに進むやうな最初のきつかけをつける役目に當たらねばならなかつのである。――胡漢民一派の穩健派は、暴力的な正面衝突を極力避けようとする意志を持つてゐた。また、英佛側でも、昨日英國總領事が伍朝樞氏へ手紙をよこしたやうに、なるべくは積極的行動を避けたいやうな口吻がある。その武裝情態と云つても、まだ機關銃に彈丸が塡充してゐないこともわかつてたし、領事館への海軍側からの報告にも空砲を放つといふだけのことであつた。――しかし、一躍してコックからスパイになつた李刀達には、そんな外交文書の上の戰爭は懷

らなつた。

『おい、何處へ行く？』

鐵門の印度巡査は銃を擬して、近よつた李刀達を誰何した。

『ハムマーストン閣下のトム・リーです。ちよつと閣下へ傳へて下さい。急用なんだ。』

疑り深そうに鐵柵のむかうから彼れを眺め廻はしてゐた英國の陸戰隊が、

『何の用だね、御前達はもうこの町には用はない筈ぢやないか！』

と詰問した。

『それが、私だけは特別なんですよ。何なら、副領事さんの私に下すつたパスがありますからお目にかけませう。』

李刀達は、にやにやしながら、柵の前に總領事館のレツター・ヘツドに書かれた通行許可證を振り翳して見せた。

『この男よろしい、這入れ！』

印度人の方はわかりが早かつた。

婦人や子供を全部珠江の軍艦に避難させてしまつた沙面のセントラル・アヱニユーは、まるで雜貨のなくなつた勸工場のやうだつた。たゞ、その間を、いろいろな道具を擔いだり、砂嚢を積んだり、箱を重ねたりしながら、陸戰隊の兵士だけが動いてゐた。不思議とこゝだけには、一枚のビラもポスターも貼つてない領事館の建物には、緊張した面持ちの役人達が、緊張した風を見せまいとして、やたらに煙草をふかしながら歩き廻はつてゐた。副領事の室では、煽風機の前で、三人の紳士達が、窓の方を覗いては、低聲で話し合つてゐた。李刀達がノツクして這入つて行くと、まつ先にハムマーストン氏が赭ら顔を向けて、掴みかゝるやうに歩いて來た。

『どうした？――式は始まつたか？』

李刀達は、先づ懐中から蒐集したポスターやビラの束を取り出して、靜かに卓子の上に載せた。

『――まだです。十二時に譚平山が司會者として開會することになつてゐます。しかし、もう大部人間は集まつて居ります。御用心なさい、軍官學校の生徒は極力民衆を煽動して居りますよ。それに、軍隊は全部實彈を籠めて、その或る者はつけ劍で行列することになります。先頭は騎馬の士官と警官隊、それから各勞働團體、農民組合、學生。この學生の一部は、夜前決死隊を選拔しまして、英國が武力で我々のデモンストレーションを壓服するつもりなら潔よくその犠牲にならうと、廣東大學生がくじ引で當選してゐます。何をやり出すかわかりませんですよ。それから赤旗も出ます。あのロシアの赤旗です。ロシアの武官が、客軍や軍官學校の生徒達を引率することになつてゐます。――そして、行列の筋路は、大體この通りですから、ここへ到着するのは遲くも二時半頃までになるでせう。』

云ひ終つた李刀達は、鉛筆で引いた街路面のスケッチを出して、自分の新調のヘルメットで顔へ風を送つた。

副領事は、葉卷の端を苦さうに嚙みながら、もう一人の役人に話しかけた。

『バンク・インダストリエのコムプラドールが、襲撃があると云つて寄越したといふのは本當ですかね？』

『勿論です。それは、閣下、この三月の「プラヴダ」でジイノヴイフが煽動してから以來天下周知の事なのですよ。』

その紳士はフランス語訛りの强い言葉で答へた。

副領事は、わざと聞えよがしに云つたといふやうに聲を張り上げた。

『それから、あのボローヂンが賄賂をやると約束したといふレット系のロシア人はどうなつたかね、ジエームス？』

『さあ、あれは、住所不定の浮浪人でしてな、とうに上海あたりへ影を潜めたらしいですよ。』

かうした政治的な無駄話らしく思はれる會話の間に、遙かに沙基馬路の方に當つて、大勢の人間がわ――ッと歡呼の聲を擧げるのが響いた。

室内の四人は、一齊に首をあげて窓から向ふの方へ眼を遣つた。

濃密な榕樹に、はげしい日光を吸つた樹木の間に、白い沙基街の一端が見えて、そこには今過ぎたばかりの自動車のカソリンらしい煙がほんのり漂つてゐる中に、赤いビラが、何かの花瓣でもあるかのやうにひらひらと舞ひ狂ふてゐるのが、はつきりと見えた。

仔犬のやうなはしつこい子供達が、ビラを追い驅けて、街の舖道に鮮かな陰影を躍らした。

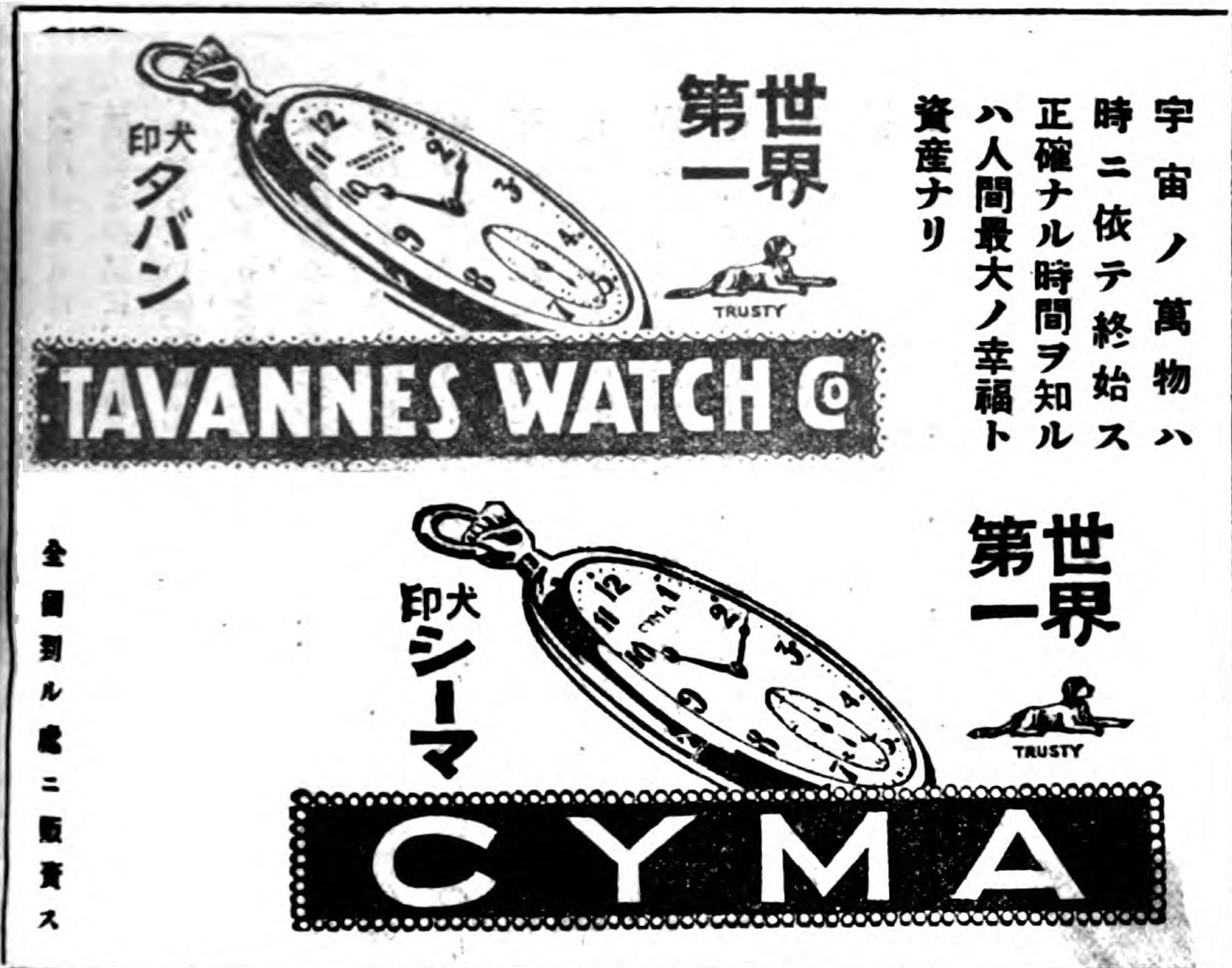
『これですよ、このビラです。今朝から、士官候補生の連中が、市中を自動車で撒いて歩いてゐるのです。』

李刀達は、一枚の赤いビラを選り出して、副領事の前へ置いた。それには、かなり辛辣な辭句で英國の帝國主義打倒の意味が誌されてあつた。

しかし、ガラスの海のやうな光波の中に、都會そのものが全體で破壞を伴はない地震にでも襲はれてゐるときのやうに揺れて見える、海岸から白雲山の向ふまでを、ぼんやりその碧い底知れぬ瞳に取り入れてゐたハムマーストン氏には、そのビラを取り上げて見る氣が起らぬかして、卓子の上に置かれたままになつてゐると、自轉作用ではげしく吹き立てた煽風機が、くるくるとそれを宙に泳つて行つて、むかうの書類のケースへ捲きつけようとしながら、途中で氣を變へたやうに空間に投つたらかしてしまつた。

それが、李刀達には、いかにも、英國總領事館内の副領事閣下の室内に、わざと誰かが、打倒帝國主義の宣傳ビラを一枚だけ撒いて行つたやうに思はれたのであつた。

窓の下では、英國士官が、喉に絡んだやうな聲でしきりに兵隊へ號令を掛けてゐた。（つづく）



定價

定價	送料
一冊八十錢	參錢
六冊四圓八十錢	送料共
十二冊九圓六十錢	同

毎月一回一日發行

△但し前表は普通號のみの定價にて年四回發行の特別號は定價送料共不同に付其の都度別に申受けます
△外國行送料は普通號一册に付十六錢申受けます
△御送金は前金にて可成振替貯金を御利用下さい　郵券代用は一割増の事
△爲金郵便で誌代取立希望の方は其旨御通知願ます

廣告料

△御照會次第詳細御回答申上ます

昭和四年二月十八日印刷
昭和四年三月一日發行
（禁轉載）

編輯兼發行人　島中雄作
印刷人　高木島三
印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地　株式會社秀英舍

東京市丸ノ内ビルヂング七七六區
中央公論社
電話丸ノ内二〇六番
振替東京三四番
同長野三二〇五番

CHUO KORON (*The Central Review.*)

By THE CHUO KORON SHA PUBLISHING Co. Published Monthly.

Terms of Subscription: Annual subscription *yen* 12.48, Single copy 80 *sen* including Postage. Entered at The Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.